PL
777
.5
T3
v.8

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

ゆみ[illegible]

[illegible]

一[illegible]

貫之

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei08taka

洒落本大系

第八巻

PL
777
.5
T3
V. 8

LIBRARY
SEP 2(1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128123

傾城買二筋道三篇宵の程挿繪（別本）

傾城買二筋道後篇廓の癖挿繪（別本）

洒落本大系第八巻目次

	解題	本文
解題		一―八三
養漢裸百貫	一	一
假根草	四	三一
廓の池好	七	五三
名所拜見	一〇	七一
うかれ草紙	一二	八一
廓通遊子	一五	一〇一
戯言淨世瓢簞	一七	一三一
十界和尙話	一九	一七七

阿蘭陀鏡……………………………二二……二一三
傾城買二筋道…………………………二六……二五七
辰巳婦言………………………………二九……二八七
來芝一代記……………………………三四……三二九
廓節要…………………………………三八……三五九
傾城買談客物語………………………四二……三八九
契情買心得……………………………四五……四二七
二筋道後篇廓の癖……………………四八……四五五
品川楊枝………………………………五〇……四九五
身体山吹色……………………………五三……五二五
仲街艶談………………………………五六……五六三

猫謝羅子……六〇……五九一
青樓夜世界闇明月……六三……六一七
傾城買言告鳥……六六……六四七
二筋道三篇霄の程……六九……六七七
昇平樂……七一……七二一
青樓眞廓誌……七九……七三五
大通契語……七七……七五七
通俗子……八一……七八一

目次終

解題

山崎麓

▲養漢裸百貫　原本 縦七寸六分 横五寸二分

醉川子作、寛政八年刊

書名は男性は裸體でも價値があると云ふ俗諺裸百貫を採つた、男妾の意は本篇の內容で說明されて居る。作者醉川子は、京都の俳人西村定雅で、其傳記は本大系第五卷「徒然醉か川」の項を參照あり度い、本書は大本で京都版であり、作者は洒落本として書いたもので無く、八文字屋本の系統をひいた滑稽本の一種である、しかし內容にエロの氣分を多量に含み、京都の情調が味へるから、參考資料として採錄したのである。之と類似せるものに「寛政滑稽烏歌話」（文政四年）がある、京都の裏長屋の亂倫なエロを寫したもので、然かも作者が江戸から渡つた春川吾七である點が面白い、吾七は畫名、實は神屋蓬洲と云ふ讀本作者である。本書と猥雜な筆致

がよく似て居るのである。

本書の梗概は、近來女性に男がのろくなるので女の威勢が強くなつた、以來男から女に手を出すまいと、男仲間が各國から集つて相談一決し、實行に着手した、果して女性が焦慮し始め、今迄愼み深かつた婦人も男へ積極的に運動を始めると云ふ筋である。

全國から集つて來た男は、皆其國に因んだ人間になつて居る、山城の宇治右衛門は地名、關東兵衛は關東者が行くべい、歸るべいの訛から來た假名、奈良の春日の業平は云ふ迄もなく伊勢物語の劈頭、淡海の源五郎は鮒の名、尾張の金助は金の鯱、越後の謙信、堺の利休、伊丹の鬼貫は皆其出身者、大坂の熱い四郎兵衛は俠客根津四郎兵衛の替名、長崎の傳七は、唐人殺しで有名な十木傳七を採つたのだ、本名鈴木傳藏、寛政元年並木五瓶作の「漢人韓文手管始」中に現はるるのが此傳七である、全體の人物の選出が奈何にも無造作で味がない、之が京傳であつたら、どんなに凝るであらうと考へられる、例へば「百人一首和歌始衣抄」天明七年」の如き、大伴家持、喜撰法師、業平の系圖を實に苦心してあるのだ。

本書中、誓言の一に

兄嫁は愚、母親水に溺るる共手を取るまじき事

とあるのは、「孟子一離婁章句にある「嫂溺則援之以手乎、曰嫂溺不援是豺狼也」云々からとつた、蓋當時の知識階級から云へば、かゝる語句は常識なのだ。書中

頃日思ひ付て腎虚丸といへるをうり出し

とあるのは、既に一醒睡笑一卷之六、「昨日は今日の物語」に出て居る構想である、茲には簡潔な後者の方から引用して置かう。

いかにも顏色衰へ瘦々としたる人、武田法眼へ參り、ちと氣根の落つる御藥を申し受け度いといふ。法眼是を聞き給ひて、扨々御見かけとは違うたる御望みかな、と不思議なる由、仰せられければ、此瘦男、いやいや某が用にてはご座ない、女共に與へ候と申した

書中に

男の覓野合(つりもの)といふ事が時花(はやり)

とあるのは、屋外で女が一面識も無い男を口說く意味で、浮世草子には散見する語である、但し通常は男が女を釣るのである「好色貞享伊勢物語」(元祿三年)に在原業平が之を試み、身體が弱さうなのではねつけられる話が出て居る。現今でも東京では之を釣ると稱して居る。

遊郭不夜城(くるわいろさと)、松位女郞(たゆう)若男に轉じけり、遊男といふものも出來

とある構想は、既に戀川春町の黄表紙「無益委記」（安永八年）に次の如く見えて居る。

新悪原を開いて男郎を出す、やりてばゞはもらひて爺ィとなり、禿をぶろかと呼ぶ。放蕩娘悪はらへ通ひ、母親の勘當を受る。地廻り工面悪く不廻りとなる

明治十二年頃の「團々珍聞」と其姉妹雑誌「驥尾團子」とに「女護島日本樓の段」と云ふ小説が連載されて居るのも、之と同じ構想である。作者は京都の石井俊郎であるから本書に據つたのかも知れない。

本書は「睟の川」などよりは遙に筋は通つて居るが、其悪洒落に至つては、文政天保期の滑稽本に類似して居る、然かし流石に「大内の拜見事にも女は受よく男は受悪し」「下御靈の御旅参り」と云ふやうな京都のやさしい情調がほの見えて居るのは嬉しい。

▲奇談　假根草　原本　縦五寸三分　横三寸七分

紅月樓作　寛政七年刊

書名は草官散人作の怪異小説「古今奇談垣根草」（寛政五年）のもぢりに、併せて假寢の夢の意を含めたのである、刊年は自序に「卯の行冬」とあり、内容の材料と併せ考へ、寛政七年乙卯と

推定される。作者紅月樓は越野山人跋に「柿降の庵主假根草の作あり」とあり、自序にも柿降の柳庵とあるから、紅月樓別號を柿降の柳庵と云ふ事だけは判明して居るが、傳記未詳。

本書は江戸の西、山の手邊に住む如東の宅に、里風と門兵衞とが相會し、芝居の話から郭の話に轉じ、やがて三人深川の假宅に遊び、門兵衞だけひどく振られたと見たのは、三人假寢の夢であつたと云ふ構想である。

發端に「遊妓飛至深川」とあるのは、吉原の假宅が深川に出來た意で、跋に「五ッの街の假の賑はひ、其繁昌をあらわし」とあるのも同じ心である。寛政六年四月二日、新吉原江戸町二丁目丁子屋長十郎、同津國屋十藏、兩家の境から出火し、全郭燒失した、其折深川に假宅が出來たのである。其時發布された法令は次の如きものであつた。

吉原町類燒に付、此度外町にして差免(ゆるし)假宅中商賣爲致候に付、左之通堅く可相守候

一遊女共衣類目立候品、一切着せ申間敷候

一遊女禿(かむろ)共假宅家前たりとも、往來へは一切不差出、外(そ)と向猥に徘徊爲致申間敷候

但家内たりとも二階竝窓等へ差置候樣成儀、往來の者見物迯足を留候樣成儀爲致間敷候

一音曲等仰山成儀致申間敷候

一郭内と違ひ外町に差置候内は、別て不依何事、高場大造に無之樣可心得商賣可致候

こんな注意の下に假宅營業が許されたのであるが、郭内と異なつた氣分があると云ふので、特に繁昌したのである。

〔里〕今度は町も向島へかはるといふこつたがそふか〔新〕どふぎんすか、しりやせん

とある所を見れば當時こんな遊郭移轉の噂があつたらしい。高慢な門兵衛だけ冷遇される所、別に新しい作意もない、最初の芝居の噂と、深川の假宅描寫に興味をもつた作である。

〔里〕芝口迄用があつて いきやしたから、かいりにむかい丁を一切かわかしてきやした〔如〕へェ入りわあるかネ、しよじ高麗屋親子、大和屋でもつた芝居だ〔里〕さよふサなんでも時代とて、なんぼ音羽屋がいゝのなんのといつても高麗藏が勢にわ、かなひやせぬ、今では若手の立物サ、聲のかゝるといつてはおそろしいもんじや〔如〕ごふぎなもんだつケ、高麗がこの前錦傘をした時などはよかつた、なんでも當時は高麗八百藏市中などゝいふきいサ、また正月屋が定九郎などといつては腹は立給ふが、上ミ方にもあるめひ、おとゝひの晩も錦公が所で、高麗と正月やが桃の井と本藏の惡合をつかつたが、娘ッ子などの高麗を嬉しがるといつちやァとんだもんだネ

むかい丁とあるは三十間堀の向ふ町の意であらう、即木挽町五丁目河原崎座をさす、森田座が天明八年以来休座し、河原崎權之助が代つて興行した時代である。高麗屋親子とあるのは、四世松本幸四郎と實子市川高麗藏（五世幸四郎）をさし、大和屋は四世岩井半四郎、音羽屋は一世尾上松助をさす。八百藏は三世市川八百藏（紀の國屋中車）である。正月屋は三世中村仲藏（政津屋）の事と思はれる。當時高麗藏が濡事師やつし方專門であつた折で、其評判の程が、本書の劇評を見ても推測されるのである。

▲郭（さと）の池好（いけずき）　原本 縦六寸 横五寸

石橋庵増井作　寛政八年稿

郭の池好は生唼（いけずき）のもぢりである、夫と池鯉鮒好（ちりふずき）とをかけたのである、自序に
それ悪婆なお散と稱ゆれば、宇治川とさし詰いろの堀川、吾妻らじと押渡る池鯉鮒の中に襲うつて、先陣す梶原おくれぬ佐々木
とある如く、「平家物語」卷之九、「源平盛衰記」卷之卅四にある宇治川先陣爭ひの佐々木高綱の乗馬に因れたので、

本書は稿本で、出版せられたもので無く、全篇板下になるやうに清書されてあり、寛政八年の稿なる由記してある、洒落本中の珍品である。作者は明記してないが、増井豹惠の序があり、柱に壽の字が木版で捺してあるのは、萬壽井の壽の字で、序者即ち石橋庵増井の作であらうと推定される。石橋庵增井は萬壽井山人とも云ふ、名古屋の作家である、其傳記は本大系第七巻「藝子酒戯」の項を參照ありたい。

本書の如く稿本を作りながら出版する運びにならず、空しく板下のみ殘つたのは、江戸以外の地方在住の作者に往々見る所である。現今でも地方の文學青年が原稿のみ貯へて中央文壇に進出する手がかりが無く終るのと同じ現象であつたらう。本書と同じ運命に歸したものに、同じく名古屋の作者樹芽田樂（このめでんがく）の「田舍獅子」（寛政十三年・辛酉即享和元年稿）がある、萬象亭の「田舍芝居」に擬した洒落本の自筆板下の珍本で、東京帝國大學國語研究室所藏であつたが、惜しい事に大正十二年の震災で烏有に歸してしまつた。恐らく私のノートに面影を殘すだけであらう。

偖本書は珍しくも三河國池鯉鮒（現今知立町）の遊郭を題材にしたものである、東海道五十三驛の一たる池鯉鮒に關しては「自笑樂日記」（延享四年）巻之一に、

九曜星右衛門は思ひ切て、鎌倉新芳原へ入込積にて駄荷夥しく仕立、道中花を降らせ、池鯉鮒、岡崎、芳田を初め、阿部川の二丁町、金川品川までを念入れて尋る了簡

とある、之は九曜星右衛門が主人の命令で變つた紋所を遊里にさがして歩く一節である。池鯉鮒も其一に加つて居る所から見て、海道筋での色里として知られて居た事がわかる。酒落本に於て同所を題材としたものには、郭通交、同集交作「面美多勤身」（寛政年間）に

池鯉鮒で木綿屋のおきん、なには屋といふあげ屋でおかど、はつの、どれも上玉サ、すべてちりう岡崎あたりから先キは古市の玉がまわる由、言葉なぞもわけてやさしいョ

とある外、類似の酒落本を見出さぬ。本書の梗概は、始めて郭遊びする大疵と云ふ若者、お重を見立て冷遇される、お重には尾張知多郡の客巴上と云ふ馴染が來て濃厚な場面を演ずる、八兵衛とお市の地色らしい光景、之等を土地の方言で記してある。大疵が最初駕籠屋にねだられ、澁々祝儀を增して行く笑止味、茶屋で一杯飲むのにすばしり（鯔の幼魚）一疋と酒二合を注文し、其代價、すばしり十六文、酒廿四文を拂ふ光景などが郷土的特色が現はれて居て面白い、客と遊女との對話などに至つては、江戸の酒落本に模倣するだけで、一歩を出まいと努めて居るやうで平凡である。比較するのは無理であるが、大田蜀山の「變通輕井茶話」のやうに行か

ぬのは惜しい。

▲名所拜見　原本　縱五寸 橫三寸四分

紀橋柳下作　寛政八年稿

本書は稿本に據つたものであるが果して刊本になつたか疑はしい、卷末の廣告にある他の二書も刊行されて居らぬ所を見ると、單に草稿のままで綴つたのであらう。稿本は板下にするつもりであつたらしく、誤字には貼紙がしてあり、きれいに淨書してある。

書名は自序にある通り「彼錢の空しき者は茶見世、揚弓場を素見するも淋哉悲哉、如此者の意氣地を述て名曰名所拜見」で、單に名所を拜見して歩く意であらう。作者紀橋柳下は傳記未詳である。

本書の梗概は、裏長屋に住む柳古「何ぞ錢のあまりいらぬ意氣な遊びをしたい」と心がけ、芝神明の茶屋を冷かし、更に深川古石場に出かけ斷られると云ふ筋である。

芝浦神明とあるは芝神明の事、魚止とあるは芝口の汐留、戸引町は木挽町、竹地は築地の替名である、舟で深川へ行かうとするのであるが、此邊から深川行きを描いたのは洒落本には珍

しい。鉄砲洲は鉄砲洲、佃土(つくど)は佃島(つくだ)の替名、古市場は古石場の替名である。

餘り錢のなさ相な二人連が、水茶屋を冷かして出るあたり、今ならば、カヘエーで珈琲一杯飮むお客である、柳古が一寸田舎者の眞似をする點に面白い茶氣が認められるが、大した事件も出來せず終つたのは物足りない、薩摩武士のお客に一寸芝の情調を見せたのは氣が利いて居る。（薩摩者に就いては本卷所載「品川楊枝」の解題を參照あり度い）

汐留から木挽町、築地と渡り歩いて漸く舟にありつく所、引汐で舟が出ない有樣など、少年時代よく築地から貸ボートに乘つた私には、尠からぬ懷しみと興味とをそゝるのである。猪柳下、倉の二人も折角古石場に五つすぎ（午後八時過ぎ）に來て見れば「はい、お初會で御座りますなら、子供衆はさつぱりござりませぬ」と冷に斷られる。土橋仲町は勿論、櫓下よりも格の落ちる此遊里で無慘に斷られた二人は、どうする事やら、折柄四時(よつ)切の拍子木は向河岸から聞える、定めて無常をしみ〴〵味つた事であらう。

本書の主人公倉古は恐らく作者櫓下自身であらう、錢がなくて花やかな街をあこがれる青年のやるせ無い衝動が、淡々として面白く描かれて居るが、飽氣ないのも事實である。之で古石場の描寫をもつと濃く試みて呉れたなら、三馬の「辰巳婦言」以前に古石場を描いたと云ふ手

柄を贏ち得るのであつたが惜しいものだ。但作者自身が主人公の柳古なら、水茶屋松の江のお菊が倉に氣のあるやうに持ちかけ、多少倉を取卷きの計略を見せて居る位であるから、古石場にも遊んだ事はないのかも知れない。文學青年の一人として洒落本らしいものが書いて見たかつたので、本書を綴つたのかも知れない。

▲うかれ草紙　原本　縦五寸二分 横三寸八分

廣臭野人莊鹿作　寛政九年刊

書名は說明を要すまい、刊年は序に「寛政丁巳春」とあるから寛政九年丁巳と推定される。作者廣莫野人莊鹿は、口繪に百川堂題の傳記があるが、之は「莊子」齊物論にもぢつてある、之に依つて見れば、百川堂灌河の匿名と推定し得ると思ふ、百川堂灌河は通稱吉田新兵衞、京都三條富小路西へ入麩屋町の書肆文徵堂の主人、文の屋茂喬とも云ふ、狂歌師で得閑齋繁雅の門人、二世得閑齋と稱す、狂歌の編著數種の外、噺本「新撰勸進話」(享和二年)の作がある、作者を彼にあらずとすれば、尠くとも彼の友人と斷定し得る。

本書は云ふ迄もなく京都版の洒落本で、背景を京都に採つた特種の珍本である。梗概は贅者

珍庭を訪れた俳人斗量、若息子吉三郎の二人、いろ〳〵の話の末、祇園扇屋に遊ぶと云ふ筋である。書中

【珍】吉さん今はなにをけいこなされます【吉】ハイ只今はもふなんにもしませぬ、あいに久田へ参ります【珍】それはよいおたのしみ。茶はたのしみの深いもの

とある久田は、當時の表千家の流派五世久田宗旦(四世如心齋の子、咋翁と號す)の事と推測される。

【斗】二軒茶屋でゆ豆腐でむかいとなされたら、くつとはつさんいたそふ

とある二軒茶屋は、祇園社近くある茶屋で、京都の洒落本には必ず出る有名なもの、深川八幡境内の二軒茶屋と好一對である。

【吉】私も今晩は薗の謠講へ参るやくそく

とあるは當時京都の青年間に謠の流行した一證と見られる、本卷所載「身体山吹色」にも

晝は商ひをかこつけ、夜は謠講のとだしを拵へ遊里狂ひ

と出て居る、本篇の若息子吉三郎も之から後、盛に謠講をだしに使ひ始めたであらうと考へると笑止しい。

【斗】イヤわしや、てきらが寐てゐる内、闌更師の所までちよつといてかふ（中略）【斗】ドレその羽織【民】羽織取てどこへいきじや【斗】双林寺迄。

とあるのは、斗量は俳人だけ、高桑闌更を訪問して行かうと云ふのである、闌更は綿屋希因の門、南無庵、二夜庵、半化坊と號したが、東山双林寺中に芭蕉堂を創建して住み、寛政九年當時には七十一歳であり、加藤曉臺の後を受け、寛政五年花の本の宗匠號を受け、京都俳壇の重鎭であつたから茲に題材としたのである。

【斗】此間紋子や灌河が井とのへいた時、きさまいたじやないか

とある紋子は未考であるが、灌河は作者自身をさすものと考へられる、井とのは祇園の青樓で、「身体山吹色」に

何やら井とのの二階へ艶なものが出おつたぞ

と見えて居る。

本書は京都版の洒落本中最洒落本の體を得たものの一と稱し得る。斗量と遊女民のとの描寫が濃厚で、珍庵とおたくとの描寫は淡白、初心な吉三郎とおくらの描寫は巧に省略してあるなど、至極江戸向きに出來て居る。が夫だけ遊女の訛の外京都の地方的特色がはつきり浮び出て

居ない。

△廓通遊子　原本　縦五寸一分 横三寸七分

藍江作　寛政九年刊

書名は序に「此郭通遊子は郭註荘子のにた山にして替玉にもあらず」とある、晋の郭象註の「荘子」を通常「郭注荘子」と云ふ、我が國では服部南郭考訂の書が元文四年刊行されて居る之をもぢつたのであるが、前に同案の「郭中掃除」(安永六年)ある事を知らねばならぬ。

作者藍江は傳記未詳、本書により青松亭と號する事だけが明である、其號は藍染川から來たもので、藍染川は根津と神田とにあるが、之は神田の方の住人でかく稱したのではなからうかと推測されるだけである。

本書、中を娼樓艶客篇、夢遊篇と分つてあるのは、「荘子」の逍遙遊、知北遊などを模倣したもので、梗概は浅草花川戸に住む過行の許に忍岡の宗子、根岸の己惚訪れ來り、例の郭の噂から三人うちつれ吉原に赴く筋である、娼樓艶客篇では、大木屋胡蝶、宗子に迷ひ血起請を書く話夢遊篇では宗子放蕩の結果、別荘に預けられる、忍び姿で胡蝶に逢ひに來ると見しは夢であ

つたと云ふ構想、荘周夢に胡蝶となると云ふ本文を洒落れたのである。本書の二人客は書通人で厚遇されて居る、通行は年輩と見え新造にげ山と淡白に遊び、已惚は玉屋の高紫、宗子は葉紫に可なり思ひつかれて居る。本書は吉原の濃厚な情調を描かんとしたもので、客のさま／＼遊女の諸相を穿たんとしたものでは無い。

【宗】二三日あとに玉樓へめづらしい一坐でいきやした【過】みんな初かへ【宗】サウサてきが高紫に葉紫に花浦紫さ【過】コイツハむらさき揃ひは有がたひ、さぞきれいでござへせふ、葉紫は二條家をつらねやすし、遠州の茶もできやす、高紫の將棊は大事さ

とあるは江戸町一丁目の大見世玉屋山三郎の抱遊女の噂である、明和五年板、寛政元年板の吉原細見を見ても、玉屋のお職は花紫で之が同樓の世襲的名妓なのである、以下紫のつく遊女が多いから、之等も其仲間をモデルにしたと思はれる。

かへる手拭くる頭巾、茶屋の若い者が晝遊の贈り物のからをかゝえてくると、向ふから大木屋の出入のあんまにつき當り、六角の棒がかた／＼チャランヒンとわれると喰ちらかしの肴の骨をつたやのゐんの下から犬が見付てワン／＼と二三疋でいふ、按摩ハ通り過る

別にすぐれた寫實ではないが、肴屋の前でこぼれた肴の骨を、肴屋の縁の下から犬が出て喰ふ

など多少の面白味がないとはせぬ。

山谷の屋根にたつ煙はわがうちの首尾を思ひ、四ッでのまとをもれて吹く朝嵐はゐねふりの肌にしみ、紙砧の音コトく、千住へかい出しの商人田圃を向て手ばなをチントかむなど、そゞろに吉原の二階から見える江戸郊外の風物を想起せしむるものがある、本書は特に傑出した點も見えぬが、忠實穩當な描寫に人を惹きつける所がある。

△戲言浮世瓢簞　原本　縦七寸四分 横五寸二分

呉句堂主人作　寛政九年刊

書名の浮世瓢簞は原本には瓢單とも見受けられるが、一瓢飲一簞食から引用された文字、なりひさごの意である事は勿論であるから簞の字にして置いた。作者は落款に依り、堀李春となご狂号を呉句堂主人と稱し、京都の人と云ふ外、傳記未詳。京都には由來堀穗志、堀景山、堀如圭等の儒者や書家が多い、之等の一家かと想像されるだけである。本書は京都版の大本、五卷合綴一冊に成つて居る。

内容は滑稽本から出てエロの氣分を多量に含んで居る事、「一[illegible]課百貫」に似て、然かも背景

が京都の花柳界から成り、文脈は全く三味線本の系統をひいて居る。その具體的の脚色の無い事は、風來山人の狂文に似て、要領を捕捉す可からざる事は夫以上である。卷の一は四條を中心とした兩岸の色里、遊女の樣を淡く描き、卷の二は遊客の樣、卷の三は藝子幇間を描き、卷の四は遊里から歸る客の心裡、卷の五は藝子の內面生活、粹の道を書いてある、其中で一番よく描かれて居ると思ふのは卷の四である。全篇を通じて其創作態度に西村定雅作「つれ〳〵睟が川」（天明三年）後編「まゝの川」（天明五年）の感化が多量に存在する。卷の三に、

客が歸りて亦外の客の到らしめん事を願ふ、平の宗盛の馬の樣な、名にしおふ河にし心はやはりすいなれど

とあるのは、「平家物語」卷第四、競の條にある煖廷（一本に南鐐）と云ふ白葦毛の名馬を引用したので、南鐐（二朱銀）にかけたのである。卷の四に

イヤ〳〵前かどの吉右衞門や小川が藝を見た眼では、今の役者はどうも見られぬ、まだ慶子がいたうちは覗ても見たが、厥后はとんといかぬ

とある吉右衞門は立役の名優一世中村十藏の事である。寶曆九年十一月、十藏を養子小倉山千太郞に讓り吉右衞門と改名、明和七年歿。小川は一世小川吉太郞であらう、若衆役を創めたと

稱せらるゝ名優で、天明元年歿。慶子は云ふ迄もなく一世中村富十郎、女形の名人、天明六年歿である。同じく卷の四に

美しひ舞妓もやつぱり爪はながけれど、座敷の長ひは嫌ひ、東西の二軒茶軒へはちよひと行、其足で圓山また其戻りが下河原と、一日に幾座敷も勤るを喜び、大勢の講、町内の山會の長座を嫌ふも尤なり

とあるは當時の花柳界の實狀であらう。二軒茶屋の事は一寸、本卷所載「身体山吹色」の中にも書いて置いた。圓山は云ふ迄もなく祇園に續いて居る東山の一角で、今でも有名である。山會は次に春秋二度とある如く、春は花見、秋は紅葉狩、茸狩と東山、西山に行く事であらう。

▲十界和尙話　原本　縦七寸五分　横五寸二分

酒屋橘子作　寛政十年刊

本書名は、大變なお世話、轉じて餘計なお世話と云ふ意の關西語を、かかる字に當てたのである、十方界を說く和尙の話としたのは、內容を四惡道（修羅、餓鬼、地獄、畜生）に喩へて末に今說敎めいた事が添へてあるからだ。大坂版の大本、五卷五册に分つた特殊の酒落本であ

る。作者酒屋橋子の傳記は未詳。

本書卷之一は修羅界と題し、道頓堀芝居茶屋で、堂島正米問屋の客山次郎と島の内の遊女おのへとの描寫、同じ馴染客源が落ち合ひ、双方瞋恚を燃やす、其處が修羅界なのである。島の内の遊里は現今の玉屋町附近である、六軒町、塗師屋町とも稱した、近松作「心中重井筒」（寶永四年）のお房は玆の遊女であつた。書中

今相合橋のうへでやか松にあふたが

とある相合橋は、元大和橋と日本橋との間にあつたと云はれるが、後日本橋と太左衛門橋との間に在る、島の内と道頓堀の芝居町とをつなぐ橋である。又「大六か松屋町で犬悦していた」とある松屋町は東横堀附近で、犬悦は、小間物店を開くと江戸で云ふ、反吐をはく事である。

「その手ぬぐひは我童さんのかへ」とある我童は七世片岡仁左衛門の俳號。

卷之二は餓鬼界で、靱の塩物問屋德が、難波新地の遊女らんと逢ふ光景、らんは金を絞るつもりで今日は塩斷ちと云ふ、德は美食家なのでいろ〳〵うまい物を註文する、らんは見つゝ食べられぬと云ふ笑止味、之が餓鬼道なのである。大松とあるは語源未詳、大喰家の意である。

「すつぽんのころいり」は鼈の轉熬で、江戸では鼈煮と云ふ、兩者言語風俗の異なる爭ひを書

いたものに、三馬作「浮世風呂」第二編がある。

卷之一に「きせるは四つばし吸口銀にたばこいれと同じ模様」云々とあり、卷之二に

　たばこ入、四ッ橋の源藏がきせるで、くはへきせる

とあるのは、濱松歌國編「筆拍子」（一名「攝陽續落穗集」）に次の如く說明してある。

　四つ橋播磨屋源藏が製する煙管を名産として遠國の人求め歸れり、しかしあながちによろしきと心得べからず、源藏がきせるは四歩一をよしとす

卷之二に「酒屋は坂町に居時分から」云々とある坂町は、もと玉造伏見坂町にあつたのを、千日前に移轉し坂町と稱する、此町は泥龜屋裏と稱し、川魚屋が多い。

卷之三は地獄界、南赤町の世界、遊女しつと傘屋の職人藤と互に欲ばり合ひから喧嘩別れとなる筋、南赤町にひてそりと訓じてあるのは、髭剃の故意の替名、赤町も坂町の替名、前述の坂町は俚俗ひげそりと稱し、千日前の私娼地、江戸の所謂岡場所である。島の內と連絡のあつた事は、卷之四の始めに「世界は赤町、島の內も呼ると見へる」とあるのでも知れる。

卷之四、五は畜生界、北邊の刀屋風柳、島の內の遊女綾絹、江州の遊女盃江と云ふ姉妹と契る筋、それで畜生界と云つたのであらうと思ふが、作者は客と遊女と互に詐りそこなひ、そこ

で畜生と呼ばせて居る。江州とあるは恐らく北新地をさすと思はれる。卷之五に

【凮】この春は永うひへる、雛介も市の側へきたな【松】へいきのふ初日でさんじました

とあるのは、天滿市の側の芝居に二世嵐雛助、(三世嵐小六の子、寛政六年雛助を襲名)が出演した事をさす、市の側は俗稱で實は天滿市之町である。

全篇を通じて戀らしいのは、修羅界ばかり、他は皆客と遊女と金のとりやりの肝膽許りであるが、そこが理財に長けた大坂人の一面を巧に描いて居る所以であらう。比較的筆致も鋭利で大坂の洒落本として傑出した代表作であるし、當時の風俗を見る好參考資料である。

享和元年に至り、本書の大坂の地名を京都に改め入木し、寧樂津獨寐作「當世の人情」と改題再摺した。

▲青樓阿蘭陀鏡　原本　縱七寸三分　橫五寸一分

借着行長作　寛政十年刊

書名は阿蘭陀舶載の鏡で、遠望鏡、擴大鏡などを云ふのである、「浮世床」に「目鏡は紅毛の十里見」とあるのも之であらう、青樓をすつかり見徹した意、覗機關のつもりなのである。刊

年は跋に戊午とあるので、寛政十年戊午と推定する。京都板、大本の特種な洒落本である作者借着行長は傳記未詳であるが、本書跋に銅脈とあるから或は同人作と推定される、藤井博士も其著「江戸文學研究」中で本書を銅脈作として居られる。銅脈は畠中正盈、字は子允、通稱頼母、京都聖護院の大夫、觀齋又歡齋と號し、狂號を銅脈と云ひ最狂詩に巧で此方面で名高い、戯作も滑稽本數種ある、享和元年六月二日歿。

本書は京都祇園の遊郭を背景とし、醫學生、奥州の田舍侍、地色客長さんの様々な世界を描いたものであるが、實は山東京傳作「繁々千話」(寛政二年)及萬象亭作「眞女意題」(天明元年)兩書から多くの材料を採つて綴り上げたもので、作者の創意は誠に乏しいのである。醫學生斑毛齋犬順と畫馬通見が漢語醫術語を得意になつて使用するのは、「繁々千話」の馬骨、犬悦の二人に模したのである、今兩書の同じ所をぬいて見ると

【犬】(上略)いつたいあすこの内の老杉板が先づきざだ(中略)【馬】ゥ、やりてか、コゥ吉ばうがいゝのを出しやした、なんと云つたと思ふ、あのやりては弔道具の龍頭といふ面だッサ。いゝじやァござえせんか(「繁々千話」)

【犬】(上略)ァノ老三版を一寸見ナ、葬禮の辰頭といふ顔だ(本書)

【馬】(略上)此紋を見な、金箔で石塔に付けようと云ふ紋だ(「繁々千話」)

【犬】(略上)アノ妓舞が紋見ナ、金箔で石塔へ付うといふ紋だ(本書)

【犬悦】(略上)馬骨子、足下の得業は如何、不佞は大ドロンコに及ぶサ(「繁々千話」)

【通】(略上)斑毛齋足下のトクヘン如何【犬】不佞大ドロンコに及び候(本書)

【犬】奇々妙々、ときに婦人おれは寢てゆく許りだから長袖を揚げてもらひてへ【茶屋女】ハイちやうしうさんと申ス女郎衆はござりません【犬】おきやァかれ振袖新造の事ヨ(「繁々千話」)

【犬】(略上)「新造長袖是如何【通】長袖には殆どゆきつまり 長州とは硯石の事か【犬】馬鹿よ、ふり袖新造の事だ(本書)

眞に脱化したと思はれるのは先づ最後の例位で他は一向働きのない原本其まゝ丸抜きである、上方の酒落本の振はぬのもこんな骨惜みの作者が居るからである。次に本書に出る奥州侍虎佐左衞門の奥州訛は全く「眞女意題」の陸野奥右衞門の口吻を假用したもので、次の例の如きは明瞭に夫を示して居る。

【犬】ヲヤどふせふ煙艸ねへ【ヲ】おれがたばこのみなさひ【犬】コリヤアとんだ色の黒いたばこだね【ヲ】ソリヤおいの河原もし【犬】ナンタきいの河原だエ【ヲ】れへナ、おい

の河原といふ所の煙艸でゑす【大】ヲヤいとこの河原が聞いて呆れる（「眞女意題」）
【中】モシナ此煙草は遠い奥州とやらいふ奥のお客の國から出る狼（おい）の川原とやら、ちよつぽりのんで見なませんか（狼の川原とは仙臺の名葉也）【犬】なんださいの川原だ【中】アホウおいの川原じやといなァ【犬】おいの川原だ、從弟の川原があきれる（本書）

かうなると作者の昔惜みより或はその天稟の有無をさへ疑ひ度くなるのである。本書の結末も全く「繁々千話」の結末を轉用したものであるが、茲に對照する煩を避ける事にする。

しかし本書にも佳い箇所が無いではない。

兎角當世は江戸風俗言葉さへまぬれば、大通とか粋とやらんに心得、着物の好み長羽織、書出し能書や評判付も爰に入ッたる紙入は、とんだ大きい懐の、内はから〳〵下駄の音

とあるは江戸風を眞似ねて得意がる青年を描いたもので、現今京坂のカヘエーで江戸つ子（東京辯を意味する上方語）を使ふ若人が幅を利かせると云ふ話とよく似通ふものである。六丁町に誰知らぬ者なき長さんとなたね太夫の濃厚なやさしい對話、優長な囃子の風に自らなる郷土的情調の捨てがたいものがある。

▲傾城買二筋道　原本小本　縦五寸一分 横三寸六分

梅暮里谷峨作　寛政十年刊

書名は自序に「遊冶郎の乖切は醜夫の溫柔にも猶及ばざるがごとしとは宜なり、人は只心のやさしきこそ、尊けれ」とある如く、浮薄な好男子と眞實な醜夫とを對稱せしめて、二筋道と言つたのである。書名と云ひ内容と云ひ、田螺金魚作「契情買虎之卷」(安永七年)の影響を受けて居る事は否定が出來ない。刊年は京ばし息子序に寛政戊午春とあり、自序に午のはつ春とあるから、寛政十年戊午である。

作者梅暮里谷峨は、反町三郎助、後與左衛門と云ふ、蕣亭、梅暮里谷峨、遊里山人等の號がある、久留里藩士で目付役を勤め本所埋堀の藩邸に住んだ、梅暮里は夫に因んだのである、文政四年九月三日歿、享年七十二、麻布狸穴曹溪寺に葬る。本書は彼の單行本の嚆矢である。(「文選臥座」中の「河東の艷詞」を彼の作と見て)

本書の體裁は、初編は卽本書だけは小本であるが、第二編「廓の癖」第三編「宵の程」を通じて三種ある(一)は從來の洒落本典型の小本、(二)中本型卽滑稽本及後世の人情本と同型の書、之

は小本と同時に出版されしものなる事が卷尾の廣告などで推測され、口繪等も小本と別に描かれたものである。（三）小本の板木を其まゝ使用して本だけを中本の大きさにしたもの、是である。之等などがやがて人情本即中本と云ふ體裁を產み出す基礎となつたのであらう。

本書は世界を吉原に採り、五郎と云ふ客、相方のすま衣も最初は萬更でなく想つて居たが、直ぐ金の無心を云ふ己惚に愛想を盡かす話と、文里と云ふ中年の醜男を、若い一重が嫌がりぬいたが、其眞實が身に徹えて心機一轉し急に深い仲になる話とを並べてある。其處が傾城買に二筋ある秘傳を示した點なのである。

一體に遊里の穿ちを描かず、客と遊女の心理の推移を寫さうとした點に、第三期に屬する洒落本の代表的作品たる事を示して居るし、切實な遊女の戀を描くあたりに作者の眞劍さが見える、之が人情本への展開を最よく見せて居る本書の特色で、非常に讀書界に歡迎され、前述のやうな二冊の續編さへ綴るに至つたのである。其歡迎された重なる原因は、最初嫌ひ抜いた遊女が眞情にほだされて眞劍な戀をすると云ふ描寫が在來の洒落本より複雜な心理描寫になつて居る事と、今迄の色男が典型的な男性であつたのに、本書では中年の醜男の上に地味な性格になつて居る點が奇警で、洒落本の讀者に一脈の清新さを味はした事にあると思はれる、之と云

ふのも作者が當時四十九歳の中年であつた事を考へねばならぬ。

本書が歡迎された一例證として、河竹默阿彌が其作「三人吉三郭初買」（安政七年上演）中に採つて居る事が擧げられる。木屋文里と丁字屋一重との情話、一重が心機一轉し急に文里をいとしく思ふ條は、「三人吉三」第三幕目新吉原丁子屋の場に採つてあり、二人の對話も本書を其まゝ用ゐてある。一重をお坊吉三の妹とし、零落した文里が寮に病臥する一重に逢ひに來る場面は、本書第二編「廓の癖」を用ゐたのである。明治時代に於ける廣津柳浪の代表作と稱せらるゝ「今戸心中」も本書と構想が似通つて居る。

因に本書には二種ある一種は本卷に採錄した京はしの息子（京傳と推測される）序の本と、一種は式亭三馬序の本とである。序の本文は全く同じ板である、前者を甲種、後者を乙種とすれば、甲種は乙種より振假名をつけた點が多く、又甲種は乙種より漢字が多い、江戸時代の常識より考察すれば、假名をわざ／＼漢字に當て直すのは笑止しい、（明治以後なら漢字に當て直すのが普通であるが）輪郭なども甲種の方が磨滅して居ない、依つて本大系では甲種を採用し、落丁の一枚だけを乙種で補ふ事にした。まして「仲街艶談」にも山東住息子の序があり、該甲種と同じ落款を用ゐて居るのであるから、（本卷「仲街艶談」の項參照）後世の入木とは考

へられぬ。暱囉哩樓は勿論三馬の別號であるが、京傳が他の樓上で序した例は、黄表紙に「曼亭に於て序す」などと云ふ例もあり、怪むに足りない。

然かし乙種に於て何故三馬序と其處だけ變更したか、其理由は全く不明である。或は「猫之卷」の如く三馬が序文を代作したからかと思ふ。兎に角此書と云ひ、「猫之卷」と云ひ谷峨の作品には板木の亂雜な事は注目す可き事である。

▲有場妓談 辰巳婦言 原本 縦五寸二分 横三寸六分

式亭三馬作　寛政十年刊

書名は深川遊里の用語を辰巳言葉と云ふので附けたのであらう。辰巳は既に「辰巳之園」等で知られて居る如く、江戸城より東南に深川が當るからである。但し口繪に哥麿畫の今樣普賢菩薩の像がある點から見て、婦言は一方で普賢のもぢりであらう。刊年は自序に戊午春とあるから、寛政十年戊午である。

作者式亭三馬は菊地太輔、字は久德、通稱太助、本町庵、四季山人、酒落齋、遊戲堂、暱囉哩樓、四季亭、式亭三馬等の號がある。其先祖は伊豆八丈島爲朝神社の神官だと云ふ、父は茂

兵衞と云ひ版木彫刻師で、晴雲堂と云ふ、三馬の重なる刊本に彼の彫刻した署名を見る事が多い。三馬は淺草田原町三丁目に生れ、本屋堀野屋に奉公し、其娘を娶り、後本町二丁目に賣藥化粧品店を營み、江戸の水を賣り弘め、傍黄表紙、滑稽本、讀本、合卷本等の著作に從事した。大酒の爲病み、文政五年閏正月六日歿、年四十八。本書は實に彼の洒落本の處女作である。

本書は角書に石場妓談とある如く深川岡場所の一たる石場を背景としたものである。彼の凡例には「新市場の世界を著す」とある、之は新石場(しんいしば)の替名であるが、關東米（振鷺亭の別號）序に

河奈川の豐倉を見通す、什麽生(そもさんか)、達磨も古石に三年、子曰君子も中島町の小徑によらん、嗚呼三河樓(や)の料理番が甘口も、大津樓の水の鹹も味ふる者、此木に口をかけよ。

とある、豐倉、三河屋、大津屋、共に皆古石場(ふるいしば)の妓樓であり、そこで古石に三年の洒落れも産れたのである。自序にも「於三河樓見通」とあり、書中にも「鎌倉古市場二川屋の二階」とあるのは言ふ迄もなく古石場三河屋の事である、であるから大體に於て古石場を背景として居ると見る方が當つて居る、此點に心附いたと見え、祭和樽の跋には「古石新石を穿(うがち)」と折衷してあるのだ。

古石場、新石場の岡場所は、大島町と對して大島川（一名三十間川）の向ふ岸に相隣接して

あつた遊里で、古石場は延享四年の創始、新石場は天明二年の創始である（現今の越中島町）深川でも土橋仲町表櫓等に比較すれば格式が下るので、特に此土地のみを題材にした洒落本は無いのである、勿論舟の通路であるから少しは描かれて居る。例へば京傳作「仕懸文庫」（寛政三年）に、

【十】こゝが大磯の新市葉といふのか【朝】そうサ【團】こゝの坂戸屋のうちへ京の次郎さんときた事がござりやしたいゝうちだねへ（中略）【十】大いその振市葉といふはここかへ、だいぶ舟がついてる、賑ださふだ【朝】よくするからにぎやかサ【十】こゝの大智屋とやらいふはどれだね【朝】大ち屋といふナァあれァノ下駄うりの荷のあるうちがそだ【十】富倉とやらはへ【朝】とミくらはァノ赤くぬつたとうろうの出てゐるうちさ

とある、（坂戸屋は坂田屋、大智屋は大津屋、富倉は豐倉の替名である）、要するに此程度の噂で船は八幡前へ行つて仕舞ふので、石場だけを背景にしたのはない、そこで作者は本書の後編「船頭深話」で

靑樓辰巳の小冊毎部の趣向ことふりて皆相似たり、故に先年先人の糟粕をねぶりて辰巳婦言一冊を著はす、幸ひに世に行はれり、尤も古市場の小說他に類書なし。云々

と謙遜のやうな味噌を竝べて居るのである。之に刺戟されたのか奈何かわからぬが、振鷺亭作「玉の牒」では總目錄中に「古市場朝直しの話」「新市場初會廻しの話」が挿入してあり、卷頭に先づ此方面が描いてある、但し該書が本書より後の刊行であるか否かは多少研究を要するのであるが、今は三馬の自負を信用し「玉の牒」の方を後と考へて置かう。

偖本書は古石場の客、酒問屋の番頭藤兵衞、若旦那喜之助と二川屋の遊女おとまの三角關係を描き、藤兵衞は金を絞る爲になる客、喜之助は色男、しかも裏面には我儘も云へる地色の長五郎に金を貢ぐと云ふ三樣の書き分けをしたのである。然かし實は蓬萊山人歸橋作「富賀川拜見」（天明二年）の構想をとつたのであつて、三馬の創意は地色長五郎の點出のみである。「富賀川拜見」に於ては、十藏がおたよに十兩やる代りに腕に彫つた伊之の名を消させる、伊之これを聞いておたよを責める、おたよ云ひ譯けに髮を切る筋であるが、之と同樣な筋が本書にも書かれて居る、つまり十藏を藤兵衞、伊之を喜之助、遊女おたよをおとまと替へただけである、而して船頭長五郎を地色長五郎として構想に變化あらしめただけである。類似の句を一例としてあげて置かう。

【伊】人の寶の十兩でおれが仕まつて何樂み、も早何にもいはぬがいゝ、どんなことをし

たとつて、火あぶりがうまる物か（おたよはいよ／＼つまらぬ噺となりければ互に無言となつたる内、おたよは小よりで小指をいわへ、しばらくふんがへ居たりしがすつと立て行を）

【伊】小指をいわへて何處へ行く、野暮大臣しやあゝあるめへし、切つて貰つて何に成るもんだ（「富賀川拜見」）

【喜】人の寶の上前で仕舞たつらも何の樂み、お爲ごかしのしよにんもいやだ、モウ／＼何にもいつてくれるな、其かき文何もおそまきだァ（中略）（いまはなとり思案を極めのべ紙にて小よりヲこしらへ小指をゆわゑてかけ出さうとする）【喜】（すそをとらへて）コレどこへ行クのだ【と】チットあすこ迄【喜】あすこも爰も一寸でもやることたァならねェ小指ヲいわへて錫の香筥、むかしのこつたよしにしろ、淺黄裏とは違だらふ（トさきをくゞられ算つきらう）云々（本書）

唯「富賀川拜見」は客と遊女の手管の肝膽の一場面を描いたもので、脚色としては物足らぬ、其處を巧に補つて更にその裏迄描いた所に本作者の手柄があり、やがては一編一編を綴らねばならぬ事となり、人情本への展開を暗示して居るのである。書中

道理先生とやらのいゝさふなせりふでござへす

とあるのは、當時京都から下つて心學を説いた、梅岩門下の系統をひいた中澤道二をさして居るのであつて、之を道理先生をもぢつたのは、京傳作の黄表紙「心學早染草」（寛政二年）が嚆

矢である。お愛嬌に出て來る三人の醫學生は、「蘭言唐音學語などをしつたかぶりにならべたがるくせあり」と云つて居る如く、京傳の「繁々千話」に出て來る客の脱化である。最後に、
九尺店のろじ口、本道外科と割て書たる醫者の表札、さんげ〳〵の梵典と共に雨洒となり
云々
とあるのは、後年に彼が發表した「浮世床」の劈頭と同じ筆致で、彼の尊敬した京傳の行文の影響の多大なる事を認める。

▲來芝一代記　原本　縱七寸四分 横五寸二分

作者無署名　寛政九年刊

書名の來芝は初めは雷子と書き、大坂の名優二世嵐三五郎の俳號である、彼の一代記の意である。作者は無署名であるから全く不明であるが、尠くとも三五郎最負の劇通であつたに違ひ無い、本書は大坂版の大本であるが、實は三冊本にする積りであつた如く、第一卷十三丁、第二卷十三丁、第三卷十六丁と柱に分けてある、しかし内容には此事を明記してなく、又第二卷の一、二丁は柱になく然かも内容には餘り差支へがないやうに出來て居るのは、際物なので滄

卒の裡に刊行を速いだ爲で、手を分けて彫つた故かとも考へられる。他に比較す可き原本が無いので、之以上考へられないのは已むを得ない。

本書は二世嵐三五郎が、寛政九年二月大坂で一世一代の舞臺納として隱退劇を演じた、夫を記念するための際物刊行なのである。卷末に「寛政九年丁巳三月吉日」とあるのは、明に之を證するものだ。二世嵐三五郎は享保十七年、初世三五郎の子として生れ、父が歿した元文四年には僅に八歲であつた、同年十一月大坂芳澤あやめ座に父の名を襲ぎ初めて舞臺に現れ、爾來若衆方、若立役、やつし方と移り、京坂の諸座にて演じ、明和七年冬始めて江戸に下り市村座に出演し、安永六年京坂に歸つた。最得意とする所は和事、所作事で、更に實事武道まで兼ね、役者評判記では極上々吉迄のぼり、名聲は父以上であつた。寛政九年隱退後、三五郎の名を實子松之助に讓り、寛政十年大坂天滿天神に寄進のため、十日間芝居を興行し、以後京都の郊外岡崎に閑居したが、享和三年五月二日歿、享年七十二歲。

彼の人氣のあつた事は、本書及彼の一代の演劇史たる「桐の島臺」の刊行に依つても知られる、卷頭に傾城買指南とあるは彼の得意の所作事、藤屋伊左衛門を演ずる戲題「傾城買指南所」を採り、夫と洒落本に多い此名稱とを混同せしめたのである。書中

若かりし時新うす雪にて里虹相手の薗部の左衛門の大花やかで小娘の情の道をひらかせ

とあるは、明和元年大坂三桝座の興行であるらしく、里虹は二世山下金作で薄雪姫を勤めたのだ。又

慶子が八重の櫻丸が腹切で祖父祖母に珠數をつまぐらせ

とあるは、老大家中村富十郎（慶子）の八重で櫻丸を演じた事をさす。

中ごろの江戸のぼりには、横山太郎、物ぐさ太郎、助市などおかしき狂言打續きて珍らしからず

とあるのは、彼が江戸の三座で勤めた役である、即「小栗判官車街道」の横山太郎の僞阿房、「十帖源氏」の物臭太郎、「蘭奢待」の助市であるが夫以外に多くの和事、立役を勤め皆評判よく中村仲藏、松本幸四郎と相竝んで三幅一對と稱せられた事が、烏亭焉馬の「歌舞妓年代記」（文化十二年）に出て居るのであつて、別に逆境に在つた譯でも無いけれど、雷子最負にとつては座頭格に待遇されなかつたのが不滿に感じられたのであらう。以下の役々は玆に列擧するに煩に耐へないから略す、唯

過し年あいごの若の鐘の段にて、たそがれ御前は甚不評判にて人も薄かりし

とあるは、寛政七年正月中山與三郎座に於る「愛護稚一の黄昏御前に扮したのを云ふのであらう。書中に現はるる相手の女方は、巴虹（四世芳澤あやめ）共答（一世澤村國太郎）蘭耕（二世中村のしほ）園枝（三世吾妻藤藏）である。

本書は先づかく嵐三五郎一代の演藝史を略述し、次に彼の得意の役であつた伊左衛門、椀久を點出し、所謂「大盡の與儀、粹言の十徳」を述べ興味を感ぜしめつゝ、彼の最後を飾らんとしたので、氣の利いた記念出版と稱し得る。

藤屋伊左衛門が指南所の看板を出し、弟子に教ふる所作事を、本書では其まゝ散文化して寫してある。元來傾城買の狂言は歌舞伎の原始時代、遊郭の勃興と共に起つた狂言である事は、演劇史を見れば誰も知る所、來芝の此所作事は、古狂言の復興とも云へよう。挿繪の伊左衛門が三五郎の定紋たる桐の字を附けて居る點に注意あり度い。

「椀久粹言の十徳」と云つてあるのは、安永七年久しぶりで歸坂した時演じた「椀久松山由縁の十徳」に因んだので、爾來椀久は彼の得意の出し物の一になつて居た。藤屋伊左衛門に至つては、前述の通り、一世一代に演出する位であるから、得意中の得意であつたのだ。本書中狂亂した椀屋久右衛門が夜鷹お踏に松山を罵倒せられ、之を聞いた松山が憤つて、夕霧と共にお踏

を責めに行き却つて諭されて感謝する筋は、本大系第一卷所載山岡明阿彌作「跖婦人傳」を採つたのである、之より先「跖婦人傳」を採つたものに「里靏風語」がある、本大系第四卷所載同書を參考あり度い。

卷末に至つて始めて、傾城買の指南らしい心得を說いてあるが、敎訓意識が多量で犀利な穿ちも見えないのは、かゝる書の作者に望む可き事ではないかも知れない。

▲手管早引廓節要　原本　縱五寸二分　橫三寸七分

樂亭馬笑作　式亭三馬補正　寬政十一年刊

「早引節用」と云ふ江戸時代に行はれた一種の簡單平易な百科辭典の名稱に、手管と廓とを冠して書名としたのである。かゝる實用の書をもぢつた書名は、「こんたん手引草」（天明二年）なぞが最初で、「深川手習草紙」（天明五年）「倡賣往來」（寬政五年）之に次ぎ夫から本書である。以下「手管早算獨稽古」（享和二年―「穴可至子」の別名―）があり、更に人情本に轉じては、「婦女今川」（文政九年）「人情早引娘節用」（文政十年―「北里通」の別名―）「假名文章娘節用」（天保二年）「女大學」（天保元年）「花名所懷中暦」（天保七年）等枚擧にいとまが無い、之

等人情本の類似した命題の先驅は實に本書がなしたと云つて差支へがない。

作者樂亭馬笑は、本名は未詳、淺草田町土手下に住み、四世竹本倉太夫を繼いだ淨瑠璃語りである、文筆の才あり式亭三馬の門に入り、樂山人馬笑、又樂亭馬笑と號する、處女作は黄表紙「怪化競箱根戲場」（寛政八年）であり、本書は彼の唯一の洒落本である。彼は三馬の最初の門人であり、當時三馬は僅に廿四五歳の青年であるから、門人と云つても餘り年齢に隔りはなかつたであらう、或は年長であつたかとも想像される、他の多くの門人は三馬を師匠として作品に敬意を表して居るに拘らず、馬笑の作品には左程そんな形跡が見當らない、何となく友達らしい交際ではなかつたかと考へられる。「狂言田舍操」（文化八年）の如き三馬、馬笑の合作にはなつて居るが、大體馬笑の作を三馬の補正したものであらう、田舍芝居贊主證文の寫の如き、田舍の操芝居樂屋の精細な描寫の如き、到底此方面で飯を喰つた者でなければ綴れない。即馬笑は淨瑠璃語りとして此等の一座に屬して田舍廻りをした事もあらう、夫等の體驗から出た作品なる事が考へられる、三馬作の「浮世床」第二編卷之上に、義太夫節の三味線彈の老人が、巫女の口寄せで操座の樂屋で用ゐる隱語を話す所があり、同じく三馬作「戲場粹言幕の外」（文化三年）に「せんぼと稱する隱し言葉」と題して列記してあるのも、又同作「素人狂言紋

切形」(文化九年)に義太夫語りが隱語を用ゐるのも同種の題材で、皆斯道の玄人たりし馬笑が材料を提供したものであらう。斯う考察して行くと三馬、馬笑兩人の關係は、他の十餘名の門人とは異なつた親密さがあつたやうに想像される。

偖本書は、遊女瀧本に對する客東好、烏積兩人の葛藤、男藝者白岡幸治(しらをかかうぢ)の義俠を主題としたものである。此東好烏積は有名な書家澤田東江、葛烏石のもぢりである。特にすぐれて居るのは、「住馴て雅名を高く揚屋町、洒落を元手の世わたりに變な白岡幸治」と云ふ男藝者の實生活を描いた前半である。人情本には散見するが、洒落本に男藝者の私生活を描いたものは珍しい、其處に着目したのは作者の働きと言はざるを得ない。或は此白岡幸治に何かモデルが存するか、作者自身の生活の一斷片ではあるまいかと推測される。後半、青樓の晝の光景の描寫、居續けの東好と瀧本との色模樣、東好の母妙光が訪れて金を置いて行く所など、確に京傳作「錦の裏」(寛政三年)から暗示を得たものであり、遂に東好瀧本が裏木戸から駈落ちすると見たのは、夢であつたと云ふ趣向は洒落本には珍しく無い構想であるが、特に京傳作「娼妓絹籭(しやうぎきぬぶるい)」(寛政三年)に似通つて居る。本書中「五十けんの建まへを見るやふに、おつうまがんなんすりやァわつちだつて中田圃(なかたんぼ)のへこみは喰ィすめへサァ」とあるのは、吉原通には何でもない事である

が、日本堤から衣紋坂を下りて大門へ到る間を五十軒と云ひ、わざと大門の內部を外から見えぬやうに道路を曲げてあるから、曲んなんすりやァと喩へて云つたのである。中田圃は、淺草から吉原へ行く間の田圃、田町の左手に當る、現今では千束町三丁目邊である。「世界はまじり見世」とあるのは、遊女瀧本の抱へられて居る家が、大籬（大見世　と半籬（小見世）との中間に位する半籬交り店なる事を意味する、靑樓の格式である。本書にも櫻丸、八重などと云ふ隱語が出て居り、說明してあるのは、作者馬笑得意の所であらう、云ふ迄もなく竹田出雲等合作の「菅原傳授手習鑑」中の人物の名だ。

之は本書の內容には關係の無い事であるが、卷末に

　一寸御斷り申上ます

式亭三馬儀古人芝全交の遺言に付、此度より二代目の全交と可相成筈に候へ共、いやしき妄作を以て古人高名をけがすは、恐れ有と存いまだ改名は不仕差ひかへ罷在候、猶不相替全交倅と被思召、御一笑奉希候

とあるのは、芝全交の黃表紙で、表面を描き裏面をすつぱ拔く、現實暴露の皮肉さが特に三馬の性格に適し、彼は全交崇拜で二世襲名の心持があつたのであるが、夫を中止した廣告なのであ

る彼が「俠太平記向鉢卷」（寛政十一年）を發表し、蔦人足に襲撃せられ名聲一時に高くなつたので襲名を中止したのだと、從來の江戶文學者には云はれて居るが、之は當らぬやうだ。何となれば本書は彼書と同年の發表で既に刊行され、夫に彼廣告が揭載されて居るからである。

本書には同じ書名で雲雀亭春麿序、壽亭豐丸畫の後摺本がある。

▲傾城買談客物語　原本　縱五寸二分　横三寸六分

式亭三馬作　寛政十一年刊

書名は怪談百物語のもぢりである、書中之に合せるため浮世伊之介幽靈に似通ふ姿で若草の許に忍ぶ條を綴つてある。卷頭に已未とあるから寛政十一年已未の刊行と推定される。作者の傳記は本卷「辰巳婦言」を參照あり度い。

本書は題辭に斷つてある如く、鶴賀新内で有名な「浮世猪の助　若菜屋若草　仇比戀の浮橋」と稱する戲曲を題材としたものである。若草猪の助の情話は、新内節によつて有名になつたもので、式亭三馬作の「二枚續吾嬬錦繪」（文化十年）は鶴賀若狹掾退善の作品であるが、之にも若草猪之助を用ゐてあり、以後「浮世猪之助　若菜屋若草　仇競浮名一節」（春亭三曉作、文化十二年）の如き合卷本が多く出で、

最後に河竹默阿彌作「升鯉瀧白旗」（嘉永四年上演）の序幕に「濡嬉浮寐鴻」と題する清元淨瑠璃で若草猪之助向島道行の場を演出してから、清元としても現存するに至つた。

總目錄を掲げ「亡八樓穿古常情語」とか「全盛娼妓契約幽靈話」とか百物語めかしてあるが內容は一向そんな樣子はなく、浮世伊之介が若草と深く契つて勘當され皆帮間にまで零落しても若草とひそかに逢ひ、やがて二人駈落ちすると云ふ筋である。本卷採錄の「廓節要」と共に京傳作「錦の裏」の影響を受けた事が明瞭で、青樓の裏面生活を描いた點は、京傳の彼書ほど銳利では無いけれど、尠くとも酒落本の常套を脫せんと努めた點は認められる。

このとき中の間の（時計五ッ時）―繪―かくて仕着のふるいふり袖をきせ、ふくろうに小鳥のたかつたやうに、新造とりまきむだをいつてちやうす（「錦の裏」）

【あんま】ナニおまへかゝァが顏なとは鼻でかひでしつております【と】ヲヤけしからねへやホ、、、そんならこりよヲあてゝ見なんしトふくろうにたかつた雀のごとく大ぜいにて色々なものを出してあてさせる。（本書）

前者は馴染の遊女があるのに他の家へあがつた客を制裁する場面、後者は按摩をからかふ所で全く材料は異なるが、形容は以上の如く似通つて居るのである。

【つち】うつちやつて置なんしどうで同じ所へ落て行くから作者も書にくふおだんすとさと斷つて居る如く、三馬は京傳の如く遊蕩した體驗に乏しく、器用に任せて書くのであるから奇警な獨創的な穿ちを綴り得なかつた事を自覺して居るらしいのである。高慢な無骨いあげる氣焔も、氣障な鈍子大盡の法螺も要するに、後年彼の綴つた「人心覗機關」（文化十一年）に出て來る一見えばう第一とする人の表」中の人物や「四十八癖」（文化八年）中の「通りもいになりたがる人の癖」の主人公の口吻と大差は無い、常識だけの通で夫以上の何物も存し無い。待人の禁厭に鰻の串を用ゐる法などは、何か新しい題材をと心がけた作者の苦心であらう。然かし若草伊之介の口說の場面に、若草猪之助の新内を語らせ、「アレ聞なんしとなりでうたふ新内ぶし、ぬしとわたしが二人の噂をつゝむとすれどあらはれんした」と若草に唱させるのも例へ此俗曲が新しいものにせよ、餘り露骨過ぎると感ぜられる。全體が何となく冗長でくどく、三馬の滑稽本に於ける如く引締つた氣の利いた點が見えぬ、要するに彼は滑稽本作者であつて、洒落本作者では無かつたのである。

げにや夕べの大盡は今朝の紙屑ひろひとなり、けふのあんまは一夜檢校、變るはさても化物世界

とあるは百物語に因んだ文句であるが、「早替胸機關」（文化六年）に現はるる「小二變主管」「田婢變爲令室」の描寫に作者の興味が集められる前祥を示して居る如く想はれ、苦味ある滑稽を描いた芝全交と一脈の通ずる所ある皮肉な作者の性格は、甘い濃厚な戀愛光景を描くに適しなかつたのであらう。

▲契情買心得　原本　縦五寸二分　横三寸六分

梅暮里谷峨作　寛政十一年刊

本書は序に「傾城傳受」とあり、内題には「契情買心得」とあり、跋には「大通流」とある、本大系に採錄した原本の內一本には題簽を後に貼り付けたもので「傾城傳授」とあり、一本には「□□買之卷」（不明）とあり同じく原本の題簽では無い、「傾城傳授」の題簽は明に前述の序に依つたものであるが、之は他人の序であるから無責任でもあるし、傾城買の買の字を誤脫したものと考へられる。「□□買之卷」は「傾城買猫之卷」と記すつもりが誤つたのか、單に漫然「□□買之卷」と記したかであらう。

茲に又、一本ある。外題には「契情買心得」とあるが、勿論元の題簽ではない。しかし前の兩

本と比較すると、その相違する點は、序文「遊好山人」とあるのが該本には「式亭三馬」とあり、「はつ春」が「未はつ春」となつて居る。又挿繪裏の半丁に「遊里山人著」とあるかはりに

　　江東田樂橋住
　　　　蕣亭
　　　　　梅暮里谷峨著

とある。尚卷末に、次の廣告が出て居る。

未新版	二筋道後編廓の癖	谷峨作　完
中新版	白狐通	同作　完
	鶴岡花撰帳	同作　完
	傾城買言造鳥	同作　完

これらと摺との工合等を綜合して見れば、前兩本は、該本の後摺本にして、前記の點が入木されたものであることが歴然と判る。「廓の癖」に

　おいらんえ、此傾城買猫の卷とやらは此春の新板で女郎の嘘のすぐ知れる本とやら、讀いせうかえ

とあり、又同本卷末に

未新板　契情買猫之卷　　谷峨作　完

と廣告がある。これは恐らく從來云はれる通り前にあげた最後の原本「傾城買心得」の本名であらう。「傾城買猫之卷」と云ふ題箋の書もあると云はれて居る。

因に、この初版本の入手は後摺本によつて既に本大系の本文が製版後であつたから、止を得ず本文は其まゝにしてある。

偖本書は傾城買傳授に屬する洒落本の一種であり、「猫之卷」の名稱は金魚作「契情買虎之卷」の虎に似て非なる猫と云ふ謙辭であらう。最初に遊女の心理を七つに分類し、「手なくしていきぢ有、情ふかきこそまことの契情共言つべし」と斷定し、「初會上中下三段の定辨」と題し、初會の遊女と客との對話を三段に分つて、出來のよいもの、惡いものと描き分けてある。言はゞ具體的の實例を示した構想である、かゝる構想は既に春本の「好色旅枕」(元祿八年)「新撰古今枕大全」等に見えて居るのである。其中に

ハァ、生國羽生村だの、どうれでいゝ女の氣だ、その心はかゞみを見た事はあるまへ

とあるのは、「死靈解脫物語」(元祿三年)に依つて始めて弘められた下總羽生村の小女累(之をかされと呼ぶのは後世)が祐天上人によつて解脫した說話の戯曲化したものを洒落たのであ

る。最後の跋に、「梵天大借次第䮝(てんかう)嚞物而日本極通大通之人器」云々とあるのは、遊里に行はれた起請文の梵天帝釋四大天王惣而日本國中大小神祇云々の常套語をもぢつたのである。本書の遊女の心裡の穿ちなど鋭い所も存するが、京傳の洒落本が發表された後では、遂に夫以上に抜ける事が困難である。

▲二筋道後篇廓の癖　原本　縱六寸二分 横四寸三分

梅暮里谷峨作　寛政十一年刊

本書は「傾城買二筋道」（寛政十年）の續編である。刊年は自序に「生れかわつた未のはつ春」とあるから、寛政十一年己未と推定し得る。本書の體裁及作者の傳記等は、本卷所載「傾城買二筋道」の項に述べて置いたから參照ありたい。

本書は深い仲になつた文里一重が漸く金の工面に困り、隣座敷に文里を置いて客の椛に金の無心を言つたがあまり文里の惡口を云ふので、一重も腹を立て金の無心も止めて仕舞ふ、かくて文里とも逢へなくなり戀ひしさのあまり病氣となる、之を聞いて文里ひそかに寮に見舞ひに來ると云ふ愁歎場で終つて居る。文脈に一抹の感傷的な幽鬱さが漂ふて居る所に「契情買虎之

卷」の瀬川の描寫が影響して居る事が、明に看取される。

他の客に金の無心をするため情人の名を彫つてある腕の刺青(ほりもの)を消さうと云ふ肝膽は、既に蓬萊山人歸橋作「富賀川拜見」以來珍しくない洒落本の趣向であるが、本書ではつい客に情人の悪口をひどく言はれ、慾を忘れて仕舞ひ客と諍ひ不成功に終ると云ふ點に、作者の新しい構想上の苦心がほの見え、未だ若い遊女の手管に慣れぬ一むきな純な戀心が巧に描き出されて居ると思ふ。

最後の一重の病氣危篤の條は、河竹默阿彌作「三人吉三郭初買」(安政七年即萬延元年市村座上演)の第五幕目根岸丁子屋別莊の場に其まま採つてある。亭主のしんみりした意見も、脚本の方では丁子屋長兵衞の意見として文句は異なるが、情理行届いたものとなつて出て居る。唯一重と文里との仲に子が産れたやうに作つてあるのが、脚本で複雜化した技巧であらう。尚此一節に關しては本卷「二筋道」を參照あり度い。

卷末に之は作者の夢であるとし、「三ふさん三ふさん」と起されたと書いてあるのは、作者の實名を三郎助と呼ぶから、「さぶさん」と云つたのであり、彼の落欵が必ず提灯に三ぶと記してあるも之に因んだのである。

本書の如き遊里其ものの穿ち、寫實には全く作者の興味が動いて居らず、遊客對遊女の戀の切なさのみに力が籠めてあるのは、後世爲永春水が「予の作は人情を描くにあり」と繰り返へし云つて居る其先驅をなせるものである。然かも主人公文里には妻子ありながら一重と別れる事が出來ず、一重は妻子への義理を考へては折々別れ話を申出しながら文里と離れる事の出來ぬ人情の機微を捉へ義理と人情の衝突を描いて居る點は、近松作の「天の網島」「重井筒」などと趣を同じうてし居るが、遂に心中に至らぬ所が戲曲と洒落本との差違であらう。

▲品川楊枝　原本　縱五寸一分　横三寸六分

芝晉交作　寛政十一年刊

書名は山東京傳作「吉原楊枝」（天明八年）に模したのである。作者芝晉交は芝全交の門人、天狗山人、司馬山人、湯屋芝住と號する事が本書でわかる。最後の號から見て狂歌師であり、芝の湯屋の主人であつた事が推測される。人情本作家曲山人も司馬山人と號したが、恐らく別人であらう、眞頬貌老之仇浪「（寛政三年）の作者芝渓交は恐らく此晉交と同一人であらう。同時に芝全交追善の黄表紙「芝全交腹内」寛政六年）の作者芝山人虛呂利も同一人であらうと推

定されるのである。

本書は文朝の家に集つた勝五郎、金次郎、三人が品川へ遊んだ様を描いた、金次郎は溫順な息子株で相方おくめに厚遇され、文朝は唯洒落のめして面白がるだけの客、勝次郎は測らず昔馴染のお梅に逢ひ、相方八汐にさし客のあるのを幸にして忍び逢ひながら、わざと明方になつて八汐に當り散らし之を悟られまいとする計略、三人三様に描き分けてある。

駕籠屋の符牒、芝居道の符牒を文朝が並べれば續いて勝次郎が商賣物の塗師屋の符牒を云ふなど、作者最得意の所であらう。「坂でふられても三丁目じやもてる」と洒落のめして居るのは、彼等三人日頃行きつけの北品川の大店を素通りして、東海寺の坂を過ぎ南品川三丁目の小見世に出かけたのである。

【とら】アノ芋客ヨ（是はさつまものゝ事なるべしすべての女郎はいやがる）

とあるは島津薩州侯の中邸が現今の芝松本町、下邸が三田四國町に在つたから、國侍の品川へ行く者が多かつたのであらう。薩摩者は我殺で強い上、男色ばやりの國柄で、變な要求をするので嫌がられたのだと云ふ古老の說である。

【文】アノ子も七ッ過のかげぼうしときて、背の高い子だぜ、日光の天井のくものすをと

りにやると金になるぜ、惜しい事だぜ、ァノ子に家根手傳ひさせると、はしごは入らねェノ

【文】おらの子はよくねる子だぜ、ねる子の尊といつて、神にまつられゝばィヽ、よくねる子だの、かんざらしはどうだ、ねるほうではあかるひぜ、あしかのやうだ、あしかははやくおひんなれはどうだ

文朝の江戸子らしい毒舌は正に堂に入つて居る、ねる子は蛭子尊の酒落、よくねる子だのは練る粉の酒落、そこで寒晒しと云つたのである、あしかは海驢でよく眠る海獸として知られて居る、京傳作の「錦の裏」(寛政三年)に、よく眠る振袖新造を夜舟、ヽヽヽ、あしかのと名づけたのも、之に因んだ惡酒落である。最後に出て來る田舍儒者の吟ずる「臍臥砂場君莫笑」の一句は、「唐詩選」王翰作の凉州詞の轉句で當時では常識となつて居た詩である。本書に現はるゝ文朝、勝次郎の穿ちを樂み酒落を喜ぶ心持は、やがて後世に於て、「八笑人」「和合人」等に出て來る若者の先驅をなすものである。むだの辻(札の辻の替名)で駕かきをからかひ、高畷大木戸で置いてある空車を見つけると「川へ放し鰻にしてやりはどうだ、くどくになるぜ」と企つる茶目氣分、要するに中産以下の江戸つ子の描寫である。

▲身体山吹色（しんたいやまぶきいろ）　原本　縦七寸三分 横五寸二分

都扇舎千代見作　寛政十一年刊

書名は身代黄金色の洒落であらう。全五卷、大本の京都版で、内容は八文字屋本の系統をひけるもの、洒落本の色彩濃厚なので特に參考品として採錄したのである。作者都扇舎千代見の傳記未詳、但し安永の頃京都の狂歌師に都扇舍知州が居る、姓は川村氏、通稱扇舍屋正七、京都御馬場六角下るに住む。恐らく千代見は同人の別號か、二世都扇舍を繼いだ狂歌師であらう。

一篇の梗概は農夫万作夫婦貧に迫つて一子万吉を埋めんとし、黄金の鎌を堀り出し、之を庄屋に二百兩で賣り夫より富豪となる。成長して貧乏の味を知らぬ万吉が、四條の芝居、祇園、西石垣の遊里、二軒長屋と浮れ歩いて浪費するので、父親と愛に溺るゝ母親との間に夫婦喧嘩が起る、家主末廣屋與一右衞門彼等を知仁勇に喩へて忠告し、目出度く納ると云ふ筋である。子を埋めんとして黄金の鎌を堀り起す話は、「御伽草子廿四孝」にある支那河内の郭巨の說話である、黄金の釜を堀り起したのを本書で鎌とし更に鎌足公の鎌と洒落れたのである、郭巨のは

實は一釜の黄金で釜は數詞であるのが事實だと云ふ古人の說が存する。卷之一に

今其手代は主の金を遣ふた罰があたり大きな睪丸を袋に入て步行、法會立に出て物を囉ふて居るげな

とあるは、恐らく當時京都での實說であらう。根岸肥前守の「耳囊」中にもかゝる百姓の生存した話があるし、「想山著聞奇集」にも大陰囊數人の例が列擧してある。卷之二に

今度は大分面白い、信仰記はさのみにもないが五大力は大出來じや、源五兵衞に友吉の菊野は大きに受けて居る、片岡の三五兵衞も持前の藝じやによつてゐらふ面白い

とあるのは、寛政十一年北の芝居の興行をさす、友吉は藤川友吉（板屋花友）片岡は七世片岡仁左衞門で「信仰記」の松永大膳「五大力」の笹の三五兵衞を演じたのである。

いやも親眠獅とのいふもいは妙不思議な男じや、旣に今の眠獅が親の通りをするによつて玉ぶんに成つて居るはサ、夫ならとて親眠獅と息子眠獅と何ンぼの違ひじやしれはせぬ

とあるのは嵐雛助（吉田屋眠獅、後三世嵐小六）をさす、所謂小六玉と呼ばれ皮肉な至藝が見功者を喜ばしたのである、息子眠獅とあるは其長男二世嵐雛助で寛政六年襲名したが、藝が親ほどでないのを罵倒されたのである。

今の來芝松は親のした藝でさへ親の通りにせず、我まゝにしをる、そこで中々玉に成さふには思はれぬ、敵こそ親來芝の眞似をしをつたがよいじやないか

とある親來芝は、二世嵐三五郎（京屋雷子）であり、極上々吉までのぼつた立役の名人、其人氣のあつた事は、本卷所載「來芝一代記」の作品まで發表された事で推測される。寛政九年藝名を實子松之助に讓り、京屋七兵衛と改名した、來芝松とあるのは松之助の松を附して息子の三世三五郎を呼ぶ名稱だ。

尙書中、「早かりし定高どのと市紅の聲色でまぎらかし」とある市紅は四世市川團藏「三河屋市紅」で、定高とあるは寛政三年京都で、「妹背山婦女庭訓」に大判事定高を演じた記憶があり、寛政十年江戸森田座で同じ役を勤めた評判が傳つた爲であらう。同じく書中に「金冠の紋の付いた笄をさいて居る」とあるのは、當時の花形新進として人氣のあつた二世嵐吉三郎（岡島屋璃寛）をさす。

本書の構想は親の築き上げた財産を子が浪費すると云ふのであつて、在來の浮世草子に珍しくない筋であり、江島屋其磧の「世間息子氣質」（正德五年）卷之一の劈頭にも此事を先づ道破して居る。本書卷之五、家主末廣屋與一右衛門が、万作夫婦、悴万吉を戒めて

先づ町民でいふて見やうなら渡世の軍配を肝要とし、召仕への雑兵に勇氣をつけ、家内の國を治むれば、其身の一城崩れず

と云つて居るのも、江島其磧の「商人軍配團」(享保十八年)の口吻を寫したので、要するに西鶴の町人物に源を發して居るのだ。

▲深泉遊子 仲街艶談　原本 縦五寸二分 横三寸八分

戯家山人作　寛政十一年刊

角書の深泉遊子は深川の遊客の意、仲街艶談は深川仲町の情話を意味する。例によつて支那の雑纂に擬したのだ。作者戯家山人は自序に三多樓主人戯家とある、傳記未詳である、之を式亭三馬の假號とする說もあるが、私は採らない。「戯作評判花折紙」(享和二年)に同じ三多樓戯家山人の作名ある「三人酩酊」を三馬作としてある、之が三馬說の起つた原因で、或人も「三人酩酊」の解題に於て之を肯定して居るが、輕々しく認容し得ない。「花折紙」は書名、作者名に就いて杜撰な書であつて、「傾城虎之卷」(實は「契情買虎之卷」)、「四十八手戀取組」(實は「傾城買四十八手」)、「驛者三友」(實は「驛舍三友」)、「郭節用」(實は「廓節要」)等に書名

を誤つて居り、記南子（實は紀南子）靑海苔（實は靑海舍）似山（「賣花新驛」の作者で實は朱樂館主人と明記しある）等に作者名を誤つて居る位であるから、三馬とあつても容易く信じられない。「仲街艷談」は依然として戯家作として掲げて居るのである。此點で「花折紙」は權威を有たない。

偖本書の山東住息子（私は山東京傳と信ずる）序に、「作者は當春突出し流籠」と云ひ、最後に「時に寛政十一のはつ春」と記して居る、卽寛政十一年始めて洒落本作家の仲間に加つた突出し新子と洒落て居るのである、三馬ならば旣に前年擬鶯亭、桑和樽等の序跋を掲げた鳴物入りの「辰巳婦言」を發表して居るのであるから、こんな序を書く筈はない、況んや次に「譯も白背の新狂言」とまで初心者扱ひをする事はあるまいと思ふ、殊に「一廓節要」に作者樂亭馬笑の名より自分の名を堂々と署名する位の彼であるから（之は三馬の名の方が有名であるからの書肆の注文もあらうが）殊更にかゝる匿名にする必要はあるまい、

本書は仲町濱本（山本の替名）の客紙屋治兵衛、金の工面が出來ぬ苦しまぎれに、馴染の小春と謀り、小春の客太兵衛を欺き、隣座敷で切れる狂言を演じ巧に金をまき上げる構想である、小春治兵衛は云ふ迄もなく近松作「天の網島」（享保五年）から採つたのであり、太兵衛も同様

色敵身すがらの太兵衞を用ゐたのである、本書中に、起請をとり返す所「ァ、今日と云ふ今日、人中で面はぢかくも」云々と治兵衞が歎く文句など戯曲を共まゝとつてある。

然かし大體の構想は、「文選臥座」（寛政二年）中谷我の書いた「河東の艶詞」を採つてあるのだ。同書も本書も濱本の客としてあり、「河東の艶詞」中の客文好は「石場の富倉になじみがあれど、此ごろせかれて居て」逢へないのだし、本書にも

【春】きのふ心まちをしてゐたに、なぜ來なはんねえ、市場の富倉へでもいつたのかえ

としてある、兩書全く似通つた所をあげれば

【文好】（上略）おめへ、なぜそねえにふさぐ【梅】チット氣にかゝる事があるからサ【文】共の氣がゝりは面白そうな事だね、はなして見たら、氣のはれる事もありさうなものだ【梅】こればつかりは、どうも云はれやせん【文】色男についての苦しみならやつぱりそれが樂みだらう【梅】色事と土用ぼしは、した事はござへせん（「文選臥座」）

【太】どうした、しやくでもおこつたか【春】イヱ、ちつと苦勞が有るからさ【太】そのくらうも色事の苦勞なら、やつぱり樂みだらうヨ【春】ナァニ、わたいらは色事と土用ぼしはした事はござへせん（本書）

予となり座敷にて此しうちを聞き居たるが、夜ふけにいたつて寐てしまひ、此末を知らず（「文選臥座」）

予もとなりざしきにゐたるが、此妙言にたましひをうしなひ、うつゝになつて筆をすてぬ（本書）

「河東の艶詞」は文好とお梅が初會惚れするだけで、本書の如き複雑な筋ではない、しかし本書が彼書より出て居る事は確であらう。此作者の同じ作なる「三人酩酊」にも彼書を採つた所があるのは注目す可き點ではないかと思はれる。

【梅】とんだおめへはせじがいゝ、どうりでお春さんとやらがころされて、用事を附けて江戸へいつてまで、あふと云ふひやうばん記だ（「文選臥座」）

【歌】しらねへもすさましひ市場の二河屋の女郎衆が用事を付て江戸へいつてまであふといふ評判記だ（「三人酩酊」）

もしも「文選臥座」中の谷我が、梅暮里谷峨と同人であるとしたら、「河東の艶詞」は彼の四十一歳の時の習作であり、夫を更に延長して單行本にしたのが、本書及「三人酩酊」ではないかと私は推測して見たのである。其傍證としては「文選臥座」にも京傳が堂々と序を書き、本

書にも山東住息子として序を書いて居るからである、山東住息子は京傳が既に「通言總籬序」（天明七年）に「山東屋のひとりむすこ」と冠してある點から見ても、他人が詐稱せぬ限り、彼が寛政三年の手鎖以來遠慮して洒落本に京傳と名乘らず悟れよがしの匿名を用ゐたものと認定してよからう。左樣すると此場合にも「突出し流籠」の序言が多少邪魔になる、何となれば谷峨にも既に前年「傾城買二筋道」の發表があるからである、私は夫を谷峨が深川を世界とした單行本の初作の意と解し度いのである。

第二の傍證は、「傾城買二筋道」の口繪を雪華が描き、本書も亦同人が描いて居るからである、雪華と云ふ如き知られない畫家が特に兩書に描いて居る事は其處に何等かの聯關がありはしないかと考へる、か樣な理由で、三多樓戯家山人を或は谷峨の匿名と考へる方が事實らしくは無いかと推測するのであるが、推測は何處迄も推測である、何か確實な證據が提供されたならば、此考は早速撤回するであらう。三馬說より其方が比較的信じられ易いと云ふまでである。

四　猫謝羅子　原本　縱五寸二分　橫三寸七分

正德鹿馬輔作　寛政十一年刊

書名は猫をじやらす意、帯の結び方にも此名稱があるが、玆では左樣でないやうだ、附言に「丸き物には猫もじやれつく」とある意でよからう。猫と呼ばるゝ本所一ッ目辨天の岡場所を題材としたからである。刊年は自序に未の初春とあるので、寛政十一年己未と推定出來る。

作者正德鹿馬輔に就いては、朝倉無聲氏は「新修小說年表」に於て次の如く云つて居る。

曲亭馬琴の「けんどん考釋詁」に「寛政中ある人の作りし猫じやらしといふ小冊は、兩國向ひなる金猫とかいひし賣女の事を書けるものなり、其書版の頃かの賣女等、猫と書かれしを恨み怒りて、かれこれ障りたる由を聞きにき」とあり、本書の序に馬琴門人傀儡子とあるによりて從來馬琴の作なりといふ者あれど非なり、鹿馬輔は狂歌を能くし、其狂詠「願懸註文帳」に散見せり、或は東西庵南北の匿名にあらざる歟

序に依つて之を馬琴作と考へた時代もあるが、之は當然の誤りである、本書の千差萬別跋に「我弟鹿馬輔」とあるは注目す可き事と思ふ、人情本になると洒落て兄貴とか弟分とか呼ぶ例は散見するが、此時代には其處迄碎けたものゝ言ひ方をして居ない、之は全く千差萬別の弟と見做して差支へないと信ずる。千差萬別は七珍萬寳と共に森羅萬象（中原中良）の門弟で、洒

落本「無駄酸辛甘」（天明五年）の作者である、正徳鹿馬輔は其實弟で狂歌師、畫を好くす位の所であらう、東西庵南北かと云ふ朝倉氏の推測は想像に過ぎない、確かな傍證がない。鹿馬輔の畫は本書に挿入してあるが、同じく挿入してある子興畫と少しく筆致に差異があるけれど、同じ流派らしく見える、子興は榮松齋長喜の初號で、彼は鳥山石燕の門人、春町、哥麿、志水燕十等と同門である、然らば鹿馬輔も亦石燕門ではないかと考へられる。

本書は葛西の幾丸、伯亭と本所一つ目の猫茶屋に遊び、互に色の張り合ひを見せる肝膽を描いたもので、幾丸とおさけの仲を妬んだ天戸屋おつめが、義理詰めに茶屋息子喜三をおさけにとりもち、幾丸に鼻を明けさせんとする苦肉の計略、伯亭が藝者お杉を情人らしく見せかけて居るのを幾丸がすつ破抜く笑止味、同じく伯亭がおかめに厚遇された振りをして幾丸に冷かされる滑稽、要するに當時の有閑階級の戀の遊戯である、其中で幾丸おさけの戀だけは眞劒さをもつ對照が、野暮に濃厚に描かれて居る。本書中

ふところは本町の鼻かみ袋やの名をたんと持ち

とあるのは、例の本町二丁目丸角屋をさす、懐中に丸い金、四角な銀をうんと所持する意。

【いく】白猿か口上斗りでもきついものさ【伯】是は論外の役者だ

とあるのは、寛政十年中村座顔見世狂言に無人のため、義弟岩井半四郎（杜若）に泣きつかれ、牛島に隱居した五代目市川團十郎（白猿）が、毎日口上だけ述べに出勤した事をさしたのである、前記未の春が寛政十一年を意味する確證である。

青樓夜世界闇明月（せいろうよるのせかいみそかのつき）　原本　縱五寸二分　横三寸八分

神田あつ丸作　寛政十一年刊歟

書名は自序に「案するに此さとにやみなし、四時（いつも）月よといへる語あり」と云ひ、本文に「やみの夜も吉原ばかり月夜哉トハ此里をほめし秀逸にして」とある、之等に依つての命名であらう、本書刊年が明記してない、享和二年刊の「戲作評判記花折紙」に出て居る點から見て寛政末年刊と見られる、後に記した理由等によりしばらく從來の說に從つて寛政十一年刊として置く。尠くとも寛政十二年以後では無い。

作者神田あつ丸は、姓は武藤氏、通稱伊勢屋吉兵衛、名は忠司、黄金厚丸、小金厚丸、黄金厚麿、神田庵あつ丸、神田あつ丸、落穗庵、藤樹園、笹の屋、六史園等の號がある。神田鍋町の紙問屋の主人、鍋町に居たので藍水の北に住むと稱した、神田藍染川の北に當るからだ。五

十九歳で隱居し向島に閑居し不斷庵と云ふ。狂歌師で千種庵門、後五側の判者となる。文政十二年十月十日歿、享年未詳、淺草新堀端西福寺に葬る。

厚丸は當時尠くとも卅歳前後で狂歌師として一地歩を占めて居たに拘らず、洒落本作者として進出し度い野心滿々たるものがあつた。例へば南陀迦紫蘭（窪田俊滿）作、北尾政演（京傳）畫の「嘶之畫有多」（安永九年）の作者名を除き、小金あつ丸の自序を挿入し、卷末に京傳畫と入木し「北郭故實内所圖會」として刊行した如き、文壇に於ける不德の所爲の許す可からざるものがある、山旭亭、或は本文にも跋を書いて居る旭間婆行の號も蓋し彼の假號と考へられる、此號に依つて「面美多勤身」に署名だけ變じ「金の和良路」と改稱して刊行した如きも彼の所爲と考へられる。厚丸と山旭亭との關係は、本大系第九卷所載「孔雀染勤記」の項を參照あり度い。厚丸を前記「内所圖會」に誤られ、寛政初年以前からの洒落本作者とする說は採らない、彼は寛政末、享和初期からの作者であるとするが正しい。

本書は序に青樓夜の世界と冠してある點、其他から見て、全く京傳作「青樓晝の世界錦の裏」の模倣である。本文に處々時計圖を挿入してある點、又次の如き書出し等、全く似せてある。

觀三琉球人入ニ江戸一日　（「錦の裏」序）

觀二大通人入一大門一日　（本書序）

爰昔後一條御宇、攝州河邊郡神崎之郞、吉田屋喜左衞門云有二妓家一　（「錦の裏」）

爰昔万治之頃、吉原京町壹丁目三浦屋四郞左衞門云有二妓女家一　（本書）

あまり智惠の無い模倣である、靑樓の寫生も取材以外何等生彩なく、形式化した冗長な行文である、彼と京傳とを比較するのが可哀相であるが、かうも天稟が無いものかと考へさせられる。

本書の梗概は、雛妓之眞言と題し、振袖新造の山が、おいらんの客を送りに行き、情人茶屋の息子に逢ひに行く肝膽が描いてあり、其前に大廛中之間戲談と題した中に賣られて來た女子と其親の事が描いてあるのは流石に新しい題材である。局廛客多語と題し地まはり客源が局見世で遊女と喧嘩する事と、狡有間勤傾契と題し風町と舞鶴の廻し座敷の光景が寫してある、次に率頭雙者戲話と題し風町が多くの男藝者の癖を眞似る所は作者最得意の點であらう。文中「神田の客人が丁子屋の二階でこしらへて藤次が手を付たその時、一ッ所にこしらへた四ッ手ぶしは俄にも出たつけ」とあるのは、作者自身の宣傳かと思はれる、四ッ手節を其まゝ書いて置いてあるのは嬉しい。今なら吉原小唄とでも申す所であらう。袖の梅は「吉原大全」に正德年中吉原伏見町の天溪と云ふ隱居が創製すとある、通人必携醉覺ましの妙藥、夫が俗曲の名と

なつたのである。

次に半格子空言（かしみせのしつたふり）と題し、里秀と云ふ似た山が高慢を並べる所が描いてある、文中「京ばしの傳こうが來て玉樓へゐゝべといふとけへ」とあるは、京傳に當てたのであらう。京傳は先妻菊園が寛政五年病歿以後、玉屋の玉の井の許へ通つたのは事實である、而して寛政十二年玉の井と結婚し、爾來遊里に足を踏み込まなかつたとの事であるから、之から推して本書を寛政十一年頃と見る事が出來よう。

最後は衣々（あかつき）の袖引（ちわ）と題し、連雨待宵の濃厚な場面が描いてある。

本書の構想は模倣であるけれど、内容に於ては可なり新しい題材を採り入れようとした努力も見え、厚丸の作品としてはすぐれたものの一である。

▲契情買言告鳥（けいせいかひいふつけとり）　原本　縦五寸二分　横三寸七分

梅暮里谷峨作　寛政十二年刊

書名は鷄の異名を木綿附鳥（ゆふつけどり）と云ふので、之をもぢつたので、「和漢朗詠集」「東關紀行」等に言ひ陳（ふる）された函谷關の故事に思ひ寄せたのである、序文に清少納言の和歌を引用し「闇の空音

の鷄に函谷關はゆるすとも、月落鳥啼てこそ情郎の隔となれは、鷄にだにも關る心ならん」故にかく名づけたと斷つてある。刊年は序に申のはつ春とあるから、寛政十二年庚申と推定される、作者谷峨の傳記は、本卷「傾城買二筋道」を參照あり度い。

本書の梗概は、助六に戀した揚卷が、朋輩御幸の色客淸に依賴し媒して貰ひ、助六と契る、助六には京町の若紫と云ふ馴染があるので、之に見つけられ吉原の私刑に處せられる、助六口惜しがつて揚卷の許へ赴き、愈深くなると云ふ筋である。助六揚卷、若紫の客をい久と稱するなど明に、「助六郭家櫻」（寛延二年）などから來た助六劇を採つたものである。特に本書刊行の前年寛政十一年三月中村座で「助六郭花見時」が興行、四代目市川團十郎追善として六世團十郎の助六初役で大評判であつたのを當込んだのである。

助六が馴染の遊女がありながら公然切れず、他樓の遊女と馴染んだので、吉原の私刑に處せられる事は、吉原娼家の風習に依つたもので、「吉原年中行事」（享和三年）にも出て居る。

客馴染し家に到らず、他の娼家に行てなじみ遊ぶを制する事、此さとの習はしにて、最初馴染し女郎の方よりさきの女郎へ附斷りの文をつかはし、若し其客來る時は告げ知らすべき事を賴みやる文言に、菓子肴などを添て贈る、されど彼方に意味ありて知らせざる時は、

新造に指揮して大門に埋伏させ、客の歸路を待受て捕へ來る云々捕へ來つた客は或は髮を切つたり、振袖を着せたりして嘲弄するのだ。川柳に「ざん切にしなとぞろ〳〵上草履」「もとどり切れとおいらん下知をする」などあるのは之である。此狀況を比較的詳細に書いたのは京傳の「錦の裏」で「今にぼうさんにしておあげ申ッす」などと新造がからかつて居る。本書は明に「錦の裏」を模して更に精細を極めて居る。

【揚】マァおめへさんは、ひよんなことでござんしたのふ【助】これ見やこんなに根からきりやァがつた

助六は笑止にも見事に髻を切られた仲間なのだ、中の卷で頻りに恨み涙ぐむで居るが、自分が行き屆かない所があるのだから、餘り同情はひくまい。同情をひくのは若紫である、嫌でない助六を將來爲にならぬ客と見込まれて番頭新造野分に仲を割かれ、まだ年若で世話になる野分に反抗も出來ず、ひとり物思ひに沈んで、然かも客い久の機嫌をとる樣、意氣地の無い女と云へば夫迄であるが可なりよく書いてある、次に番新野分の理性のかつた底意地の惡い性格はよく描かれて居る。卷末に

【助】どうやら今から後編をかゝれるような心もちだ

とある如く、後編として作者は「郭の櫻」（享和元年）を綴つて居る。

▲二筋道三篇宵の程　原本 縦六寸二分 横四寸三分

梅暮里谷峨作　寛政十二年刊

本書は「傾城買二筋道」（寛政十年）の三編である。宵の程と命名されたのは、冬の夕暮、夏の夕暮、秋の夕暮と、皆夕暮に題材を採つたからであらう。本の體裁及作者の傳記等は本卷所載「傾城買二筋道」を參照あり度い。刊行年は明記してないが前二書より類推しても寛政十二年刊と考へられるし、書中第貳夏のだんに

序開者先夏冬の床の初夢に春午の新板、後編は去未のとし、三編は此申のとし、其戀中は
紀伊國や文里、三浦や一ト重

とあるので、寛政十二年庚申なる事がわかる。

本書は勘當されて零落し病みつかれた文里へ、本妻お時の貞節と子供等の恩愛とで文里の煩悶、妻に勸められて郭へ行き一重の妹八重梅に面會し一重の夢を見る條、鄕里で病み臥す一重を看護する實母の慈愛、最後に勘當を許され文里が妻子と共に兩親の許に引取られ、作者谷峨

の働きで一重も同棲する事となる所で終つて居る。
本書で文里は紀伊國屋、一重は三浦屋である事が說明され、遊女花の香、妹八重梅の話に依つて、一重は上總會我野在の出身である事がわかつた。遊女遊客の素性まで長々と書く事は、本格の洒落本には尠いのであり、之より前に「契情買虎之卷」がある位のものだ、又一重が夢に現はるゝ構想も、瀨川が五郷の夢に現はるゝ「虎之卷」の趣向を採つたのであらうと考へられる。文里お時のわび住まひ、お時の貞操心づくし、など到底從來の洒落本に現はるゝ題材ではない、遊里を離れた描寫であるからだ。前に「二筋道」の所で述べた如く、是れやがて人情本に轉換する推移を示して居るのであり、後鼻山人（東里山人）によつて盛に模倣された手法なのである。
卷末に一重を本妻お時と同棲させる思想は、之亦人情本には珍しく無い着想であるが、洒落本では本書が嚆矢であらう。元來寬政期迄の洒落本でかく筋の結末をつけるのは誠に尠いのである。作者自身が書中に現はれるのは、蓬萊山人歸橋の慣用手段であつたが、本書中の谷峨に至つては、女の出入をうまくさばき、藥代のたまつた醫者へは見事に仕拂つてやり、立役らしい男振りを示して居る、之で作者が獨りいい氣持になつて居ると思ふと誠に罪の無い話であ

る、谷峨もよい年をして仲々の洒落者と云ふ可きだ。然かも臺帳めかして

【文里】何から何まで谷峨子の【谷峨】そのあいさつでは痛み入る

と白が渡り慾ばり醫者痛飲をとつて投げて、見えをするに至つては、思はず笑ひ出し度くなるのである。

本書總目錄に貧居の白雪、靑樓の白雨、井里の初嵐、市中の春雨とあるのは、後世爲永春水作人情本の書名に襲用されて居る、例へば「吾嬬の春雨」「難波の俄雨」「田家の時雨」「辰巳の雪」等である、必ずしも暗合ではあるまい。

▲昇平樂　原本 縱五寸一分 横三寸五分

白舟作　寛政十二年刊

書名は昇平樂の義、太平樂と同じ意に用ゐたのであつて、勝手な氣焰をあげる事である。刊年は自序に「庚申のとし」とあるから、寛政十二年庚申刊と推定される。更に後に出て居る大江丸の年齡に依つて確定し得る。作者白舟は漢學の素養が可なりあり然かも俳人らしいが、傳記未詳。或は大坂の醫者岡魯庵が和漢の學に通じ、白州と號すから夫をもぢつて白舟と云つた

のでは無いかとも考へたが、魯庵の歿年が未詳であり、想像に過ぎない。

本書は大坂版の洒落本の一であり、或宗匠の家に綾栗、有錢、遅れて古徳の三客が訪問し、唐書の話から、俳人の噂、俳諧に關する古人の評論等を語り合ふ構想で、本格の洒落本からは縁遠いものであるが、本の體裁から見ても洒落本の部分に入る可きものであり、滑稽本とは稱し難い。單に内容から云へば兵作堂龜友作「風俗俳人氣質」(寶暦十三年)其鳳作「當世宗匠氣質」(天明元年)の一節とも云へるのである。

最初の書出しは明に京傳作「古契三娼」劈頭の名文を模倣したもので、類似した句をあげれば

稻荷新道に白虎湯の看板かけしは、所の名にめでし間違なるべく(「古契三娼」)

狐小路に白虎湯の看板は、音の間違ひ(本書)

日間のぺん／＼草は犬の屎をつらぬいてはゆ、己とふるき軒のつりしのぶ、やれたる竹簾かけし縁前に云々(「古契三娼」)

北の家かげの土藏の壁合に三味線艸は犬の糞をつらぬいて生へ、駒寄のがり竹は眼瞟の犬うつ鞭に折られたり(本書)

宗匠と客とで唐書の通をならべる所がある。

【有】絳帖と淳化の宜敷を見ました、杏花天と平山冷燕と申ます小說物を持て參んじました。

とある、「絳帖」は宋藩師旦の輯集した法帖で、一名「藩駙馬帖」と云ひ「淳化」に次ぐ法帖の佳作と云はれて居る。「淳化」は「淳化法帖」で、宋太宗、宮中の淳化閣に珍藏した古人の墨蹟を板行したもので、正しい名稱は「淳化秘閣法帖」である」「杏花天」以下茲にあげてあるのは多く明淸の小說である、「玉嬌梨」は「金瓶梅」の續編と云はるゝもので一名「隔簾花影」と稱する。作者は本書に「玉嬌梨は王元美が作と申ます」とある如く明末の人王世貞(字元美)の作と云はれて居るが定說では無い、「艶史」とあるは「煬帝艶史」の略稱である。之等の書がどの位の程度に、讀破せられたか不明であるが、前に「英草紙」(寬延二年)の作者近路行者都賀庭鐘の如き支那俗文を自由に消化した人が大坂に居り「肉蒲團」の和譯も寶永二年に大坂版で出て居る有樣であるから、本書の作者も之等の流を酌む同好の士の一人であつたらう。

高で談林も一時の流行、椎本水間惣本寺なども一時の流行じや、半時庵で思ふてごらふじ、而も其人々は皆人傑にして俳中の龍どもじや

【宗】イヤ〳〵流行は不易の用じや、今の流行と云ふは根が東華が筆鋒に駈立られ、東華が流行に醉された餘臭が他流までうつつた、其證據は美濃のぬめりと笑つたが、そこらだらけがぬめりになつて來た（中略）東華が己一門戶をはらんと古今抄に花咲翁を寇仇のごとく書のめした故皆後人が是とした

此ところ宗匠の大氣焰であるが、說は大體公平である、椎本は西鶴門の椎本才麿、水間は露沾門の水間沾德、半時庵は其角門の松木淡々を指す。（惣本寺は未考）沾德の外皆大坂の俳人で、特に淡々は江戶堀三丁目半時庵に寶曆十一年迄住み、奇行に富んだ男であつた。

東華は東花坊卽各務支考をさす。彼が美濃に在つて芭蕉の歿後、一流の俳論を吐いたのを作者が攻擊したのである、「古今抄」は享保二年彼が發表した「俳諧古今抄」の事、花咲翁とは松永貞德の稱號で慶長三年朝廷から花の本の號と共に賜つたものだ。書中「貞室の吉野の吟」とあるのは誰も知れる「これは〳〵と許り花の吉野山」を意味する。

【有】方江丸は八旬に餘つて達者な手跡じや【綾】手ばかりじやない足もなにも達者だ

【有】破逸もやつはり旅芝居働て居られますなァ

とある方江丸は明に大坂の俳人大伴大江丸をさす、飛脚問屋島屋左衞門の事である、文化二年

三月十八日歿、享年八十八歲であるから、寛政十二年に八十三歳の筈で、八旬に餘つての語がよく當つて居る、破逸は二世岩本乾什の門熊木破笠の旅稼ぎを云つたのではないかと想像するが確證が無い。其他本篇に出る俳人に長卜、幸竹、繪入、天水庵、雷後、紙鳶等が存するが皆作者の周圍に居た小俳人らしく、樂屋落ちに類した話で、事實は未考である。

▲青樓眞廓誌　原本　縱五寸三分　横三寸七分

松葉亭作　寛政十二年歟

書名のすがきほんてうしは淸搔本調子である。淸搔は（一に淸攬とも書く、菅垣は當字であらう）琴に用ゐられた名稱が、尺八の淸搔の曲となり、其曲譜を三味線に移し、當時の小唄を晝見世、夜見世を張る時唄ひ、其合の手に此淸搔を彈いたのである。淸搔は合の手で絲のみ搔き鳴らす事から來た名稱であるが、黄鐘調で陽音であるから惡魔拂ひの信仰から來たのであらうと言はれて居る。安永以後は各青樓で新造が長唄、豐後、小唄等を思ひ思ひに本調子、二上りなどで彈いた、之を店すがきと稱した、之で本書の名稱の意味がわからう、本書以外に「廓數可佳妓」（寛政十二年）がある。

刊年は本書に明記して無いが、本卷に採錄した原本卷末に「寛政十二年庚申年春新板」と確信あるものの如く書入してある、恐らく他書掲載の廣告か、本書やはし序の「女子登富嶽之年」を考證した結果かと考へられるので、しばらく之に從つて置く。作者は署名して無い、序のやはし云亭は「我に序を乞ふ」とあるから作者らしく無い、跋の松葉亭をしばらく作者として置くのである。落款にミツモリとある、狂歌師に八木亭滿守が居るが（通稱津島嘉兵衛、南鍛冶町の米商）果して同一人か不明である。

本書の梗概は青木庵を如琴、不通が訪れ、舟で吉原に行く話、西河岸の小店で遊女常磐木と色客と眞情を語り合ふ話とを綴つたものである。書中

【如】サアく石町の七ッがなるぜへ

とあるのは云ふ迄もなく本石町鐘撞堂をさす。

【如】モシ此松としるの木といろごとをした咄を聞たか

とあるのは、兩國百本杭に近い松浦侯下屋敷の椎木（俗に椎の木屋敷と云ふ）と駒形の首尾の松とを題材にした落語だ、下げが「心中しぞこなつてさらされた上で木挽の手にかゝるも口惜しいことだ」となつて居るのは、相對死未遂は乞食の手にかゝると云ふ洒落である。

【丁通】おさぼう今日はいゝ天氣だのふ、ヲヤこつちの家名は（トいふより）【おき】ヘイいろはと申します（中略）わたしどもは、上方のいろは茶屋のさ

とある上方のいろは茶屋は、大阪道頓堀濱側に元祿十三年に出來た水茶屋、四十八軒あつたのでいろは茶屋と稱する。

【不】よせへおいてくれろ、おらが〳〵といふ侍じやァあるめへし

自分の事をおらがおらがと云ふ田舍侍をさした意である。田中前首相も此時代に居たら輕蔑される仲間なのだ。第二回「西河岸のせかい」とあるのは吉原の大門口から向つて右手、外郭を南北に通る通に在る、お齒黒溝（はぐろどぶ）を河に見立て河岸と云ふのだ、其〻岸の内特に揚屋町河岸を一名西河岸と云ひ、京町河岸を一名淨念河岸と稱する。要するに小見世である。東方の羅生門河岸に對した場所だ。其西河岸の小見世の常磐木と色客との對話は、しんみりとしたもので、之を諫める琴絲の忠告など、本卷所載「廓の擶」あたりの影響多大なるを認める。

▲大（たい）通（とう）契（けい）語（ご）　原本　縱五寸二分　横三寸二分

笹浦鈴成作　寛政十二年刊

書名は服部南郭著「大東世語」のもぢり。該書のもぢりには、春本で中島嫁隱作と稱せらるゝ「大東閨語」ある事は人の知る所である。作者笹浦鈴成は落款により扇亭と號した事がわかる　京傳作「廓の大帳」（寛政元年）の序に在る笹葉鈴成も恐らく同人であらう、笹葉鈴成の序には「今京傳一冊に述べ予共草稿を閲し掌をうつて曰く奇々妙々」とあり、若し實在の人物ならば、京傳の朋友以上の人物でなければならぬ、他に何等の作品が無いのを見て、私は當時の流行で烏有の人物を京傳が作り出したのでは無いかと考へる、隨つて本書も卷末の凡例に、京傳の洒落本に新宿を題材とせるものが無いから之を著はす意味が記してあるのを、京傳自身の語と解し度い、まして「四十八手」「繁々千話」「總籬」等の例に依つて綴つた由斷つてあるのは、彼か彼の門弟でなければ一寸言へぬ語である、之等の點から、既に前年あたりから山東住のむす子等の匿名で洒落本に序を書いた京傳が、遂に創作に再び手を出し、多くの自作洒落本中に新宿物がないのを補つたのではなからうかと考へる　但し推測で傍證はない。

本書は背景を新宿にとり、田舍侍と半可通の小間物屋と畫店にあがり、一方は野暮一方は氣障で共に振られる。世界が一變し通人五風と馴染梅歌の部屋となる、吉原以來の深い仲とてたわいも無い痴話と口說（くぜつ）でもつれ、やがて仲直となる筋である。

最初の「魯褒曰錢多者處レ先」の句は、魯褒（字元道）の「錢神論」の中に在る語だ、戀川春町作「金々先生榮花夢」（安永四年）の劈頭にも此語が用ゐてある。司馬相如と卓王孫の故事は相如が王孫の女文君と驅落した事で「漢書司馬相如傳」に出て居る、鏡山の淨瑠璃は、容楊黛作「加賀見山舊錦繪」（天明二年）を云ふのだ。書中

　數寄や川岸の歌垣さんの內の會だから歌を讀んで持ていつたら京橋の傳さんが來ていて摺物の相談をしていたから云々

とある歌垣は四方歌垣、數寄屋河岸の家主鹿都部眞顏。京橋の傳さんは山東京傳をさす。「大和田の前を通つたら」とある大和田は勿論鰻屋であるが「酒飯手引草」に出て居る六軒の大和田の內、尾張町二丁目横町の大和田松五郎であらう。歌川豐國は勿論初代である。

　春好が病氣からァ浮世繪の親さ

とある春好は勝川春好で、前名春章、勝川春章の高弟、長谷川町に住み役者繪の名手であるが四十餘歳で中風症となり麻布善福寺に隱遁した、文化九年十月廿八日歿、年六十一。寛政十二年當時は四十九歳で、既に中風であつたから、病氣からと云つたのであるし、豐國亦役者繪で有名であつた故、かく云ふのだ。

「古石のいがわや」とあるは度々前に出た古石場の三川屋をさす。「明日は焉馬さんや慈悲成さんと兩國ゐ噺の會にいきやすよ」とあるのは、烏亭焉馬、櫻川慈悲成等が起した落語の會で、當時の事は式亭三馬の「落話中興來由」(寫本)に出て居る。

その後向兩國尾上町なる京屋といへる茶屋の樓にて毎月話の定會あり、されど價を定めて聽衆を招くにあらず、各同好の人のみ集り互に披講して興ずるのみ、此後故ありて定會を禁ぜられ何時の頃よりか止みぬ。今猶吉例として毎春正月廿一日兩國尾上町柏屋吉五郎が樓上にてはなし初の會あり

書中「先からね艷次郎ばつかりいふからね」とあるは、今更說明を要しない位有名な語で、京傳作「江戸生艷氣樺燒」(天明五年)の主人公の名で、自惚の强い義であるが、かゝる知れ渡つた古い語をわざ〳〵玆に紹介するのは、凡例に「覽るもの複出すとすること莫れ」と斷つてあるものゝ、何となく昔をなつかしむ作り振りではあるまいか。

「呑こみ山のほとゝぎすト正德時代のしやれをいふ」と云ふのは少々誇張ではあるが、「左様はならずの森の時鳥」と云ふ語が正德時代の氣質本に散見するのは事實である。「覗口上」とあるのは覗機關の口上で、「是は夜分の躰なれば火をとぼして御目にかけます」はからくりの最やま

とする點であつた。女房持ちの五風と梅歌との戀は「二筋道」あたりの影響が無いとは云へない。新宿の郷土的特色も可なり描かれ、全體氣の利いた洒落本である。

▲通　俗　子　原本 縦五寸三分 横三寸二分

昌平庵渡橋作　寛政十二年刊

書名は通子、俗子を並び描いた故であらう、序にも「通俗全くして而して後に孝子也」と述べて居る、但し「通俗三國志」の意も匂はせたものであらう。作者の傳記未詳、行文の固く漢文脈の多い點から見て、昌平黌に通學した書生の一人かと想像するだけである。彫の非常に惡い本であるから、作者自身入銀して出版させた書かとも考へられる。

本書の梗概は扇屋花扇に熱心な客、不佞と宴得とが爭ふ、藝者町妃がさばく、花扇は實は文珠菩薩の化身で二人の色慾を戒め、紫雲に乘つて飛び去る、後に兩人兄弟の契を結ぶと云ふ筋である。

全篇を支那の軍記體に綴り、特に「通俗三國志」にもぢつたもので、蜀の三雄義を桃園に結ぶの條をとつたのだ。宴得は劉備玄德である。

いつぞや青龍亭にて八十汀の酒を衆人を相手に呑つくせし神田のふねいこうなり

とあるは八十二斤の青龍刀を横たへた關羽、ふねいこうは其封ぜられた土地による尊稱である。文中に

艶人町妃は燕人張飛である。文中に

江戸町の職女扇宇其名は花せんなり

とあるは江戸町一丁目、向つて左側扇屋宇右衛門抱へ遊女花扇をさす、扇宇は其主人の名を洒落たのである、明和五年の吉原細見「美名の川」を見ると扇屋勘兵衛となつて居るが、寛政元年の細見を見ると宇右衛門となつて居る、此所には新上總屋大上總屋と大見世が竝んで居たのが、沒落し玉屋山三郎、扇屋が進出したのである、扇屋宇右衛門は號を墨河と云ひ、妻いなぎと共に加藤千蔭の門で風雅の名高く、よく洒落本に出て來る人物である。當時の花扇は恐らく三代であらう、天明年度の初代花扇は澤田東江の門で書をよくし、名妓の譽高く之亦よく洒落本黄表紙に出て來る　書中、五明樓とある、五明は扇の異名で、扇屋をわざと唐風に呼んだのだ。書中

床まへに開運の牛にはあらで云々

とあるのは、當時天滿宮祠前の撫牛の小さいのが開運の牛と信ぜられ、蒲團に安置せられる事

が流行したのを云ふのだ。

古の高雄かれいにならひ、三ッ叉にあらぬうちまたのさげ切となさんと云ふのは、誰も知る如く伊達侯が三浦屋高尾を三叉（永代橋の川上）で下げ斬りにしたと云ふ巷説を意味する。

本書はあく迄も支那小説の譯文らしく固く書いてあるが、一體に細かい穿ちも洒落もなく、何となく在來の洒落本作者の手になつたものでは無さ相である、文珠菩薩を釋氏の徒と云つて居るあたり、恐らく若い儒學者の餘技であらう、素人らしい初々しさがほの見える。想ふに當時三代花扇が急に身請けされたか奈何かしたのを題材にしたものであらう、もう少し吉原細見を精細に研究したら、此疑問が解決されるかと考へるが、世の研究家の教示を俟つ。

養漢裸百貫

裸百貫序

男は裸百貫の折紙相場極まつていまだ買人なしされば作者粋川子年頃此事をなけきこたび嘘言は八百書集て裸百貫を償ふ見る人亦飛ふ百文のかり代を惜しむ事なかれと

浮世壹分五鱗齋序

裸百貫序

大智度論云。嘉太夫節與孔子者。不時合之貫首也。宜哉。夫人形棄而歌舞妓行。榮宇始而後△高。嗚呼時哉時哉。仲達被圍。樓門彈富貴組。最早可不中也矣。時節之變。冷乎風呂屋之雪駄。光陰之速。急乎五日拂。曾櫪底留直而摸。藝妓再勤尤爲常矣。都如大晦日元日之變日。僅是一夜之違。韋駝天走不可及也。只其應時者。粹乎。粹也者。不成馬鹿而放好。不買無駄而賓蒔。謂之粹兀頂。於是乎。枕懸不入而梅溢。義理不掛而身揚。諺有之。曰。能良者可罄矣。極道者不可成也矣。周易所謂。澤山金卦。四爻變爲一向粹。夫而後。身上幽于燈明灯矣。當斯之時。

裸百貫之價儼然而著焉。粋川子能捜此隙。而撰裸百貫。

嗚呼、妙哉妙。

乙卯之冬

一陸庵

養漢裸百貫巻之一

睟川子　著

四の海靜に弓ハ袋に入具足屋の鎧櫃は。質家の土蔵に納る御代こそ目出度けれ。かゝる泰平の時津風萬民豊に風流を翫ひ。詩哥連俳琴碁書畫小唄三味線打囃子華美をあらそふ色の世の中待戀逢戀忍戀錢もてこひの戀風や。色に出にけり我戀は借錢こひにしのふ戀。心づくしの戀草は算るにいとまなし。煙花陣豨色堂の色めけるハ更にして題目に節をつけて唄ひ。念佛にふりを添へて踊る。無常も戀釋教も色。開張の縁起說も男ぶりを盡して襟を刷ひ。葬禮の道心者も天窓を磨て色を含む。何事も婦人の氣に入る事でなけれバ色氣なく色がなふてハ佛も流行らす。來ル十月三日當寺におゐて何某の和尚が說法と張札が出るやいな。町中の女中達が評判今度の和尚樣ハ口が輕うて男がよふて大躰有難ひ事じやないげなと。文七いろはが取沙汰に異ならず。門には米俵の積物挑灯の寄進。和尚樣の白無垢は何屋の後家がして遣つた噂。高坐の打敷は何處の妾宅が物數寄じやと。初日の出るを待かねて聽衆の群集。元より和尚の僧がらよく聲よく振よく能辯に身振物眞似取交て面白可笑い御談義ハ散錢の山をなす。なんぼ博學多才

七

でも八十ばかりの老僧の歯拔を洩る嘶でハよりつくものもあらざりけり。觀物の支離でさへ男の支離ハ色氣がないとて流行らず。熊婦鬼孃牛女房短人のお龜。色が流行ば女が流行三文の蕃椒買ふにも門賣四五人呼で見合ねば買はぬ儕老人も。婦にかけれバ鼻毛の尺こつそりと正月にも二日の約束。一町上の町の路次の奥に人しれずの藏し妻。一たび顧れバ家を傾け二度顧れバ城を傾。當世の貧乏人ハ中〳〵狼狽た男の子持うよりは女の兒が福の神。立身出世も金設も女こそ速なれ。往昔亂世の時ハ左にあらず高名擧立身出世もおとこならでハ役に立す女ハとんと直打の無物なりしが。如斯に世が治るに付て男の相場ハ次第に下り。女の直打ハ段〻と上り。裸百貫の男の相場も今でハ裸壹貫にも買人なく。女ハ裸百〆は愚社拵葬禮ごみにて裸千〆萬〆の直打。其外さま〴〵の見物事にも女にハ能い場をあけて見せたがり萬日開張の場でも誰頼まぬに内〻陣へ入たがり大内の拜見事にも女は受よく男ハ受惡し此格なれば後には高野に男人堂が建て男は參る事のならぬ樣にならふもしれず。此やうに女の威勢增といふハ。男の身としてハ口惜き事ならずや。もとより男女の交りハ天地陰陽の道理なれば。男ハ天。婦人ハ地にして。男に婦人は從ひうちなるに。今でハ男子の方より婦人に誤り其上大切な金銀を出して。賴まねば手も握さず。あまり女のしたい儭にて男の衰微。此まゝに捨置ばまだ

どのようにならふもしれずと。此度日本國の男仲間惣集會をつけて評義區〻なり

養漢裸百貫卷之一終

養漢裸百貫卷之二

扨今日の集會に集る諸國の男仲間先山城の國の宇治右ヱ門東の關東兵衛。長崎の傳七尾張の金助阿波の十郎兵衛。奈良の卿春日のさとよりハ業平の朝臣石見の國には石ア金吉。淡海ニ小鮒の源五郎。大阪の熱の四郎兵衛越後の國には謙信。堺の利休伊丹の鬼貫。席を正して並居たり扨上席より關東兵衛高聲に曰。此度各をまねきケ樣に評定に及ふ事余の義にあらず。近頃ミだりに婦人の威勢強盛男の位衰微たり。夫男女の交は天地自然の道理なり。さすれバ同じ交なるに近頃は滅多に女の方より見識ばりかの和合をなすにあのゝものゝと六ケ敷いひて合點せぬゆへに。男の方より金銀を以て頼ミ。やう〳〵男女の和合をなす。是全く自然の道理にそむけたり。されバ男は婦人のために金銀を費し婦人は男のために金銀を得る出入の相違幾廻ぞや昔ハ婦人が男を戀慕生ながら悪鬼となりあるひは巖石となりたるためし多かりしに今の女は左にあらず。あるひハ天狗と成て爪を延し金銀を貪て漸〳〵男の心にしたがふ。誠に女の男に惚るといふは春色堂で見た斗にて左樣の婦人を見ず今此道理をつら〳〵考るに是全く男の方よ

り惚急ぎをして女に目ドを見らるゝ故なり此上ハ日本國の男仲間申合せ先十ケ年ばかり辛抱をして。女を見向もせず女の咽メをなさば自然女の方より誤り。後には婦人の方から金銀を出して男を口說やうにもなるべし。此工夫はいかに〳〵と申されければ。數萬の男聲を揃て御尤なる御仰也。後〳〵のためなれバ今暫不自由なるめをいたすとも苦しからず。然れどもこゝに一ッの大事こそ候へ。かやうに申合せし上男の中に若抜色などいたすものありては惣崩しなり。此事かたく御とりしめあるべしと微細に示し合せ。各承知のむねにて一札の掟書をしたゝめて皆〳〵奥に血判を取置事也

一此度男子仲ケ間申合せ先十ケ年が間女に指もさすまじき事

一縦令夫婦たり共席に別有てかりにも猥かましくすべからざる事

一兄嫁ハ愚母親水に溺る共手を取ましき事

一物洗ふ女の脛いかほど白くともかりにも仙人がましからざる事

一たとへ女の方より文玉章を以て口說するとも心强く返事すべき事

右之條ゝ相守候上。男の方より拔色などあらバ。急度吟味の上。重き罪に行ふべき者也と。各血判すへて嚴重に相守ける。へかくて女の方にも半季一年ハ破顔て暮しけるが段〳〵月

口を重るに付て次第〳〵にもの淋しくなり生ながら女護の嶋へ流されたる心地男の能の悪のと撰ひしハ榮耀の至り今でハ空腹い時悪食物なしと。鼻欠缺唇の拾別なく男とさへ名が付けば女の方より狂浮様に迄はなりぬ。左なくても女は水澤山にて。十七八廿二三は肥太るものなるに。ましてかゝる陽。早打つゞき。女は皆發病白膨脖にふくれて流行風見るように東西にも南北にも一軒の中に三人四人枕をならべて寐て居る有様。哀にも又氣味能かりけり。扨當世の流行醫者は轎を飛して急敷さうなり一醫者病家に來ていはるゝには此度の時花病は陰滿火動の症とて金匱雜病のうちに見てござるが先珍敷症にて是迄はあまり見當らず。多くハ陰虚とて陰の不足より病となるものなるに此度のハ左にあらず。陰が澤山にあまり過ての此病。拙者が唯今調合いたするハ後藤流の□□瀉し。是を男の犢鼻褌の端で袋を縫家ゟ南の方にある井の水にて用ひさつしやれ煎法ハ常のごとく生姜の代りに慈姑を一片ヅヽ入て御用あれなどゝ。申す角腎囲減工夫第一也大黒屋の地黄巨勝子圓大に不繁昌になれば。頃日思ひ付て腎虚丸といへるをうり出し。間口八間の大店見事なる臺看板に本家腎虚丸としるし白暖簾に能書を委あらわす。第一腎を減し氣力を弱くし何程肥たりといへ共たちまち痩衰る事妙也。勞て夢中に男と囚る事神の如しなどゝとかく女病家の思ひ付ように書ちらせば。此薬店にはお一もお三も買に集る

事夥じ

かくて此頃ハ男の覓野食といふ事が時花。夜分など時分な男が歩行と狼藉に戯業を仕掛るゆへ。少能所の小息や手代共ハ夜更てハ門へ出さぬやうにする也。先覓野食を心がける婦人ハ黒き頭巾に顔を隠し下御靈の御旅參藥師觀音の法會尺長店ではなうて小道具乞董店を覗きまはる。年〱彌生長川には奉公人の出代り時が覓野食の最中絲帛舗の手代鍜工の弟子。屋敷御所方寺社等或は若黨草履取小者飯焚料理人行も歸るもこれやこの知るもしらぬも押小路の口入。柴屋が軒こそ賑しけれ。いつも蔽膝被とて微雨の薄月夜。とし頃廿五六の色盛りなる奴の出代紺色の段なし裾長く着なし竹光の落し指小袱を脊中に負。悄然歸る後狀好敷とや思ひけん。物陰より若き女立出跡になり先になり。一丁ばかりつきまとひしか。頓てかの奴の側へよりコレ兄さん。此人きれもない淋しい路を男の身として大膽な私が其邊まて送てあげふと。古い文句に釣かゝれば。奴ハどふやら底義味惡く脚をはやめて些趣【女】コレ〱兄さん恐い事もなんにもないもし此所に私の知音の所があれば寒いに其所で一ッ呑一向泊て去うじやあるまいか【奴】こゝな女はとんだ事をいひ巾これからそこの中宿でうらと一所に寐まるべいとはヱ、位に嫐てくれべい【女】なんのなぶつて何にしよう誓文夫が逢たら神の罰よりお前の撥當

て死る法もあれ【奴】そんなら一所に行べいか夕アも三百はり込で今夜はとんと錢がおりない【女】夫は勿論わたしが承知不躾なから張込ますと頓て手を取件の茶屋へ髭〳〵髭をぺひかれたヤンレ髭をば引れつゝ結ぶの神の御靈裏。夫から毎度の忍び合深き因緣と成にけり。扨此女はさる歴〻の娘なれば小遣ひ錢身の廻り何不自由なく仕贈れば。奴の髭に奇楠とめて慰がてらの隨意奉公。此頃聞けば銀の毛拔に針拔の紋を付て贈しと専浮名立しなり

養漢裸百貫卷之二終

養漢裸百貫卷之三

男次第に繁昌すれば遊廓不夜城松位女郎皆男に轉じけり遊男といふもの多出來出口にも柳を栽るは女めきて似合しからずと。男松のふりよきを植て出口の松とぞ名付たり。扨太夫には隨分よき男ぶりを撰、お定りの帔といふ處を男なれば大紋立烏帽子禿の代りに若黨二人引舟の代りに用人壹人。妖冶人には兩挾箱鑓一本大體五六百名の格式なりてんじんは長袴。端男は。袴羽織。新地祇園町はミな羽織斗△とひらとハ衣裳の善惡にて分る。藝子花車仲居都て男にて茶屋の娘などゝいふは息子分とて總角から廿二三才の青二才を置並て客を饗應事いと聲花なり。水揚袖詰鐵漿つけの祝義事もそれには代り。新艘の水あげといふも男なれば水さげといひ。ミなそれ〳〵の客を頼んで半元服の蒸物。元服の積物遊男さま〳〵有が中に分て名立る全盛は。井上やの權兵衞新や太兵衞櫻井やの六右衞門其外毎日廻る新妓本詰のさし紙。京井筒やにてさる方手代下りならやに本むく米踏出三桝やの出家出松本やの侍出と樣〳〵の素人落望次第。客といふは町方の小娘達後家内義腰元。小茶屋にハ中分以下の嫁達飯焚の蔽膝連中。

おもひ〳〵の注文に。井上やの武兵衛さんと京井筒やの權右衛門さんか太郎兵衛さん若も夫がならずバ三桝やの傳九郎さんか三左衛門さんを聞てごんせと呼ものに走らするも十二三の小丁稚。送り迎ひも廻しの漢にてハ取合あしゝと廻しの女といふを置。藝子なれば筥。遊漢なれば包ミを片手にハィ權兵衛さん上ますと送りこむ。扨權兵衛ハ上り口にてかの廻し婦に持せし鼻紙を取。其中にある鏡帒を取出して立ながら八方の明りにすかし見鬢を直し髻を繕て座敷へ出る。藝子共ハやはり女の藝子の趣にて例のごとく三味線をつぎて餘所の客の取沙汰【藝子六兵衛】拙者は今迄大新へおぎんさんで居てゐたがお連のお咲さんとやらがせんど權兵衛さんの噂をしてじやあつた【藝子八兵衛】身どもハ夜前おきのさんで舛半へ居たが地牽頭に來おつた臭さうな女の針治店仕廻からミな一所に雜喉寐をしたらすでの事にかぶせかけうとしおつた一向粋じやないかいなァ【藝子太郎兵衛】それハまあけしからざる厚いしろもの其様な客には此間藤やから出てじやあつたこぼれさん。ア、名ハ何とやらヲ、それ〳〵助兵衛さんといふしかも九尾の藝子【藝子九右衛門】ヲ、それハ此間も井とめで御客が惡口いふてじやあつた。あれはこぼれ梅でハなうてこぼれ松茸じやとナァ【藝子太郎兵衛】楊枝を口にくはへてうなづき 一向よいやつ【中居】何にもしらず。ずきなで、調子合し いやなやつと いひ〳〵燭臺のしんを切る【太郎兵衛】これ六兵衛ぼんそちら向て見せ

けふは髪結さんが替たかひかへ本田にしいじやァ。お前はやつぱり初手の鹿嶋やがよう似よふにと只髪月代の取沙汰とよ所の客の噂。其間は延鏡出して居然顔を直すに掛て居れば三味線を弾て客を勤る間はなく花の三ッ凹ッもつまつてもはや客が去る時分になると漸三味線をとり上て何のいらへもないのが返事とはあんまり胴欲頓て店仕舞といふ時分になると山嫗八島で躁動かけ。物音も聞えぬほど弾たつる中へ中居が呼て。鳴ますが如何いたしませうと尋ぬれど、宵からの酒と傍の喧とで客にもよほど草臥がきてあるゆへ。鳴ますの鳴の字を聞外し。つめてやれといふたのが店仕舞三盃。際になると是非其花はどうでかうでと既き爭になるもの也左之右之其方でせいと。些不知顔して居る藝子こそ憎ましけれ。浦山敷物ようられる藝子とは清少納言の書落し、戯場は初日の桟敷の三軒め花見遊山は約束買ふて通し駕。上下八日の參宮に三十日の約束貰付て。小遣ひ金の無心も諸方から集る事凡五六十兩伊勢參三度すると新地の大長屋が買るゆへ近頃祇園町に家買物は役者と藝子斗。雪見の鯡鱠納涼の茶椀やき。衣裳の榮花は綾羅の綾身仕舞部屋の錦。全盛なれば妓もおなじ勢ながら是は否なる枕の數。齒拔の田舎客に口中を望まれ熟柿くさき奈良漬客の返吐の介抱。なミ＼／の事ならず同じ業には似たれとも。藝子の轉る枕といふは。多の客の撰取見取枕かけの先取。のき代の後取。商賣柄と

て箏の爪ほと長い爪に能三弦の撥もあたらぬ事と浦山ぬ物はなかりけり同じ流の其中にうき事業き河竹や臥處定めぬ浮寐鳥此間噂の筒井やの侍出といふは元東國のさる牢人にて二三百石も取し人柄。生質物堅く朱子學を望ミ。武藝も無器用なりによく心掛ありしに先年殿にいささか御諫言を申御用ひあらざりければ。三度諫て用られざれば退と御暇を願。二度二君につかへじと都に引越。十ヶ年余の飄泊牢人の身のよるべなく。子共の時の遊戲が役に立た三文の竹笛吹て。大路小路を夜〳〵の忍び按摩劒術ハ神影柔術ハ竹の内の一流。鍛錬ハしたれ共導引按腹の心掛は一向なく。十四經絡は愚か一經絡もしらず。柔捕手の痛め處を覺たばかり。四十四の骨〳〵の禁穴を押て廻れば此按摩に二廻りもかゝつた族は軀中を痛がり。暑寒と八專にハ極めて骨〳〵が痛ゆへ一度もんで貰ふた人ハ二度とかゝらずいつか按摩のかたも悪くつまらぬはての新奉公。世の人口國〳〵の聞え。無念とは思へども按摩さんでも灸でも直らぬ物は貧の病。同じ中間に闇の正白といふ老醫を親判にたのミ。三年三月を三兩貳分の男の本詰。證文も事なく濟。筒井やの店より六月一日の店出し親方も先納涼を一ぱい受るつもりで衣裳をはり込。御召晒の白帷子にかちん染の五所紋〻三筋立の精好平の袴に黒保田の羽織。濱松細工の綱の緒半着たるハ。いかにも本むくの牢人おりと見へていとこのもしけれ

養漢裸百貫卷之三終

養漢裸百貫巻之四

禮之用和爲貴。お茶の席と正月に上下着たる時ばかりを。禮とおもふぞあさましけれ。夕顔棚の下すゞみ。天天良不太奴乃の寐ものかたりも禮にあらずといふ事なし。されバ彼牢人出の新艘。先青樓方へ入込ば上り口でのはかまさばき。主の花車にさし向ひ扇子逆手に持て三指の挨拶。某事ハ筒井やの十治右衛門と申侍。出の新艘貴殿ハ此家の主とな。今席ハ初ての對面先以て嚴暑之砌益御壯健之躰珍重少からず。萬事不案内未熟の某。しかるべく御指引頼入と東國訛でやりつけければ。一座の人〴〵目引袖引笑ハぬものハなかりけるが。いよ〳〵木むくハまぎれなしと先客の受よく。上座の客手枕ながらコレ十さんとやら折節持合た一寸間をと一間ばかり盃を投出せば。本詰大に面色を變じヤア推參な素町人め武士にむかつて失敬千萬。今一言いつて見よと切刄廻して睨付れば。客も驚き一座もしらけて見えけるを。花車中居漸なため足下にハ此里の子細御存ない故。其様に腹を立なさるは断ながら。武士方と同し様に思ふてハ此苦界ハなりがたし。アノ様に遊興に御出る御方は。内の窮窟を忘れん

ため。ぶ禮ぶ作法が青樓の御馳走。其樣に癇積起しなさつてハ此方にかぎらず何青樓方でも懼がつて呼ませぬぞへ。柔和な上にも柔和にして。褒媚詞といふて追從輕薄もいはねバならず。隨意な奉公なさつてハ第一親方さんへぶ忠といふもの。親方さんも幸い時節に大分の黄金出して抱た足下。能う思案して見なされと。意見交宥れば。上治右衛門も胸なでおろし。いかさま今の身の上を思ひまはせば苦界の辛抱。殊に當主人にぶ忠とは武士たるものゝ汚名。過てハ改るに憚ることなしと忽眉に笑顔を含ミ。衣紋正して兩手をつき。唯今ハ拙者聊心得違にて存外の過言無禮の段御高免賴入と。眞顔に成て演られければ。ミな／＼却て興を催しさやう理知義な所か則本むく疑なしと中直りの盃。通すうち中居が二階の中の間にお寢間をしつらひ少時御休ミ被成ませと客への挨拶。客は例のまけおしミはな歌諷ふて間をふり。頓て中居が兩手を取て引ぱれば強いやつじやと雀形屛風の中へぞ入にける。かの本詰ハ袍を取出し着替の浴衣は半晒の紺島。かたの巾の短きに黒き腕の出たるハ。高瀨邊の船頭の養父入したる如く也。手水厠の勝手しらねバ二階に有あふ客の便所へ引まくつてしたりしは。やはり女の本詰の勢籠よく似れば似るもの也。兎角して客の枕元に座し木綿羅紗の腰提ち孫六ばりの朱らうの煙管取出し。一玉八拾の丹波煙草誰が教たやら一ぷく呑で二ふくめを客へ吸付て出しけ

り。夫よりハ穴賢見た人もなかりけるが頓てかの客閨ゟ置出中居を呼で小聲に成。あの本詰にはどふも逢がたしよきに言ていなしてくれと。客に斷いはれしハ神武以來珍らし幾勤かた。此頃はやる養漢の口入は河原町の糊やの甚兵衛　今は置なれし荷捧のかたもよく。荷持瘤に縮緬の襟を河内嶋の布子も暖さうに着なして。けふは此方の目見へ明日ハ彼の肝煎とた人七人の養漢を先にたて。自身ハ布の一反風呂敷に着替の衣裳を包んで脊中に脊負。飛ありく出船があれば入船ありて一日も絶事なく。あそこの八百屋の息子が去ル大名がたの御代取を生したい轎夫の寡がある歷々の養漢に成たいと咽の乾く甘味い噂に。裏屋小屋の日雇共蘿蔔茄子の荷ひ賣も貪鈍魯燭　大津伏見へ通し駕汗水流して界た處が二百三百のはした錢。夫よりか汚穢拈で渡う喰への比譬。男は氏なうて玉輿に乘るつもり赤だれた。さんばら髮を俄に床の髮結ひさんに頼で松金水油をぬり廻し。樣々の當世髮。松井七郎兵衛が齒磨に茄子齒を磨入て　月切年切一とき弐朱の切賣まで望次第の男の臭屋。此甚兵衛が方へ入込ばさまざまの注文口有て。中立賣の後室の口は高上好み。年頃ハ卅斗て男ぶりよく香茶之湯の嗜も有て。妻はづれ賤しからぬを一年卅枚に二季の仕着でほしいの。又烏丸のへん綵帛舗の莚敷に年頃ハ四十斗て讀書算用も人並にて上下拾四五人の取メも出來さうな。おやぢかほしいの。高倉の糸屋の娘の口は。

年頃廿二三で色白な娌婷雄。が酒も少し成て琴三味線もあるのがほしいの。今一口は佛光寺邊の女醫者。表向は召使の男分にて朝から午時迄は調合場の藥の取次。午時から末は外廻りの藥箱指。夜はかの旦那殿の閨裏の伽。少ゝ閙敷奉公ながら其代り如才なう勤さへすれば給銀の外に一子相傳の醫術を傳へ。跡式も讓る積り。年頃廿四五で隨分手達者なあまり物數いはぬ男がほしいのと，樣〱の注文あるが中に下木や町の假り座敷。江洲邊の大百姓の後家と見へて。年頃四十余りの大女房。是迄數十人の養漢おゐても〱もの一月と勤る物なく。元より給銀は望次第藝能器量の望もなく。唯達者一むきで鼻の大ながあらばとの事。誰かれ目見えすれども氣に入らず。漸〱此頃御意に入し男は先年夜打にあいし高野師直の家臣。臆病馬之丞といふ侍。裏門より逃て出しまゝの牢人年月の困窮詮方なさの此奉公。まだしも運に盡ぬ所があつて。此後家君の氣に入一年金百兩の給金に召抱られ朝夕の寵愛なのめならず。馬之丞も二度世に出し心地にて口入甚兵衛が方へ樽肴に包物を付ての一禮。扨〱此度貴殿の御世話にて思ひよらぬ仕合。會稽の恥辱を雪と申物牛を乘替し馬之丞が主人には此上もなき典侍の局。よもやあの後家どのに恨の者が有て夜討に參る氣遣ひもあるまじ生涯の安心今此時と疊に頭を付て悦ばれけるかもの丶一月たゝぬうち色青ざめて逃歸り。甚兵衛をひそかにまねき段ゝ御世話に

預し段御禮も申盡されね共。何共此度の奉公も御縁なしよきに斷頼〻入と。汗を流して申されければ甚兵衛もきのどくがり是迄度〻御世話申せどもとにかく御縁なし此度あなたを御世話申せし處。先〻納て大慶と悦んでおりましたが思ひよらざる今日の御こと葉。いかなる事ぞと尋ければされバこそ金がほしいも榮耀がしたいも命有ての事ならずや。今あの後家に一命を投心があれば。先年四十七士が夜討の時よく逃延て惡名はとらず。人の譏も世の笑も命が惜しさの事斗。是非に斷頼入と。眞顔に成ていはれけるが尤至極の名語なり

養漢裸百貫巻之四終

養漢裸百貫巻之五

京の六條珠數や町に夫婦暮しの珠數やありけり。此珠數やの亭主は世に勝れたる美男。商賣柄とて水晶のやうな男なりしが。少〻身躰の珠數のくり廻し悪く。此頃流行に付て思ひ付女房とも相談の上。月二分ヅヽの男妾。三人五人かゝり次第さし合ぬ様に夜ぐり日ぐりの工夫。壹人の客に五日づゝ當て月に六人までハかゝるつもり。五日の外にいかふといふ客があると。翌の晩ハ伯父君の方へ病人見舞にいかねばならぬの。明後日の夜は講中の小寄に参らねばならぬのといひぬけすりぬけ薄情ハ此上なし。それゆへもの三月とかたる客ハ無物也。冬ハ藍青梅の絹裏の布子に木どろの袷羽織。夏は半晒の紺がすりに縮緬と黒繻子の晝夜帯。三本木先斗丁の日見え事繁く。折節ハ貳朱づゝの切賣客ハ色〻多かる中に。分て馴染を重ねしハさる御所方の針妙。大勝山に美人額花色倫子の小袖に鹿子の大もやう八寸ふきの紅うらも厚くろしく。さながらに宇都のの山下三里の灸の紫色にいぼうてあるぞいとうるさき。今一人は後家年は六十に近けれど何くふたやら唐の穢多村の象ほど肥て。十筋斗の九十九髪兀た處へ鍋炭を塗廻し。思は

せぶりの二ツ鱗黒紬の着物に金糸で大きな鶴の丸の縫紋。此二人の客は取分此珠數やに打込月極めの貳分の外楊枝さし豆巾着後には羽織繻半の仕送も互のはり合になり今度利口な黒檀がある故買て置たひの。此節氣は知積院の銀が間違たなどゝ。五兩三兩の無心終に二人が尻毛迄取倒せば此二人も氣面の約束いつまでかうして置給ふと右と左につめかけて疊たゝゐて減氣債氣。延引ならぬ折も折女房お玉はしり出ャレこゝな惡性もの。けふといふけふ密婦見付た逃る共逃さうか密婦の重ね切。覺悟はよいかと高震。二人の女も肝を消し口惜とは思へとも密婦といふ罪あれば。是迄誑された無念をこらへ定りの三百目兩方合て六百目。しらずにいたせし身のあやまり御免し被成て被下と。佗言すれど聞入れず頓て箱より髮剃一丁取出し二人が天窓を剃こぼち尼となして投出し。似合たやうにと店の珠數いやおふいはさぬ突付うり。かはぬといふたら表向。丁へ届てゆすらるゝ二人の婦人か内甲を見すかされたる珠數の玉。二人が泪の露銀を漸集て壹メ目これは悉皆奸園ではなうてほんの珠數もたせじやナア。

〽千はやふる神の園生の石の華居かた見を和らぐる和光の光りに赤前垂を閃かしていつも聲花なるは祇園の二軒茶屋是もき女ばかりでは色氣がないとて若き男を多く置ならべて徃來をまねく客の群集。貴賤をわかす。呑やうたへの其中に。牙婆の袱連中は兩茶や常得意。盃臺仕て遣

たり巨衣の紐持て來たりする故男共も分て心安く。たま〳〵大谷參りして寄た客などハ二時斗もまたせて置柏手百程たゝゐても返事斗して相手にならず。ミなかの連中客の處にばかり寄集て【二軒の男】きわるさんお出ナ昨日ハむかひの首さんと工合してゐョウ〳〵【ふろ敷客】何ぞおもかいナァいかにけふ月代剃たてゝあまりなめてもおくれな【男】一向粹じやナめん〳〵の事いはれまいてゝ紛らかしてゐ【客】これ喜助ぼん共ワりで一寸すけてくれ【男】おあいいたしませう【客】そんなら一拳出かふかい。りう三ッ。五ッ。無ィとこなどゝ拳を打て居る最中四五人の親父客【男】どなたもョウお出ナ表の方が明て居ます【客】南無三あのうちにこちのれそめが來おつたと親指を出して見すれば【男】どんなやつめが來おつたと前の簾を下すうちミな〳〵袱を負て裏口よりこそ〳〵と歸りける。それより南は軒をならぶる楊弓場。これも前〳〵ハミな十六七の小娘なりしが。近頃は十七八から廿二三才の小息子を置。生來の女客を呼込近付でもない人に微笑を含で様子をするゆへ何にもしらぬ田舎客や。地向の青い輩は我にも少し思はくのあるのかと立寄て。ついに射て見た事もない楊弓。天井のさゝらへ當たり横の篗垣へすらしたり。ッイ五六十の處ハお客に成て行人多し。こゝにも入り込ム黑人あつて多ハ袋中庵小松谷の尼連中。智月貞照の法名は呼ず。月さんじやのてるさんじやのと替名にての付

合。かの楊弓場の息子が側に頬杖つきての邪落羅苦落離。其隣には二間間口の格子造。兄を左門翁を千代鶴といふ男の舞子。兄はさる大名もどり、年は五十に近けれど一寸見れば廿四五にも見ゆる小作り。弟は佐渡嶋が仕込にて舞の達者ゆへ兄弟ともに殊なう流行。爺を三味線箱持に他人まぜずの金まうけ。内では朝飯をくふばかりにて跡二度ヅヽは座敷での口過まだ翌日のあさめしの菜を破合順正寺に入てもどり。圓山靈山の歸るさも弓はり挑灯の中へ座敷の炬屑二三丁ほり込でもどるまで。出る息なしの當世商賣。前方は舞子に重箱といふものはなかりしが是も近頃は重箱の重ねうり端の寮の御留守居様へ一寸御挨拶に居て參じませうとは。さりとては油斷のならぬ時節ぞかし。しかし昔は舞子の衣裳といへば郡内嶋にて濟だものなるに。是も近頃は縮緬八丈の祇園なみ。近來能うなりたる物は牧方の物いひ舞子の衣裳じやとの事。これも此頃はみな男に替り。丸太町にも男の鶺兒はし／＼の新地には男の向燈妓男の湯女。男の伽やろ此やう皆男に替りたるにまだ出來ぬものは男の御乳さんと男の産 嫗じやと人が笑ば山も笑ふ春の日永のわらひ草。笑ふ門にはお福德助御禮申上ませうといつもかはらぬ妹背鳥男女の和合をよしなし事に書綴るも。大にやはらぐ大和の國ぶりこれもいさゝか御代の春の豐なるためしぞかし

養漢裸百貫巻之大尾

明說則天皇后ハ藤放倉を得て八尺の涎を流し□□帝ハ道鏡が爲に鼻毛一丈をのばさせ給ふ命ハ物種時なる哉〳〵天運巡環して男の面も辰之春雲に翔るの勢を得たりかしこしと草紙の後に塗抹するものハ誰そ

東山の麓に花篠咲折也

養漢裸百貫

寛政八辰正月吉旦

浪花書林　心齊橋筋　河内屋多助

京都書林　寺町六角角　著屋甚助

寺町四條上ル　著屋善助

假根草

奇談 假根草　　　紅月樓 著

發端

遊妓飛至深川客堀馬子附言所謂北界變也嗚呼時哉一角光使耀夜具內（遊妓ハ則女郎ナリ深川ハ所名女郎ニイタルトナリ客ハ遊客ナリ大盡ノ類ヒ堀又所名北京ノ近里ナリ馬子附ハウロ々々尋廻ル言也北界ノ變ハ一時ノ盛燒ナリ一角ハ金一分ナリ光リハ金ノ光リ夜具ノ內ヲカヽヤカストハ諺ニ曰百文ノ錢ヲ以テ一メノ場ヲハタラカストナリ）喧曰樓繁大町究舊地於究其作家居女郎而可不如素人乎（噂ハ風舌ナリ樓繁ハ青樓ノ至盛ナルヲイウ舊地ハ北花街大町又同シ風舌ニ北郭度々回錄ニヨツテ向ヲ島エウツサルトイエリサレトモ願ニヨツテ吉ケンノ地ニヲラシム故ニ斯ハ本文セリ究ニヲイテ其家居ノナストハ北郭ノ地ニ定メユルサルヽユヱニ家ヲツクルトナリ女郎ヲシテ素人ニモシカサルヘケンヤトハ彼ノ離妓ノウカ々々トシテ何レニ曲輪ノ定ルトイウコトヲソキマエサルハ素人ニモヲトレルヿナリト仰ラレシト也タカ仰ラレシカ其儀詳ナラス）

自序

大通色生苦仕多伊子。曰夫大門格子外而。諸客爰入門也。於今老乱。色仕者可見者。則此邊存茶屋也。而損毛是智。客者必於爰遊。其上膳不喰近。間夫無話。忍男無事。不可思事。記ことしかり

卯の行冬

柿落の柳庵述

假根草

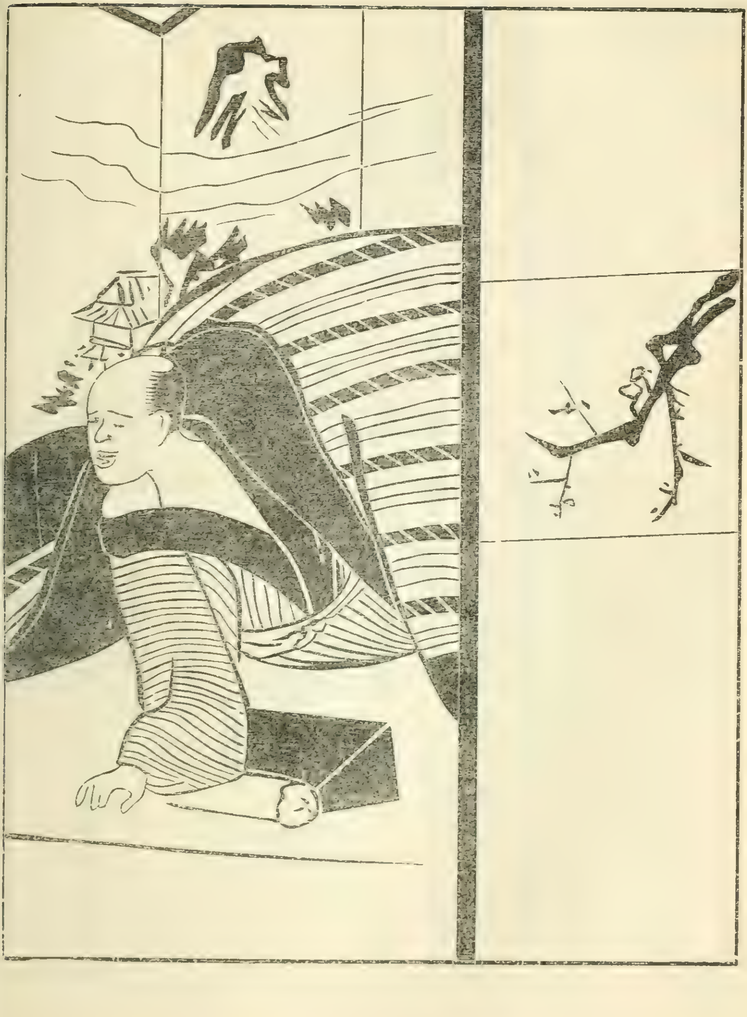
惣目

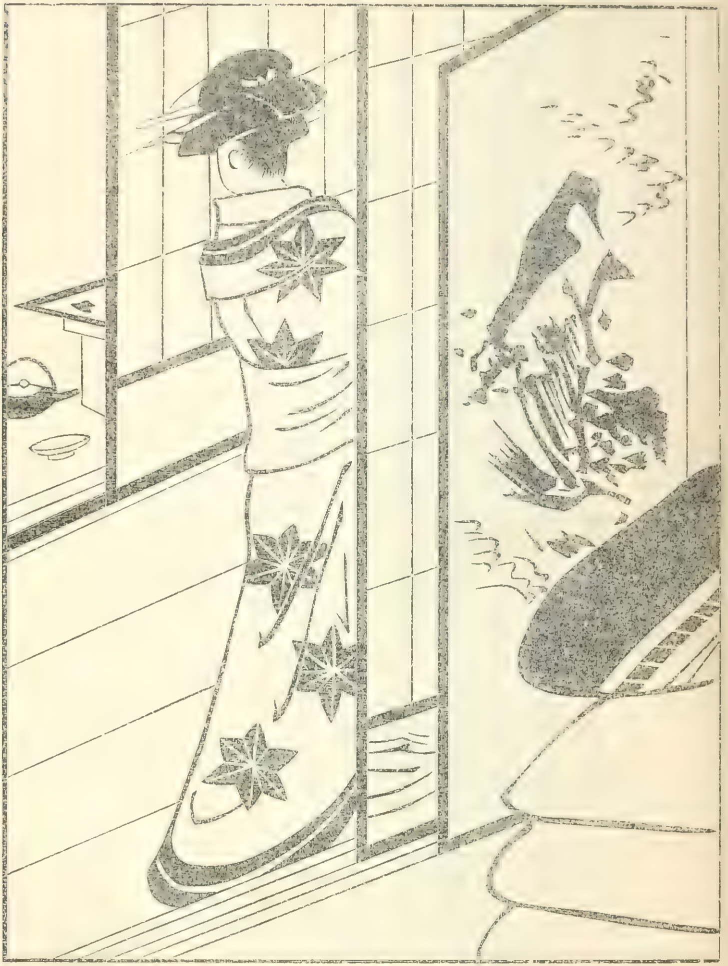
第一回　三子草庵結夢
第二回　三子東深結妓
第三回　三子結睡眠嘶
以上三偏

三子草庵結夢

月代は剃たてをいやしめ。大髮は田舍者と呼。短羽織は山家の猿と笑ふ。數寄や足袋は武左のめ印となんじ侍るも。時花行人ごゝろならんか今わむかしとなん。東府の西。山の手の邊りに如東と呼べる男の有ける何を世渡りの種といふこともなく。凡三百六十余日明暮月花を供とし。又有時は北郭南驛あらゆる花街青樓に身をよせ。今樣の異氣人といゝはやしける。頃は初秋の末つかた。朝な夕なわ殘るあつさの。苦勞もなく垣根にすだく虫の音もいとさへ／＼しく雲霄ミとして月東海に登り庭前白晝のごとく秋風の音信もたへて樹木の影畫る風情。心しん／＼とすみわたり。淋さのまゝ。長うたのそこ爰を。小音にぎんし。打臥ぬる折から。表へ。【里風】如君御在宿か【如東】どなただ（ト起て見て）里風師よく御光臨だ。サア／＼あがりなせい【里】ハツ何を一ト人すましていなさる【如】いゝ月だから月見をしていやす【里】すさまじいの倭哥といふ御心か【如】ナニ今の浮世はしよし狂哥の事サ。夫さへもわつちらにわ。ならづの森だから。一口ツヽも長うたのにた山をさへづるがいゝ引サ。貴公杯のよふな。大宮人のなれの果と

ちがふて三十一もしなどといふ。雲井の人のもてあそびハ出來やせん【里】さよふサなんぼ今宵の月がさへたてゝ。きつひおてらしだヨ【如】夫でも此間貴公の婦人がそふいつたッケ【里】どふいうたへ【如】里風さんハ折ふし上がた言葉をいゝなんすいつそやハらかだヨといつたとかく貴公はヱハッといふへんじをするからだろふ【里】せひもねへもんじや【如】そのもんじやかわるいヨイヤほんに貴公蕎麦は氣なしか此間むかふの鰻やかしもふ跡へ手打信州生蕎麦か出來たいゝ器物をこしやす異氣な道具をもつている【里】わつちやアとんと麪類はきんもつサァノ拍子木ハ左ッか【如】ナニありや用心のサ　ぜそのよふに隣の地藏だほんに市がいの講釋ゝわはじまつたか【里】左よふサぜん座か漢楚で後座か岡からじやといふ噺じやかまだきゝやせん【如】講師ハたれだ【里】たしか隨秀とかいうたヶ【如】このはる麹町で三國志をやつた男だ神道のこふしやくもやるそふだわつちやァ去年小石川邊の御やしきでつれ〳〵のこふしやくをきゝやしたがいゝべんたつヶ【里】左よふサちか頃ハおふきに名か高くなりやした【如】きのふおめへどこへいきなはすただいぶおそくけいつたの【里】芝口迄用があつていきやしたからかいりにむかい丁を一切かわかしてきやした【如】ヘヱ人りはあるかヶしよじ高らいやおやこ大和やでもつた芝居だ【里】さよふサなんでも時代とてなんぼ音羽やがいゝの　なんのといつても高麗





藏がいきおひにわかなひやせぬ今でハ若手の立物ャ聲のかゝるといつてハおそろしいもんじや【如】ごふぎなもんだつヶ高麗がこの前頼兼をした時なとハよかつたなんでも當時ハこま八百藏雨中富などゝいふものャまた古人正月やが定九郎などゝいつてハはらハ立給ふな上ミかたにもあるめひおとゝひの晩も錦公が所でこまと正月やが桃の井と本藏か懸合をつかつたが娘ッ子などのこまを嬉しかるといつちやァとんだもんだ子男冥加にかのふとやつだ【里】そふサ子ちつとあやかりしはいとしたいもんだぞハヽヽヽほんにむかひうらのかこひハうつくしひもんじやけさせんとふでちらと見やしたかきれいだ【如】ナニ面ばかりで張子のだるまた少しつかませると打石の火よりもはやくころひやす雪のはだへをあらわしてはしごへのほつた女だもの如才はねへ【里】はてなそれならよい御守が赤坂邊の御やしきからでるに朝夕首にかけさすればよい【如】なるほとこりやいちばんいゝ　と二人咄しの折からうかり〳〵と【門兵へ】のおそまきだいのいきすぎ眞おかのあひさび小もんの二三度せんだくしたやつにあいびろうど八丈の帯の刀のあたる所少しわたのでたをかいの口にしめ細身の脇ざし斗きめ髪ハ中たぶさのはすがけ　如東さん内か【如】門さんおいでなせい【門】深草うちわてこしから下たはらひ　いま〳〵しひ蚊だ【如】うるさくやぶ蚊がでやす【門】何かしめつたおはなしじやァ子【里】ヤいらつしやひ　トおきなをる　【門】コレ〳〵里風師てふかたくてわよわり大根だなんにもかまわづの池とするがだい〳〵【里】へヽヽヽ【如】ハヽヽヽ門さん此間ハおふきにありがとふ【門】なんだつヶの【如】か

の一件について毎度御家來を【門】ヱ、なん時でもどふでひまでいるからつかひなせひとふだ里風さんおもしろひお咄しもなしの與一か【里】いつこふサ【如】ナニ門さん眉につハをぬりなせい新宿なとでハ紙に血が付やら腕にほりものかてきやした【門】フゥどふりて顔がだひぶ八瀬の里がよひに身か煎豆の花ざかりハふとゞきなすびのしきやきじや 下手まいちやのしやれにて外へハつうじかなくては分らつ 【里】こしやくなことをいふ とゑんひなからわざと そふいう注文があつて見たがいゝ夫こそひとつはまりの天神とやつてミるけれどこつちハする氣てもあつちがふせふちだからいかぬやつさそふいうおつやいわ門さん抔のよふなむす子株で其上異氣てよくわかつたものでなくてハ女郎を片息にわなりやせん 正月さいへの錢相場 といふ口上にふ わさとのりかけて 【門】きつひおなふりだのわつちらァそふいふまくハなしさどこへいつても神ぜんのすゞサことしで三ねん女郎かいをするがおつとおつやひのよかつたハ門山口の睦山になじんだ時と半治松葉やのいやひと東字やのひゝかしとそしておふ木やの玉扇サわつちも【里】へヱ【如】だごひふへやつくわい【門】わつちも玉おふぎにハ大はまりサまづ大一面が美と來て手がきんとおりお其上氣だてがよくて誠をつくすといふもんだからいかな通といつてハおかしいかわつちがよふなやぼでもおろくなるはつサ【如】さよふサ などゝ折よねむたまきれにとはふもないへんじする 【門】五十會斗いきやしたがわつちが身を切たのハ三會目の床花ぎりサいつたいそれさいひど工面ていきやし

た所がきいてくんなさいこんな面らにどこをみこんでよんだかしらぬが三會目の晩にけいろふというのをむりに居つゞけされわ、しにおふきにごふさらしサ【如】【里】フウ、、とおもしろくもない噺しにたいくつしへんじもせずうつら〱と眠るをしらす【門】懐がいつこふ薄雪せんべいといふもんたからいたさもいたし有よふにいふもけいぶんがわるし大ふさきサするとはや夫をさとつてぬしやわつちがうるさくおすかへなんぼわつちかしがなくつても主にくろふをかけるやうなことわしやせんほんに男のなさけこのよふに氣づよいのふとちいさなこゝろで人の見ぬよふにわつちがこしをつめるといふ仕打サそこでわつちもぐつとうかれ烏のかわい〱くなつて來てサア夫から内へけいつてもこゝろこゝにあらされはうちのものは見れども見へづくらへども其茶漬のあじしらづといふのたりで人がものいつてもとほふもねへへんじして笑われるやつサ トこふしやくのけいこふをするよふにひとりしやべりまはしている内ふたりはいつかたくねいりグウ〱〱ウ〱の高いびきへんじなければ よくねるものだコヲ〱おきねへ〱風引よヲ、、おきさつし トゆり起し〱すれども アイ〱〱フウ、、〱 なるほどよくねるもんだ トあんどふの火でたばこを付手まくらにちいさな聲で 〽更てきぬたのおとさへゆかし。おもふ男に山鳥のと トやりかけていきつまり 「アヽ〱大あくびといゝ月だとともにまどろむうたゝねのいかなる夢やむすぶらんありし座鋪のいつしかにかわる浮世のありさまはうゐてんぺんの廻り來てきのふ花美をつくしたるふん樓もけふわ一時のほのふにうせて末定なき川竹のながれのすへそものうかりけんといとゝあわれに覺し折か

ら所ハ東都辰巳にあたつて目なれぬ婆家の二かいに伏ぬると夢うつゝとなくおもふ折しも御用心さつしやりましよふチリン／＼／＼／＼鉄ぼふの音ハとりもなをまづ引ヶ四ッすぎとうちともしぜんにしん／＼とものしづかなるおり／＼にどふ／＼／＼といそうつ波の音のみかすかにきこへ爰かしこもむつことのもなかをつゝむしきりのびやうぶらう下もしべしとだへして上そうりもあゆみをやめ手水どころのともし火も細／＼と見へ草木もねむる牛水過はるか奥座しきに手の鳴音パン／＼／＼ねづの新造か目をこすり／＼アイ、、、、

三子東深結妓

【里】コ手めへ茶をひとつくんで來てくりや【新造】アイぬしやよくかわかつしやるヂ（トおきて火入のうへ入れて當て出て）ろふかへとん／＼いて行跡へ【うれざく＼】（せふじを少し開てかほ斗だして）もしはいつてもよしかヱ【里】たれごうわさ＜きさんか【菊】アイ御しげりかへ【里】ごすいれふの通りサひさしいもんだ（ト帰風はる）【菊】ぬし斗か【里】いま火を取にいつたこよごはだいぶげん氣がいゝの色男でもきたか【菊】しりやせんにくらしい【里】コミゝだしな【菊】アイト（うなづきうなかへる）【新】（茶と火をもつて）モシせふじをあけておくんなんし【里】なんだ【新】手がふさがつていゝすものを【里】ヲイ／＼おかたじけ

（ト茶おくつとのこアヽいゝきみだ）【新】あんまりさゝをあがんなんすからのとがかゝきいすヲ、さむうおす子（トよきた引かけ手まへむきてねる）【里】今度ハ町も向嶋へかへるといふこつたがそふか【新】どふざんすかしりやせんヲ、いつそ寒ひ【里】なぜそのよふにさむがるおらァあつひぞ【新】うそをつきなんし【里】フゥそんならあゝくゝてせ乃小【新】あれ而お待ちなんせロヽそぐつたい【里】なぜそのよふにいつ迄もわらべしひおふきなりで【新】夫でもはづかしうおすわな（しバし咄もとだへして）【新】ねむくつてなりいせん【里】ねるがいゝく〱（トうしろむきねるふりしていると新そふまきそ〱ねる折ふし）【菊】（らうかをとん〱ときてひやうぶの外に立とゝまる）【里】アハンく【菊】モシはいつてもよしかへ【里】なんだかおつにからくむの【菊】ぬしやなぜ氣のふおいでなんせなんだ【里】ちとこられねへ譯があつて【菊】その譯ハへ【里】きいてなんにする【菊】ぬしやまたなぜかくしなんすヱ【里】（笑ながら）よく氣をまハすもんたぜ氣のふ芝へんに用があつていつたがどふした【菊】嘘をおつきなんしきのふ若ひ衆が堀で見かけたといゝやした【里】フゥ夫ハなにサ嘘もなんにもつかぬが妾の内が堀にいるとおもふたからいつたのサぜんてい四五日いぜんまで堀にいたじやねへか【菊】夫がぜふならよふおすがどふもこゝろがすみいせん【里】やほなことをいふもんだねつからわからねへ何がすまぬまた客がやかましくいはふまあいくかいゝ【菊】アイおしやまになりいせふがちつとのまおいておくんなんし【里】そん

なさいつまでもいるがいゝがやかましくいはれぬと氣のとくさに【菊】ぬしやきつひくろふせふだれもしこの子をともす氣か【里】おもしろくもねへ【菊】それだつてもぬしがぬしたから【里】おれがどふした【菊】ぬしの事(こと)をこの子がいつそ【里】なんといつた【菊】かわいゝとサ【里】おきやあがれなにそんなことをいふもんだまたいつかふの子供(こども)だ勤すればこそ素人(しろふと)てきたがいゝ色事(いろごと)とわなんだかしられへ年(とし)だ【菊】左(さ)よふサしられへとしだとみへてぬしやみれんをだしなんせん【里】わるひ酒だよいかげんにむだをいつておきにしろ子供のしよふこにわこくうとれるかわひそふにらくにねかすがいゝ【菊】きつひお心づかひだ（ト甲風が紙入をとりにかゝる）【里】何をする【菊】ちよつとおみせなんし【里】この内にわ大事(だいじ)のものがある【菊】その大事のものが見とふおすおみせなんし【里】みせよふからマアちよつとよこせ【菊】アイそんな手わたべやせん〳〵うわ菊さんエヲくエ【菊】それよぶじやアねへか【菊】じれつていのふなんだエ〇お客(きやく)がいつそはらを立てけいるといつていさつしやる【里】いまそけへ行（トちいさなこへで）けいるといふならけいすがいゝすかれへのふ（ト甲風がことの心ならわハ）【里】アヽあぶなひ目にあをふとしたノとりやとろ〳〵とやろふか（[illegible]ハ勿論）【折鶴】モシエ〳〵なぜそなへにねなんすくそぐりいすヨ【如】アヽゆるしてねかしてくれ【つる】わつちやアいやでおすよさみしくつてなりいせん目をさましなんし

【如】モけいるじぶんか【つる】ナニまだおかへりなんすじぶんでれおつせん【如】よふ／＼目おさましアヽなんだかいろ／＼な夢を見た【つる】どんなゆめを見なんしたいつておきかせなんし【如】とんだ夢サ【つる】もふぞふとやらかい【如】もふそふかこもそふかしらぬかなんだかうら山しいゆめだ【つる】はなしておきかせなんしナ【如】よそふ【つる】なぜへ【如】はなしたらおめへこまるだろふから【つる】アレサはなしておきかせなんし【如】そんならはなそふマアおれがこふきた所へおめへの色がきた所がゆめのはじまりサ【つる】ナニまたうそをおつきなんすわつちらがよふなものに【如】ないといふのか夫でもあると見へて今ゆめに見た【つる】そんならあるでおざんせふおふかた名れと如東さんとかいゝすか【如】ナニそんな名じやねへがなんだかいゝ男サおめへのほれたもむりじやない【つる】アイわつちらがよふなものわそふいつておなふりなんしにくらしいトつめる【如】アヽいてへおめへあかしれあるし門おかへすることわねへどりやまたうら山しいゆめでも見よふず【つる】ぬしやおどけだとおもついればほんにわつちをうたぐりなんすか【如】ナニうたぐりわせん夢でも見よふといふ事サトわざと心を引【つる】少しうるんでぬしやおつなことをいゝなんす子ぬしを見かへて外で色をするよふなわつちがこゝろとおもひなんすかなんぞ希のふやけふのなじみといふじやおすまいしそんなあいそ

づかしをいゝなんせづとぬしのこゝろにすまぬことがおすならなぜこふだとうちあけていつておくんなんせん ト なミだはらく／＼ 【如】 すこしひねつておふきにこまり もふうたがへはれたなんにもなく事ハねへやぼらしひわつちがいつたことはらがたつならかんにんしな【つる】ぬしのうたがひさへはれひすりやよふおすがいまのよふにいゝなんすとわつちやァむねがせまつてつひしぬる氣になりいすほんにこふつとめしてかなしひはかなひミのうへなれハおふくの人に身をけがしてなさけらしひかほすれとほんのつとめの座しきなり末〻までもとあさ夕に力におもふハぬし斗でおすとゝ深ハぬしもしつていなんすとふり去年のくれなくなりなんすかゝさんといやァまゝ母なりいまぬしにはなれひすとわつちやァしぬるよりほかにしあんハおつせんわつちがよふなもののぬしのきにわいりひすまひがいま申いすとふりのわつちだからどふぞ見すてゝおくんなんすな【如】ナニ見すてゝいゝものかもふ來年の暮ハ年あきじやねへかそふすりやすぐにナがてんかすもふこんなはなしやめにしてひとつのもふ ト こふし引よせわんでくつゝ引かけ アヽたいぶ寒さが身にしむ明がたと見へる【つる】わつちに一口のませなんし ト くつとやつてむねをたし下 ほんにさむうをす風引なんすなへとふも假宅の不自由といつてハちよつ間する事もなりやせん【如】いつ頃引越つもりだ【つる】ナニまだなんの咄しもおざんせんがどふでことし中でなくてハ歸れいすまひ【如】そふだらうとり

やちやふづにいつてこよふか【つる】わつちもいきひせふ（見すがみお手に持そへ）もしこちらでおすよ【如】おいそふだつヶのこの頃とわかつてがちごふたよふだ【つる】このあいだのおもてのかたヾからそれでサ〇かゝるせかいのある中に引かへこなたのこわ高に（手をたパン〳〵）【ふり糸】アレサ手を打なんすなばからしひよふがおすならわつちがいきひすなん時だとおもひなんすやがて鳥がなきひすわな【門】鳥がなこが手をうとがてめへが世話にのならぬ打やつておきにしろまたよくつもつても見ひひとりねるくらひなら一チり二りこねへでもねられるァおもしろくもねへなんぼ野郎のちひさくつてもわいらにあしくされるよふなやろじやねへいゝかとおもひあかつて【いと】そなへ口きたなくおつせいすことのおつせんわつちじやとてつとめんではおざんせん【門】なんだつとめんではないフゥよぢうきやくをひとりおくがこゝのうちのふんばりのつとめか【いと】ふんばりとへヲャなんのこつたェわつちが中いすののつとめる程わ勤たといゝすのサなんぼ客衆がおすとてよふがありやちよつとやそつとわいきひすのサそれだからさいしよちよつやつておくんなんしと断ていきやしたそれがどふざんすへばからしい【門】なんだ小言ぬかす事わねへ雨あがりのけいる見るよふなつらをしてマァうぬがつらをミひしろいぬのにごり酒によつたよふだ【いと】おふきにおせわだチぬしやものづきな人だよわつちがよふな女郎を

〔門〕なんだ女郎女郎もくそがあきれるァよたかといつてよい風だ〔いと〕ヱそんなら主や折介だチげいぶんのわるひ〔門〕なんだこのふんばりめが耳のやくだとおもつて出るまゝにいわしておけはいろ〳〵のねつをふくわ〔いと〕それでもよたかを買きやく衆なら折介とやらじやおつせんかへ〔門〕へらぼふめ折介ばかりよたかをかうか〔いと〕とふざんすかしりやせんがよたかハ折介のかうもんだといゝやすからサ〔門〕ぐつとはらがたてど言こめられてせん方なくうぬふてひやつのとトすでにあやうき其折から中風如東きたる〔如〕門さんどふした事だ〔門〕うちやつておきなせひわつちがれふけんがある〔里〕しだうハきいたマァおれにまかしなせひわるくハせん〔いと〕けしからんのふト下へゆく○跡に三人顔見合あきれ果たる時しもさつと小夜時雨の音におどろき三人が目を打さませハありつる座鋪に假寐のゆめあたりハしん〳〵ものすごく夜もはやいたく更わたり月もいつしか山の端に隱れたもふに燈火もいとゝかすかに消てまたくわつとひかりを知死期時三人一チ度にくつさめあかしもこハしやりなむさんぼふとあるじの如東手元の火打カチ〳〵

三子睡眠結噺

其夜も既に牛ミづ過遠寺の鐘のおりふしにゴン〳〵〳〵またも木末に音そへてさつと降くる雨の

あしひとむらしげる草むらにおふくのかわづなきつれてふりくる雨をよろこぶ音いろ門兵へすつくとおきなをりアヽラふ思議や今すいめんにいづくともなくひとつの娼家にいたりしが時雨のおとにねむりをさまし睡中のことどもおもひまわしきひのおもひをなすおりからいままたしきりにふる雨におふくの蛙の音をはつし降をよろこび其音色はとりもなをさづすいめんの我身のうへのありさまを見するはきつくわひィャいまはしの有様やナァ【里】我もおもわづ手枕にまとろむとなくうつゝとなく是よりはるか辰巳にあたり目なれぬひとつの青樓にたはむれあそぶ遊君のこゝろもいとゞ深川とすいさつなしたるそのひとつは磯うつ波に千鳥なく聲のかすかにきこへしがゆかしき君にたわむれてこゝろ時めく閨の中また夜は深きとおもひのほか別れをつぐるかねのねにむなしくおしきかんたんの夢を覺しておもひをのこすはわか戀の叶はぬしらせかハテざん念やナァ【如】さてはふたりのゆめものがたりきくもあやしきことなるかな夫夢は五臓のわづらひこゝろにおもふことあればかならず夢に見るとかやそれは世説是は目前【門】すりや貴公にも【如】いかにも所は名にほふ深川のミたりが心の中町にしばしすまいを假宅の【甲】其所こそ兩國とおもふにたごふこよひのゆめ【如】かはるは則夢空事所かはれど其ぬしのかはらぬはたゝ葭原の君か言葉も夢ながら【里】ほぐにわならぬけいせいの詞もおもき古石場【門】

ふるもふらぬも【如】かくとだに【里】いはれぬ一チ座(さ)の咄(はな)しの合の手【如】【里】【門】あわ
ぬれたがひのむねの內【門】あけていわれぬ【如】この場のしき【里】ハ、、、、、しからは
お休(やすみ)また明日(みやう)【門】わつちもいつしよに如君さらば【如】お休なされませ○戸口のかけがねチ
ヤンとりや休もふ哉

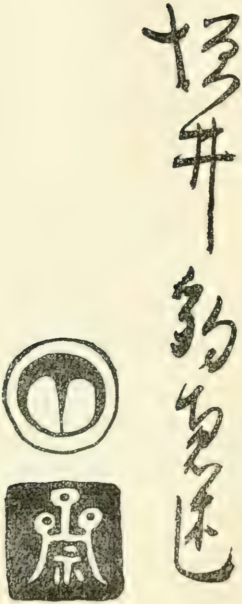
跋

柹降の庵主假根草の作あり假根の夢の眼覺に熟是をあんずるに殆作境に入がことし角の取たる容八の三角ならぬ三容の閨の手管の所作ごとは切の幕に明らか也五ツの街の假の賑ひ其繁昌をあらハし衣のひとつの卷をもち來て書林の翁頻に跋を乞辞せすに請むと盃を取あけなから滅たにしるす

廓の池好

序

周茂しゆく池に咲ク蓮を愛すれば華手に有ル二月の雪に續うてば色男裾ニ滿いづれ樂しこのひとつなれど堅なとか通に勝らん池通大ィなる哉海道に色容の鶩たへず坐敷に三弦のやむ事なく勘當うけて女郎をたをす大通あれば金出して茶にされるへんてこ有リ昨日の入組にけふの中直し立て行客おりる客あたかも湖水にかもめのごとく浮ひてくらすが氣のくすりしるも知らぬも皆池〲とすゝむることしかり



白叙

それ愍婦をお敵と稱ゆれば宇治川はさし詰いろの堺川吾劣らしと押渡る池鯉鮒の驛に鞭うつて先越す梶原おくれぬ佐ゝ木高名あり恥辱あり通と不通の心の手綱しめつ兎めつ娼妓の不實と誠の鞍味じを此小冊にする墨のくろこをつゞりて廓の池好と嘶かしむ

寛政八

御存誌

入相の鐘も程なくつげ渡る鳴たつ澤の秋の比駕は東へ足早ニ夜寒（よさむ）の里（さと）もいつしかに中の大疵（シ）が胸の内名染（なじみ）なきゆへとやかふと心はすこし戻り駕（かご）ほどなく池の御殿下於行が茶屋に着（つき）にけり

「かご」旦那さんじましたぞへ（トかごのたれをあげぞうりをなおす）「大」（すかごを出て次の間へ上ル着ものハかわ鳴帯ハ黒びろうどとうのこしすれの當りたるたばこ入も同じひろうどに表ハ紙ぬめ也あたまのわけハ當流の二ツ折廿三四色ぐろの男なり）「女房」御出なされ「大シ」アイ「女房」お茶おあがりなされ（ト出ス）「大」アイ（ト）ちやを手にとつてもふなん時になろふな「女（にょう）」ハイサもふ七ッ過てござりませふか「大」ハア是御しんぞゼにを貳朱がおくれ「女」ハイ（といふて四文せんに小銭をまぜ貳朱ふんおもつて来て渡ス）「大」サア駕の衆たいぎ〱「かご」ハイ（ト手にとつて）もし旦那とふぞ一ぱいのませておくれの「大」きれめの通りやりやろふいじやないか「かご相ぼう」早かつた替りのましておくれ「大」（五十斗ぬいて）それ〱「かご」（ハイトとつて）旦那もちつとお頼ミ申升「大」エヽそれでゑいじやないか「駕」（ふせうぶせうに）左様なら御嬉嫉よふ（トいふて行）「大」たいぎてあつた〇時に御しんぞふ酒（サケ）壹ッかんしておくれ「女」ハイ〱なんに致しませふ「大」なにがあるな「女」ハイお肴（すバしり）の煮（に）つけとモウ跡ハいもでござります「大」そんならすばしり壹疋と酒貳合斗りおくれ「女」ハイ〱（ト程なふ持てくる）「大」（壹ツぱいのんで座敷へ行き着ものをきなおし両袖へ手を入レうしろむじむきおれ程の物ハ有まいといいふ身でうぬぼれ鏡也座敷より）サア代ハいくらじやなと（少し伊勢詞遣ふやつ也）「女」ハイ〱御肴が十六もん御酒か廿四文でござりまず「大」アイそんなら取て下され（と手前に銭つき置）「女」ハイ〱おゆるりと御休みなされ「大」

アイ といゝながらおさこへいづる【女】さやうならバまたおかへりに【大】ア、御世話でござりました と金澤(きんたく)さして行にけろ これ〳〵印あれはハヽア貞ハ帰やあちらハたらはなやと一人リ口をいふ ○ しばらく行きのうれん行燒に印あれバ【大】さいと頼申ますわたしやなごやでござりますがおせきさんはお内に御出なされますかいナ十穴(とけつ)がおまへさんへ行ケと申ましたでさんじました といふて庭に立ている 店番【末】あたまをかんざしてかきながら出て來る おせきさんは今留主じやがなマアお上りな○子供さんお茶あげなされ おやまは指けろ〳〵と大鼓(こ)かかほをながめる【末】是しサアこちらへおいでやれ とおくの拾貳畳のさしきへつれて行〳〵大鼓か與へゆく身はなんの事ねへ役者の縁(えん)ゐり といふものさ【末】十穴といふは其へはなけれとあわせてかくいふ 十穴(とけつ)さんは此中はどふしなさつたな【大】ずいぶんまめなければどあれも此ごろは茶湯(ちやのゆ)や俳諧(はいくわい)に身をやついてよふでかけん【末】それはきつひこりよふじやなりつと氣ばらしにお越なさるゝやうにお頼申ます【大】ヲ、サのミ込山〳〵 トいろ〳〵まだ火ぶたといふ事あれど略ス

【末】おたばこお上りなされ トいふ〳〵すへは奥へゆき女郎衆の傍で異しゆすいぶりのはつれをむしり乍 コレお重さんおまや十穴(とけつ)さんといふはどんなおかたじやなおいらさんおまへもお知りんかナ【兩人】イ、エわしやしらんがな ト兩人はふみをかきいる

【引こ日】此十穴といふはやう〳〵一度斗りもたまに此いけへ來た客なれはたれも其へはないと見へていつれも知らぬ也其内大鼓は座敷にたはこをくゆらし霞(かし)ぎせるをくる〳〵まはして居る【末】座しきへゆき

是お客さん○おせきさんはな木綿やへ今(いま)しよびにやりましたでな【大】イヤ〳〵それにも及ぬ〳〵【末】しかしあの人さん性悪(わ)るじやないかな【大】少し腹をたちて イヤ〳〵そのやうな者でなしも

のでなし【末】ヲホヽヽヽなんの事じやなヲホヽヽヽ トうちわらひ口へ袖をあて大臣か貞を詠め是へいつこふやぼと見ゆるとわらひにする【子供】しばらくすぎ朱ぬりのとさんに盃をのせ持てきて跡から銚子すゞりぶた追ひ／＼持てくる【末】一ツのみなされナ と盃を出ス【大】一ぱいのもうか と末へさす【末】アイ とのみ盃事するうちに程なくおやまへれいの着物を引ずり大臣が向ふへ【おやま】よふおいでなんした とこなくすわる【大】すこし氣おくれ貞にて立ひざをなおし氣遣ひな所へ來たやうな心持にてしば／＼おやまの顔もえいながめず盃ハ手前にあれどどこへさすがよかろふと腕の内ハどく／＼と早鐘なれどそれを見せまいと盃をまづおまへと中居へさす【やまの】たがひにつゝき合耳のはたへ口をつけやぼじやそなといろ／＼つもつて居る【末】のんでお重さんあげるぞな【重】アイとのんで これしあげるぞな ト大臣へさす【大】おれに氣かあるそふなハイと盃をいただいてのミそれ／＼さかつきもすミ【山をな／＼】御あそびなんし と皆／＼ゆく【大】やぼゆへ大臣ハミな／＼立てゆくゆへ是ハどふしたものじやと思ふて居ると【末】出かけ來て是シ／＼お客さんどの子じやな【大】ハヽア聞へたりとおもひ 氣ニ入たのハこちらから貳枚め【末】あれハお重さんと中奸あの人さんかな【大】あれじや／＼ ト末ハ部屋へ立て行【末】是お重さんおまへじやげなサ早ふゆきなされ【重】いや／＼貞をしてわしかナァとお重ハ部屋から來る○お重ハ脊もひくからず高からずきりやうも金澤の先生也しかし九十の親仁にて少しいきす○御さつし然れ共まだ十七八なれハ追ゝ直ろふぞいのと言て【重】座敷へ來て子飼のそばへ すハる【大】よしおれが望みハあれと思ひ盃をとり上げ そこな子一ツついでたもれ【子】アイ／＼トつぐ【大】おつときた などゝすい詞をいゝ一寸盃もつにも氣持ばかりで何するにも胸のわるくなる仕打ばかり也【外のおやま】いやながらも酒がのみたいゆへ皆／＼つとめに來るやつの【重】是子飼さん三弦もつてごさんせ【子】アイと立て行【大】三味せんよかろふ と子かい三味せん持てくる【重】取て二上りに合せれいの岡崎ぶし

哥〽可愛男ハナァ十日に一度っくにひやつめハ日に三度／＼ トあてこすりうとふている【又外のおやま】〽壹把わらふどナァ身はかるけれど。諸事ハおまへにひかされて／＼〽今朝もみかきナァつく／＼見れバ。

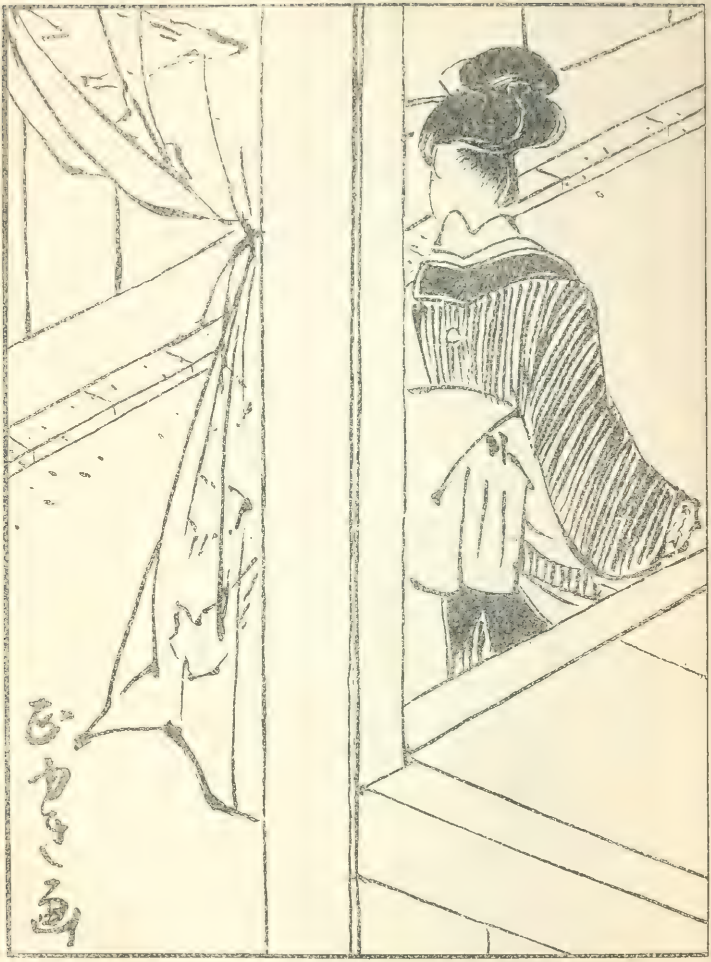
いつか動のもしやら〱へせかれせかんせナア勢(せ)ぐわりよ儘よ内で合ねば外であふ〱へ年(チン)

と今宵とナア取かへほしやながしみじかしまゝならぬ〱

トとなく〱日ヶ暮へて黒ふて いる所へ田舎者の客と見へて 【巴上】 世話者にかや島の羽織着ハねずみごろうたはこ入は縮入しい見へてまづ優に見へす作の出ハ世間の出なり 【末】ヲ、巴上さんおいでト言葉にてはおし川べりらすえ 【末】一寸お重さんお出なされ【重】アイい何気な行すく【末】これ巴上さんがお出たがな【重】えくぼして祭前手前にすた言なれバ乗たつやふにはトかすこやお巴上さんよふ御出なんした【外 おやま】久しぶりてお出たな【巴】ヲ、どふじやナト雪へゆき今夜ハきつうきやくかあるナ。そしてあれはどこのきやくだ【重】あれハなごやの客しゆじやがな【巴】ハア、そして今夜ハつもりハどふだ【重】アイとたゞうつむいて居る【末】中(ちう)よしじやがな【巴】むつつりとカホした自てそんならよしもふすぐにかへろふと立にかゝる【重】なんじやなナ、そ行のじやナト袖を持ツ【巴】ヱ、おきやがれとふりはなしはかんとするを末引留メ【末】なんだまたきれいのかんしやくかな久しぶりもんだおきなされト両人してむりむたいにはからする【子供】巴上さんお風呂をおめしなされ【末】ヲ、幸ひまづ入ゝなされトむりに引立風呂場へ付やる【巴】ふつなといつてこまつでふかト巴上もよきにはにつれたして何がく日にて花言云【末】おゆるりとおめし被成ませうト風呂へ巴上はいる【下女】ほうにたべすみ合でお風呂のお加減ハどふでムりますト【巴】至極だ〱【子】トゆかた持来て風呂をすすみ【巴】まづ風呂もいつたハといふもんじや【子】下にとてう〱硯ふた〱おいゝネ【末】巴上さんサア一ツのミなされ【巴】いや〱かほにて一ぱい引うけのむ【おやま四人】おはつ おふと おこと おたさ 四人

廓の池好

八



追ひ〳〵に來てさみセんを引かける【巴】風呂上りに子飼かくんで來た茶わんを取あげ サァおすミ是につげ【重】ア、すミさん夫につくじやないぞな【巴】ハテゑいハおれが口で呑のにいらんお世話だなサァおすみ早ふェ、と【重】茶わんを引たくる 是でのみなされてよい物か 此内吞吸もの與右出する【巴】そんなら是で ト吸物わんのふたをとつて サァそんなら是につげ〳〵【重】是もとらんとする【巴】おきやァがれいま〳〵しい ト手前に銚子をもつてつぎにかゝるを【重】ゑいかげんにおきなされと いろ〳〵もみあひてうしを吸物椀のふたもとるお重てうしかさ後口へかくす事あつて此所大騒キなりじゆ〳〵手くだ仕打とふ多けれど爰に略ス〇もはや時刻もふかくおよへばとこもかしこも酒ハひけるなり【巴】手をたゝく【子】アイ引ト來る【巴】是おはまの茶を一ッ持て來てくりよ【子】アイ ト茶を汲ニ行すぐに持てくる【巴】コレはまさ困あげはおれかしてやるぞや【子】しらんかな【巴】しかしもふすんだか トいろ〳〵なぶる 〇爰に大疵が坐敷ハひつそりとして子飼と貳人ニ成り居る所へ中居【末】申ァノ人さん【大】なんじや【末】アノナはじめてじやで申にくいがお重さんを宵のうち斗りちよつとかしておくれなさらんか此中な入ゥ組のきやく衆が見へてなこんどは中直りじやによつて出ねばどうもならんさかひごむりながらお頼申上ます トかねて重が口にふくめて置た事なればひらにたのむ【重】これしどふぞおたのみ申升【大】始終かんがへていて そんならゑいは其替りはやふおいでへ【末】アイ〳〵そりやこゝろへましたじきによこし升はナ【貳人】騒へ來て顔見合汗を出している【重】巴上が座敷へ來る【巴】コレサお重あちらへゆかぬか大事のお客た有ふかな トいやがる事をしりながらいふ【重】アイゑいわなあちらハ

ことわりいふて來たハナ【巴】イヤ〳〵それでもいたがゑい【重】いやじやかな ゆれといしにかゝつていふ【末】巴上さんまふお休ミなされ ト床へおさまる【巴】こゝろうれしけれど顏にハ何やらすまぬやうに見セ △こいつだい手事なり【重】形りは縞ちり面のねまきに板〆のしごきに搭を手物いわすにだまつて居ル【重】にもち床へはいる 巴上さんなぜ其やうなすまぬ貝をして居るのしやナヱ、これし【巴】これしァノナ此中みあけたがな屆いたかな【巴】やう〳〵物をいふ なんといふふみよこしたそりやいつの何時によこした文のふの字も來やセぬわいそりやとこぞおかどちかいてあろふまづ〳〵ごはんじやうのていお目出たいハ【重】なんじやナまだそんなわる口をいふて ト手の平でたゝく【巴】何しろ〳〵 トたゝきかへす【重】イタ〳〵とこんどハつめる【巴】またつめりかへす【重】アタ〳〵イタイがな【巴】ヲ、サマア あきそふなものだおれもあいたわいわれが明たら手前の好な所へゆけ〳〵 トふとんをとつて手まへひとり着ている【重】コレ とふとんをあけはいろふとする【巴】また付キいだす エ、おもしろないおけわかよい所へゆけ爰にやどふあつてもねさす事ハならぬ【重】なんの事じやなわしかなんといふたなサァ言なされ トふとんをとりにかゝる【巴】エ、ヲケ【重】サァ言なされ。ア、きこへたさつきに脇へ行といゝなすたをわしが留て外へやりませなんだそれでなサァどこへなといきなされサァいきなされ〳〵【巴】ムツトおきて こんな所におらんでもずいぶんゑい何所へでも行 ともにいゝる【重】首尾の襟たらつて 今時分どこへ行のじやナ【巴】ハテゆけといふでおれが行たい所へゆくハ放セ ト少しかんしやくおこいて見せるお重着物のすそ持たなりにて引ずつて行キ【重】うそじやそんならあやまりました トたみだぐむ【巴】

一二

いや〳〵どふあつてもはなせ【重】あやまりましたかんにんしなされ トいふにかこつけ嬉けんを直ス 評曰なんの今時分どこへ行ところが有ふ是も大手事なり【重】なみだをふきながら まあよふきゝなされへ【巳】ヱ、聞たくないわい【重】マアきゝなされこよひはおまへ方先客があれどナしんじつおまへに出たいばつかりでナあちらの客ハ始メての事なればことわりをいふてひとりねさせてこちらへ來たものを其所もよふすいりやうしてみなされ【巳】ヱ、おけやがれうそばつかりを【重】うそか誠かいつて見なされ【巳】そんならまありやうけんしてやろう ト巴上笑ひ良出るお重ためいきしてそれからハたがいにかほと顔とお詠め合ハいま迄のしゆらのからくり替つて兩人わらひの極樂これなしばらく物語になり其時チウ二トいゝしはなんの言か作者もしらず ○父別の座敷にハ彼大疵只ひとり丸寐の床にたばこもはやのミたいくつしてマア來そふな物しやがとおもひつねては寐られもせず 小聲にて 哥へ胸にせまりし朝寐がミもはや命もしら雪のなど〳〵うたふ△となり座敷にハ あのふのきやく【八兵】【お市】アノナ先ころおかしてな【八】なんだ【市】ゑん州の人さんじやつたがなおまへじやと思ふておすへ末さんがわしが所へ八兵さんがお出なんしたといふて來たもんじやハナわしが飛んでいつてな八へさんよふお出なんしたと傍へいつてナ見たらおまへ方ちつとせも高し詞もちがふし是ハどふいふものじやあゝもよふ似ているおかたが有るものかとおかしいやらその人さんにはづかしいやら末さんとふたり大笑らひしていたがナそうして

ナ先の人さんもおかしな顔をしてこれハどふした物じやしらぬといふ先にもそぶりそのおかしさに跡まで大わらひしてナ【八】フゥそりやおかしかつたナそんな事はおりふしまちがいの有るものだ【いち】これしちつとこつちへよりなされ【八】エヽつめたい足だ人参のよふなこいつにかまぼこでも入れてのつぺいにシテやつたらよかろふナア【お市】なんじやナわしがあしをのつぺいにしてやつたらよかろふなアノ人さん鬼じやそふな【八】なんだおにじやそふなおにじやがさい所ハ風雅にいてゞだハイ【市】エイ口じやぞおまへ物もらひにあるきなんしてもゑいぞナ【八】これハゑい口すぎをおしへてくれたもふしおくさまなんぞちつとやつておくれなどゝ おどける【市】なんじやナすかん ト たゝく【八】それでもものもらいだといふだナイか其ものもらひに傍へよらずとわきへいつておくれ【市】そんならかんにんナされ【八】茶一ぱいぐんで来てもらを【市】アイ ト茶を手前ニ汲にゆき程なくくんで来る 茶はぬるいぞナ【八】とつて かぶ〱とのみ アヽよかつた【市】も煙ッあがらぬかな【八】いやもふゑい ト茶わんをころ〱まハして居ると【お市】きせるの先に紙を巻すい付てやる【八】スパ〱とのんできせるをかへす【市】灰てはい吹へこつンとはあけてすい付て手前にのむ【八】ムゥたばこで大ぶん口がすゞしう成たア、よかつた〇よかつたもてこい風呂いるになんと地口ハどふだ〇時にとなりの座敷にハ【大】首を長ふしてまあうせそふな物じやがしぎに来るトいふてうせたによつてマア来るてあろうと耳をすぼめてかん

がへている　此時ゑんがはの下戸の音かた〳〵　そりやこそ來たとふとんをかぶるアノ音もそでないかそれ方障子が鳴れバそれまたあま戸がなれバそりや來たとなんぞ化もいかなんぞのくるよふにしつかいかふはり番しているハじしん番に出たやうなもの　さ茶がのみとふても子飼ハおらずいつそ夜ハ明けんかしらぬなどとまけおしみをいふかれこれ八ッ半にもなれバ色里もしづまりて草木もねやまも寐てしまいおきているものとてハねずみばつかりしかしはぐろ壺にておきていやう程なく過きて巴上ハおき。【巴】コレもふおれハゆくぞや【重】まだはやいがな【巴】もうはやい事ハない七ッだあろふ【重】イヽエまだ早ひ〳〵　よ所にとりとむるこなし　【巴】エヽこれさもふはなせ〳〵きのふハ用事が山程あつたけれどぬしに合たさにとう〳〵の道を來た内へはやふかへらねとしゆびがわるいさかい【重】そんならいつ御出やんす【巴】いつくるとてそれか知りよか近ひ内ニ積りしてくるハ【十】そんならじきに早ふおいでへ【巴】ムウ【重】お茶づけ一ッはいあかつていきなさらんか【巴】いや〳〵はらハゑいじやずんどゑいだ【重】皆番をおこしに行　お末さん〳〵【末】フウ〳〵とねてゐる【十】コレお末さん巴上さんが御出やんすがな【末】目をすりこすりながら　【巴】かみ入レたはこ入よし〳〵　ト扶物をあつめ用意している　【末】座敷へゆきこれ巴上さんまだ早ひがナまちつと寐なされ【巴】イヤ〳〵けふハはやふかへらにやならぬ【末】そんならお茶づけあがつてお出やれ【巴】腹ハゑい

だト【巴】上いろ〳〵帯をし足袋をはき紙入を懐へいれ末ハ茶をもつてくるうち何かせはしく【巴】サアゆくぞや【重】【末】武人リハ送つていで表のくゞりをぶら〳〵【巴】マアゑいハ歸らまいか【重】もちつとおくつて行ハナ【巴】サアマアよし〳〵かへれ〳〵ト言捨つい〳〵と行貳ハ見ゆるまで立ている【巴】ふとむいて見とふりあれどまつハ早くと我家をさして行にけり【重】【末】兩人がかへる道〳〵の噺し【末】こちらの客ハとうしなすた【重】それなりにしておいたわナ【末】アノ人さんなんでもものしりがほのすかん人さんじやナ【重】それサナすかんナマアイやじやで【末】それでもいきなさつた【重】ふせうぶせうに【大】ハ大いびきにて寐ていふ障子をこつそりあけて大痴がふとんの中へそつとはいり【重】これしちつとおきなさつれか【大】嗄たして おまへハいつの間に爰へ来た【重】わしかなさつきに来ておこして見たけれどあまりよふ寐ていなしやれしたによつておこしもせいとしさふにとおもひじつとまつて居たがナ【大】昔におなんこはへにわびなしにねていら来たやらしらずサム〳〵よく寐た程にのもふ何時であろふナ【重】もふやがて夜が明ルがなア となり座敷の【八】ケントなもしたんがしらなと エヘおそいきやうとつんとしてりん氣に胸もぐら〳〵とにゆる所へひや酒をさましてくれるがわらひがほサアしよんがへ【市】やかましいたまりなされと顔をたゝく【八】これさおけ なぜ人の顔をたゝく【市】人の

顔ならゑいじやないカナ　トふるくさいせりふをいふ【八】そんならおれもたゝくぞ　トまたたゝきかへす【市】あいたく〳〵あやまつた【八】なんじやあやまつたあやまつたにあけなんとほつすどふだなんと學者(がくしや)は違ふた物か【い】わしやそんな事しらんがな【八】まて　しらんがな　少しかんがへて　しらんかなせいすいきはどふだらう【い】アノ人さんはほつぽとゑい口じやぞそふしてあすはもふとうりうしなされへ【八】あすは〳〵あすの命はあすにして一夜さづゝの戀の坂　ト宮ぞのをヤツテいる　○爰に大盡は首をあげおまや宵にじきに來るよふにいふたものじやでまちていたがナゼわしが目を明ている内に來てはおくれなんだ　トそばへよるを【重】そふじやけれど　わしや宵からナしやくがおこつてあちらの客にじつともんでもろふていたはナ　トうそ八百をいゝなかす　まだ今にいたむがな　トわざと㒵をしかめるなり【大】うそとはしらずして　それは〳〵氣のとくな事と銀(かね)出しながらはり番して居る内に夜もはやしら〳〵と明ヶ渡る戸のすき間より日はさし込【末】は戸を明にくるむかふの家根には烏が首をうなづきアホウ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

名所招見

自序

夫金銀之尊き事釋迦富士よりも高矣彼錢の空しき者ハ茶見セ揚弓場素見するも淋哉悲哉如此者の意氣地ヲ齒て名曰名所拜見嗚呼御先に使ハれる臀の輕い輩ハおはしたの重にゆづれ

寛政八丙辰

菊月に

紀樵 柳下

附錄

一第壹　松の江の晴天

一第二　魚止の塩干潟

第壹　松の江の晴天

小倉山荘にハ非すこゝに九尺貳間に住居する柳古と言者日比心に思ふハ何ぞ錢のあまりいらぬ意氣な遊びをしたいと五分も丶かぬ心もしばし迷ふて居るハ戀路也友たち二三人寄合べいつも臍の下より上へあがらぬ咄し斗りに日を暮しあくび度〳〵に心氣も労れてうと〳〵眠りしか西日の枕下にさしぬるに目を覺しふと二階から見下せハ比しも芝ノ浦神明の祭とて老若男女花をかざして賑かなり彼ノ古語＝心隨萬境轉宜哉夕暮の軒にひらめく蝙蝠羽織にハ非す長羽織にてぶら〳〵と出る（向よりげいしやはだの娘二三人連にて大またにあるき來る此男ちよいと見た斗り眞すぐに行ハ相見にみせたら廣の中へやに下りでつん〳〵然たる事あきらけし）程なく社内に至れハ茶見セ揚弓場竪横に連ること竹屋丁の切レの如シ（此竹や丁と言切レへたてよこ十文字に前あつて中に貫づくしのもやうあるもこれなりよくたばこ入なぞにあるものなり）此男段ゝ茶見セ揚弓場を素見する中にも松の江と行燈懸たる茶見セの娘きくと言者ハ陽貴妃理夫人にもあらねと是を見るもの半襟で首をメ一文の塞錢をかすつても五十の茶代ハ輕しとしそゝり出合の下駄のはをかゝ口させるのがん首を上ヶ過てやにをのどへ入レむねを悪くするものまゝ有中にお太刀をきめ頬かむりし髷をはしよつて這入客あり【菊】（茶や娘）おいでなさい（トいつた斗り茶を持てきたる）【客】（田舎ことはにて）これハゑらい賑かなこつちやな【菊】ハイ此間ハ賑かて御座ります【客】おま

い方の様な美しい者はわ希てこんな時はおいそがしかろふね　ト少しいやみをいゝかけるきくはわらつてだまりんで居るこゝにさつま者と見へ二三人こしをかけて居る【士】コフおきくさんその様にあくせくせずとちつと御休なさらぬか　ト言ながらてまいのきせるにてたばこをすい付てきくにやる【きく】はい　ト言たばかり後の方をむきのむまねをしてはたきかへす。田舎客の友だち向より来るを見付本性の聲を出し【客】倉さんこれは思ひよらざる御来駕ね　此客は卯古より一たいひやうきん物ゆへ田舎ものなどのまねをして見たが友だちがきたゆへばけをあらはす【倉】コレハ久し振にてのお出合　ト二人しばらくしやれあれ共男之此倉はこゝいら中の茶見せをそゝろゆへまた外へ行つもり【倉】コフ柳さんおめへこゝに咄していなせへわつちや一寸トそこ迄行て来る　ト出そうにする【柳】コウおめへと言者は付合のねへ者だぜヱもうちつと居ねへ【倉】ナニ小用ニいつて来る【柳】そんなら脇指を置て行な　ト取上る倉はしかたなしに小用斗りニ行【菊】おちやを上りませんかへ　トいゝながら柳はへ寄る【菊】おめへさんあの倉さんとお心易すふござりますかへ　トはなしかけるもせんの田舎者とは大きにちがいまんざらでもないト見たゆへなり【柳】アイこゝろやすいのさ大かたおめへとは面白い咄しでもあろうね私しが様な者もちつとはあしらつてぐんねへ【菊】ナニあの倉さんはそこら中歩行きなすつてわたくしが所いはねつから御出なされませぬ【柳】ソリヤアおめへでもごぜへすめへそう方々あるかねへ様にくゝみ止めねへな【菊】それでも私しが手際にはまいりませぬ者を　ホヽヽヽ　ト笑ひ出して居る所へ倉来る【倉】コレハ御待とふ〳〵【柳】大かた色の所へでも行たあろう【倉】おきやがれ【柳】時ニ久敷居たにサア〳〵そろ〳〵出かけよふ　ト二人連立ふら〳〵と宇田川の方へくる此男柳はぜんたい智謀のあるやつゆへ何ぞわるさをしてやろうと思ひふとあんじて【柳】コフ倉さんおめへに咄ス事か

あるアノおきくがおめへの事を段〻私しに咄して聞かセやしたがおめへあの美しい者をおいて外にあるきハあんまりだよ【倉】なんと言たくハしく咄して聞かせねへ【柳】ソリヤァ随分咄しても聞せ様がおきくが口を止たしそして咄した所がおめへの胸に一物あつてあすこへいつてハおもしろくねへと言者だからまた折もありやせう　トだまつている【倉】ハテな　なる程私しにも言た事があるがそれなりにして置た事があるのさきつとそれだあらう　ト首をひねつている此男少しわけあるゆへこしらいごとなれ共本こうに気にかける体の心で孔明〳〵とわらつている【倉】コフふさいできたこれからちよつと□タ川へいこうじやァねへか【柳】モウ五ッだ【倉】まだあいだかあるつき合だ【柳】いくさなら早ひがいゝ　ト二人しりをはしよりまつくらになつてかけ出ス

第二　魚止の塩干潟

程なく魚止と言所に来れハ千客万来ト書たる行燈を軒〳〵にかけ恋路の闇を導しもだいにや繁華の所なり【倉】なにかあすこでふんだつけいまいましい　ト行燈の明りで雪駄を見ながら　舟ハあるか【宿】ござりませぬ【二人】ホイ　トいゝながら一二間のぞいて見て段〻戸前引丁の邊へ来る【柳】サア〳〵いそごうぜきいて見さつせ【倉】舟ハあるか【舟宿】はいござりませぬ【二人】いめへましい　ト言ながら四五丁も来る行燈かん〳〵とかゝやかす舟宿あり【二人】舟ハあるか【舟宿】はいござります　ト二人漸〻落付舟頭河岸へ行て呼る【舟】しほがそこりましたからどふぞ竹地までお出なされて下

さりまし【柳】ホイしかたがねへがちよんの間のすぐ歸りと言所だから早くこしらへてくだせへ【舟】ハイ ト艪をかつぎ片手ニござを持ちて【舟】サアお出なされまし ト二人竹地へつれだち程なく舟にのりこぎだすとまり舟のせんどう見つけ【泊】おりくせふめいきをるな 鼻うたで ばんにござらバうらからござれよ 引ふなぞこのたとがたりびしやりトさせて居る折しも嵐出て竹地の濤なみの音 どん／＼ざぶり／＼【倉】コウせんしうのつ切レよふかの【舟】エヘずい分のつされます ト□□つむいてしばらく無口鉄砲澤のあたりでかすかに五ツのひやうしぎなる チヨン／＼／＼チヨン【柳】ヲ五ツだぜへ【舟】ナニまだ六ツ半サ とよく／＼聞て五ツなれバ ほんに五ッだごうきに今夜ハ早ひと コヽトヲ言二人これハと思へどもなんあらくらち明ず二人そこらを見れバ沖にハかゞりびらめきたし途りのこへ胸に やつさ／＼／＼程なく佃土あたりへ來る【舟】それでも旦那がたハおきじやうだよつぽとひどうござりますもう是からハよふござります ト言所へ向より來る家根舟二夕川の途りと見へ女藝ていのもの見へて何か咄して笑ふ折ふし藝が三味線にて

〽逢ふて歸れバ千里も一里あハぬ其夜ハ一里も千里 程なくすりちかい行古市場へはいろ此二人の客は三味せんなぞも聞ぬふりして寐ている【舟】ソレでるのかどふするのだ トいゝながら舟をつけ大きなこへで 長嶋や 引よ このとちへかしより其ちや屋をよぶなり此客二人をき上りよふ／＼のことで來りしとうき立チゑもんなぞきうに直しと少ばかりさんばしへ上がれハ長嶋やのくゝり戸くわらりと明き男來る【茶や男】はい お初會で御座りますなら子ともしゆハさつばりござりませぬ の向河岸で四ツひやうしぎ チヨン／＼チヨヽン鐘の音ゴウン／＼／＼

七九

跋

一固の通子來り世上のよい〳〵を憐ミ一冊を綴て童蒙に教よと言予もだし難く彼の山東子の糟粕を食て一トたびむセる時ハ筆を取て鼻紙のはしに書付みぢん積て御藏半帋え納るものならじ

追〻出來仕候

通子家語　全	色〳〵の通人のしやれことば諸の遊ひのおかしみをくれしくしるすものなり
牽頭傳　全	たいこ持のふうをかき並ニいろ〳〵手くだ上手下手をしめす
名所拜見　全	やすいてやいのふうぞくをくれしくかきおかしみのある本なり

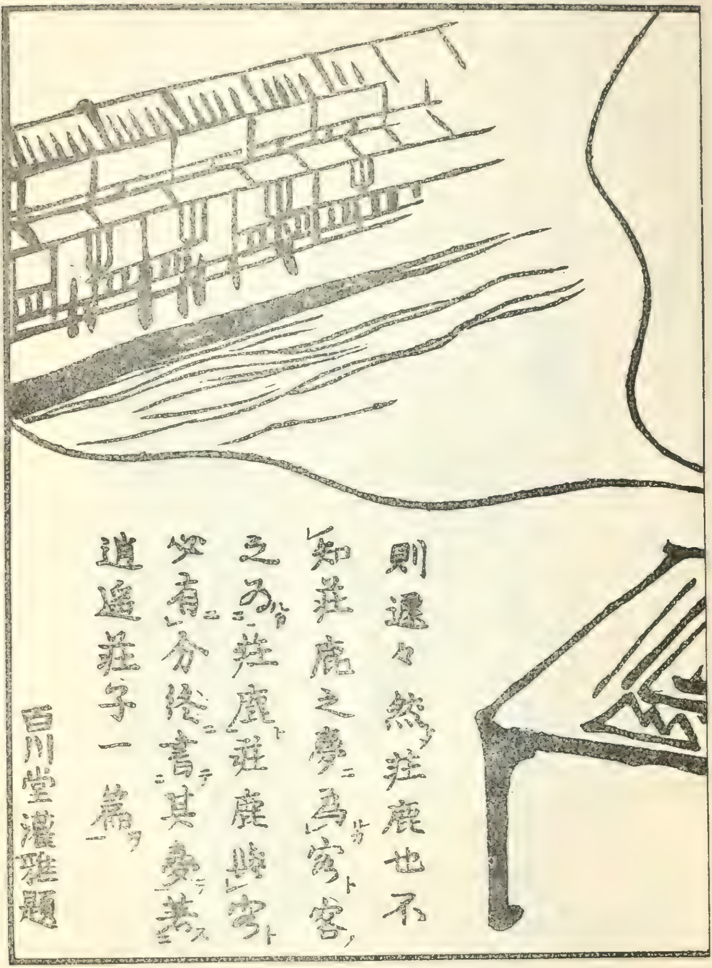
うつ札字紙

花をめで月をあはれひ松虫の音に友をしのぶのしゆ見か
たなるをさへ心のたのしことはなしぬまして花麗なる遊
里のあそびをや鼻をたれし丁兒水を扱給男までいづれの
心のうかれざらんそも遊里の花やかなるありさま線香場
の煙は立て春の朝の霞かとあやしまれあしだの音のすさ
まじきには鳴神の音をけす袖の香のうるはしきにはく
れう衣を尋廻しの挑燈の光は空にしられぬ月夜かとあや
またれ紫のあげ衣裳は雲にまがひて群臣賀表を奉り紅縮
緬の脚布のちかくかゝやきたるには秦の始皇をなやます
こゝに披花をする妓あればかしこに葛籠をかるふする下
女ありたミ客のさはがしききがひのしゆ見かたなる妓藝

妓に化すればげいこ三味線を出さず手かへだやりくりのおもしろさ此里に遊んにハ盧生が夢も外ならんやハ人生七十古來まれなりとかや爪に火を燈捨草履をひらひ何にかハせんされどおのれが手形のきくまゝにはしご酒にうかれ所さだめずまどひあるき親のいさめ世の人のそしりをわきまへずひたすらに粋がるぞ又うたてしさハいへ我も遊里の風味をしめてより露わするゝまなくうかれ／＼て日を送りつかひ果して貳歩ハさらなり纔に此草紙壹部を殘す名づけてうかれ草紙と題するもちと受にくけれど月花にかへて遊里の酒をたのしむわれにひとしきうかれ人に見せんとて青柳のいとながたらしくもくだをまきぬ

寛政丁巳春　廣莫野人莊麿述

荘鹿者廣莫野之人
也常道逞於遊里汜
通北野父頃高優家
也一夜夢為上手形
客復々然遊於青樓
不知荘鹿也俄而覺



則遽々然莊鹿也不
知莊鹿之夢爲寄客
之爲莊鹿莊鹿與客
必有分後書其夢若
逍遙莊子一篇
百川堂灌雅題

三酔一致之像

斗量ハ訓名少シハイカイヲスル人高マンモノナリ

【斗量】先生御在宿かナ【珍菴】コレハ斗量先生よふ御いでサアマこつちへ【斗】此間はしばらく【珍】いよ〳〵お障りも【吉三郎】珍庵さん御きげんよふ【珍】ハイそなたにもサテ斗量公此間はなやかなともござりませんかナ【斗】イヤモ花やかなとはしばらくやめましたサテ紫曉の品の摺ものの御覽なされ【珍】ハテおもしろいと縄手はよふ摺ものが出來ます【斗】私も此間からすこし和哥をよんで見ます【珍】ハテそれはよふござりましよなんぞよミ哥が御ざらば御きかせなされまし【斗】イヤモうたといふよふな哥でもござりません先日夏の月を打捨てかゝくる人もなつのよの月にわするゝねやのともし火【珍】サテ〳〵たくミナおもしろいこと【斗】イヤモほんのよミならひ【珍】吉三郎さん御親父さま御替りもござりませんかナ【吉】ハイ忝うござります隨分そく才に【斗】先生どふでござりますけふは天氣もよしれいの金ぴ羅參りと出かけました幸道にて此むすこにあふてつれざつてきましたサアおまゐりなされんか【珍】それはよふ御さそひ下された參りは參りましたいが不佞も今日は二印ゆへ氣分はわるしよふ〳〵病家を廻りしまふて只今歸り葛根でもせんじてのまふと存ておる所で御ざります【斗】アヽソレハさつとあるいて二軒茶屋でゆどふふでむかいとなされたらくつとはつさんいたそふ【珍】それはきつい古方家じやそんならお供いたしましよ　とはをりを引かけつれ立いづるミち〳〵【珍】吉さん今はなにをけいこ

なされます【吉】ハイ只今ハもふなんにもいたしませぬあいに久田へ參ります【珍】それハよいおたのしミ茶はたのしミのなかいもの【斗】先生夕ァハどふいふもので二印じやナ【珍】サァタァハ大浦公の御供で一力で大呑【斗】藝妓ハナ【珍】久しひ顏マッおりくばゝ熊おやすゐい治内の政よといふよふなものサテゐいじじやのおりきじやのといふてやいがみなうつくしふなつたティ子供の大きうなるといふものハこわひものァノゐいじや抔か元服で舞をもふたハよふ〳〵此頃のことのようにおもふてゐるにはやあのよふにりうとした金ばこになるといふものじや【斗】サレバもつべきものハ娘也【珍】サテ斗量子も此間ハ戯場行じやつたげなぜ【斗】おきゝなされたか【珍】大分花やかなものが見へたそふナだれであつたナ【斗】イヤモあまり花やかナともナイおとき久まつま壹人【珍】ソノま壹人ハ解せたが二人ハ妙しやナどふいふ趣意【斗】薄で【珍】解せたり　とだん〳〵はなし有てほとなく安井今ひらへ參る茶見せにて一ぷくのむ向ゑ花やかなるけいこちよつともく禮して行　【吉】あれハだれでござります【斗】アレハ哥あとのハ鹿じどふ見てもびりハびり【珍】美にして艶なりカナサア〳〵大分腹合がよふなつてきた【斗】もふ呑氣かナ【珍】もちろん〳〵【斗】どこがよふござりましよナ【珍】マッこれから眞葛原おこうの所で楊弓でもゆふてふじやか北さのでちよつといれまつときびしければ國松でも呼にやるといふ平氣な所ハどふじやナ【斗】それハ平氣ハへいき

じやがしかし此邊の山家住ハどふでも土けがあつてさへぬ山ねこのげいこめかし楊弓場ながしも坊主めく二けん茶やの女ごが(くわ)へんじやのたるまじやのとしやれたのも聞づらし北さのゝ座敷ハねりものゝ跡バやしいづれ此邊でハ殺風景(さつふうけい)〳〵とかく遊びハ靑樓(ちやや)うまいものハ生洲(いけす)【珍】實ハそふじやテイちよつとゝ言た所がいつでも歸りハ樓へ登るさすれバ前席(せき)だけのはたきこゝらハちと經濟(けいざい)もめぐらさねバならぬ【斗】此むすこもあまり遊里へハいかぬゆへけふハつれていてもよかろふ【吉】私も今晩ハ園の謠講へ參るやくそくをいたして置ました【珍】まだマアうたひ講迄ハゆつくり〳〵（これより茶屋をせを出て段〻ぎをん町へきたる向からたいこ持）【音八】コレハ旦那よふ御參けい有がたいなんでも此道すじがよいと金ひら樣の御つげまさしくまさ夢であつたよナハヽ〳〵シテこれからいづれへ御なり【斗】イヤけふハどこへもいかぬつもりじやがしかしちよつと梅花樓へよろふか【音】それハありがたい（といゝこミな〳〵扇九へはゐるせんこ場のわきに九右衛門ゐる）【亭主】コレハどなたもよふ御出サマおく〳〵コレだれぞ【仲居三人】斗量さん御出なさい珍庵さんどなたもよふ御出（此所どや〳〵としてらうかをおくへ通るとな〳〵座しきへすわる仲居手をたゝきて盃たいそぐ）【仲】斗量さん此間ハきつい氣わるナ歸りによろふと言てすつとこな【斗】イヤよろふとおもふたれど四角いつれかおきたゆへ【仲】どこへおいでなさりましたへ【斗】あの日ハ圓山に展觀(てんくわん)があつた【仲】てんくわんとハなんで御ざります【斗】展觀とハ書(しよ)や畫(ゑ)の書たの

を見せるのじやア【仲】ヲヽイヤさよふかひナ一向するゐじやナわたしや又ツレあわふくやまいか
とおもひました【音】それハ癲癇じやそれから見てハ私ハまた學者じやお姫さまのつむりにき
て御ざるものと勘へました【斗】きつい俗物の展覲じや【珍】梅君ハとこぞへかナ【仲】ハイ
けふハ芝ゐ行【珍】お見ねさんもか【仲】ハイサアマ斗量さん一ツおたりなされませんかそして
藝子さんどなたにいたしましよマア民のさんしかのさんとミさんお杣さんそこらきヽにやりま
しよ【斗】ウンそれにお浪お袖お㒒その内メテ壹人かふたり【仲】なにいヽなさりますやらコ
レ今の通り聞ておゐでそして鳥羽屋へいて晉八さんきてヾございますと言て大津屋へいて團助
さん濱吉さんきいて御出【小女】アイといふて出てゆくこれより盃まわる晉八物まねするしかの袖くる【しかの】斗量さんいつこうおとふ
〳〵しうご御ざります【おそて】斗量さん先日ハよふ御しらせ珍庵さんどなたもよふ御出と二人座につきさ
ミせんのつヽミをほどく【袖】夜前モシ路橋さんで大新へいきました宗匠と御一所に斗量盃を取てしかのへさすそれよりまハる所へはま吉きたる
【はま吉】コレハ〳〵とべかり花の御座敷有がたい且那まづ御きげんよふ【珍】コレハ千切屋げ
いこさへ來てゐるのにきつい遲参じやナ【はま】ハヘ〳〵ちさんなんじやとはしごくで參りまし
たゆへとかくはてませんン誠に且那先日ハ御揩ものを有がたい仕合【團介きたり】コレハ〳〵有かたい【斗】
はま吉さへおそひと言てゐるのにどふじやぞい【團】ハヘサテ出がおそひと言て親方が毎度ひ

かりますけれどもみじまいなにか万たん代呂物にねんを入レておりますゆへ【はま】あほらしいい世話かなんぞのよふに 此間にげいこさみせんをつぎ調子をあへす三下り あふハわかれとかねて ハしれど今朝のきぬ〳〵いつよりつらやまれにあふよハとび立ばかり 中略 さとのつとめもいつかはなれてこゝろのまゝにすへのおちハをたれかしる【みな〳〵】ヨウ〳〵【小女】しかのさん男しゆがちよつと【し】

アイ といふてたつ 【斗】やらじやナ〳〵【し】やらふしるとがナイナりとそふいふ役なやかなとがあると

エイ と言てかつて へ出る引ちがへて民の来たる 【民の】ヲ、しんどわしやこゝへ○こと 斗堂ははた上座へすへる 【珍】民の公さつふおそかつたノ【民】わたしや金ひらさんへ参りましたら道でお客にあいまして中村屋へゐていましてもどると呼にきてあるといふてじやによつてちよつとそじまいしるノかれやこれとして走てきたにそれでいつこうしんどい【珍】そんならマヅ息つぎに一ツ献じよ【民】ハイおいただき

これよりげいこどふしなにやらはなし有大に花がついてゐるかけ〳〵紙がついてゐるうへ作者のたに心はい也よつて中略 これより酒ごと大にありてはやり歌拳取まぜさハぐ吹水呑もの出る余りながく〳〵しきゆへ略す

ア、エイハイナたま〳〵のことじや【吉】そんなら斗堂さんもおよびなされませんか私ひとりハだれぞ呼にやろふカイ【仲】どなたにいたしましよ【吉】イヤわたくしも先刻の通り讃講【斗】

【仲】あなたもよびしますおなじみがございます【斗】先生もお呼なされ又本結の黒ぶしかな

【珍】ならやのおたくといたそふ【斗】ハ〳〵とかく分州家じや吉ぼんのハ宇治屋のおくらが

よかろふ【仲】おくらさんにいたしましよ けいこ〳〵又さミせん取上引 たけしらぬ雪又雪やふじのミね下略
【斗】その哥ハ北の新地でにハかにかね付か出來たとやらあれハたけしらぬより時しらぬかよ
さそふなものカノ業平の時しらぬ山ハふじのねの哥の心であらふとおもふがナ【珍】なる程
〳〵【濱】大分ゆすつてゐい哥でこさります【斗】イヤモどふ見てもおのふの所のこすのと見
るよふにエイ〳〵とゆすらねバ本ゆすりでなひ【袖】久しいわる口斗量さんもこすのとじぶんハ
大うかれでござりましたヲ けいこ又さミせんを取上て いせのよふだの一おとり下略 此内におくらおたくきたる仲た吉三味のはたをたゝきて おく
さんこゝへ御出 らくバずつと珍庵のはたへすわる此間座しきしらける斗量盃を取て こちらへまハそ【團】御双數【仲】しかのさんお袖
さんおしまい 二人アイといふてさミせんをかたつける【仲】大津屋の御子たちも口をしまい【はま】かたづけるもじ
やまじやおあづけ申て歸りましよふ【團】もふ一品の物さへ預にらせりのいらぬからだになる
【仲】ヲ、やかましゐいかげんにいにひナ吉さん珍庵さんあちらへおいでなさりませんか【吉】
斗量さんのハまだかナ【仲】ハイをつ付お出なさりますマアあちらへ【吉】さよふならを先ハ
【おくら】【おたく】立てうら【しかの】【おそて】へゆく 斗量さんだん〳〵近日となたも民さん といふて立いづる【たいこ三人】旦那だん〳〵
有がたふ御ざります といふてどや〳〵といづる【民】さミせんかたつける【仲】サア斗量さんあちらへおいで【斗】イヤわ
しやてきらがねてゐる内蘭吏師(らんこうし)の所までちよつといてかふと立【仲】ア、をきいナマア〳〵しバ

らくあちらへゐて一ふくを上り民のさん と二人をつぎの間へをしやり茶たばこぼんを置かつてへたつ 是より三人の閒話別々にしるす

斗量の座しき

【斗】ドレその羽をり【民】羽をり取てどこへいきじや【斗】双林寺迄【民】それを又今いかんならんカイナわたしが顔を見たてゝそなひににげるともありそむない又つゆさんの顔でも見にいくのカイ【斗】マァそんなものおつ付けあげにきて月夜に釜ぬかれたよふにしていのふより今の内にいぬるがヱイ【民】をまいさんおかしいといゝじや追付上ヶにくるのこんのとしれもせぬものをどふしてしつてるゝじや【斗】それ程のこたしらひでカイ此間甚太夫へ弟子入して卜筮(ぼくぜい)のとにやくつとくわしふなつてゐる【民】ぼくぜいたらもくじきとやら高慢(こうまん)くさいといわたしらがよふなもナしらぬハイナそんななめくさりハお柳さんやお袖さんに言てきかし【斗】ヲヽお袖やお柳よんでなめよふとねぶろとこつちやこつちめしきさまがかまふとはないヘテききさまが座しきでこけよふと又すべろと三味線を枕にしよふが杖につかふがをれがかまわぬどふりじや【民】おまいさんけふハなんじややらおかしいゐやそをいゝじや全躰マァそのあげにくると言こたなにをおもひ出してじやそれがきゝたいわいナ【斗】ムゥあげると言ことかそれハききさま

いにしなに米吉町通るならまる豆腐屋の内をのぞいて見たかよひ【民】ヱ、そんなちやらハ聞とふナイ（此所すこし涙ぐむ）【斗】そんならほんまのあげるわけをいふてきかそ此間紋子(もんし)や灌河(くわんか)が井とめへいた時きさまいたじやないか【民】アィいたハひ【斗】其時あけにきたじやないか【民】アィあげにきたがなんじやい【斗】それ見たがよいさゝくのじりでなふてあげにくるものか【民】ア、をかしかハつたことい ゝじやナあげにさへくりやミなさらくのじりかひナそれや大嘉へござる田舎(いなか)のお客で湊屋へ行(ゆく)てゝ呼にをくさしやつたのじやわいナ【斗】そふじやあろきさまでなけにや湊屋へいけぬと言きつしりしたお客じや【民】をかしい所へ氣を廻しじやマァきゝへ井とめへゐてゐるのもモゥ花の五ッ六ッもつまつてあるゆへかれやこれとあくまへよしあかいでもモゥ一ッか二ッであくと店から見たゆへ湊や行をひつハつてをゐたけれど大嘉からやかましうせくしどふで湊や行ハじまも入ル跡付(あとつけ)になるによつて店からあげたのじやハへそのくらいのことしらぬおまいさんじやあるまいしそれにあげにさへくれバさらくじやのやらしやのとあんまりお氣の廻しよふ【斗】ア、紫(むらさき)の朱(あけ)を奪(うば)ひ利口(りこう)の邦家(ほうか)をくつがへすじや【民】アレ又ひつこひちんふんかんそれやからの唐人のねごとかいナ【斗】コレカこれかしれざ言てきかそ【民】イ、ヱきゝとふない【斗】コレハロといふものハ利口(りこう)なもので火も水にいゝなすと言唐人のね

ごとじや【民】アレ程いふのにうそじやといふてかあんまりあほらしゐ【斗】イヤなんにもらしゐことれとんとない眞(しん)のあほうサ【民】どふしてエ【斗】今の藝子がをれ壹人(ひとり)にかゝつてゐるよふにおもふて外の客がどふでかふでとよそから見たら極上〻眞のあほうサひつきよふ三味せんひくおやまじやとをもやすむこと【民】そんなマァどふよくなそんならわたしがどこぞでそんなことがあるかいナ【斗】それやわしにきかいでも貴さまのほうがよふしつてゐるアヽよふたく〵とよこになる【民】それミなされナ言(いゝ)よふがないによつてよふたく〵とよいにまぎらしよふたてゝむちやになるをまいさんかいナ【斗】イヤモけふはしかもこぼれ梅によふたのでなをわるい【民】アヽしんきまだそんなこといゝかとふとめゝをしたゝかつめる【斗】あゐたゝ身躰髮膚(しんたいはつふ)父母(ふぼ)に受たる大事のからだじやめつたにそこなふてもらひますまい【民】イヽエそこなふてももふかまやせぬく〵とやたらにつめるあゝしんきと涙ぐミて斗量がひざにうつふしに成【斗】大事の越中うらじやそら涙でぬらしてもらふまい直打が下る【民】エヽモしんきないろく〵のこと言て人をしんきがらしてアいたゝ積氣(しやつき)がおこつた【斗】ホイをきのどく大眼(だいがん)でも呼にやりましよ【民】しらんれひナ人をしんきがらしてをもしろそふに【斗】御尤く〵われらもしんきの御しよふばんをいたした一ねしいりて小利こうな夢なとミよふとねかへつてふとんをかづく【民】イヽエわたしが積氣(しやくき)のをさまる迄ねさすことれならぬ程にまつてイ

、とそつと立てうらへ行ほどなく歸りてね所へはいる此あとハ　甚々微妙々

珍菴座しき

屛風ごしに　どふじや吉さんおまいハ酒をろくにあがらんな【吉】いやもふけふハついにないほどたべましたシテ斗堇さんのあいかたがモウ見へそふなもの【珍】ナニやぼなとをてきハアノひとりのこつてゐたげいしうがくさじじやによつてこちらをねさしてばやいをきるのじや貴公もせい出して修行しなされアヽゆふおもしろい工合ができるテイときにおまへのよんだおくらハうつくしゐ新地中でもめつたにない振袖のじぶんからくびじやつたどふでも鱗ハかくべつじや【吉】うろことハどふいたしたもので御ざり升【珍】△といふ（とはなし半へ女のあしおとするはなしをやめる）【たく】（そつと珍庵のねまへは入ねてゐるはたへすわりたはこ吸付出す珍庵取てのむ）此間ハまたどふやらさむふございますナ（といゝつゝ紙をとりて枕にあて珍庵が枕と取かへ又紙をあてうへぎ一ツはねてふとんの中□□□□へは□□ヽ□□ル）もちつとこつちへを□より□なさりませんか此間ハはよふ御歸りなさつたがモウどこへもよりやなさりませなんだカイおとゝい糸治へさんじましてといいましたらそれからまだ御出なりませんでゝ【珍】そふじやつたか此間あふたがはじめてじやによふ覺へて商賣にハこつたものじや【た】なんぞいゝなさりますカそれハおぼへる御方も有覺ん人もあり其うちするゐたとおもふ御

方ハちよつと一座しても覺ます【珍】なぞと油を【た】ほんま油じやござりませんワたしや上
氣らしい御方ハきらひでござります【珍】それハこちらもそふで粹がりもせりふがりもぬけて
おもしろふナイなにかさし置こふうつくしゐはたへよつた所ハどふもいへぬ樂のきつすいじや
【た】ナニいゝなさりますやら定し美ひ奥ゐがござりましよふに私らがよふな者と御しなる
といふハ御客もよつほど付合のゑいものでござり升【珍】イヤそのをくさまも去年なくして今
でハ獨しんじやテイ【た】うそバつかりそふなら一向うれしいそんじやちつとおたのミ申ます
とがあるけれど【珍】貴さまこそ大かた兄さんがあるといふ久しいやつじやあろ【た】なんの
マア私も木結く人にいわれるもいやでござりますちつとせわにしてくれてさへあるなら自まへ
にしてゐるかいつそきがい茶やでもしとふ御ざりますヲヽおかしいろ〳〵のしゆミかたナとを
しかしをまへさんのよふに粹ナ何もかも呑込でゐなさる御かたじやなけれやこんなはなしもな
らん【珍】フンわしや又きゐ自まいかとおもふた【た】イヽエわたしや店に金がかゝつてござ
りますそれも一年であきます【珍】そりやはなせる少ミのとハどふなりとしよふがこつちへく
る氣ハなひか【た】そふなりますとならワたしやどないにうれしうござります金といふてもか
れやこれわづか拾四五兩それも皆でのふても大事ござりません拾兩かそこら出してをくれなさ

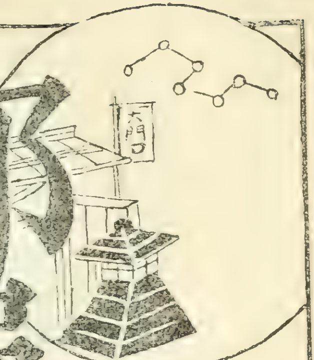
りや跡ハ重兵衛さんにのミこんでもらひましてしバらく白まへして濟します【珍】實にそふい
ふとならどふなりと世話しよふ【た】ほんまにでござりますかへ一向うれしゐ【珍】マアなに
やかやあすの晩にきてはなそふ【た】そんなら巾あすの晩にちがひのふあちらへきておくれな
さりませわたしも遊ひに出るよふにしてあそこへゐてまつてをりますヲヽうれしちよつと此囨
以上てかしこの跡ハ哀々落涙潤蒲團（あい〱たるらくるいふとんをうるをす）

吉三郎座鋪

吉三郎そらねしてゐるおくらのうら行甚長しよふ〱出てくる屏風の外にてつゝミをほとき着かへろ此間又甚長しよふ〱とこへいり もしそちらへねんか【吉】わしやこちらがねが
つて【く】そちらへいてをくれイナこちらハをかしふあかりがさす　と屏風を引たばこ二三ぶくのミ四ふくめを吸付て吉三郎へ出す吉三郎取てのむ【く】
紙を取て枕に紙をあて四すミたねぢろ手きハ甚よし又たばこ二三ふくのおそ〳〵と□□□の中へはゐる（ふとん）　あちらのおいしやさんやどハ御供達でござりますかへ【吉】
イヽヱあの御方ハ此方へ療治に見へます斗量さんといふのハ誹諧のつれ【く】あの御方ハ民の
さんとじやナ【吉】さよふそふナ【く】どなたぞおなじミがござりましよヲ【吉】イヽヱ　と言た斗りて
しべしだまるこちらのとめはじまらぬよふす　借哉鱗花三片飛（おしいかなりんくハさんへんとぶ）

郎通起子

晝夜外居續奥用
火鉢引ケ四ツ時限



郭通遊子

意氣菴之通語
胡蝶町之遊景

郭通遊子叙　五蝶夢

夫荘周か夢ハ蝶と成て野暮な田舎のなたねをもとむ予が夢ハ郭に遊んで菜種色の金をつかふ蝶音町に通ふてハ夫此郭通遊子ハ郭注荘子のにた山にして替玉にもあらず名代新造にもあらず出入於五町遊於樓中ずつときまつた〽買のいきにして大通◐に遊ばすの見識今や青松舘の世界ハ逍遥に似たり日本堤の罾駕ハ飛行して空を獨往す堀の虚舟ハ小金の猪より早し身ハ在後悔之上心者止妓穴夕に三歩の揚代も朝に四十両の懸となり朝四暮三むなさん用ハあへどたらぬところハあの客人にたのミんすよ

廓通遊子　二

千金の
こがねの原の
馬の春

羅んかふ書

総目

○ひねつた別そう
○うきたつ坐しき
○まよハせるとこ
○しんのはなし
○しのぶうき身

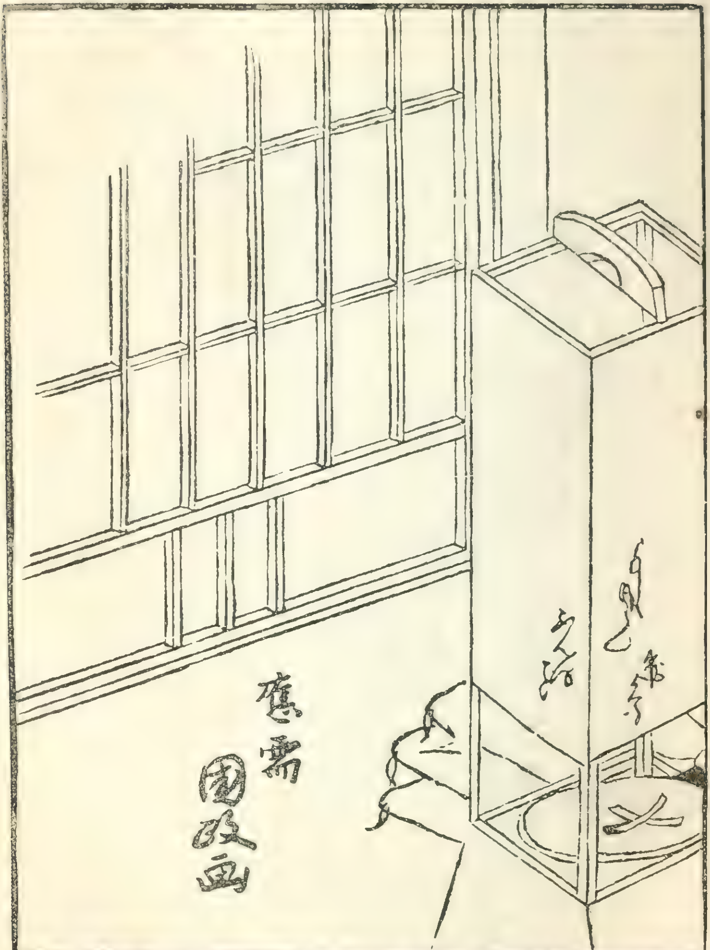
廓通遊子

〇發端

藍江作

魯の親分がいふ色食は人の性とかや。色このまざらん丈夫は玉の盞の底なきに似たりと卷舌でいふならびが岡の和尚も妙でござへすのひものはをろかうはきのかばやきで茶づゝて川竹の爲にかさ壹本の身のたとなり唐天竺もかはらぬものは色の道けいせいにしん手あれは富澤町にふる手ありくはんおんさんを信ずるも手のあるやうにとの禱なるべしあさくさの手水鉢におさまる手ぬくひは何や內誰とそめ付たる名も色こく是も手の付くゑんなるべし手のなる方へとはゆらの介がしやれにしてうた川かうきよ繪のたをやかなるは遍昭がうたのさまを思ひてけいせい買のすき人らは閨中の情をおこしぬべしうかれうきたつよの中隅田のはなふるしとて傾城買の出しにつかはれ堤によこたふ霞は板〆のしごきにひとしく堅にのぼる今戸の瓦煙はうすまいのすひ付たるかとあやまたる中の町の花なかりせば春の心はのどけからましと口すさむ雲客あればむさしやのあらひ鯉に龍門のたきのミする酒徒ありよしはらの夕けしきに金の花をち

らしてハ井出の玉川もけしきをうしなふ五丁の内にハ田町仕入の錦をひるがへし雅かくを亂るおぎ江がていせいにハ雷神の力こぶもとろかす山やがとうふの手きれゝ朝かへりのゆとうふにしらる竹いせの上あんのかんばしきハ折づめの水引にあらハれきのじやのだいのものゝ松にハいけの坊がながしのえだありうへのゝ花のいろにそミすミだ川の月にてらされ三めぐりの雪にこゞゆるハいわゆる仁者ハ山をたのしミ智者ハ水をたのしむとハやつバり此たのしミなるべし爰にひとりのおのこ有名にをふ都のはな川戸に意氣と風雅をこきまぜしゐんきよにあらず茶人てなく俳人らしく醫者でなく何ゝだかしれもの表徳を過行といふてうき世を酒とけいせいにのがれのべかミのはだされハりをわすれやらず尻ハ四手駕のたこがいり猪牙のかしハもちにきぬくのおもかげをゆめミ叢のほたるハかさねたんすのかなものゝ光りを思ひどぶはたの蛙のこゑハ夜見世しらする清攪かと思ふやねうらのどら猫のあしをとにハたが部やへ入ルうハざうりのおとかと心うかれ朝にもちこしの思ひあれバ夕ァのうたゝ寐にけいせいの情をさぐりやうじハきせるのやにをほぢられみハまくらの紙にさかれ春眠催す花時のあめ今ゆあがりといふすがた南部しまにしやうぶかハの切はぎの小そでにさらさでかたをぬひた袖なし紺さなだの帯てつめ引のゆかたをかゝへ手ぬぐひをかたにかけひやうたんのかたのある下駄をからつかせかへる



うちのやうすハくろ板屏の内へかこひ女かとあやまたる少し引こゑてしほり戸たてろじうけの松高ふしておのえのミどりをふくミつくばいのてうづばちへ白雀のねふろにたり四畳半のまへりしきの中爐からしん棚に井戸なりの古はぎの茶わん珠とくがたの茶しやくふ白好ミのつた茶入かつ手口にいきあんといふ紅月がゞくをかけ唐つくゑのうへに石ひろめの紅唐のすりものとりちらしほら床のすミに安見まひのかんろばいわつかにのこりあられかまの湯へはしはのまつ風をあさむきたきものゝかほりへのきの梅か香をうばひゆあがりにねふけが出て黒ぬりの枕にあかしミたろしまちりめんの小そでを引かけとろ〳〵とやらかしたところへ　しのぶがおかのあたりにすむ宗子といふむすこかぶいやミのなき通人三ッかさねのふとんでなければねつかれぬといふうらわかきまだ廿丘のあかつきまゝならぬ部屋すミの身のうへ　くろなゝ子のわた入はおりちやミぢんのしまちりのかさねはをりてつおなんどの小そでで古わたりさらさのへりとりむくしきせのくじやくしぼりのとうゑち川仕入のうすしんのおひくわい中ものもちろんふ白好のしんおりのたはこ入ふろしきつきんをゑりにまきつけ左りつまにてしをり戸をあけ　【宗子】主人どうだまたねてか【過行】宗子がこへにて目がさめせきはらひ　どなたへ　ト云なからねころんだまゝしやうじをあけ　これハ宗さんかでいぶ歸りにしてハおそしいきにしてハはやしマァあがんなさへ【宗】あられかまのたぎりにきをすましあつちまくらのうたゝねハモシがうせいね何かあぢにふさひだといふすがたてござへす【過】なにさせう事なしのうたゝねさおめへハとこからおかゑりへ【宗】さるところに千草いらぼが出やしたといふからそれを見に此近所まで來やした大かた在庵だらうと思つて來たがついぞ内にいた事のねい男だがよく内だの【過】今朝ハついぞなくうちのめしをくひやした今湯あかりに釜がたぎりやすから一ッふくのまふと思つたらついねやしたサァ一ッぷくけんじませうか　ト過行ハゐなをりうす茶たていだす【宗】菓子ハなんだもなかゝこんぺいか【過】何サこゝに紅谷がうば玉がありサササァおがりなさへ　トやうじをそへて出す【宗】是

ハ妙だね　ト菓子たくふ内古はぎの茶わんにうす茶をたてゝ出す　これハ御ふくかげんお茶本ハといゝてへ所だがときに此あへだもさいが所てゐゝ茶入を見やしたモシ妙にもさいハ見やすね【過】ふししんとまづふたりが目利なら大ていい通るのさ【宗】すかミのけんちうさんもとんだめにあハしつたの此間文之介が茶しやくをくれやしたがあんまりじやけらでどうも出してハおかれやせん　トはなすうちちやもしまひ　【過】なにさとてもはなせやせん【宗】ときに何ぞはなせる世界ハなしか【過】しよじこのころハ傾城かいもかびがはへて喰氣のほうさモウ丁もはなひらきがござへしたお出なさへしたらう【宗】二三日あとに玉楼へめづらしい一坐でいきやした【過】ミんなはつかへ【過】サウサてきが高紫に葉むらさきはな浦さきさ【過】コイツハむらさきそろひハ有がたひさぞきれいでござへせふ葉むらさきハ二条家をつらねやすしゐんしうの茶もできやす高むらさきの将棊ハ大事さときにあかまつやのあかつるハかわゆらしひね【宗】それにすきおかなどもよふごせへすそれハそうと茶ばかりのんでもあんまりつれ〳〵だ何ぞさかなをとりよせねへ【過】何ぞ角へ取にやりやせう　トかつ手へたちうさんなうちのおやぢの男にいゝ付るやうす　【男】なんぞあれバいゝが【過】もし何もなくハすじを三百はかりがやかせたがいゝ　ト云ひすてゝ過行さしきへ來ル　【宗】そのうちたちこほらとこのすミにたてかけ有し三味せんをとり　かこひに古あふミのさほのかさり付ハこゝばかりだ　トそのまゝとこによりかゝりてうしをあハせ　江戸ぶし　松のうち　こぞのまゝなるミたれがミこぼれかゝるさしぐし

の【過】ちつと三をあげてへねこんどむかい町で太夫の評はんハよふござへす【宗】一日妓(き)を携(たづさ)へいかふか【過】やぼな事をいゝなせへすおとなげなく芝居(しばい)でも有めへそれより今から郭(てう)へいきの誰(たれ)ぞ妓(き)をつれて王子ておごりの足(あし)のとまりハよしハらさ【宗】とかくおさまりハ北里(ほくり)に極(きハま)るの　トはなす内下のうなぎやすじをやかせてもつてくるかた手になにか三ツものをもつてきてさしきへ出す　いや是ハ何かはなせるやうだ【過】何だ　ト朱のちきん大ひら　たあけこいつハうしほか骨塚原(こつかはら)を見るやうだ　トはなしむだいひながら酒事有　とんだへんなはなしが有やす此間つりやのしんぞうがちといろ事のすじさ此みをごろふしろ　ト利休のたはこぼんのわきから出し【宗】なんだミすかミのとぢみに紅粉(べに)かきのこんたんかきついほうそう見まひのやうたがとんだあどけない色事(いろごと)の【過】ドゥモいくぢのねい色事さとんだ大わらひをしやすおめへでいぶうるさくする人が有ときゝやしたがとういふ事たへ【宗】なにさふとよんどころなき所へいちどいきやしたがあじにからんでいゝやすからたいていにながしておいたが初會(しよくわい)ふミてがうてきおれをあつくするつもりさそこでわつちもすこしあしらいのぐつとさきにちれを付ヶておいてしらねへふりさ【過】それハむきでもねいにおめいつミになりやすよ【宗】なんだむせうにあつくなつてゐるさふだそれからいく度かみをよこしやした【過】釣(つり)やのそがハらも何かうらミのすじがあるかおめへのうハさをいつておつな本(ほん)よミをしやしたが何かわけ有さふだね　トはなすとうゑい山の七ツのかね横丁のとうふやがトウフ／＼又しほり戸をおとづるゝハ桐つぼの曲に

もあらずくゐなにもあらぬわきしにすめるきこつとて是も一二の通人今まつさかりの三十じあまり身上を弟にわたしその身はきまゝのほうらつゐんきよ春は花の本にゐつゝけし夏は孤舟にさほさして水面の風をまねき竹いせの最中のかけにむかつてはをとがき山坐がすミだ川にいすゝき今は世にならつて別荘に引込ありけるがけふやゐきあんをとふらへんとて古ワたりとうざんのあはせはをりいふきしまのうへき八たん八丈の下着さめさやのかた手まきとふこいとにゑその目ぬき人品おとなしくかんとうしまのふろしきつゝミをもちたる黒かもをつれざしきをのぞき

【己惣】おそろひで里の口舌(くぜつ)はなしか トとび石をつたひて 【宗】是はとうだ妙でござへやすさああがんなさへけふはどけへいきなすつた 【己】けふは赤城(あかぎ)のれんげあんへいきやした 【過】何ぞ又めづらしひ物が御手に入ッたかね 【己】さるとこのとのノンコウ獅子(しし)香合(かうがふ)にはこ書付をたのミにいきやした 【宗】めうなものだね今ふつとぬしの事かむねにうかむとてうどくるとはよつほどおもしろひいつてい心まちにまちやした 【己】フゥそれはすてに三味せんのかいろうひをみすのこよりてといふ所たなんぞはなせるせかへか 【宗】もちろんねへでもねへがまづ一はいけんじやせふ トさかつき己惣にさす 【己】こいつはかねいさかなだね 【過】コレザさういふめへすでござへす トしバしむだなどありて 【宗】モゥモ何にも用はござへやすめへ 【己】よしさ 【宗】すんならいまから 【己】【過】ようござへせう 【己】すんなら僕をかへさうか 【過】さう〳〵 【己】三や〳〵 【三】あねふりのミゝにひゞき ハイ 【己】てめへすぐにかへつてたゞだまつてかへれとおつしやりましたといや 【三】ハイかしこまりました此おつゝみはもつてかへりミす トとび石の上のうゐを桜かへのわきに置かへる 【己】どふする氣だ 【宗】すぐにいきやせふか 【過】モウ何時だらう 【己】七ッがまいつたといふ目ざしだ

【宗】サアく仕たくをさつし【過】小たんすのわきからあられのて茶返しを出しきくてうをかげに付た袷羽をり はをり斗でもすむめへ ト勝手のかけさほにこ
んしぼりの手ぬくひと一所にかけて有ゆうきの茶しまた上にきて襟中物入 サアよしよ通人の氏神だ手まへおもてのひらきをかけてくれろよ
ト おやぢの男にいゝ付 【宗】たてずといゝ此うちへどろぼうがはいるととるものはみからと書出しばかりだ
ト むだいひながら三人は打つれて出て行トはや堤にさしかゝれば茶店はよしずを揺てあしくほのかほりたかく四ツ手はちうをとんで客人の心いづくにか有浅くさの入り相にやしきものゝにはやくかしのたそかれはひより下駄のこたま高し往来もたえぬ大門口三人は先へ行すぐるあと
よりぶつかぶりのつきんのうへに手ぬくひのほうかぶりしたるいきな男モシく ふりかへりみれはたいこもちへこ七 【三人】たれだと思つたどけへいつた【七】ちよつと
馬道まてめいりやしたとなたもおそろひでよふ入らつしやりました【過】さつはりあはねいの
【七】ちとひきこミましたからけふはどこのおせけいでござります ト つけこむ 【己惚宗子】はなせねい世
界だサア一所にいかふ【七】ちとお久しぶりのおともはありがてへ と程なく大門巴や 【玉江や若い】是は御そろ
ひてよふいらつしやりました ト 若者はきものかた付茶や女ほうかつ手より 【女ほう娘下女】どなたもよふいらつしやりましたきつひ御
見かぎりてござりますすぐに御二階へいらつしやりまし【七】おらもおミかぎりだ【娘】おと
ゝひこひだよ【七】とかく色男はにくまれるの ト ミなく二階へ上る 【女房】己惚さんマアおまへさんはこ
つちのせけいをおわすれなさへしたかいつそわたしをおうらミなさへした御方がござりますよ
【己】とてもおひこんだ身の上じやァはじまらねい【女房】いつそひねらッしやるよ【過】うら
まれる身の上はうらやましひ【宗】己惚もよしか茶ばかりにかゝつてゐるかほだけれど縄町の

わけなぞれとんだ事だね【七】うす茶ねへ事さこい茶の里にもござへませう トまゝあろしやれ三ツ四ツ有てさかづきやりとり略す【已】おつたれどうした トいふ所へ下女はつ【はつ】よふいらつしやりました トちよいとじぎをする【過】おはやおつたまでそのあしでそういつてくれねへか【女房】すぐにさういつてきや 下女まへたれのはしをちよいとおびへはさミけんばんへ行しばらくして三味せんはこをつき出して行げいしやおつた来ル【つた】ヲヤワたくしハ口がかゝつてとなたかとそんしましたらどなたもよふ入らつしやりました宗さんきつひお見かぎりでござりますおうらミでござります【七】あふぎをちよいとかざし イヨきれいそろひコレタァハよくおれをべまたしておいたなすでの事犬にくひつかれやうとしたハな【つる】ばからしひ おめへかゐねいと思つてわつちやァ先へかへりやした【七】ツイツおれがいふ事をせうちした事がねへ去年の夏もツレおぼへてゐるだらう夜ばいに行つたら夜中蚊にくハせたぜ【つる】はからしい大ていにむだをいゝなせい【つた】うつちやつておきなせへ【過】大ぶ七ぼううらむの【已】こいつハあやしいの【七】おしつけあげや町へずつと茶やを出しのおつるをぐつと入ますどうだうれしいか トおつるがひざをたゝく【つる】なんだなよしなせへ トいゝながら三みせんのさほをじゆばんの袖にてちよいともちてうしを合せながらちいさなこへで ゆんべハワたしハさつはりねやせんあれから内へかへると又さけさ【つた】せんてうさんのやうにむりな事をいわつしやる人ハねいよ ト又三味せんを下に置酒になる【茶男】肴手に来て おかミさんめいりやせふか【宗】已惣さん玉樓にしやせう【女房】はまやへい

つてたしかはむらさき屋高紫さまでござりましたね【己】そうさ【女房】しんぞうさんがたをふたりしまや【七】もちろんうつくしひを【きへい】せうち〳〵行(かう)さんふりにいたしませうか【過】ふつてもふらねいでもよしさ【己】あま上りのてんきじやァあるめいし トしへらくげいしやの三味せんに時うつり喜兵へかへり【喜】ハイよろしうござります【女房】スンナラおはやういらつしやりまし【宗】ソウいそぐ事もねい【過】おつるや又あちらでのまふ トミな〳〵打つれ出て行女ほうわかいものもつき【喜】おざうりはこちらへ直します トタ日まばゆき花のそら中の町に小町やうきひこきまぜし花はよしのはつせの山も色をうしなひ客の心は花のいろにうつろひてかつぐけのたわけ有ばまがきにたゝずむあほうあり犬につまづくすけんあればきやんといふそゝりあり夜さくらを目中に見てかへろやしきのこけ有はひなたくさきたひ人有人は花を目こうかれ女郎は花を見てふさぐとはミなまちがひの心なれとあへねはならぬくがいのつとめひきたてる夜ミせのすがゝき三へは桜を見ながら【己】なるほどさくらを夜ミるは此里にとゝめた【七】さくらながめてよるもあかしつはどうでござりやす【過】あかしつうしのあさぎりはどうだ【つる】とうだ〳〵ァ、出ない【つた】どうだか山のさねかづら【七】こいつはめうだ トミな〳〵へ三人はむだいひながら中の町の二てうつゞミはなミかとあざむきとミめとの三味せんくもにひゞき道は桜わらふへにせき二てうゝんはひろのごとく見物のぞうりのちりはさんらんして山となるかへろ手拭くる頭巾茶やのわかいものが貰遊のおくりものゝからをかゝえてくると向ふから大木やの出入のあんまにつきあたり六かくのだいがた〳〵チヤランヒンとわれると喧ちらかしのさかなのほねをつたやのゑんの下から犬が見付てワン〳〵と二三疋ていふ按摩は通過ル【茶や男】いま〳〵しひあんまだぜ【あんま】ナンタおくり物のからかゝんにんさつせへきのきかねへものが有ものた ト小言を云ながらゆき過る【若者】きがきかねへもきがつゐゝ此ちくしやうめうぬ迄わるくしやれる トいひながらさはちのかけ打付る向ふのどぶ板にあたる音チヤラ〳〵〳〵 犬が キヤァン〳〵とあけやてへにげる【女けい者】とをりかゝり 吉平どんヲャどうした【茶や男】

いめへましひ事をしやした トかけをひろひこそ〳〵かへる ○ 中の丁の見世にはつはやいせ川【惣】アレ見さつしいせ川ほろこしかる
やす【過】なるほどいつ見てもきれい〳〵【つる】ほつこしさんハいつそ氣ぜんのいゝ女郎衆
でおざいますよ【七】どうしても文之介がはりがつよいのさかきつめなども新手が出ます ト江戸丁
へまかりこなく〳〵入【須磨や若者】はしごをかけておりこれハよふいらつしやりました喜兵へどんは紫さんのおさ
しきへおいれ申な【喜】よし〳〵 トはきものとてうちんを一ツしよにもち まづこれへいらつしやりまし【七】是ハくら
ひしんを切らふ トミな〳〵すへふろおけのやうなひばらをとりまきすハるそのうらに若者こうしさかつきなどれいのとうり出す床かざりこゝにりやくすはしごがかふろたよしふりたおだにはさミおいらんにいひ付られたちのたさかいにきて出て
行ながら【禿】つうじどう〳〵あの子ハヨウぶしやれをしいすよふ と又ざしきへはいりたんすの引たしからしのぎを出して持て行【七】こ
れ何をするでいぶうつくしくなつたの【過】たよしや八こ七が氣があると いふぜへ トせなかをたゝく
【禿】アレサおよしなんし ヨウとにげて行さけもやゝすミこげい者へてうしを合せ へうた上略 かわひ心とくミもせでなんじややらにく
らしひ下略【七】そのこへでハなをたまらねへ【つた】ヱヽモウよふむだを いひなせ へすョ
【過】おつたがぜんてい手めへに氣があるそうでなんぞといふとはづかしかりやすほれた男に
ハはづかしひ物さ【つた】なんでござへますおめいさんまであんなやつこになにしにほれるも
のか【つる】犬でもへこ七さんのかほの長ひところにハだれてもほれやす【七】あごではいを
おふといふがおれがあごハこしかけになりやす【宗】ようむだをいふむだハのちにしてサアの

まねへか　トいつれ初會のざしきしまりたるものにてかへる事さらになししへらく時うつると女ほうおとめ内證のものとはなしをしてゐたりしがさしきへ茶やち送り物がくる　【女房】モシヘ己惚さん一
ツおいたゝき申ませふヲヤ過行さんハいつそまハらしつたそうだ【宗】まだいつかうな物サお
めヘツノさかつきをちつとさしなせい　トおとめとミな〳〵むだをいふ内は柴高むらさきしんさう三人ずつときて床はしらとひとしくならぶ　【は紫】ヲヤ七さん
か　といつたはかゝりれいのとをりのしこなしあり　【七】むらさきそろひのゆかりの君ァ、きれい事〳〵あとの〳〵千次郎さ
んもありがてへ【新造】ヲヤばからしひ　トしんさう共にこ〳〵わらひながらゐるさかつきすむはむらさきへちがい棚の本を見　【宗】おいらんなんで
ござんす【は紫】湖月抄さいつそじやうのあつひものでざんす【七】おもしろひ妙なものさ
【はむら】いつそ源氏の君のやうな人が有たらどうしんせう　ト宗子かかほをちらりとながし目　【高】あんなじやう
なしハいやでざんす【七】たしか源氏の君ハわたくしといふ男たらふさ【女房】【けいしや】おめい
といふもんだおへねいものくひのわるひ人さ【過】しよくせうしめいぜ【七】とかくとしまをな
くふとあたります【新造】なぜあたりいすのうはからしひ　トミな〳〵わらふその内しんざうへ行たりきたりさけもやゝたけなハになりて入相のかねに花へちらねと引
四ツのかねに人へちつて火の用心のこへさひしく禿のこゑに夜ふけて客ものかかたつけませふのこへとともに坐しきかへる　【女房】ミなさんあちらへいらつしやりまし【己】
又おつたあちらでのまふ【つた】モゥおやすミあそバしましいつそ酔ましたよ【七】サア〳〵マ
アげしなりませ【過】酔たこへでめりやす　だいてねてミてわらふてさめて　トろうかへ出る　【七】宗子さまサアあ
つちがようござります　ト宗子をさしきへつれて行く　【けい者】【女房】ハイごきげんよふ　ト己惚が屏風をたてゝ行らうかがた〳〵　過行さ

んハとこにねさつしやるのう【つる】粟紫さんのむかふのさしきサ げいしやのこへかすかになる己惣五重の上にねころひ【むたの】さミしふざんすの】【うその】屏風の外ニひばちのわきにいねふり【己】コレ茶をくりやツシテこゝへきや【むたの】わたくしハ十ウさんすヲ ト禿をあいてにしている所へ高紫【高】かへ【己】たばこたのミながら てめへいくつになる【むたの】わたくしハ十ウさんすヲ しのゝめどんすのあへきのへりとりむくにふぢいろのしごき紫ちりめんのうハぎひらりとうちかけつまをもちそへ この子ハヨウうかれのさんにそういつてつむりのものをしまつてもらやコレそうしてこゝへ耳を出しや ト小聲て何かいひつける【禿】アイ〳〵とらうかへ出て高紫ハ屏風をたてふとんの上へうハきをぬきなから己惣がかほをよこ目で見てにつこりとわらひながらうハきのすそをふミ【高】エ、いつてぢれつてへのう トいひながら己惣かそへへよこになりかほを袖てかくしたばこをすひ付 〽モシヘモウげしなんいしたかへモシヘいつそさむふざんすいつそ手かひへてなりいせん【己】アイこんやハふゆのやうさツシテじれつてへのハよしかへ【高】かほをよぎの袖でかくし松ばながしのかんさしでふとんのぬいめをつきながら 〽アイサいつそわたくしハぢれるがくせさおゆるしなんし心いきがとをりいせんとぢれつていものでざんすねへ【己】なにかこんやハ心まちとか何とかいふところへめいりやしたもおきのどくだね【高】アレサあだにおひねりなんすぬしハいつそじやうがあんなんすよ【己】じやうがあつてもだれもくんでくれやせん【高】さぞおくまれなんすだらふそのじやうをくむものゝ名をおいひなんし【己】コレハむりだねどうしてそういふ世界かあるものかへ思ひに思つておめへの所へやう〳〵さ【高】それハうそにもおありかたふさんすねへ【己】そういふはかねいものだか

らこよひ一夜をどうぞおたのミ申やす【高】よういろ〳〵な事をおいゝなんす今よひ一夜で御
いでなんせんのかモウ〳〵思ひきりいせふ【己】きつひむりのいゝやうねすんならひとりねてか
へれといつてくんなさへそのほうがいつそ思ひきりになりやすにあぢにおかしくまよハせなさ
るからやつぺりあぢにミれんがおこる【高】よふかしそれハこつちで申ィす事さ【己】おめへ
がそういつたらわたしにばちがあたりやせうヲ、もつたいなふごぜへす（トあちらむくをゑりに手を入）【高】ナ
ゼそつちをおむきなんすさむふざんす（ト手を取て引く）ぢれつてへかうしなんしわたくしがわるふざん
したおゆるしなんしァノねかふ申ィしたらおさげすミもおきのどくだが【己】どうだへ【高】
マァ申ィすまい【己】いゝなせへ〳〵【高】申ィせふ（トあちに身をもむ）へさすがはづかしさふに㒵をかくし　アノねかうしては
つにおいでなんしても初の心もちでハおつせんからどうぞ來ておくんなんし【己】ナニカまよハ
せなさるの【高】ヨウまよひなんせふおめへの心もしらねへでどこぞにふかくいひかハしなん
した女郎でなくハ娘かなんぞありィせふよしさ思ひ死（しに）にしィすよ【己】ハテあじにしなさるの
それにのるのもあんまりのろひがていゝ〳〵にさましてあがれよ【高】少しハおさつしなんし氣
にハ入ィすまいが（ト己惚にあくまでまよひ□枕引よせきをさし入くつとだき□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□屏風を引く）【己】ゑりがさむいね【高】よくし
てあげいせうコレサ□こ□れ□を□お□と□き□な□ん□し【己】おめいどういふ氣だ【高】まよひィしたモット

[か][ふ][し][な][ん][し]トいふ□□□□□□（にえもたえ〱）あとしめやかにおもてざしきに木菊かひくつまおとあこかれて思ひねの枕にかはすおもかけコロリンチンツテンテンチン中の間とけいが八ツ下のそうりの音ばたく〱しやうじのあく音から〱それかとてかたらんとすれバゆめハさめけり春のよのしん〱とふけわたりゆめばかりなる手枕に琴の音たえ〱になりむかふさしきのすミ【過】コレたれぞゐねいかねこかしたしんさう目をこすり〱おきて【しんさう にけ山】なんざんすいつそねむふさんすねなんし【過】コレサのむものを一ッくれねいか【にけ山】やう〱目をこすり〱おきてひらく〱するふりそて一ツきていつそつめたふさんすトらう下を出てむかふさしきのどびんのさゆをついでらうかを出るひやうしに手がふるへてちやわんのさゆをこぼすこそてのすそで引と手へさハりア、つめてへのふトかけてざしきへはいりじつそこよひハさむふさんすトしんそうのはなしのこへ此ときねずのばんのひやうし木七ッカッチ〱となりさしきハかさゝきの客かいひきをかくこへガウ〱はいふきのおとコト〱〱上野のかねの音かゴヲンく〱とひゞく宗子か床の中【宗】ねほけたこゑでかねハうへ野か浅くさかおそくてハわるひ【紫】うつたこゑでまた七ッさ又いつおいでなんすへ【宗】さつきいふ通りあすのばんかあさつて【紫】きめて御いてなんしなトいふ所へ屏風のそとに玉江やおてうちん若者【玉江や】ハイ宗さんおむかひでござりますトいふこへとともに浅くさの森をとひたすからすハ土手をカア〱とわたり茶やがてうちんの灯かすかになりて大門からのるよつでかごはやし東雲ひがしによこたハつて西にのこる月かげうすくわかれをつぐるくだかけハ田町のつき米やにひとしきんやのやねにたつけふりハわがうちのしゆびをおもひ四ッでのまとをもれてふく朝あらしハみねふりのはだにしミ紙きぬたのおとコト〱千住へかい出しの商人田ンはた向て手はなたチントかむ

娼樓艶客篇

須磨や明石ハはや東雲のにくやからすが告けたると潮來ふしにうたふことのはハ色客の穿なりれんじにさし入月かげも間夫にあふよハあさ日かげかとおどろくきぬ〳〵おしき別れにもかへしィせんとだきメらるゝむすこかぶハかハゆかられてうんのつき心ハあとへ〳〵と引かれて内のおやゆびのじうめんにふさぎ若ひも老も只一すじ　まくあき大木やの中さんのさしき九尺のとこに雪舟が一軸にハくもをおこし一面の琴ハたつた川のことくすゝめがたの七尺の屛風さしき一ツはいにたて廻しその外にばんとうしんそうふりしん二三人思ひ〳〵の身たかひてゐる〔すゞめかたのうちにハこよひ身あかりでよひし色男のこへとおいらんのこへで〕【胡蝶】きのふたねなんすかへ【宗子】ねやァしねへ【胡】なにさうそばつかり下まぶちが上ハまぶちをいつそねらひィすじやうのねいと云ちやァねいこんやハわつちがぬしをかつたからねかしひィせん【宗】そうおまへがよくするからまよハァな【胡】ちつとハおまよひなんしそうなものさぬしもよくかんがへておゝなんし人しらぬつミをつくつてさぞ今までの女郎衆ハはらがたちィせうそれもぬしゆへと思つていたしィした事でさんす少しハおさつしなんしおほかたねむひのも夕ァとこぞへ御出なんしたらふ【宗】ばからしひむたをいひなさんなそれてものちにハつき出すだらふゆだんハならねい【胡】ホンニばからしひこねいに氣をもんでしんざうしゆをたのんでいたしィすにくやしふざ

んすぬしにもにやいィせん是ほどの事がわかりィせん事もありィすめへ【宗】わからねへ事ハねいがおいらがやうなはかねいきやくに【胡】はかなければじやうハたてぬものでざんすかへはかねへのはかなくねへのとなんぼいやしひつとめをしいしても心までつとめハしいせんぬしさへおいでなんせバ呼(よび)とげねいでどふしいせふ　トべつかうしのきで前かゞのそゝけをなをしながら　【宗】おめいがあんまりそういふからあじにひねつて見ていがそれハミんなこつちからいふことのはさ【胡】にくひのふいろ男にハなぜうまれなんした何ッと申いしてもそのやうにおうたかひなんすからせんど申ィした通りどふともぬしの氣のすミなんすやうにどうともしいせうふびんと思つてきておくんなんし【宗】ソリヤァおめへの心しだいさ【胡】スンナラかういたしィす　トにしきのよぎの中よりひぢりめんのむらさきのしほり入のねまきにあさぎむくとりなりもいくじなくそつとするほどのしこなし用だんすの引出しから何か出しかミそりをはこから出すところへたれかせうしをあけて來る　【ねふりの】おいらんて申ますなんぞおいしひ物をおくんなんし【胡】ヲャはからしひだれぞいゝせうもつておいでなんし　ねふりの次の間の新造と何かはなし少しいゝて出テ行　【胡】しハらくかんかへておきなをり　わたしかぬしへまことの心を御めにかけィせふコレおミなんし　ト小ゆびの下にミすがを疊帖ほどしきまくらの上にのせてかミそりをあてがひ　ちつとこゝをおゝさへなんし　ト宗子にかミそりをもたせあり合ふきせるでかミそりの上を打ツ　へ血しほの流を酉の内のかなかきのきせうにすりつけ小ゆびに血とめをつけミすがミにてまきて　これでもうたがひなんすかへ【宗】おれがあやまつたこれハ血ぎせう　といふ口へ胡蝶ハ袖をあてしつかにしなんし　ト折ふしおくさしきはなとひのさしき二幸吉がこへかすかにめりやす　ほれたせうこをどうかこかいなんじやはからし

ひ聲色はまむらやかとらすけなりさんうれしうござんす【胡】どうぞはやく身まゝになりたふざんすトあとへ一向

むごん王つとこつちへかうしな人しまくらのおときり〳〵□□□□□□□□□かんさしがおちてきせるへあたりチンカラリン

夢遊篇

一度この里に過るものハ氣ハ淺草の塔より高く金をつかふ事ハけし之介がしな玉かかんこうりの水よりすゞやかに朝かへりのゑりのうつり香にハこゝろうごき三ッふとんのつりよぎにハおのがたましゐのつるし上るをしらず禿が何どうとよぶこゑも耳につき嬉ふさんすのころしもんくに心うれしく千兩の沽券をわづか一寸にたらぬかん穴に陥入おやゆづりのつやかべもうつらふいろにふけつて人にあづけ一寸さきハやミにして月の有坐頭にひとし晦日に月ハなけれども月勘定のかけとりありたまごに角ハなけれども家臺見世にやき玉子の四角あれハけいせいにまことなきにあらず千すじとなでしくろかミもいろ男の爲にきり十本そろふゆびもいきちにハ一三本切ッておとすけいせいの爲に身をうつ客あればいろ男の爲に年を沈るけいせいありこれミな江戸ッ子のはりにしていきぢとはりとの只中に遣ひすてたる果の身ハ茶やがさがりも月にまし二かいせかるゝ身の上ハ向ふしまの別荘に家守夫婦にあつけられしハらく引込おくさしきらんびん長はつに胡てふがこーらへてよこした八丈のかくむくとうハしきせのきれに小もんちりめん袖あかでよごれた田町したて一の

小袖もへきさなだのほそ帯かんとうしまのふとんをすそに引かけふさいだやうすかた時もくるわの事をわすれずまだ花やのさがりむきにかゝりこてふが身のうへもあんじられうき事かさなるおりからとろ〳〵とねふりはや八ツ時の日さしにハの木のはの風におちるをとさら〳〵風鈴かチリン〳〵なきゝなからとろ〳〵とねいる○はや引四ッまへのけしき犬めんのあんどうのかげかすかにうつりてすけんひやかしのげたのをと四方さんらんし犬のこへ高くしてあんまの笛聲落梅(てきせいらくばい)の情をふくむ宗子ハ五分月代いろ白く目ふちのにくもとうかやせたやうにミへくろ仕立にぶつかぶりでふかくかほをかくし中の丁を小さくなつてとをり大木やのかうしのまへにハそけへしんざう二三人うれあまりていふちいさなこへて【宗】コレうら川さん【うら川】ごつくりしたれだどうかしつたこへだが（トかうしへよる宗子ふかくかほをかくし）【宗】おれだよしづかにしてくんなよつとおめへしらしてくんな【うら川】ちつとまつておいでなんしそう巾ィせふ此ころ引こんでおいでなんす【宗】あれめへか【う】ィッッ此間うちくろうにしておいでなんした今そつとよこし巾ィせふ（トおくへ行そらしハかうしの下に小こしかゞめてかくれゐる木からしのそらうそさむく身にしミしぐれちらり〳〵ふり手あしもつめたくふところ手してゐるところへ）【胡蝶】（いそいてそつとしのび出て）宗さんかよくきておくんなんしたさぞさむからふ（トたがいに手と手をとりかわし宗子が手をおいらんの袖ノ内からふところへ入あたゝめながら）此あいた巾も引込ておりィしてぬしハどうだかしりィせんが一日あハねいといつそモゥなつかしくつてなりィせんタァのみいとゞきィしたかへ【宗】サレハばかなもので一日か一トばんあハねいとねられねい【胡】それハさふとかうしてぬしがたび〳〵かうし迄おいでなんすをやりてがしつてやかましくそれにかけの事を何ンのかのとやかましくいつてせめころされるやうでさんす【宗】それハまづいゝが手めへどうしたでいぶかほがわるひおとゝひきた時もいろがわるひと思つたがどふぞしたか【胡】いつそ心もちがわるくつてしやくいひとくおこるしかうして引込ておりィすとぬしに

きれぬからだといろ〳〵な事てせめられィすとても出たとつてつとめハ出來ィせん見なんす通りのしぎだからてい〳〵くろうしいす事てハおつせん三度のものもろく〳〵たべられィせんいつそこれよりはやく死だほうがよふありィす　ト こてふへかさねかけ〳〵うらミのことば　【宗】おれもてめへのしつてる通りの身のうへだからてへ〳〵氣がつまる事しやァねへかうしておめへのかほを見れバうさもはれる一日てもかほを見ねへと心もちがわるくてならねへ　【胡】どうもきやくしゆハだん〳〵は　れるしほう〳〵のかけがふえ内しやうのしゆびもわるくなりやりてや若衆かこのころハかほがわるしぬしハそういふ身になんなんすし一ッときもはやく死たふざんすさりながらうら川さんがあけくれわたしがもしもふりやうけんでも有ふかときを付てくんなんす心の内をさつしておりィすモゥそれに當月ハ七月（ナニ）なりィすしほうばいしゆがあちな事をいふから一日もくろうのない日ハおつせん少しハさつしておくんなんし　【宗子】さつしねへでとうするものかてめへのいふ事ばかりたくしかけていふけれどおれがこのなりをミや　ト頭巾をすこしあけて見せけれバいろあをざめさかやきハ五分ばかりはへ思ひなしかやせたやう二見へけれバ　【胡】びつくりしたやうすにてなミだくミ　おやどうしィせういつそおやせなんしたほんにおまへにじよさいがあるやうにわつちがむねに有る事斗ッ申ィしておゆるしなんしかうして御出なんすにもどうしておいでなんすへ　【宗】うちのやつらかねてからそつとしのんでくるからいつでも引まへ

だ今夜なぞハもう／＼さむくてならねへおれもヱ、不孝(かう)ものだふたおやにくろうをかけてかう
してうろ／＼してゐるもばちのあたつたせんきだ今かんかへて見ればばちあたりとハおれか事
だ（ト男なからぬ少シふさくやうす）（へこてふへうつむいてねまきの袖てなミたをかくしふきながらかうしにかきりつき鼻のつまつた聲で）【胡】皆ワたしゆへだおゆるしなんしそねい
な事をきくといつそ死たくなりィす思へハ／＼なせこんなになつたのふ（トなミたつゝミかね）【宗】コレサ
ばかなその氣をとりなをしておれにハきれたつらで內證の方のきげんをとりまたつとめに出て
見やどうかかうかやりても若ひものもよくいふやうになるハかならすまづたんきな事をいハね
へやうにしやその內におれもかんどうてもゆるされゝハ又しやうがあるからまづかんにんしや
どうするもかふするもおれがからだがおしこめられてハにける事もならねい【胡】（やう／＼かほを上てたはこヲ吸付て出し）
それてもそうおつせへすけれどかた時もつとまりィせんこんな事にならふとハ思ひィせんてい
つそとうぞつれてにげておくんなんし（トしのひなき）【宗】コレサぐちをいわずにもちつとまちやもふ
かへらう此ころハどてにわるひ犬が出るといふはなしだから【胡】ほんにそうだと申ィすいつそ
かうしておいでなんしても又かへりをあんしいすがまだもちつとハよふありィせふ（トしばしもとめたく又一ふ
くたはこをすい付出す）これさ是で大門からのつておいでなんし（トわるかミにつゝミたる小つふ二ツはかりたもと二入）【宗】いつまでゐてもと
てもかへる身だサァはなしやヨまた內のしゆびがわりひと大なんぎだ（トいこりおしさふにいへは）【胡】すんな

らトいふもたえ〳〵にかならすすくにおかへりなんし外によんなんすなョ【宗】ばか〳〵しいこんなよい〳〵ななりてトきものをかうしのあかりてミれバあかしミた小そでなれハミれハミろほとふさぎ又かうしから手を出し小なこへて【胡】マア待なんし何かまだ用か有ッたァ、じれッてへ口に出ィせんトからしハ内と外の口説たがいにつきぬなごりにやゝてかこへすれバこてふハそつとぬき足しておくへ入宗子もあとふりかへり〳〵づきんまぶかにかぶり又ふりかへりふとまれハ見世あんとうを引をうつ拍子木心ハあとにうしろかミこれもよしある客とミへ軒下をとをりなから〽江戸ぶしゆふへ寐身のとけしなや雨もつそらのなきたくハヲゥさふひトいふこゑもたへ〳〵大門を出ると思へハ宗子ハ目かさめれハあさくさのかねがゴヲヽン〳〵

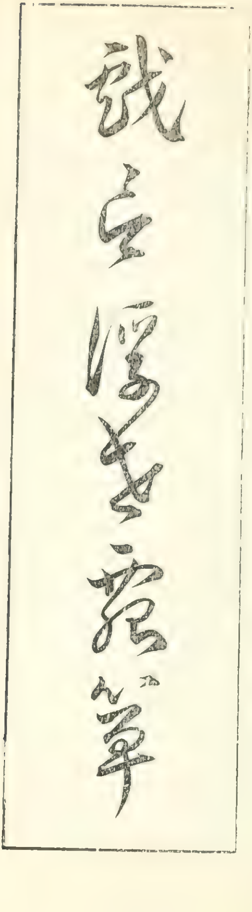
跋

青松亭の机上にたゝれれふミの小冊ありこれをひらけハ忽然として忽生戀〻之情是をまけハ驚怖して示懲悪之教呼乎虚か實か知るへからす文の葉すゑに花を咲かせ情のうてなに實をむすぶ堤に鳴からすたんほにすむ蛙までいつれか是をほめざらん書肆何かしうもれ木とならむ事をかなしミ櫻木の花を咲かせまた來る春の風にちらさはやとしかいふ

寛まつりこと
九とし

門人千聲於青松亭之
机下揮筆

千



戯言浮世瓢箪序

取而池に蕣茉生じ。茶良門に暖簾を懸る。邊良里〳〵とうかれ出。陽氣に狼狽而湎氣にしづめば。喜怒愛樂四季折〳〵の風流有。柳者緑。嫖者一文目三分。浮世ハ壹分五厘。虎のごとくにして。野父に遊び。犬の如くにして伏々詰。あそぶに必法令無し。店に必線香あり。富貴有頂天に在。死生孔方にありといふ事を。ある夜夢中に。天竺浪人の風来先生。虚魯利寛と立て。頷を叩きしを。聞書して。浮世瓢箪に鯰の如く握所なき戯言を。舌の強に饒。腰の弱苞にぬらくらと書散らす心の實。よしや言葉の花の色ハ薄く共。厚ヶ間敷面の皮の千枚にハ。未二

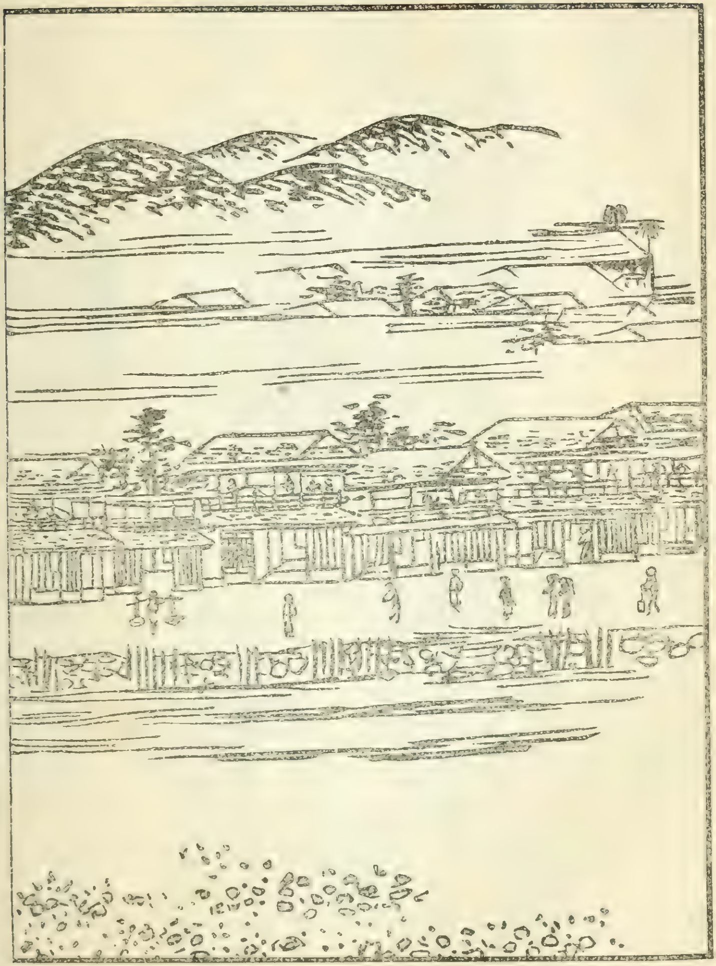
百たらぬ八百の嘘言を子細らしい顔して異海呉句堂の主人李春述る

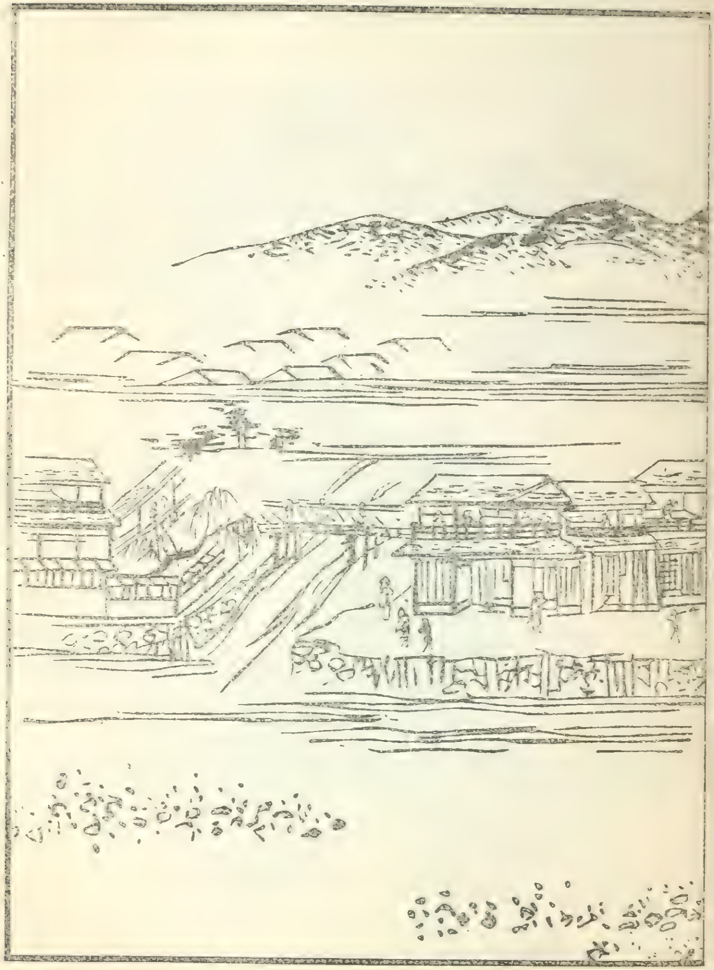
寛政九かへの春

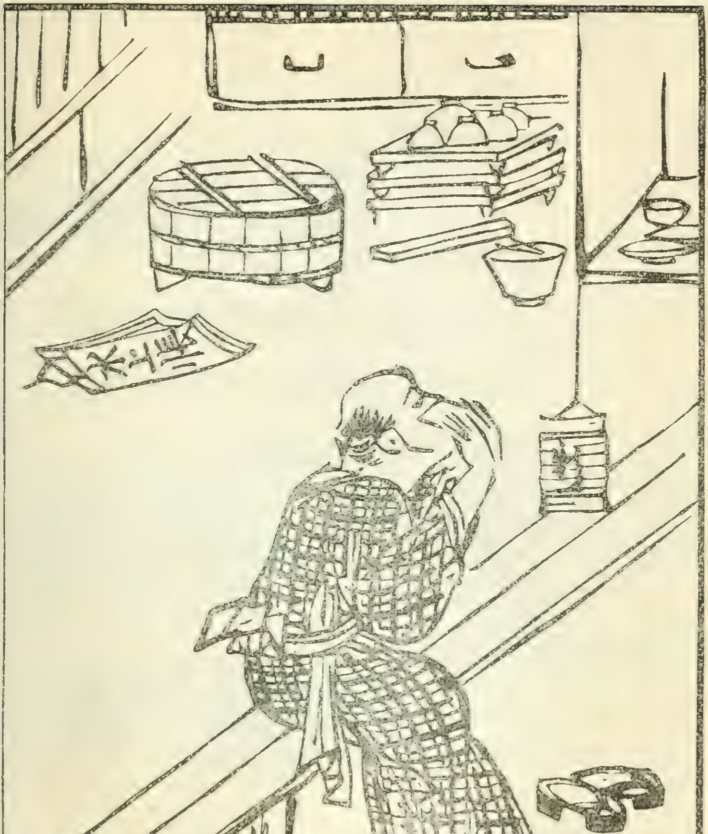
呉句堂主人戯画

たわことうき世瓢簞巻の一

唯色ハ樂で婬せず。酒ハ亂に及さず。堅をけんとして。色に替よとは。實なるかな。徑前昔の毛唐人の寢言。されど戀せずハ。人は心のなからまし。玉の杯底無き杯の。粹な文句の御意ハよし。下地は好物成はし鷹の飛歩行。止る所もしらじとや。彼百ゝ夜通ふた男の樣な氣の長ひ迫付は。當世の風にあはず手短に色情を買出しに行がよし。されば名にしおふ。花都の嶋原ハいふもさらなり。鬼河の中流に。噓の川と言て戀の淵有。此河におぼれては。よくぬれもきくべし。亦此川に流の身をしづめぬる魚にはあらで△よ顏美よと。ひれふる全盛有是も樂やの遣曲には。尾を出さじと骨身も碎る思ひなりとぞ。其尻ハ客に甘味を喰せて。たんと膏脂をのせた。借金の玉章。是を貰ふて。苦にせぬ大盡もあれば。多は心ざはりにて。是迄云置し平樂も今更くやしく覺ゆぞかし。さりながら。世の交を結ぶには。黄金おふからざればべ深からずと思ひ貨やりて亦。大をいふもあり。餘所の野方ハつりゑずとも。我は釣顏にて背上のはげた彼魚につられし。太公望か跡つぎして見ても。文王の沙汰はなく。勘當のさた社ありにき。







七

斯く迄眞實をたつる人には。あたし情にて。あやしの。おいはぎの様なおのこにへ。深く實を盡し。つらゐ勤のうき節も。繁か中のかは竹を。壹枚ぬぎ二枚ぬぎ。三枚敷の世帶も此君ゆへには。ゐとへぬ抔と。格子先の笹芽言。夜半明朝迎ひの寢むたひも忘れて。樂しきへ。此ゑにしとかや。金銀呉竹の客には。ふうわりとさはらバ落ぬ奈與竹に。筒持たせたる心にて。露のなさけに凝が來て。一と夜ふた夜の數重り。內へ破れ竹でかしましく。女子竹に。忍ふ竹が過て。今は竹氏のと薄ふなれば。粹がつて通ふてもとんと不明。扨へ竹のふし見の伯父君の方えあづけられて籠の鳥ァ、身を捨る藪がほしいと。云樣な身の上俄に眼が明。興が覺顏なり。されど他所のうれひへ。高見から。三ッの峯の稻荷の鳥居も打越して。鍵じやの。玉さんじやのと。鄕にもてはやさるゝ。野狐ならぬ。遊里ぎつねの。化ヶ初しむかしを。尋るに。抑御父上と申奉るへ。大和の國の御百性の。まかせ給ふ種なるが。六ッのとし。母に別れ・七ッの年。八ッの小判に替て。行末は誰肌ふれん紅の花の都の花街陌え來りしより・毎日〳〵淚の雨に染し・紅葉袋に唾付て。三角にこすり・礎がごとく。琢か如く。磨がごとく。塗兮ふいたり。隙無ければ。まだみかき不足抔と。聲はしたなくも罵れて。憂寢に泣を加茂川の。淸水で洗しかば。實磨ただけに。光るなりとてさつぱりと水際の立花も。からたちとなり。崑崙の

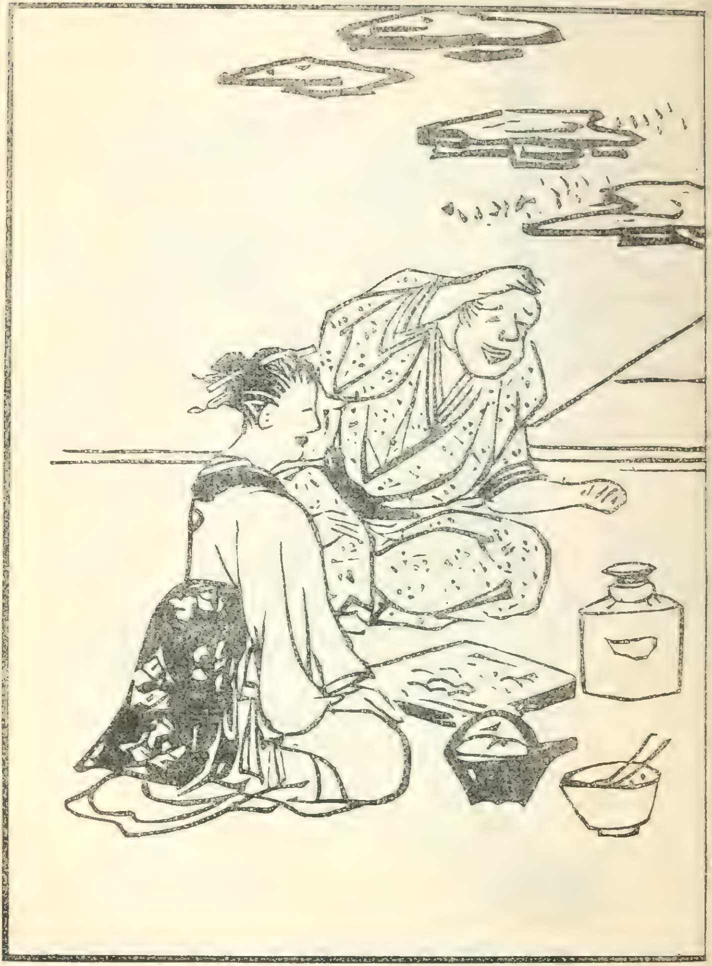
土石ハごと〳〵く。美玉と成ためし古里の草の中で養育し物も。此廓で仕入し故に社。たちまち玉顔となりぬ。水あげあら玉のとしも。二七の比より。四六にかけて様子を見れば。思ひの外の堀出し郭巨にあらぬ。黄金色の鶯の。閨中のひき音がよいかして。鄙の客の飛上が鋏漿を付子の世話をやく。能蔓に取ついてはや高音になりぬ。この頃から。花に擲が五になり。其後ハ山形印の商に。日〳〵の子方の通は。反古のやうに書詰。親方の水上帳も。とじたす位。身の直段が高うなれハ。鼻も高うなり。氣儘肝積の虫も出來ると。迴漢は。誤りて平懐もせず。玉さんと奉れば。時〴〵顔役の義理詰に。つまる處が身の借金。そこで胸に鎖おろして。鍵と出かける。細工ハ流〳〵仕あげをごろうじ則御客の厄害となる。後漢書に。女化して鬼となりし事あれど。それハ見ぬ世。婦人化して鵬と成しは親見なりけらし

戯言うき世瓢箪巻之一終

戯言うき世瓢箪巻之二

獨正者危く。至而方なる時ハ。礙とかや。只。人ハ四角四面も不能角ありて和するは。禮の貴とする處なれば。大石の大通が。〱。たけおれ〱と。いゝしも宜なるかな。渇すれとも東邊の酒を飲ずの。敎あれど。人の呑に行爲の所なれハ。別に子細あらじ。酒ひとつのまねば頭磨の浦淋しのめ。明石の波さわぐなり。なぞとのまけおしミを言て。同し穴の友をさそひて。先加茂河を東しの方へ流しかけるハ。淨藏貴所よりもまた。すさまじき見識なり。行道の。相談には。今夜はとんと。りまきにして。娼妓二枚蠟燭三本の。ちよいとだてとのらうそくも。たて見ての後の心に競れば。昔の胸算用のけた違ひなり。靑樓へすつと入ると。紅裙が燭臺をもつて。樓上へ登ると。氣も同じくのぼり懸ける例のいぬる。イヤ戻りに寄ふのきしましれ。ふるいものと思ふて二言なしに樓上へ登り正面の床ばしらに。尻すへて。髭もんで居らるゝハさながら達摩大師の再來かとあやしまるゝ全躰の出立が本ゆすりの。粋めかし。太いからだに細い帶代少し斜に結び。千草小紋の羽織の紐。長〱敷。目へ這のそな割紋付。黒い

手に白銀の指の輪。油引ずのちやり天窓で。行から戻る迄流行言葉の口合交り。言葉の間に。りの字を入たり。しの字をいれたり。さりくのじりのちんふんかん。やめれなの符丁通詞のゐりそふな座敷ぶり。偖哥妓がくると。何所等へ居て能かろうやらと。少し狼狽へた顔色。先紅裙のそばへよりつく。客の癖として。此間もしらしたが。御出も下されず。扨〳〵御繁昌御目出度杯と。いふいやミをしほに。盃を投やればさへた月夜か朧月夜かはしらず何の伊曬も無い顔して。ひきだすハ。龍田河邊樣の端哥。中程からかんりやく。それからハ流行歌を操返し〳〵。まだ四五年以前にはやりし。哥迄をさらへ。鉢叩するしうち。酒呑て雑話のきれめには調子合せ。客の海老尾を引とゞむる。音緒ゆへに。心のこまのどうかけもとりはづし。何の根じめも。あやすぎの。杯に酒つぎ棹や。數重りて上竹の。とくも斯くにもねぢ上戸。くだ卷返す糸ぐらの。末ハどう鳴事やらん。嫖の詰る程我身のつまらぬ事も。打忘れて身ぶりやら。聲色やらヱ、何者否おかしやんせもはゞかりて。いわしやんせと。のぼし掛るそ。物眞似傳受の書物を見て。横町の風呂の中で修行した。はこをだせば。ホンニ芳雄御座りますさ全躰おまへさまハ。文七によふ似てある位。口でハあわす。うは。調子目元にくるハす色調子彼大津や烏羽の在所から來た牽頭子ハ。あきれて言葉もなかりけりイ、キ。なぞと。客に稽させて。酒斗



呑で見て居るやう哥妓も草臥て楊枝噛だり小菊帋まるめたりして居るを勝苦果ゝそばへ寄て奥山の猿をとらへた樣にきやつ〳〵といわせ大嫌大不好大否抔とさん〴〵さげしまれぬ亦壹人の連中ゝ仙人がりの天無点コレ十二月や二上りの松風は氣が登るしつぽり手事が長歌を聞せコレ琴のお爪を呼にやれ・小弓のお糸もよんでこひ。なぞそれから。硯箱取よせ。什麼滅多無上に書散らし唱妓も俳諧せねば。俗でわるい。わしが教てやろふかと。下村の暖簾偖お爪が琴彈ば我もたしなミし。爪袋を。懐中よりとり出し。琴にむかふて獨心の中には。彼唐の司馬相如ゝ琴をひいて卓文君にしんから忙させし。我も文章はをとるとも。琴ゝきやつにもまけぬ氣白牙の調べを聞ぬ事はさのみ。殘念ならねど。白牙にわが琴をきかせなんだ事が。うらめしいなどゝ。しらぶる。天下太平より其人の太平が片腹いたし。それからゝのみたうも無い。薄茶のんで。せつかく酔た酒をさますも見へなり。河の瀬も鳴三更もなれば。最早迎ひの挑灯が。ぎしく〳〵と。來れは店仕舞を。三ばい買て囃喉寢の趣向。哥妓も踏留今宵こそ。聞かけの文句の種と。身を堅めて待處に。夜更人しづまつて後そろ〳〵と。ありとは見へてあはぬ君かな抔と。もつれかゝれば。さしむかひの應對ては。何やらにならんとやらで。中人をいれさする返事。その媒の口述には。死人の番かなんぞの樣に。枕がねじやの。叩かねじやの。そのうへ

色〳〵様〳〵の事迄念にねんをおされて。番狂はせ。今更どふも否ともいはれず。默頭。實軍ハ材なけれハ士きたらず郎ハ寶無ければ色情きかず。狐ハ丘を。枕とし唱妓ハ箱を。枕とす。こぼれ梅の花は。嵐にころ〳〵とこけあるくは。當世女郎のけんびき。安摩さんより灸治より戀しい顔が藥酒。甘口な輕薄に噉されてしこる。又ハ或時の身あがり。無花の情に。まねかれて。折ふしの日柄に否といはれず約束買ふた夜ハ。ゆかぬが粋と怺て見ても。ゆかねばこんなり。おそい約束のおくりこみに。前花付ると。退しなののきがねハ。さりとハむごひ穿鑿なり

たわこと浮世ひやうたん巻二終

戯言浮世ひやうたん巻之三

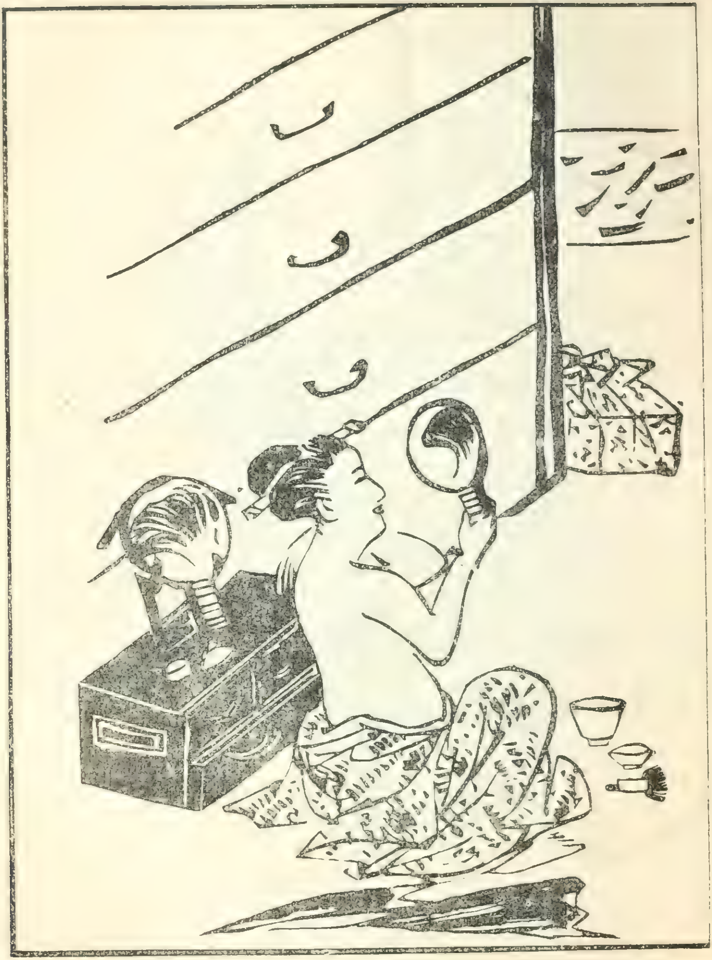
音に聞。哥妓の玉顔社中といわるゝも。生れながらの古狸にもあらず。いとけなき比より。瞽女座頭にかゝりて。かねのとゞき兼る三絃に。取すがりきぬ〴〵のあけのむつごと。今更にうき別れのしのゝめ告る鳥が音と諸共に。寒聲の物かなしく。さも哀れに。首ふり積る雪の朝の。はげしき河風に。撥取手さへ氷にて。氷柱の様な鼻垂。瑷瑤もなひ嘶聲ハ。人の聲もいぢらしく。競遮。ふりわけ髪の比よりつゝ井筒。扇屋万屋杯へ。見習ひに行て。古狸の眞似をして。一向粋。否いなコレハ疎葉で御座りますモシ近日と。堅ひ文句迄を覺へる。野方な客に揉て粋となる。實獵ハ鳥が教る習。次第〳〵に功者になると。入撥もやめて。六替の糸を八がへにかへ。大平のこまも細ごまにし。哥は乙をうたふて。手ごと長歌。りんつくつに。立て騷客ハ文盲なやうにおもふとかや。座敷でハどふやら氣がとがめて。外の人にはわざと情らしく。其人にはすげないは。時代になつて。今は其人に撒呪とるて。色やら何やらとんと知れぬ仕うち。當世はうらをゆけバ。客もうらをゆく。やうになる。今時にひと通りでハ。粉頭もは

やらず。そこでいろ〳〵と。名目付て。商ふ事になりぬ。やんごとなきごしよ出。名もあわれなる尼出。此廓に住染の黒ぼしならで戀のやみにふミまよはするこんたん。今やこぼれて。露の命も。きえなん斗の物眞似泣。金銀鳥の空音に。はかられて。世にあふ坂の人〳〵は。心の關の戸を明てとふし。よく〳〵思へば根が噓なればどこやらが。面白からずとて。此くろ星もほうきぼしなりしかば。彼文屋の先生。ゆへからにはきのくさじの葉けれバ。むべやば客を。つらしといふらん。夕ァさし呑の廻つた。浪花の素人や。けふ見せ出しの。新艘やら。かれやこれやと、當つて見ても。おもしろからねば。いろ〳〵との思案。此間髪いわせた時に。會所の新六がはなしの。はで商賣の。綿帽子。夜半の鐘聲には。客が歸りて亦。外の客の到らしめん事を。ねがふ。平の宗盛の馬の様な。ゐにしおふ。河にし心はやはりすいなれどはでなしやうばゝい取おきて朝夕の烟のせ話から菜切。水くみ。あれた手に白粉ぬつて。しゆミかたな風俗へ。菩薩廻にこそならず。假令の無心云にも。縮緬のわげくゝりや。眉はけ位からいゝだし。後へきし嶋の單物東山の開帳に。連て行はちとはづかしく。うば玉のよるになれは同道歩行近き邊りの神佛參りに歸り足は生洲でたてる何やらかやら。さんやうした處が安ものゝ高ものにて。何が素人やら知れねば。これも先壹廻りかゝつてやめにし。やつぱりもとの東し遊びに

戯言浮世ひやうたん巻之三

音に聞。哥妓の玉顔社中といわるゝも。生れながらの古狸にもあらず。いとけなき比より。瞽女座頭にかゝりて。かねのとゞき兼る三絃に。取すがりきぬ〴〵のあけのむつごと。今更にうき別れのしのゝめ告る鳥が音と諸共に。寒聲の物かなしく。さも哀れに。首ふり積る雪の朝の。はげしき河風に。撥取手さへ氷にて。氷柱の様な鼻垂。霰もなひ噺聲は。人の微もいぢらしく。競越。ふりわけ髪の比よりつゝ井筒。扇屋方屋抔へ。見習ひに行て。古狸の眞似をして。一向粋。否いなコレハ疎葉で御座りますモシ近日と。堅ひ文句迄を覺へる。野方な客に揉て粋となる。實獵は鳥が教る習。次第〳〵に功者になると。入撥もやめて。六替の糸を八がへにかへ。大平のこまも細ごまにし。哥は乙をうたふて。手ごと長歌。りんつくつに。立て騒客は文盲なやうにおもふとかや。座敷ではどふやら氣がとがめて。外の人にはわざと情らしく。其人にはすげないは。時代になつて。今は其人に撒呪とゐて色やら何やらとんと知れぬ仕うち。當世はうらをゆけば。客もうらをゆく。やうになる。今時にひと通りでは。粉頭もは

やらず。そこでいろ〳〵と。名目付て。商ふ事になりぬ。やんごとなきごしよ出。名もあわれなる尼出。此廓に住染の黒ぼしならで戀のやみにふミまよはするこんたん。今やこぼれて。露の命も。きえなん斗の物眞似泣。金銀鳥の空音に。はかられて。世にあふ坂の人〳〵は。心の關の戸を明てとふし。よく〳〵思へば根が嘘なればどこやらが。面白からずとて。此くろ星もほうきぼしなりしかば。彼文屋の先生。ゆへからにはきのくさじの巣けれバ。むべやば客を。つらしといふらん。夕ァさし帯の廻つた。浪花の素人や。けふ見せ出しの。新艘やら。かれやこれやと、當つて見ても。おもしろからねば。いろ〳〵との思案。此間髪いわせた時に。會所の新六がはなしの。はで商賣の。綿帽子。夜半の鐘聲には。客が歸りて亦。外の客の到らしめん事を。ねがふ。平の宗盛の馬の様な。ゑにしおふ。河にし心はやはりすいなれどはでなしやうばい取おきて朝夕の煙のせ話から茶切。水くみ。あれた手に白粉ぬつて。しゆミかたな風俗ハ、菩薩廻にこそならず。假令の無心云にも。縮緬のわげくゝりや。眉はけ位からいゝだし。後ハきし嶋の單物東山の開帳に。連て行はちとはづかしく。うば玉のよるになれは同道歩行近き邊りの神佛參りに歸り足は生洲でたてる何やらかやら。さんやうした處が安ものゝ高ものにて。何が素人やら知れねば。これも先壹廻りかゝつてやめにし。やつぱりもとの東し遊びに



もどるがおふし。祇園清水寺の乾鰹ハ扠置山七ッに七條へいた戻り足。麻上下なりに章臺へ寄るもあり。初午参詣の歸りに。尻からげでぱつちはいて。來るも有。あきなひ廻りに花色の風呂敷かたにかけながら。寄るも有。此客ハ羽織もきず。地おく嶋の布子着てゐれど。旦那といふ賣興漢ハ。八丈嶋のはおりに。縮緬の小袖とハ。挑灯に釣鐘下駄に燒味噌。天に月有地に泥龜あり。丸太町に圓魚有れば。扇長に饅鱺ありいろは歌仙の名にしおふ。露路の奥八方の明りで。呑。遊びもあれバ。遊良の介がゆかれたあたりて遊ぶも有。末社六七人引連て奴僕に箱挑灯持たせて。花麗にしてずつと行と。はや心得て。馴染の絃妓を言てやる。哥妓のお色がいもとの小いろをさしこめば。すかさず孟八か拙者か弟子に。手ずまの上手か御座りますと。さしこむ一度逢たたいこ指も。かぎ出して來てつけこめバ。献やら駟やら呑やらうたふやら。一寸先ハやみの雲に騷たつる帮間末社が。都合二拾五六人。山城國宇治郡出生の者もあれバ丹州氷上の郡生れの者もあり。袖のふり合せも縁を打こんじて。乘合舟にことならず。大勢の人が。あちらでハ三人はなしする。亦こちらでハ。二人物語する。雜咄が三口も四口もになつて並居る人々の天窓のきり〳〵から。足の爪先迄ミな色めきて美く。牽頭子か嚔もおかしく。洛中帮閑の欠氣もおもしろし。偖此判官殿にしたかふ。辨慶といへば。色の黒い房主の樣

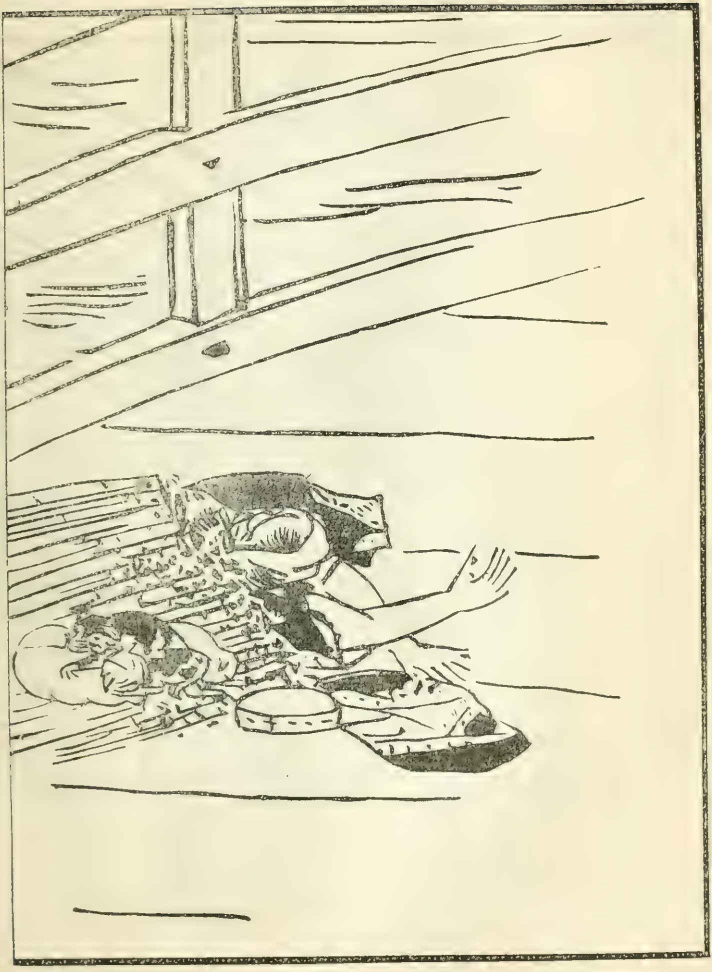
におもへど。房主ばかりにもあらず。惣髪の庸醫も有れバ。加賀の着物に腋刀さいたもあり。小紋の羽織きたも有。惣躰此廓でべんけいを。粋じやといふも可笑。何も粋らしき事は無けれど。先旦那に日柄約束のたろはやしてやろう。判官が倡家の拂のセ話。太平樂はいゝたうてもいはれねば。據なういひもせず。絃妓粉頭妖治等に。至る迄總あしらいがよく。亦は小息子の中宿抔して粋の名をきくものなり。年中持一分金の扇子ハついど買ふたことなく寒中の寢酒には氣のいらぬ鶏卵。禮章のしぶ帋にハ蚤の食ふうれいなし。誠にべんけいは。餘座の俳名よざは。錢の無い泥棒なり。此洛中幇閑を連て歸らるゝ粧ひにハ。綺羅を盡しぬ紅裙が燈灯には。青眉をてらし　唱妓の鼻頭には轎夫の杖に拍子をとる。明日の戯場行の約束ハ只今念おすに及ばす榮耀にも榮花にも此上もなき。けふの遊び。明日香川の行末はしらず

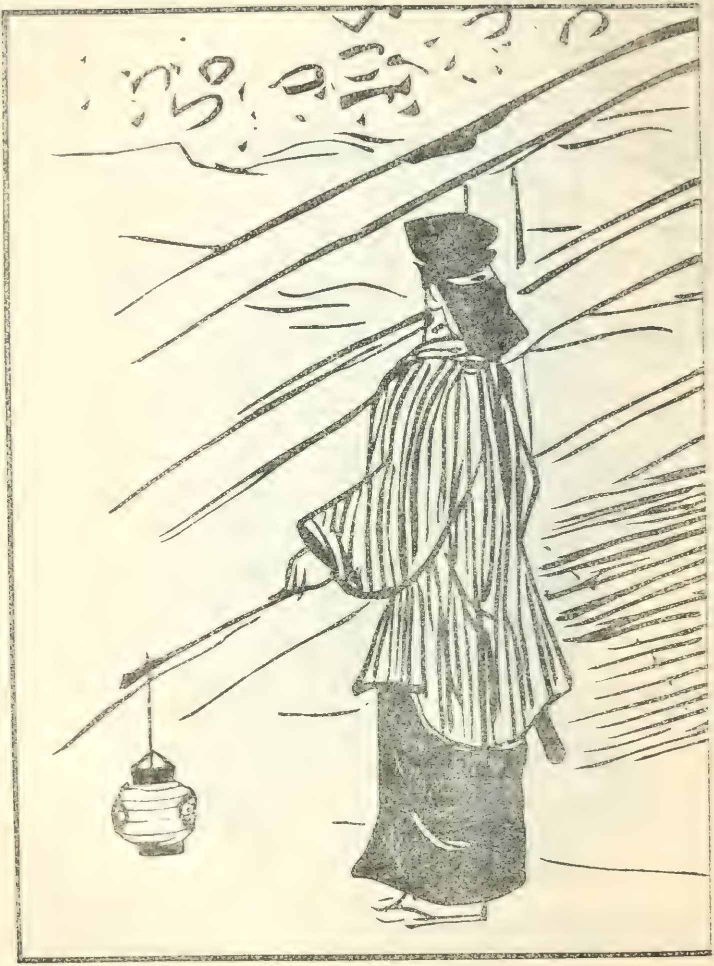
戯言浮世瓢箪巻の三終

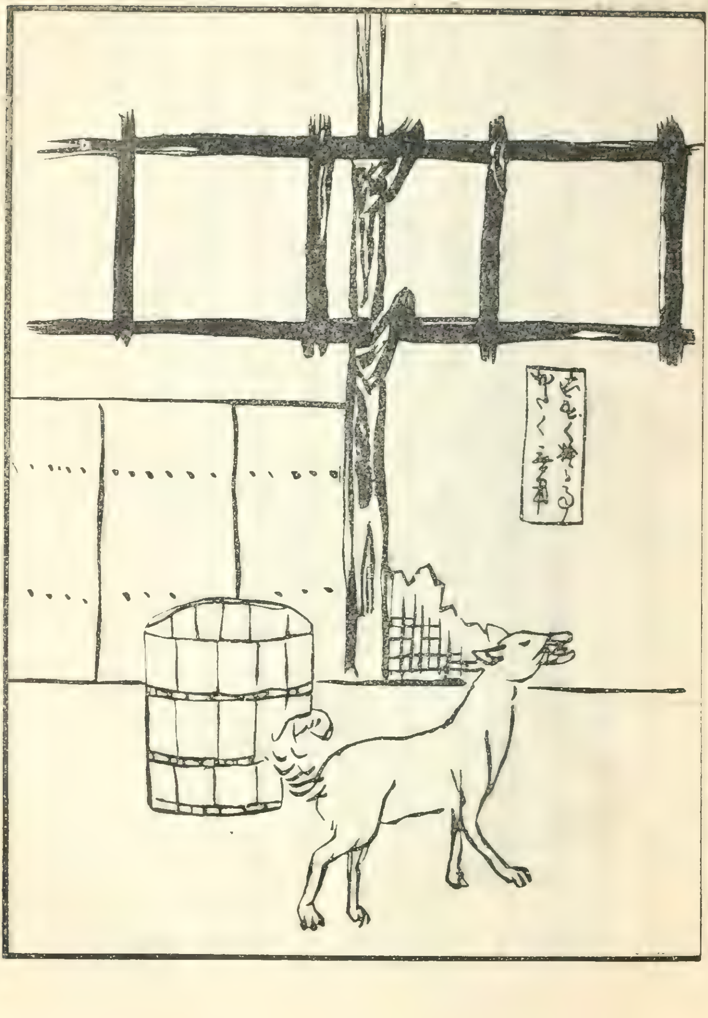
戯言うきよ瓢箪巻の四

祇園の遊里に轎夫社あれど。鴟眼の思へばかちにての歸りとれ。柿の種の文句なり。夜もいたく更行て。空はくらけれど。爪に火を燈しての。戻り道。花車紅裙に送な／＼といふも粹顔なれど。おくられたいが眞實。大和橋の際迄れにぎ／＼敷ヲ、ィといふて別れた跡はぞつと戰慄がたつて夢の覺たる心地酒の醒たる心地今宵の嫖はいくつであろうと。二一の子案に、天作の算用はや秋風も身にしみて　河むかいの犬のほゆるも物淋敷そこらあたりもうそぐらきに軒したの乞食の寢言も氣味わるし。より場のあん燈のかすかなるより外に火も見へねれ。何時と尋る人もこぬやからにかまのしたに火のない蕎麥賣の歸り足をとゞむる。しのゝめ告る鳥の聲れ。別路とてにくひ事も有れど。今宵時教て呉類こそはやれかあゆし。おつつけ五更じやと言ば返事斗して通る。まだ七ッ少し過じやと言ば禮いふて行過る。三條の橋の邊りまで行ば。最早あみ笠に。竹の菜箸持て。八百や萬屋の軒下の帋くゝをひろひあつめ給ふを見ても。面白しともおぼへす河原に置霜れ塩かと見へて。あたりの塩がまに。朝の煙。はやたちぬるを見れば。け

ぶたい親父の顔をあんじ。我町の米屋の門はあけてあれどよね踏おのこにもはづかしく。あやしの小屋より這出て。くわぼうきもつ三介の顔も平生よりハどふやらこわい様に見ゆる。心からとて我家のしきも高ゞかなれば。鼻もひくびくそつとはいる昨夜五寸延した命が今朝ハ。壹尺ちゞむおもひ。寝ぶたい眼をこらゑて。けふばかりハ朽たる木のいましめを守る。實觀樂窮して哀情多し。もはやゆかぬと。此時ハおもへと其夜の家内の行燈の火は。殊更くらく。また夕アの深切な所へゆく。唱妓翁頭に忙たよりは。倡家にほれたハしこりか強し。しかれど退く事は何時でもなり。總客は第一倡家に忙また女郎絃妓に忙ねば甘味なし。たれに忙もせずして。七夕の客人ハ賞翫せず。妖冶に。十分のぼつて居る客が鳥渡顔出せばまづ請よく。樋面庭はくゞ御髭のちりとる。ホンニあなたへお父が来て御座りますと。階子段の脇から取て来て前におけば。其事にゆふしはよふぞや／＼。御まねかせ下され。今に／＼。御嬉しくぞんじ上り〳〵。としてはけふしもありし御まゝさまに。御きげんよろしく候哉また／＼御存の通りのわたくし事。あしき御事は。御ひからせ下されまし。かわゆからせ下されまし先ハ。夕しの御禮かた〳〵めでたくかしこ。東の起情文か大人國の年曆の横に書て文句問くだり半位に。また一通かける程末に白紙を明て巻こと〳〵しう。用事と書てあれバ。何用じやと明て操返しく







りかへし詠て。後は鼻帋の間へはさんで。恐悦がる客は倡家の巾着なり。今もふじは御めでたく。御禮かた〳〵は。珍重せらるれば外聞旁はちとしんつうなり。申上度事御座候大急用との文言を見て。性急に。紋日ともいはず。呼にやれば。ハイ間で御座りますと。恩にきせてせんしようなおくりこみ。三更過迄遊んでも。いのふともいはぬは。さてもながい間なり。亦ちと粋がる樣になると。謝章は。御定法の文言と手に取らず封きらず其儘そこに置て歸る仕うちでも。やつぱりふみが來てなふては。氣がわるく覺ゆ。絃妓女郎の方も一眼から。二三會迄は。定法の文句もよけれど。馴染重りてそれでもいかず。此ふみには。一句あぶらをませてやり。其次は二句あぶらをぬめらし。段〻增に油引多葉粉のんで。まく中の相談。文句のしぐみ。ナントかぎ路さん此家は此春からの馴染で。かう〳〵した迫付。このくらひのあぶらでよかろふか。イヤ夫ではおまへの油かたらぬといへば。私者また今はこの位にしておいて。此冬ごろはまつと。膏脂をのせふと思ふと。鴨やかしわの。じまへだてのかげん。薄い厚ゐの客そしり。夕ァの客はな一向よひ男でなつよみも太皷三味も上手でよい聲の長うたでな。きつひげい者じやがな。かんじんの金がなさそふな。偖亦舞妓にも。よしあし曳の山猫といふ。化物有。山は圓山双林寺靈山。猫は三絃の皮にたとへたれど。當世の安三味線はきやん〳〵と鳴る。犬の子

の皮もあれば。杉ばしで灸点付た八ッ乳も有。されば。猫にもかぎらず。近頃ハよく枕だこが流行て山で寝る子があるゆへに。山寝子といふやらん。舞子よりハ舞親がおもしろいといふて。十露盤豆まきのしわひ親仁が町内の山會に來て。左があがると。右の舞親の昔を思ひ出し。てよびにやる。けふの酒番と丁稚か連だつて出。下河原の表札を眼當に呼て來る。と。次の間で鼻の先をゐらふて座敷へ出る。先ひさ〲の挨拶壹通り。扨過し昔語りハ調子があふて面白く。彼舞妓が。今度の戯場ゑ御出なされたかといへば。イヤ〱前かどの吉右衛門や。小川が藝を見た眼でハ。今の役者ハどうも見られぬ。まだ慶子がいたうちハ。覗ても見たが。厥后ハとんといかぬ。淨る理讀りも。春太夫染太夫掛合時分迄ハ。まだ上手があつた。三味は大和がおもしろい事であつた。今時の三弦ハめつ多に。入撥斗ひいて。皮叩くのでやかましい抔と言て。今時分ハ地獄で振付して居るやら。極樂に戯場してゐるやら。知れぬものを。滅多無上に稱美。今の四條の春堂ハ棧敷が下にあるやら。舞臺が上にあるやら。團藏の太刀打ハどんなものやら。新七のさばきがどんな物やら。しらずして。年老自慢。夫相應に。よく咄しを合すハ。此舞妓の一老でなければ勤らず。一口淨るり語ゞ八王子の門前て堅い加太夫節か。まだ寝もやらぬ手枕抔の。端哥は。沖の石にしてもらいたし。舞妓も其穴を見てなごや帶をひき出せ

ば。涎流して嬉で。黄な聲して付らる〻。熊野のくせやら。山會の慣やら。太鞁小鞁で叩立て。厨下の角に少婢か船こぐや。板間の端に庖丁人か欠氣して居るを見て戻つての。跡の算用。客三拾四人に。舞妓三人是を割付れば。壹人前。四分ン五厘ン六毛餘にあたりしとかや。加樣な古狸の付合ハ又山猫がよし。さすれバ是も捨られぬものなり。全盛の舞妓ハ。わるじやれ半分。心ハ舞妓で所作ハ藝子。すがたハ町の娘にもまがひ鵺の樣な物なれバ。今時の粹が一寸遊びに頼政の矢筈に當る先第一が客の爪なり。美しひ舞妓もやつぱり。爪ハながけれど。座敷の長ひハ嫌ひ。東西の二軒茶店へハちよひと行。其足で圓山また其戻りが下河原と。一日に幾座敷も勤るを。喜ひ。大勢の講。町内の山會の。長座を嫌ふも尤なり。年に春秋二度の山會に呼で。あちらからハ間してくれ。またこちらからハすけて呉と。引つり引張。氣の登る樣な勤よりハ。こつそりと。客一人で。夕ァも。今夜も明日も。呼でしこる客が有ると。后ハこの客と。山寢子となる。是則遣操桿引の肝心肝要なり

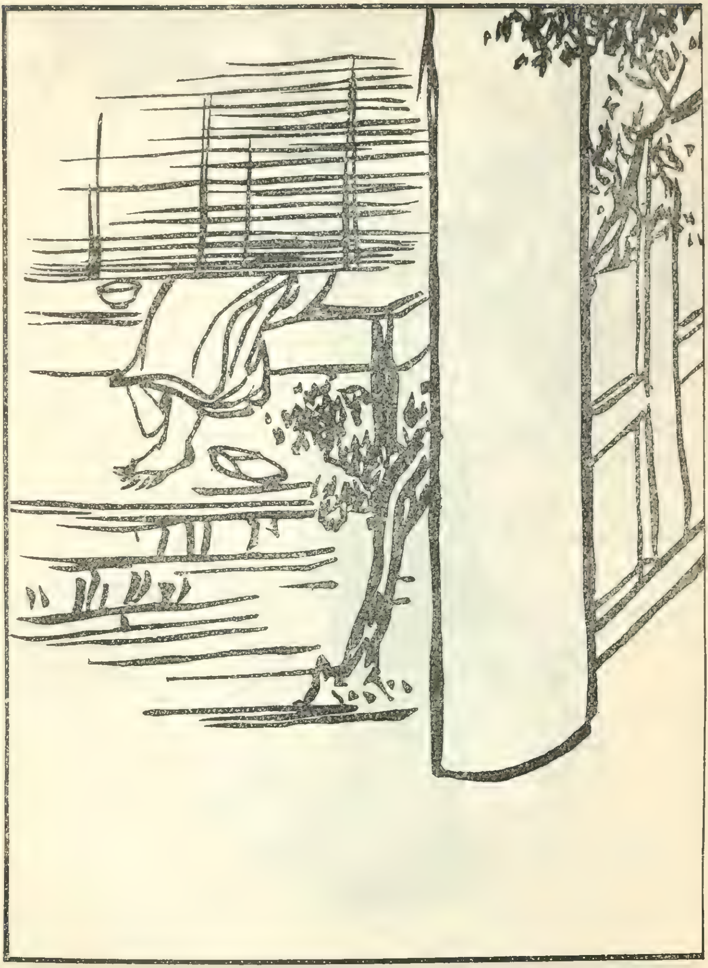
たわはこと浮世ひやうたん巻四巻（マヽ）

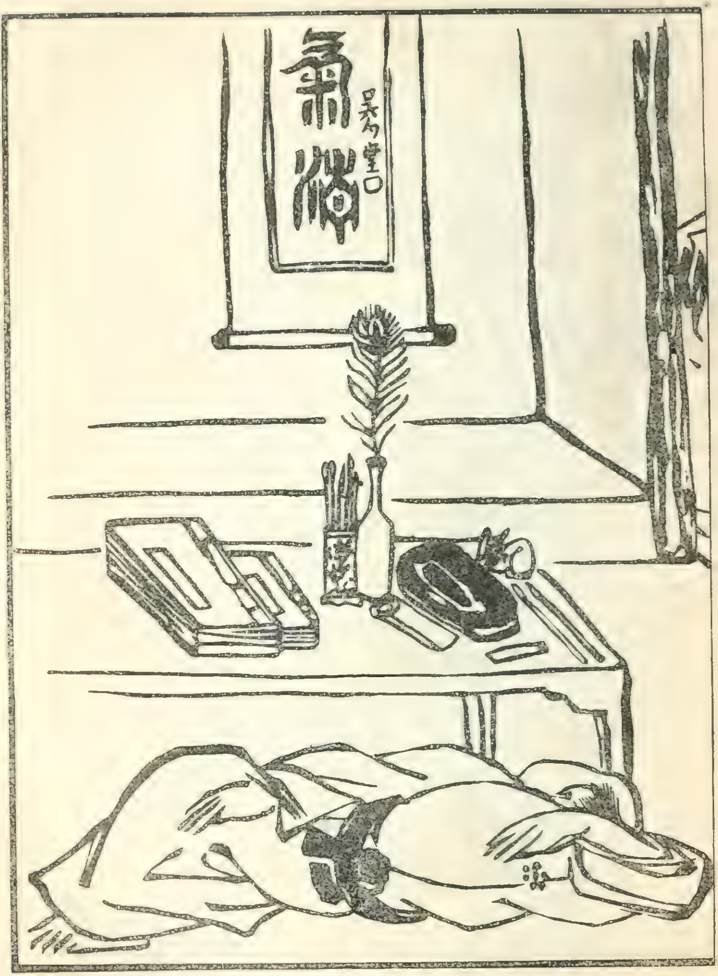
戯言浮世瓢箪巻之五

長鯨の百川を吸が如くの。嘘飲の二日醉には。豆腐屋に商ひさせども。三日醉には。勸學やでも醒す。早飯はくわぬがちなれど酒のまぬ日はなく。七年以前に灸すへてから。今日迄すへぬはさのみ遠退し樣におもはねど。今朝から傷手にとらねば。いかう疎遠に思ふといふ蛇も有り。亦青樓での。絃妓だてにいせやの小倉饅頭や。常盛のむし菓子食て。のまぬ酒に醉て手を叩て躍れども。夕食の膳にすへた。奈良漬の香の物はくわぬ人も有り。されば下戸と化物はないとは。昔の虚言也。當世は藝妓の化物は實にあるぞかし。有馬筆の如く引こんではによいと出又引こんではによいとで。伊勢の客で三度引。熊野ゝ客で七度愛宕郡へは。月〳〵に戻る。彼是するうちに。はやよはひも。四十過ぬるを。まだ二八か三五の樣に。うそ月の顔ならぬ。皺のかほに、弓張の眉作り。鐵漿黑くろ。顔白しろ。化粧の物が人をまよわする若い顔もこはひらしゝ。さればゝ一座のつき合には。おもしろく。能咄もすれば。ものも喰。しかし少しは色氣を含で八寸の燒鳥は、どうやら。氣味が惡ひと喰はぬ所は。婬でよけれど。藥屋で泥龜のせん

ど食ひハ夢にもしらぬ顔にて。若に酒をむまうのます。いつも足のはやい客と思へば。最早御歸遊ばせ。内かたの首尾もいかゞ。四ッ過ましたと。おひ出し口述で足とむるうらからの上手に。客ハ夜半迄ハだいじない盃と浮〳〵其夜も。見セ仕舞三ばひ。此客送つて戻りに紅裙と共に。譏るハ定法偖彼じまへの紘妓ハ。内へいぬると。三年以前に。金銀といつしよに。客に貰ておひた。子か待兼てかゝさまといへバ。叱付て姉さんと云へと教ても。岡眼からハ。ばゝさまといふても。滅多に恥かしからぬとり合せ。只いつも月夜とおもへど。少壯いくばく時ぞ老をいかん。面影のかわらで年の積るともしらで。いつ迄も勤氣の退ぬは氣の毒なり。客もいつ迄も若い様におもふて浮〳〵と我なすべき業もおこたりて。日の暮る事をしらず。日が暮ると榮と云字を見てこねば寢られぬと。毎晩〳〵粋を修行に行。壁に梯子の懸てある下。小便たごの邊りに。二人たちて。婦人の泣聲を聞。其むかいのみぞのはたにかゞつかふてゐるを見て戻り。彼かち荷持の根付と同じやうに。わるずれとやらになりて。ぶら〳〵と流し歩行なり。亦酒は人をして醉さず。自醉なり。色ハ人をして迷さず自迷なりとかや。先からハさのみだまさねど。我方から。噉さりやう〳〵と。してゆくゆへ。先も義理になつて噉さねバならぬ迫付。遊女の情ハなきにあらず。有にあらず。噓の中の眞實在。信の中の虚言有。千差萬別戀有

て無常あり。菊野三勝が如き厚情もあれば。お妻や小春の樣な眞實もあり。此坪へ挾ると。金五郎。八郎兵衛の場所へ行。遊女の情ハ客の破滅。鳥は食の爲に亡。なま粹ハ厚情の爲に身をほろぼす。恐れ懼へきの甚しきならずや。寔の粹ハ五常忠孝を守る此道にもれたれバ總て非我といふべし。其五常の中の。仁といふは。慈なり。くがひに沈む一夜妻も伊達放蕩に。勤るハすくなし。身の理にからみてなり。假初に遊里へ行ば。爰は金銀を出して遊ぶ處といふことを。鼻にかけて。滅多に無理を云たり。いぢつたり。後には自分も肝積起して遊ぶ時は一座しらけて。面白からず。全躰鬱散に來て無理いふて。腹立事慈がなひ故に。人にものもほどこさす。きたなひ事斗を是とするゆへに第一不粹の名をとる。偖義は物事を堅くする道理なれば。晦日拂。亦者五節句拂の定りを不違其日限に渡すなり。踏事を手栖のやうにおもふハ非我也。先ハ渡世なり慰にもせまじ。他所行ハやま買。亦はすゝき。蠟燭ハつがす。哥妓の煙草袋を持て戻るか。ちよとしても身あがりさせて。我社粹とおもふ。粹にハ少しほとがあつて。いわゆるかすりとりとるふべし。たま〳〵日栖を賴まれて直に否といふも。かたづまると。先心能く受。跡から約束變替常のことく。かなハぬ用事と云てやれば。彼契約の義が違ふと向ふの悦がむだとなり。腹をたつる。さすれば粹とハいはず。禮斗ハ熖花陣には入用なしと思へ





ど。是も入るなり。斯く言ふて馬鹿慇懃にするにあらず風俗形躰の禮にあらず。我身の禮を思ふべし羽織にはかまいため付て行やう。馬に乘て行やうハ。餘り禮過て見苦し。是ハ禮に似たせんしようなり。我儘が過てハ。醉に牽頭子を。踏だりけつたりして。跡で金をやる抔のわるい平樂。先は虫を殺して雷同するが商賣ゆへ。しられて居れと。我人情の禮も失ふ。酒に酩酊て二階の屋根へ小便したり。寢ながら食をとゝのへなどするハ。天道の恐れ。身の禮を忘却る。これ野夫の極上飛切最上なり。智者者不惑と云り。色〳〵樣〳〵のまどひすぎては我をてらすかィャあれは噉すか但し鍵かとしぢうの心遣ひに。とけぬつき合。ハ愚者なりぶ粹なり。知者粹の本家。粹ハ智の根本なり。智を以て粹といふハ。しれた事なり。信ハまことなれハ。彼蓴菜ぬめたをはなれ。我ちから。信でゆけば。まことで返す。賣言葉に買ことば。只人の信切には。たとへみめわるき男にても。心に思ひ付しんから惚て來る。又信をすごして。道野邊で相對死したり。本信から起つて。其女の下駄さげるやうな信ハ。極ぶ粹の信にして。少しわきみちなり。忠孝の道にもはづれぬなり。主人ある身にもせよ。親ある身にもせよ。荊棘林に。居續亦ハ夜更し過ては。忠孝を失ふのミならず。廓ても無粹の名をとる其ゆへハ。上客ハ八ッにいぬる。中客は。七ッ過。くさ屋の聲聞てからいぬるハ。下客なりと。いふ諺あり。

斯て燈花陣でさへ。五常忠孝を守らねばならぬ世かい。まして本道においてをや。五常無てはいけぬとやられ。孔子といふた大通の。金言なりこんなマア粋が唐にもあろか。チ、チン〱と作の先生拍子にかゝつて大音上。我も其五常を忘却てより。天竺浪人と名をよばれ。粋の源流を失ふたり。此事なんじに。語らん爲風にふかれて來るなり。浮世の酒の醉醒し辭多ハ品すくなし。過たるはなを及さる今ハいふこと更になし。最早是より歸るべしと。へつばりくだを枕神にふんばたかると。見し夢はさめて

戯言浮世瓢簞卷之五大終

跋

一日祇園の町の眞中程にて。呉句堂主人に不圖行逢ふ。頭と脚六一五一十粹を盡せり。丼にはさめるを見れは。小菊紙にハあらでよく皺めり。乞て是を見るに。ハたして當世の方言。のつけに左をさして誤らしむ。僕ひそかに思ふ婬把の剛寂も。喧嘩の挨拶も。皆時に取ての守本尊なるべしと。明日の心を例の先探して。東山の狼狽散人表帋の裏に記ス

寛政九年巳孟春

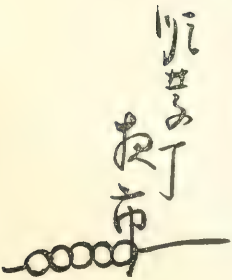
京都書林　寺町通二條上ル町　靏屋喜右衛門
寺町通二條下ル町　鉛屋安兵衛
大坂書林　心齊橋筋　塩屋喜助
江戸書林　通油町　鶴屋喜右衛門

十界和尚話

ある日酒屋の橘子樽拾ひの序予か草扉を抑て懐よりひとつの小冊を出し標題あらんことを乞ふ是をつら〳〵閲するに浪華の色八卦　東武の色地獄に彷彿たり予大に呵て日汝其糟を茶づりの菜にねぶらんよりハなんそ得意の旦那衆へ配らさる橘子これに答るに公酒中の趣にうとしよて其糟に焼酎の高味ある事をしらすと予こゝに無言されともへらず口してこれに題するに十界和尚話

寛政九ツのとし

晩冬



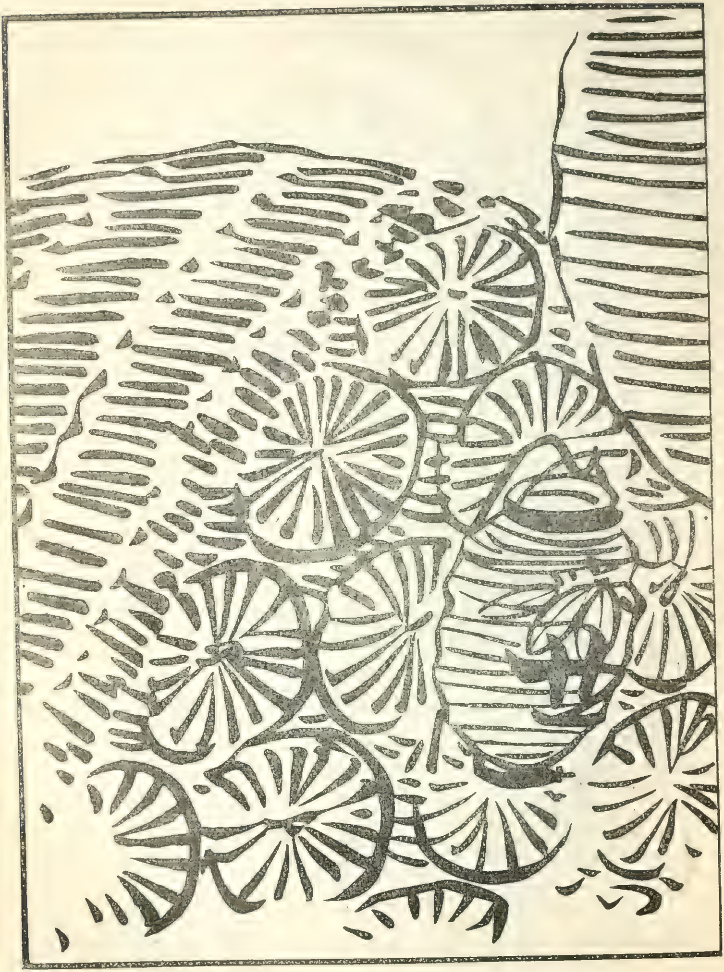
十界和尚話自序

天台の一念三千の法門より此里に一年三兩の奉公人こそうかこがたきものはあらしされはこそ普賢菩薩も人參代に神崎の里に身を沈たまひ光明皇后は衆生の爲に垢すり女とハ落たまひぬ扨こそ極樂淨土に遊はんとおもふ輩は紫摩黄金の光をおしまず紋日の約束きハの無心を救たまへやと白

十界和尚話一

修羅界

世界ハ道頓堀芝居茶や内證ハちとぬくいとミへて向がわも赤町もおくりたがるやうすこん夜二
階の客ハ堂島の正米問屋藝子ハ嶋の内ミわ。すミ。しげ。三人牽頭ハ鈍八呑八にてしつほりと
した座敷おくハ堺すじ木綿屋のむすこ【山次郎】としころは廿三四男へよけれど。ちといゝなしろもの。着付羽織へ紗綾をあひろとに染て花びしのひとつもん。かた入は白りん
ずに逢江丸が自悲さんの住よしの圖。くろ紬の小袖三ツ花ひしの紋下着は玉虫海きの無地に朱ニてうたぎゝやう左・りこミ
紋コレハあいかたの紋なり。じゆはんへちりめんの毘沙もん龜甲もミのおくうら。帶はこび茶どんすばん龍の大がたなり げいこな
くなじみの女郎とさしむかいの酒の座敷女郎ハ【おのへ】嶋のうち天文のかりミせ年頃ははたちくらひとミへて色白く顔おもながにて中じゝ着付へむらさきちり
めんのひつかへし白あげにて香の圖のもやう中着も下着も白りんずのひつかへし長じゆばんは板じめ。おひへくろびろとに金糸にて
伏見人形のぬいなり茶やのむすめと三人何やらぶつ〳〵云てたのしむさいちう共女郎に今ひとりなじミの客あり共客來ろ 【源】
としころ廿七八色くろにしてにがミのはしつた男着付へ二歩くらひゝ河内じまに花いろちゝぶのうら。羽織はけんちうつむきにくろいとてむ
こふ梅のぬいもん白ぐん内のかた入下着はねごやちゝぶを茶がへしのりんずかたも〻のをくうらすべて綿はうすふ入たる仕立じゆばんあさぎ
かゞ帶へ黒はかたくろちりめんの山岡頭巾なかくまへにはさミ。所は上ミ過さらしらうやのむすこ二ノ夕 【源】こんやハきつうい
月あまりもあとからおのえをよんでゐらつきこミの大せりふ治郎とつきあひしへこよひがはじめなり
そがしいな トいふておくをちよひとのぞけバ右の山次郎にておのへが来ているゆゑえらかんしやくなれともかほにも出さず 今相合橋のうへでやか松にあふたが。ゐ
らとちりあひさつ。どふでもあれての筋か知らんて【花車】そふでござりますか トとちつたやうす是へおくとつきあ



ふた心づかいなりこめろ茶をくむ火ばちたばこほん持てくる【花】さよ茶の間へ燭臺ともしや【源】イヤ爰で一ふく呑　トわざとおくへミへる所へすハつて腰より仙さいのかべちよろにけんによふしの新かた横なかのたばこ入うずの金ものきせるハ四つばし吸口銀にたはこいれとおなしもやうを赤銅とすあかゞねとでいつけた物すき口をつまへ首をすくめ左りのかたをあけてびん付やの思ひ入レ　○花しやハおくのふすまをしめたいこゝろなれと源に見られたろうへなれはよふさしもせず源かはなしのてうしをあはしていても右のこゝろつかひでしくりとあげずおのへも源がこへがするゆへ今までむすこにしんらしいことをいふたりすむのすまぬのとのせりふありしが急にたまつて居か源にもいゝかけて置たことかあれはどふか臺所がきにかゝつてともすれば目のゆくやつなり次郎も大のりんきしやなれは座敷もしらけておもしろふのミかけた酒もりに入やうすにてこれ修羅界のくるしミなり【源】此間大六ハきたか【花】イヱおミへなさつてしやござりません【源】三日のハんに來筈しやか中時分にわしが新町から醉てもどつて來たら、大六か松屋町で犬悦していたに出あふた故介ほうしてもどつたこゝへ來たやうにいふていたが【花】イヱそれハよそでござりませよ。あなたハきつい御迷惑じやあつたナァ【源】イァモどこへいてもすか斗しや。犬悦ハいぬが悦ぶが。鼻毛の延たのハどこぞから笑ふて居であらふ　トおくへきこへるやうにいやミいふ【花】あなたいつ鼻毛を延しなさつたうそハかり　トいふをしほに立つ中居に何かさゝやくこれは奥の客お寐させといふのなり。花車ハ盃を出し酒といふ世界にす无臺所にてらうそくはともしさし源と花車とさしむかひにてのんで居る此間に二かひの次の間へ寐間ハ出來たやうすこめろが娘へ知らせばてうしのかんなをりさかつき一二度まハり酒となろ次郎ハこへそふに源かうしろを通りにかひへ上るおのへは臺所へねまき着かへに出る【おのへ】源さん御出　トいへど源ハ切うりのあつやき見るやうに目を三角にしてものもいはすにらんて居る【おのへ】チヨト耳かし　ト源のねきへより袖をとらまへ小こへて何かいふ源ハ猪びん付やといふ氣どり此間の文句作者しらず何やらとくしんさしてねまきかへつゝミつゝんでうらへゆく【おのへ】おさよどん茶〳〵一ッおくれ藤八どん寒ふなつたナァその手ぬぐひハ我董さんのかへ　トあいさつして二かひへあがる源もよふ氣てのむ

はこなりにいりおのへがしろとふろを見むきもせずふんべつの五六百ありそふな顔しいろなり【花】源さんモシこんやのハちとわけがござり升ワたしがあとで御ハなし致ますト先おあかり ト盃をさす【源】これてハ呑ぬコレ藝子二三人呼にやりや【花】たれに仕ませふ【源】いそかしげかみよしかコヲウ香柳むかひの若まつと四五人呼にやつて【花】コレとミあるのをハよふ呼んでおしや【こめろとミ】そのうち三人でござり升か ト口のうちてほやき〳〵門へ出るとはやり哥へしらべうれしきミすのうちエヽごはんしやうへトうたひ〳〵八白やへひやしものゝくねんほとりに行と一所に行ク【源】一ッつげ ト茶のミ茶わんにぐゐのミにてかんしやくをおさへる二階は八郎兵衞をひき円すげいしやぶりをする へ秋かせさむく身にしむもい まのうらみハ長堀の人目をつゝむほう かふりにくし はらたち彌ひやうへ トそう〳〵がこへをそろへてうとふと源は此所ハ京升屋といふ氣とりになつてさけを呑

評曰

かうなつた所ハ二人の客ハ元よりおやま花車までが修羅道のくるしみなり治郎を寐間ニ而いろ〳〵かんくり何といはふいつそこふ言てのけふとせりふの下こしらへこゝらハ妓の常にあることなれば何よりもこゝろやすくかたづけるなりされども源ハちと手にあいにくい様子ことに顔見世衣裳の心あてに三両いふてあるが第一の修羅この妓に二人の客を此茶屋からつけたるやうに見ゆれども全く左にあらず次郎ハ外の茶屋での馴染なりしを連中が此茶屋へつれて來てから足がつゐて此茶屋にて呼出すやうになりたり茶屋ハ又。次郎ハ度

〴〵來ぬ客ゆへつね〴〵心づかひもなかりしか今宵究合しハ天命なり源ももとより千人万人のその中てといふ氣になりすまして居た所同し茶屋にてきつしりしたやうすな客をおれが耳へいれぬハすまぬと大のむかつき是皆修羅界の可責恐るべきや【作者曰】最前源に耳かしの時さぞうまきことをいふたであらぶこよひ寐間での仕打も妙であろふかの梅がへでハないがァ、金がほしいナァ

十界和尚話卷之一　終

十界和尚話二

餓鬼界

世界はなにか新地客は靫塩物問屋【徳】とし比は卅五六でつくりと肥て色くろく。にうわなりいはゞかう神棚にあろほこいといふ風ぞく着つけは京おくの胡麻がら一二へんも水に入たやつ花色うらの
わたいれじゆばんは浅黄もめん無ない半えりはおりは三すじ立いいとおせんたくことにすほうをかけてのきんつけかた入は江戸ときいしゆ
このあるのなりもへきらしやのたはこ入四ツ橋の源蔵かきせるでくれへきせるひきかしらいたしてすはつて居る此客は大のうまひもいくひな
り女郎へまだおくつてこぬと見へて花車とさしむかひでのんで居る肴は御
さだまりのしたしもの板もんか仕出しのすゞしふた〔らんさんおくれ升
【花】こゝへおいでゐらまたしじやあつたナ

ア【らん】なしミと見へて皆ッそはへはれる昔時日の出のかりミせとし比は廿二三九なほにして色白くむつくりとしておちつきししろ者鳴いうちへも大ていにむきそふなれとこあたまの道具といゝやうにちとわけありて此しまより出すとミゆる着付ハ黒羽ふ
たひに梅の折枝の江戸づま花色胴下着は八丈のつき〳〵一花やつたあと長じゆばんもそれにつれるわけくゝりとかゞ
ミ搭ハ初せ香のかほがよひと見へて目立たわけハ入そへの一つやまにて何かあうそらの男をおもひ出すやうなかほつき【花】ら
んさんおまへハしゆんだかほしやナア【らん】アイおつとしんきなことがあるハへ ト着もの、すそそろへて居る

【徳】酒ハどふじやな ト盃を女郎へさす【らん】アイ ト盃をうけてのむまねをする チト願があつて塩たちしています
トいふけれども此女郎大の大酒にてくふ事とさへいへはうどんそば切ハもちろんぜんざいかやくなんは迄かよひ付少しおごつた所ハ七分
やこのがハい蒸めし鯛のさしみなとさるによつて一統日々の身上ーよトもさら用かたの拂ひ多くいつでもしやく銭の鬼にせめらるゝなり
【徳】なんの願しや好な酒をたつからうとだめて恋であらうナア【らん】イヱかゝさんがきつう
悪いので此三日の日から七日の間塩をたちして白安寺の妙けんさんへ願をかけました【徳】それ

ハ心遣ひしやナア 此うち客のはらにあわして出すいろ／＼あるそのうちにとり分のさかなハたこのさくらに玉子のあつやき湯げたか／＼たつて何か鼻をもぐにほひへすつほんのころへりなり 【花】らんさん是もいけんナア【らん】モウおゆるし トいふたことハいふたれどいつもた・ならぬうまきものに右、十松なれば大きに咽がなるなり 【花】たばこハへ【らん】アイのミます【徳】こん夜ハ蘭か何もいけいてわるひの。其やうに氣にかけることハないひ。母者ハいくつじや【らん】アノ四十 口のうちでいくつやらしや アヽ五てござり升 トいふて居る所鯔又のうなぎいでんがく出る 【花】とくさん是てお飯あがらんか【徳】ソリヤよかろ【花】コレしな御飯ひとつよそふておじやほんにらんさんがあかりんことしつたら。こふハいふてやらんのに。いつものかくていふてやつた徳さん精出してあがれ。 らんは少く胸たくミがあるゆへおもひついた鹽たちもかふいふ百味のおんじきを見てハいつかふむねいたく口につがたまつてアヽとんなことをいふてのけたと是が氣にかゝつてもいもいはすあたひかほしこ居る 【花】サアよそふておあがりなされ トいふ所また坂もんの仕出しの大平杓子かさ三りやうしそへて持出る 【らんかおもむ】 アヽ此大平ハ鯛のミそつつミか但しはかきの玉子とぢかそふでもあるをひやつぱりかやくあんへいであらふ野から川ろほと、さかなかミなわしが好きのもの此間ハ川せんしきばも手がたかわるひよつて腹がきつうさびしいこんなことなら此こんたんをへん長のしけさんてしたらよかつたのにアヽとんなことをしたと大にくやミあたへくろしむ是こそかき界のくるしミ也 【徳】イヤモウいけん／＼ いつもはらんどいふ大のすけてがあればなんほあつても宿かへの荷かたつけるやうにらちはあけどこん夜ハ徳ひとりゆへけつくにつかへそるあんはひかさによそふたかやくあんへいも長いもときくらげにはしかけたはかりなり 【花】モウわたしで預ますちとの間御休ミなされ【徳】そんならいにしなに寒からふ蛎雑炊こしらへて置てたも とハ客もよほとの大松なり 【花】サア二階へいきなされ トたはこほんと茶をもつて女郎ハうらへ行ク 客へねまへいるとすくに床ころんで酒のゑいのさめろくすりをのんで居る才車はふとんをおさへて下りる女郎來る 【徳】ケツフウ／＼ だいふよふた【らん】いつても酒か過ますチト養生なされ頓死がはやるげなわしがしつている酒やさんも頓死でしんでしやあつた ト帯口

をときふとんハうちへはいり客の帯をとく客へとう〱ねふる顔へふとんをかづく女郎へしく〱となひて居るゆへ徳へどふやらふびんになつて【らん】モウシ〱 トはなをつまんたり耳をひいたりする 【徳】エ、わるいことすな寐させ寐させ ト

【徳】何を泣ぞ 【らん】なんほてもわたしか思ふよふにもなひおかたしや 【徳】ソリヤ又なせに 【らん】私も恥かしいことてこさり升かあなたにハ惚ていますそれにあなたのいふてじやあつた事が皆噓じや 【徳】とふいふことで 【らん】サイナわたしがどのよふにおもふても眞が知れませぬ 【徳】おれもゆく〱ハ内へいれるつもりなりやこそ大がひ是迄の仕打知ているで有ふぜんたいこん夜でもじや此やうにながふ居ハ内の若者へすむものじやないけれども惚ていりやこそ夜のふけるもかまハぬ氣になるこんな事いふたかとて勤するものといふものハ夜の更るのハなんともおもはぬ 【らん】まだそんなことといひなさかそんならなせ寐なさるわたしが起したらべこそ目が覺たしやごさりませぬか 【徳】理屈をいふなわしが悪い 【らん】モシ私しや一向辛氣でならぬ トいひつゝ徳か□□□□□へ足をわりこむ□□□□□徳心うこく 【徳】母者の事ハ定て心勞じやあらふナァ 【らん】サイナ其ことで噺しかごさり升こんどかゝさんの病氣について京から年をまして五兩程おこしてくれといふて來ました私しやひとりのかゝさんのことじやによつてつらい年を增す事ハかまハぬが來年の二月にあく年を僅な金て苦界しますもつらしそりやひとりの噂さんへ孝行にするとおもへばすむけれどあなたにいふた事もあるしそれに相談もせすに年

を増したらあなたへすますモシナどふぞ三兩程かしておくれなさらぬかそふすると夏しておくれた帷子と此笄をやつて都合しまして五兩になり升それさへ嚊さんの方へやつたら私しやなんにも案じることハございませぬそふして來年の二月になりましたら私しの勝手次第のことゆへどふぞナあなたの内へといふてハなるまいけれとナモシト ひつたりと□□□□□せかむゆへよくへやる氣になり 【德】そりや貸てもやるがせんたい是迄のことがとんと別らぬ節句の日柄の時でもしやおれが日暮に來る事を知つて居て二三べんもこゝな内からせかねは來やせず トいひ／＼紙入より金入とり出し歩金で十一切出してやる口の内でハ精進日にしらみころすやう／＼念佛の二三べんも唱へて居るなり 【らん】嚊さんの方へあげたら嘸悅んでゞございませふ トいたゞいてかゝみ懐へいれる そふしておそなつたら惡ふございませふあひなさらぬか ト德の枕の下へ女郎手をいれるさて此女郎大の文彌故作者氣かわるくなれは爰に略す

評ニ曰

此女郎此客に眞のやうすにミゆれども大のすかなり又此客ハ大松のうへ口の掃除が惡く金襖にてちと請憎けれとうまひもの喰におもひ入て一年ばかりの馴染也今度かふいふ手で客をおろし其金にて鮒又が泥龜代鳴場の貝燒酒屋ハ坂町に居時分から大吉にてとり余程敷になつてあればさすがに義理をうつて爰にいても坂町迄とりにやる夫も中拂はやらねバならす身あがりも有し其借錢がつらさに母親を病人に拵へ七日の塩だちから自案寺の妙見樣迄を

さきにつかひ大まひ三兩にはなりしが定て座敷にあぶれてあつた鰻あん平玉子の厚燒さぞ喰たかつたて有ふ是餓鬼界のくるしミといへ共僅三時の責苦に三兩もあたゝまる事故二度の勤妾宅出給ず川狩川ではてることとなり

十界和尚話卷之二　終

十界和尚話三

地獄界

世界は南赤町にて時候ハ六月土用のうちしかも午過天神の柳にハ蟬の聲喧く本堂の鬼瓦までか汗をかく時分門にあたる日の影を見ても霍亂しそふな暑きおりなり晝寐の間を來ると見へて客ハ南堺筋田舎行の傘屋の仕事仕【藤兵衛】とし頃廿七八さかやきは正二月の松よりも靑くいろは木づなんばのうち綿よりも白しあたまを半分頭にぬきあけわけハざんぐりの二ツおりきつけは地白にくつわの新形のゆかたさなだの帶して右のかたをぬいでいる脊なから腕へかけてさくらの折枝のいれずミひぢりめんのふんとしふところからちよひ見せにて深草うちわ一はいに藤の字を丸にかいたのであふいでいる所へくる女郎ハまへおび【しつ】年比はつくつて居るによつて廿五六に見ゆる其實はしらずせいすらりと―こ顏長くいろあさぐろくかミへとやをわつらひしと見へてはえきへうすく入そへの嶋田なりゆひのまたとかいなに入ほくろを灸てけしたあとあり着つけハ越後の井の字がすり但し八ツ時分なり紅しほりのさらしのじゆばん尤古し帶はあついたの白地三雲やの仕入ものとミゆるせりふおもしろく寐閨ハしつほり年より客のはまるゝろものにて此里の全盛夜るなどはちと手まへらぬやつなり ◯ 女郎ハあせ手ぬくひてなミたをぬくひないている【藤】ヤイくさり女郎めおのれハ一たひ何とぬかした外に色事ハせぬとぬかしたじやないかこりや聞われゆへにな傍輩どもへ面があハされぬせりふもある親方にもすまぬ出入が出來たわやいおれも我か知つている通りの邪神しや大がいおのれが男ハ知つて居るサア所もぬかせこん夜立引にゆくワイコリヤぬかさぬか　ト女郎のよこつらを二ツ三ツまくらでくらわす足にてける女郎はからだを藤につきつけ　【しづ】サアどふなとしいどふなとしく

され最前からいふ通り何の外に男を拵て能いものかおまへも知つての通り京からついて來た團子の吉さんかつくのはつるのといふた事もおまへか挨拶で濟んだぞへそれから出きた此色ごと丸一年になるわいなわしもつらい中から無心も聞たり貸にもいたゆへ貸錢もよつぽと出來たわいなまだ是迄に此里の人にしらさぬようにしている心づかひどのように有ふぞひなそれに何じややらといやミた又しても〳〵何そいふと殺すのイヤつくハのとそりやおまへの方になんぞよひことが出來たのじや【藤】ヤイまたそんなことぬかすしぶとひ幻妻めじやコリヤやい聞あがれおれも濃血押ねば言やせぬぞよ此月へ入てから已ハ三夜迄どふ六の所へかしにうせあかろふかな　トかたたいからして　まだある此五六日といふものハおれも方〳〵の茶やから呼出したヲヽ一夜さも泊りハ出來ぬおのれはしつてけつかろそのうへに言傳ひとつせぬから所詮根生玉のくさつた女郎め突殺してこまそふと思ふたけれどマア一通りいふてからとけふまで延した今日來たのハチト了簡あつて來たのじやどのよふにごしてもぬかさぬ男ヱイハ　トいふて二階をおりるこれほどの妓なれどもあまり心よくはないかして男にとりつき【しづ】これ待そふでわなひ外に　トいふをきかずふりきつて歸る　○亭主はむかひの様先て将棊さし〳〵内を番していたことゆへ二階の騷動ハしらず藤兵衛の出ていぬを見てむかひから【てい主】モウいつか早ひな晩に出なをし〳〵

評曰

かふなつてハ女郎ハ今も突にくるかとうそこわきもの此もやくの仕舞ハ肝入の手にわたり根ざらへの一件になつて壹兩か壹兩二分て男の手ハきれるべし男もつく了簡てはなけれども退代をせしめんとの謀斗にていやミのたらくゆするものなり女郎もどぶ六の客にかしたのハ全色にあらずよき鳥にてちと下りる代呂物故かしに徃て銀子をとらんとの狂言なりしをハや藤か聞出して金にせんとの工ミなり女郎も初めからとふ六の客ハこふくと藤に打あけたら又壹兩も貸にならふかとつゝミしがはたきなり是双方に欲心ある故かくのごとし誠に地獄界の苦しミにて炎暑の勤ハ焦熱地獄出双庖丁のいやミハ劔の山の責苦肝入の手にわたり根さらへの金に年を増してハ一生ならくの底に沈ミ親方がせく眼ハ淨波利の鏡よりもするどく見る目の泪を忍ひ嗅鼻の花敷を賣ねば焰广の帳の調に三途の姥にせたげらるゝァ、されハこそ苦界十年亡者のこゝろ

ある人の作色地獄に曰かくのことく苦界の間地獄の責苦を不便におもはゞふられても腹立べからずもてゝもはまるべからずよけいの金あらば苦しミを救べしよひ程くに遊びて足事を知りハやく丘隅にとゞまるべし　下略

十界和尙話卷之三　終

十界和尚話四

畜生界

世界ハ赤町嶋の内も呼ると見へる客ハ北邊刀屋天手連中の指折【風柳】とし卅一二にていやミのなひ男ちとせりふかり着つけは紬の茶じやが嶋のあわせに花色ちゝぶのうら縹ばん唐ざらさにくろさやの半えり茶はかたの帯を前へまわしてねころんて居る女郎ハ島の内鯛利の抱【綾絹】とし廿四五いたつてうつくしくくろちりめんにあけはの蝶の大いもん折づるを江戸つまにしてねまき衣裳帯ハいと錦七寳の形かゞミ帒とのへ紙とたつまにもちそへ屏風の中へはいり行燈の火を銀の笄にてかきたて寐間へすはり風柳にもたれてたはこたついてのます【あや】モシせんとからのことハどふじやいな私しや正月まつよふにしていますそれに又二階でハいつ花さんやたつ彌さんが毎日〳〵嬉からふナアトおだてられるモウ〳〵一日もハやふひきとふてならぬハへそしてとんと呼にきてもつとめが手につかぬわいなト首をかたふけ男の顔をミる此はなしの間始終小ごへなり【風】とふのかうのといふておれも急でるけれど江戸から來る金が段〳〵隙がいるせんとそちの内へこゝな亭主を掛合したら百廿両いるといふそれておれも此節はちときまつて居ソリヤなんは入てもひかすつもりじやか【あや】サイナわたしも其心當で外へ無心をいふてやりましたがこんなことにするのとハしらずおこしました私の手に有てもわるしあなたに渡しますよつて身請のたしにしておく

管鳥

れなされ（トふところより小判で廿両程出す男ハ手にもとらすなかめながら）【風】それハ私か手に有ても同しことじやマァそちに置たがよひとふでかふ云出した事ゆへ節句過たら妾宅にするつもりじやそふしてひかすとすぐに置所もせんどから吟味して置たこんな事も先へきまりをつけておかねばならぬ【あや】アノモシ　その家わどこらでこさり升へ【風】マァ米や町【あや】アノ米屋町といふのハ米やのたんとある所かへ米ふミがおだてるじやあらふいやなことじやナァ【風】ナンノマァそんなとこじやなひ【あや】そしたら堂嶋かへ【風】それハ米相庭のたつ所じや米や町といふのハ舟場の方じや【あや】ムゥそんなら泉利さんの方じやな【風】其泉利の近所じや【あや】遠所しやナァねり物や初日講にはわしや駕て來ふよ【風】そふいふ事でハつまらぬやつぱり此里にいるやうにおもふて居（トいひ〳〵さいせん中居か渡せしけい子からきた状をおもひ出しはなかミ入の間から出してよんで居る）○（此うちにおやまハ□□□□床間にいる）【あや】アノ私しや妾宅になりましたらのせの妙見さんや春ハ伊勢参りもさしてもらふはへ（客だまつて状よんでいる）【風】ナンシヤ　としてハ月見の日から御出させ下され忝そんしら〳〵ホンニあさつてハ月見じや此日ハ紀の八ののど町の下屋敷へ月見に行く約束したが又買捨屋じや【あや】モン下屋敷行ハことハりいふてやめに仕なされ私も其日は今の金をくれてじやあつた御客の約束しやけれとどふぞ早ふ仕まふてこゝへ來て居ますわへ【風】（心のうちにハうれしいけれどわざと）そんな御客こそ大事に仕たがよひ【あや】イヤイナ　わたし

やいやで〳〵ならぬけれど無心いふあてに勤て居ますのじや【風】勿躰ない事をいふものじやしかしをれもそんなことでとられたことがあるが皆そんなものじや有ふナア【あや】モシナア眞に惚てからといふものは私も覺がござり升が無心がいえるものじやござりませぬアノ私の妹が江刕の神里から松江といふて出て居ますが此盆前にも三歩かして呉といふて來ましたが此間も聞ゝますのに嶋の人と色ごとをしていつこつまらぬといふことをきゝましたゆへ私しや狀て異見してやりましたが惚るとつまらぬものじや　トいろ〳〵はなし最中此世界にひきかへ一間となりのあひ寐間には坂丁のおやまふり袖つめにせぬとちと見とむないといふ　がらなしろもの容は五十位とこへてむかふ歯のぬけたる所より聲のもれるといふてうしにていのふとすろおやまたとらまへてのせりふだん〳〵と聲が高ふなるゆへ右の二人はしはらく無言になつて聞て居る【あひ寐間客】是夫ではすまぬなんて去のじや　ふり袖はちと口たきくしろ物と見へて【ふり】あなたのやうになぶりなさるよつてじやわへ【客】コレ其樣に帶をして何にも去支度することはない【ふり】私しやどふぞ去しておくれなされあなたのやうに二度迄あひなさつてまだわるひ事をべしなさるなんぼ勤でもつらふござり升私しやセウ去しておくれなされ　トいふて下へおりるこのどさくさにとなりの二人は神代よりあいもかはらぬ□□□□□□□□□□殘りしおやちはひとり寐間にすはりてたなおろしに貳〆目もたらぬといふ顔てたはこスツパ〳〵

次の卷を見るべし

十界和尚話卷之四　終

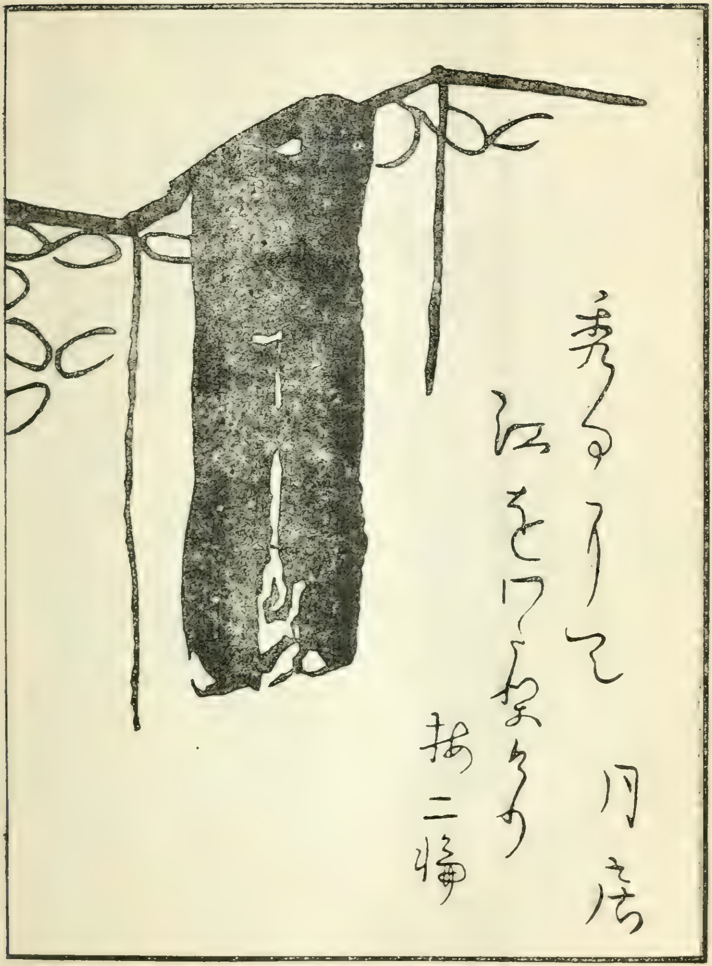
十界和尚話五

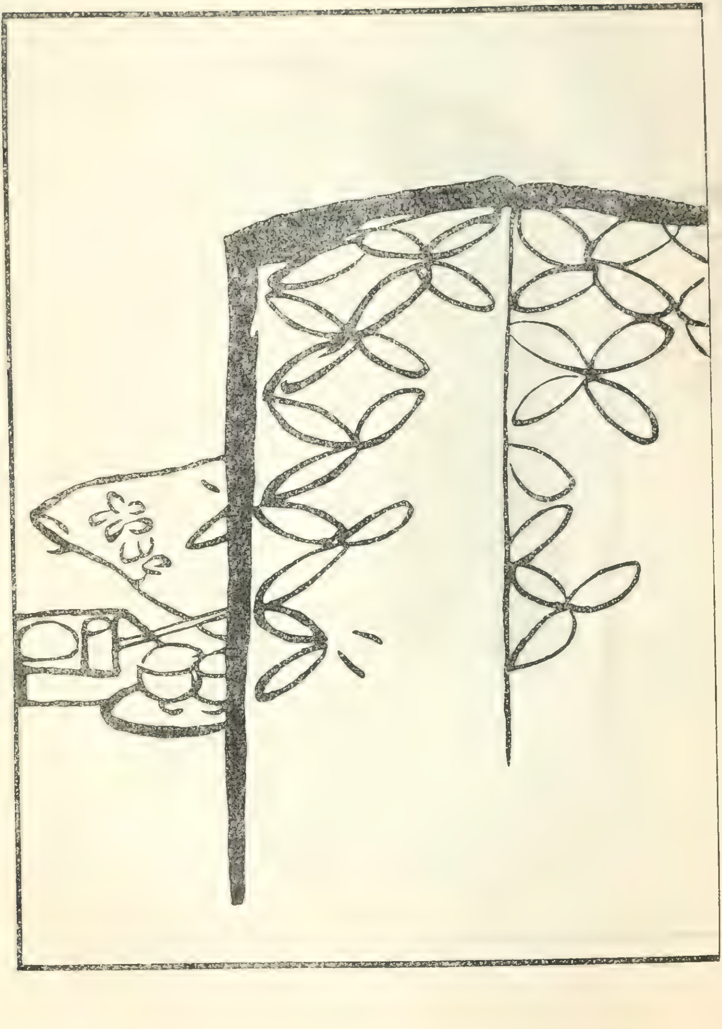
畜生界其二

世界ハ江劢客ハまへの刀屋女郎ハ此嶋神里の抱尤一チ見【松江】としはたち位丸かほにて少シ鼻のほとりにうすいものあとあれどよつほと愛が有て笑ふと左の頬にゑくぼのいるかほ着付は一げん故發すねま行燈ほのくらし【風】この春ハ永うひへる雛介も市の側へきたな【松】ハイきのふ初日でさんじました【風】どふじや入るかの【松】ハイ【風】おまへハ見たよふななんでも南で風術ハ此おやまのことハくハしけれどわざと知ねかほしてくり出す也【松】おなふりなさんな【風】ヲヽあの嶋の内の鯛利にいてじや有ふがな【松】ムウそりや私の姉さんでござり升【風】フンおまへの姉さんがたい利ニ出てか道理でよふ似てある【松】そんならあなたハ姉さんも呼なさつたナ【風】ナンノマア【松】嘘つきなさる顔に書てある【風】サアたしか二度程呼んだが名ハあや絹とやらいふの【松】アイそふてこさり升アノお馴染ていなさつてからト客のかほをゆびさししてへらふ【風】おまへ共やうにいふてじやけれとタッタ二度ほか呼やせん【松】わたしも大かたお掃なさるのしやあろふナァ【風】なんのこちらのやうな者か馴染になつたかてゝおまへの爲にハなりやせまいし又面白も有まひ所詮馴

染になつてくれる氣ハ有まひ【松】あんなことおつしやる私の方から惚たてゝ綾さんを呼んだり氣の多いナモシ【風】サアわしも綾さんを呼とげる氣じや有たけれどおとなしものじやによつてこちらとハ角力があハぬ【松】嘘つきなされ綾さんがなんのおとなしいことかあつて【風】それでもしつぽりしたものしやあつたぜ【松】あないに見へるけれどナトいふて跡をいわぬゆへ【風】ナンジヤいふてかし【松】サアめんよふ兄弟といふものハ中の惡いものじやそれでも嶋の內と爰と離れてあるとなつかしかろがな【松】ナンノモシ妹かとも思ふてくれぬ姉さんナント思ひ升もので【風】それハそふと去年の秋なんじや綾さんの評判があつたがおまへ知てか【まつ】あなたも聞なさつたか【風】サアちよつと聞た【松】サモシ嗚呼ゆふハてゝござり升わいな【風】いつたいとふいふ譯じや咄してかしんか　ト客へくハしう聞たひ腹ゆへ何がなくり出さんとする女郎は此客いやミのないすつぱりした男ゆへ飾りいやでもなし又一ツにハなしみにもしたし花もかはそふと咄して床をひつはる【まつ】アノかうでこさり升お客ハ北わきのおかたアノ何とやら申ましたヲ、それ風柳さんといひ升ゐらいせりふしでござり升げなそのおかたに綾めが欺されましたのじやわいナア【風】とふ欺れたのじやゐ【松】かふてござり升わいなせりふもろくに出來もせぬくせに內へ來るお針さんが金ためて高ふ利たら取て貸してしやかねを借てそふして風柳さんていた時いふのには此金ハよその客に無心いふたのじやによつて秋の身請のたしにしておくれなされとい

ふせりふでござりましたげなけれども其お客ハ其かねを取すに九月の節句前にたら江戸へ去てしやあつたげなそれにまだおかしいことハ廿兩の金ハアノ一日に小判一ッに貳匁とやらのかり賃が出升といな【風】フンそれは利足といふものじやそれからどふしたへ【まつ】それからなモシ其お客の江戸へ往てじや有た事がそのかねを借てから十日程もしてから御連中の方から知れましたそふなそこで廿兩のかねをお針さんへ返さんと利たらがたんといるよつて其金をかへしましたそふなところが十日の間にアノ六兩の余利といふものが入ましたといな【風】いつたひ其かねを拵て客にやるのは惚てゞもいたといふやうな事か【まつ】何んのいなあの姉めハ大のやつしでこさり升名は申ませんが南の牽頭と譯がござり升【風】ムゥ【まつ】それに風柳さんが身請もしよよふにいゝなさつたものじやによつて廿兩も外の客からおろして來たようにいふて眞といふ處から身請さしてそしてよひよふに愛想をつかされ太鼓と女夫になるといふ狂言てござり升わいな【風】（ためいきついて）それからとふしたへ【まつ】そして御客の方へハ身ぬきに百廿兩入るといふてくれと親方に段〳〵賴でな【風】ムゥ【まつ】六十兩で何もかもすつぱりとぬけますのでござり升わいナァ【風】フゥそんなら跡の六十兩ハ親にてもやるのしやナァ【まつ】ナンノモシ親の方へでもやる樣な心なら私と中ハ惡ひ事ハこさりませぬおゝかたお針に廿





兩返したら跡ハ今の色にでもやるのであろぞひなそうしやによつてろくでいきや仕ません【風】それハゐらひつほせりふじやなやつはりたい利に居てか【まつ】イヽヱ牽頭と難地て茶屋しています【風】フゥそれハよふ身ぬきか出來たナァ【松】身拔仕だんじやござりませんいつたい去年の十月に年かあき升のじやか今の六兩壹歩と外に借金が有たので此正月の月一ぱい働て居ましたよひ氣味でなりませんそれに能かとおもふて此間もおまへハ年がゆかぬゆへ悪い色ごとをすなといふ狀をおこしていくさる　此咄の間風柳ハけつくくわしい咄を聞て心のうちでは嬉しいやらにくひやら鳥海彌三郎か天王寺合戰て楠か謀にむしたてられたる氣持なり　【風】その客ハとふして身請せなんたのしや有ふな【松】サイナア　風柳さんといふのハ天手連中のおかたでせりふにかけてハひどひものじやげなとふて牽頭さんのことが知れたので又うらをいたのしやあろふと評判がござりました今の御客ハそなあちらこちらに欺しなさる　ト咄さいちう小めろか屏風の外から　モシ久さんモゥ中てこさり升そして松さんを貰に來ました【風】モゥ去ぬ〳〵　トたつて格子からそとをのそいて　今夜ハ出世藥師の燈籠がはやふひけたな　はおりを着〳〵下へおりる此客此女郎に一番狂言をする氣て今宵ハ寐間なしにいぬる

評曰

島の内の女郎ハ稲荷の鳥居を十も越した代呂ものなれどももと此客せりふしにて無據眞といふ所から廿兩もこしらへ見せんならんといふ義理に成て工面せしも塩梅よふいたら牽

頭と女夫になるへしとおもひの外客の仕打にて狂言ハ六兩二歩のかふり客も又身請のことハとつてもつかぬ事なれども彼寐間にてふつとひろげた松やの風呂敷此女郎が工ミの下心方却て壺へはまりたるなりされとも此奴頤るせりふしといふべし客も此金を見てからハちともてあませしが急に出來た中間の江戸行半年ハかり隙入しハもつけ幸なり後ニ松江を呼んで綾衣の狂言を聞てハ定て心底に畜生めと思ふたで有ふ女郎も六兩貳歩の借金が出來た時此客を畜生のように思ふたで有ふ

十界和尚話卷之五　終

十界和尙話二篇　前編のつゝき追而出し申候

浦島太郎筥傳授　全五冊　近刻

此書ハ石部金吉うた嫯子をくとき落すにたよりある書也

寛政十年

午孟秋

釣鐘屋權兵衛

輪違屋八兵衛

河蘭佗說

借着行長著

青樓 阿蘭陀鏡

全部 五冊

嶋原の傾城のはじけなき穴をさぐり
己惚客の遊びのはなしをよせどく
書あつめたる本なり

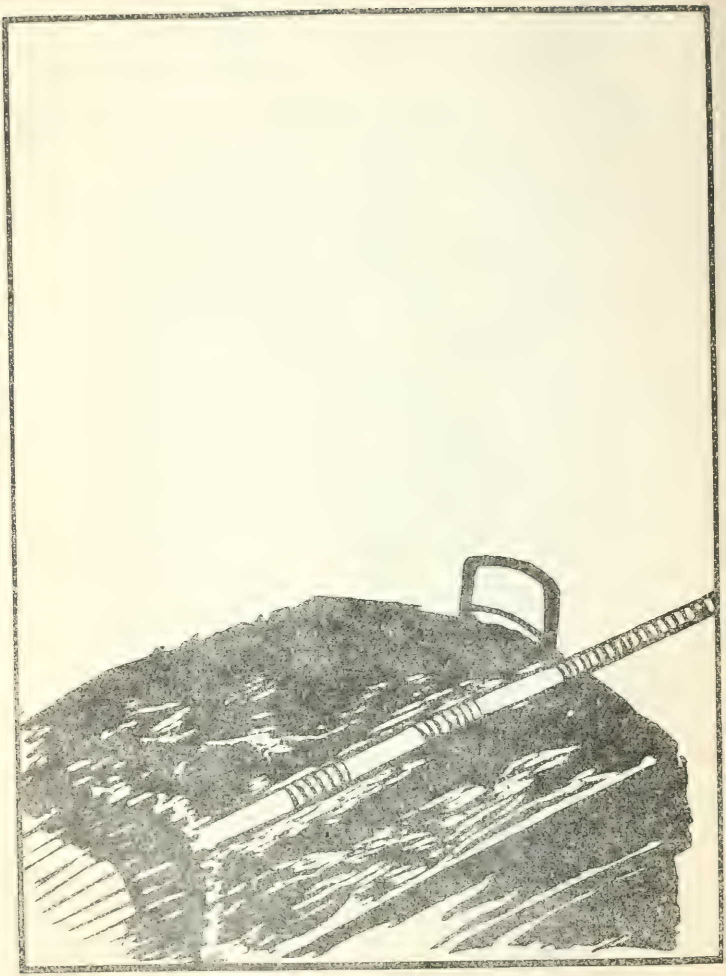
銅脈先生跋

青樓阿蘭陀鏡序

老ての計策を思れず。眼前の太平樂を樂しことし。唐土の楊貴妃。我朝の小野小町も手に入れて。金の生木も鉢植にして置顔し。若きハ二度なきものに。唱家の交りせぬ人を愚とし。一寸斬るも。二寸も同じ罪と。悪玉の一言ハ背かずして義理をたて。情をかけ。財寶を費と。言ずと是ハ御推もじ。今あらんだ鏡にかくれバ。眞綿で首の憂思ひ。まいらせ候の長文れ。牛の尿十八丁。何がなにやら親父の異見。ちんぷんかんき身にしまず。終に狸の陰嚢。八畳鋪の裏屋住居となり。尻切艸履の郭通ひにお足の痛む時もあらバ。夫ぞ誠に出口のお茶でもあがつ

て。お休(やすみ)なませとしかいふ

借着(カリキノ)行(ユキ)長(ナガ)蔵述



阿蘭陀鏡巻之一

詩云緡蠻黄鳥止於丘隅於止知其所止可以人而不如鳥乎といへども。日暖く。柳青〻として吹風に。誘れ出る小息子や。諸生の友の論語讀も。かたきをうしなひ。終に傷寒論化して。めれなの符牒となること。是未禮記の月令にも見えず。兎角當世は。江戸風俗言葉さへまぬれば。大通とか。粋とやらんに心得。着物の好も長羽折。書出し能書や評判付も。爰に入ッたる紙入は。とんだ大きい懐の。内はから〳〵下駄の音。胸は算用の思案ばし。思はず直す衣紋橋。戀の中道細長う。毎〻までもおかわりなふと挨拶は。皆此里の通言や。お客を二階へ揚屋町の。こゝに噂のとり〴〵に〇去揚屋の二階に客を盗だの盗まれたの。それが済のすまぬのと。花車が挨拶やりて引舟が詫のと大もつれ。隣坐敷は江戸化言の諸生。上﨟八丈の紅裏小袖に。紫縮緬の長羽折といすりかけ。是見て呉いといはん斗りは。五文も好ぬ顔付。斑毛齋犬順。椽の手摺に顋をのせ。庭をながめて居ながらも。流石醫師だけあつて。聞はつゝた俗語を間違ながらおり〳〵つかふ。今ひとりは番馬通見とて是も同じく犬順仕込の江戸なま

り。おつとせが波枕といふ身ぶりで。根緒さきに手枕し。無性に惡口を言。〇藝子三人來る。自前酒を昆布卷で一杯引かけて。來ながらそんな顏もせずゐて梅干を米かミへはり。小指のくゝつた手で帶を二ッ三ッたゝき笑ひもせず。客の顏を見ながらョ、しんどお出ナといひ〳〵居り。三味せんへのぼり付。水鐵炮を突といふ身ぶりで三味線をつぐ間もだまつて居ず。中居と咄しながらお定りのうたちよつとひき。三味線ハ尻の方へ押やり。方隅に硯盃の横昆布さがし合ながら。客がよいのイヤわるひの。髮結さんハお清さんの。お猶さんのと。ロ〳〵の噂ハ。金魚鉢小家の嫁が亭主噂や漬物斷に篭し（犬順ハ皆おれにほ印であらふとおもふに。そばへよらぬゆへ少しけらた立）【犬順】コゥおまへがた。日南へ出したやうに。かた隅にばかり居ずとちと爰へ來ナ【通見】犬君足下右の花賓賢のせりふどうした（花賓賢とハ諸生仲間で美婦を言）【犬】（盃を下ニ置）マァ聞て呉い。おれもいろ〳〵方を付て見たが。一躰最初ハ沈脈の症のやつだ。そこで内へいれる約束もしたよ。夫が段〳〵浮脈となりおつたゆへ。所詮だと思ひ去緣したが。あの婦人も雀躍の症と變脈だ（ト脈論でせりふをいふ）【中居】ハイモシおさかな（トかまぼこをはさむ）【犬】此かまぼこで森口の茶席に。利休もしたゝか腹を立られた。すべてこゝな酒をのむハ。鰒汁喰よりハまだおッかねエよ。見子も長く此酒呑ぬがゐいさァ【通】そうだョ。大かたあの肴ハ斑猫の骨切だあろ（トはもの骨切とハちとむりな口合じや）【中】そんな惡口斗り。ぬたの鉢の高名とやらい

わずと。つぎめに一ッ呑なませんか【犬】こいつァ一ばんはなせる婦人だ　ト一杯つがせ・ぐつと呑而うへほれバ・琴野ハ膝を少しあとへひき。糸と顔を見合せ小聲で【藝子琴の】糸さんァノ木津もよつほど二十四じやなァ　ト惡口いひながらも全くばちへたゝミの上にハおかず　○木津とハ此里で坊主の事二十四とハ五九十といふ事【げいこ糸】琴野さんちよと耳かしんか　ト耳のはたへ口をやりあいつハ郭へござるあんまとりに　似たなァ　トいへば顔をちよと見て笑ひ〳〵【琴】ほんによう似た。一向逢ひなしの正中しや【犬】なんだかおまへがた。おれが顔を見てたれに似たの。かれに似たのと身替りにでもたてるのか　トいふも心の内にハ。あら吉かひな助にでも。似たかといふ気どりで無性に衣紋をつくり　最前から隣がとんだ高言だ　トふすまを少しあけ。のぞき　濟のすまぬのとゝ井戸替の跡じやあるめェ。公ゥ　アノ老三版を一寸見ナ。葬禮の辰頭といふ顔だョ【通】なんだか痔持が屎をひるといふ顏で。とられたの盗まれたのと。江戸芝居の友切丸じやあるまい馬鹿〳〵しい。【犬】此間江戸北樓。扇子屋の瀧川おいらんから。俳諧の卷をわつちに點删して呉ひと登したョ【藝子櫻】ァノモシわたしが詠だ發句直しておくれなませんか。そして付句の忌言ハどうで【犬】おまへもまんざらでハあるめェ。マァなんとだ聞しナ。トいふに櫻ハハイト口をうごかし

酸漿の實をしぼりけん秋の暮

【犬】随分それでも句になるよ付句の忌言は又むつかしい　ト。智者とも。賢者ともいハれんつら付に。墨ながしの貴冷扇をたづさへ。初心ゥ茶をたてるといふロ本し。小鼻をいからし。坊主あたまをふりたて丶。　夫誹諧ハ連歌の業にして貞徳に二物となる。末ミの達人綾錦に詳なり。

今専蕉翁のながれをくむ。勿論付句ハ式法忌言多し。とかく初心ハわからぬ句を鼻屎と共にひねくり出さんと。こゝをさいこ疪と案ず。点者の透逸と究むハ是。鸚鵡能言へども飛鳥を離れず。吾能言へども粋言を離れず、マツ薩摩芋と熊膽が差合ます。時太鼓と線香ハ客に忌ます。夫も約束と變ずれバ七句去てかまいませぬ。間夫と自前酒ハ表を忌ます。是を覺へナ。わつちが此頃の句に

古池や蛙飛こむ水の音

【櫻】トテバもとまりますかへ【犬】世俗にいふ。四角な鷄卵に逢た泥人が。やかな。なをらぬるだ（ト面白ない口合をいひ。しらぬとゆへまぎらしている）【中居】櫻さん其發句とやらで思ひ出した。アノ行さんハ來なますかェ【櫻】おまへハまだ聞ずかへ。せんどのナ。夫。事から彼や是と、アノお方の内もやかましく、こつちの内もあの通りじやゆへもめて、それから別れたわいナァ【中】（首を少しあとへひき）そうかいナ、どうやら瓔珞らしい。ほんに櫻さんの前じやけれど。あんなしんのあるおかたハないもの。そして郭へお出なますかへ（トいへば。ばちを持ちながらひとつまねいて）【櫻】マァ聞ひナァあれ程までになつた中。わしも餘り心能もなし來てならちよと見たいとおもへど。其後來なますことハきかぬ。ゐらきまりじやげな。一いきハナァ爰へはなに來て居ても。こちらのと聞とぬけつかくれついた

が。今ハ一向しゆミ方じや（ト聲はりあげ三ハきれても二世のゑんトうたひさみせんを二上りにしたり。三下りにし。ばちでひざをたゝき。客のいふ事もきかずに咄してゐる）【犬】手前らハあちらの人のこちらのをと。火鉢の爐いらふやうナこと。餘り座敷で舊客の咄ハよくねェ。やぼ客じや。馬に榲桲だといふ所へ。中居が耳の傍へ來て。何やらいへば鈍な顔して默頭てばかり居る。藝子ハ見ぬ顔していれど。迎ひの事と推し。外の咄に紛らし時鐘をかくさんと。面白ういひなすも。勤の習ひとて。世に苦界の女ほど商賣にせいだす者ハないとおもふが。なんと皆さんそうじやねェけェ

阿らんた鏡巻の一　畢

阿蘭陀鏡巻之二

酒飲本性をたがへずと。めれんになつても。蠟燭のかハりめに胸をいたむること。醉醒の水にひとしく、腸に入ミ。何となく中居を恨ミにくむより外なしと。通見ハつく〴〵顏をうちながめ【通】手前ハ守り本尊が不動かしてとんだこわひ顏だちと蛭子さんでも。信心して笑ふたがるヱ（トいへど中居へそしらぬ顏してゐるゆへ）【大】併手前ハとんだ仕合する相があるよト云へば。中居ハ傍へ寄。手の筋も見ておくれナ。わたしハちと約束した人がある。そこへいかれますかのイヤ姉さハ大阪の新町にいられます。おやぢハ土もちで。かゝさんハ兒買のと虚言とハ知らずよいといふと眦て。くさじのことや何もかも　内證の譯を咄す、藝子もわたしハこんな年の人。さきの心に。しんがあるかどうじやの。イヤわたしハ難義をするといふこと。さうで御ざりますかのと。錢の入らぬことゆへ眞に成て尋る。中居ハよいといハれたとおもひ【中】モシナ此煙草ハ遠い奥州とやらいふ。奥のお客の國から出る。狼の川原とやら。ちよつぽりのんで見なませんか（狼ハ川原とハ仙臺の銘葉也）【大】なんださいの川原だ【中】アホウ。おいの川原じやといなア【大】おいの川

一三

原だ。従弟の川原があきれる　ト云く　こいつァいけねェ香だ。三五夜の放疪ときている。一服で嘔吐の催だ【糸】おれんどんァノ奥州とやられ。浄るりにある所かい。どんなお客じやへ【中】鼻の高い脊のひくい御侍さん。大方たとへの通りどこやらが。あの割合ではおもひやらるゝ　トロへ手をあてハヽヽヽトわらふ　【犬】なんの馬鹿らしい。鼻が大きく高いのイャ小男のとそれで大きくば。江戸の團十郎や。又婦人なりや。此郭の中ノ町とやらに居た。中居などァ馬から干鱈だ。何事もミな其物に應たものだ。そこで孔子といふ人が君ゝ臣ゝ父ゝ子ゝト。婦人とおもひ。とつても付ぬ事を知た顔して引ことにいふも。博識しや。面白いおかたじやと思はれなば。なんそのはしかけにもならんかと思ひ云。また藝子中居がたばこ入扇子などを見て、こりや一向粋じやおくれんかといへば。いやともよういはず。あなたのことなら。随分〳〵とばかり。いふては居れど心にはけふお旅町で銀壹兩に買てきた物をと。夜中にかへり戸をたゝくよりは猶胸にこたへ。いけぬ婦人なれば一入おしう思ふ。犬順は櫻を見て。よその繼めと何がなわるくいはんと。コヲ通公　トあごでおしへ　アノ妓舞が紋見ナ。金箔で石塔へ付うといふ紋だ【通】うそァねェよ。時に公は。角唱亭の譯合聞たか【犬】おうさおゐねェ。腸を所持しておる。きやつも大黄劑の症と來ているョ【通】アノきのた。米焼めは早打じやあるめェ。夫にいつも手綴が

けで茶をくむべらぼうだ【犬】あいつ黒い顔にほうげたと下駄の向鼻緒ばかり赤くしおつて。嘸臭氣甚しかろ【通】そんなに悪いふな。あれも去男と紅閨の枕をかハす氣取で契話ッてるヨ【犬】そりや大方糞問屋の男だあろ　トらツちもない悪口を あたひつこういふゆへ　【中】モシナ咄ハ庚申にしなましてマアちよッとお吸ナ　ト吸椀のきせた 取箸をのせ出し　藝子さん方もいきなませんか　トいひ〳〵火ばしでらふそくのしん切る へ。はたの喰たおそい顔してこぬといふ負 おしこの手品也。藝子ハ一口吸て見れど。あまりうまうないものゆへ。何た らどんっちよつぼりやりんかと。椀のふちをはぢき箸をふいて中居へやる　【櫻】琴のさん一向粋じやなア。ちと盃まわしんか　トすべて藝子中居のことばハ皆跡 へ引ク。迷子よぶ氣どりでよむべし　【琴】モシナはゞかりさんながら　トいひさま紙を出して肴をうけ びたはさめべ。いやいなア此やう になろまで藝子せいとハあんまりむごい。なんぞといや こないひくさるト盃をさし。モシお一ツおあがりナア　【犬】おつと思ひざしか。恐悦だ〳〵と云ゝ調子ちがひにうたひ出せば。藝子ハいやそうな顔して中居と。咄しい〳〵三味せんを取あげひき出す。うたひしまうやしまハぬにモシナ。おひとつおあがりナアトいひ〳〵手をたゝき【中】御銚子直しておくれやァ　ハイトこめろハ片手に銚子持ながら櫻ニそつと何 やらいへば。まつてあろかへと櫻ハ立て下へ行　【中】こゑは りあげ　吉さんおくれやァ　吉さんとハ此里 でろふそくの事

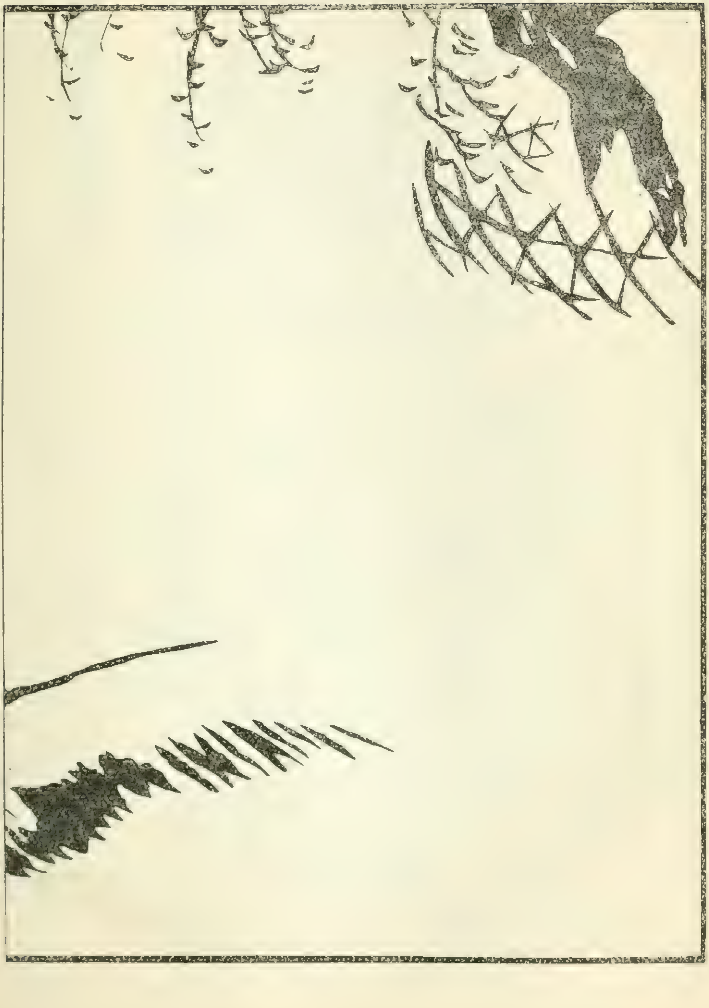
【犬】今清淨におりた三筋めハおゑねェやつだ。坐鋪なかばで行さんとかなんとかにわかれたの。はなれたのと。丸一石うるしじやァあるまェ。それに若も來てかと松風村雨の。一躰譯が須磨ぬ浦じや。いつそあかしてみやろうか。向うへゆきさんのィャ行平のと。胸をやきなべに

しおつて。貧乏人の葬禮でじあいばかりしあがる横だ。（トいふ所へさくら帰れバ。そしらぬ顔でまけおしミに奥ざしきの客のとを云）とんださわぎだァノ柱にもたれて居おやぢれ。無藝だそうで。最前から茶碗ばかりたゝきばらひにしあがる。所謂三歳の兒の一言も八十の翁とれあの事だ。ト悪口言もしらず。三味せんのひきしまいにれ。いつでもョゥ〳〵御苦勞と〻やぼな顔でほめている。犬順坐敷も面白うないゆへ。藝子れたいくつし。そろ〳〵けんをはじめる【琴】櫻さんひとつついで置んか【櫻】おつとよし〳〵それ。丁かけなっ半かけな〳〵〳〵（ハヽヽヽヽト笑ひさへぐ）【通】（知つた顔してもしらぬとゆへおしへてくれともようわず）わつちれ金閣寺はいけんだから。行司〳〵。犬順も同じくすきな。是れ負おしミに傍へもいかずに居れどだん〳〵面白くなるゆへ。負た者にれ呑セ〳〵とされぎたて。金谷の酒數誰と〻されぐ中にもこびた詞はなれず。夫から笑ふやら手をたゝくやら。跡に面白い口合もむだもたんとあれど。さはぎにてとんときこへぬ

阿らんだ鏡巻の二丁

阿蘭陀鏡卷之三

出口は迎ひ挑燈に。大夫もこゝにまつのいろ。入來る客の花美の中。素見手拭ほうかふり。小店の客の聲高く。帶と雪踏に身をうち込で。文字ハしらねど矢立ハ前に。ぶらり〳〵とぞめきゆく。六丁町に誰しらぬ者なき長さんハ。黒羽二重に長羽おり。忍ぶ頭巾のおくゆかし。のふれんまねけバ禿が文箱。ハイと持くる花やかに。ひかれ廓の賑ひや。誰も思ハずつい爰にとつつとはいれバ日はやき【中居】長さんお出ナ。夜ぜんハモシだん〳〵と言聲に走ていづる【花車】モシ長さんお出ナ。やぜんハモシナ。段々お有がたう【粋長】アイゆふべハ大におせわ ト云ひ〳〵あがる向に大夫三人居【大夫】長さんどうで【長】アイおかわりもないか【太】二階に待て居なますぞへ。【中】長さんモシお腰の物【長】ヲツトそれ トわきさしわたし神の棚の大じん人形をしりめに見て二階へあがる向ふ方【禿】長さん〳〵大夫さんがまだお出なませぬかと。宵から出口へ二度人を尋ねに【長】どこに居るちよとしらしてたも。シテ客ハ誰じや【禿】ハイおやしきのお方【長】夫ハ此間からの茂佐左ヱ門とやらか。マア早う知らしてたも。ハイト禿ハ菜種大夫の床へゆく帶を引ずりつまおりをくハへながら【藝子糸】長さんお出ナ。もう逢なましたかへ。よ



ふ毎晩來てあげなます【長】マァ爰へはいりナ。 トいふところへ二タ布のひもの見へるほど。つまたからげはしつて 【げいこ小梅】長さん／＼やぜんハモシだん／＼。ちと又知らしておやりなんで。御願ひ申ます。姉キお客ハ誰で【糸】すかぬ諸生客で。藥の名のやうなことばかりいひくさる。一向いやで／＼はやうとれてほしい【小梅】わしもしゆミ方の。座敷で氣色じや。今も中居衆と石で一杯やつてきた トいふに髪をちよと見て 【いと】すかさずつとへ簪いやミじやナ撥尻も括ておきいナァ【小梅】これでもいにくさらんしんきやの。それにあんまり氣がない。きよさんが宵になんたらでゑらかんてきおこすの。どうじやあろ【長】くつつりとゑら花やかしてゐ。おたのしミ【小梅】アホウ長さんきらいやの ト手をふり上そつと打たき なんぞいひなますか。わたしがやうな者にだれもくさじになつてくれてがない トいふところへ來る 【中】うそ／＼。長さん聞なませ。毎ばん／＼ちよいといきの。ちよいとばやいに。ゑらわあ／＼さんじや。とうしてやろ【小梅】お慮外さん、なめくさりやの。トいひ／＼長さん又のちほど〻。皆つれ立て座敷へ　行もかへるも別れハつらき戀心。うそとハうその皮にして。うそハまことの骨。まよへバうそも實となり坐敷をよう／＼と。ぬけつ隠れつ爰に來て 襖にもたれ喰さき紙 【なたね太夫】モシナ今時分に何しにきなました トいへバ粋長も。さすがふところ子ほどあつて。ふるてなせりふいふ 【長】遲うて惡くば歸らう。どんな晩にさんじて嘸お邪魔になりませう。どうで田舍侍

のやうにハ トいふを目でしらせ小聲になり【太】コレきこへると悪い。靜にいひなませ。あほらしい田舍者を好さうなものか。大躰思ふてもみなませ。モウこんりんざいいやで〳〵 トいふを皆泣いわさす【長】そうらしいもの。きけバよい客じやげな。兎角今の浮世ハ鏡山にある。其角が發句や又此頃の狂哥ニ

うかれ女ハ色もなさけもきぬ〳〵の

ゐりもとにつくあかつきのかね

よう聞たがよい。東里ばかりかとおもへバ。いまの大夫も算盤づめでかきよせるのかハ。トいふに大夫茂佐左ヱ門へきこへるかとあんじ。そこらをうろ〳〵ながめこゑをひそめて【太】アホウ。あんまりでワたしや物がいわれぬ。そんなさもしい。衿もとにつくのと【長】それが腹がたつか トいふ口おさへ【太】コレひよつと聞へて ト隣をおしへ 此客しくじつてハ爰な手前が【長】だまりをれ。それ程かばうハ侍めがかあいゝか トいふ口又おさへ〳〵とゞるをふりはなし耳に口あてる たつきたおせバこけながら【太】アレまだかばうのなんのといひなます。ワたしが心がしれんじやあるまいし。よしない事をはらたてなます トしく〳〵なく【長】そんな事ハ聞に來ぬ。ほんにわしハゆふべも迎う歸つた。今宵ハ表のしまらぬ内にドレ歸ふ ト立あがるを。すかりつけバつきとばす。たばこ盆がつたり。かまへずむりにとり付て。心ハせけど隣をはゞかりてよふ〳〵耳へ口をあてなき聲にて【太】コレナァ此まゝでいなふとハ。あんまりむごいマァワたしが心を推量して見なませ。ゆふべも出られぬ床をぬけて出て。一へんさがせど歸なました跡。ワたしばつかり心を盡しても。

そんな水くさいことばかり。たとへおまへにたゝかれうがふまれうが。そうしられる人にしられるとおもへバ。わたしや腹はたゝぬが。せめてわたしが思ふ半分も思ふてくれてなら。疑るゝこともあるまい物とおもへば。わたしやそれがはらがたつ　トなき〳〵男の帯をしつかと持て居る。林長も少し小聲になり【長】わしも疑ふまいものか。ゆふべもせんどまたせ何ンの返事もせすト咄し最中に。となりの茂佐左エ門。灰ふき十二三たゝきアハン〳〵ト咳ばらひ七ッ八ッする。こなたはなをもひそ〳〵し。息をころして耳を出したり口出したり。漸互に默頭合。笑をふくんで床へ入り。大夫は禿に鏡袋を取りにやり。あをぬきに寐ながらのべ鏡を見て。顔をふき。ちらとおよりなませもくちの内。臼となり杵となること。これ學ばずしていたる處とこゝに畧す。此あとは大口いはぬ事。かゝさんがしかつてじや

阿らんた鏡巻の三　畢

阿蘭陀鏡卷之四

奥州化言の茂佐左衛門も。朱にまじはれば赤うなり。小便に行に中居が付けば。出ぬも今は少しも恥入る氣なく。たゞひとり蒲團の縫めへ指つゝ込ンだり。あくびをしては小べんにゆけど。まだ歸らぬは悪や。かわやへいたのではないか。誰ぞと見れど引舟も居ずと。そろ〳〵立てだんばしごから。こわ〴〵のぞく臺所。下駄の音すりや心に心をよろこばし。床へゆかんとすればハイ姉子さんがた詰ると三ッといひ捨行。こりや違ふたと又立のぞく。門は往來の鼻唄に。わしがおもふは是より東コレナン〳〵と一度に騒ぐ禿ども。これぞと思ひ聲をひそめば。幸次さんおまへか、いゝやと答ふあんま取に。茂佐左エ門は猶もはらたて。鼻聲にてなまりかけ【茂佐左エ門】最前から（いちやい〳〵別り申さない。幸次さんうまいかとは（あんだア。喰物だべいか、（うつしゆこれよ。うらアが（すべたが トだんばしごへ片足おり臺所の女を手まねきし これさ姉子こゝさおいでやれ【引舟】ハイおよびなさりましたか【茂】ヲ、よんだてや〳〵【引】なんぞ御用がござりますか【茂】（おかなく用があるてや。先刻大夫がどこさアやらいきやり申て。今に（もんらな

いさァ。全躰あれさァとれ（らちやなく。（うらァとれ（ふんばりがあるでナ。是れ（にしたちや。しるべい事だねェサ。此さき身請して本國さァ（かたつて（あいぶと云たれバ。（やんだともいわず。しかし年の内れどうかサ勤たい趣かたる。是忠臣のめんじ。其分にさし置たっ共時かたミを（けてございと。いッたれバ（半てんをとん出し。こんな（下なものさァと跡れ泪ァで（かつぷした。うらァも一別以來出ぬなみたァを（しこたまこたんとながいた。あまり（がいに思ひ上衝したやらァ。きかずのやうになるやら。からだれ（鼠作りのやうサであつたを。（おかつぱと心を直しても。半てんをミれば思ひ出し。短金で（あぶなく。道中サあゆはれず。難義も苦におもれァないで歸國さァしたてやサ。（ひられまけねェ。これでも（よかんべいものと思ふか。どうだてや〳〵【引】イヤもうあなたさんのお噂れかね〴〵大夫さんのお咄で承つておりますが。ほんにあなたの事なりや　トこゆびのはらをおやゆびでおさへ　もう〳〵是程も大夫さんに如才のないことれハイワたしが。よう知て居ます【茂】マア〳〵（聞はれや此度登りと聞と（いきミを（かいさまにして家さァの。（あつぱ（わらしやど（おかたも。（いつけておき（たつた今京さァにつき申て（一ばんに來申シ。大夫に（いきやい。（やい〳〵（おてつぱらで。あつたなべいと。昔語り。またァ以前の通（くつついた。コレ是れ大夫がうらァに（けた（半てんだサ。

條りに〔がいなく〳〵やぶれたゆへ。此やうに〔てんぺん袋の裏や。〔けつわりにし申たサ。斯厚く思ふべいうらァが氣だサ。夫にかう〔むごうするとハ。うつァが深せつ等閑にする段。〔たまげた事だサ。太夫ハそんな砕でハないべいが。こりやどうした物だべい。（引ふねハおかしさをかくし。おやぢの異見きくといふ身ぶりで居るに。ひとつもわからねど。されたといかへされませず大ていすじ右衛門で）〔引〕あなたさんのお詞皆御尤。しかしたゞ今も申ます通り。何ンの太夫さんがあなたの御深切を等閑にしなませう。たしか宵にお客の御連中さん方がお出なました。大かたそこに。いつも太夫さんにあいせいのイヤすけいのと。酒のお相手。坐鋪のばやいがわるうて歸りなますもかへられず。それでおひま入わたしがちよと見てさんじませう。（トいひ〳〵立て粋長の床へ行）○犬順坐敷ハ盃も廻し。藝定て太夫さんハ。はやう歸りたいと思ふて居なませう子ハ三味線仕廻〳〵中居と咄し。ふろ敷のむすびめへ手を入れ持ながら。客よりさきに中居へいんでこうや。又後程へといひ。客の顏を見てモシナ今晩ハだん〳〵お有がたう。ちとおねがひ申ますと　お定りをいふて。雪駄直しのいにしなのやうに箱を提。跡を見い〳〵下へゆく。二人ハあとに投足し。椽をどん〳〵いわし。花車めが勤めに出ぬのイヤ柱の端にゐた藝子ハ首だの。がんくびのと。太夫を待ながら。咄して居に。隣の茂佐左ヱ門がせりふを聞て〔通〕犬君隣のせりふ聞たか。居去といふけだ物ハあるが。なをされといふものァ聞かなヱ。それに心

中がしれんの銅のと。あんまりで臍が妙見まいりだ【犬】かまハずおけい。高か田舎の。なもやぼだふつだ。なんぼ粋がつても蟷螂が斧だョ ト言に 【中居】ちよツと袖をひき モシナありやお屋鋪のお侍さん トいへば負ぬ氣になり肩をぬぎこたへぬはちまきし 【犬】ナンダ侍だ。菖蒲皮か。おッかねェか。ちと切られてェ。ひひやりと。ァ西瓜じやあるまい【中】モシナどうぞわたしにめんじて。とかくさきが ト指二本だせば 【通】二本だ。ゐいわさァ。六本にして明まで詰てやれ。コリャやい。居酒やの徳利ハ石を以て口をそゝぐ。流れの里を枕とするおれだ。孫梵ハァいわねェ ト聞しい中からわるい口合もかまへずいふ 【犬】なんぼ此廓が小べんへのめつた鞠と來てゐる。丸い人がらな所でも。そんな事いふてハ。當世のまゝ焚も禁穴だ。馬鹿〱しい 中居ハモシナ〱と手を合せど聲いれず 【通】又河東見をれ。どんな物だ。おつむりのお道具で焼寺の二ヶ寺や三ヶ寺の再建ハ杓もいらねェ大方一目見やがつたりや。此世の暇乞となりおろうかならずたのんで酒の肴にやァ延齢丹に金屑丸。獨參湯でも煎てもらひあがれ。ァヽぜれてェ奴郎だ トいへば中居ハ猶〱犬順が手を持てひけバひかれながら 【犬】自慢じやァねェが。おいらハまた。さのミ男ぶりもゐいといふじやァないがどうだか。美婦にハ好れる性だ。是も又込るよ。緋縮綿の底衣と鼈甲の香酸が出て。此比ハ心持かして。肌に鱗が出そうだ。折〱ハ白粉の氣をうけるやら。流糞に大込りだョ【通】おいらが世界又きけ。一寸の小便が貳匁三分だ。雪隠へ行ハ店仕廻の五六輩

づゝだ。そこで金銀ハ遣はたし春色も價千金に賣拂て浮世三分五厘のたくれへハなうても。廓中へ來てハどんな物だ。出口の茶やが迎に出りや。新八や門の與右ヱ門。寄場の男に送迎の子供迄が總下坐だ。うそハァ言へねヱ【犬】どうだか。うぬハゑらく鼻がつまつたそうだ。又迎がくるとわるい。はやく片隅でマァふんとかゞめ ト悪口の所へ下より中居がハイモシ大夫さんがおいでなましたといふ○引ふねハ茂佐左ヱ門がねまのからかみをひらき【引】モシおゆるしナ。ほんにワたしが申ました通り。大夫さんハ奥坐敷に御酒のお相手。モウ今おかへりなます。ワたしに茂佐さんがひかりなませぬやうによろしう ト此所引 申て呉いと。一向あんじていなます程に。必ひかつてあげなますなへ【茂】承知〳〵近比太儀サ休まれ〳〵。ハイ御ゆるりと御休な。 トよきにかぢゝる引舟や。あづま男に京女郎のいとやさしさ。見かけハいとけなきわづか三本たらぬ猿太夫さ。犬助を一日見るよりすかぬ客ゆへお出ナの外無言。ふたりハにわかに衣紋を直し學者らしい顔さへすれバほれる物かと思ひ。二ツ三ツ覺へた異國ことばをつかひ無性にこびて。齋号をよぶ【通】斑毛齋足下の（トクヘン如何 片カナハ皆異國ことは也【犬】不佞大（ドロンヿに及び候。時に予愚按をめぐらすに、今隣席の雜言。頗本意ならず。是全く狂士なるか【通】なんのさァ。其罪を惡んで其人だ。たゞ赤芾の惡を悔よ【犬】斯同氣相求たる汝。其薄くする所の罪を厚くして。のふれん。ひらり鳥ガァの。（ヲマンなんとだ【通】足下何不レ知レ足乎遊必有レ方【犬】愚者罪必墮ニ地獄一【通】近レ色遠レ賢者悟【犬】嗚呼俗哉汝好レ色如レ好レ徳【通】豈朋友何背哉願容貞鬱金香與レ我 曰

【犬】唱之里銘曰苟日新日日新又新造長袖是如何【通】長袖にハ殆ゆきつまり長州とハ硯石の事か【犬】馬鹿よ。ふり袖新造の事だト。いひ／＼手をたゝけバ。ハイト中居おれん首をかたふけ。おも／＼しい顔ではらをおさへながらくろ【通】手前ハどこぞわるいか。黄金にきハだの粉をかけたといふ顔だ【中】ハイ積氣で腹がいたミます【犬】ドレこゝへ來ナト立テひざしみやくを見とんだ發熱だ。總身（アべのごとしト懐中よりむらさきちりめんのふくさに包たる赤地錦うらの紙入より九子少し出し此藥を（カツカにて呑なさへ【通】イヤ手前ハ藥なくとも治よ。吉久が燧じやないがうけ合だ【犬】それハどうして治すよ【通】ハテれん積なんぞ大病の心をしらんだ【犬】コリヤ一ばんあやまつた。妙だ／＼と鼻唱で。小べんにゆきゝの人のおともなく。ふけゆく空の物すごく。かすかにきこゆる。うどんそばきり

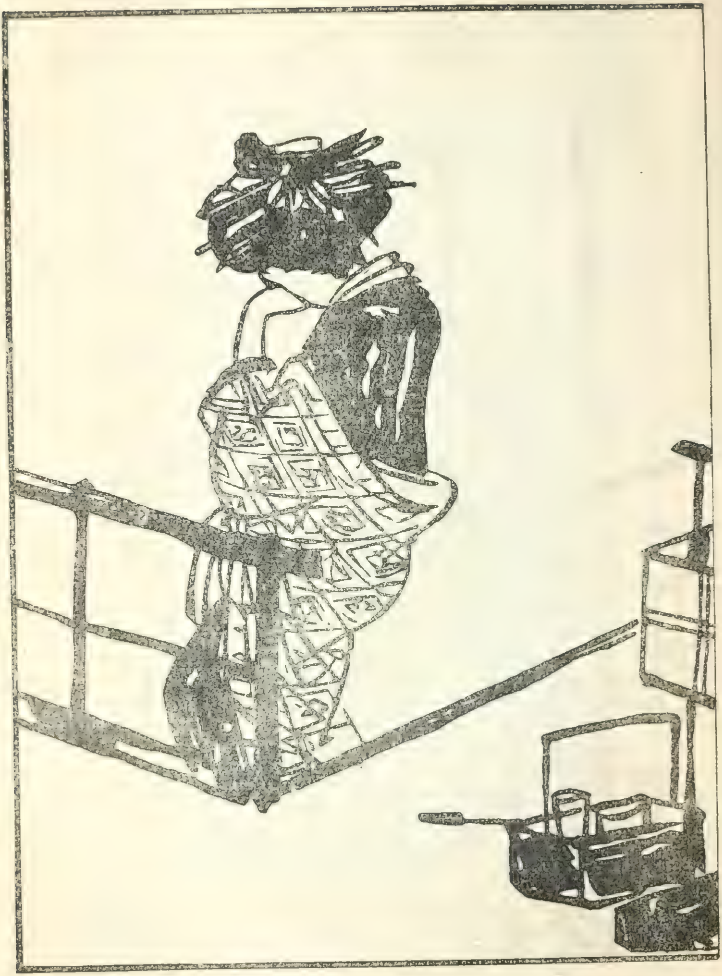
阿らんた鏡巻の四　了

阿蘭陀鏡巻之五

とこ入りのまけおしミ〻。通も不通も通見の手をとつて。中居が奥坐鋪へ引ぱれば。マア待。犬ハどこへいた〳〵と。言ひ〳〵ひかれてゆく。犬順ハ何がなほれさしと。ろうかの柱を異國言葉をもつてよむ　一シ子ツプ　二トツプ　三レツプ　四イ子ツプ　五イワン　六アルワン　七シ子ベシ　八トベシ　九アシキ　十ワナケリ　ちようど十本あるといひ〳〵。坐敷を見れバ誰もゐず。たゞ紅の付た爪折や。紙に肴が包であるやら。せつかく聞さうと讀だものと。獨ぼやきながらも。かうしてゐてハ中居めがモシ一寸お出ナとぬかそう。一寸こいこわいなと。うぢ〳〵して。尻からおされて行も古し。ア丶醉たも猶古風と。紙くずだらけのたはこ盆堤て。南をはるかにと謠で床へゆき。狸寝入といふ。お定りの場所も。粹がつて寝ながら屏風の唐詩をよむ【犬】なんだ子昂流だナ主人不相ナニ識でもなし　偶坐ウン丶爲　林　泉　莫　謾　盡引がないと　わからねへと。よめぬ品ハ口のうちでいひ。大夫をまたぬ顔で居れど。人情のあさましさに。足音がすれバおかし。屏風の外をのぞき。心のうちにハなにして居る。遅いやつだと。口外へ出さず。うぢ〳〵して又よむ　酒嚢なんだ　トいふ所へ大夫く〳〵。見向もせず。心中にハ恐悦を催し。よめぬ品をよめるふりして一所で居る。大夫ハ天窓の道具も取　中自有錢　り。着替して枕元にすへり。たばこをのミ。二ふくめハお定りゆへと。いやながらもハイモシとさし出す。犬順へ

られしけれども何氣なく。ヲイトよそ目しながらきせるをとり。何やらいひ〳〵のむ【太】モシ蒲團召ませんかヱトいへば博學といふ所を見せんと【犬】イヤ不佞ハ（青
州の服廻致し。聊寒くハなきぞ【犬】シテあなたの御姓名ハ何と申ますヱ【犬】愚名ハ斑毛
齋犬順。異して犬と申ス【太】今迄ハ嘸かしおなじミさんが【犬】イヤ中ゝさやうの儀ハ毛頭
これなく。兼ゞ足下の美目盻たることを。拙き此身に耳入いたし。願くハ一刻片時たりとも
嬌面の枕をかわさん幸緣のなきやとおもひしに。今當席の次第。近比歡服仕ルトいへば太夫はもとよりすかぬ客にこび
るゆへ。猶ゝうろさく思ひしが。少しなぐさまんとすねた顏もせず【太】數ならぬわたしへ初會から。御しんもじのおことばさりながら。更
〳〵實と思ハれず。よいかげんになぶりなませト契話といふ顏で手をつめれば【犬】尊手で御恨の打擲有がたし。
斯足下に任せし不佞が身を。そんなに疑ひ給ハゞ。寧。胸中をわつてみせ申さんや【太】どう
やらさういひなますと誠實とハ思へども。兎角自らが心定かならねば。唐土の石公が。張良へ
約言し。心厚の見給ひし事もあれば。一ッの功を見せ給へかし是にハ犬順もこまりゆびをきるも俗但髭と思へど譯ハなし【犬】嗚
呼賢哉足下。此上ハ作輕羅着細腰予が心。是にて疑はらし給へと手をふところへつゝこミ一寸氣海
が邊へやらせ給へト云手をしつかとめち。餘程非學者と見てとりさすが大夫ほどあつて詩經の語をひきて【太】手ハ寒く氷柱のごとし。口にハほれ
る油をいひなましても。なんぼ苦界の私でも。高ひも卑ひも姫ごぜの得心なきに不作法な。自
らが胸の曇の晴るまでハ指もさゝしハせぬトすこし立腹の躰をすれバ【犬】御腹立去ながら。五條の天神醫

師冥加。神の誓ひをかけまくうへハ。豈虚言ハ一切申さぬ【太】成ほど夫で疑ひ晴ました。随分お心にしたがひませう　トうしろむきにねがへりすれバ　【犬】蓋不佞を痴簡とおもひ好ミ給ハずや。況予開中に入ッて軍を起さんと欲るに。汝背面ハ是如何【太】アホウ契話にすることしりなませんか　ト云ニ犬順も少し心おちつかせこびろをやめて　【犬】ちと寄なさへと　手をもてバ　【太】ヲヽせわしマア待なませ　ト外のはなしにまぎらかす　モシナ。芝居へいきなましたかヱ【犬】此間いたよ。夫も聞ナ廓中へこうとおもひ。出た途中で由男と奥山とに逢たれバ。コレハ旦那御久しぶりマア御機嫌さんで。ちと芝居へ御出なさりませんかと。無理無躰にすゝめおつたゆへ。つれ立ていた向から。野巫内先生と。勸學屋大八とが。同道で來て。茶會がある來いといハれたを。断いふて行所へ。亂山先生と。雨蛙の正太とが。西山へ物產にゆくと。咄して居られた其後から。犬さん〳〵と呼だ。誰じやとおもへば。新地のお袖にお柳めが。嵯峨へ行て山の氣しきを詠め。一句ヅヽするほどに。來て吳ひといひをるを断いひ。大方白前行じやあろ。其替りに躰ハ身がしてやろ程に。南側へ付さして置と云て別れ芝居へいたが•こんどハ大分よくしをるよ•其歸りに河原の茶やに休でいたりや湊川先生とテレメンテンのおやぢがわせて•圓山に書畫の寄會書がある。是非ニ來て吳と頼まれたを•いろ〳〵と断云て戻たが•モウ每日〳〵看版書て吳ひの。イヤかけ物にする自作の詩文書



けいの。イヤ能興行する出勤して呉ひのと。遊事に殆込るよ（トいふ内も。あすハアレニコレト。口の内でいふて居る。大夫ハらそとしりながらも。あしらハねバまたいやミとおもひ）御首が痛ませう【太】ほんに萬能博學も嘸おこまりさん。大方開帳參拝しなましたら。御足よりハやぢと。一力太郎右エ門が來た。皆あの連中ハ立花の弟子だ（ト知た顔するあほう者とおもひながらも。あまりきゝぐろしくそろ〳〵なぶりかけかゞミの銘たいふ）【太】あなたのやうにちかづきの多ひ御かたなら。アノ天下一人見和泉守さん知ていなますかエ【犬】隨分ちかづきだ。此間も遊びにいつたよ【太】よめさんよびなましたげな。どこから來なましたへ（トいへバアレハ夫何ニ〳〵としらぬ事ゆへ口の内でいふ大夫はた〳〵たづねかけ）【太】そんなら中臣の磯次さんハ定めてお心やすうしなませう【犬】磯次かアレトハ兄弟ぶんだよ【太】ほんにどこに知規があるまいものでもない（ト胸中にハ米もらひと兄弟分かとわらハれもせずそしらぬ顔で）それでハ行さんも大方知てんで（トいへばゆきさんとハ色の黒い。寺文に五ツ六ツ寶。たどんのやうな男とハしらず。尋るからハ定めて美男の粹人。殊ニ名もすいなれば大かた柳を一夜見ねバねられぬといふ人もしやくさい中でハないかと。わろくもよふいハず）【犬】行ハ大通ものだ。此間も扇丸へつれていてやつたよ【太】そんならゆきさんの弟の丸市さんわへ。（是も定めて粹人もしらぬといへバ。やぼとおもハれんかと）【犬】丸市とハ行よりハまだ熟懇だ。ほんに堅いものハかんで喰すほどの中だ（ト聞に大夫ハたち上り。ほんに京中の人を大方ちかづきといふからハ定めて脫肛の氣ちがひとも從弟ぶんぐらひで。あろふといひ〳〵下へゆく」犬順ハ大かた時刻うつりしゆへ。手洗であらふと。少し心用意し待てゐる所へ引舟が來て。屏風の傍へ居り。アノ承りますれバ。あなたさんハゆきさんの弟ご。丸

市さんとハお心やすうしなますげな。大躰聞てもいなませうが。わたしの所の大夫さんとハ深ひ中。殊にあなたさんも丸市さんとお心安けりや猶のこと。こんな事が聞へてハすみます。勿論大夫さんも義理のたゝぬ事。さいしよから丸市さんの御れん中としれてあるなら。出なますはつもなし。又あなたも外に御氣に入つた。よい大夫さん方呼なますにもよけれど。今時分にそんな事もならず。お氣のどくさんながら。お内でお休ミなさつたと思し召。今晩の所ハおひとりお休ミなませ。憚さんながら丸市さんへよろしうおつたへなされてへ。ほんに一かうおきのどくさん。おさびしかろと。いひ〳〵下へゆく。犬順ハ何にも云ず。冬むき火鉢をとられたやうな身ぶりで。何ンのいハいでもよいことといふて。今さらアレハ間違じや。しらぬ人。虚言じやともいハれず。病人の死だ跡へ見廻たやうなものだと。醫師たけのたとへをいひ。合床をうら山しくおもひ、引手のとれたあとから口明てのぞいて見たり。うろ〳〵立て臺所をミれバ。夜ばんの女が半ぶりにちり紙をあて。ゐねぶつて居より外。誰もゐず。いつにかハつて夜のあけるをまつハこよひばかりだと。れんじの障子を明れバ。むかふの松にはや一ばん烏。犬順が顔を。ためつすがめつうちながめ。アホウ〳〵〳〵

阿らんだ鏡卷の五 了

義篤画

地黃煎與餹。其形相似。其用異。是猶芥子豆粉。惟是其趣相似。風味大異者也。嗚呼紛矣。粹與不粹並立。同搖風流哉。大學序云。及町之衰。全盛之君不作。雖然。扇屋花扇起松葉屋染之助出。不必可謂衰矣。猶粹與不粹混雜。而芥子相會豆紛云爾。

戊午春日　觀[illegible]跋

借着行長主人作

浮世銀世界　當世金の光りさへすれば此世ハ勿論地獄もあり〳〵ミゆることをおかしうかきたる繪本　全三冊

苦界 廿七年腹内　嶋原へ賣られて行かう嫁するまでのうきしづミ粧部屋のことを目の前に見るやうなる本也　全五冊

言賊 粹仙傳　太平樂の仙人を面白うこじつけかきあつめたる繪本なり　全三冊

畫本 ひるにしほ　とめてとまらぬ茶やがよひのやむことをくハしくしるす　全三冊

右近〻出板江戸赤本仕立御とさんものニよろしく

盃席玉手づま　全部三冊

此本ハ新しき手づま重法の品共を
あつめ月待日まち酒ゑんのせつなど
即席に出來安き事共を書し本なり

寛政十年春新刻

菱屋孫兵衛
平安書林　河南喜兵衛
浪華書林　河内屋太助

湖埠罢二箭衜

序

孝行に賣れ。不孝に受出されとハ。實に川柳点の妙なるかな。虚と實の中街。通と不通を汲頒て。意氣路を磨く心の駒下駄。いやな風にハ蹴出シ褄の外八文字。ふるも有り。又照とハ茶屋が軒端の燈灯か。其蠟燭の流れの身。辛氣辛苦の苦界十年。たとへ一文が鉄漿を買ふとも。豈千金を尊しとせん。てれん手管の長みを見世雅調の音色に連て。通ひ廓の裏茶樓まで。娼婆もおよばぬ穴を探して。醉を味ハふ梅暮里谷我子。嗚呼其才の高きこと。水道尻の火見櫓も足下に低く。筆頭の走れる叓。南一の詈

駕も遅しとせん。不佞此書の伴頭新造となり。惣菜の芋を喰て。屁の如き序文を作し。謹でもつて。一寸マアお見なんしと

しかいふ。

于時寛政戊午春視二初衣裳一日

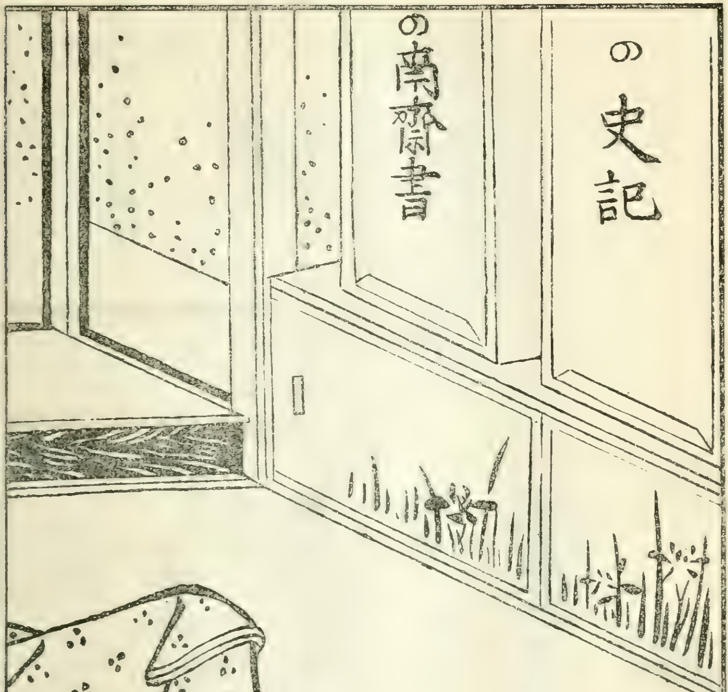
於二哆囉哩樓上一

傾城買二筋道序

智者にも。一失あれば。愚者の一徳あり。加賀絹の弱も。薩摩布の強も。または御姆の棚尻も。背負に。利あれば。捨がたく通子の云。遊冶郎の乖功は。醜夫の温柔には。猶及ざるがごとしとは。宜なり。人は只心のやさしきこそ。尊けれと。不佞かつてを書事しかり

午のはつ春

梅暮里谷峨述


の史記
の南齋書

重政画

目録

○夏の床
○冬の床

こしか夜に
程よき夢の
盛かな

谷峩

谷峨作

傾城買二筋道

○夏の床

世界ハ小見勢客ハ二十五六のそつぺいのなきいろ男ニて惚どころなきほど己惚の未至通尤地廻り
同前逢方ハ二十一二たいていはうつくしくははなはだうわ氣まんさらでもなき門五會め

水調子ニてめりやす へ合夜半の短かはよけれどもおもふとのごと添寐のふしに口でハいへどしんじつの中を隔るあつさの垣根またにくらしいあの蚊の聲とこよりをとつて蟵の蚊を燒つやかれつうわ氣同しとりどころなき夏の床 引仕廻 【須磨衣】いつそぬしの聲ハいきだよ【五郎】聲斗ほめづときみやいもほめてくりやァ廣小路の十哲のうちでハ顔淵といふものだゼ【須磨】なんのこつたへ【五郎】いゝやよふでかしらだといふ事よ【須磨】ヲヤむづかしいものだね百さんとやらもいゝ聲だねあれもなんぞといふのかへ【五郎】なァにしかしそふ聲できゝしられてハ百もいろ男たぞ【須磨】そりやァぬしたちのよふに入こんておいでなんすものをだれでもしらぬものハおつせんのさおふかたぬしもそこいら中がいろごとだらけもあいそうのつきたもんたぞ

じらさつともしんにおいでなんすところをけふハあかしておきかセなんし【五郎】そんなにてまへに氣をもませる事はねへからはなしてへかほんに此ごろハちつといろごとがしげ〳〵だそのかわりに内へかいるとお袋の小ごとかある鰹節壱本でもらう氣ハねへか【すま】ヲヤ猫じやァあるめへしもつてへねへばちがあたりいすにへそしてほんのかゝさんかへ【五郎】ほんのでねへといまころハおさらば逃んふセいなかだ【須磨】よふむだをいゝなんす口のはたをつねりいすにへあれきさなまた人のかほをミてわる口をいお「ふとおもつて【五郎】わる口ハいわねへがまあ手前ハいくつだ【須磨】あてゝミなんし【五郎】まつ手前いくつのときうられて判ハたかした【すま】でへふむづかしいねハイ十三で賣れて親判さ【五郎】十三で賣れて親判なれバかふと指をおりながら十三十四十五十六此四年ハばなせねへから跡せうみ十年六兩づめぐらいな女だが子がいだけねんいつぱい十五兩か【須磨】としをあてなんすとおもやァ【五郎】おつと氣のミしかへもんたこゝからわりたさねへけりやァきつい所はあてられねへまあそつちをむいてミセや【須磨】わつちやァいや【五郎】瘦地にして髮うすく枕だこのいつた處までよくふんて廿三て御ふ足ならおてまへにおゝきなさるほうがおとくよふだ【すま】むごひ事ばつかりいゝなんすほんとうわね深川にいゝした【五郎】なに深川にいたどふりで【すま】人がわるいと

「……」原本に丁缺に付別摺本による

いゝなんすのかへ【五郎】イヤいきだといふ事よ【須磨】あのうそばつかりほんにいやとおもふ客人ははらのたつほど心がしれるまたなんとかおもふ客人は（と此處しばしかんがへて）じれつてへものだと（かんざしにてあたまをかく）【五郎】コヲもちと手をあげてミや何かあるぜ【すま】わつちやァいや【五郎】いやじやァふセうちだと（むりに手をあらためる）【すま】まあまちなんしずいぶんミセへすが人の名をきく時はわが名をなのるとかいゝすからまあぬしの手から見セなんし【五郎】それをおぼへるに本屋をいくらたをした【須磨】しりいセん【五郎】さあミや／＼おらが手にやァそんなやぼはなしだそこへいつちやァ高麗やてむかふにばかりさセたさあこれからは手前の手をじんじようにみセや【須磨】見セるのさァミなんしと（じしん出をまくりみセるはまんざらでなきゆへかくたんといふところなり）【五郎】まあこりやァなんた貧乏寺の過去帳ははたしだ是を見ては【すま】三年の戀もさめるかへ【五郎】はらか」たつ【須磨】なぜ【五郎】はてこら程あるうちにはまだこゝろのこつているのがあろふとおもへば【すま】こふ見セもふすくらひじやァたとへどふいふ事があろふともぬしの心いき次第でとふともしいすのさうたぐりなんすならなんでもしいセうまたきやく人をつきだセならぬしのふセうちな客人はつき出しいセう【五郎】ばかなとがもねへ客人をつき出す事もなしまた指切髪切てわかつたとおもふはむかしの事よ【須磨】そしてどふすればは心がすミいすへ【五郎】そんならいちば

んはやい事をいおふ【すま】なんだへ【五郎】金をかしてくりやヲイびつくりしめへ【すま】そして外へもつてくのかへ【五郎】いゝや外へハもつてかねへがまあ手前どふいふめちかへで呼かしらねへかおれだとつて金かありあまつて遊びにきやァしねへとんだ内ハ火の車だけれど手前が水車のよふな口車にまよつてあき車が坂をおりるよふに了簡もなく來る氣だか爰だよそれおればかりおもしろいめをしてお袋を日干にもされねへわな尤手前も勤ぐらいハたて引をするかくごでもあろふがそれじやァまあとふぶんこられねへといふものだまた手前もじつに呼氣があらばそのしのぎを二三本かしてくりやそふすりやァおれもあふきに内もでよいといふものだまた手前の心いきもすつぱりわかりやすこれなぜだまつているふセうちか何もそのよふに茶碗をわつておつけてミよふといふ顔をしている事ハねへわなまたおれにかきらず手前のよぼうとおもふきやくハちつとハ地切をきらねへけりやァならねへそれともあたまのものハ借物ならあすのばんまでに壹兩貳分ばかりかしておいてくりやこれだまつているハできねへか【すま】そんならぬしハよくとくづくだね【五郎】てきざあいゝが手前もたゞよぼうとハよつぽとむしのいゝものだ少しぐらいはどふかさんだんのありそふな物だ

まだなじみもうすきにあまりのいろ男に逢方あしな氣になりたがひにしばしはなしもたへ多

葉こに程なく夜もしらみ歸りし跡にて傍輩の評もよからず引かたと心づきそこ爰のあらが見へあふかたこれハ蒔直しと見へたりまたつくる夜のむしあつさに

【五郎】コヲなんだそわ〳〵と何をしていたまた八重がりのやりくりか【すま】きついさいたふうだね【五郎】燒つぎの火かけんのちがつたよふにそふひんとする事ハねへマァねやな今夜ハすつはりおれが心いきをはなしてあんどさせてやろふ【すま】あんどさせるへあんどたァ燈をともす物かへ【五郎】コヲおつにはぐらかすがおれがいつた事ができねへによつていゝわけなしのがきんだなハテできざあきいたふうをせずとセうとくはたらきのねへむまれつきて三文のくめんもむづかしうこざりやすとしらでいふほうがいゝ大道で藥を賣よふにのミこみすがたをいつてもセうが入れ智惠といふものだから人形芝居の太刀打を見るよふに小サな袖から大きな手がでたりなにかするからねつからふ都合だなんぼ水犬のとやといふ前髪をきつてもめんひろふどのふるきんちやくを見るよふに地がすいてへんだぜそれで耳のはたまで口がきけると智惠のねへ所をとりへにふきや町川岸へやるといゝ錢もうけだ【須磨】わつちもいゝ錢もふけをおしへておくんなんしたから氣が夫ぶになりいしたまだ智惠のできるにハぬしを黑燒にしてそれをのんだらよかろふがねどふぞ智惠をほしうこさんすそふするとかわいゝ男にやァいきなな

りてもさせてよんでやりいす【五郎】何いろおとこ手前のいろ男ハどんなだろふなたしかにりうくうの使はんといふもんだろふ共心ハもちがすきだ尻こだまをぬかれねへよふにしや【すま】ぬしハ見かけによらねへいつそくろうセうだねいゝかげんにしなんしとしがよりいすにへ【花園】すまぎぬさんほち〳〵でいなからいゝかけんになんしよ（と隣座敷よりしらしをいふ）【すま】ヲャいやよそれでもぬはじめハ少しそうだつたがねもふ大ちやき〳〵さ【五郎】なんだ此すりこぎめらうぬらにほち〳〵のちやき〳〵のと鼠が米櫃をかぢりハしめいしなんぼ玉屋のセリふを小耳にひつはさんでもうぬらにかきまわされてなるものかいゝかとおもつてほち〳〵のちやき〳〵のととふもろこしか冬ならさつま芋を賣といふこんなびんぼうやたいにやァにやわねへよしやなまあぜんてへてんほうをあつかふよふに腰からめくされ錢じやァまにあわぬ五郎ゟなぞと取組ふとおもわば千手觀音へ塩だちをしてぢとりを三年ももみ三谷の毘沙門から百足を後見にたのんでもまたおかつたるい【須磨】それだからとり組ねへからいゝじやァねへかへ【五郎】きてぐつとよふ口かうじやをいふあまだ【すま】まだ出世の身だよあまもお慮外だね【五郎】なに出世も氣がつよひ火口売のてんびんに苧売の杖で地獄へとうしみをうりにいかふといふつらでもかあふかた手前の寺證文にやァあやまつて手ハきりんしたゆへ手ハござなく候とかいたろふ【すま】

ぬしハまた代〳〵一向な仕打の者にまぎれこざなく候かへ【五郎】なんだ此女はわるくしやれるぜよしやたとへ惣菜のあらめに百が梅漬を食つて五町まち中へ黒飛の糞をたれてもはりあふ事がなるものかへ盲蛇とハわが事だ五郎さなぞのまへでハちつとハしよけそうなものをおさきまつくらでしやれるがおれをしらねへけりやァはじのよふにおもふ世の中だ手前らがよふなやぼとばけものハ箱根の御關所でとふさぬはづたかさ【すま】ヲャこわいのふ花園さんおきゝなんしへやぼからばけものがでいすとさいつそ氣味がわるうごさんすよ【五郎】こんにやくの幽靈かところてんのお傳馬にのりハしめいしそふぶる〳〵する事ハねへばけものがこわいのかそりやァ氣づかいしやんな手前のかほがばけものとあいかうといふ物だからむかふでゆひをくわいて逃るわなほんの人間のふりをしてあだにおもわぬがいゝおれなればこそしんぼうして五六たびもきてやつたもふいろ男のよびはじめのよびおさめとおもや跡で泣てもわめいてもとりあげハねへぜ【須磨】ほんにぬしのよふなきやくじんがきさつしやらねへとちからがおちてあしたから役所へもでられづほんにかなしい事たぞ泣てへけれどなせか泪がてへせん泣れるか小便にてもいつて泣てミよふと

平氣に出行は殘念にもまたセんかたなく意趣をセんとハおもへども毎夜素見のじやまなれバ

今ハむなしく\/\と寐入しがふつと目覺白壁土藏へ月のあたるを夜の明たとおもひさもいかつげに若い者をおこし戸をあけさせ表へいづると犬わん\/\

○冬の床

世界ハ大見勢客ハ三十一二甚ふ男脊中に縁のある顔なれとも万事いきにして如才なき通人なり逢方ハ中三としハ十七八きりう風俗小町もそつちのけにて一體發明にて張强情深きなれともまたとしわかのおぼこ氣にて此客を嫌ふ事いわんかたなし折節隣座敷にて藤吉かめりやす

〽合雪の夜中のつめたくてしよてハ隔てゝいつとなく枕と枕顔と顔いじのわるさの透間からあれ邪間をする夜寒の風とゑりと\/\をかけ合おふて勤も戀もうちこして實こもりし冬の床チャンヤンヤ\/\【一重】ささんしなものだのコゥくれはやまただれか筆をもつていつたこつたぞおふかたまた外山さんたろふはやくとつてきや【呉葉】あのね外山さんがおすせいすごめんなんしついきうにいりいしたによつておかりもふしいしたおありがたふおすとさ【一重】きついぶしやれよふたね（といゝながらあんどうかきたてる）なぜ此灯ハこんなだのふ（すゝり引よせむた書する）【客文里】どふぞしたか【一重】どふもしいせんのさ【文里】それでもおかしなかほつきだせ【一重】生れつきておすものを【文里】

そのよふにいわづとものことだろふマァあいそづかしをやめて一ッ呑ハどふだ氣がはれよふぜ【一重】わたくしハなぜか人にものをいわれるとはらがたつてなりいせんごせうだからちつとものをいわづにいておくんなんし【文里】こりやァきついぞ成程十七八の時分ハおかしくもねへ事にわらつたりなんでもねへ事にはらをたつものよまあ〳〵どふともきまゝがいゝしかし風をひかふぜ羽織でもきていれハいゝ

いたいけにいわるゝ程猶はらたてどもあたろふしまもあらざれバ我と我手に書くみのかきそこのふれ筆のとがとがなき紙を引裂て障子あたり立いつる折からこれもよひ出し中三一重が姉女郎九重ハ障子をあけて見ておやといつたばかりにて跡を振かへり廊下をとふる胡蝶をよび【九重】こんな〳〵よしのさんに文里さんがおいてなんしたからおしらせもふしいすといつてくりや【文里】おいらんさあ〳〵まちかねていたきついいそがしい事だの【九重】なァにマァなぜ此頃ハおいてなんせんへひるもよしのさんやたれかとうわさをしていゝしたおめへさんこそいそかしいこつたね【文里】ツゥサおれもいつそなつかしかつたけれども浮世のよふにせめられてこになりそふだわな

折しも胡蝶のしらせにほどなくこれもこゝろやすき中三

【吉野】ヲヤ文里さんよふおいてなんしたなぜ久しくおいでなんせんとミんなとまちかねてうわさばかりしておりいしたほんにわつちとした事かいふ事ばかりいつて九重さんよくしらせておくんなんしたマァひとえさんをきいておくんなんし幾度(いくど)もあいながらしらねへ顔をしておいりいすわな【九重】わつちにさへだんまりさ【文里】ほんにうそにもそのよふにいつてくれるからうれしいほんに友(とも)だちとよるとおめへがたのうわさばかりしているよ【よしの】わるくかへこセうさんす【文里】おめへがたをわるくいふとばちがあたるわな【よしの】かんにんなんしまた文里さんのせじがはじまつたサァ久しふりであげいセう【文里】まづおセへにセう【よしの】そんなら九重さんおあいをおたのミもふしいす【九重】ひとつたべいセうねこんな櫻野うつかりなもんだの（此處さかづき出す禿はんぶんついでかほを見ている）いゝから一ッつぎやな【文里】おめへがたどふゆふゑんかこふこゝろやすくみへもすてゝはなしてくれるからなんそおめへがたのすきそうなものをとかんがへていゝつけてきたがアノ忠七ハもふもつてきそふなものだ【九重よしの】そりやァたのしミでごさんすね（間もなく茶屋男忠七ハいろ／＼もちきたり座敷せましとならへる）【忠七】あふきにおまちかねでござりませうあいにく客人がおちあいましてかつてがとりこみおふきに氣をもミました【文里】よし／＼まあ一ッのまねへか【忠七】まづあとのものをもつてまいつてゆるりつといただきませうと（そう／＼出行）【九

重】よしのさん今のおあいをあげいせう【よしの】文里さんあげもふしいすにへと【文里】さかながきたからまづおゝせへだ【吉野】わつちやァいやいゝむしだつけね【文里】のめるくらいならあこぎゝしねへがこんやゝさけの匂ひをかぐもいやだからさ【よしの】そんならまあもふ一ッうけいせうか何ッざんすね【文里】ふさぐからさゝァ〳〵おれにかまわづとたべてくんな【よしの】そりやわるうざんすねあのひとへさんゝどふしなんしたね【文里】いまこよふわな【九重】それでもかんじんの立そふ【文里】そふいつて逃よふとおもつて【九重】きついわる氣たね今夜ゝよしのさんもわたくしもてうどいゝからおひ出されるまでおりいす氣さ【文里】さあそりやうれしいが一ッかゝみに二ッ顔しやァねへかへ【九重】うそゝきらいさ【文里】そんならたべてくれねへけりやァ氣がすまねへ【九重】文里さんも少し【文里】わつちにかまわづ〳〵【九重】なぜたのふ

扨此二階中甚よくおもわれて皆こゝろやすければくるあれバかへるあり障子越に言葉をかけるあれバとつちりと咄す有まことにみへもなくかざりもなく傾城もがくやゝ只の女にて爰にいろ〳〵あれともこと繁くまたあからさまにゝあらわしがたくごそんじのおかたゝたいがひにごさつしと略す跡に四五人殘て

【初瀬路】文里さんはなぜたべなんせんへ【文里】なんにもいやさ【あすかの】ほんにいつものよふにげんきもござんせんどふか顔のいろもわるいよふでござんす【よしの】むりに一ッのミなんしな【文里】どふぞあやまつた【九重】まあァノひとえさんは何をしているこつたね【文里】ハテまつうちが花またるゝがつぼみひらかぬうちのたのしミさ【九重】それでもあんまりと（たつた引とめ）【文里】おめへがたがかけると花が散わなまあ下にいなあの子のこねへうちおめへがたにはなしておきてへ事があるかならずわらつてくれちやァうらみたぜ【九重】なんの事だか氣にかゝりいすわな【初瀬路】何ッだんすはやくおきかせなんし【文里】イヽヤコおめへがたもしつてるとふり一トえさんもよく〳〵いやなればこそこふ久しく來るうちにもついぞわらつた顔をみせた事もねへにかわいそうにコフベん〳〵とくるもあんまり知恵かねへとおもふからもふこめへ〳〵といくたびかおもふけれども此様におめへがたがこゝろやすくしてくれる事がうれしさまたはあの子もまだとしがいかねへからきずいだろふとおもへバわるくされる事はなんともおもわづおめへがたのめへだが人のかみにたつものは人にゆびをさゝれねへよふにしねへきやァならぬが一トえさんのよふによくがなくつては次第に身づまりになるだろふとゆくすへがおもひすごしがしられてあんじられるからこん夜ははなそふかあすははなそふかとお

もふが此よふな事をいつたらまた氣にさわろふとおもつていゝかねていたよあの子はあのよふにおもふがおらァ（へと跡をのこして）まあそれはともあれこふ久しく來るといふも緣だろふとおもつて異見をいつたらもふこめへとおもふがとふでおれがいつちやァあの子のためにもなるめへから九重さんは格別の事だがおめへがたもとも〳〵よく苦界のいりわけをいつて氣のなおるよふに異見をしてやつてくんなセへ賴ぜこれでもふおもひのこす事はねへがこんやが此二階のいとまごひだとおもへばかなあじな氣になつたと（ほろりと淚こぼす一座へ一とになきいだす）こふ久しくこゝろやすくしたものだからこねへといつてももしつきやいできたくらいなら階子迄來るからいま迄のよふにこゝろやすくあつてくんなよと

いへど返答あらざれどもなかに九重座しきいでセつ成る心をかんじいりおもひあまつてなきながらひとえをともない我部屋にて

【九重】おめへはあきれけへるよ【一トえ】ヲヤなんでおすへ【九重】なぜ文里さんはいやたかと（うらみらしく云ま ためらい泣して）【御室路】いまたつてきいておりいしたが文里さんのこゝろねがかわいそふで泣てばかりおりいした【九重】おむろ路さんいつてつかわそうとおもひゝすゞ胸がいつぱいになつてもふされいせんいつてきかせておくんなんし【おむろじ】（アイとすゝり泣ながら）じよう中もふしいすがよ

くものがわかりながらおきゝなんせんもつとも久しくおいでもなんすけれども二階中で一座をせぬものまでがこゝろやすくだれでもわるくおもふものハ壹人もおすせん文里さんかちつとあじがとおひとおめへさんハなんともおもひなんせんがミんながまちどふかつて噂ばかりいつていゝすそれよりまあ茶屋のまへもおつすもつとも文里さんの事だから人にしらせもなんすまいがそれだけ氣の毒てありそふなものておす「九重」まあ文里さんをよぶきハござんせんかへそれじやァすみいすめへによそしてまあふにんじようといふものでだんす　一トえうつむきちりヲひねつている　もつとも胸にもおぼへがありいセうがあのよふに深切にしなんすほど意地にかゝつてわるくしなんすがついぞはらをたちなんした事もなく今も今とていとまごひをしなんしておれがこぬあとでもおめへがあんまり氣ずいだから行末があんじるとミんなにもたのミなんしたわるくされる事ハなんともおもわづこんな深切なきやく人があろふとおもひなんすか女郎めうりがつきいすにへほんにちつと公界と儀理をおしりなんしこふもふしいすもおもひゝすからでだんす「一トえ」そのよふにおめへさんがたかわたくしをおもつていつておくんなんすとおもへバいつそうれしうおすほんに文里さんハ久しくおいでなんす内もいやらしい事もなくつとめにくゝもおすせんし物前の苦勞をせぬも何やかやぬしのセ話ゆへだとおもひすがなぜかそのよふに深切にされるほ

ど猶いやでなりいせんからついわるくしいすけれどもいつでもきげんよ丶おかへりなんすゆへ跡でハきのどくになりいしてこんどきなんした時ハよくしいせうとおもつても顔を見いすとはらかたつてなりいせんあふかたかたきとふしとやらでおすせうかんにんしておくんなんし【九重】あきれけへるそんならとふともなんしと

いゝされバたつもたゝれずうち〳〵と座敷へ行との言葉をしほにきのとくそふにたちいでゝ何心なくうかゞへば文里をはじめ一座の傍輩座敷ハ泪の露時雨一トことといふてハむせかへり顔見合てハ泣しつゝ名殘を惜むそのふぜいしばしためろふそのうちにつく〳〵とおもへハほんに今更に假初ならぬ三ト年の恩またもかけかへあるよふになぜあよふにした事かとまさか名殘のおしまれてしきりに哀と胸せまりまたそのうへに此身のうへこれまてあたのにくしミなく行末までをあんじるとのこるかたなくなさけぞと心で繰だす我身のあやまりわかれとそゞろに氣も乱れうつてかわりしひとえが心底わつとばかりに泣ふせばたゞさへ哀な此座のもよふまたも一座ハもらい泣前後もわかづ臥しづむ文里ハよふ〳〵氣をとりなおし【文里】そふミんなが名殘を惜んでくれるハほんにうれしいかたじけねへがそれじやァ猶さらかへられねへわつさりと笑ひ顔を見せてくんなと うるみごへにてなミだふきながらいふ ほんにとふでかきりのねへ事

だいれヽいる程おもひのたねださあ〳〵かへらふと
側にありおふ茶碗にて手酌のむり酒二ッ三ッミんなへもと跡ヽ涙のいとまごひ行んとするを
一トえヽあるにあられぬおもひ裾にとりつき泣ふセヽ文里ヽふりきり下につくばい
【文里】みやげ心のあいそうヽうれしいがこれよくきゝな外のものにヽそふでもあるめへがた
とへおれかよふにしんにいやとおもふ客人がきてもおめへのよふにしてヽ身のためにならぬか
らちつと欲をしんなせへわかさヽわかしむりもねへがはてすいた男ヽまれにしていやな男の多
けれは社苦界といふものそこを随分しんほうしてかけなからいゝ耳をきゝてへまたこんなのろ
ひ句をいつて氣にあたらばかんにんしなと
たちあかれバ一トえヽ何とセんかたもどふぞしておくんなんしとはんぶん跡ヽむセかへり涙
をおさへて初瀬路ヽ
【初瀬路】これ文里さんこんやばかりヽどふぞいてあの子の胸もきいておくんなんし【文里】
へテとめてくれてヽうらみだはじをいふのも心やすいとおもふから【初瀬路】サァすいぶんむ
りとヽおもひゝセんか一トえさんもあのよふにいゝすから【文里】ありやァ三年もこふきたも
のだからまさかにあいそうぶりだわな【よしの】なんでもわたくしともがいつセうのたのミで

さんす【文里】おめへがたかそのよふにいつてくれるをやほにかへられもしめいか【よしの】なんにももふしいせんうれしふざんす【あすかの】九重さんはないておいでなんすから此よしをしらせてよろこばせもふしいせうと

よふ〳〵一座も氣をとりなおし座敷おさめて床へ入いとまごひやら禮いふやら我部やぐ〳〵へ立かへる一トえは涙よふ〳〵とおかたじけのふごさんすといふたまゝにも捨がたくせ話に成し禮いわんとなく〳〵座敷を立出る文里はうわ着ぬぎ捨て帶くる〳〵と引しめてたばこくゆらし居る所へ間もなくばた〳〵一トえが足音こなたはうしろへむきかへて寐たる樣子にもてなせば一トえは眼ぶち泣はらし泪をふきしみす紙を手にもじ〳〵とひねつても何かしきいのたかければ氣毒そうに床に入少しは心おちつけどまだ氣にかゝるは文里か胸何からいふてあやまらんとのそいて見たり考たり惚た初會の如くにていわんとすれどいゝかねておもひ〳〵て時うつり拍子木の數かぞうれはもはや七ッのあけちかければおもひきつてもしへ〳〵といへどいつかふいらへなく今宵いわねばわかれての跡でいふてはかへらぬ事とおもひまわせはきもせかれなんとせんとはおもひしがおもひあまりてかんにんしてとわつとさけべば文里は目覺しよふすにて

【文里】なんだびつくりしたと（振向たばこをつきながら）どふしたまた積がおこつたのか【一トえ】段〳〵のおはらたちむりとハさら〳〵おもひゝせんどふぞかんにんしてと（向は）【文里】これハあらたまつたはらをたつくらいなら今迄人の口歯にかゝつてきわしねへがそのよふにいやがるものをべん〳〵ときたハおれがつミたつけよ【一トえ】そのよふにおつせいす程なぜあのよふな氣であつたとおもへバいつそ死にとふおつす今迄が今迄だからどふで承知ハしなんすめへと兼而よふいの髪剃にて手はやく袂を口に入枕へあてゝ小指をおしきり紙に包てなげいだしもれくる血しほを紙にてふせぎみれんをミセじと歯をくいしめこらへて見てもふるへしハし【一トえ】これまでの事ハかんにんしてうたぐりはらしておくんなんしとんじつ見へていじらしき文里ハとつてなげ出しお面をかへて

【文里】いらねへわへこんなものをゐばにしてかゝれるよふなとがハしねへハこれ今迄ハ年はがゆかぬゆへあどけねへ欲のねへ子だとおもふからわるくされるもいとわづきたがうつてかわつてこふつぶとい仕打をされてハもふかんしやくにさわるこれまづ惣たい苦界といふものハ錦の夜着にからまるもこも一枚のよたかでもめん〳〵のすきでつとめするのハひとりもねへ親はらからのために身をしづめそれをおもへばふびんさにきずいきまゝも里のならいととふして

やるぞよつらからば只一筋につらからでこゝろにおもわぬそらなみだ今になつてなんのたわ事いゝたへ事ハかず〳〵あれどわれとわがでにはじをいふのがはづかしさにこらへているぞどこへぞうつて金にしろと

いゝはなせハ一トえハしゞうしやくりあげ〳〵

【一トえ】成程はらもたちいせうそれもわたくしが心からだと身をうらんでおりいすかせめて一ト言かんにんしたといゝなんすをきいたうへでハ命ハさら〳〵おしうおすせんといゝたい事もせきくる涙にへたてられ心ハどこへ飛ゆきしかもはやわかれとおもひつめ【一トえ】どふでもぬしハといへど見むかず小聲にて

【文里】江戸ぶし 〽かいておくるハみの噓誠すくなき命げも鹿毛もなく音やしとふらん

一トえハ今ハこれまでといぜんのかみそりとりいだしすでにあやうく見へたるに文里ハあわてゝとむれどもはなしてころして〳〵としばしあらそふそのうちに髮剃とりあげ口へ手をあて【文里】やれはやまるな何ゆへ死ぬといふこへ聞てうらめしげに顔うちまもり【一トえ】何ゆへとハきこへいせんどふでうたぐりはれハせす未來でいゝ譯しいすからかまわづはなしてころしてと髮も乱れ氣も乱し文里ハまたもゆだんなく

【文里】これさ〳〵うたぐりはれたこれさもふいゝわな〳〵まあ〳〵顔でもふきやよさ【一トえ】そんならかんにんしなんすかへ【文里】ムウかんにんするよさ

爰にほつとためいきあると中庭の連理木(れんりぼく)にてよろこび烏(からす)

カア〳〵

白跋

二筋道とは。世に行るゝの。大道の善にあらで。右も左も銀世界。うかれ烏のまよひ來る。はかなき雪の粧ひに。はたして水堀へはまりやすきは。是人心そかし。されは吉原へは入ぬこそ。實の通意と高雄が金言雨降すして地固ふするは。此書に足る事を知らは。何そ心の雪解に。泥す愁ひなからん

大尾

辰巳歸去

序

二上りのいたこに曰。手鍋さげふと口にいへど。實は乘たや玉の輿とれ。豈酌女の言ならんや。其手鍋提るが。ふせ玉の輿にも勝る心意氣を。すつぱりかひたる作意の妙。河奈川の豐倉を見通す。什麼生。達磨も古石に三年。子曰君子も中島町の小徑によらん。嗚呼三河樓の料理番が甘口も。大津樓の水の鹹も。味ふる者。此本に口をかけよと。序の一丁燃す亥爾。

關東米誌

自序

色好ざらんハといへる。日本の放蕩家傾國とそゝなかす。漢土の狂費家貴妃が淫婦。無塩女が醜女。薄情愚意心實も。悉皆皮一枚の戯ならずや。蓋義理一邊の通情は。結句心のもめる種。割て見せたき女郎の腸。呑込姿の江戸ッ子の根生骨を。酔道の眞水に洒して。一寸南鐐一篇の書を著し。金の鯱箇版打たる。諸君子の覧に呈す。元來戯謔の書と雖。聊悟道の捷徑ならん。ハテ足下人間一生魯生が夢。樂しミ僅二十年。ナソレおちかひ内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日

於三河樓見通（さんかろうのみとおしにおいて）

式亭三馬採筆（ふでとる）

凡例述意

○先に雷名の諸先生。東妓。南品。北廓。西娼の遊里小説を著述し。滑稽妙文普く海内に震ふ。其穴を穿つ事高くハ高慢の鼻虚空先天に至り。低くハ糀町の井戸を浅として。混底那落閻羅王の天窓に屆く於之短才の小子等。書せんとする筆頭に文およバす。依て今諸君子の非言を不顧。名家の糟粕を嘗て。予が分に應じたる。新市場の世界を著す。文くたく〱して符合せざるハ覽者の増校言を希ふ而已

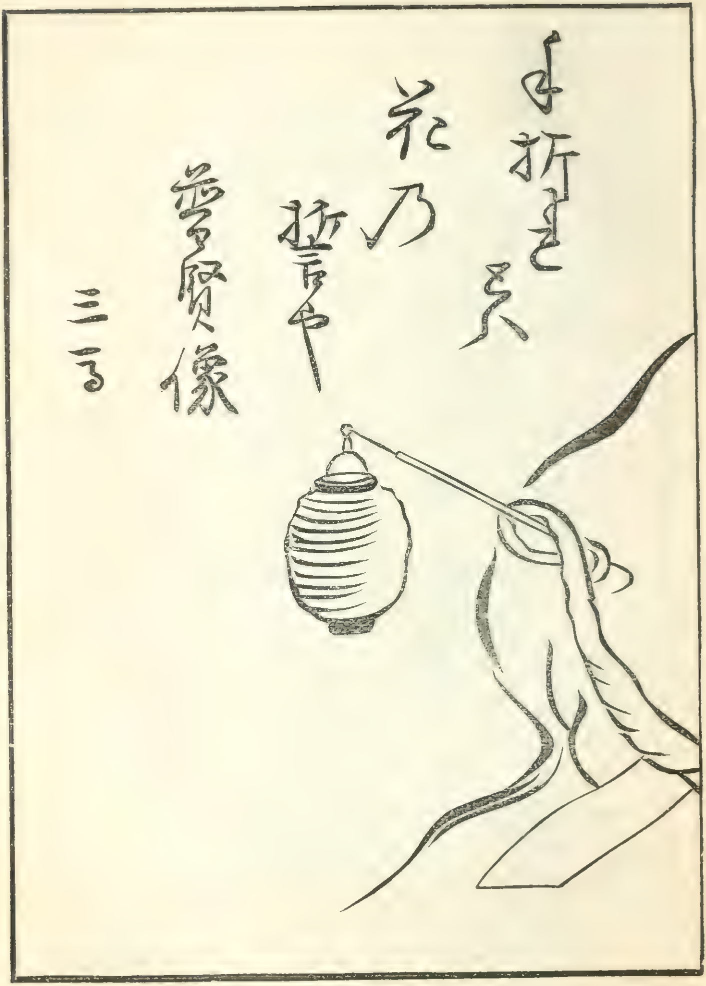
○此書の趣。女郎一人に三客の意味を穿ち噓と實の迷悟を示す然と雖。東曲通の覽に呈すとにハ非ず

○廓通の目より見バ外國夷狄の如くなれバ言語も おす ざんす に變て はんな せへし と耳立バ其部俚を改す。舟宿楽。私等の類ひ其儘に出して片言の誤を正さず唯有容になして三太郎權七に與ふる而已

巳上

啞囉哩樓主人戯著

哥麿筆



發語

戀別〱の後朝。ハイお迎ひに別の鐘。間夫と女郎に惡まるゝ。鳥が啼吾妻なる。辰巳の里に舟ハあれど。君をおもへハ歩行よりぞ。行も歸りも心から。俤の目先にちらつく。ぶら挑灯の火と共に。おさき眞闇行當ばつたりと。お座鋪子供衆の斷に。一身のねぐらに迷ふも。おのがさま〲氣風にヤ有りなん。爰に一場の娼家あり。所謂戸橋赤町裾櫓おの〱列國を分ッが中にも。古石新石の繁昌。此里惣別客品有り。平代橋と共に長〱し夜を。一ト切遊びのいと短きに。遊子鈍通。サッサ押せ〱の猪牙舟に乘じて。闇雲にる有頂天へ昇り詰。終にハ違ねへのまん中を取はづし。トッチリとんと身を落せば。食客の權八さんとなる叓。是則水道の際ハ身を喰ふ喩のごとく。夕ァに千金の角屋舖。朝に剣菱男山の重着するも通と不通の譯合ならず。兎角世界ハ竹田近江が積細工のごとし。爰に群來る遊人ハ。中通い下。の人物にて。棧留青梅の店者ハ。屋舖通ひの初馴染より。年に二ッの出番を誓ふハ。聊二星の契りにヤ比すべき。彼放蕩家の呉王。姑蘇臺に西施をして。チョン〱幕の樂も。かくハあらじと未至通の貧君子。價安きをもて喜見城の思ひをなし。逼兩三個の妓藝を揚れバ。晉の謝安が東

山に新狂言も是にはしかじと。やに下りに高ぶり。自ら錢湯の湯氣に上ッて。黄色な湖來に湯番を恐させるの徒。湖來を以て克ビハヨウトウを度し。新手を以てよくスソツパリを殺す。此世界の風土といへるハ。長髪羽織の細身指。黒縮首のばつちり尻はしよりといへるきん〳〵姿の青楼風を廢し。或ハ酒の手拭を肩にかけ。花色繻子の帯貝の口に結ひ。或ハ前垂腰にまとふ。丸額の大銀杏。客人か。將船頭か。船頭とも見へ。また客ともミへ。大きな賓主の禮を乱して。二上りの騒唄。夕しこげんの程もなふ。又ぞや内の御首尾の程と。みのさき目の口紅粉ハ。萬客堂となめられて。行客の詠めハ絶すしてしかも元の客にあらず。流に浮ぶ川竹の。且切れ。且睡びてと長明が。方丈の文にハあらねど。實や賑ふ繁花の地。爰も名にあふ鎌倉の。大磯小磯化粧阪。わけて名高き手越の宿。戀の船着情の湊。新地の端に漕寄る。一艘の棚なし小船。新市場の橋の下。洲へ當らじとする處へ。はるか古市場の方より來る。喑り舟の湖來洒落。たがひに摺れ合ふ舟と舩。客と客とが見合す顔。胸にぎつくり。ばつたり落すぶら挑灯。「今のハ慥に。ト胸と胸。「ムそれよ。チョン〳〵〳〵折柄時も【四ッ明の柏子木】船ハ別て

チリ　チツ　ツッテレ　跡白波に音而已聞ゆる
チン。チツトン。

四ッ朙の部

品　目

〽手こわくかゝれる段

〽うまくかゝれる段

〽しんにもてる段

附り　あくてん遊び三人一座の段

〽女郎ひとりに

客三人手くだの智恵競

石場妓談 辰巳婦言

式亭主人著

【半夜鐘】ボヲン／＼【夜番柏子木】カチリ／＼につれてバタ／＼トン／＼たる料理番の俎板も良音なくして桟橋の聲何屋／＼アイ、、、引の返詞階子ばた／＼も盡て船頭の魂廊下に納て勤番部屋の刀掛のごとくお客だよヲの美音忽ちに鼾眠と變て柿鮓のごとし傍に熟柿臭き舩頭の柏餅あれバ恰も薬盤硯蓋に等しく臺所に算を乱し鼠天井に踊て料理場を馬場と競ひ遠く望バ波風見通に寒く高調子の乙唱哥も風輪蕎麦の音に淋敷寐言の掛合を視合て舟宿の兄さん色事の廻部屋へ這ひ込不寐番のお針靡亭桶を片寄せ醴を溫て呑む時分遙に米相場の迷ひ子火の用心さつしやいませうの鉄棒に響て爰に聞ゆるハへたしか

> 鎌倉古市場二川屋の二階と見へて客と
> 娼妓の差向ひ寂寞とした手管の意説

【客人藤兵衛】稲村か崎新川あたりの酒問屋の伴頭と見へて年は三十五六すこしさびの有でつふりとした人物衣裳付ケあいおなんど のはをりをたゝんでまくら元へ置詞し仕立の上着をぬひて夜着の上へほうりあけ中着もつむきの鼠返しにうきす小も んきがひゝたのがく小袖のド着ニツなから黒のはんゑりらせんしぼりのちりめん半袖襦袢におなんど七子の帯ぐる／＼と前で結び越川仕入た かゝ引のたばこ入を中へ入れ角仕出しのちりめん蟲引を入こしらへは惣白鉄さびそ□□□の耳きせろてうす舞をくゆらせくつと上ケあぐらて ぎつき

居る【女郎おとま】爰の内の板もと也但し子共やにより二板かしらといふ家も有り青樓ならおしよくといふものしかし是へいへずと御そんじならんか念の爲已上一中としませいすらりとして少よりきミのあるすがたあいうへたの三すじ立のこり／＼するやつ下着へしまちりめんのせいらつ襦袢はひちりめんに白ねりのはんゑりゑりはゞひろく鼠の二重とんすの帯をしめこあんとうのそはにすへり片手ついて片手へきへかミのぶらさがるたぼうしかんざしでさしこんでゐる【藤兵へ】コゥわけをいゝな何もふさぎのすじやァねへ。なんのこつた庖丁を引ッたくられたちんこ切か。すミ繪の虎じやァあんめへし。口上書を出して藏前へすわつてゐやな。ァ、おもしろくもねへ【おとま】おめへも又あんまりでごせへす。かぼちや畑へ凧をおつことしたやうにおつにからんだ事をいひなへへす。ソゥ又穴の穴までほつて聞たくハわけをはなしてきかせやせふ【藤】しれたことよ。穴を掘るのほらねヱのと。水場の施主か。堀抜井戸の地主が。聞てあきれらァふさぐ／＼しひ【と】何がふさぐ／＼しひか譯も聞ねヱで腹を立なはるか。ねッから氣がしれねへ【藤】よしてくれ。くそ落付にあやなしかけるな面白くもねへ。こういつちやァごてへそうな噺だがトすこし聲高に成てしやべりたさふとする處へ廻し方の女南部綺の細入に黒と鼠のくじら帯を〆前だれハ浅黄色にすそへ貝諡したちらしつまさきへとまといふ字を白ぬきに染出したるハ此男の揃ひと見へて少し酒しミのかゝりしむらさき縮緬ひらぐけのひも右の方へたらりと結びさげあたまへ天神結びのすこびんちよびと白のかんさしさわつたら落さふにさし銀むねのつげのくし横ツてうへひねり隣座鋪のてふし盃をさげこ廊下をとび／＼に來り【お八重】ヱ、ぞんぜへな廊下を酒だらけにした誰だかおそれるぜ。ヲャおとまさんヱ藤さんのお聲が致ますね【藤】コゥお八重坊／＼。一寸來さつし【と】お八重どんか。ちつと喘て行ねへ【や】何で有ます子ちつと面白ひことでもお聞セなはいましト障子を明てはいる【藤】ぬしやァさつきどけへいつた。雪の下の箱崎で

見かけたッけ【や】ハイ今日ハ汐富から西川岸の方へ掛取に參りました【藤】よくあるくぜ。しかし爰の内のばァさんと稽者の目ッかち樽治が。此土地じやァ古ひもんだ【や】烏のなかぬ日ハあれどかね。藤さん此間ハいつそお遠〳〵しふごせへます子定めて何方にか【と】大有りとミへるわな。それにこつちの仕内がわるひからどふで。お氣にやァいらねへはづさ（ト引ツからんであてる藤ハむつとすれともそらさず）【藤】コウ一ッ呑ねヱか。爰に硯蓋があるサア〳〵のまつし〳〵【や】イヱモウ有がたふごぜへますが。こよひハいつそ過ましたから【藤】ハテすぎてもいゝわなモゥねるじやァねヱか（ト一ぱい呑てさす）【と】（てふしをとる）【や】ハイこりやァおとまさん。おはゞかりでごぜへます（ト一ツうけ半分のんで下へ置その内に藤兵衛鼻紙袋より壹角とり出して紙にひねりサアといつて出す）【や】ハイ是ハ（トいただいて襟の紙ちよひとはさむ是ハ此女が藤兵へにのむしんなれども流石じかづけにハいわれぬこと故おとまにいひかけたるとミへたり）【や】モウ〳〵此間ハとんと御酒がよハりましたナンニうそじやァごせへませんモゥ是で御免なはいまし（ト顔をしかめて盃をしとミ元トのところへ直す）【と】マァいゝわなモット噺て行ねヱ【や】イヱモウミんなふせりました藤さん是ハ。おとまさんよろしふ（トいつてたつ）【藤】そんなら休なコゥあしたハいつもの通り早ひぜへ【や】ハイ〳〵いづれ承知のまくでごさいますハイごきけんよふ（トらうかをばた〳〵跡にハふたり何かつまらぬかたちにて居たりしが）【藤】コレさつき富貴閣の廻しが來て手めへを階子の下へ呼出して。何か隱密に咄やつて行たのハ。なんでもいつかの大智屋の傳に違ねへ【ト】おめへがあぢに廻すだけわるひわな何もかまつたこつ

ちやァごせへせん【藤】ムンニャ其譯ハとつくに御存だ。ありやァおゝかた鳥居町から乘て來る喜之とかいふ野良が來て。お定りをやらかすのだ。あいつも又しがねへやらうだナセ男らしく貰引にわたらねェ外の茶やから名ざしてくれべといふいたこ文句もいめへましひ忝くも藤さんのおよびなすつたあまつちよを。盜とかゝられちやァ面白くねへ。なんぼ手めへも枕だこの入たもんで如在ねへつらァしてもッゥうまくハ化されめへそりやァねェおちやつひいだ。富澤町の棚市から。ぼろ壹メ五百に買て天道干へぶらさける様な古革羽織でもこう又おれが天眼鏡で。待ェ、と一ばん怪られてハ何がなんとゝいふ場もなく。成程こう〳〵いふ利屈の狂言でごぜへすと。嵐がたてをする様にひらつたくあらわせろ御勿躰ねェこつたがおいらァやりてが目たく玉と姨ばゝァの胸ッ屎を根付にして視眼嗅鼻を緒メに付ヶ。化の皮を引ッぱいで。提たばこ入に挊て浮世をぐつと薄色に呑こんでいるせうがにハ何ハどふだ角ハかふだ附木板のへぎ殘りハち。や。ちんころの舞臺になる。拂扇筥が菖蒲刀に化るの料理場の蚫ッ貝ハ。やたひ店の出來合卓朴。しかも料理番のほまちになると。こいらァちよつくり。むくおきのうがちだナント世界ハあらひもんだらふサァどふだ返詞をしやな只うつむひて何にもいわずのお牛きどりもモウうるせェ。そんなしうちハ切落へ落るとも棧敷連のジヤ〳〵ハこねへよしてくれ。そつくり

と犬のくそのねへ處へ置にしろ。たとへ左交と五瓶が近松巳來の新手をかいて。千手觀音が化身て働かふが。ひくともくふ男じやァねへぞ。なんのこつた。あきれが中返りをして葺屋町川岸へかるワざを出さァばか／＼しひトまきじたをまじへてりき身をならべる處がすこししやべりあきたと見へて暫くとぎれてほんのこつたアヽつがもなく面白くもねへなどゝたばこを呑ながら小音であくたいのねじめをして居るおとまハ先刻よりちよびり／＼とあつくなるやふな水を向ケ段／＼とづにのらせる工めんにてなんともいわずあんどうのぶゆをかんざしておつかけたりぺん／＼ぐさのかげぼうしを勘定したりむだ書のいたこぶしをなどりちらして居たりしがさてこそこんたんの時刻到來とそろ／＼ころし文句ヲ考へ芝居の魂すゝ紙で張た月といふもんで上たりさけたり井戸がへのつるべときめかける【と】成程おめへのいゝなはることを聞やしちやァ一／＼御尤さ。けれど又わたいがいふわけをもちつとハ聞分てくんなせへし。そりやァおめへあんまりお情ねェといふもんでごぜへす。わけも聞かずに腹を立なはるから【藤】おきやァかれ。いたこをじかに燒なをすなわけもへちまもモウきかねェ【と】ハテそんなにしからずに聞なせへし。なんぼしがねへわたいらが樣なもんたつて相應に虫といふ物ハ持て居やすヨシカエ今おめへのいゝなハる。喜之さんといふ客人ハ。めど橋の大こくやの源さんが連て來て。初の時からしてちつとわけのあるこつて。船宿衆とも噺合にいつそ義理だらけで馴染になりやした。それだつておめへと是程の中だから。何も外の客人へハ。是程も實を盡したことハごぜへせん。ヤァそりやァうつちやつて置て。此初仕舞をたのむにも。しつていなはる通り手も足もねへ身分だから。客人ハさつぱりなし誰といつて相談してくれるお方もねェといつておめへに【藤】な

んだおれに相談しかけても。所詮できねへと。見くびつてしたやりくりか。ほんのこつたが古市から新石切て。者か幾人子供が何人その内よび出し是〳〵がふせ玉。出居衆かどれ〳〵。あすこの内の娘分や妾のお針ハ扱おひて。とこの内じやァ火入炭團がいくついる。蠟燭油ハとれ程つかふと。しがく所の穴の穴まてしつている。朝ハ大嶋町のむきミ賣の出端を切ッかけ。日が暮れバ白魚の篝と一所に一年三百六十日内にねる夜を遊びと心得。夜着の半ゑりの天鵞絨すれに首筋をいため尻の先へ猪牙舟だこのいつた男だ是程につき合ッても心いきハ呑込ねへか。こんなに安く見られちやァ猶此腹がおすわんなさらねへ　トちつとすれバ腹をたつて大平をならべる一躰此男ハ酒によふといつでもしやべり出しさめて後ハ常のごとくなれバおとまもふだんのこととしせふちしてさのミおどろきもせず櫻にのぞミへんに應じて意味無量のかき欠句をあらハす此あくたいすなハち女郎の腹よりなせることにて大詰となれバついに一ツのおとし穴へ落入るはなハだおそろしきやつ也【と】おめへのやふにばんいちにあつくなんなすつちやァどふもわからねへ。ぬしの心いきハどふかふといわねェでも。如在ねへといふこたァ。しり切て居やさァ。夫だつて又。こつちの心もちつとハくんでくんなせへし。こりやァわたいが遊バれたのかハしらねへが。新市場の氏田屋とやらにわかつた子供衆が有て。おめへを深く呼申スときゝやした。それを聞ちやァなんぼはかねへ身だつてもホンニしミ〴〵と腹も立。くやしく思ッても諸事。苦界といふもんだから。道柴の露程もおめへを恨む心ハごせへせんよもやそふいふ譯合じやァこんな手もねェ女に乘て噺てくん

なはるのも首尾へと思へば いつそじれつたいナゼニハなしミッたれに生レて來たかと。心でわ
たいそ候ふでおりやす （トなき聲でも かれてゐる）【藤】（もしんめりとして何かぼうぜんとな [illegible]）ムヽ、そんなことア覺ねへ。ま
た有たにもしろサ。手めへハごふぎとるれい ことばかりおさへてたてるがナゼそれから吉之助
が名をうでへほつたイヤサどふいふ訳合でおれを隔し者にするそウ〳〵是をいやア隔けらしが
淨面あるこうでをほるとも勝手にしろヱもヽれヽアおめへ [illegible] そりやアおめへナ [illegible]
へいゝふれき。此ほり物のわけもよんどころねへ義理にからまれて隔やしたが是につて恨をされ
すへて目もやナミれはおめへにつくす心でござへすわな【藤】ソレヤアーなぜ【と】ハテ隔 [illegible]
を隔ッこも体と達てもよけりやアつい六兩と七兩いることも 夫にはよくりかなよつくら暗
トにつまりきれの消氣も今にやつはりむづかしくヅて人參の代ャ何角八兩程入用だから 年ミ
まひうんでもとに面してくれといつて來たにツレニおめへの方へハ來年行ふと約束ハするし
よふさおふさ思案につきて、金藏これなふ義理をするもとつきれャおめへへい傷けれ [illegible]
ン一おたいかりてつと六不便だと思ひなはるなら腹を立ずと勘忍してくれなせへし （トなに うつむ）【藤】
ぎャ [illegible] 当木ならねべ此一首にはハだちろくな【藤】おれだッてもすへ始終是をひり合ふといふ中だから腹をたつでもねヱ
が隠ものゝことハどふも〳〵いめへましく〳〵ッてならねへからいふことよ一躰又鳥居町から來る

やらうがさつぱりと氣に喰ねへよしそふ云利屈なら十両が十五両でもたて引にもおれが出すその代にやァ喜之助ヲすつぱりと突出して見せてくれ壹年早くこつちへとりやァ十両だしても氣持がいゝ（ト段々りくつにのぼせてくれバおとまハうぬがたつぼへもち込こし心の内でハ舌ヲ出している）【と】そふいゝなはる程どふも其金ハもふいりやせん【藤】其はづよ金ヲ遣ハせねへつらでやつぱり引込のがいやでもあるし又喜之が方へのつらもたつめへ【と】そりやァおめへ愚痴ッぽひ今も咄た譯合だからどふも心がすミやせん【藤】すまぬ心の内にもしばしだ何でもすつぱりつき出すといふ證據を見せやな【と】證據といふハマア此彫物をけして仕舞ふ【藤】（笑ひたかくして）そりやァどふとも勝手にしろ。しかしこゝいらをけすにハろせもでもかけずハ行めへ【と】きついしやれさそふいわれてけしかねるもいかゞ（ト手に持たる[illegible]引出し色と欲とに緣切艾あつきハ女郎のつらのかわ切火ハゑんゝと立のぼるにおとまハ是も金ゆへと口の内にハ唱名ならで十両ゝととなへながらすつぱりとすへけしてしまふ）【と】ヲヽあつかつたサアよく見なせへし（ト前へさし出す）【藤】ムヽよしゝ遣ねェの眞中だっ夫ですつぱりとわかつたがついでにそつちのうでを見せや【と】（うでをまくり）しらきてふめんだョよく改てミなせへ（トはなのさきへつき出す藤[illegible]ハとつくと[illegible]の紙入[illegible]んがの金子入たとり出して小判十両なげ出して）【藤】ソレまあ是をとつて置がいゝ跡ハ明後日持ッて來よふもし[illegible]用が有ならバ舟宿迄いつてよこせッシテ内へも大事にしろと云てやりや【と】（なんにもいわずいたゞいて紙入へはさミ[illegible]おしている）モシちつと寐なはんねへかモウごうてきに夜がふけたサアねよふゝ（トとゞ[illegible]こいつ折[illegible]の[illegible]よ）

トなしき【お角】たじまの八丈に鉄砲しぼりのじゆばん白縮緬のしごきヲだらりとぶらさげ匂ひ袋をいれた鼻紙をたてにはさみ前髪とざん
なし　ぎりハひたいぎはへおひかゝり大嶋田のかつくり返しにみからハモウふるひとかで平ラ元結のしミにしばりねまきのすそた
くろーとまく二三寸でかいヽへ膝下をつまだてひよい／＼　いたこ　へしやかやあミだにやおぢりおやの二タ親の異見でもほれたおまへがど
うしあ思ひ切らりよかそりやむりじや　ト字あまりの二上リを諷ひながら【角】おとまさんあけてもよしか【と】お
かくさんか這入ねへな【角】障子を明んとすれどもがたぴし／＼とつかへる　エヽじれッてへナゼこんなにあかねヱいけすふ
／＼しい障子だぞヨウ　トばたアりあけて這入る　ヲヤ藤さん。ナゼだんまりでお出なはるヱ。恨でござへますよ
ト手でひざからさきへばたアりトすわりふる／＼／＼としてしやがんでいる其内おとまハきせるを出し藤兵衛が煙草をついであん
うへ魚油をへ第八ちり／＼とちやーて出すお角ハ一二ふくくわへてすひあんどうの臺へはたく此内藤兵へハだんまりのいなきゴウ／＼【藤】
ムヽムヽムウだれだ【角】誰だもすさまし。とつぴんちやんさ【藤】ムウ奴か【角】いやだに
のふ奴とハ　んだへ大部屋じやアねへヨ【藤】そんなら大ぼやか【角】きついしやれさ　トきせるでたゝくまねをする
【藤】大でも平代團子よりハはらふとがいゝと掛取ニ頼んだじやアねへか【角】ヲヤはづかし
いいろんなことを云なはるねヱ。きついお豆だ。うつちやつて置なはいましヨ　トしたた　【藤】ヲ
ヽ長い舌は貝の背の上へ長刀のよふな客人をのせて。水車のごとく。おしやべりを出しますコ
リヤ顔ヲアイヽといふやうな氣味の悪い。化され客がまぢり／＼して待ッて居るだらう【と】エヽせ
ウやかましいチットト相談が有からだまんなせへし。やかましくッてならねへ　トせなかを兩方からこそぐる【藤】
ナヽあやまり／＼あやまつたのかんさらしだモウねるよ／＼トキニお角さん今夜の客人ハ初か

【角】イ、ヱ【藤】裏か【角】ウンニヱ【藤】何のこつた天川やの伊吾か大薩摩の朝比名と來ている【三人】ハヽヽヽヽヽヲホヽヽヽヽヽ【と】隣の部屋ハ誰だのふとんたやかましい【角】アリヤアお百さんの客人さ三人一坐で。くせとして廊下鳶だからいつそいやがつているヨ【と】なんだかおそろしくしやべるのふ　ト杉戸のすきより三人のぞきゝるに　曰

後堂貪客三個交席段

中座舗三人割床にて床取つていまだ女郎の來らぬ鋪中の屛風の内に坊主天窓をくびツ切り夜具へつツこんでやに下りにふんぞり返り脇のらくがきをよんで居るハ醫者の内弟子ト見へて口チにハ張仲景が聲色をつかつて内證ハ清狹を引て傷寒論國字解などをそらんじ何こともよく差出たかる性にて切り拔髭への蘭言唐音學語なとをしツたりぶりにならべたかるくせあり

【片達】黒八丈のヒツ裃けな打掛に上着は松葉色の山まへふとり同しくヒツ組茶返し小紋のふとりの下着に花色はかたの帯をメまだ深所へすわつたまゝで居る

【吐逆】こつちらの屛風ヲひんめくつて大あぐらで居る人物田舎廻りの大夫か人形遣イか但しハ茶飯已下のたるしてもうなりさふにもまきびんの大たぶさなろいてふ一日ごろのあたまめんちりせいらつじまの羽織ハ廻しのなにあづけず只おさとのしれやすを惜也太織の丁子茶の上着をぬひですその方へ置お納戸返し小紋の下着にもおるの鳴海しぼりの襦はん不殘黑む子の半ゑり黒八丈の帯ヲメてなんだかつまを喰をしているこいつに紫陸方言のセンポをつかふくせ有り

【東吉】醫者さまの茨目取次と見へて黑縮緬の上着定てようかん色なるべし下着へとんだふつり合にてさんとめの三すしだち少しぼうのさがるやつに黑ごはくの帯ところ〳〵はらわたのぶらさがり有りむしやうにとる物ヲつらまへておもたいくちのしやれぢぐちなどをやらかしたがる風なり

【片達】隣屋の兩雅人娼婦未至是何の謂ぞやだ。嗚呼可嘆腹中大ひに北山の嚮心丹た【吐逆】トキニモ

シたハと占ひせりふだが「やんれどふいふもんだの埒のあかねヱ「につてん」か幽霊になる迄
まだ来ねへとハあんまり。ばか／＼しい【東】たつた今硯しの「おゆき」の聲がしたッけ呼付
ケのいざならへハどふだの【吐】とゞ大詰の「そり出さふ」ハ「がんどう」めくやつだぜ【片】
うきァねヱ如斯不和ときハ巴豆を配剤とのふ場だ【吐】じきに手めへしやれたネ【東】モシ
ちつと「孫右ヱ門」を「孫三」としてへ「せめ一ぱい」孫右ヱ門入レ「此通りだ【吐】ム、いゝ／＼
きひ／＼ 腸背ですくつ一呑むが居候川柳／＼ トふるいことをいひながらたばこをだし サア「てうけい」ハ有ッか
【東】有やす トぽくいめへましひ所詮此がつ／＼じやァ咄合がわかつかねヱ ト廻しまくらをつらまへてわれるほどきせるをはたく
【吐】コウ片達さんこつちへ来なせへ 片達ハ廻し枕の四角でハあたまがいたむ故ふとんの下へ入レて其上へふとんをのせ二して坊主あたまハ寒いだけどひとりねていたりしがむつく／＼おきてこちらの屏風へ来り
ハ、ァ此屏風ハなんだ、妙画／＼宋紫石、沈南蘋などゝしたしといふ画だこいつァくじ
どりにさせる績にわい。和漢まぜこぜさつくらが沖だ節分の晩にやァチト恐れるストキニ「せい
ざ」を「一やつかい」に吃したせいか。スコ一しふたらと出てへッガ所詮モウ藤ハ上めへ トきいろなにて
あたりをきよろ／＼して ヤット 有り／＼こいつァい、。奇ゝ妙ゝ絶類な塩梅だ トぼんふたのわきに引のこして置たる昼の茶碗物のひやつこくなつたやつをむしやうとする
つている【東】なんだ／＼ちとおき山としよふ。沙汰なしハ大キにうらミだ。【吐】ごうぎと、の吟
せ一かけるもんだの。夫じやァ「かくやつかい」と見へるわい【片】こつちの畑にやァねへこ

つたの。そこらハぐつとナツレ俗物とかなんとか別世界にして。諸事色情ハ離たもんさ。ソリヤアそふと此妓婦ハとふだ根ッから氣かしれねへ。足下ハ不佞か婦人を。とくと熟覽したか。おそらく醜女。彼俗に云しミッたれたらふ【東】デモあいつァざらつきまんでもねェだ。わつちがのハ首ッつきか妙だ吐逆さんおめへ見たか【吐】大キにサ飴細工の鳥が南風をくらつたといふ首だ【片】ム、いゝ〳〵妙言〳〵コレ此枕を見さつし（ト吐逆が女郎へ廻して大きゆへぬり枕の古ひのを出してある）【吐】廻し枕の名代に馴染の客へ恩に着せて出そふといふやつだ【片】ム、いゝ〳〵妙言〳〵甚哉滑稽の大ひなる。實に當世可恐だに【東】爰の比よく紋を見ねェすこしきざハりたの。金箔の古へも今斯なつちやァ霜枯の藥鑵天窓。燒原場所附といふ見へだ【片】ム、いゝ〳〵妙言〳〵【吐】トレうさァねへ。へんちきな紋だ。べちやァねェとぶ漬きうりの輪切へどらやきをくッつけたやふだ【東】是てもなき殺した狂言だらふ子しかしァノつらで「こたれ」ちやァ掃溜の地震雪隱へおつこちた雷といふつらだらう何分恐れる【片】ム、いゝ〳〵妙言〳〵何ンでもソレ方便を用ひてあいつが懸河の辯をふるつちやァどんなやつでもひたいへ江戸繪圖の川といふ筋を出して一ばんひねッて見るのサ俗も竪板へ詰り小便をするがごとしだらう【吐】大笑ひだ横板へ泥もあきれらァ【片】コウ爰の内もめんかまぶな子供ハねへゼェそしてだし物がいゝなぞといふや

つもいるが。おいらにやアさつぱり解セねへ畳の酒じミと。茶のしほッぽやいと壁の落書を見おやァ甚遊びのあいそづかしだ。コウいかねェこつたが此頃の世界をりしまさねへか（是れしらぬかといふこと）【吐】イヽヱまだりしやせん又おめへ「與太郎」じやアねへか「東」チト承リてへ子【片】話說する所ハ五六日い前のことさ兩三個の社友と。去る學館の歸りからぐつと北方へ飛ばせやしたァそこでおつりきなことがあるもんだわつちが盃をトさしたやつハモシごふてきさ【吐】ムヽありがてへ定てサふりが〳〵【片】開なせへ床の内ハ初會にしてハおそらく妙手なか〳〵九目もおかねへじやアうてやせんそのくせ國色尤物イヤモ至ッての佳人さ【吐】ムヽ有かてへ〳〵【片】（たゞにのりがでゝむしつうと云ふは隠し立いろなこわいろが段々と声でふしになる此内東吉へ一口一口れぼうにて なんともいはれずはづかしくなたふにふたりが屏風へうつるのでおかしけれどもわらひをかくし足をばた〳〵している）【片】そこで兩座敷につらなる歡妓幇間こいつまた虚誕を交てトントナソレ二階中が引ッくり返りの大どん〳〵滝石の大廈高堂土佐の大仕掛を見るがごとく。イヤモ愚僕大酩酊諸事夢のごとく〳〵で閨房へはいりやした【吐】ムヽそこでおめへの名句確論がありやしたらふ（トしつたりぶりにあいさつハすれど も何かさつぱりわからずきよろだん）（まりて…ハムヽおりがこへ〳〵ゆだムヽいゝ〳〵トばかりあわせかゝ でいふ…ハ…ぼうにて口の内でいいたこちうたつこいたりしが）【東】その世界もいゝが今宵ハどふだモウたいくつの節だ【吐】初會廻しハとられねへ所をむりにあがつたから。こいつハ覺悟のめへだ【東】おゝかた女部やかあんどんべやへおつかたまつて出しッこのおでんしら莉。そばイ〳〵

でしやれてるだらふ【片】但シハなめかたても初めたらふ【東】ヲ、さむい〳〵マァ一トちよんぼうふり出してへもんだが。コゥとてもこふなつちやアナ。彼。ナソレ【吐】ム、何か。よし〳〵片公「さくら」を出しなトさゝやく【片】こりやアおそろだにそんならこいつから先へ【東】シイこりや【三人】口をふさいで見へありチ、チン〳〵〳〵ぐわアんー【吐】此所黒幕忍び三重【片】大臣柱に松の立木有リ【東】蛙の啼音寐鳥の笛チ、チ、〳〵カタリ【吐】モツト一七兵衛」を高くまくりねへしかし「ぐる」帯を取ッて真裸もいゝ。こいつァ「はちや」へかめ」たくせが兎角うせねェ はちやへかめると ハ質おくこと也 夫でも此頃ハ「ごうき」だからチト「けさアル」なうめるつもりだ がうまとハくあいよきことゝけまん とハ損ヲしたこと也【片】こいつァふり「どつしん」面白し〳〵 トのこらずもはだかになりてそこらあたりとりちらしたるだし物の引破りなどらうかへ引ずりだし夜具をたゝんでらうかのまん中へつミ上ケそつ上へ[illegible]のせて[illegible]はづし東吉がいろ〳〵のまねをしてどゞ〳〵〳〵はね廻れバ片達ハ坊主で窓をふり廻してちやるめらのくさわぎ[illegible]達ハ口上の[illegible]八が[illegible]色ヲつかひ皆さんさよふじや畢ておくれなどゝさま〴〵のあくチヤリおかしさらくハしくハこゝに略す

〇一躰此里にてハわるしやれ達の人物多く此くらひのことたび〳〵なれバ内所にてもさのみかまハずされども余りにさふ〳〵しきゆへ三人の女郎もかけ来りヲヤ〳〵何でござへますヱと〳〵だおかだヨきついしやれさなどゝちやらかしても一向聞つけずにおどりさハぐゆへいづれもきいちらの廻シ方若イ者たと目をこすり〳〵出来りお定りに女郎をしかりておりむたいねかし付るやらこちや[illegible]夜もはや明方にちかづけバこちらの座舗にとり紛れいかゞなりしや跡ハしらず

【おとま】コゥ藤さん〳〵。モシ。モシ。モゥおきなせへしナよくねなハるいふ トゆりおこされて目をひらきのびをしな

から【藤】ム、ム、ア、一ト息にのみつけたモウいゝ時分か【と】まだ トいゝたがらたばこを吹つけて出し サア
【藤】まて〳〵ふくをはいふきへはたきて サア〳〵モウ歸らふ〳〵【と】マアいゝわなモットしづかにしなせへ 折ふし臨下を通し
のおり昔通る【藤】誰だコウ【や】ハイ私 藤さんモウおかへまアたおめへさんお早ふござへまアすよ【藤】
ウン ニヤ早くもねへ下へ行たら船頭をおこしてくんねヱ【や】ハイ〳〵 トはしごをばた〳〵おりながら下をのぞき 八どん
〳〵 だまつているのはへ大きなこえで はアちィどヲ、んヱ、ずふ〳〵しいぞ。おめへはいつでもせわがやける。おい
ねヱ儀七さんだに【船頭八】おりて なんだやかましいかんにんしねへまア歯もはへねヱ トロをおさへていふ
船頭は[illegible] ハイお待ちどうさまでござります トあくびをのびていて おとまアさんべア、引ト したをべろり【と】何だね
おねヱ [illegible] すア行ふ〳〵コレそんなにツタアのことをわすれめへヨ【と】香これで居
やすからわるくハしやせん そしておめへいつ来なはる【藤】コウトあしたかなんだによつて
ヘエト [illegible] ム、あさつての晩来よふ【と】それなら宵ン付をまつて居るヨ【八】ヲヤあつ
かましい【と】ヱ、いふのが世話だハ トつめる【八】アイタ、、、まだ歯もはへねヱ トまた[illegible]ふきく ニトはしこ
【と】ヱ、よしなといふに トふりむいて おめへほんとふかへ【藤】やかましいどふとも[illegible]
若イ者は[illegible]しくふり向きながら【と】おきつのバヱ【通し】ハイおちかひ内 トくゝりぐへら〳〵舟へ乗いのりかしあげの【若イ者】もやいをときてぐつとつきだし
ハイごきげんよふ【藤】アイトばかり【八幡鐘】のコヲンと共に寺〴〵の鐘月落鳥啼て霜桟橋に白く

滿。宵の口舌に朝直あれバ首尾を苦にする七ッ立あり。醉も不醉も悉皆是朝河岸を漕ぐ舟の賣聲。バカ／＼馬鹿の至りにして其傾城の心の内明の烏も鷄も惡や可愛や裏表。

△前席の客心ハ只おのれ獨呑込すがたニしりもせぬ穴をさぐり傾城をかゝァにしこなしおらァ遊びに行つても女郎ニ遊はせてやるのだなどゝ高慢をはきたがる風なり是等の類ひかく／＼として己がかしれる物なりよく／＼此跡幕をこゝろミ給へナントもしおそろしいやつだ子

▲後座に述たる三人ハ坐は何となくむだチならべしツたり自慢に氣性高く唯通人の口まねをして惡点をのミ樂しミとなし寒夜に衣をぬいで延喜帝のごとしなどゝふざける是あくる日髪結床のだミそにあるべし

晝遊の部

【喜之助】しつかりとした商人のひとりむすこまだ部屋住のことなればかねの都合へチトわるけれど随分小[illegible]口に[illegible]合わりやゝき遊ひヲきらひいつも稽古の二三組も掛ケ諸芸きれいづくしいやミなしにむつくりとした風にて女郎のおこくる[illegible]けふハ寺参りとこじつけ今床の廻ツた躰

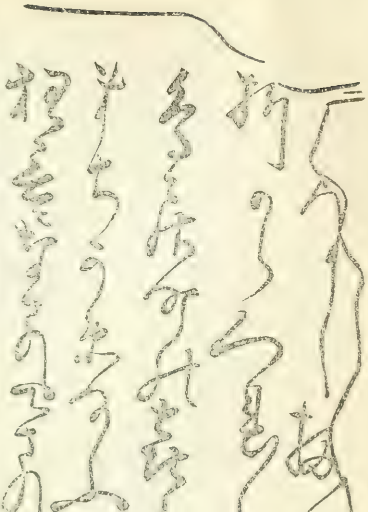
衣裳付うゑだの小袖にりうもんの合着黒手八丈の下タ[illegible]なゝこの糸ゑりのかゝつた縞半花色の肩にはくの紋をちゃんと[illegible]からしに結び金から皮にりうきん金十物の前さげ花色らしゃの[illegible]の鼻紙袋さのミ懐大きからすたつた今小座所から見通しへ上り[illegible]からなじミのげいしゃに一ト合二ツ三ツすこせしふ有て[illegible]下ヲどん／＼とはこばせてふとんの上へふわりとすわる

【喜】どうか雪でもふりさふな景色だの　トいゝながら[illegible]ぬいで[illegible]へわたすかたわら

【源】桜留[illegible]東[illegible]の錦入[illegible]の帯しりこけにさらしの手拭を腰にはさミ[illegible]いぼ[illegible]のたばこ入角つなぎのおけとのぞうつたるゑさけ天窓へはすかけのさきを左さきにちらし兄さん／＼と客人よりもこう[illegible]の[illegible]い／＼さ[illegible]に船宿のむすこ

之助と一口とつけふさのせこ寄り掛おり なたいこたからといふらの書賛を見て モシこりやァ女郎でござへやすね【喜】ム、宗理に書て貰つたから華渓に澤庵の贊をたのんだ【源】どふでお讀なすつてお聞セなせへ【喜】ム、こうさ佛の法を賣、祖師の佛を賣末世の僧の祖師を賣る。汝の五尺のからだを賣て一切衆生の煩腦を安んず。柳の綠花の紅ひの色〳〵か寄にへ水の面によな〳〵月の通へども心も留す陰ものこさずナント妙たこつふおらァよつ程よく出來たと思ふ すこし考へて【源】こいつァ面白ひ。ム、なる程違ござへやせん。是ハどふかこ道理先生とやらの。いゝさふなせりふでござへす。モシさつき摩利支天河岸のこつちらで、此ヲおつしやッたのハ。わつちもどふか見申たやふで。【喜】ム、ありヤァな澁たか一ト頃小橋へつき合たこともあるが。此頃ハ河岸をかへて町へ行そふだ。あんまりさへれェやつさ トはなしの所から見しの女郎ハ一お宅りこトす三絃箱も網打場にはづし二階ハ喜之助一人ハ火鉢ナかゝへ灰の中へ字書て句 あそばにて書ならし居たーしかかたへに有一枚の引たしの間かして見りければ引出し見るに玉帳ありひろげて見やふとする 是ハおとまハやうじやつか ひよいから見て【おとま】ヲヤ喜之さんなんでござへすめつたに見るもんじやァねへアンマアこつちへおよこし【喜】いゝわな見せねへナンダごうぎにいそがしひの是じやァ精根ヲ付るもじご【とま】よしなせへきついしやれさ ト玉帳ヲ引たくろひやうしに間よりみ一通ヲおとす喜之助拾ひ見ようとする をおとまハよしなせへとたゞひにつはひ合ふた【喜】ヲツト妙〳〵みがしの三の切が殘ッた ト手に殘たる紙のはしをたとさし上ゲてよみまたとつてよむ。ここへチトむづかしきすじなれハいろ〳〵きまりて喜之助に同手ナしかねて はなら されれ【喜】なんだかおかしくかくすだけ氣がしれねへ トわらひながらおしひらき

りし扨はその折からくれ〴〵御かためりし島之町の喜之助事必ずかゑなふつきたしの狂言ニなされ下されかし〳〵〳〵



トよミドが内色苦さふくわつとせきくる胸撫おろしおとき見つめて身ヲふるわししはらくことはもなかりしが何思ひけん物やわらか

【喜】コレおときさん（しはらくして涙のふ／あゑにかくしながら）「スおときさん（おときの詞なくたゝうつむ／いて一分ケを考へている）コウ先にもおかたにふかひ道理の有こつたらうかモウこういふしきになつちやア。とふこうの譯も聞にくねエ、が浮世といふ物ハ面白ひやふな。悲しひやふな。はかねへ物トハいゝながら、おれが體もこんなじやア有ルめへと思つたかけふの今で愛相がつきた。モウ〳〵ふつつり思ひ切るコレすつぱりと手ぎれいに船宿前てつき出しねエ。タガ去年中たがひにほつた此片腕。ホンニあんまりむごい文句

だが蚊が喰ても字のあたりは撫さすつて辛抱する夫に引かへ此頃はそつちの腕の彫物は。とつくに消たと友達の噂よもやとは思つてもやはたく改められもせすひよつとたき付られたのしやァ見くびられるもしがねェからだんまりてけふ迄すましたモゥこうなつちや遠ねェたとへまんでくで何にしろ「こつちからも先消べェ　トそばに有合ふ火鉢の中より黒煙たつかた火はさみ出しうで引まくりて口けさんとするおときへおどろき両手にすがりて　【と】コレ申喜之されそりやァあんまり短氣でごぜへす。こつちの心もしらねェよふにマァとつくりと氣をしづめて、わたいがいふことを聞なせへし【喜】やかましい。短氣も。せんきも起らねヱでどふするもんだェ　トうつむひて口おし涙拭から間に出一寸の書いたこ〔　〕へわたしや出雲にとり殘されて男冥理につきたのか【と】ホンホッわたい程薄情な者はねへ其手紙の入譯も委く咄せはおめへの腹立も休ることつたけれど。こんたに又物事が行違になつちやァ跡のまつり定ておめへは。わたいがにくゝッて成りやすめェ【喜】しれたことだァ【と】それだつてもお【喜】やかましいわい○二上り〔譯も聞ずに腹立さんす夫がいけねへじやだきらんせ〔松といふ字は木偏に公ヨきミに離てきが殘る【と】今更おめへヲ何しに嘘だすの引いといふことがあるもんでごぜへすかおめへばつかりを頼にしてくるしい世苦をつかつたり、つらい苦界をおくッて居やす。又彫物のことも。ツゥいゝなはるを聞ちやァ死ことも何ともいわれやせん一圖に思ひなすつちやァ腹もたつから。とつくりとマァ聞なせへし

成程つれ衆のいゝなはる通りよんどころねェことがあつて（トいゝかねて只もじ〳〵）おめへに。けふいわふか今云ふかと思ひ出してもどふもあんまりしがねへこつたから。つい一日〳〵とおくつて今更云ひだし悪ひこつたが。その彫物はけしやした（ト聞よりそばなる枕追取おとまがたぶさを引つかんでつゞけ打にぶちのめす）△此内始終兩人だんまり（二上り）へぶたれたゝかれあゝられもまれ　よごしにされて又つきだされては何處で立ましよわしが身は【喜】ァ、是もやつぱりおれがこけから發たことだ。むせへきたねェ古狸め雨が降らふが鑓が降らふが内の首尾をば小女に頼んでそんじよそこそこと拵ごとして出てくるのをお袋は内に居てあんじ。おひへもたんと下タへ着て風引カぬやふ頭巾ヲかぶつてゆきやれの何のとお慈ひにあまへてつき上り只夢の間も通ひたく是程迄にのろく見られちやァよつぽどおれもうわきなもんだホンニ思ひだしやァいつぞヤ新市場の椅の下で行逢ッた舟の内は新川邊の客たといふことしかも手前の處へくるそふだッ　ァあいつもゑり元はひかるやらうだが（ト少しとムきれて）、是もいつたつてつまらねェ兎角不孝のばちだと思ッてつきだされてあきらめやふ（トきれひ乘しのせりふにてあく）

（たいもなくよほど色仕掛のしうちにてかんしやくの思入ばかり兩方うつむいている）〇（二上り）へつらい勤もおまへを便り夫レに邪見なこと斗り【と】（ひそ〳〵聲にて）喜之さんマァこういふ譯を一ッ聞ねへたとへどんなめにあつてもわたやァ一言もごぜへせん（トミたくちをよせれども一向ふりむかす）〇（二上り）へ心がらとはわしや云ながらひよんな苦勞をするわいな（むりに喜之助が耳もとをと）

らへてこゝんなを、やく按ずるに先段に出たる新川藤兵へがあらましを申しておかしくはし理のへつらひのたゞしたこと
まさしい心でしましたからこつたしきわたいも大ぜいくらうだと目できましのこの切有べし理にてその言ひなし…のまへ
へいいたにはざて仕方にはわからず但
し箭誠は諸弟子の御すいもじにあらんか

○へおまへばかりに苦労をさせてわしは苦労をせぬかいナへ身にうそのれ鉢にへおれ夜着にもたれし思按顔へつらやはかなや勤の身なりや心ないことうたがわれ【と】アレ隣でうたふいたこの文句を聞なさいみんなわたいが心いきだヨ【喜】おきやアがれ。それもさもんだ。藤兵へが方から金を取て、おれが名當で仕舞札を下ゲさせ。其上であいつヲつきだして見せやふトハ。なんぼおれでも心持が面白くねエ。人の寶の十雨で。仕舞たつらも何のたのしミ。お為ごかしのしよにんもいやだ。モウく何にもいつてくれるな。其かき文句もおさまきだア ○ へかくのたまよすといわんすけれどわしにかゝれるぬしじやない【と】ハテそう、うたぐりなれるならば。おめへはの面けれに、藤兵へさんをすつぱりとつきだすから。跡でわたいをつきだすとも。どふともしなせエ。そふしたら腹の立こともござへすめへ。どふで汲おめへにつきだされちやア、迚もいきた浮世だから。生ている氣じやアござへせん ○ へおもおもきこりや、ふもないいわしゆへに。心つくせどあだになる【喜】べら坊なことをいへ。その狂言の跡いでる内、金も命も煙滅だハ。けふ有て明日ねへ命去年の彫物も今年の燒原。どふのかふのと一ッ寸先は闇の浮世だ

（トすこしツヽあたり文句はいへ共先刻のことこすりにてやふすはわかり段々と心の内で了簡してこれバなるほどゝいふ氣も付よもやといふ迷ひも出又かわゆいといふ情はかゝる深きなじみなればいふもさらなりされども中直りの切り口もなければたゞやんわり〳〵とあしらつている）

○〽三昧の糸さへ三筋に分るなぜにわからぬぬしの氣は【と】（はひとりしあんたゝメのべ紙にて小よりヲこしらへ小ゆびをゆわゑこかけ出さふとする）【喜】（すそをしらへて）コレどこへ行クのだ【と】チットあすこ迄【喜】あすこも爰も一寸でもやることたアならねヱ小指ヲいわへてすゞめの香箱むかしのこつたよしにしろ淺黄裏とは違たらふ（トさきをくゝられこ行つたらずそろ〳〵枕もとへすりいだし屛風のかげへくすね置たる料理場のうちばこまで見れたとけし髪とり上ケかきたでる所にふつつり切りて何氣なくふところへすれ）【と】アヽ大惡がかゆい（ト首へばらとふれバ切髮はつたりおちる）ナアどふぞ勘忍して是を取てくんねヱ【喜】（撒けでしろトたまつてゐる）【と】お心にやア叶ふめへが勘忍わたいが胸はらしをどふぞ納てくんなせへ【喜】いやだ【と】なぜナ【喜】なぜでも【と】そりやア近頃比興でござへす【喜】比興でもなんでもいやだからいやだわい（トこの方ヲ向き少しにつこり）【と】いらざアうつちやつて仕舞ふ。そんなに。むきなことばつかりいゝなはるからわかりやせん【喜】うつちやる位のものだからおしげなく切て見せたか【と】ニヽモおめへもしやッくどひモッ是ほどあやまつたらつ勘忍してゝんなせへし。何の因果がこんねヱにぶたれてもどふしてもっしんそこおめへが（ト喜之介顔をんこつくぐながめ）ヱヽいつそじれッてへ見ればみる程此かはがにくいぞヨウ（トしつく）（り□□□所ふし羆の二上りも仕舞と見へて）二上りへぶつもたゝくもしかるもおまへ情かけるもぬしばかり【喜】アヽこんなに愚痴に迷つたも此うつくしひしやつつらからチョッいめへましい（ト□□□□□□引きよせて□□□□□□顔へはいるしひしやつつらとへさすがにかわゆく）

ひ情にしてヤント有がたき所ならずやかくのごときあだなるかたちに魂天外にとばすもむりならず若き心にないせうの辛苦近くこわけんとしてへひくに引かれぬたこ引にておやぢの目玉ヲぬすミお袋のへそくりを引だしても初仕舞の札ヲさけさせて見たくまた藤兵へといふじやま書ふあれバどうぞしてつき出させんと工面にかゝるも尤ぞかし【と】ヲヤ〳〵いつそつめてへ足だ母モットこつちへよんなアレあつかまし□□の錦□□はか【ひこりや母なんだ国】ト喜之助が□□芥とひて吹えへたぐり出しわが女もときすてヽ四ツ手から□□□□□みに約と約定てとこもかしこもしつくりなるべし□□□此ときに至て【唯兩人】ヲヽさむい□りして□□□□□□□□□□□る床のうち【ぬれ六ツの鐘】ボテン【作者】もこいつは〳〵エヘン

宵立の部

【若者】夜具包を肩ニかけ片手に煙草ヲ二三挺持　コウお澤どん【女】返ツて　ヲヤなんた【若】お虎さんとおしつさんと口をかけてやんな一チ坐の衆がお出なすッた【女】フムこふと、今夜ハ二人りながら出て居なはるヨ廻しでもよくハ舟宿衆してへだ【若】お馴染だからいゝハな奥座で手の音　チヨン〳〵【若】アイヽ引【女】

【娘分】しよく楽ヲおもきふに引さけて　吉兵衛とん見通シハあひたか【若】イヽエふさがりでござへすお初會のお三人ハ中の八疊へいれ申なせへ【娘】ソレお手がなるよ【大ぜい】アイヽ引ハイヽ引　はるか見通しの隣座敷にハ　客【長五郎】としハ二十七八中ぜいの色男めんうるだのやわらか裏に太織さいとうしまの下着黒の半ゑりは上等なるに花色じゆすの帯ヲぱくすべかわき縫くつに花色さんはの下タ足袋ヲはきなめしかハの三日月形のたばこ入にくりからのかな物ヲ打チ鼠ヤ紺のきせるをひねくり大あぐらでいるノがらハ仕事師のかしらと見へて月代中ばへ當世はやりの丸びたい細いてふのさきヲ平ヶなでにした處ハどこの丁場でもぐつと口チのきけこうな風なり　かゝへげいしや【つる吉】めヽやすへ〳〵云たき心かす〳〵の胸にせまるを云ひ残すめいきくゆらすそのふしにわすれぬ君をたゝみ

ざん【大せい】ヤンヤァ【長】サア一ッのミな【つる】 口早に チトお抑へ【長】マア〳〵 ト盃たなげる
【つる】猪牙で來なさいヾにたりハおそい。ヲヤふさつても鯛といふ古い洒落か子。そりやふ
さりましたハ、、、、【たかす】 男げいしや但シめつかちのナソレ何レも御存ならんか 是ハどふだいよく〳〵お取上といふ處カ子ヽ
そこで一ッちぐりヲお肴ヽエ、お取上〳〵お取上名代【つ】ソリヤァなんだ【た】千鳥櫨名代
ス【つ】ヲヤ〳〵ホ、、、、 大ぜひ笑ふ【た】そんならお取上の駄賃かヽソレ。ナ。カノもどりがけの駄賃サントお新
らしからふ【皆】ハ、、、ハ、、、【長】こいつァつらい ト盃ヲとり上る【女】つぐ【長】 呑ほして躰ヲたゝきながら ア、セウの
めねへ〳〵【つ】さやふならのめんの蒙りまして一ッいたゝきませふ ト三ミせんたかゝへていたから盃をうける【た】ド
レ〳〵おしやく【つ】コリヤァおそれやす【た】ナニサぬしとおれが中だ物を子エだんな ト盃をさヲする
【長】誰ねへまん中だ【つ】しかし日ッかちじやァあやまりますねエ【た】ヲヤ此子ハ大それ
たことをいんなんちやからかとつぴんちやん【長】又おかぶの唐人か【た】ヲットたいわれ
ずかたらず。ナ【つ】〽わが心チ、チン〳〵チかね【長】コウたか公ハしやァ湯島の時分からミる
のにいつもかハらねエの。そこの身振ハ二丁町にも有めへ【た】イヤ是ハ恐レます 黄内大事にてげいしやのむだ口
さま〴〵あれども御定りなれバこゝに略す△とびつる吉ハつぎざほをはづして三弦箱へ入レ廊下へつき出し【二人】さやふなら御機嫌よふ【つる】モシおとまさんハ
廻しでござへますかエ【長】ム、又から〳〵だ【つ】ヘニそりやおさミしふござへませふ【た】

モシとかく女ハ氣がつきますネ　トすてぜりふにて障子をたて皆〳〵かへる　【長】みんな休ねへ▲此客一躰工面ハわるけれども此頃ハ子供や迄せへ噂あるゆへ女郎おとまがやせがまんにてひとめんくのけいしやヲかい或ハほうばい女郎をおたいこに買せ拆して内の目をくろめる是皆おとま壹人りでやりくりたり　○　かくて八ツ時のいりあひにつこぎよする舟。あどろ舟〔ヲイかへらねへ〳〵の聲。くゝり戸の音と共にかまびすく。神棚の十二燈はりこのしめ縄にかゞやきふせだまの子供帳場のわきに居ならびて。耳ツこすりあすれハ。ロチのかゝる鼾聲。はしごの下につしやがんで置バフ个せ。娘分のおつれもふしなれ。臂と裾とをと内中イ引するさまよふひとまわりの床割て五ツのひやうし木カチ〳〵【長五郎】酒ハねヱか【おとま】よしねへ【長】ナゼ。ひさしへもんた【と】毒だといふのにばかァいやナ好な酒をハやめろしヤないが茶碗酒をハやめさんせといふいたこがあらァ。夫たからおらァぐい呑ハしねへ。てめへこそ時々癇積で青るじやァねヱか【と】エヽさついしやれさ【長】まだ歯もはゑねヱ【と】よしねへいゝきぜんな【長】ナンダあんまりしかるな此頃ハ久しくさがらねへハ【と】しれたことサ誰さがりを承知するもんか。コレよくこんだう仲町へ行たの【長】フウウンニヤしらねへ【と】ナニしらねヱことか有ルもんか。隠なはれたよくしつているヨ　トこそぐりつゝる【長】ア、あやまつた〳〵ム、ありやァなんだァ。エ、なによ友達のつき合で、せふことなしに上嶋へ行たのだ。だがかな棒ひいた【と】誰でもサほんにむだァのけて此頃も子供屋のおばさんがしミ〴〵と思見したよ。夫だつて又人の異見をこハがる位なら　こんなにはだかに迄なつて。是迄おめへを呼とげることハならねへハなどゝふするもんかかふなつちやァわたいも意地つくだからたとへくらげへされるッてもはなれやァしねヱ。い

つぞやも何やかや。あんまり考たらべいつそ氣色が悪くなつたから用事を付て引込で居やした。そふするとモウ爰の内を始なんのかのとやかましく云ふしモウ〳〵何ンのことも思ハねへなぜこんなにはかねヱやら何角に付ても此頃ハ一日も早く行たくッてならねへまだも便になるのハお卷さん斗りだァなホンニモウあの子ハ兄弟分とハ云ながらいつそ情があるよ　トしんのはなし【長】ハ始終ふさいでだんまりなりしが【長】たばこ吸付ながら 愚痴なことヲいやな、てめへらしくもねへ。どふするもんだ　よふしんべ又ふこぢなことをぬかすがさいご。やてへほねをたゝませて。ばつた。こうろぎの寐處にして。女郎の有ッた古跡にハへん〳〵草にかやつり艸。角力取草女郎花の花の盛を見せてやるべヱ【と】アレサ大きな聲をしなさんな　トしかられて少シ小聲になり【長】何をいふも借だらけだから初らねへそりヤそふと。こんちう頼んだことをどふしてくれる、いつか中の櫛としのぎも色〻面工して見たが。てつこにおいねヱから漸〻利上でくゝり付た　ア、なんにしろ今年ハ初中ひつこんたから、さつぱり出入ハできねへ【と】其事もわたいが呑込で居るヨそれについてはなしがあつたつけ。おめへもしつてるソレ新川の客人の【長】だれ【と】ソレ藤印さ【長】ム、あいつがどふした【と】此ごろ内度〳〵くるからいろ〳〵とつうくつしてノマア耳をだしな　トさゝやく【と】ノ【長】ム、〳〵といふ聲ばかりしばらくして【と】トいふかたちだから漸〻兩トソレテ外ニ壹兩貳分をもらつたが。此頃ハ金八

どんが居ねへから。おめへのくるのを待ていたョ是でどふぞ借方をちつとヅヽもなすやふニしねへそふしねへきやァ此すへおめへの所へ行くッても猶つまらねへじやァねェか【長】ム、そいつァ面黒いそいつが有りャァよつ程いゝ。實にセウ此恩ハわすれねへ【と】恩も何もいらねへ。こりやァする筈のこつた物ヲ。しかしおめへ早呑込だから氣になるョ。夫を又むだ遣ひニしなはんな。命から二番目と云ふ金だによ【長】べらぼういふな。うへきらしい。コウトあいつが所へ是と。ム、、こふだから。此たらず前ハ。又こつちにッさんだんがあらァ。いゝ〳〵。少し奢へて是からト。あげさけヲして皮羽織を引ださにやァならねへ【と】おめへ有ルじやァねへか【長】アリヤアふだん着だ【と】そしてまだ鳥居丁から來る客人にもチットばかりあてゝおいたがコリヤアどふも初仕舞の客だからちつとしにくひ【長】でへぶいゝ鳥がかゝったナ何が喜之とやらか。畜生めェ金持にやァ何かなる【と】貧乏人にやァ何かなるた。ホンニおめへかゝさんの病氣ハ此頃ハどふだへ【長】まだよい〳〵だァわりい時にお袋の病氣だから。一チベへ塩梅しきがわりい【と】おまんまハ能あがんなはるかェ【長】ム、ちつとヅヽ喰るそふだ。【と】そふたじやァねへおめへもちつと氣をつけなせへ。内にハ誰を付ておきなはる【長】ム、やとひばゝァをしてもおんなじこつたから。丁場へ出た跡にヤァ瘡をかいている野郎共や、

建前からおッこちた居候や。何角にあてがつて置から、どふでろくなことはしねへのさ【と】夫レじやァさつぱり氣が付めへのふ【長】ナニ氣かつくもんか。こつばげんくわをしちやァ酒を喰ふことばッかり考てらァ【と】それについても早くおめへの所へ行てへヨこんな時が女房の役だのに何をいつても金にかわれた身の上たからしが〳〵の仕様もねへ。正直わたやァ實のかゝさんのはづらふよりは氣になつてならねヱ。あつちこつちを思つて見ても。おめへもチツトおとなしくなんなはらねへきやァすまねへヨ【長】ム、おれも禁酒でもしやふ【と】アレそふいへばそんな堅ひことを云なはる何も夫程にせずともいゝはな【長】てめへがそんなにあんじて呉るに。おらァよつ程不孝もんだ。けふ此頃はおれが氣でもつまらねへやふだァ、いつそ。早く死がましたらふ　トうつむひて大きにふさぐ　【と】こうしていろんなことを思ふせいか。常不斷おめへの所へ行た夢を見るヨ　ト見もふさきてしばらくときれ　【長】ァ、ふさいだ〳〵。ふさきの虫や赤蛙だおれもモウお袋がせふちたから。早く引込せて見てへ【と】きげんをなたしそふしたら、いろんな人が來て。けんくわばつかり有だらふの【長】何ンのきついことが有もんか。喧嘩をこれがつて。おいらがかゝァになれるもんか。眉間へ三寸とびぐちをぶつ込んだの。出刃庖丁で。どてつ腹をゑぐるのといふことは。馴ッこになつちやァ屁とも思はねへァ、モウねよふ【と】ホンニ頭ラになるのも附合の

うるせへもんだ𛀁つかねへこつたがおめへ口なしの口ハどふかたづけた【長】だまつている【と】顔をのぞいて見ヲヤおめへねなはるか。起なせへし トせなかをつめり上る よせェ〳〵ゆふべ親分が所で。子方のやつらが中直りをしたから。よつひて一夜へねねェ【と】いやだヨ情のねへまだ咄が有ルから。ねかしやァしれへ トゆすぶれどもしやア〳〵としているはなヲつまんだりわきの下ヲこそぐりたりいろ〳〵横にねかさぬじやまヲする【長】コレおがまァ〳〵ちつとねかしてくれ今夜ハななきァ【と】直す工面があるか。又こつちがおりだらう【長】しれたこつた【と】夫だから、なをねかさねへ【長】そんならどふとも勝手にしろ トうしろを向ひて寝る向合ちわたする隣も早四ツの鐘【船頭】ハイお迎ひでござります

朝直乃部
宵泊乃部

追而後編ニ奉入御覧候

趣向ハ出来あれども丁数余れるをいとひこゝに不レ着

【作者曰】予おとまか出所をかんがみるに定て本所邊りの片はつれに御目印青紙の と刷毛書の水油有りの障子ヲ立たる九尺店のろじ口本道外科と割て書たる醫者の表札さんげ〳〵の梵典と共に雨酒となり屑家芥の棟割に蛇の這出る流し元大やさん鉄棒

ヲ引キすり火の用心ト觸れバ隣リの飴賣向ふの神道者に雇れれはつち坊主の木魚花賣の火打筥と朝飯を爭ひ神儒佛もミ込の大長屋に住む親仁といえるハ屑ウイ〳〵にその日を送り夜ハよもすがらおてん白菊塩梅よしも內の工面ハあんばいわるく母親の賃仕叓もお花荒神松のりやのヲりの間々を見合せいとけなき時ハめけたらたん切大ころハしをロチにほふはり南京小紋ニ鳴海絞リのつぎ〳〵油揚のごときを引ッぱりうどんやの汁つきをもつて醬油を六文壹文の糠袋ふすま磨きの小むすめなりしも十五といへる春の頃親仁か中風の爲に終にハ金にかへられ抑成長てびらふとの半ゑり縮面の二布錦〳〵たるといへども心ハ生來をうしなハず先に著したる新川の伴頭鳥居町の息子株を廢してかゝる貧困の俠客に實情を盡す。是なるか。非なるか。嗚呼是非もねへ實や。色ハ思案の外とハいへど。迷ふといふも。悟るといふも。色道の識不識に可依歟。世界の通君子。ソレ

さつしておミなんし

石場妓談　辰巳婦言　大尾

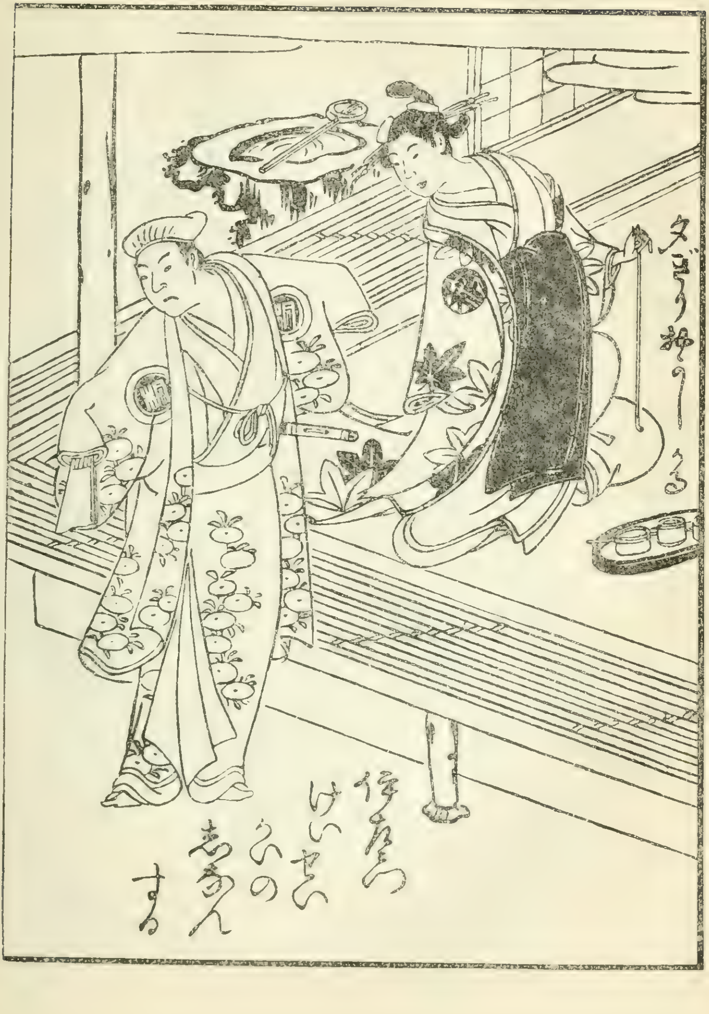
来芝一代記

傾城買指南

來芝ミミいかなるや來芝。鄭縣山の下流を汲す。人魚の肉を喰ハずといへども、古今未曾有の戯子にて。若年の昔より退座の今に至て俤を變ぜず。五十年來若男の和事を專らとして京師。東武。浪花を始、諸國に經歴し。的中の狂言ハ濱の眞砂にして。數ふるに指を覺えず。夫が中にわきて面白かりしをいさゝか思ひ出れハ、若かりし時薪うす雪にて。里虹相手の園部左エ門の大花やがて小娘の情の道をひらかせ。慶子が八重の櫻丸が腹切で。祖父祖母に珠數をつまぐらせ。中ごろの江戸のぼりには。横山太郎。物ぐさ太郎。助市などゝおかしき狂言打つゞきて珍らしからず。其身さへおろかに思ハれしが。夫より京都にて宿禰太郎のあほうにて取戻し。其後も其答との仕組にて。おし鳥の道行ハ見物までがはなれがたう思ハれ。又巴虹蘭耕をして鎌倉屋五郎八。八百や半兵衛の世話事ハ。下女婢の心をうごかし。最明寺の雪の段にハ。裝の折や木の端のやうなる。坊さままでがかんし入。蝶の道行ハ扇の手を盡したる作意にて。見物の夢をさまさせ。梶原源太の大盡姿には遊君の心を蕩し。兵助が盲の仕打にハ導引の

夜伽の種となし。信長の芥子畠。保名が小袖物狂ひハ人間業とも思ハれず。椀久の所作ハ鉦たゝきの鉢婆までが評判し淀屋辰五郎の客にハ。灘の塩焼かつげの小櫛を横にして飛んで來る。香具や彌七が植木屋場の妙にハ。書割の草花が物いはねども。場ハおのつから山をなす。膳の公成と成てハ非情の櫻に思ハれ。杜若の靈ハ業平の再來歟と疑ハる。由良助の義心にて屋敷方に桟敷をふさかせ。武勇万歳と右馬頭の音頭にハ。盆の數入を二日躍らせ。田葉粉賣の源七が廓咄に。公時の幼稚あそひハ。みどり子も乳房をはなれ泣聲をとゞむ。山崎與治兵衛が菜種の紋日に菅丞相の高位の俤も。宰府の神や乘うつり給ふらんとあやしまたる。此余一代の當り狂言ハいひもてゆくにかぎりなし。されども千たびに一たびハ失ある習ひにて。過し年あいごの若の鐘の段にて。たゞそかれ御前ハ甚不評判にて入も薄かりし。是やむかしより其役ならざる事に當りをとるは。下手の業と言傳ふる事に違ハずたま〳〵女形に廻りての大はたきハ。是銘人の證據なり。今や二のかハり狂言に。藤屋伊左ヱ門の口舌の段を増補して。傾城買指南のおかしミを兼し粹の仕打。其答。巴虹。薗枝の誰を相手にての景事。一世の妙手を盡しての所作。中〳〵言語にほめつくされず。おしいかな〳〵是を舞臺なごりとして。いとま乞の口上もきさらぎ三十日を限りにて。大入を見捨ての退座。是や哥舞一道の達人。肩を並ぶる者

もなけれバ。いま一手わん久の物狂ひも。見まくほしく思へ共ぜひもなし。嗚呼哥舞妓芝居も是までなり。せめて其余波に伊左ヱ門が大盡の奥儀。椀久が粋言の十徳をあげて。戯場仙人をさとし遊里に導んと欲す



六

櫻さく生玉寺町山小橋。桃の夭〳〵たる其葉しん〳〵たる時分でも。こゝに嫁といふ妻も持ざる息子達。なが〳〵し日をぶら〳〵と。うかれあるきて上塩町の野はづれにゆけバ。幽にむすぶ庵あり。鴨の長明が源平のさゝを恐れし方丈とも見えず。千の利休が流れをゆする茶室にもなくて。四疊半の東屋のまやのあまりハ連翹の花しだれかゝり。あけ簀戸〳〵柱にハ嶋桐の板をけづりし聯一枚かけたり。雜誹の点でも引歟と立よりて見れバ。傾城買指南處と挾山流にひらつかしたれば。扨こそ音に聞つるふじや伊左ヱ門がなれの果ならめ。いで一問答仕らんと戸口に案内すれバ是へと答ふ。打つれ入て見れバ。あるじの男紙子仕立に切繼の着流し。はミ出し鍔の小わきざし。うさんらしうもなく偏屈めかず。律義に見へずじやらつかず。上品にしてゆすりを遣はず。物やハらかにいやミなし。座席を見れば洞床に。月岡が丹青を彩る美婦のかけ繪。卓にハ來山が高根の花や見た斗とつらねし人形を置。床脇に拂子と有そふな處を。是もはくてふ緣をいとへるにや。あかばつた編笠と破れ扇をかけて。時代蒔繪たばこぼんに長きせる添て。青竹の灰吹の不相應なるもおかしく。勝手口の柱にハ諸君艶書指と書てぶらさげ。椽先にハ梅かえが三百兩を叩き出したと見へし。手水鉢に杓も添ひ。飛石のうへに長刀のやうなる艸履をぬぎ捨。庭にハ松梅紅葉位を爭ひたり。あるじ客にむかひていふやう。各〻がたも色道

に御執心と見えて。わざ〳〵訪ひ給ふ心ざし。いかでか疎意に存ぜんや。よつて遊里の極意を説てお聞せ申さん　抑傾城傾國とて。城をかたふけ國をかたふくるといへども。強ちおやまが叛逆を企てたり、大筒を放つ物にあらず。只其よそほひをほめたる物也、契る情とかき改めたは所謂こお付なるや。大盡小袖長羽織ほうろく頭巾紫は。とつと昔神崎の廓時代の事にて、今時は諸侯がたのおしのびにも。そんな姿は見あたらず。さあればとて鳶八丈の綿入で。ほかぬくなつて手長の綿帽子も。異やうに見たてむつかし。あはれ水豹に角もはへかし。燕の太子も國にかへりなんと思はる都て北や南のよね達は。陽氣專らとする土地なれば。流行におくれては附合がたし。常盤の松の位といへは色かへぬをミさほとなせば。やはり黑はぶたへに起請い。古きを以て新らしう口舌の種を趣向せねは。千年のみとり手に入かたし酒は醉はすをもつて酒の徳となす遊女と狐は人をだます事を專らとなせは。だまされて後にこそ眞實の戀ともなるべけれ、化さるゝ事がお嫌ひならば。狐原は通らぬにしかじいにしへの後鳥羽院は龜菊とかや言ふ遊女に長橋の庄をあたへんとて。承久の亂におよぶさほどにはなくとも。懸屋敷の四ケ所は打こんで見て。味はひもしり給ふべしとかく心學者とけい城買とは。かしこぶつてはとんといかぬ物也　おろかなる處が愛らるべし。さあればとて六貫九百の揚代も九十年の榮

花につもり上れバ。十二三萬貫も入る事なれハうか〳〵とはまるはかりが粋でもなし。きまる處はきまり。きれる處ハきれてこそよけれ。賤しき遊女とてあなどらず。太夫職じやとて氣をのまれず。とにかく客ハ氣性也高う留るで思ひ出した。夜鷹の跖女か大鋸屑も。言へばいハるゝ椀久が事跡に粋のかきぬき十ケ章。其しりへに遊び方の三のおしへ。是を閲して奥儀を極め玉へかしと。謹でミそあげ奉る

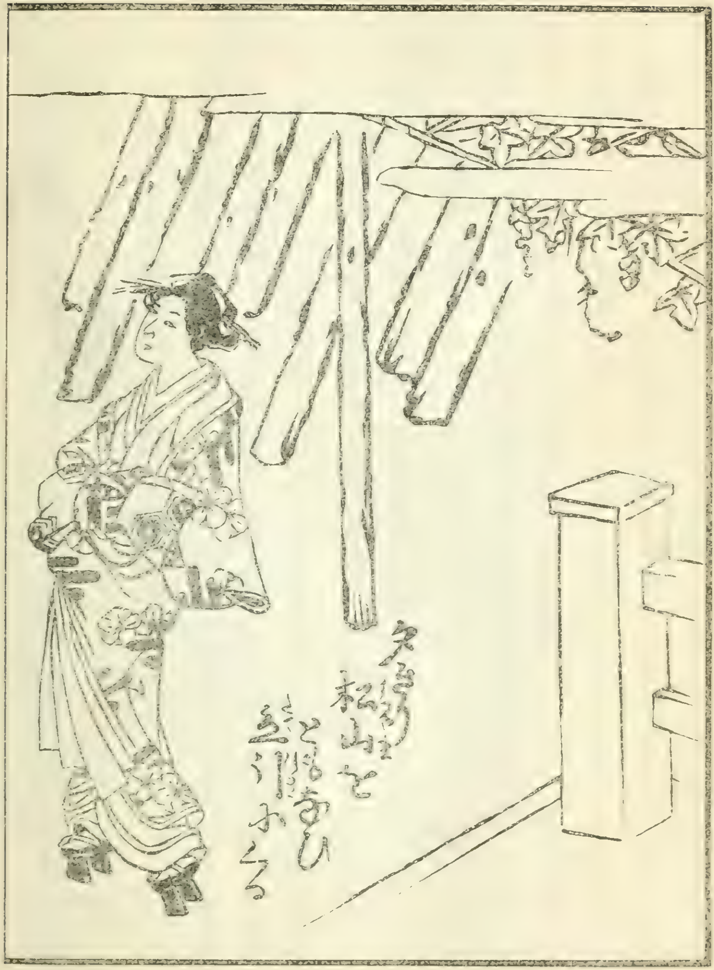
むかし〳〵碗屋の久喜といふて風流隅なしの洒落者あり。松山といふ太夫にふけり。家財を殘らす。金銀の杖に鑄なし。其松山にのほるほどに。終に絶頂まで登りつめたれバかえつて其山を見失ひ迷ふ。樂-天のいはく。万峯のかしら波の起がとし。一-心にむらがり。此峯が松山か。かしこの鬱-然が松山かと。終に金-銀の杖ちびれ盡き。一心忙然としてまよひの雲を生じ。親子兄弟のとハ。山-風に撥然と吹ちらし。澗水とう〳〵として流の末を知らす。嗚-呼愁ひかな。こゝに於て終に。末の松山波越すして。又すそ野の里へおりにき。ある時ハ人をうらミ。或ときハ物を感じ。大盡の一-德ハ消うせて。身に十-德を憐に着し。浮世にうかぶ波瓢の。しめくゝりなき体たらく。明ても暮ても。たゞ松-山の事のミを。したひうたひつ華街の堺。浪華の町をくるり〳〵と。物狂ハしくなりにき。或とき日暮て。東堀財-木の間を通り木-挽の鋸末を。一-握ミ三つかミ取しハ。來らん夏夜の蚊の防ぎ。人ハ其居に因て氣を移すと。又松山に逢ときの。羅浮の生絹の蚊-帳替り。賤しくもこそ成くだりたり。回首見れバ婦人有。松山かとおもひ。月影にすかしみれバ。夜鷹跖女なり。出かけじやお出とひつ握ミ。木立の間へ狐鼠と引ずり込ミ。碗久をさう〳〵言さんとおもふ。椀-久ハ犬にわんと。かぶり付れた心地して。マアおまちわしハ終しか此やうな。無体なめに逢た事がない。是膝頭が新篷て。いたひハひなふ。殊にわ

しにハ松山と言て。二世かけての君なれバ。たとひ今こゝでそもじの脚布にまかれ。しめ殺されても逢事ハなりませぬ。はよふはなして／＼と夜鷹を頼む。蹠ハ忽ち歎息して。危然として衣紋をたゞし揖して曰ク。誠に名高き碗久さんとハお前の事なるか。松山殿に逢初て二世かけてと血文誓紙ハはなハだ愚か。死生を一にし。粋な女郎立物有ても。さらに外目もせず。色里のいはひばとハおまへのこと。移り替らん心なれ共。移り替りしハ今のお姿。其さきハ一廉の富人なれ共。よしなき廓へ入こましやんし。危き湊へ舟をうけ。金銀の帆はしらまで。皆松山に取かぢにせられ。其身ハ榮耀して。外の太夫に負じとあらそひ。イヤ色じやの誠を立ると。皆僞りたぶらかし。お前を泥溝へ打込し仕業。乞丐同前の身に成。我名を語り。町中をうたひ躰をたゝき。あたいやな。何たうるさや。早ふしねがな。死かしと。金銀盡れバ情もつき。それにお前ハかたおもひ。微と止になさんせと。念比にいさめ。錢が十文でも有らバ。報謝にあげましたけれど。出がけなれバ是非なしと。他人ながらも眞僞の間をおもひはかり。歎聲ばかり泣き出し。前後を知らず。やう／＼財木の椶穴の。たまり水にて息つぎ。終にみもせぬ松山を憎ミそしり。椀久に情をかけ。色事の道を慣ふれり。椀久心根に徹し。たちまち胸霧ひらけ。本性となりぬ。誠にやミ／＼欺されし恨を悉く書集め。松山がうちへ投入んと蹠婦に暇

をこひ。茫々然として歸りける。夜鷹あとにておもふやう。よい客有て。踏ころばして。そられんとおもへ共。早門更に成ければ。遣手禿もいらざりけり。莚席を卷て肩にかけ。浮世の盛衰を觀じ歸れり

碗久が手盛の恨みしつかりと書。百人前の箸紙をひんねぢにごとく。山門へ布鼓して去りぬ。禿琴浦取あげてあらめづらしや。久さんのみと共儘揚屋へ持はしり。松山にすゝめければ。物狂ひのお名高きに。是本性にならんしたかと。嬉し涙にひらきみれば。むねにつまりしさまぐのうらみ。色も情も皆僞と跖と云し夜鷹の譏り。久さんを欺たか。二世かけての夫婦に。なんの違か有もので。殊に全盛の水上。廓中の本尊共いはれし此身。夜鷹の賤しきをして見下したる仕かたと。獨り言に憤れは。夕霧は襖のあなたに立聞してたまらず飛出。松山が妹女郎なれば。共にわなゝき怒を極め。とかく跖婦が一言で。此廓の名おれ。たとひ財木のむら立に取り籠る共。尋ね出し對面し。色説の是非を糺さんと云へば。又縁前に立聞せしは。かの幸助と失女有の加賀のお菊。親の勘當をうけ流浪の身なれば。去肝煎を賴んで。これも又お菊太夫とて。もつはら廓に名たゝりける。お菊も松山と大止信なれば。肩を以て又腰おし。皆々おとらぬ粋の功長諸譯手巧多の仕かけといひ。辨は布樓那が妹御か。子貢が姉か。宰我が姪か。何れおとらぬそれ者の寄合。口々に言合せ。黄昏時を待居たり。頃は壬戌三月の望。月關東屋の樓上を出。虎屋の亭を徘徊す。三人諸共禿を引ふねたづさへて。駕籠はつらせど乘もせず。粋な衣裳花やかに。新町橋へ端がゝり。八文字ゆたかにねり出せば。生無の瑇瑁光水面に

映ぜしは。玉を投にるかとあやまたる。河風にひるがゑりし。緋縮緬の斗帳の奥に。本尊有と有がたし。ゆきゝの人ハ空しく斷腸。ものをも言ず行程に。くるり〳〵と車町。浪華藥師も木佛ならず。俄に蠑螈の黑燒に敗鼓の皮を調合す。色の意氣地の一筋ミち。間近くも成ければ。常にとろめく油かけの。地藏も凝て石と成ル。松浦佐用姫何でもつて疑ハん。早東堀にぞ付たりける。みな〳〵口ゝ財木のほとりを。跖女〳〵と呼はれバ。寥々たる木立の間より。ぬつと出たる其姿ハびんらうしの素布子着て卷たる薦席を肩に引かけ。左の脇に風呂敷づゝミかいこんで。見れハみな艶媚たるお樂勤那〳〵とやかましい。したがわたしが名を知て呼バんしたが。何んの用ぞといひければ。松山卒爾として出て曰。椀久さんのうらミの投み。皆こなたの所爲なり たとひ何といやろふが。二世かけてと言かハしたれバ。二世ハおろか百世もかける。わしが心底に實さへ有れバ。其事ハかまいもしませぬ。賤しけれ共そなたも同しつとめの身。色道に誠有此身を。僞り者となぜいやつたと。三人口ゝ言立れバ。跖ハ少しもさハがす。羽根のしかゑり見くだして。此皆迄いはんすなへ。久さんの事ハもはや、たつ子いざる子迄その浮名を。立ぬといふ者とてハなし、皆こなんよりおこりし事。お前ハ虛。久さんハ實。色に虛實か有て。たれと眞實信といハれませうか。眞實の色道咄して聞かせませう。第一こなんらハ太夫



顔さんすけれ共。心の中ハ文盲だらけ。功學のため微と聞て置なんせ。先こなさん方の勤めといふハ。初花の雨にしほれたるやうにて。情も色も有やうなれ共。其内證ハ手巧多の糸からくり。賴ミにして置客衆の縁の糸がきれ。是ハ是と當にした無心がはづれ。千ミにもつれし心のくるしミハ。壯熱壯寒共やうに美しひ衣裳を着飾ていやんしても。明日ハ俄にはねがはえて。質屋の藏へ飛んで行我が着物に損料出してかり着の愁しさ。そゝこしい客のさかもりにハ。頓て上着へあびんかと。弄珠鈴取まハし。寐の悪しい客あれバ。蒲團のよごれに。夜のめも合ず。又酒過ての吐却にハ。倩盼所の顔の皺。獅嚙の火鉢に厚化粧。いかに好御きりやうでも。晝なら誰も愛想が盡ふ。五つ節季といふ。地獄の紫鑊へ落まいとて。元日から大晦日まで。死んづ生つ。伸つ屈んつ。うなぎの樺燒の如し。外目からハ。香も有て味そふに見ゆれ共。心の中の其苦しさ。いつの隙にか情を知り。色といふ道を辨へさんせうぞ。無理な客でも。節季〲に心あれバ。指切爪の其苦痛でもせねハならず。茶屋揚屋への付とゞけ。連衆末社への心づかひ。すれバ太夫なミ。せねハ蔭にてわらたかれ。我物とてハ更らになし。皆客衆の懐のうちを。當にする境界。是でなんと正直で。情を立てくらさるべき。全盛するほど物入多くなり。物入多けれバ欲日にまし。こふすれバ客衆がのぼる。こふいはゞのつ引させぬと。明ても暮て

も。ねてもさめても。いろ〳〵と仕かけを工夫し。ちと好た客でも。くれねバいやに成り。すかれ客でもくるゝにつけて欲心まし。色も情も取失ひ。金と戀するといふ。先當時ァ、お前方の身の上は。中〳〵わたしらが仲間には。左様なさもしい。欲氣は更らになし。おなし流の道なれ共お前がたを

夫木集に仲正さまの歌に

○川の瀬に波の浮草うかれありて其たはれ女を如何頼んと此うたは一首にても。もふ心はしれる。桃久さんは戀をするやうにもない。此道にはちと。うとひとみえました。又わたしらを夜鷹といふは。大江の房鄕さんの歌に

○富枯の野もせにうゑし夜の鷹あはれ女郎の名にや立らん　女郎とは南吏に出てござんす。わたしも御前も尊卑の高下はあれど。もと傾國傾城の名にして。其水上は延平さんの妹君。李夫さんじやわいな。そも〳〵夜鷹の遊びといふは色にして色にあらず。情を第一として。意氣地を立貫き。欲をはなれて。さもしからず。造化自然の諸道具をかりて。清淨正の上に能叶ふ。天地をもって揚屋とし。五雲をあげて。天井を張。春草を青疊とし。月光を燭となし。時によりお前の方へもかしてやる。どのやうな風が吹ても。更らにきえねバ。蠟燭の立かへなし。川

風に座敷をあふがせ。夕立を酒と成し。雷ハ泰頭煙霧をはりて蚊帳となし。稲妻を釣手とす。春秋共に。道具のそこねなし。お前がたハ。ちよこ〳〵道具かそこねるげな。ア、いたひかな。おふ笑止。衣裳ハ素布子たゞ一つ。是まさに。心かざりなきの表也。かく欲をはなるればバ。客衆を頼む物入なし。物入なければ。又たらぬと云ともなし。我まゝにふるといふ事なければ。又間夫狂ひと云事もなし。鐵漿付に何百兩。前帶に何程と。客衆に氣骨おらさねバ。指切口說の野夫もなし。客實にして此方。僞りなく。眞實信の心から。正直正道に遊び。此正直正道といふより。色も情も共に出で。男女の交をなす。誠に色道の根元にして。天地陰陽玄々妙々。此色を以て。色とする時は。たとひおもふ人。千里の遠を隔てゝ居ても。褥を共にする心。互に其心替らず。此心をもつてたのしむときハ。客衆に勘當の。又心中などの難儀ハなし。女郎に自前借金の苦勞なし。今世上に色といへバ。只君に逢夜の婬亂のミ。是等を野夫無粹鼻毛とハいふなり。誠にお前がたの神さんと仰がんす。粋といふハ今にてハ大なすび。椀久さんの十德に。藤伊さんのやぶれ紙子。紀文さんの尻切草履。三ッ取合ても。錢十文が物ハなし。あたら身上を。時の張合にてつかハんした。是も女郎に欲有ゆへ。譯ていへバ色ハ變じて欲と成り。情ハ化て虚と成る。その欲や虚を知りつゝ。來る客衆ハ。たゞ美しきに心を取ら

れ、是も又欲有からなり。はよふ歸で椀久さんの腹立をなだめて。末の松山動かぬやうにそれんせと。風呂敷より一卷を取出し。是ハ色道玄らの妙理を書盡せり。今お三人へさづけます程に。此理をふかく尋ね探らバ。其身次第〱に全盛に成り。無心いはねど金銀の山を築く。實なけれど。客樂より實が生じ。終に大盡の奥さんと成るのミならず。高位高官へも能交る。其證據ハ。いにしへの遊女ハ雲の上に召され。和歌詠し今様を謳ひ。我身をつくし。君の心をなぐさめ、其言の葉の勅撰に入し事考ふべし。女ハ氏なふして玉の輿にのると。しバしの苦勞ハ。かゞむやうなれ共。誠さへあれバ。能のびる。易に尺蠖の屈ハ。のびん事をもとむると。のびるの字に。信といふ文字を置たり。したがわたしらもせめて。玉の輿ハさて置て。釋迦如來に異ならぬ。剃啄ついたる。土蛛駕籠になり共。うち乘つて、住吉詣と出かけべたもち屋へはいり。二八のうどんが。十膳ばかり喰てみたいわいなと。笑を入れ、又理を以て責め。或ハ理をもつて諫ければ。三人深く感じて平伏し。ものおも云ずおしいたゞき。松山ハ重荷をおろせし喜び、云詰られて消んとする夕霧ハ。胸のくもりも即座にはれ。加賀のお菊ハ其顔に。飯團餅を打付られし心地なれ共。萬の理を咽にもつめず、ぐつと呑込ミ。三人諸共踞蹲を拝して駕籠に乘り。さつ〱と我家によりかき新町橋。月かう〱と踞蹲にてらされ。今宵一夜ハ呑明し

酒より外の事ハあらぬとおもへ共。此一巻を見ての後ハ。龍も土中を飛出。天上するのおもひこそ。誠にたのしけれ

言葉の章

眞實の言葉ハ外飾なし。外飾有言葉ハ。眞實にあらず。よく不言の信を行ふゆへ。諸客擧て其信に傾く。物日なふして客より出。無心云ずして。財集る。財集て能全盛也。全盛ハ女郎の大徳にして。郭中の本尊とハいふなり

夜暮の章

色ハ客の目をして。能めくらにする也。誓言ハ客の耳をして能つんぼにする也。こゝを以て口說絶ずして。指切記請を書し。おのれ一人の色とおもへ共。客ハ万人にして手巧多記請も又多かるべし。金銀の屛風にて引籠たりとおもふを。夜暮とハいふなり

女郎難儀の章

色道すたれて無心有。記請書て僞多し。指爪ぬいて畸人でき。借金多して心中あり。是故に僞りハ。女郎の常にして。其僞りを能忘るゝを。大粋とハいふなり

女郎美惡の章

女郎美の美たる事を知られ其美に誇て客を疎傳にするもの也。又醜の醜たるを知る時ハ。其醜に恥て。客を大切にするもの也。美にして客を能もてなし。醜ふして客をふる。故に美惡心に生し。衣服精粗にして。居所相へだゝり。直段高下あり。是以て發明なる女郎ハ。美にして其美に居らず。醜して其醜を忘る。只能不言の信を行ふて。能責れ共。其功に居らず。たらしのみかゝず。誓紙胸に有て。諸客集て來る。是をもつて仕替られず

大盡正の字を得る章

大盡ハ不盡也。缺たるか如し。其用誇らず。金銀多しといへ共。空しきが如し。其用極らず。揚屋の家内女のわられにいたる迄。おろしてものを言ず。其用屈めるか如し。太夫はじめ末社にいたるまで。錦繡を切込ミ。燕喜の普請泉水築山まで。風雅にしつらハせたるハ。是客の大功なれ共其功に居らず。其用拙きが如し。かゝる和らき角なしの大盡を。廓中の正とはいふなり

遊冶郎の章

油壺から引づり出したやうな。黑ハ須鬢に淺間丸を香の替とし。順慶町の夜店で求めし。緋縮緬さがり甚長し。餓鬼に水を見せたるごとく。癖として女郎にもたれかゝり。まだのぶとい。足をさすれなんどゝ。足でほでゝんごう。したがる客あり。纔遣ふを鼻にかけ。內人殘らず惡体を言ちらし。盛言次第にして。物日節季前にハ遊びに行ず。女郎にいたハりなく。己獨たのしミ。血文記請指爪口說して。迷惑がらし。終にハ女郎に愛相をつかされ。二度逢事叶ハず。劉伯倫が所謂德利客とハ是也

間夫の章

逢ざれ共。色の心を知り。ふミのやりくりせね共。誠ハむねに有。其逢事しげゝれバ。しげきに順ふて。誠ハ衰ふ。是以て。色道ハ。逢ざれ共誠あり。成さずして能なる。何んぞ閨中のミを。事とせんや

女郎身の上の章

揚日詰り。揚前賣て。親かたに利多し。客を能もてなし。誠を立れば。能繁昌して。簪ぬいて疊理算する隙ハなし。無心を言ず。物日をくゝり付ず。利を棄て。客にしぶハなし。故に物取らんとすれバ放さず。金銀ハ賤しい物と。手にもふれずして。よく集る。こゝをもつて。全盛の太夫とハいふなり

意氣張の章

諸客を防ぎ。女郎を揚詰にするハ。金銀多きゆへ也。粹ハ金銀多しといへ共。更に意氣張なし。故に粹ハ恕なり我か遊も人の遊も一に混じて而後意氣張止む

毎夜變の章

浮氣なる客ハ。誠の心なし。一夜流れの心をもつて。心とす。今宵こゝに遊べバ。あくる夜ハ。かしこにとまり。女郎も毎夜轉變して。色と定たるハなし。是故にこれを。毎夜變と

吉田屋へ

ハ言なり。はきハ必ずよき男に多し。よびかねず。又ふられず。誠あらず。たのしからず、よく女郎を西瓜の如く。切賣にかふて。其赤きを賞翫す

遊樂三教

上古天に五色の氣靉靆。蒼天の氣降て青樓と成。丹天の氣おりて紅臺出づ。伏羲天文を見て。はじめて八といふ女郎の信を知り。是後世蠱算の權輿なり。富樓那辨を好んで。早川といふ太夫をくどきおとす。是後世口說のはじめにして。いや、否でも、ふるな〳〵の教也。莊子ハ小蝶といふ太夫を。五十年揚づめにし。涸轍の惱みあれ共。誠に能ハたのしめり。韓退之も吾が車に膏さし。慇といふ太夫に通ふ。彼聖遊廓を見ざるや。聖も佛もたのしまんと。共に落こむ一くるハ。夕部に遊んで朝に死とも可なり。綠髮朝に雪と成り紅顏變じて澁紙に異ならず。おもふに王喬が乘し鶴を吸物にし。琴高が鯉を指身にして不老酒を呑とも。人世古來七十さへ希なり。李白が所謂。百年三萬六千日。呑通しにして。樂しんでも。高の知たこと。それに世ハ千年の貯と。八百萬年も生るやうにおもひ。慾の釣針に利名を引かけ。おもふ事有ても情志を遂ず。一生壺かづいた心地して。萬物のもとにかゝミ。一文錢を批遣ひ、爪に火を

ともし。万古草も木もものいふと。万貫目のばしても棺桶へいるゝ錢は纔か六文。一八のうどんも。かきこまれず。小舟に打乘て。大海をわたるやうな浮世。今や暴風吹起て。其身が破損したらば。金有ながら土芥の如し。いつの時にか大門に至り寂光浄土の至樂を遂んや。人は一代名は末代とれ。變に應し機にのぞミ。高位高官大に大任を荷ふ人の事なり。家持ながら居風呂に湯多く。借家住居の押入の内に。茄畑を築く者の言事にあらず。おもふに遊れ一代也ば末代成べし。天目に一盃の酒に。明日の茶粥の粒を忘れ。青樓に入ての遊樂に。來る節季を思ひ出れ。誠に是眼前の極樂にして。即身成佛かや。去ながら彼屈原も。わづかの茶屋拂につまり。それを氣にかけて。顔色憔悴して。形容枯槁せり。じたい其時漁父が。拂の金をかしてやろと言たれば。ついしか見た事もないへび翁に。金をかる理がないとて。蠟石を抱て。阿彌陀池へはまられたり。嗚呼氣のせまい生質なるかな

これ遊びに。腎虚。産虚。手煎。の三教あり。女郎をいたはらず。情をかけず。己一人たのしみを。閨中のミを専らにする客を。腎虚といふて、遊びの下品也。又遊びつゞけにし。内人まかせにし。ぬけるも知らず。己が家業を廢末にする客を。産虚といふて。金の生る木が有かも知らず。久喰物好して。臺所へ飛出料理人婢女まで。無理言ちらかして。せたげつか

ふ。是手煎に異ならず。誠に大粋の君子上客のする處にあらず

寛政九年丁巳三月吉日

浪花書林

嶋之内玉屋町　播磨屋善助

北堀江市之側　綿屋喜兵衛

序

朱子の節要ハ陳奮漢。子曰を旨とし。合類節用は唐偏僕ゑの爲に作す。爰に余が門人馬笑子が文庫に。廓節要の秘本あり。其趣を閲するに。能かき克手管して。穴を探の早引也。彼と是とを合符に。大門ならぬ十三門に部を頒ば。晝三紋日に美を餝る。其品目を算るに。ふるとてらすハ乾坤門。彼細見に八の有と無のが官位門。夂の封のかよふ神。願ふ心の神祇門。すいた不好の人倫に。娟婆が嫌ふ表徳の。名字を腕に彫痣。支體は指切髪切も表ハ實。虚ハ裏約に初馴。○●の目印は是客帳の數量門。

義理一遍の淺漬れ。簞笥中の器財門。春の夜櫻福壽草。槤子の裡に樂しむれ草木の部類にして。了髻が怕る蚰〳〵れ氣形門の內やあらん。錦繡羅綺を七ッ屋へ曲る共。キの字屋の下りを拂ふは。所謂衣食門の苦も更〳〵怕くおだんせん。どふするもんでおざりイすと。廓訛言の言語門。合て十三晝三買。地色の字引客色の諸譯部分も眞草の。二道掛る終季前。たとへお茶を曳新造なりとも。此書の實意を悟る旹れ。いつも夜廓を早引節用。ひらがなつきの著述の妙言。片カナの片偶に塊で才の有無を量に。余が庇を借して彼に長堂を採られん事を。獨ヲソレイスヨとしか云。

ゑらり稿れあゞめじ

式亭三馬述

序

見渡せば、客と娼妓をこき交て。廓ぞ春の錦の初夜具。ぱつとはづんだ嚢中の。山吹はさくらの戯遊び。古き手管を。亦新らしく見返柳。絲に引れて通ひ來る。五十間道闇の夜も。此里計り客の月。唯大門の口に任せて、寸間妄誕を夕景色。是を歌婦が線香に採て、以ていちぶの小冊となし。號て廓節要とへ。引込禿の出過た趣向、拜んす。お免し

なんしェと云爾。

維時寛政十をとれば初會の春

遊于弎亭草堂

樂亭馬笑述

手管早引 廓節要

式亭三馬補正

虞公が唄にハ梁塵動き誇巴が調る琴曲にハ魚鱗も踊上るとかやされバ又傾城も閨中雲雨の情を含ミ口舌餘りのきぬ〴〵に歸しひせんとだきメられてハ猛き河黄裏の心もたちまちぐにやと和らぎ力をもいれずして雨雪の日みの文句にハ来至通も心をとらかさる醉も甘ひもかミわけた丼味ひの五ッの街こゝに久しく住馴て雅名を高く揚屋町酒落を元手の世わたりに憂を白岡幸治とて人に幇間とよべるれど鈍にハあらぬかしこの茶や其所の二かいと持はやされ風雅の内のふうがにして照鱓の堅きをきらひ山屋どうふのやハらかミに人を茶番の一趣向ハふさひだ女郎の辛氣をやすめ一歩はづれた三會め娼婆が顔の悋吝客もついまきちらす花のくるわげに全盛のかくれ里浮世の苦界さつはりと軒の風鈴チリミンハ見こしの松の葉ごしの風いとしのびやかにほそざほの音メ合するくろ板塀所ゝ墨のはげた宿札三尺はかゝの竹のひら戸わらびなわでしべり合せ内からかにくれゑんまへし四疊半の坐しきゝかゝりみがらしかきたしこ下はりたした靑どさのかべにすりもの、こしばり床の間にハ酒樂樓の額をかけ詩暦が畫たおいらんの床掛もつとも御やしきから御はいりやうと見へたりせんとく手あぶりのわきにハ三味せん二三てらとりちらしてあるが中にもさほ・たがやさんの三ツつぎこくたんにふづまきのいとさき惣むくの三日月くへりんどうできく岡が張ツた

三ツ乳今はじめてひいところあんばいよく小袖の右の袖をまくり一少し左りの方へくだきまげてうしろあはせてゐる所へ友達のげいしや【八五郎】【こんぱる栄吉】今あけや丁の湯から出がけと見へて【八】手ぬぐひをしぼりながらどうだ。ヤ妙〻三味せんをはりかへのまんだうか。なんでもうめへはなしだ トニ人ながらどんとすへる【栄】ドレミせねへ。どこだへ【幸】かんだまでやつた【栄】菊闘か。こいつァよく出來た妙〻。めう張りのかゞ見だ。しかし此頃ハ三谷もよくするよナントげい者もこいつがねへとよつぽどはなせるけれど諸事こゝに至ちやァこんはるが羨しひ トヘこんぱるがたいこもちなるゆへなるべし【栄】ナニサ夫だけ氣ぼねが折らァな夫に付ても藝者のくるしミハ客の至らぬに有といつたが古人力太が一生の名言だらふコウ此ごろさる二階でおつな符帳を聞たヨ櫻丸〳〵といふから何だと思つたら身揚りだやつサ【栄】ム、自腹を切るといふ所から出たのだの【八】そりやァ二丁目だらふおれも聞やしたお茶をひいた事を八重といふじやァねへか【幸】一人り取のこされかおきやァがれ【二人】ハ、、、ゝ、【八】ヤこんどのにハかハ唐人だといふ評判が有やす。女げい者のこらず大かたかのチヤカポコヤレヲウキガイキイスヨウカヨカパアノ〳〵ぐらるな事だらふ【栄】ぜんたへ衣裳がいられへとつて仕出した事さ衣裳でおもしれへ事がござへす【幸】何だ子【栄】こんちう（此間）さる内へかまつてチヨビト一枚たて引ひてくれとか何ンとか定九郎をやらかした所がよんどころなく向ふもかしやしたヨシカヱ所を例の跡白浪としてにやァがばゞでいなやの御沈しめしもなく打過

て又行やしたスルトそいつがいふにやァせんど立引ィした物ハどうしてくんなんすエばからしひさつしてくんなんしわつちらがからだハてへげへぬしなんぞにやァわかりィせふとか何とかでソレ手前ぶしんのこそくりじやァねへがやミとぶつ付ケていひやしたッコデわつちがいふにやァハテ手めへもやぼをいやなかりる程のしぎだ物をどうして歸されるもんだと古人秀雀が仕うちサ【八】ム、有がてへ【榮】トいふと聞なせへきざハりだねへ能ふサァぬしの方からそう五十けんの建まへを見るやふにおつゥまがんなんすりやァわつちだつて中カ田ン圃のへこみハ喰ィすめへサァどう共かたを付てくんなんしとむなぐらを取などと此の始終しかたなり　わつちもどうもいひぐさがなへからぐつとてうしを六七本にして何のこつたへいけッてへさうなミす紙につゝんだげぢ〳〵じやァあんめへしひねるこたァねへよしてくりやなっ　かつかうのわりひ切ッかけに若ひものが來やしたモシ何でござりますどうした事でといふからナニサ久しひもんだハなト幸ひにして歸りの幕ナントこいつァいゝきびしやァねへか【八】ム、よつほど不人情だしかしがうぎとおしやべりを出したの【幸】ソウサそいつも客をふるなの辯舌だらふ【三人】ハ、、、、さすが此女郎げいしやと見た客人に立引なしてたゞされたといふはなしもてきずほうばい中にもかくしておかねべぐわいぶんがあしくうぬひとりがうはらがつてゐる也【幸】トキニつかねへこつたがわつちもこいごろ大きにしんくが有ヨ外のこつてもねへがおめへがたもなしミの東好さまと瀧本屋ンの事

さ【榮】ハアホンニ瀧本さんハモウ年ン明キじやァねへか【八】ソシテアリヤァきいたふうの鳥積が所へ行ッしやるはづたと聞ィたが【幸】そこに噺し合ありさ【二人】ハテ子【幸】マアつまんだ噺しがカノ鳥積が所ハ義理づめで行はづの所が東好さんの方へぜひ行てへ心又東好さんもよびてへ心そこで鳥積ハせくあいにく東好さんが此節勘當と來てゐるからナントにつちもさつちも行かねへじやァねへかそこをなじミだけにどうぞ狂言をかひてくれろといひなさるがモウ\/た手こすりだ夫にわけて東好さんのおやこたちハ以前おれが江戸にゐた時いたつておせハになりやしたから誠にあたまをわつてゐるのさ【八】ハテノウこまつた理くつだハへしかし三人よりやァ文珠のちゑだこいつァ一トせかいあるだらう【榮】あんじなさんな八こうもおれもとも\/どうかかうかゆかねへこたァ有めへ【幸】よろしくおたのミだホンニたしかゆふべ來さしつた噺しだッケ（トはなしのさい中淺艸寺の鐘ミフン竹門からくる）あげどうふ\/【二人】ヲヽモウ晝だ又晩にあふたらふ【幸】ムヽ一寸會所まで行ふ（トこゝに別れて歸ル）○（はや中の丁雨かへはついのすだれにはなござとうせん客まちかほにたはこぼん夜といふかゐ者のつれ\/そのなぐさめのもちあミや今戸から賣にきたる[illegible]あげやのかしから大にからかひ\/くる禿[illegible]歩つい[illegible]にきにこよくさせしながらさざてぐつと戸を明ケ）【禿】幸治さんとうなんした【幸】ホイなんだ何をもつて來た【禿】アノァおいらんでおつせへす是ハわたしが煮たのでヲスからおあげ申ィすそこしてばんはときつとおまのり申ィすッサ【幸】（風呂しきをといて見て）なんだこふまきのあさひなかコリヤァ有か

てへコゥなんぞ有だらう明ヶて行てくりや【禿】どこにござりィす トそこらを見廻す一人ものゝとりべりなきハいづくも同じ【禿】是でもよふすかへ【幸】何ンた摺鉢しやァねへか鳥の餌じやァあんめへし【禿】夫でもしれィせんものを トいひながらふた茶わんを出していくじなくあける【幸】ヨシ〳〵トキニまだどんと賴が有ツレはしごの脇を見たりナツレとび八丈がおれしますだらうそいつを持つて行てくりや【禿】アィそつと出しィせふね【幸】ム、サ【禿】ふろしきへくるりと卷て モシきつと晩に來なんしへト立歸る引續てくる【若者】ハィ幸次さんきのじ伊勢やでござります 是ハ茶やから口のかゝつたの也すべてふろきげいしやたこよびにくるのハおかめから見てさつぱりわからぬものなり【會所の男】おはやく御出なさりまし【幸】ヲィ〳〵 坐しきのはれきハお定酒しミてぎら〳〵光ろうへだの袷にけんぼう小もんのひとへはおりもふ色あげをしてよさそうなあいおなんどの帶をわざとむすびさげさうり箱からはきものを出す所へまた會所の男きたりて 幸次さんすぐに小字屋へ御出なさりまし

○

世界へまじり見世けふゐつゞけの客有りて料理番のまな板トン〳〵車井戸の音さへかしくしんざう禿もろともにおいらんの手水をはこべへ二かいの坐しき〳〵にへつらひかなしひきぬ〳〵のつかれねいりの床あれバのう〳〵として高いびきの部やも有りわかひものがらうかをふきしまひ月をこすり〳〵惣さいの朝めしもすミやうじいぢりでうへさのなかバ湯をしまひますの聲二かいにひゞき渡る頃 △爰に東好といふ色客あり年ハ廿五六にしてさつぱりとしたいやミなし世事をうがちて如才なき身にもくるわの金にハつまり此ほどハてゝ親のいかりつよくついに勘當とおちぶれたれどもあひかた瀧本が情にてまだ内しやうハふさがらねどそ

こやかしこの茶や〳〵のさがりにくるしむ當時のひつてんけふハ瀧本が身あがりにてぎりづめの居つゞけなり【東好】（しんざうのふりそでをきてあさぎちりめんのしごきをぐれんじから首を出して）ア、天道様も出過るくらゐだとんだ氣ちげへじミたさただぜノゥ墨染さん（ほうはい女郎ざしきもち）【墨染】そんな事をいひなんすな瀧本さんだつて人しらぬしんくをして身あがりまでしなんす仕宜でおす。ちつとぬしもおさつしなんしナゼ男といふもなァそんなにつれねへもんでおすねへはたでせへホンニしミ〳〵じれつたふす【東】ハテおめへがたの岡思ひでせへそういふもんだものをおれが心ハなをさら一ばい仕やうもやうもモゥつきはてて今じやァ後悔さきに立たずさ眞にミれんがます斗りだ【墨】サァそれだからぬしも男のちゑを出しなんしてこゝで壹つさんだんをしてミなんし又わつちらがくだく心もやすまるといふもんでおすトハいふもんのぬしたつて御如在ハありィすめへが（トいつて小ごへに成）咄し合ィによりやァ瀧本さんの心ハたとへ迯（トいふ口を東好へあへてこゝおさへる）△（此うちにしんぞうだんまりに禿來りて墨染が耳へ何かさゝやく）【墨】ツ（覗ふたりのかたミてしほにのせ）サア是をもつていきや【東】たんとやんねへな【墨】ナニサ塩落でおすよ（あさのうちハしほものだちをする事いづれの女郎やにもあるものなれど別女郎ほどかミほとけをたゝきまはすものおそらくなし）【東】コレそのこやおいらんにおはなしにおいてなせへといつてくりや【禿】アイミ（ト行人かへつて又ひとりの）【禿】東好さんェヲイタ、、、【墨】此子ハ何ンだよ【禿】ヲ、いたコレお見なんしらうかに釘が出て居ィさァな【墨】此子ハモゥそゝつかしひぞョ【東】あ

ぶねへ血が出やァしねェか【禿】イ、ヱモシ東好さんどうぞおがミのごせうざんすから此讀を訓へておくんなんし ト青ひやうしの手本を出す 【東】ム、ドレひろげたり トきせるのさきで ヨミ〽人としていとなミにいつわりはいふとも【禿】ヨミ上略〽いふとも【東】ヨミ〽本來の誠をうしなふまじく一誠なきときは文字の筆法にもはづるゝ心得べしャァかふいふもんだ手めへ手習よりやァ今に客をかくだらうのふ墨染さん【二人】ホ、、、ヲ、【墨】しげのか瀧本さんはモゥ湯からあがんなんしたか【禿】アィ今御出なんす トいゝかふろハ用をたし二階るほどなくあいかたの坐敷持 【瀧本】湯上りにてゆかたのまゝ出きたりそでのさきをゆびへまきて耳のかきをふきながらざしきへ来る いつそいゝ湯でおした【墨】けふはだが番でおすへ【瀧】新兵へどんでおす【墨】アノ人は氣がいゝからいつそよふおす【東】ドレ目の大きひ若ひものか【瀧】ヲャいかなこつても【二人】ヲホ、、、、、【瀧】ヲャ人はいつそ正直もんでおすョ源八どんはモゥうんざりしィすいけすふ〱しひッちやァおつせんホン二墨染さんけふは出番衆じやァおつせんか湯に行なんしてわつちが部やで身ごしらへヲしなんしな【墨】アィさういたしィせう東好さん行てまいりせふ ト出て行あとへしへらくたんまり 【瀧】せんどいひなんしたッノ大屋さんとやらのわびことでもかんだうはゆりィせんかへ【東】ナァニいけるもんか今度の毛氈にやおどごまでかゝつたがどうも勘當はゆりねへしよせん叶はぬ六段めだァ、つまらぬ〱つまらぬ神にたゝりなしじやァねへそこら中がたゝり

だとふきなでうつぶく【瀧】そんなわたしがしたこつておすトなきだぐむいかにこつちが惡ひとつておとつさんも又あんまりむごひ情なしでをす。なんの是しきの事をそんなにおこりなんす事ハおつせん。わたしが身が自由になるなら親御さんに御めにかゝつてすつぱりといつて見たふおす【東】へテこりやアそんなにつちりやうけんおれも今さらしそつたれてかういふすがたに入リ組んじやアぐちなを／＼つのるばかりトしへらくなきだかどうするもんだとゞのつまりハ死なふと思やァきざハりなし【瀧】ソゥ氣を御いためなんすのもそんなわたしからおこつた事となたしも胸がいつぱいになんイすモウ／＼なんにもいひすめへぬしもすつぱりあきらめなんして戀をかけおちでもしておくれなんしトあくまでまよひし女の心かくのごとき段にいたりてハけいせいの鉄心なかなかもつてしろうとのおよぶところにあらず【東】實におれもがうてきまよつたがかういふ時にやアなでふりやうけんをおこすもんだから マァ氣をしづめてわけを付るがいゝそし内所のわくつハどふだ【瀧】聞なんし此おうも旦那さんかわつちをお針べやへよびなんし百度も達磨しのあけんが有イしたそれもぬしのしつてるなんす通りの氣性だから眞にうれしご苦はつかりホンニ／＼あんなわかつた旦那さんといふハ五丁の中にもありイすめへ又罷樂さんに聞た事もありイす此ころ内所てのうハさにハ瀧木もモゥ來る月ハめでたく年ンもあくがつね／＼のうハさ彼是鳥礒さんの方へ行くつもりださふだがァ、わりい了簡だァノ鳥礒さんハ山の

手通のかざり人だからしゞうの爲にわるからふがハテそれもてん〳〵のすいた人ならしかたがねへあれも如在なくよくつとめてくれた事だからどうぞしていゝ所へかた付ケてへと思ふからいふやうなもんの夫レに付ても東好さんが勘當と聞たがこまつたもんだとかくいゝ方へはかねへちんだといひなんしたッさ夫から墨染さんがナァニ瀧本さんも實はうせきさんの方へはいやで〳〵ならねへけれとよんどころねへいきさつで口を合せた所がいまじやァ鳥積さんが猶のほせなんしてどうもかふも義理づめでこまつてゐるさふだとおつに匂はせなんしたのさ此事は幸次さんもよくしつて居なんす【東】フムそういふ内所ならば又大きにさんたんもしいゝといふもんだ何にしろ幸次にあひてへもんたモゥ小字やの坐しきは明ィたらふもふ一ッへんよびニやらふ トいふ折ぬよく白岡幸次小字やのざしきたしまひて東好があつゝけのあんぴた聞んとこゝの内のこかいへすた〳〵来りしがろねふりたしてゐるしんぞうが耳に口大きなこへで【幸次】耳ッとう引【新】ひつくりしてめをさまし ヲヤ幸次さんおぼへてゐなんし夕ァもよくくられして迯なんしたサァあやまつたか〳〵 トこそぐる【幸】ヲット御めんのかんけ〳〵コゥおどけはしんとき東好さんはけふもながしてござるしやァねへか【新】はやく御出なんし待てゐなんす【幸】ホイ ト立て瀧本がざしきへ行 御とうりうでござります トすへる【瀧】モゥ〳〵さつきからまちかねて【東】でへぶ御全盛だの【幸】イェもふあつちへ行ッても幸次。こつちへ行ても幸次。幸次〳〵あわゝ【三人】ハ、、、ヲホ、、、【幸】

トキニ一ッぱいきめませふ諸事是式ト此間盃事お定なれハわやくす【幸】小聲になりこおゐらん此くるわのおなごり狂言の本よミか子【瀧】そのことでいつそ氣がもめへす【幸】マア何ンぶんわたくしがむねにもござヘすからナンデモ鳥積さんをバ今迄の通りおもて名題にしておくがよふござへますハテそうしねへと内所がすミませんかならず鳥積さんにこつちの幕の内を見られねへやうになさりましいハずと御せうちだらふがかのいやと思つた男にハものをいふもきざなものそこハ一番こつちのしかけそのあと幕ハ私が作者幇間が流ゝ仕上をころふじましハ、、、【東】夫ハ何ン分ンぬしでなくッちやァいかねへ手めへも又その位な事ハはたらけさふなもんだ【瀧】モウ〳〵なんだか此ころうちハ鳥積づらが顔を見るとむしづがはしるやうでおす【幸】ソレハ御もつともトしばらく詞もないしやうの【八ツの時計】ギリ、チヤアン【責ミせの鈴】ぐハら〳〵〳〵【幸】ヲヤもう御事ふれだトいふ折しもらうかよりせうしへばたあり【幸】なんだ誰たァ誰やさいたるとぼそにおとづるゝハ扨ハかけとりか幸次ならるすだく【禿】べそをかき〳〵しげりどんかどふもなりいせんもの【幸】誰〳〵筆治がわりィ事をそいつァ筆次じやァねへふ出來〳〵【東】筆治に燗をあつくさせにやんねへ【瀧】いゝから爰へきやョ【禿】かぜがきたひねくりながらはいり【瀧】コンナ是をモットあつくして來やョコレはき〳〵しやョ此子のやうにぶ人相な子ハねへョはやくしやョト禿をしかるも心のむしやくしやそれとさとりて行く禿跡に三人盃事しんきしんくのこんたんハ作者しばらく小べんに行ていかゝなりしやしらず

有于此一段　煩惱の閨にハあらてまよひくろ子ゆへのやミの大門口しなハかハれど心の内ゆめからつゝにくゞり來てはじめて見たる女郎屋のけつから門口のぎう臺にうろ〳〵するハかんだうの東好か母法躰して【妙光】モシちとおゆるしなさりませヱ、おまに白岡幸次といふ人か見へたげなちよつとこゝへ呼バしやつて下さりませ【若者】ハイ〳〵かしこまりましたこちらへ御あがりなされませト二かいへ行へ妙光へついに見ぬ女郎やの大さハぎさすがまじりミせとハいへ共だいところから中にハのあたりまで見通しのひろきにあきれてきよろ〳〵してゐる所へ若ひものがしらせにて何事やらんと【幸次】ハ立出見てひつくりかへ【幸】ヤ是ハ〳〵御ふくろさまよふ入らッしやりましたマヅ〳〵こちらへ【妙】マア〳〵達者て【幸】あなたさまにもサア〳〵まづ〳〵こちらへト杖をとるやらぞうりをもつやら二階へあければやりても立出まづ明キへやの坐になたり【妙】それでもこなたいつもわかひぞや【幸】へ、、、、イヤモウ私も旦那さまなどの御近所にも御ぞんじの通りしバらく住居て見ましたが又候こつちらへ引こしまして今又かやうにききさんじな事ばかりいたしておりますがイヤモウ渡世ハいづれ樂と申ハござりませぬハ、、、、あなたさまハいつも〳〵【妙】たつしやなばかりヨ是此やうに形りもかハつてのトあたまをなで〳〵過しむかしのとハずがたり【幸】サテハヤ申出しますもトいひかね若だんなの此せつの御身ぶん何ともはやこまり入ります不及ながら私も度〻御ゐけんも申ましたがお聞入のなひも御もつともしかし只今の御内の御あんばいハいかゞてござりますか【妙】アイいやモウわしもアノどらとのにハこまります今わひ事のさい中じやがだんなどのゝむかしかたぎモなか〳〵一應や二應でハすミさふもなひあんばいそれにとうぶんの内心安ひ人をたのんで

あつけて置たそいの先から又こつちらへぬけて来たとの噺しとしよつた此わしがあんじる心ざも無にしをつておのれやれふとゝきなにくひやつと思ふほとやつぱり下心ハかハゆふござる　トほろりとこぼすおんあいのなミだ　それに付てもこなたにあふたらァノのらが居所が知れふと思つてわざ／＼尋てきた心ハコレ　ト帯に付たるはぎぬひの袋より小判で十両ほどの包をだし　定てそこや爰の借金も有ふし又今迄何ふそくなくしたものが急にきしつまつてひよつと又若ひものゝ短氣な事などしをらふかと思つてあまつて夕ァらもまんぢりとも出ずねられぬをだんなどのにとがめられ茶にうかされたせいにして夜明をまつてそう／＼にいそぐとしてもとしよつてハァ、ァ道はかもゆかず供をつれてハ人目にたつモやう／＼たづねてヤレ／＼マァあんどしましたガこりや是御本ン山ン様へ御再建のきしんと思つてのけた金かならずたとへのおや馬鹿とわらハすにとゞけてやつて下されや　トいたゞいてうけとり　【幸】ヘイ／＼かしこまりましたァ、はや段々の御仰も御尤至極でござりますさぞ御しんろうでござりませうガ此御金を上ましたら當分の借金ハ相すミませふしかし折角是迄御出なさりましたに一寸おあひなされましたら　【妙】ァ、いや／＼モゥあハずと歸りませふあいつが顔を見るとなを腹がたつてなりませぬ　トいふ[illegible]一寸[illegible]聞じぶん[illegible]わな[illegible]なかて[illegible]へやの外へしの[illegible]先へは[illegible]　【瀧】ヲヤ幸次さんどこへ行なさんしたさつきから[illegible]しや／＼しや／＼　【幸】夫ハ定めてヤ東好様先達もくれ／＼申た通りかな

らずしんろうなさらずにおち付て御出なせへしおいらんもその通りハテ今はじまつた事じやァな
しそのいにしへから例(ためし)も有マァ當分の御くろうといふハァノ茶やのさがりでこざりませふ【東】
こいつも方々にやかましくつてにつちもさつちもいけねへりくつ【瀧】わつちといへハしがく
もできず【幸】そのくるしミを天道様がナニよそ見をして御出なさらふおいらんの誠をてらす
卅日の月四角な玉子に引かへて丸くおさまるソレ十兩（ト妙光がわたしたる金をなげだす）【東瀧】（思へずびつくり）ヤァ此金ハ
【幸】すなハちこゝに（トらうかへ立出妙光がかほを見すれバ）【東】ヤァおまへハ母人そんなら是も【瀧】やつぱり御
なさけ【幸】何ンにもいハずに（トたて切しやうじ）【三人】ホイ【東瀧】エヽ忝ひ

○其後會

【亭主】（中の間に居て髮をゆへせながら）源介やく\モウ見世へ御神酒(みき)を上てもよからふぜへナント髮結とん凡び
んだらひじやァ此廓(さと)にとゞめたのふ（此さとのびんたらひハミなあんはこのやうなるこしらへにていたつてざつとしたものなり）【髮】エヽサ外(ほか)なミにいた
しちやァ是斗でも工面がいゝはづてござりますがサ【亭】身もちと場所とわりィからだ【髮】
さやうでござりますしかしァノわか衆(しゆ)のあたまには手をとります【亭】なぜ【髮】前髮をトよ
こへいたすたけ【亭】ウヽハヽヽヽ（　）（こゝに又瀧もとへさいつころ東好にあひたるまゝ月と日とたち行まゝに茶やのさがりへかたつけど長くハつゞかぬ○のつまりみのへんじもたまさかにあふせ、か）

き二人か中うき事かさなるちびやうのしやくあんまがおさへる手先さへ烏礦がさぐらす事もやとたゞおちつかぬむねのうちほうばい女郎ども/\にとひだんかうもあないどし座敷もち女郎【墨染】瀧本さんけふハくろ男
つらがくるじやァおつせんか【瀧】アイサさつしてくんなんしいちべヱ癪がおさまりイせん へやもち
【墨のか】わつちが身にとつて見りやァいやハ誰もおんなじこつておすそうだがこゝか苦界でお
つしやふからいやな心をハテあそぶのだなと思つたら又そうでも有イすかへ今迄さへつとめて来な
んしたじやァおつせんかミんな東好さんへの爲だと思へいなんし【墨染】ソウサなんでもけどられな
んすなへ【墨】そふしてアノ東好さんハ此ころどこにゐなんすへ【瀧】淺茅が原の乳母の所に居な
んすとき【墨】ソシテ幸次さんハ何ンといゝたんす【瀧】なんだか子いゝやうにするから落付ていて居
ろといひなんすが何だかかたつきしわかりイせん【墨】筆治をちよつとお遣しなんし ト詞もおへらぬその所へ烏礦かくる
ト口ゝにいふ聲も仲居げいしやあろともたいこまじりにどや/\とこなた/\迎しきへ幸次もともに入しほよく【幸】見ワたせば野暮も不醉もなかりけり【大勢】ハ、
、、【八ツ部 こんはる】しよしおいらがこつたらうふ トしたたへろり【烏礦】しやれ衣にたび/\書かれる山の手通のはんか侍衣裳付ハ古めかしくていづれも御ざんじなれハ畢す物たいいろくろ
くてつくりとしたる體とし八四十余まだ獨身にて内に居れべねことめしたきとさしむひのくらし衣ひつをから嘴にしてもこのさとへひたれべけいしやたいこまかれハほうによごませやせがまんのしやれたしてお町の若やハのこらすちかつきてれ行かねへうちハとうろうもに
ハかち[illegible]いきをらねへなどとうぬほれたいふこしらへかミ[illegible]のみうご[illegible]ふな[illegible]しやうにおうまんなり【幸】トキニ烏礦さま御早ふ入らつしやいましたに【烏】
ナニはやい事もあるめへ大門をくゞると枯木が所へ呼込れるやう/\に出ると思ふと又京庫屋
のおこんが出てせめてお茶ぐれへハなどゝいやミをいふし何の事ハねへうち出しの二丁町といふも

んでやつと通り抜て來た【榮】して見りやァモシ御高名もうるさふござります子ハ、、、【八五郎 幸治】
めりやす へ思ふてハする墨田川ながれの身擠かふ粹か梅わかの下略 ほどなく瀧本ミこしらへして坐しきへくる引つゞひこほうばい女郎 墨染
墨のか などなじミの鳥積ゆへつき合にかほを出す【こんぱる】ヤァおそろひの薄化粧【八五郎】どの子か目づきだ【幸】
おいられミんな目つきだ【八】となたもこれへ〳〵【墨】鳥積さんよくお出なんした子【墨】此
ほどハ【鳥】トキニとふでござへすいつも御さかんな事子【墨】トばかりおもしろくもな
くさ【鳥】たがらへをり〳〵か子ハ、、、【墨】鳥積さんどうなんした大分此ごろハ若くおな
んなんしたョ地色でもおできなんしたか【鳥】ヤそいつァありがてへ句だ子そう見たてられ
ちやァ唯ハすまねえコウ筆次を呼やナニ若ひ衆やソレ幕のうちをとりにやりやナ 此うちいろ〳〵のさハぎあり
【八】哥へ柳橋から吉原通ヒ猪牙にゆられて兩國ばしじやといな 松ハ首尾するへ椎の木やしき
わしの森へ三囲にむかふ嶋稲荷のやしろへ向ふに見へるハまつち山へ土手が八丁ゑもん坂大門
口からあげやいり などゝやらかし ハ、、、【鳥】ヤンヤァイごうせい〳〵【墨】八さんの聲ハいつそ
あだでおすよ【墨】ソウサねへァノ聲じやァ何とやらさんもまよひさうなもんでおす【八】
イョなぶります墨の香さん【幸】おらがのめ【〳〵】ヲヤこいつァおもくれへりくつだの何ッだ
〳〵おんミつできかせな トさゝやく ハ、ァわかつたのめ【幸】おらがのめ【榮】何たかしれねへの

め【八】ムンニャ墨のかさんハ幸次にきまり【榮】イヤコリヤアかうてきだに幸次もよつほどあ
やかりもんだの【釜】なんだんすエアノ幸次つらめよくうぬ〳〵（トあたまたはりたたぢやら六さハぎ）【幸】これさ
〳〵【八】ヲツト爰でふうふけんくハハならねへ【大せい】ハヽヽヽヽヽ【烏】コウ手めへ
きのふよこした手紙を見たか【瀧】アイ見イしたアノつがうにしてモよふすか子【烏】よくな
くつてさ、そうしてモウ内所しやアてへげへきまつたらう【瀧】アイあら方きまりイした子へ
墨染さん【釜】モウこつちのもんでおざりイす【幸】イヤホンニ烏積さんおめでてへ事を
ちよびとうけ給りました【烏】ムヽヘヽ（トいつたばかりぐつときまつた氣である）【八榮】わたくしともゝあやかりたひ子
エおいらん【瀧】アイサ（トいつたばかり）【八】私ともがお家見に参りませう【榮】その時何をもつて
行やせふ子【幸】有りやす〳〵おいらんの御好物がいゝこんぱるかふた茶わんへ香ゝ八五が
さんまの干物に塩いわしおれがぐつとひねつてなまこの酢漬ハモシどうでごぜへす【大せい】
ハヽヽヽヽ
ホヽヽヽヽヽ（皆うちまくの内などとりよせ大さかつき事にて夜分のこいとかハれバ寺が綱鑿を拵てくる引つゞひて）【やりて】コレハとなたもヤ烏積さまチトあちら
へ入らつしやりハどうでござりきます【榮八】イヤコリヤアいゝ所だに【たいこけいしや】イサ先入らせられま
せう【八】チヤチヤン〳〵とけてねる夜の雪さへゆかし（トミな〳〵らうかをばた〳〵床綱つ一しはらくげでそらおすろ次の間あれバひそ〳〵聲のへやとあり時分ハよしと日岡幸次瀧ハたともなひてへやへゆくおしを屏からぼつしやり烈ひかにたき）【東好】（お蓍にて）瀧もとか【瀧】（うれしさ何よりこびつくれし）ヲヤ爰に居なんすとハしらずと

うなりィすかと泣てばつかり【東】おれも手めへに別れてあんまり久しくあハねへからやうすもきゝたし都合ハわるしきのふ幸次が處へきて何かのはなしをする內に引過にもなつたから夕ァハ幸次が內へとまつて今夜かうして爰にゐるのもミんな幸次がはからひ トいひ少しなミだこゑにて ア、もつてへねへ大恩あるおふたりさま殊におふくろの此間のお心付ヶァ思へハよくぞばちのあたらねへものた【瀧】ホンニ何からはなしィせふかわたくしも旦那㐂ンの御心といひ夫に墨染さんがそバから引立るやふにしてくんなんすそれもこれも二人一ッしよにくらすやうになりィしたら御恩をおくる事もできィせふ何よりかより氣ざハりなハ烏積さんのわけあひ何でもかでも身をかた付にやァおまへもワたくしも顏が立ィせんモゥかうまでにおしつめィしてハ義理も法もいりィせんちつともはやくかけ トいひさしてあたりをながめる【東】おれもその氣で心がけちやァ居るが何にもしろ幸次にちよつとあひてへもんだ【瀧】待なんし見て來ィせう ト立出るところへ【幸】ひそ／＼聲にて しづかに／＼コレとつくりと氣を落付てなんにもわすれたものハごぜへせんか トいひつゝれんじの間あひろげつなにて下へ釣りおろせバ下にはかねて【こんぱろ榮吉】中途よりだきおろし中庭のとひ石つたひうらの戶口のかけがねはづし二人つれだち立出れバ外には人目をうかゝひてもしや見付る人もやと【八五郎】が目くバり氣くバりなんなくしのぶ塀のそと まんまと上首尾【幸次】【こんはる】【八五郎】と三人が悅ぶ心の內庭方【亭主】の聲ニて主の目をぬくふとゞきもの ト目あても何かくらまぎれ塀の外面へばつたりあたるを ひろひとりて【瀧】【東】コリャ大門の【亭】サ切ッ手もあきのなひやつらミんなの心底く

ミ分てのナソレ寸志となげ出した江戸ッ子かたぎのいきぢの肌ひィやりとして月をひらけバコへいかに盧生がゆめの邯鄲ならで浮世ハゆめの五十年是魂膽の榮花のゆめ哆囉哩樓の机上にもたれて醉中の二人が思ハず【三馬】ハテ妙なゆめを見た【馬笑】こいつハ一趣向書けるハへ

トいふ門口から【板元】が聲へモシ小冊の艸稿ハモウ出來ましたかと云爾

手管早引廓節用　大尾

式亭三馬門人
樂亭馬笑著

當春新作

似貌(にがほ)繪本(えほん) 俳優樂室通(やくしやがくやつう) 狂哥入彩色摺全一册 三馬著 豐國 國政

贔負氣質といへるよゝ本をそへて おもしろき本なり

傾城買談 客物語(きやくものがたり) 全一册出來 三馬著

いへずと御ぞんじソレ やぼでねへ本なり

一寸御斷申上ます

式亭三馬儀古人芝全交の遺言ニ付此度より二代目の全交と可相成筈ニ候へ共いやしき妄作を以て古人高名をけがすハ恐レ有と存いまだ改名は不仕差ひかへ罷在候猶不相替全交俤と被思召御一笑奉希候

跋

世に早引節用なる物あり。大抵其書を閲するに。大屋店子の代筆に採つて。張華が博物を資け。文謁子の贈答に名妓秘して論衡に擬す。此廓節要の書は頗是に異にして。専ら放蕩家の監戒に備ふ。何則中の町に散りかふ花の姿を見ては。謝安が臨安山中の趣を慕ひ。雪の旦の跣を憐てハ。千兩の表第をもて。頓に春申君が珠履に換んと欲す。是皆切落の迷故にして。その三界を觀ずれバ。最憐可愛の千言万語も。色即是空の方便說。貪嗔癡の三蒲團は維摩が室にあらねども。纔に方丈に過ずして。緋縮緬の火宅に墮し。終には鈒菱男山の主となる。嗚呼是眞に黃面と老子が歎息もろ白。仲尼が嘗て素謙品。寧傾城

界の果れ薄くとも。此三人組の手を離んや。されば經傳百巻のかたに編笠一箇の此小冊。作者の後にしたがつて。諸君子に文塹の解嘲をする言爾

鶏口亭牛後跋

纽城罗陵客物语

題辭

此書や鶴賀新内に唱ふ浮世猪の助若菜屋若草仇比戀の浮橋といへる雜曲を旨として正本の一冊怪談に見立即題して

傾城買談客物語ト云爾

己未孟陬　唖囉哩樓主人

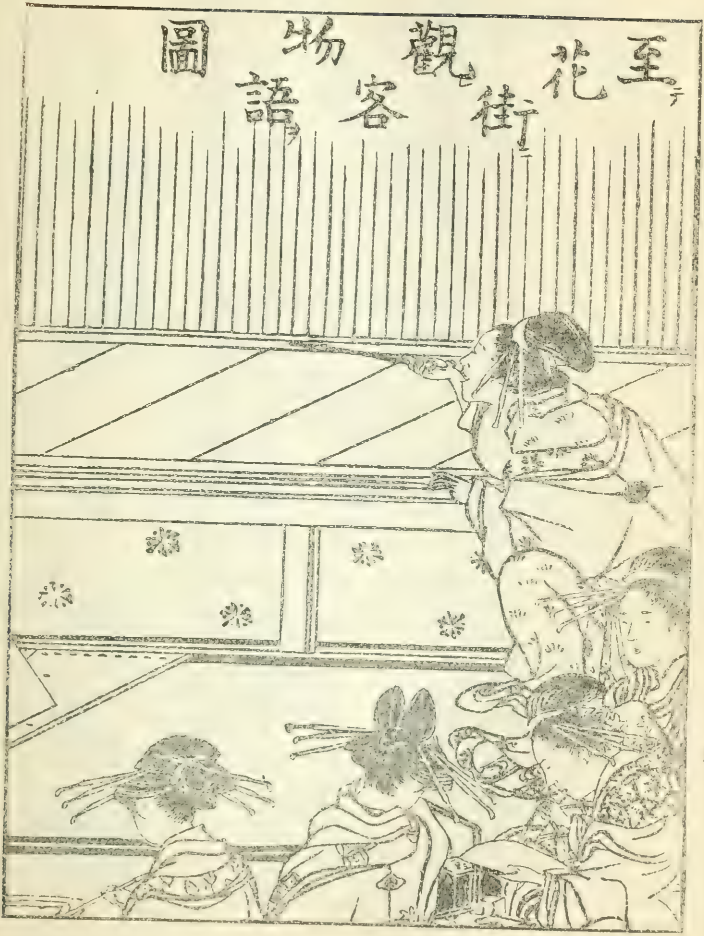
叙

宋儒先生曰。聖人無夢。嫖妓无誠。亦江湖上謠曰。誰道嫖妓無誠。殘于驪山比翼塚。是古學見解也。然則爲有可也。爲無又可也。爰肆中文雅才子式亭主人。嘗穿花街情作一小説。蓋原監戒焉。尤爲當世拔萃。風流後生暗誦此書。則免了三瓦兩舍陷人坑矣。破落戸子第做得生鉄漢眞帳中之秘也。雖余應需序之。從畫蛇添足雷木生耳而已

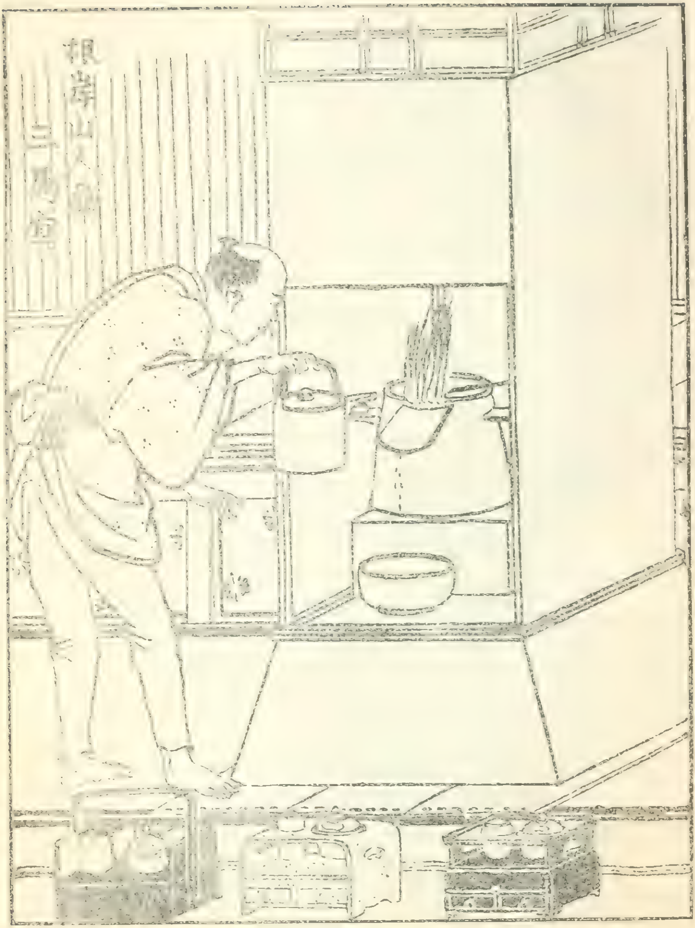
樹下主人石上叙

自序

怪を見て怪とせざれバ。大門の待伏も。其奇き容はなけむ。客をふる雪の夕。横に行微降雨の朝寂莫たる居續日和。いざや彩面楼の客物語なさんと。鄽行燈の光を取て。長燈心の百筋も。義理と情の二すじ三筋。いとし可愛を取交て。唯一筋に消殘る。雪婦の八朔ハ是幽靈の出端なるか。これどふしいせふ格子先。密夫に逢間が時有れバ。按摩の笛のひう／＼たる風醒く吹てきの字屋。ぞつとする首筋元のひやかし通。惚て手剛き客あれば。亦怕しく手有の花嫌、自多漂客のお天狗ハ。切掛られし紋日の苦



四


根岸山人畫
三馬宣

しゝ。彼熱鋏も心の裏茶屋。筥吊燈の贈り狼。ねらふれ客の足元にて來るか不來かと折る指も。髮諸共に切禿。化さるゝ有。化すあり。夫是一箇の妖怪館。爰に至て退治する者ハ。函關から東地の先生。必ず魂を奪るゝ叓なかれ。親の異見も闇雲に。迷へば忽つれないの舌を出して引込禿。身をつき出しの笠一蓋。身上棒に振袖雛妓。是を無功の人とや呼ん。吁怕ひ哉。人を惑すの百〻婆。忘誕と實情の正躰を今著述したる一部のありさま。アヽラあやしやなァ

チヤチヤンと云爾

紙華くらふ未の春はつ文の頃一寸
七軒の楼に登つて

式亭三馬述

傾城買談客物語總目

第一回　亡八樓穿古常情語
附り　高慢天狗大闘樓席話
第二回　純主大盡捕間夫語
附り　全盛娼妓契約幽靈話
第三回　薄情嫡妓嘘惑心語

傾城買談客物語

發語

式亭三馬著

ヘ傾城に誠なしとハわけしらず目黒に殘せしひよく塚とハ唱哥の美言へ死で花實が咲ならバひよく塚にも咲ハいなとハ雜劇の金言也其確論の醉不醉を客と間夫とに引分て張りと意氣路の二道に磨上るハ北國の契情ならでやハ誰が子かふり分髮の頃よりも辛氣苦界に身を沈めたつきもしらぬ人中におぼつかなくも馴そめてしげりミどりの友よぶこ鳥さるにても哀と思ふ至智に赤貧齋婆の世話たのミ引込禿の名もいつか振新伴新の功をへてはやぬしとなる部や坐しき夜具敷初ハいふもさら紋日の仕舞疊かへ茶や傍輩の義理のしがらミ猶しもふへる氣がね氣つかひこハきやりてが目をしのび間夫ハつとめのたのしミとたがひに心あかし合ひ世話になるのを姉といひ憂をかたるを妹とよびその日をおくるくるしミも紅粉翠黛に表をかざりこま下駄とみがら入たるたんす長持御門徒ハお持佛のとくかゝやき青山流の活花ハ床かけの雪探を寶ひ東江が額故物となりて撫牛とともに秘藏なり沉金ほりの机上にハ勢語源語貫淵の書入本に枝折をはさんで

百員の懷紙狂哥のすりものとよこたハり元明が墨竹徵明が蘭をうつして義之東坡の釘の折烏石廣澤が蚯蚓を書くハ和漢とつかぬちやらやうの筆法か。その玉章の拙からて客人の長雄を見くだし万事件新にまかせて心雲上にちかく酒と金とハどこからわくか孔方の數量しりたるをしらさるとしてしらざるをしりたるとする似た山の通をてらすや中街茶やが簾の內ぞゆかしきゆかりの客窈窕たる娼妓靡蔓たる新造もろとも外八文字つらなつて花間笑語の聲しばらくもやますおはい〳〵の神たち引ミんたんのにんちくりんを欲し牽頭が狂言亂舞亂席盃盤坐鋪に嶋をなし十寸見が妙音山彥にひゞくハ鐘か入相に花ぞ咲なる廓の風景仙境とやいハん樂國とやいハん釋迦も孔子も今の世にゐて見るならバうつゝをぬかし色を色として賢にや換んされバ琉球人を六度見たおやぢも志道金を一夜になげうち干物のあたまを出汁につかふ掛略むすこもゐけん折檻を野暮と嫌てなじミ深密の實情をたのしむげにや夕ァの大盡ハ今朝の紙屑ひろひとなりけふのあんまハ一夜けんぎやう變るハはやき化物世界一度大門をくゞれハ內證のからきを失れたちまちワが身をうつせミのからりとたがふたましゐハはやもぬけしてたのしミに老をワするゝ

若菜屋が一構　第一回

〔夜ざくらハ今やさかりと夕ぐれ時しきそめの客人ありと見へ竹村のせいろうハどぶのうへに山をなしてたれさまのさげ札天水桶となゝめな
り昔ひものゝころひかゝえがかへはをりと色をあらそふ折しもつきだしのおいらんをつて初道中の茶やまハりなれハおしよくをはじめほうば
い次郎けふハ見たてのつれ道中今中の町よりかへりと見へて箱てうちんを万燈のごとくつらねかふろ大ぜいにこゞりのごとくどや／＼とかた
まりくるゝの跡へしんぞう一むれ内の前へくるとわれ先へかけだしヤレうれしや火宅(くわたく)をのがれたといふあんばいでしきゐをまたぐ引つゞひ
てつきだしのおいらんやりてがかたへ手をかけてきだちと足らぬ外八もんじそり身になつて入くる跡につゞひて細見に一
つぶ点りのおいらんたちつん／＼ぜんとしてくり出すははるかのあとそなへハゐあつてたけからぬこの字のいちまひかぶ
〈● よびだしわかくさ 若草
上書ハ花色しゆすに名の知らぬひたるすそもやふ下着へもえぎあをるのがくむくねずこじゆすにひちりめんのうらを付たるしごき帯ハひやうこ
むすびなくしにまひとかんざし八本ハ當時のお定り也新ぞう四人ついのゐしようの二人かふろにばんしんつきそひうしろの方からちよつとおい
らんのあとをなんじふんもなく〔かゝへの仕事師〕ぎうだいのわきへ
もんをつくろひて門口へくる〔わかひもの〕ならんで詞をそろへ　コレハおいらんおはやふござります〔若帥〕アイいつそにぎやかでよふす子（ト目もとにつこりあいきやうをあらハしすつとないしよへ行）〔かふろこひの〕（おいらんの中をりのこまげたと新ぞうの下駄と一所にいくじなくさげる）〔はんしんりけ甲〕こんな。そりよを持つてつたらのアノれんじのわきへマアおきやヨ。そして土(つち)の戸(と)さんの所(とこ)へいつて、アノおいらんで申イす、里通(りつう)さんによくおいでなんした後ほど參りイして御目にかゝりイせふ、たんとおたのしミなんしトそれからのマアよく聞やよアノわけざとお申イす　この間御やくそくいたししたものハどうでおさりイす（ト何だかくだらねへ事をいつまでもいふ）〔戀の〕アイ〔分里〕サアはやくいきやヨ（内しよにてハていしゆ中町よりとびかして）〔亭主〕コレハミんなおはやかつたのサア／＼こつちへ／＼どうぞ中の町ハにぎやかゝの〔若〕アイきつひ人込ミておざりイすモウやう／＼で通つてきへいりした〔亭〕ヤレ／＼くたびれたらふそれマア湯へへへられへか源兵へや／＼コレ源兵へハ居ねへか〔禿〕源兵へどツ、ョよばつしやるよヲ、ョ〔亭〕長八でもいゝハ長八／＼〔長八〕ハイ／＼

【亭】長八(ハ)か一寸そこへ何ンぞ出して下せへ【長】ハイ〳〵かしこまりました【車井戸】ギイ、
、引 若者ハ臺のもの茶やのおくりものと引ちがへてうなきやのあつらへハおかもちにもち來り竹村の上あんまきせんへいを高つきにつミ上てもつて來たりしがしんざんと見へてぎうだいのわきでうろ〳〵するを【やりて】コレ〳〵竹
村かこつちへよこさつせへついでにまめ小りんを百がたのミます トハうぬが茶うけにするのなり此たかつきハちよつくり客人の口ふさぎと見へたり
【禿】ふろしき包をかゝへて下駄をもつてまたきのせまひはしごをおりながら かのとどヲ、引おいらんでよバつしやるよ【かのと】ヲイこ
んたァどけへ〳〵【禿】どこぞのたるまのゑんの下へいかァ【かの】しつたかすかねへぞヨヲ、
引 按するにくめんのわるいおいらんが七ツやへやるつかいならんか御見物の君子御すいもじ被下へく候【たいこもち浮世伊之介】二かいからしやれながら下りて來りすつと内所へ來る ヤ今日ハおめつたう【亭】
アイ。浮伊さんか。客人ハおやすミなすつたかの【伊】ハイ只今トキニ此間ハ。御哥ハどうで
ございます トかたさきからすこしへこんですへる【亭】いそがしくてさつハりさホンニきのふお玉が池迄ついでが有
たから善介にもたせてやつたつけが【女房】援を付ながら アイたしか先生ハおるすだといひやしたつ
け【亭】フムそりやァそうと浮伊さん又景物点(けいぶつてん)の俳諧(へいけへ)かはじまるよ【伊】ヘエソリヤア妙でご
ぜへす子ちと又よく心と出かけませふかハ、、、さやうならト高てうしにて表へ出かゝると出合かしらにはんか通二人【鼠坤(そそう)】ぶこつ【無骨】衣裳(いしやう)付
ハ大がい御すいりやう 二人なから黒ちりめんのふろしきづきんをくびにまきそのうへにさらしの手ぬぐひをくびにしぼつて一向ねうちのないお大刀をきめてすこしミじかいぱつちをむりに引ッはつてはき三度ばかりあらつてすこしつ
ぎのあたつた足袋三すひうらのしもふりはなを茶やのまへをやう〳〵にぬけて來てかけかまひもない女郎屋のまへをわざとかくれるやうな身ぶりをしてうれしがる風也【無骨】どうだ浮伊 トぐつとかうまんなり【伊】
ャこれハ無骨様すきと此間ハ【無】ホンニ京町のまんまだつけ【伊】ちつといらつしやいましャ

あなたよふ入らつしやいました〔鼠〕アイ〔無〕コウなぜかへるマアいゝハチト久しぶりではなさふじやァねえか トハいへど心の内てハア、ひよつとあがつたらこいつだけよけいた早くかへればいゝとむなさん用〔伊〕ぐつと見て取 ヘイ有がたふござります只今ちよつと五十間迄さんじますから〔無〕フムそんならはやくいつて來さつし待つてるぜコレ茶やべへりハ大きにあやしひぜ〔伊〕いづれなハ、、、しかし闕所をこします〔無〕こいつハァあやまりだ〔伊〕さやうなら無骨さまへイあなたさま〔無〕〔鼠〕浮伊のちに逢ハふ チヤンと中の間のとけい

○二階の上り口にハ禿二三人出しものを引手すりへよりかゝつてはしごの下をのぞき さがりイヨす トうつ向てゐろうしろの帶へ一人の禿引さき紙を長くむすひ付る〔禿〕ふり向て かのえどんよさつせへこんたハよくいたづらをするごとよ ト平ツ手でむねのところをたゝく〔かのえ〕なきこへになり ヲヤノ\／\ァむねをたゝひたから二年いきねへよコレよくしてくだせへやりて樂にそういふからいゝ ト又ひら手で二ツ三ツたゝき合ふ〔禿〕コレどうする〔かのへ〕しらねへハ トらうかを追かけおん洞す所へ明ざしきよりひよつくり出るへしやうめいいけどりのせうづかのばアさんからつりをとりさふな〔やりて〕コレこいがきめらハ何をしやァがるヱヱ、モいつても／＼聞かねへやつらだおれか氣がいゝからなをつけたりやァおつてからにゥう奴らァうぬゥどうするか見やァがれゥソレきり／＼うしやァがらねへか トしおれ付てらうかのかこくづをひろつてれんじからうつちやり忽ちいつこわとかハつてこちらの明しきへはいる定てこゝ會目なるべし △中ほどの坐しきにハ新ぞう入とましわておさわのげひぞう有といへとも世にあるしやれ本にゆずりてこれを略す △おもて坐しきハ當人、なきと見へて小勢よわたかつてべらべら／＼となぶりくひたしたからきやくのうへさと内中の事をならべてこゝろすこつてに隣行のけんきまといふ身であんまにひねらせてゐるハこゝの内へとまりかけに來てゐる男也但しひろのうちへ二階をゆるしても日くれよりへきやくの外あげぬものなれどもよつほどのいろけなしと見へて聖天をゆるされたやつなり〔風雅〕コウそづのときさんおめへの口のはたを

見な乞食(こじき)のゑんまといふくまどりがあるぜ「ミつのと」ほんだんすかへヲャばからしひさつきいそひてみをかく時つきィしたらふいつそつらひぞコヲ、、、引「風」ナニそれにつらひが入るもんか「つちのへ」ぬしやァ口くせになんなんしたよ「ミつ」それだつてつい口がすべりィしたものを「風」大かたけふの惣菜(そうざい)ハ油揚(あぶらげ)ののつぺいにくじらのごましるだらう「ミつ」よくさがしなんすよヲャてうしのふたが見へんせんはやく立ッてお見なんしな又なくなると内所でしかられんす　ト硯ふたも鉢さかなも手の及ぶたけへあらしてしまひかんさしでやうじをつかひながらたかの爪をほうじてゐる　「風」ハやくへんがちつぷうとこぼれる故ふたをとる　どぶ川さんそこにある白ひものハ何ンだ玉露糖(きよくろたう)じやァねへかチットくんねへ「どぶ川」是かへサァおあんなんし　トつまんで出す　「風」一口くつてかほをしかめながら　ペツ〳〵ァ、こいつァおそれるおらァ又玉露糖だと思ッたら花しほだやつさおきやァがれァ、むねがわりひどぶ川さんおぼへて居ねへ「と」ソレおきなんしあんまりいぢがきたねへからいゝきびだんす今じぶんナニ玉露糖があるものか「大せい」ヲホ、、、　おりからゝうかをばた〳〵とかけだしてくる新ぞう　「はげ山」おぼへてゐろちく生づらめ　トすてせりふにてかうしんのきかざるといふ身にてしやがんで居る　「と」はげ山さん何かはしやぎなんすネ「皆」いつそそハ〳〵して見ぐるしひよ「風」ナンタはげ山さん雛(にはとり)へ懐(ふところ)をにぎらせて色男の喰あきをしてへといふ晩(はん)たの客色(きやくいろ)の食傷(しよくしやう)ハあとがむつかしひもんだヨこいつァ私が御異見(いけん)だ「はげ」それだつてもいつそ犬馬(けんバ)さんがなぶんなんさあな

アノ奴づらハホンニ口がにくつてなりイせんヲヤこゝにも口のわりひ人が居さしつたッけ風雅さんまだ居なんすかへ【風】まだといふせりふハあんまりつれねへこつたハ、アごうせいおそるべしそうした所ハ水道じりの常とうろうと來て居るハへ【はけ】なげへすそがひらッてへといふ事だんすかへ。よふすよ。かんにんしておやんなんし【風】こりやアいゝ太てん違へだりつハにつくり立ッたといふ氣どりだハな【ミつ】又久しい合鏡さぬしの世事ハ聞あきイしたヨ上たりおろしたり二丁目に有たほりぬきのやうでおざりイす【風】ヲヤごうぎとしやれが御上達だこいつハ二丁目だけ新しいハへ【つる】こんな〳〵そこを通るハだれだ【風】そこを通るハ長袖じやねへか【禿】わつちざんす【風】おきやアがれ【つる】つむじかちよつと鼻野をよんでくりや【禿】アイ、ヨ【ど】はな野といへばあの子ハ内所のねこに鼠ッ子を取られたとつてめそ〳〵泣て居ゝした【ミつ】又おいらんに聞へたらしかられんせうされはときらひでゐさつしやるもいな【風】ハまじり〳〵してゐたりしたがなかくすり出し二下だんの戸を明ると佛壇のひやうぐがかけて有まへにお佛器がふちかへつてゐるそばにはした錢か四文錢ましりに五六十有そのわきにかんろばいのまげ[illegible]ふた[illegible]わんに[illegible]のさら[illegible]こいつア妙〳〵ト云ながらかんろ梅をなめてしたなめずりをしながら[illegible]【つる】ヲヤ風雅さん御不しやれななおいらんに申イすよ【風】ヲツトそういつておめへ喰ハふと思つてコウごしやうだからおれミつにしてくんなト又一切とつて禿の口へ入るミづのときんでへふがんしよくがわりイせひおち

りめんの七明け守の中へ小べんといふ色だしりぞひて考るにいろ客にハかれてよりさるほどに扨も其後といふ語り出しだらふきつひとやに付た新ホイそうしやァなかつたおめへ行水にてもなつたか「ミつ」よしなんしばからしい行水になりやァ色のわりィもんでおすかへヱ、すかねへ〳〵　トきせるでぶつまねをする。「凮」ァ、やにがかゝらァつかねへこつたがこゝの屏風ハだれがかきやした「つち」たしか田中のべんしんさんでおした「凮」フムこいつハ妙出來だ見世のかべとハ大ちげへな出來だホンニあんまさんモウいゝよ「あんま」ハイ〳〵「はけ」ヲヤァノ人ハ大きな聲でよんであるきなんすよぬしのくる時分ハいつでも鐘四ッでおす子へ「あんま」ハ、ァイニ私もお茶を引ますとはやく通りますて「と」ぬしやァいつそかわいそうだヨ目が見へなんせんじやァおかミさんのかほもわかりィすめへ「あんま」ナニおまへかゝァか顔などハ鼻でかひでしつてをります「と」ヲヤけしからねへやホ、、、そんならこりよヲあてゝ見なんし　トふくろうにたかつたすゞめのとく大せいにて色〳〵なものを出してあてさせる「禿」あいひろうとのまたかもめんにもん所があるかねへかしれぬほどよこれくさつたてんつるてんのぬのこをきて火ふうしのみをもつてほうツぺたをたゝきながら　吉兵へとんこりよおたのん申ィすと「吉兵へ」ナンダ御へんじかナセこんや出すあすの朝てもいゝのにこいつハあたらしひナ　トニかいの上り口の天水桶のわきで人をとり見てゐる　「つち」こんたァ今けへッたか「吉」ハイ只今歸りました忠さんから御手紙が參りましたつけ「つち」フムそしてこんたァ又江戸へ行ついでがあるなら

ちつとたのまれて下せへ【吉】ハイ〳〵【風】なんだ又治丹坊じやァねへかモウうるせへしやれ木にもかきつくした文句だ【つち】うつちやッて置なんしどうで同じ所へ落て行くから作者も昔にくふおだんすときぬしのしつたこつちやァおつせん【風】サァ〳〵大へこミ〳〵はりこのだるまへむね打をくれせたといふもんだ【禿はなの】風雅さんなぜきのふのものをおくんなんせんサァいまし御出しなんしおくんなんせんとくすぐりィすよ【風】ア、コレうるせへよしてくれ。こうされるとからだかかのこまだらだコレ手めへの顔を一寸見やツレへつついのこそくり水がめのもりをとめやうといふぬりやうだからべちやァねへくひと胴とのそきつぎがあきれらアしかしこうハいふもんの哥麿が大にしきへ出るのハ今の間だらふ（トいへ共此詞ハいつからにわからぬゆへねつからおちがこず）【はな】何ンでざいますとヱそんならアノ人形屋の庄どんかきたら買ておくんなんし【風】ム、やふといふにサ内所に置たからのつちにやらふヨ【はな】ほんざいますかへそんならァ油十文字親いおたきへ移ミ木をしなんし【風】コレマアちつとだまりやおくの方が何かこう〳〵しい。やうだ。世[ ]須更休題閑話に【無骨】（四五會目と見へる客ふり出来させぬ往所はいかなたむしやうと人にきかせたかる風にて五丁町ミんな近つき何でもしらぬといふを恥にし一けいこ所ハきわかしら其語のかへんめを三日もはやくしみをくつとおうまんにして万事かすりへまへるを通と心得やり一とかごかきにいやかられる人物也ねつこやのきせるに五匁五十でとめたくらゐ一両ばかりハ床花ハ返しに来たたはこ入をミせかけふとんのうへに大あぐらでやく者付の噺かしら御とく用足ばかたを賣ふといふ手付をし一何かりくつをならべるそばに九部介いなりのあまいぬといふ身でわかひものをつくばつてゐるうしろの方にハ噺かるたを八分されたた代ふり新けげんなかほをしていまいねふりがさめたといふ顔色）【無骨】コウ若ひ衆

や何もこんたを引付て古ひすじな狂言に山もワからねへ本讀(よミ)をするじやァねへがぜんてへァノ女の心いきが紅毛文字(おらんたもじ)の假名(かな)ァミるやうにわるくからんでさつハりとワからねへ是がこれ初やうらならまだしもの事【若】ィヱサそこでござりますから【無】ハテ聞ッしおなしミがひによろしくと日なたぼつこのうるしかきでまん丸にかき廻さふとハぬしが附句のあたりめへだヵそりやァはや事とすべによつたらもれへ引もねへ事じァなしたとへかんしやくのむしがつてんしねへでも水道の水かげんでせんじやうつねのごとくにさつぱりとそいつもせうが一ッぺんぎりほとけの顔も三度とやらで二へんとなつちやァ品玉のヱヘンとちがつて種(たね)がつきやうおゐらァ大こく舞(めへ)のこび八じやァねへがおぶさつてくるなどといふきたなびれたあそびハ新造ッ子のおけらさんよりハモちつときんもつだしらッ切りなせうがにやァこよひ一夜ハおれが妻といふ場(ば)もあるがそんなやぼハいハねへよ【若】夫ハモゥあなたがおつしやりませんでも私どもがせうちいたしておりまます先ン日いらしつた折もあいにくな客人でよんところなくおもらひ申ますし又こんばんもとハどうも申上にくふござりますが御如才のねへあなただけにおまへまして御ねがひ申ますのでござりますす（ト手ぬぐひをひざのうへでひねくり廻してかたへかけて見たり又はづしたりたゝミのちりをひねつてこちらを向てひたいへ付しりをもち／＼してゐる）【無】願をきかねへなて牛(うし)しやァあんめへしこんなにしミつたれたふとんのうへにつくねんとしてゐると

ハァおいらハ御人躰がつり合ハねへお人がらのすたつた事たがこのふとんも八朔の白むくから二度斗りいろあげをして七ツ屋のくらげへもとゞ年明まへでヤットふとんに變じたのたらふあゝいふ女郎にかぎつて若ひものゝ帶をかりてハ甍ミせの間に合せ下着といつちやァ半衿と袖口ばつかりとりかへていく度もはれをさせはり付のから帥を脊負てきらずの百万石もとつたつらをして素見の口こたへもうるせへやつだ江戸ッ子のありがたさにハ御乳母からゝ一ッぺへの時分から此里へ入りひたつて女郎の新ゝ手といふこたァおいらが腹からおしへてやるのだごてへそうだが無骨さまといつちやァ大町河岸ミせいふにおよバずどこの内へ行かふが一度もはたひた事かねへ揚屋町の湯ハとめ湯にして角にいる雪踏なをしがしまつて歸る時分からあしたの朝ハミのわ円町のおはりばゝァのくる時分茶屋のこたつへふんごんでむかひ酒の湯どうふを喰ひ中の町へこへとゝおなられて若ひものゝ塩をもるころは白川夜ふねで居る九郎介いなりもしつほをおゞめて毎日如来も照覧あれといつちやァおつなせりふだけれどおらァあんまりしかたがおもしろくねへ　トからくりのいひたてへやくはらひをこたまぜにしたるごとくしう／＼たるべんぜつへらく／＼とかミそりのごとき舌をひるがへしてひさいヽ一トいきとしやれた所へ一時の休【鼠帥】ア、よつたトいひながらしやうしたあい　無骨ざん何でござへす【無】おやかましふござへすおめへのおいらんへよろしく【鼠】ナニサおめへ　ト鼠帥がことばハ少シしつかによむべし【無】聞なせへァノ女郎のしかたが【鼠】イ、エサ先刻

からわつちが所へやりてが來て何ッ分わりくどひてたのミやしたからそれゆへわつちも何ぶんおそなれつたしかしおもふ事いれでやミなんもはらふくるゝわざとやらだから何ぶんいふもよふごせへすが今夜の事ハ何ッぶん一ッ夕（せき）の論にあらずだから何ふんわつちにおあつけなせへいづれあすのはんにも來て此あとまくハわつちが狂言をかきやせう何ふんわつちが心いきを御いやましくもよしなに御〱ませといふ所だマァ〱夫にきめてくんなせへ（ト何ふん〱わつち〱といふ事をうろさくならべる）【無】ソリヤァおめへのいふこつたからまんさらおれもつき合をしらねへてもねへが【鼠】ハテサよふごせへす何ふん胸中（けうちう）に有やす【若】（先刻より一向口も出されずきゝやくになつてゐたりしが）あなたさまよろしふ御ねかひ申ます【鼠】アイ〱コウ何や若ひ衆（し）やこんたァマァ下へいかつしおれが何ぶんあつかつたからまんざらにもしめへ【若】ハイ〱それハありがたふござりますいつれよろしうハイ無骨さま（トしなれの）（きれたところを手をついてやつと立て行引ちがへて）【やりて】コレハモウあなたさまありがたうおざいますモシ無骨さまヱこよひハさぞおはら立でおさいませうごかんにんなすつて下さいましモシへこぶまきさんへお大事になさりイしェ（名代ふり新）【こふまき】（うつかりとして無骨がかほをまもりゐたりしが急に氣が付たやうに）〱「アイ【やりて】（新をよびたし）モシへむつかしひ時の名代ハわけておいらんの爲でおさりイすョ（ト小こゑていひ聞かせ）「へ、、、ハイさやうごきげんよふ（口の内で）いま〱しひと（行過る）（　）（あとハ三人からしんのきかさる見さるいハさるにてさるとはつまらぬさるまつ客木からおちたるふり袖しんさう大風の吹たるあとのごとくにて夜ハはや万更（かう）のころな

れバうハぢうりのたとしハらくたへ田中のかハづ驟ずだき不寐かあぶらをついでまへるもらうかのおとのしバ〳〵にやりてがモシへとおこよこゑもつた夜床のぼち〳〵もふられた床のはいふきも名代のいびきにひらきはるか上手のあたりときこへて犬のとをぼへものさびしく傍にいふふうりんそはこのさとでいふ【おかくらの聲】　そばアイそばイ、引

第二回

北方に佳人あり一度咲ば其城をかたふけ二度よろこべハ其國をかたふくとハ美女をほめたる詩を今の遊里の名によぶもいやといハれぬいろすがたしかも北州水あそび粹とハ水のいさぎよく諸分しかたの行とゞき心をこゝろによませたりやぼとハ月のかへ名にて水にうつれるかけの月もと樗蒲にあらざればとり所なき空人も金か光らすびんつきやいとによる物ならなくに柳にうけてあいしらふ一騰のものがなる口の酒ひたしなる大さハぎのめやうたへといつよりもめれ合になつて緞子大盡けふ若帥をもてなしとて氣をなぐさめの大茶はん何がな御きけんとりがしに本間の床に居なをればよびたしおいらん【若帥】ミツ紙た口こくれへてちよいとよこつまゝて六兵ハなゐの上ぞうりたにきらうかたはた〳〵とこうづにさして行く　色づへに身をハふすまの猪之介が昔ハ人にもたせたるたいこを今の世わたりに浮世〳〵ともろ人に呼ハれて愛へをきくもいこれにつゞいて紙子の理八蛸の吉兵へ乱十西次洞兵へ傳七いふも更名高き太夫たいこもみんなばいしやちろともにむだをいふありしやれるありそな〳〵屏風のかたかげにこ

ゝをせましと居ならんだり ほどなくおいらん 【若艸】 てうつ君かへる 【げいしや大ぜい】 サアおいらんこちらへ入ヮつしやいまし トからだをひねつて少し通り道を明る 【ばんしんわけ里】 おいらんへサアおめしかへなさりイし トねまきをわたす 【若】 ねまきをきかへるどうへひぢりめん通りかゝるをりにて黒しゆすにうらの付たるしごきをしめる 【つけ野】 おいらんのきものをぬひだまゝにてそばのたこうへかけたばこをすひ付茶やの女房へ出ス 【茶や女ぼうおてつ】 いたゞひてのミ又一ぷくつひで おいらんと出す この内さま〳〵のしやれおかしミ有て 【おてつげいしやたいこ】 ハイさやうなら御きげんよふ トミな〳〵立上る 【若】 おさらばよ トいつたばかり 【ふり新ふる川】 おてつさんおぼへてゐなんしへ 【てつ】 又あんな事をいわつしやるョ何をおぼへてゐますへ ト云ながらはいり口のはきもの手〳〵にとる 【ふる】 よく此間おいらんの所へ來なんせんね 【てつ】 アレあんな事をいわつしやるあれほど參りましたものをや 【ふる】 いつへ 【てつ】 花さんのお坐しきをしまつてまいつたらおまへさん硯はこと帋(さうし)をまへに置てゐねふりをしてゐさしつてからに 【ふる】 ソリヤアほんだんすかへヲヤ〳〵よくうそをつきなんす 【てつ】 イヽヱほんとうでござりますよホヽヽヽ 【わけ】 おかさんおさらばよ 【茶や下女】 かミさまのはきものとじぶんのと一ツにもち ハイさやうなら トミな〳〵やりてへや□まへに行てまた ハイさやうなら トこしたかゞめてはしごはた〳〵 「うきよ伊之介ハこのどさくさのまぎれさいわひ跡へのこりて明アやへしのびゐるにのみ間にばんしんかふろばかりにて□□□□□□□しば〳〵みす紙をふとんの間へはさみ屏風をたて廻せばらく□□閨中のこんたんハ作者がおあづかり申んす 【わけ】 おいらんのくしとしのぎをわりかミでぬぐひこのまをミすかミへつゝんでくる〳〵と袖へしまひながら コレ雪野やそりよヲしまつたらノ水道しりのめうがやへ行てかんせうがを買ッてきやチットきり〳〵しやョ トいひ付あたりの人目をしのびそつと明アやへ行 【わけ】 小こゑになつて 伏猪(ふすゐ)さんかよくまつて御出なんしたさぞきうくつておさりイせう 【浮伊】 わけ

里さんか純子さんの床ハモウおさまりやしたか【わけ】アイ今およりイしたモシ伏猪さんへおまへさんの御心じやァさぞつらひこつておさりイせうがむかしハ昔今ハ今たとへ人中でどんなにくやしひ事が有イすともおいらんの事を思ひなんすならべじつとしんぼうしてつらひ月日をおくらしなんしハテおまへさんいつまでそうしたすがたでもおざんすめへ又御かんどうでもゆりイしたら今のしんくをむかし語リと梅か忍のじやうるりに有る通りそれをたよりにおたのしミなんしでかならず／＼たんきな事をなさりイすなヱ【猪】イヤモウおまへの御心ざしハ有がてへともうれしひともホンニ御禮のいひやうもねへ若艸ハそのはづだがかけかまひもねへわたしが事をそれほどまでに實をつくして思つてくんなさるとハたとへあすが日死ぬとつても此御心ざしハわすれねへ【わけ】ナンノ御禮に及イせう常から氣ぼそひおゐらんのうまれ付ひよつとマアつきつめた事でも有た時ハ跡に殘ッてわたくしがどうマア苦界がつとまりイせうそれが是かと思ふに付ても猶おゐらんがいとしぼくハテ姉女郎の身の上にどのよな事がおざんすとも／＼力を合せやつて世話になつたりなられたりするのが苦界の忘艸でおざりイす夫に付てもおいらんにくれ／＼異見を致イしたァノ純子さんが來さしつたらどうぞして五十日ほどのむしんをお云イなんしそうすりやァ當分のしのきにもなりイせふかならず／＼外の客人にあ

しくあたりなんしてハ内所の手まへやりて衆のおもわく茶やハもちろんどこ爰も壹つにわるくなりィすからおまへさんの身のつまる事でおだんすからずいぶん心で心をしかつてモちつと[illegible]りをもつて御出なんしと申ィしたらなミだをこぼして御聞なんした思ひ出しィすとモゥ〳〵わたくしがむねがいつぱいにはりさけるやうになりィす　トほろりとこぼす一トしづくは妹女郎の一すじにせい一ツぱいのしんじつ也　【猪】何から何までおめへひとりの心づかひいかにとしがいかねへでも若艸もあだおろそかにハ聞やすめへ　【わけ】かうしてゐる間も人目がうるさふおだんすから早くおかへりなんしおつ付ヶ引でおざりィせう今宵も又私が首尾してお上ヶ申ィすからいつもの所へそつとしのんで御出なんし　ト何から何迄氣を付てじよさいないはたらきいぶせくも忍で浮猶ハ歸りける　△【大とハかへる純子大じん】アヽがうぎとあつくなつた　ト上着ハぬひでゆうきつむぎのあいさ下ハりうもんおなんどかへし檎しほりのきぬじゆばんくろなヽこの帶を前で結ひしねまき姿　【若艸】がもとへこの大じんはなへだのろくなり通へども氣に入らぬ客人なれバ爲になるのもうちすてヽふてうしなる事ばかりゆへばんしんにゐけんをされよんところなく口を合てゐる　【純】アヽよつたぞ〳〵何が紙子や銅兵へめがむりこぢつけにのませをつたによつてがうぎとよつた〳〵アヽフウゲイフウ　イヤ又のたまくでいふのでハなひが金と心と男ぶりと三ッそろつたものかあらバ苦界のつらひ事もあるまひそこて我等が持こまれるじやァヽうるさひ〳〵ノゥ若艸コレどう思ッてゐやるぞや　ハヽヽトはないきあらくよりそふへちつとむりなたとへなれどもとらにおつかけられた手おひしヽのごとし　【若艸】ふせう〳〵に　イヽヱモゥそりやァおまへさんがおいひなんせんてもぞんじておりィすだんなさんをはじめ茶やのごてさんハいふにおよバ

すぬしが御出なんせんと堀の内のにつてんさんへ願がけやら塩物だちを致ィすやらほうばい衆もてん/\に純子さんはなぜ御出なんせんとあすこやこゝの部や/\でかいはうびをしばつたり紙で蛙をこしらへィしたりャレ盃を下メてしばんなんしの【作者曰】待人のましたひはさま/\あれとめ今めつへら用る法は○うなぎを一本くひそのくしな客の名をかきたる紙へさし畳の四ツ辻へさし込て跡をふミ付てをくなり又法れいこくと客の名を元結紙へかきその上へびん付をまぜおはゝろにてかき廻し/\にる也その跡は又畳の四ツ辻へ入てふミ付置也是いたつて秘なりといへ共さるおいらんに聞かきして笑にまらハ。也と大勢よつてされぎィすよホンニおまへさんはくるわにおすまひなんしておやどへあそびに御出なんすやうでおざりィす【純】イヤそいつがおれがたのしミだが扨ゝ遊人とつき合ふと毎日あそびでいそがしひけふも湖月と万葉子が哥の會から廻つて來たが翌も又千利が所へ茶の湯に行あさつては猶いそかしひ入木堂が書會と丹青が畫會が落合ッて是非にといふから行かねばならぬさうすると惣六と白兵衛がどうぞ江嶋鎌倉へ御供いたしたひと云何から先へしやうやらャレ/\通といはれるも金もちといはれるもうるせへ/\おらアモゥ橋の下にこもを着てゐるやつや帳場に居れつてきまじめでゐるやつらがやぼでうらやましくてならねへ　トしまんたら/\うぬほれにむちうとのばすはなの下長夜も甲へこじかきにわけて春宵一刻もまつ身となれバ長はしごかけしやそでのぬれぬ先つはにおおむこ斬ゝつまそのつまゆへにこひしのぶ時刻もよしと【浮世猪之介】白しやうぞくの裾より下をこんにそめはられいとすがたをかへてなんなくうらの戸口よりニ階へしのべハ【はんしん わけ甲】小二へになつて　浮猪さんか【猪】わの字か【わけ】サアこつちへ付て御出なんし　ト手を引て二階へやへしのバせる　○　宵からとなりの女郎屋は夜たうちあかす客のしゆうかうつる責がこゑのしん内ぶし

〽ながき長夜もふけゆけバ木竹もねふる折よしとねまきのまゝにわか草ハ床をぬけ出明キへやにしのびてひとり猪之介が風情見るよりすがり付なミだに實をあらハせり【大ぜい】ヤンヤア、引（こちらの明へやにハ【若猪】二人さし向ひにてさま〳〵のこんたんありといへとも人目をしのぶ夢中なれバくハしき事ハ作者にも聞とれず）【若艸】アレ聞なんしとなりでうたふ新内ぶしぬしとわたしが二人のわけをつゝむとすれどあられれんしたじやうるりにまで作られて同じつとめの人たちになぐさミ物になりイしちやァわたしハともあれぬしの身が五丁中へたちイすめへ【猪】ハテさて今さらどうするもんだうき名の立ッハ戀路のならひかくごのまへとハ言ひながらコレ若艸おのしハこゝろがかハつたナ。（トわれをわすれて聲をたかくするゆへはつとおどろき又ひそ〳〵）妹女郎の鏡といつてもおしくねへァノわけ里が此ころの世話大ていの實じやァねへホンニかげじやァおがんでゐるそれに引かへうぬがこんじやうァノ大じんの金にほれたゞひつてんと見くびつて今じやァおれを長さほ下地ァそのはづよ口をもとでにかせぎあるくいやしひたいこもちのぶんぜへでもつてへねへおいらんと色事をとハ思つて見れど時ゞハむかしの事を思ひ出してァ、おれも不孝のばちとハいひながらこんなにしがなくなつたかとひとりむしやくしや氣をもんでもおもてハうハきに見せかけて坐しき〳〵のむり酒と涙をひとつにのミこんでくらす心のはかなさハけんばんのせんかうより立ぎへのする細ひ身のうへ夫もたれゆへ清玄じやァねへがミんなうぬゆへよ

つたハトヤ丶はらゝのくぜつの序開人目しのべはひそ〳〵と声をもたてず男なきたゝきたひのも音やせんむ〳〵やぶり付にもあたりをはゞかれはぎしこかんでむねんのなミだ岡目からミるときハつんぼうとおゝしのけんくわをするやうなりこゝらが先ださ〳〵と切落しのジヤ〳〵もの也【若艸】コレ中伏猪さんむりハ男のならひと云すがソリヤアあんまりうたぐりだんすトひざにもたれてしのびなミだいゝてへことハ何やかやいつぱい心にありィすがなミだでむねがはりさけィす【隣】新内へぐど〳〵いふもぐちながらいつぞや下の日待の夜だんなさんがた藝者しう多くの中でこなさんいおとしはなしや口合におもしろひ生ハ持やうじやすいたらしひとおほいことに【若】ほうばいしうがより合なんしてぬしのうハさをなんすを聞てわたしが心のそのうれしさハとびたつやうでおざりィすすぎしも二人がうき名が立ッてぬしハ二階をとめられなんす又そのうへに親ごさんの御かんだうをうけなんすしあとにのこつたわたしが身もおやかたさんのりやうけんですまされるたけハとおしんでおくんなんしたがそれさへよんところないわけでとう〳〵こゝへくらがへしてとても今までのやうにあふ事もなりィすめへとおもひ付てのたいこもち定めてぬしもつらふおざんしやうナ、どうぞしてかうしたらと枕にもはしらにもわけ里さんを便にして何から何までせハになりィす是ほど心をつくしィしてもそんなにぐちばつかりいひなんすからひよつと心がかハつたかとネンニ〳〵あけしひひまハおざんせん【新内】へくがひする身を立るとて義理一ツへんのあたつきハけつく心のもめるたねどうぞおまへも實にして逢ひとをしたひ戀

のよくかつてな事を願に願大師さんの御ミくしも日にハいくたびうらやさん【伏猪】愚痴ハ戀路のならひといふがちつともあハずに口をおくるとどうかかうかとうたがひが出てつい一口もいひ過すむねさへわかれバ何ンにもねへから腹が立ッたらかんにんしや　トなミだをそでゝふいてやる【若】わたしも人のうハさにもぬしがあすこのかうしさきでたれ〴〵さんとさしむかひでおもしろさうにはなしをして居なんしたのそんじよそこのうら茶やへはいんなんしたのと聞ィしてハたきハけられると知りながら【新内】へしミ〴〵はらもたつた山夜ハあかつきの夢ならてはれてあれれぬひそ〴〵ごゐ【いつの間にかへ【とんす大じん】手しよくたゞさへ曲もの見付た　トとびかゝる出合かしらに【ばんしんわけ里】手しよくたふきけすしんのやミ【純】今のハたしかに【わけ】このごろうハさのゆうれいでおさりィす

第三回

身のはてハいかにと問ふもうし嶋やとハぬもつらき鐙てふそれハ向ふの武蔵野をけふハなやきそ【若艸】ハつまにはなれてきのふけふ浮名のたちしとがめにてわかな屋が別業に禿壹人にてへ帚の喜介といへバ身のうきをいつ喜に助んとおもへと儘にならの里夫にも似たる興福寺【木魚の音】ボク〴〵【勤行の聲】南無阿彌陀佛〴〵〵〵【かふろ戀の】モシおゐらんの所へアノ

おてらきんじやァとうふでもお賣ンなんすのかへなんておざりイすエ　トしんくにくらすおいらんの心もしらずにあどなきハさすが禿のならハし也【若】ふとんの上よぎにもたれてうすゆき物語をよんでゐる　あれハむかふのお寺さんがおつとめをしなんすのだヨ【若】ヲャ坊さんもつとめをしィすかヲモシヘそんならお寺にもやりて坊さんといふがおざりィしやう子【若】ヲャ此子ャいかなこつてもヲホ、、、、　トたましいハうきをかくさむ心のたすけまたとないしようすゆきものがたり　へなみだとともにたちわかれしに女。おのこの袖をひへてかくこそ詠けれ

月出ばそなたの空をながむべし

かたふかハまたおもへミやこぢ

男かへし

やみの夜ハ思ひたえなんうらめしや

月なきとても我ハわすれし

かくいひて立別れしたがひの心のうちおしはかられてあはれなり男も志賀のさとに卅日になるまで日をおくりけれどその間にうす雪何としてか精ふの床にふし今をかぎりと見ゆる　[illegible]へにつき[illegible]【禿い】ヲシおいらんへその本ハあハれでざいますかへ又おしやくにでもきハれなれすりやァおわるふおざりィすヨ【若】ナニサあんまりよミ入つてついなミだがこ

ぼれたよァ、なんのうそかまことかしれもせぬ此本をォ、、、（トわらひにまぎらす口もと目もと湘川粧ひ。一もと。もはびたくハへんみのすがたなる）ハイ若衆さま〳〵さぞ御たいくつでござりませうお茶をこしらへましたからサア〳〵おあがりなされませ（ト最中の月を一寸口取に出ス）【若】ヲヤおぢイさんかならずおかまひなんすなへ「寮もりおやぢ【五六七】ほど七十ケ久ではた極無類の大安うり辯慶さんでもこいつはのろくなりさうなもの也」【五】何さおまへさまわたくしも御そんじの通りたん〳〵のふしあはせでたつたひとりの娘めをおやかたさまへおたのミ申ましたが只今ではおまへさまのしんざうになりましてわけ里〳〵と御ふびんがつて下さりますすげなそれに付て娘めがきのふのみにもおまへさまを御大切にいたせと申てくれ〳〵申付てよこしましたかならず〳〵御氣づかひなしに御保養なされませツコデかの純子大盡づらめがおまへさまをしたひをつてこんどの騒動をさいわひに爰から内ミでうけ出すといふうはさもござりますハテわかひ内は二度とござりませぬそのうへにおまへさまがたは人よりつらひ色のあきなひをなさるこつちやによつてァ、間には合はぬ事もあろし又もうかる事もあろしその内にも相場がくるへどマァそろばんの玉ちがいな事はおよしなされませてん〳〵の氣に入てァノ人ならバ亭主にしたひあれならば女房にせふトそこでシャンと直が出來る私が娘なども又かやうな事がござりますまひ物でもないモシそんな時にはとそんしますゆへおまへさまの御心がなをさらいとをしぼうございます夜前もつく〴〵とか

んがへましたが。どうして見てもコリヤかけをちなさるより。外にしかたハござりませぬ。それじやてゝ。親ごたちにも一寸かほ見せてソシテどこぞしれぬ所へ身をかくして御出なされませ。ハテ私ひとりかぶりますればどこもかしこも角ハなひハテ丸ひはあたまのやくわんおやぢモむすめが御恩報じとぞんじますりや。すこしもつらくハござりませぬ トあけんおくばにかゝませてすいを通したおやぢが詞

【若艸】ハ さしうつふき稍く詞もなかりしが ホンニマアわけ里さんと云そのおやごさんと云おふたりながら是ほどまでふかしひ御恩になりイすとハどうした先キ生のやくそくでおざんするいかにさうざんすとておまへがたおふたりになんぎをかけイしちやア行すへが思ハれんす【五六】ハテおいらんのやうにもなひそのよなやぼをおつしやりますなしらがでこそあれいにしへハ本田あたま繁こそよつたれそのむかしハうすげしやう長ばをりのはやり出しに哥へよかのんし／＼と。しやれたものでござりますハ、、、モちつとうき／＼なさりませ今にも喜介が歸りましやうきいふちよつと代猪さん逢相圖をしらして置ましたが後ほどハるりとおはなし申ませう ト少シハこゝろはらさせんときさくな老がざれことをいふ越くれべいほささやはや寺ゝに鳴り渡る初夜ハ勤行鐘の音諸行無常ハ響さへふち底にひゞきて虫ハ音も隅田の川の遠里にいと物さびし艸笛の哀れハ同じ【浮世猪之介】過し夜よりのもつれごと今ハくるわの内をかまハれ【若艸】がしるべにて

世渡りもうきよのわの里お針が方にわびすまひかねて今宵としのご出たづね来つれど内のしゆご相閙(あひづ)いかにとしらひげやひそかにそこを見めぐりて戸口によれどかた／＼とかたはのあしのふるへれしひさしの小かげにしのびゐる寮(りやう)あづかりの【五六七】夫とこゝろへ戸をほそめ善ハいそげと【若艸】を門(かど)へ連(つれ)出戸をぴつしやり【猪】若艸か【若】代猪さんうれしふおだんす【猪】うれしひ　ト手をとり行んとするところへ　扨こそのがすな合点(がつてん)と道をふさいで邪魔するふたり【猪】心得たりと此ばゞまへしやァ邪魔ひろぐおのれらハノリ地【二人】かねておきやく／＼の鼠艸と無骨だ【猪】シテ又それが何でさゝへる【二人】ヲヽわけをしらぬハお道理さまようぬらがおためのの大ゝ盡(じん)純さまと内通して二人がはやしひなりふりを見分るための廻しもの今まで盡(つく)したに心の竹村すつかりまいつて上さんばいサァおんじやうにこつちへわたせ　トすかさずとりつく【二人】ぢやうコでくびふりもきつこやでんとうレ待なんし　トとびつく【鼠艸】【猪】かうふり合せた袖の梅是も他生のゑんかいらんな　トはねのけられてもなきハよ【無骨】またうちかゝるをかいなとり　粋だとてあずハよしなんし　トつきはなされてひよろ／＼　その狂言の山屋がとうふよかりになるさんとおむしやの【二人】つかこかゝるをもんどり打せ　さつてもくだをまきせんへい【無】なげられ山のかんろ梅　トうしろからとのゑりしめを【猪】ヲヤ又口舌でおざんすか　トすぐにかた手のせなくるゑはづみに　【鼠】ころり三まひかご【猪】土手八町より【無】口八ッてう　ロハへたつしやのおむしやもの　【二人】両方打込二挺(てう)立これハ【鼠艸】と【無骨】が相打たが

ひにうんとのりかへれバ（垣根をそつと窺守り〔五ノ七〕）そんならおまめでおふたりさま【猪】只今までのふたりが御禮【若】わけ里さんへもよろしくへ【五】御禮に及バぬ落付く先ハ【若】みのたよりで【猪】御しらせ申さふ【五】まづそれまでハ【若猪】來春（らいしゆん）の後扁（こうへん）〔下やしきの門まへり〕チヨン〳〵

傾城買談客物語　尾

傾城買談客物語

後叙

娼門を劇場に比して見れバ彼に大道具あり是に紋日の大仕掛ありされバ娼婆が眼玉の黑幕ハ色変の二階を客留茶屋が簾に賣切の札ハなけれと大門を打大盡あり將舗初の蕎麥ふるまひハ聊俳優の絶句に等し八朔の白無垢も女郎の胸の中がへり惚れた切たの早變夜廓しらする鈴の音ハ拍子木ならぬ清攬に又晝廓を引返しの幕明富本十寸見の一曲名見崎が高調子ハしかも此廓に止る予がおゐらん式亭主人例の居續の歸去來に青樓の樂屋を探すなハちいなりまちの予に跋せよと云予お先眞黑闇試合の事なれバ唯贔負連の引ッ立に板本の大入ならん事を神かけおたのん申んすと云爾

式亭門葉　樂亭馬笑跋

跋

夕アの床に行水と断て朝の風呂室にひやかさせ浴衣染の意氣路あるとも振新ねぶつたき小紋ハ着ず禿が髻の針うちもいつしか癪の手管を見習ひ三蒲團に身を投させ胸つくしに首を〆て和らかきころし文句れ太平を吐く酒客も一文錢の吝坊も切て出す生爪にれいかでか夜具もせざらんや其敷初に式亭主人言葉の綾や錦をつゞり仕立上たる折はしの紙半襟の繍目もしらぬ野暮なる予此書をぐるくる素見して忽ち見立の悟道を發し引過ならぬ暗闇の恥を秋葉燈の明輝へ出し何か醉道しり顏にしかいふ

鈍々亭祭和樽識

後叙

聞說ましでもおつせんとハ鶴樓の俚言にして相應ざんすとハ玉樓の確言也しかハあれど水道尻の光る螢にハいはかぬ思ひの胸をこがし中田甫の蛙に針をさして客待宵をかこちあるハ見返りの柳に三曲の道の隔りたるを恨こ日本堤の雪景色も黒塀の内に見殘すなど方食の言の中にもおのつから花實の余情をとゞむる其あらましを式亭主人が机上に筆を走て書盡したるそのしりへにハ天窓をかくより外ハあらじ

戲友　十返舎一九

志情賢似渴

序

花は盛りの中の町、月は隈なき茶亭か樓上に而已見る物かハ、怖異見する令堂の泪の雨にハ、むなしく配所の月を乞ひ、勘當の身は華よりも、散しほれたる姿こそ猶哀増りて、娼妓の情も深からめや、諸譯よし田の兼好もどき、つれ／＼なる予か草盧に、おとづるゝは誰そ遊里山人例の小冊を著して。序文を乞ふ彼馬をさして鹿といへる秦皇の伴頭ならで、花孃をさして馬となす、意氣地の地乘、手管のかけ引。しげ／＼通ふ足のはこひに、心の駒の手綱ゆるさバ。茶亭亡八樓の。借にはめられ、鐙ふんばりこたゆるとも終には己をあやまたん能乘る者ハ必

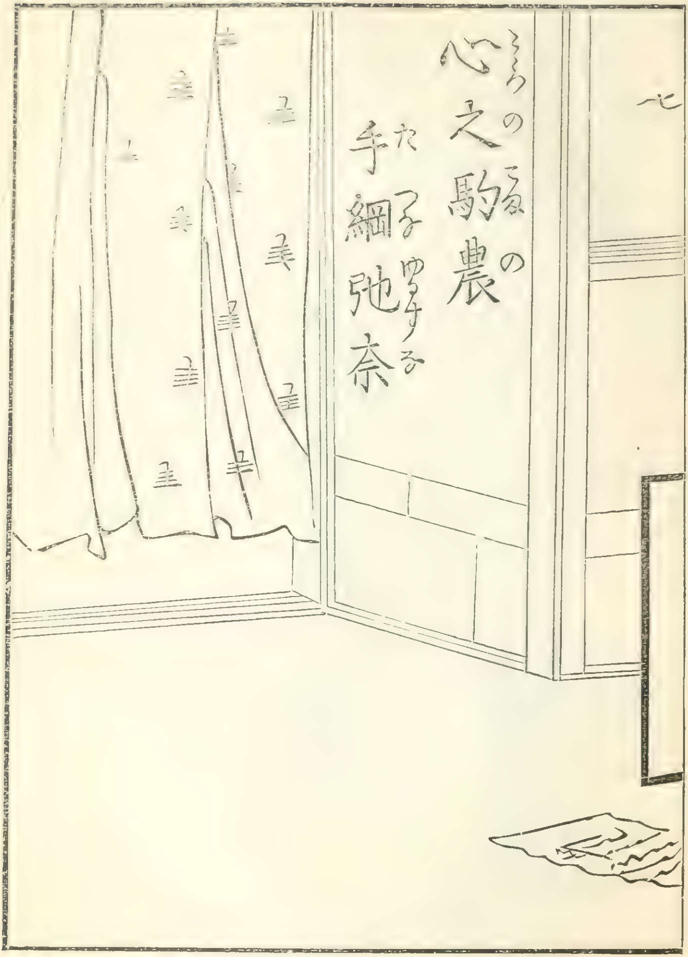
ずおつ落ると傾城も又鞍變さるさある時は小栗本間の達人も一トむち當て檀溪へ走るべし今此傾城傳受を閣するに口舌ひぞりの曲馬はおろか鬼鹿毛といふ手怖き買婦も一鞍に乘靜めん事文中にツレあるぞへ〳〵と下手なおかるを見るごとくお厩厩輔非番に代ッて遊好山人序ばかりしるすとしかいふ

序

契情に實なきと堅く覺へる乖巧あり亦功計僞なしと思ふ運盡あり無しと思へれあり有と思へバ無が故倡妓人の懷を我ものにして苦を越る事水虎の屁のごとし是に迷ふれ其本へ屆ざるゆへと明理を說開すればまた冷咲あり是を雙一ッ蜒と雨落の蜿砂にたとへ口にれ聖賢の尊きを吐き高傲をするとも花娘の虛實だに知りかたき鴑才なんぞ衆人の心に通しん事をやヲ、可咲と片腹押てやつと筆をとる事しかり

はつ春

心社心迷須心哉


心之駒農
手綱弛奈

催一笑
遊里山人著

契情買心得

はいかひ高点集に〽人ハ武士なぜけいせいにいやかられといふ句ありなせとうたがつたるハまつたく武士をきらふはかりにあらす貧して大つらをこき富て切れ放れわるく朝に愚痴を嘘夕に淫薄ゆへなり都て此くるわ貴賤にかぎりなけれハ尊を尊とせず利あるをもつて尊しとす故に契情の心をさぐり見るに馬の心と同ふして客人の氣を察する事妙也喩ふるもおそれあれとも馬術悪敵ニ天地父母ノ手綱ト云有父ハ制シ母ハ救フノ意味亦中傳ノ正中五方ノ鞍ハ我躰前後左右ノ釣合ニシテ鬼ソ拳ヲ以テ強クシテ強カラズ弱ヲ以テ強キニ勝實先師ノ教謹テ可敬也り馬にまたがるもの智愚強弱ともにのりやすくしてのり人まれ也借馬のむかしより上手氣にしハ人なそしり噂咄事皆氣分の上手にて其師手に合ふふらミ闘す大功を不辨さいわごと悪馬にのおれては非をしふす女郎をあつかふ事同意にして虚を制し實をいたハり進方茶や若者やりてはうはい女郎此左方の釣り合をかく時ハひやうしに落合ふ時に側よりあしさまにいへハついに引かけそはたかるもの也そのところを切ッてはなし釣合を直し男氣をもつて強くしてつよか

らずの場也又女郎の心を論ずるに

一　ほれたるハいかなるもうちべ

一　中くらゐなるハにぎやか

一　いろ事あるハ出入しげく

一　うハ氣なるハあきやすし

一　欲なるハしつふかし

一　慳なるハ意氣地有て手なし

一　しづかなるハいきちなくて手あり

手なくしていきぢ有情ふかきこそまことの契情共云ツへし此意味をよく〳〵かんがふべき也今世上のうぬほれ客の風俗を見るに客の客たるをしらずたま〳〵女郎の氣に合たるに出合へハ我上手故おもしろく乘合たると思ふともがら多しさにあらず此所にいたりてハ手の有無によらず男の善惡にかぎらず向ふより手引するところ方思ハずおもしろく思ふ事のり合よき借馬のごとしいかなるおつとりの難妓たり共相對する所よりハおもしろく思ひ思ハするこそ眞の上手ともいふべし

初會上中下三段の定辨(ぢやうべん)

上の定詞(ぢやうし)　客　女郎

〽六百番の哥合の哥に〽浪のうへにうかれて過(すぐ)るたはれ女も頼む人にハたのまれぬかハかくはかなきものなれども實(じつ)に心をかよハす人にハ通(かよ)ハする人情(にんじやう)也されバけいせいとて同じ人なるべしそのあらましをあらハすに

【新造】おいらんへまんまをおあんなんせんかへ【女郎】たべたくねへからのおれにかまハすともなんぞ持て行てたべな【新造】おありがたふだんます【女(ほうは)郎(い)】ちつとおはなしなんしなし【女郎】客人がきつきからねておりィすよ【は(ほう)い】きつひいひ譯(わけ)さはやく行ッておたのしミなんし【女郎】しりィせんよトいひながらしやうじをたてすぐに奥へ行くねなんしたかへいつそねふつたさふな眼(めゝ)でだんれす【客】眼(め)ハねる氣かしらねへが心がねへへハナ【女】その口をおわすれなんすなへ少しでも眠(ねぶ)りこれまでよくすぐりィすにへ【客】くすぐらふ〳〵と思つていつかねてしまふをおかしからふ【女】イヽヱなに目ハさへきつておりィす【客】おほかたひるまねたらふおつらさ【女】ナニばからしてねこくねへから【客】ソゥ氣をおかずともねるがいゝおれも親兄弟もあるものだめつ

たな事をする事じやァねへよ「女」むりにてへよく寝せやうと云ィなんすのかへねたくハおめへさんはかりねなんし「客」ッゥ寝せたかつてもねやァしねへ「女」たれかへ「客」おめへが「女」ィッッむりはかりいひなんすにくひのふ「客」にくかられてさへだからかわひかられたら「女」うるさからふといひなんすのかへ「客」いゝや心かかけおちをするだらふといふ事ョ「女」なせへ「客」心といふ實事師がゐてさへだものを無[か][子]どのやうにまよふもしれぬのさ「女」おめへさんのやうな女郎しゆにばかり氣をもませなんしさふな人にもまよひなんす事がありィすかへ「客」おれたとつて人間たものをまよハねへでとうするものだたゞしおめへにハまよつてゐるひといふおふれても有たかへ「女」おふれがなくッてもまよつてくれ人ハだんせんがね一度や二度ならまよハせねへほうがいゝとお觸か有ィしたハ「客」おめへにか「女」ィ、ヱおめへさんにさ「客」氣のはらねへ時にハよく茶の出るものよいくらてもいひなせへ「女」ワたくしか心をよくしつて御出なんすよ「客」しらねへでどうするものた何ゝとか思つてる身でハの何ゝの氣もなくいハれる事もァ、いつたかうそか誠かと氣をもんでかんがへるものをちつとハしれそうなものさ「女」何とでもいつておなぶんなんしそれだからじれつてへ「客」そうしれつたがる事ハねへハテすいたものばかりくれハよからふかたまにおらがやうなものがく

るから苦界といふものだ【女】アイおめへさんのやうな人が御出なんすからつとめの邪魔にな
りひすのさ【客】コリヤア一番聞キところだおらがやうなものがくれバ女郎衆の風俗てもわる
くなるといふのかへそんならい丶かけんにうつくしく生れて置たがい丶おれがからだでおれが
ほれるにさへしゆうにならぬといふもほんにま丶ならぬうき世た　トすこしむつとした風にてうつむきたばこをつく【女】ツ
リヤアたとへ風俗がわるくなつてもこ丶ろからだからたれもうらミハしイせんが子どうでおめ
へさんのやうな客人をとこの女郎衆でもよふからたゞハとをしイせんすれバふかく御出なんす
所も有イせふと思へハはしたねへ事をいつてさげすミなんすもはづかしくどのやうに思ひイし
ても及バねへ事たとあきらめておりイすのさ【客】人に一ツぺい手向て氣はづかしひ事を丸む
きにいハせておひてあきらめたとにげ口上でハ不承知だころすともいかすともはつきりとした
所を聞かぬ中ハ十日が廿日はつか丶三十日でも歸りやアしねへ【女】そんな事をいつてうれし
がらせなんすおかたくしハとうともおめへさんのすきになりイす氣だが子おめへさんうそだか
らかんにんしろハなりイせんによ　ときかハにきかほにてにつこりわらふ【客】歯から外へ出した事ハ此世おでんぐり
かへる共一寸でも引いじやアねへ【女】きつとかへ【客】手めへこそだれへでもかうして上ま
すのたらふ【女】イツツはらが立ふまでつとめをしてハおりイせんハナ【客】じつと顔を見て　こんな顔

をもたずともいゝ事に【女】だますとつミでだんすにへ【客】ばかをいへこれ【女】エ、ト屛風をひやうしまくのごとく引くやゝ有て（女郎のこゑ）〽いつそはづかしひと（かほをかくすやうすニて）ほんに此口でいくたりころしなんしたへ【客】（こたへて）手まへか此かほでころしたかずとりほどさ（トかすかにきこゆるまもなく）茶や迎に來たれどもしバしまたせしゆへ下へ行上へあがり見れども大かたハねたる所斗にてはなすべき所もなくらうかのれんじへこしをかけやつと目のさめたかほにてやミとあくびをしてこの内いついく日のやくそくかたくしてやう〳〵かへす也女郎らうかへ出てハほれるほどおちつきかほのものにてこゝぞ至ッての美味故に爰にて身をはたす輩多しつゝしむへしかの付合の句ニも

〽けいせいにほれられている身の行衛

此所かへり見てよく〳〵考ふへき事くハしくハ末にしるす

中の定詞 客 女郎

〽續千載集の哥に。〽露はかりかけし情もとゞまらずかれ行中の道芝の艸。此哥の心迄もなくいかほど情をかけるともかよふ内ばかりにて其跡ハしらぬ顔をするもの也そのあらましをあらハ

すに

坐しきおさまりとれへかこそつてめしをくひめん〳〵のたくれへものなそをかふろにとりにやり又此風の女郎ハ心もとなく思ひて自身にとりに行その折しも屛風の外よりねなんすなへまんまをたへて今ちきにまいりイすなとゝすて詞をいふて行されバめしすミたれバ直に行くかと思へバへん〳〵とやうじをつかひいらざる人の客のよしあしを云て時をうつしそれよりかれこれしまひやつハりやうじをくハへ何かいそひで来た風にてさしきへ入

【女郎】ねなんしたかへ【客】ム、とろ〳〵とした【女】たはこの火ハ有いすかへ【客】（手をかさして）見てイ、ヤねへさふだ【女】おだしなんしとつてきイせふ（行かんとする所へかふろとたりかゝるゆへこれへ火をとりにやり程なく持てくる）よくきへねへやうにいけてくれハいゝのにコレサあとをよくたつていきやヨ（是ハこんたんを人にきかせましきにてハなし何か食物がある故猫をおそれて）（の事なこへ〔illegible〕〔illegible〕田さんと〔illegible〕）ヲヤ此きせるハどうかしたさうだちつと紙をおくんなんし（其紙を少サく切かんくびへ敷そのうへよりたはこをつ〔illegible〕）（〔illegible〕じない〔illegible〕）よく寝なんしたネ（トしら〳〵しくいふ）【客】てうどよからふ【女】ナゼへ【客】きやく人が来たからサ【女】いつへはからしひ【客】そして何をしてゐた【女】（くそにもならぬ事をながはなしたしていた共いへれず）わつちが客人の連衆が来たからしらぬかほもならずかほを出したらむりとめをして大きにこまりイした人の氣もしらんで（ト□□をと わり□□込□□）もつとあつためておくんなんしつめたふおつすかへ【客】（のろけれバ）

イ、ヤ【女】どうもぬしハ見申シたやうだ子どこへなじんでお出なんすへ【客】ナニついぞこつちへきた事ハねへ【女】ようかしこねへふうだぞ【客】これもあんまりむりだらふ【女】たしかになじんで御出なんす所がつがうがわるくッてそれで御出なんしたらふ【客】おれもそへだからそうだといひてへがはづかしひ事だが是にやァこまりの天神さまだ【女】ほんに今時の客人ハ女郎衆ハはたしだわけてわつちらなどハ客人にだまされてばかりおりいす（大なうそに一盃の間違のなるべし）【客】おめへがたをかくやうな氣つよいものが有ならおれが所へしらせてよこしなあしばねをなぐつてやらふ【女】モシヘ直にある子【客】ソリヤァどこに【女】ぬしの眼にハ見へんせんかへ燈臺本くらしだぞ【客】ア、ァあつちの色男か【女】あつちのとハへ【客】コレそんなにしらを切たら行しほが有めへぜ【女】むりにやりたがるもいゝね【客】ハテやりてへ事ハねへが思ひ思ハれる中じやァてへ／＼まちどをひ物じやァねへそれをやらねへで置くハ思ひがおそろしひ【女】色男のなんのとそんなものハおつせん子また客人か有くらゐならぬしたちのやうな如在のねへ人にかくしだてをしィすものかな【客】そんなら客ハねへにもしてやらふが色男のめへ立を見てやらふ（ト入ほくろを見にかゝる）【女】そんな物ハおつせんコレ見なんしきれいな物だね（ト右の手斗見せる）【客】こつち斗リでハふせうちだと（左の手を見るにけした跡二ツ有）是リャヽ何ンだ【女】こんなけしたの

さ【客】なるほど大きなつミだ死（しん）でもぢごくだぞ【女】さミのわるひなぜへ【客】つミもねへものをツヽ火あぶりにするからさ【女】むかふでもするから五分〳〵さ（此所にて少しきミわるく言わけかましくいふ）【客】何もそう思ひだしてふさひでくれる事ハねへ【女】ナニふさぎハしいせんが子ほり物なとをしてあたなもののとさげすミなんせうかと思ひ過しがしられてサ。モウどんな事でもほりものなどハしィせんからわらつておくんなんすなへ【客】なるほど手の有女だ【女】ばか〳〵しひ手とハどんなものだへサアおしへておくんなんし【客】もヽんぐハア（両手をかざしこハひかほをして見せる）【女】これふおすそれが手と言ものかへ【客】いかにもかふ化（ばけ）物のまねをするにも只（たゞ）もヽんぐハアしやアどぬけるからかふ手をかざせバ化（ばけ）ものらしひといふも手のわざだがおらが手ハしんだいぎり出した所おこのくらゐなもので是ぐるミ心がおしへねへじやア手がはたらかねへ又おめへがたの手ハかくへつなものよまづこれやの客ハいやだと思つてもかふ一所にねると手がひとりでにせなかへのつたり枕（まくら）の下へのめくりこんだりまたそのうへにどふいふひやうしの時か其手のさきでつめるかこうれしく見るといつかねて居てのひがなれつこになつてはたらくのさ手の有といふ事ハ是をさして申なりイヨイハアヽホウ〳〵何とちがへハ有めへ【女】ソリヤア大違ひむかしの事さ今ハこつちばかりほれて先でいつかうなもおかしかろ（トしゃ目て見る）【客】ソシテほれ人かありやアどうす

る【女】ツリヤァその時の事さ【客】おらァそのやうな氣の長ィ事ハきらひだ【女】それたつて初會でどふなるものかなきなさつたうへじやァどうともわかりィせふ【客】そのことばをわすれめへによ【女】マァきて見なんしいつそくとひ　トつめる【客】アイタヽヽ

是よりしバらく無言にてほどなく夜もしらミければうらやくそくもおハりかへる時らうかよりはしごの下へおりる迄一坐有てもかまハず二三度も引廻しさゝやききつとよ〳〵をよくいひたがるものなりこれハ女郎のつねにてのろきハ是にて身をはたすありさてかの古人の發句に

〽うき草やけふハ向ふの岸に咲

此心をかんがへしるべき事なり委敷ハ末にしるす

下の定詞　客　女郎

〽萬葉集の哥に〽目にハ見へて手にハとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありけると詠りけいせいの身のうへにハあるましくなれども眞にすかぬと思ふ客にハ眼前にありて此哥の心に叶へるもありそのあらましをあらハすに

一ッたい坐しきの内一坐の女郎おかしき事ありて笑ふとも少しも見むきもせすしどうむごんにてそれよりざしきおさまりゆるりつとめしを喰人のかほさへ見れバ客をわるくいひてこんな時だれさんがくれバいゝとらちのあかぬ事をいひだん〳〵夜もふけ人の所にもゑんりよあれバ今ハぜひなくわが部屋へ行見れバむつとするゆへ又たばこの火を四五丁もある所へ行く程手間とりてもつてきていそきもせぬみをもよき折と長〳〵と書しまへバぜひなく床へ入

【女郎】なぜねなんせんへ【客】おめへのくるのを待てゐた【女】きつひしんじつヶ【客】がうぎにこんたんなみをかいたな色男にハうききミをやつすの【女】わつちやァ色男だの色事だのとぎんないやらしひ事ハきつひきらひさ【客】こいつハきつひのだ【女】きつくッてもいゝ所比[illegible]【客】来るとモゥねるぜマァおきてはなさねへか【女】いつそしつこひョ人といふものハねふいものかねふくねへものかね【客】（野子おもいれにこゝへに）これハ大事なことのおたづねかの古人の句にも草も木もねるにけいせいほとゝぎすッ、テン〳〵なんとおもしろからふが【女】ねつからおもしろひ【客】とんだ世事のいゝ女郎衆だ【女】ぬしにほめられたハ何よりだ子【客】なるほど気のきいた人情だ【女】なんだとへ【客】人情もたかす屁もひらすといふ事よ【女】大きにおせわいつそ苦労せうだね【客】（中車が善色にて小こへに云）ハテ袖ふり合すもたしやうの縁ことにハかゝ

のめうとの盃緣あれバこそ一ッ横せめてくるわのうちばかりもせわをやきてへおれが心夫とも又せわになりてへ心なりたとへ千兩二千兩でもむかで小判ならいとひハせぬハへ【女】いつそきいた風だよ【客】コレおいらん是でも氣に入ラねへか【女】おいらんなぞといつておくんなんすな（此所にて眼をむりに明てむりにねふる思入あり）【客】ハたやの二階を見るやうにッゥひん／＼する事ハねへきいたのきかぬのと道成寺のまく明キじやァあるめへしハァ、こいつハお寺にいろ男がある成ほど手前にやァ坊主がそうをうだなぜといゝや手まへの顏がゆうれいが西瓜を喰ひてへといふ齒だせ聞やれそのゆうれいが何で出るかと思へハ硯箱の引出しへ錢を百のこして死だからうかまれねへとよはかねへゆうれいだの【女】ぬしハおてらのめしたきだそうでゆうれいとちかづきであらつしやるよ【客】コレ／＼そんなにあつくなつても上齒が一ッ間ほど前へ出てゐるからはぎしりハ出來ねへぜ【女】手前だの何ンのといゝ客のふりをして棚おろしも氣が強ひ【客】ナニ棚からおろすのなんのとそんな手おもひのじやァねへうそならかゞミを見や仕切出居しにやつてもなき／＼二分ハおほつかねへにいゝ女郎のふうをしておやかたをそまつにしねへがいゝぜハァ、生國羽生村だのとうれていゝ女の氣だその心ハかゞミを見た事があるまへ有がてへ御出家に御加持でもしてもらやひよつとしたらいゝ女にならふもしれねへ

此所ハ一生きゝ付ヶこれをせいしもはや夜も坐もしらけてかへるなり是もあらだにてざる時ハかへつてしんとなる事もあるもの也まつかくいふ時にハ行かぬがましなるべし

かい附合の句にも

契情も欲氣を去れバわか心

故に善悪うごきあるなりおそれ考ふべしくハしくハ末にしるす

右初會三段の定辨も此外問ふによりていろ〳〵答もあるへくなれどもまづ惚たる所の定詞常ある所の定詞ふられたる所の定詞上中下にわけてしらしむる

上定る所の詞ハ實情なり此客に余念なく惚たるなれバ此女郎いかほど手ありとて内はなもの也はじめ是もかければついにハ死ぬ事もいとハぬ物にて身を果すのもなる客也またはじめの中となきからなべハおもふやうになきさやくと我壹人氣をもむやうに覺へうらむ所よりうすくなる也又この類ハかれにわるくこれによくするゆへに上の字を返せハ下といふ情にうごく所うたかひなし

中の定る處の詞ハうそを商ふけいせいの常なり中ハ口に棒をつらぬき上より見ても下より見ても同し事にてこのごとくいかなるいろ男たり共少しも惚る氣なくいかなる醜男といふ共いやと

も思はすされバ男の善悪手の有無によらす惚たふりをして小遣ひをもらはんと思ふ心ばかりにて少シもうごく事なしかふいふ女郎にほりものは多くはなきもの也たとへ有ても至て爲になる客か時によりさしつまり夜具の無心なとのときほりものゆびなと切る也又年ゞ明まへもあれや是やの差別なくたゞ金の有ル人には金にほれて女房になりたがるものニて是らを心のしミつたれともいふべし

下の定る處の詞といふは其又實情也契情迚其本を尋れは七夜に付たる名はおの字成るべしされバ同じ女すきふすきはあるべし尤の事也如此女郎ははじめの女郎のごとく好たるきやくいやな客に心をあたれし又客もわるくされしを腹たち大かたはおろすもの多しこれはなれだわるし尤女郎にはおをあたへるやうなれどもくらやミのはぢをあらはす非なり又はいかほど理有ともやかましき客とか人柄あしき客とか評すべしされバ其見世先は通りにくきもの也おとなしくたしなませやうこそ有べき事又女郎いかほどあしくするとも少しもかまはす實を盡しかよふ時には打てかはつてうちとけかへつて深くなるもの也ゆへに下の字をかへせバ上の字となるうごきある故上下の辨は別ておそるべきなり中の辨は誠に板彫でおしたる所の詞少しもちかはす故に是へ上下をくはへ上中下三段の辨と定むる

契情買五ッの慎事

一 第一が 其心を乱さず
一 第二が 其身を乱さず
一 第三が 其業を乱さず
一 第四が 其儀を乱さず
一 第五が 其家を乱さず

如此慎の第一とす心の一ッミだるゝ時ニハ跡の四ッハひとりてに出來揃ふ事恐るへし爰をよく辨へたま〳〵行に何のくるしからずそれを女郎かひに災ありと地女をせゝくるのすましかほれすへに害ある事をしらぬはかりなり（大馬鹿をさしていふ）また若き時人にすぐれて馬鹿をつくすあり年よってまつハのけらんとして思ひやりのなきものにて又ハ口へあらハすともおらもわかひ時ハどらをしたが今のわかひものゝやうしやァなかつたどうも今の風ハわるひなどゝ手まへかつてをよくそしるものなりされバ其身たちも此つゝしミを守りたるかと思へハゆへなく心をミだし親兄弟に苦勞をかけ夏ハ蟵なし冬ハ夜着なく分限もなく大酒をくらひ翌日ハこれがた

めに作病をおこしまたやぼながらも女郎によく思ハれんと思ふ所よりハその時のはやりものなどをきたるべしされバそのおりふしもとしよりたちの氣にかなひよき女郎買の風とてほめこやすべきやそふハいふまじくおのれがした事ハ何もかもよく思ふハ愚者のならひ也此類いかほと女郎買をなすとも人に害ありて益なしたとへめん／＼ハかき時はたらきありて五ッの愼をやぶらざるとも人に智愚強弱あれハ十人よれバ十人ちがふなりされども志すところハ同じなれバふはたらきものにハ異見を加へべきにわかきときの事ハ誰もしるまじと思ふて利口らしき事をいふと誰かこれを用ひんたか／＼の中の定辨を大もてと思ふ類なるべし評するに足らず去ルによつて予が手引く所の意味よくこれに通じ切れはなれをしるべしはしめ上の詞にて惚られたるハよく／＼了簡すべしとおしへ又中の詞に虚なるをうそとして下のあしきに近よらず虚かへつて實となる災ひありと三段共にいましめざれバいづれ行かぬかたなりといふやうなれどもさにあらずわかきうちなれバ此意味をわきまへて行べしとしよりハ側からせがむとも行まじく年寄とて死ぬ迄は色氣はなるゝにあらざれどもいかほと思ふ共向ふにてふせうちゆへおもしろくなければ負おしミにりきんだ口をきひてゐる事是もハかき時金銀をいかして遣ふはたらきものなれバいか程としよりても女郎せうちするもの也又身をつゝしミ是に近よらずともその人情に通

すれバ若きもの女の爲に身をはたさんとする災ひもこれが異見をする時にハよく止りきくとかく金銀をいかしてつかふ事をしらねハ女郎買の醉〻に落入事なげかハしく尤女郎買の金とて別にとりのけてもなけれどもひどきつがうして行ときハはたしてかねが死ぬものそれハ直でなきゆへの事也父貧福とも廓の金にハつまるならひなれバずいぶんと不義理をせぬやうにいろ〳〵やりくりて行べしまたふかくなりてハたがひに壹ッもよき了簡ハ出ぬものなれバとかく此おしへを守りてその本をかんがふべきなり何故といふにたがひに此世ハおろか來世までもはなれまじくと惚あふたのなれバぜひなき事是も神〻のむすひ給ふ悪縁と親さへゆるさバ女房になしびんほうして見るまゝこゝに心得の大事あり何といふに女房にするまでに家をぶんさんせぬやうにすべしそれハどうなれバまづ十たびあふ内に五ッたびハ只あつて斗り歸りその余ハみのおとづれにて事濟すべしそして折ふしにあがらバたがひにこかれたるところなれバうれしさおもしろさミも十倍なるべしこゝを片時あハねバ心持をわるく思ひむり酒など呑てやけをおこしかんじんの女房にする時ハてびあミかきニてつまらずよつてむふんべつもおこるもの也これミなもとへとゞかざるゆへ也年明までなかきやうなれとも明てからハ一生なりされバミじかき年季の内斗り月日ハ有と思ひながき月日にその身たちの苦しむ事を辨へぬやうなあたな氣にてハた

とへ金ありてうけ出し女房にするともたがひに直にあきる事うたがひなし故に此五ッのつゝしミ三段の意味をよくわきまへ行ときはほどよく又人情につうじ老てもおらが若ひ時はといふ句は出ぬもの也可レ考

理　哥

〽傾城の文字を目あてに買ふならバ
　小家といへどあぶなげはなし

〽ふられてもせくなさはぐなはら立な
　そこの一夜をおもしろく買へ

〽内の首尾世間の首尾をとゝのへは
　しぜんと先のしゆびもとゝのふ

〽あひかたがたとへいやでも一夜ぞと
　ほれたるやうにはなしあふべき

〽少してもその圖〳〵とあてかへば

活たるやふに金がはたらく

法　定

一　己惚一切致間鋪事

一　安手決而致間鋪事

一　連之事悪鋪中間敷事

一　坐鋪済　一坐之床へ行長咄致間鋪事

一　悪忌ても夜中ニ帰といふ事

一　亦は仇ニ悪さを致間鋪事

一　女郎を儀理詰ニ引中間敷事

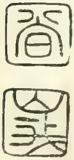
大通流跋

右之條々於相背者

梵天大借次第驪盡惣而日本極通大通之人器淀藤屋（淀屋虎五郎是 藤屋伊左エ門也）

兩通之根元從紀文大通人可蒙赤耻者也仍而起請文如件

是茂雅梅契向述



郷の離

二筋道後篇廓の癖序

いてや谷峩先生の流義ハ身を固ふする事を主とし手を知つて手を不レ書以迷喩迷の教も未至の危は屛風の中の蒲團に手管せんと或は足らあるい四ツたとへ合臥になるともひきわけらるゝのむた骨折に親父の腹立付る種となるを患ひ其手ハ喰ワぬと身かまへさせんと計はいかにと梅暮里親方は能人のこゝろに通し能善に導事側觸の評判にも是を大關とやいはむ予彼か褌しを脊負へは衆人廓の遊興に怪鍛のなき事をとしほ花に一寸きよめて序ス

文虫軒

觜角利述

序

なかき浮世にみしかい命夢て暮すの虚工こと伶俐の嘲咲を慚愧さらむや故に其惡夢を綴り捨んとすれハ僥倖成るかな書肆貘亭來て是をくらわんと乞ふゆへうむなしにあたふ于時夢覺生れかわつた未のはつ春

梅暮里谷峨自序

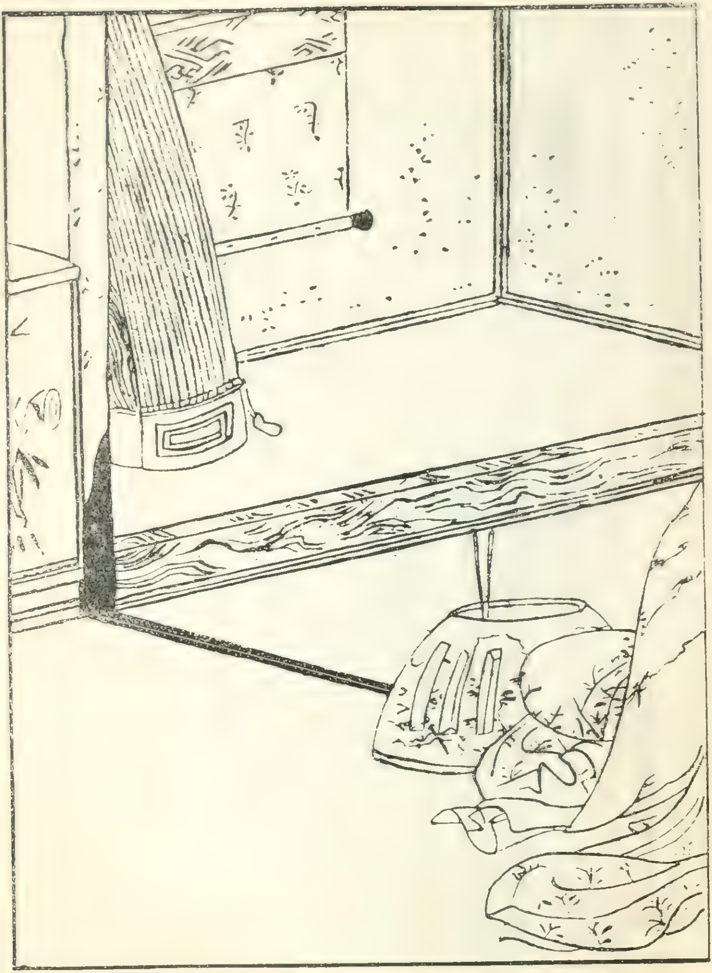
[illegible]亭

目録

○第壹　信宿の生疑
○第貳　將暮の愚鹵
○第參　功計の赤心
○第四　任俠の寸丹
○第五　離憂の夢飛

二筋道後篇廓の癖

四



二筋道後篇廓の癖

梅暮里谷峩著

○第壹　信宿の生疑　容　文里／女郎一ト重

何か更に物あんじ姿は身のうへの事にや片手ハだかれ合ふて水調子小聲にてめうとひき〽いて人は言のみぞよき月草のうつし心の色毎におけるも露のいたづらや　合（ひとへハ文里をしりめに見てつめる）【文里】アイタ、、、、〽男の余情束の間もうち捨られぬわきも子のせまきおもひは一筋になかれの身にも裏ぞなき　合方詞【文里】ア、どふした因果か片時も逢ねばならぬよふにおもつて來て見れはおもしろいはなしハ壹ッもせず只身のゆく末を考更に愚痴をならべるのミ今にあわれぬ身にならば其時はどふせうといろ／＼わるひ思案をする事もしらすおれがよふな不了簡な者ても親と思ふかして内へ歸ると子ども等が爺／＼とたまに逢ふゆへなつかしがりすれつもつれつよろこふ顔を見るたび／＼に胸ハいつぱいそれを嚊はいゝくさの色／＼の異見も腹を立はたつものゝむりとはさら／＼おもはぬ今ではおれが心でおれが自由にならねへ夫になんぞや面白そふに抱れ合ふての三味線ところでもあるめへかへ【一ト重】泣出し　よしなき私につながれな

んして何に不足もなきおめへさんを其樣な身にしいしたもそんなわたくし獨の罪おときさんもさぞ憎うおもひなんせうか勘忍なんしほんに是か惡緣とやらと（ヌじつと見て）おもふ人もおすせうが遠ざかる事は扨おき惚るに關もないがしてきのふにけふと積る思の堅なり切てもきれぬ二人りか中此上どふいふ世の義理で別れよふと言ひなんす其時は死ふとは兼ての覺語でおすけれどそふしたらおめへさんの顔が見られまいかとそれが悲しうおす【文里】ハテ泣事かある物か可笑らしい手前ひとりで惚て居よふな事をいふが今言ふ通り翌か／＼と身を責るも子にひかされるばつかりでこふしてなんのわかれる樣になれば手前ひとりはころしハせぬ三津の川も手を引あふてと淨るりでいふとふりさ【一ト重】ほんでおすかへかならす忘ておくんなんすなへ【文里】ア、ばか／＼しい今死かなんぞの樣に〽愚痴もまことの／＼からたまに便のない時さへも夕氣の占にやるせなき無理酒を過してもなんのたわいはない物をほんに氣かねや身の爲もあきらめやすいうちの事これ寐なんすか憎らしいあれもふほんに東雲の朗／＼とあけ行は猶肌寒ききぬ／＼のわかるればこそ逢ふもたのしき　チヤン　引仕廻

又もたかいにふさぎし折から一重番頭新造花の香客をかへした足にて一ト重が座舖へ入

【花の香】市さんハかへりましたよよろしくとさ【一ト重】もふ歸りなんしたかへかんにんな

んし手前にとりまぎれて市さんにツイおめにかゝりいせなんだ【花の香】ナァニ市さん文里さんのお出なんしたをせうちておすからなんともおもいゝせんがおめへさんがたの昔にかわる姿を見いしてまゝならぬものだと男泣になきいした

また言ひ出してハ泪のたね花の香は氣をとり直し

【花の香】ぬしハ寐ていなんすかへ【一ト重】ナニあんなに塞でばつかりおいでなんす【花の香】そふでもおつせうかへもしへ文里さん酒でも呑で氣をおはらしなんしなヘテ浮世の風ハ色〳〵吹いすわ【文里】花の香さんかんにんしなおめへに顔をあわせるもめんぼくねへ一ト重か事ハ言ふ迄もなくおれが事まで何かにつけ影になり日向になり世話になるのを心なくこふはてしなく苦労をかけるはあんまりな物ともおもはついつもかわらぬおめへの仕方おらァ拜んでばかりいるよ【一ト重】ほんでおすじよう中氣の毒がつて言ひなんすが私とてもそのとふり介にこそなるはほんとうなりそふいふ事もなく一トかたならぬ世話になりいすおめへさんを妹と呼も廓のならいかともつてへなふ思つておりいす【花の香】おめへさんがたは他人がましいなんの事でおすへおめへさんにつけられる時分も內所でも色〳〵言付なんした事もありいしたがとふいふ事やらおめへさんなり文里さんなり初からよそならず何事に寄らす身に引受てしいす氣

だがね心程には届いせんかマァ聞ておくんなんし市さんのもふしいすにはどの様な大臣も廓の金にはつまるがならひおれも不及ながら手前のつなかる一ト重さんの客ならまんざら他人ともおもわぬから何所のたしにもなるめへがおれがかしたといわずに手前の工面した様にかしてあけもふせとわたくしにわたしていきいした少でもこりやあ市さんの心ざしだからマァおめへさんにおわたしもふしいす ト十両紙包出 【一ト重】何ももふしいせん嬉しうおす此様にかされ〱世話になりいすも前世とやらからの約束でもおすがマァいつの世に恩を送られる事かと思へばそれが苦労になりいす【花の香】ヘテ馬鹿らしい恩にかけるくらいなら色〱に氣ハもみいせんわな【文里】市さん男氣おめへの實氣死でも忘ハしねへ嬉しいせ【花の香】また段ゝ身のうへを思ひ出してふさぎなんしてハわるふおすさあ〱一ツ呑ィせうと

側にありおふ茶碗引よせ手酌に青切つき呑 文里さんあけいせうとさす

【花の香】またいつてきいせうね【文里】またよかろふ【花の香】もふゝせめへだから花づるさんやだれかのみこしらへをしてやらねへけりやあなりいせんまつのちほどへと

出ゆく跡は大ふさき文里ハうけし酒をのまんとしてむせる

【文里】アホン〱【一ト重】だれもおしミハしいせんと と脊中をさする 【文里】もふのめぬからのんで

くりや【一ト重】なぜといゝなら【文里】あの子の眞實をかんかへると胸が一ッぱいになつて酒もとふらぬ此間も〳〵とて色〳〵おもふうちにも世話をやく女郎衆といふものは內所でもそれ〳〵にこゝろをくばつてつけるとは言ひながら兎角小やかましく下へのつとめぶりをして遣り手や何かとならんで向面になるものよそうかといつててん〴〵は相應に色事もかせくがおもひやりのねへのかマア常だかアノ子のよふな番頭新造といふものが有るものか今迄もさしたる事もあるめへにてん〴〵の客より貰ふ金も身に付よふとはしわせんで二タ人が苦勞をするを氣にして此樣に工面してくれるといふは山から里のたとへのごとく思へば〳〵おらたちほど罪の深ひものはあるめへ【一ト重】どふいふ事か花の香さんの事は言ひ盡されいせんなれども二階中でもむかふなつて邪魔をする物はなく色〳〵內證のやりくりまで身にかけて世話をしてくんなんすかほんに人の世話をすべき身てとはおもひゝしたけれども今じやあはづかしいともなんともおもひゝ勢んが中の町へも出られぬ身ゆへ引込て居いすれは遣り手衆や若い衆迄がヤレ雷さんの病だの何のと色〳〵あてこすりないゝす【文里】そりやあなんの事だ【一ト重】私にもしれいしなんだかねわたくしの着物がいつでもおんなし形りでいゝすを言ふ事でおすとさ【文里】なんだハヽァ雷のやまひなら北鳴だといふ事であろふ【一ト重】ほんにそうでおすしたそふ

あなどらるゝと思へばいつそ口おしうおすがまたいつか顔を見かへす事もありいせうとそれをたのしんでおりいすのさ【文里】手前もいゝ事をいふもんだつまりにつまつたふたりが身の上段〳〵つもるかけに茶屋も送られねへといふは幾度か是迄はやりくりをしてあがるよふになるとゞのつまりは可愛相に年季までいれさせ苦勞をまさせ當分はかた身もひろかつたかなんだつてこふ一チ日でも逢ねばならぬよふに思ふものなしても三百ばかりのふへるを茶やのふせうちもむりでもねへが今迄か相應にためにもなり折〳〵は拂ひもするしまんざら末は滯とおもひながらも二才野郎を見る樣におためごかしの異見もいわれず心づけては三度に二度は茶やで逢してくれたがそのよふに中の町へも出られぬ身にしたゆへそれもできずマアのけらんととめらるゝまでとこふきは來るものゝもふこのごろはだいぶむづかしくいふそふだしかし爰の旦那がわかつた者だから今まで悶もせぬけれど外〳〵の内でミやとふしてこふながもちはさせねへそれだけ了簡せねばならぬも何もかもせうちでいながらどふも逢ずにはいられぬもこれも因果だしば〳〵また藝者牽頭持抔に道であつてもこんな形りになつたを氣の毒におもふかして顔を見合せるとたゞにつこりとにが笑ひをして早足に行違ふむかしの事をおもふとアノ女郎はおもしろいの美しいのといふくらいなうは氣な事では此廓へははづかしくつてかたきし一ト足もはい

られねへ【一ト重】何かに氣のつき過る程なおめへさんゆへ人一倍せつなふおつせう能さつしておりいすそのよふに苦になんして煩ておくんなんすな尤内所でもおふきにやかましくいゝすが此間おはなし申いした權さんのほうも大方ハできいせう若できるとちつとハよふおすヤアこの金で二階の借をかた付いせうおめへさんもちつと持ておいでなんしな翌のばんからハかた身をひろくしいすそのかわりに翌はお出なんすなへ其様に塞がずともこつちをおむきなんしなコレねなんす事ハなりいせん【文里】よせへ【一ト重】またお時さんの事をおもひ出しなんしたのかへ【文里】なんの手まいのいやがる時分に切て仕廻ばよかつたに【一ト重】そのよふに氣まづい事をいゝなんしてもいつてかへらぬ事でおすしかし鉄さんやおたつさんとひとりならず二人までかわいゝ子をなしなんしたおときさんとの中その實氣の異見に引されなんしてそのよふな事をいゝなんすのかへそれ程切たくおもひなんすならどふともなんし（切れはあとで死といふなぞ也）【文里】大きなべらぼうてハござらぬかそふヲイそれときれられる心ならこんな身にもさせもなりもしねへそれともきれたくハ勝手にきれろ【一ト重】わたくしがきれるといへばきれなんすのかへ【文里】どふするものかしれた事よ【一ト重】そふハなりいせん【文里】ならぬもすさましい今きれてくれろといふたじやあねへか【一ト重】そのよふにいゝかけてもなんでもなんし

どふでお時さんのよふでハおすせんのさそのよふな事をおもふといつそ死たいと 側に有あふものあたりしだいなけほふる【文里】この氣ちがいめなにをする【一ト重】なんでもよふおすおめへさんの世話にはなりいせん【文里】此あまはふといあまだと たぶさをとらへ引たをしてくらわせながら 何世話にならぬとおれかこんな身になつたゆへ見くびつてうなァ世話にするをおんにかけるなそれといふが愛相がつきたからだィヽハ權とやらとんとやらも色男だそうだから牛に馬をのりかへろどふりておためごかしに翌のばんにかぎつてくるなもいゝ權もまんざらで呼客じやあねへとたび／＼耳にさわつた事もあつたかよもやとおもつていたが是でおもひあたつたそふいふこゝろとハしらずなかわいゝ子まで暑いめや寒いめをさせるぞよ此畜生めと

愚痴の恨のてうちやくにくやし泪のはら／＼／＼と／＼とうたれながらも聲立てハ文里が爲にあしからんと袂を口へおしあてゝかみしめ／＼泣しづむ折しも隣座しき中三吉野ハこの樣子きゝつけそふ／＼かけつけとりさへわける

【文里】マァうつちやつておいてくんな【吉の】まあ／＼おはなしなんしマァどふゆふわけでさんすわちきしにまかせなんした【文里】此よふな身になつたらはあいつにまでみくびられて色／＼なきつい事をいわれるとおもへば口おしいそれといふが色男ができたからだこんな物を

しらぬやつはどふしてもいゝ【吉の】猪才のねへおめへさんが私どもの眼から見てもそのよふに愚痴になん〳〵したハおめへさんひとりでハなられいすまいすれば假染の中しやあありいせんたとへ權さんとやらがいゝ男にもしなんしとふまあ見かへられいす物でさんす【文里】それでも此間中からおもしろくねへャレおときさんのなんのとおれか心にもねへ事をふしをつけて腹を立せたまきれにきれよふと思つていろ〳〵なたわ言をいふわな【吉の】モシへなんのはからしいそりやあおめへさんのまわり氣てさんへ【文里】イヽへとふもあやしい【一ト重】何かあやしうおすへ【文里】あやしいからあやしいハ【一ト重】いつそくやしい私かこゝろをしらぬかなんそのよふにあんなむり斗いゝす吉野さんもしつておいてなんすとふり想應に客人もおつしたかぬしと度〳〵おちあふきやく人ハツイろく〳〵いきいせんからはらをたゝせまたハぬしの事てあつかましいむしんもいゝすゆへあいそうをつかして段〳〵きれ今てハひとりも馴染てきてくれてハおすせん權さんとても何しによふきハおすせんか少しハぬしのたすけにもなろふかとゝりとめておきいすかうたくらるゝうへからハつきたしてしめへす【吉の】一ト重さんマアよふさんす遣り手衆がきゝ耳をしていゝす何もかもわきめへなんしてもひとつうたかわしくおもひなんすとあいにくいふ程する程の事がうたかわしくおもひゝすハおめへさんばかりでハ

さんせん深いも淺いもあるならいでざんすそれもそのよふに今でハくろうなんすゆへひがミもでへすのささら／＼むりとハおもいゝせんか深い譯でもあるよふになんでもねへ事にはらを立やい中もなをらすわかれなんしたらたかひに心かすミいすめへにへ【一ト重】そりやあそふでおすけれどけふ斗でハおすせん何ぞちつとおときさんの事をいふとあのよふに腹を立て打擲をなんすとふて邪魔になる身なら死ぬほうがましておす【文里】あれ見なあんな横車をいふ【吉の】ハテよふさんすわなそんなうハ氣らしい口舌をやめて權さんの方のむしんを早くとゝのへて互に氣を休めなんし【一ト重】私ハそふおもひゝすがもふ何かに付てわたくしがおもふよふにハおもひなんせん物を【吉の】ハテ鳴ぬ螢もなく虫も思ひハひとつでさんすわな又文里さんも何も根も葉もねへ事をふとうしてあけなんしな【文里】あいつがなんのかのといつてはらをたゝせるからツィいまいましくなるからいつもおめへかたのセわになるも氣の毒だ【吉の】アノヤはからしい何ンざんすなアレもふ引たそふだから仲人ハ宵とおいとまを申います【一ト重】吉のさんもふいつもながらへ

よしいハ枕元の屛風を建廻し出行跡にても元が根も葉もなきがたゞたがひのひかみより出たる口舌なれば中直りの酒といふもいらず手がさわり足がさわりする／＼べつたりといつ

か元の比翼連理となれりしかし作者も此畠でなければ色男がたハくわしからん扨屛風の中ハ言ハぬ事ツレ／＼ホチ／＼咄しがはじまると

引ヶの拍子木カチ／＼

第二　將暮の愚痴

禿のしらせに一ト重はさつそくミせの階子へいてもはや夜見世前なれば心せくにや座しきのこうしのかたへ廻し

【一ト重】マァよく此雨ふるにおいでなんしたね【文里】今夜斗ハ内にいよふといろ／＼思ひ直したがとふも氣がすまぬから一寸逢に來たそしてあの權のいろ男やろうハきたか【一ト重】アイサ晝からきいした色男ぶりをしてむねのわるい事斗いゝすを是もおめへさんの爲たと胸をさすり／＼合鏡もよつぽとつらいやくささつしておくんなんし【文里】そんな事をいふがたとへまんざらでも客がきたばんの時でもゆふしハいやましき客人にていとゞつらましくとみにやァ書たろふそれだから胸のわるいもあてにはならぬ【一ト重】アノばからしい己惚を出しきつていゝす物をだれでも胸がわるうおすは【文里】そりやあそれにしてやろふが金の事を首尾

よくやろふぞよ【一ト重】おめいさんがいなんせんと外に心はひかれず私が一生の噓をつきいす氣さ【文里】噓から出る誠ならぬぞよ【一ト重】文里といふ胸に大キな錠がおろしてありいすは【文里】あい鍵かまたおろしたつらでそら錠はあやまるぜ【一ト重】こセうでおすそりやあそふと鉄さんの虫氣はよふおすかへいつそくらうになりいす鉄さんあけ申いセうとおもつて菓子をとつて置いしたあけもふしておくんなんし【文里】まだ虫氣がよくねへからよしにしよふよ【一ト重】お初さんにあけなんしな【文里】あいつはまだあまい物ハくわせねへ【一ト重】おときさんの腹からでなんした鉄さんだがおめへさんの子だとおもふせいかいつそかわいふおす【文里】手前がそふかわいがるセいかおばさんの所へいくならおれもいつしよに連ていけととかく跡をおつておれをこまらせる【一ト重】ほんでおすかへかわいゝのふそんならこんや斗りでも早くかへつてあしたつれもふしておいてなんし【文里】手前がつてなものだのそふかへしたがる物をかへろふ〳〵（ひんとして　きにかゝる）【一ト重】なんの事でおすと（わたお　さいる）【文里】よしやな【一ト重】そんな氣にかゝる事をいひなんしておかへし申いせん【文里】こふはひねつて見るものゝかいろふよしかしあんまり口なぞを吸せる事ハならぬぞ【一ト重】あれまたいつそうしいしたへ【文里】ついていめいししれる物か【一ト重】そんな手かあれバおめへさんにも此

苦勞ハさせ申いせんけれどモウおかへりなんすかへ【文里】（二足三足行しかまた立かへり）かんじんの事をわすれたほり物を火葬にしてハうかまれねへゼ【一ト重】よふおすよとこへもまわらずにはやくおかへりなんしよ【文里】しれた事さと

またあわれる身なれ共名殘をおしミ跡を見おくりまたふりかへりよふ〳〵とわかれしかまたとつてかへし

【文里】これ〳〵一重【一ト重】文里さんかへ【文里】とふもかいられねへ【一ト重】そんならおあかりなんしと

いふもはや夜見世しらせる鈴の音から〳〵

第參　功計の赤心　客権　女郎一ト重

何か呼て文里を隣座鋪へ入一ト重ハ塞しよふすにて床に入

【権】とふそしたかこふきにふさくのまあ何をしていた【一ト重】（わざと手おもく）かゝさんがきいして

また【権】ヲット跡をいふめへせんとのむしんの事か（ひとへへうつむきたまつている）いゝわさ弟かとふらくゆへ

何かむつかしい尻の有る金をつかつたよつて是非なさねばならぬとお袋かいろ〳〵氣をもむと

やらそれにつけてハ年季もいれねハならぬとはなしのわけもたつている事たから隨分貸とおもつて五十兩ハ持てきた【一ト重】私がためにハ嬶さんハまゝかゝさんなり弟ハ連子ゆへどふも物がしにくい義理でおめへさんへ此よふな事を申いすもよく／＼とさつしておくんなんし尤しりなんすとをり前度のよふに客人でもあればおめへさんにハもふしいせん【權】こふいつちやあおかしらしいが今迄金で女郎をかつた事のねへが手前が日頃いつこくなこんじやうが外の者とちがつて面白いからはなしにのるそのかわりわけのねへ金は三文でもやられねへまたおれがいふ事をきくであろふな【一ト重】きゝいすからおはなしなんし

隣座敷にて文里エヘント咳をして一ト重にあたる

【權】マア手前了簡してミやこふばかのろく來るが是といつてなんにも手前のわかつた事ハねへぜ【一ト重】ハテ彼是とうハ氣らしい事をするよりもたかひに心と心の誓ひにたをこす事ハおすせんわな【權】さればさその賴にする心といへハ嘘をつくが商賣だ物を何あてになる物か【一ト重】そんならなんでしろといゝなんすのかへ【權】インヤ手前か不承知ならかれ是ハねへがよもや忘れハしめへやぼらしい言分だか手前手を一寸見せろといつてもそんないやミな事ハきらいとすれもほろゝのあいさつゆへあらたてゝ入墨のせんぎする元それなりに濟だかこんや

ハ一チばん流の身にも塵芥のねへ所をそゝきあげて水ぎハをたつて見せろ【一ト重】いつそくやしい【権】なぜた【一ト重】ハテよく／＼な譯なればこそいひにくいおめへさんにはしたねへ事をお頼申いしたから心まで勤をしていゝすがなんぞの様にうたくりなんすとおもやァ何にもいりいせんはらが立いすと（うつ向泣よふす世）【権】何もそふはらを立て泣事ハねへ利のとうぜんだ【一ト重】ハテよくつもつてミなんし都而盟をしいすのハたかひに心をうたぐるゆへきのふけふの中てハあるまいし何もわかつていなんしながらなんのかのとじらしなんすがはらがたつがむりかへ【権】手前がなんぼそういつても萬一の事が有た時後日にいゝぬけをしておかねへけりやァ外分がわるい【一ト重】それといふも金のむしんからおこつた事もふよふおす金もいりいせんと（こわ／＼じれたふりを見せる）【権】金を貸ねへからとてこふいゝかゝつてハうたぐりハはれねへ

一ト重ハしはしふさきし様子も常色仕立の客ゆへ定てこふいふ事もあらんと覺語なれば用意の髪剃を何よりかとりいたし何も物いわす枕へあて指をきらんとせしを

【権】是何をするととめる【一ト重】私か心の一トすじをおめにかけいす【権】（茶にして剃刀とりあけ）そんな事でハ指ハきれねへ／＼しら／＼しいやほをする事ハねへハテかわいゝ手前を兩方の指迄なくさせかたわにするもあんまり色氣かねへそして又起證の髪のともらつた處かこし張にもや

ほらしく人髪にもされねへすればゐきもねへ事だ夫かおれが望ハ外にある【一ト重】なんでおすへ【権】いやがる一ト重が手をむりにまくり此町所迄書てある文里二世の妻を消て明らかにおれが名を其通りほりかへてもらいたい

隣庭敷【文里】おれもこふおちふれゝバわるい事ハした事ハねへかどんなさいなんであついゝをしよふもしらぬ人の行末といふ物ハしれぬ物だその様なおもふと活てるこゝちハねへ

【花琴】ばからしいあわれつぽい事をおいゝなんすかへ

ヘ一重ハいさいしられし事また手をかへて

【一ト重】なる程腹も立なんせう今迄かくしいしたハ私かわるふおす是にハ段〳〵譯かありいす先気をしづめて聞ておくんなんしおめへさんのお出なんせん前より年久しく世話になりいしたが私ゆへ今でハ不都合になん〳〵したを今更どふも見すてられぬ義理マアしかたなしに前のよふにつきやつておりいすゆへ何ンとかおもふ物もおすせうかまゝならぬハうき世でおす

隣さしき【文里】なる程浮世ハこしらへ物たはやく悟ほうがいちの手だ【花琴】いまさら馬鹿らしい何ンざんすへ

【権】其譯をばよくしつてるはじめの程は手前もしんにいやがつたそふだが段〳〵世話になり

義理につまつてまんさらでもねへとの事ハ　ハテかくしやんな去年の春出た谷峩か作の二筋道よいふ本ハ手前か文里をいやがる處から迷ひ出した迄書てあるぜそりやァどふで承知で來るのだ　（此言ばへ文里不男ゆへとゝへつきださせる工也）　手前も廓で一チ二をあらそふ女郎たがあんまり智惠がねへぜ文里の文の字ハ尊か面をミてハ二文が物もねへなる程手前もよつぽと茶人と見へるぜ

隣座敷【文里】サァくもつとつきやノヽ【花琴】その様に呑なんしてハわるふざんす

ヘ一重もむつくとすれ共こらへ隣の唐紙をしよふたんの様にきせるてたゝきなから

【一重】いやらしい事を聞のもそれね苦界たとさつしておくんなんし【權】（一重詞の端くいかにもさぎりづくならんとのりがきて）さつした斗でハおかれねへ爰にいたつてハなんぼあんな男ても用捨ハならねへほり物ハいふにおよばつ手きれいにつき出して見せろそふしねへけりやァ落付ねへ

隣座敷【文里】サァくはなせ歸るこれはなせといふのに【花琴】おかへし申いしたハしかられいす

【一重】（隣へきこへるよふに）氣のみぢかいマァ爰を能組分ておくんなんし言憎ひおめへさんへいふむしんともしらず金ゆへおちぶれなんした文里さんを突出したといわれてハ仲の町へきこへても　私がはづかしうおす又おめへさんとても金ゆへ自由になんすと人の口だから評判かありいしてハ

名もすたるといふ物でおすすればおめへさんなり私なり心にもねへ事をいわりやうよりモウすこしお待なんしとふかしよふとおすセうわな【權】何もそのよふにかばいだてをする程氣か濟ねへかれ是なしに突出してさへしまへバいかにも此五十兩ハわたしてやろふ 幸こんやもきている様子だ何もあんな猿にそのよふに心づかひする事ハねへまあ能あいつが面を見や疱瘡跡だらけでほんとふの顏ハちつとばかりはつちやアでゝハいねへぜそして女房子迄あつてすつとはかねへ裏店住居の喰ふやくわづのお旦那ゐだせ何も敵役をミるよふにこうならべる事もねへが又氣をのこす事もあるめへ

一重ハ始終こらへ〱しがもはや此句に金の事も何もおもわづ

【一ト重】ひつきやう文里さんの事にいればこそそれ程おしい金ならもふいりいセん此うへハ何もおかくし申事もおすせん文里さんの男のわるいもお時さんといふおかみさんや二人迄子のある事も何もかも承知のうへでほれて〱ほれぬきいしたそれだによつて嚊さんの弟のとねへもしねへうそをつき義理をかきはづかしい事もかなしい事も又おめへさんのよふに己惚をたしきつていやらしい事をいゝなんすをしんぼうしてきくもミんな文里さんの爲になる金のつがふだとおもひすけれど假染にも文里さんの名へどふまあ灸がすへられへす物かへもふ〱

〳〵きくもけからわしうおす【權】手前もそふかたりが黒くつてハ行末がおぼつかねへもふ一ッたゝいたらどのよふな事をいおふもしれぬなんぼ綴〳〵の垢じミたを着たつてそふ心迄おちぶれる物かへあんなやろふはこつちでおさきに遣ふさへかいぶんがわるいにおさきに遣ふとハよつほとふとい物でハござらぬか余人ハしらず此權なとハそうハ虎の門だ（おいでハせけども／おち付かほにて）此うへハめつたにゆだんかならぬ紙入に此金も先こふ仕廻てとそれからこふ內懐へ入てちやんとしておくだと（じらしをいふ）【一ト重】私よりおめへさんかふとひといふ物でおす文里さんの男のわるいをミくびつてつきださせうとのした心でおすせう　私かよふな者でもそのくらいな事ハはじめからしつておりいすたとへどのよふな事があつても活て居ハ思ひきられいせん【權】イヤおれもあきれておへそと尻子玉がいりかわつて　雷　と川虎がまごつくぜなる程てん〳〵のすきとハいゝながら屎の虫も小金虫も虫といふ字ハ一ッなれどむさいときれいは屎と金金といふ字に引されぬ手前の心ハ　尊　か屎の樣な男に惚るハ蓼喰ふ虫よりよつぼとひねつて屎喰ふ虫もすき〳〵だが手前もふびんやからだがくさくなるだろふぞ【一ト重】なんとでもいゝなんしおめへさんにいわれると思へバ腹が立が文里さんの事でいわれるとおもやアまたこの上にどのよふなつらい事が有てもつらいともなんともおもひゝセんさらばかわいゝ男の所へいきいセう【權】モウ

夜具へ足がひつかゝつてもだれもかまいてはあるめいぞよ後悔するなよ【一ト重】跡の事はミれんらしく気をもんでおくんなんすなへ今いふ通りかわいゝ男の爲にはじかくのは苦界のたのしミでおすは

かくいゝはなし文里が方へ行しが扨隣に名代のきうくつをこらへしかひもなく互ひに顔を見合て

【文里】なんの事た【一ト重】サァはらの立いやらしい事をしんぼうして聞たかひもなふこふいふ事なら早くくればよふおすした【文里】ア、たゞさへやかましくいつてる所今度懸りがとゞかふると手前のしつてる譯ゆへいゝしほにしてもふあげねへすれば此二階もこんやが見おさめだ（ト雨八由をたしなめ文里を見ながら）そふすればいつあわれよふもしれぬ随分手前も豆でいておれが事も何もあんじる事はねへぜとかくおれがほうからいづれともさたをする迄はかならず短氣をおこしてくれるなよコレそのよふに聲をたてゝ泣てはわるい又積にさわろふぜんてへ手前は病身でわるい虫があるから灸をばたへすすへいつものお醫者の丸薬は忘れずに毎日呑ふぞよ【一ト重】（すゝり泣ながら）アイ／＼それでもとふぞしたらあわれる事もできませうかね【文里】ハテセかれるくらいじやァてへ／＼氣をつ●る事じやァねへ又一寸かほを見たくらいではかへつて思ひのたねだおれもど

ふで氣がすまねへから逢れぬ迄もこゝらをまごついているからせめて心やすい女郎衆が仲の町へてる時でもたのんでふみのつうろハしてくれろよ【一ト重】一ト夜逢ねば百日も逢ぬ思ひの常でおすにこよひわかれていつの日に又おめにかゝられいすかきりもなく何をたのしミ何を力に此世のうきをしのぎいセうマァどふしたらよかろうと

愚痴も口舌も眞實も此後になんのわかちなく只いゝかわす言の葉もいわんとすれど隔られ名殘の泪絶間なく猶行末を繰出セばいとゞもつるゝ心の糸破るゝ胸も縫兼て針も藥もとふらぬハ持病に强きさし込積文里ハ猶もとふわくに一ト人りの介抱心元なく呼立聲に二階も下も何事やらんとかけつけて醫者よくすりとたち騒くはや東雲の烏なき隣ざしきは手をたゝき

【若イ者】ハイ【權】もふ歸るから茶やを呼にやつてくれろ

しきりに降るゝ雨とふく／＼

第四　任侠の寸丹

一ト重ハ今ハ文里に別なづかしいと戀しさのつもり／＼て積となりけふこの頃ハろく／＼

に食さへうすくふら〳〵と人に逢さへ氣むづかしううつら〳〵の其中にも文里が事のかたきしも忘れかねたる病の根側に氣をやむ花の香の日頃に實の猶増て何から何迄おくそこなふ心を付て慰れと泪先立眞實の看病

【花のか】おいらんへ此傾城買猫の卷とやられ此春の新板で女郎の咥の直しれる本とやら讀いセうかへそのよふにふさいではつかりまんまもろくにおあかりなんセず藥といへばいや〳〵ともし内所へしれたらわるうおすセうどふぞちつとつゝもまんまも藥ものんでおくんなんし何を便りに早くよくなりいセうと思ひなんす【一ト重】いま新しくいふでハおすせんがしりつゝくろふをさせいすを腹もたちなんセずおめへさんのよふに眞實にしておくんなんすハ嬉しいと中〳〵口や何かでいつてつきる事でハおすせんしかし私か事ハ文里さんにわかれるとき直に死ふとも覺語ハきわめていゝしたが言置なんした事も有どふぞもふ一チ度お目にかゝりいした其うへで死のをまつておりいす身此様に私かよふな物不知に實を盡しなんして煩ハぬ様にしておくんなんし色〳〵お咄申て賴て置いす事も山〳〵でおすがばか〳〵しい今からとおもひなんセうかとこらへておりいす【花の香】涙をおさへそれ其様に心ぼそい事ばつかりいゝなんしてもしもの事でもおすしたら私ハ何としいセうほんにこふゆふ別をなんすならなま中結だ神さんや佛さ

んか倶〳〵恨しうおす【一ト重】いつそ昔の年はも行ぬ時の心ならこんな苦労も文里さんをあんな身にもさせもふしいすめへ此頃ハまあどふなんした事やら様子をきゝてへにも便音信　占迄もとめられ人傳さへもきびしくいゝつけなんしたゆへ今ハ通路もたへきつて猶忘られぬ胸のセつなさおときさんがうら山しいぬしの側での苦労なら百倍益てもいといゝせんアレこふいふ内も日頃からたれかれの隔なく呉葉に迄もそれ〳〵に人あいそうもとりなりも忘れよふと思つても目にちら〳〵と見へる様でどふも少の間もわすれいせんと

又さめ〳〵と泣しづむ一ト重か心花の香が餘所ことならず身にとめて倶に涙に袖ぬらす亭主ハ病氣の氣かゝりに何心なく來かゝれバ二タ人リの様子只ならねど何くわぬ躰にもてなし

【亭主】どふたけふの様子ハ【花のか】（泣かほをかくして）とかく同篇でおまんまもあがりなんせん【亭主】それハさん〴〵だか我慢してちつとくいなセへそふすると薬も廻りが早いどふもはかどらぬかチット醫者でもかいよふかの【一ト重】いゝへどふかちつとづゝよいよふでおす【亭主】いゝかへそんならまあ氣儘がいゝがどふか心のセいかおれが眼にハいつもより顔の色もわるいよふにおもふ又なんぞ思ひ出したのしやァねへかへ尤勤の内のたのしミハたが身のうへにも有な

らいだがあんまりこり過るぜいゝかげんにするものだしかしこふいつたとてそふさしひきのなるくらいならほれもしめへがたれかれのしや別なくミんなのかけでこふゆふ暮をしてゆくおれだものを手前たちを奉公人とハ思ハぬ子と思つているからわるかれと思つてハ言ぬ中にも手前ハまだ頑是もねへ時分に兩親に放れ兄弟とてもねへとの事便りすくない身の上とハいゝながら一ッハ縁か一トかたならずふびんに思ひ十六の春の突出しも可愛相に今からくろふをさせることかといつその事に十七八迄も引込ておこふといつたなれど其時分もふ丈かつこふもそなわれば外の女郎へのきこへもあるとむりにミんながすゝむるゆへセう事なしに出したれば突出しの其日よりアノ文里さんが附しつたゆへ何もふじゆふもなくくろうもうすく直に内所の手もはなれ人にハたてられ評判よくその時ハおれハてへ〳〵嬉しい事でハなかつた其長い盛の文里さんがあゝいふ身にならしつたもミんな手前ゆへその恩のある人をなんぼこふいふ商賣でも今になつて悶とはあんまりわからぬ物と思おふが花の香も側に居るふセうだおれが心いきを聞てくりヤアノ子が大分こるいヤレもふおしつけ仲の町へもでられぬ様になるの何がこふしたどふしたといゝ立ハさま〳〵だけれと可愛相に今悶たてをしたらばア、イフ一圖の氣だからひよつと煩かでよふか短氣な事でもしハしめへかとそれをあんじて一日〳〵と延しておけば於際かいふに

ハ還り手なりたとへ勤のかねが滞らづともとゝのつまりハおいらんの身の薄なる事ァ、いふ事をセかすにいてハ外の女郎衆へのしめしがきかぬ抔とりきゝ切ていふをマァ、といゝのばしてもはてしなければ世間か濟すまた一ッにハ文里さんの爲也手前がふびんさゆへおそまきながらせいたのたそふでもして遠ざかつたら思ひ切る事も有ふか成丈ハ互の爲ゆへ思ひきらせうとおもつたがそう戀こかれて瘦衰へ食もろく／＼喰ぬほど惚るといふも能／＼深い惡縁だろふかまた爰をよく聞てくりやァ其二世も三世もといゝかわした文里さんといへば子迄なしたる女房も有ど手前の色かに迷子の事も女房の事も思わづ通ひに通てその果はかゝろふ嶋もねへ身のうへにならしつたとやら其文里さんのかみさんの心にもなつてミやとのよふであろふと思ふ泪をふきながら夫にあいそづかしもさつしやらづ里かたの諸親類でハそんな不所存者に添して置事ハならぬと歸れ／＼と度々のさいそくをさつしやるそふだが尤子に引されての事でもあろふが其詞を用ぬとて是も腹を立かミさんも儀絶との事それでも手前を恨との咄もきかず只夫ト大事と貞女を立貧くらしも苦にもセず啌かハしらぬが此頃ハ袖乞に出さつしやるとの噂を聞と胸が一ッぱいになつて飯も咽へもとふらなんだどふぞ余所ながら貢であげてへにもどこにどふしてどんなハかも顔ハしらづ心をいためている其實氣な女房を手前がどの樣に思つても追出されもしめへ

まあ第一チは世間か濟ねへ昔の身ならばてかけ妾といふ事もきよふか一ト人リツヽも口をへらさればならぬ時節手前が其處へいつた所が道ゆきれできづとゞのつまりハ此世でそわれぬとむふん別ハまのあたり其時のなげきハ一ト人リや二タ人リの事でハねへぞよ又思ひ合ふて二タ人リがはてに死で一ツ所にいたとこがァノあぶねへ蓮の上其心遣ひハ承知のうへの事だからいゝよふな物の又此世で非業の死をとげたゆへ其にくしミで牛頭馬頭といふものに引さげられいづくのとこへ別よふやら江戸の中でさへしらぬ手前たち其時逢度さがしても音信てくれる者のなき地獄の住居こつちでおもふとハ了簡が違が手前利口だから辨へていよふがよく此間違が有たかる物よ文里さんたつていつまでァ、した事でもあるめへちつと親類衆の眼にとまる樣にさしつたら元の身の上にもならつしやろふ又其時はどふかこふかある縁ならなりもセうとかくたん氣をおこさずに氣をとり直して病をはやくよくしや姿をわきめへれば今の苦勞ハ昔かたりと又來る春の花の顏笑らひ合ふのをかげできゝてへこふゆふも面白おかしく身勝手な異見とおもあふがそふいふいやしい心はさら／＼ねへこれもいわづともなれとも手前の心やすめだからいふがツレ手前年季いれた時より今迄證文も書かへさせずに置ハァ、文里さんの事で年季を入るな可愛相にとおもふゆへ文里さんとても一ト通にハおもわぬ客人恩かへしといふ迄もねへかい

つそおれが小遣の內をかさばいしふしなしに內所ですむと外のきこへおも思ふゆへする〳〵へつたりと勘定なしにする積りもおんにかけぬかおれが心の曇ぬすんしマァく長だんぎれ病氣の障になつてハわるいツレ花のかもとく〳〵氣をはらさせなんぞ喰ふ樣に進めてくりやあサアくいつてきやセう氣をつけなよと

【一ト重】そふとハしらづ恨いした事のもつたいないかんにんなんしも

跡に心は殘れども外のきこへをはゞかりてそう〳〵下へ行跡は只ふし拜むばかりなり

はんぶんにてしきりにせき來る涙川

折ふし隱居所の勤の鉦かん〳〵

第五　離憂の夢飛

一ト重ハ醫療をつくせ共其きどくあらずして日增に重る戀やミの進まぬ食事も文里より尋し品と僞れば一トロづゝもとる箸のそれさへ今ハ絕〳〵て人の見わけもなき中にも文里の事の明暮にわすれかねたる迷ひにや

【一ト重】文里さん私も一所にめいりいセうと　手をたいたす　【花のか】モシおいらんへ何をなされま

す文里さんハいなんセん物をそんなに身をもかきなんすと猶身のよわりになりいすほんにその様に見さかいのないよふになん〳〵しても文里さんの事をおもひ詰ておいでなんすかへと

わつと斗に泣出すあたりもともにもらいなき

【吉の】おめへ迄かそのよふに泣てばつかりいなんしてハかへつて病人にさわりいすにへアレあんなに何かなんすか文里さんになんぞする心持かねいつそかわいそうでさんすと いふ口の下からなく

【花のか】折かく泣めへとおもいゝしてもそれおめへさんがその様に泣なんす物をとふこらへられいセうどうぞこセうたから泣しておくんなし【あすかの】旦那さんも見る眼もかわい相だあのくらいに思つてゐる事ならちよつとでもそわしてやりてへといゝなんしたせめて迷ハぬ様に息のある内文里さんにあわセうと此間中からさかしなんすの

言葉もいまたおわらぬによふ〳〵文里が隠家より引連立て逢すれば兼て一重が煩ふ事風の便りに聞へしかよもやこふとハ神ならぬ身のしれがたく一ト目見るより物をもいわづしばし涙にくれにけるどれ〳〵とても涙をおさへ

【吉の】文さんのおいでなんしたといつたらアノよふにおもひつめなんす物だからひよつと気かはつきりとなんしやうもしれぬ早くおしらセなんしな【花のか】ハイ〳〵もしへおいらんへ文

里さんがおいでなんしたにへと
いふ聲耳にきこへてやあたりうろ〳〵見廻す様子文里ハ側へ立寄て
【文里】コレおれだよ文里だよァ、ァなさけねへ様子にハなつてくれたなァ【花のか】あんなに手をだしなんすハおめへさんにたかれてへといゝなんすのでおすセう【文里】そんなら下のほうをもつてくんなと
そつとだきあげ一ト重ハ何か文里顔をしけ〳〵見てさもうれしげににつこりと笑ひいつにかわりし機嫌顔
【花のか】アレあの様に嬉しがんなんすよふすハと
哀彌増床の側文里ハこらへし溜涙ふけばこぼれ拭へばもれてはら〳〵と自然とかゝる手向の水泣臥こなたの心より笑ふ一ト重が心根のいとゞふびんに胸セまりかわでミるめもいじらしさ
【文里】どふぞくすりがあるならやくにハたつまへがおれが手ながらのませて見てへ【花のか】そう〳〵ため出すさあおあけなんし【文里】くすりだよこれをのまぬとの早くよくならぬよ　とロへあてかふ【吉の】あれみなんしどふしてものミなんセん薬も文里さんがあけなんセはむまそふにたへなんす

わな「文里」とふわくのか ほつきにて どふぞしたらまたよくなる事もあろふかの「花のか」とふぞよ、

おあけなんしな「あすかの」ばからしい文里さんか醫しやてハあるめいしとふされなしゝ

かと

なきつくどきつするこの始終ミな作しやのゆめにて側に見るも氣のどくにおもひこみ

へ三ふさん〳〵とおこされあたりを見れば

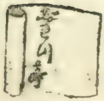
福富樂安御慶中人ます

もつたいらし きせきばらい ヲホン〳〵

跋

夫廓の癖の書たるやまわり廓下のごとしひとつきにて二筋の道に野夫あり粋あるを蕣子が偶の畫寐癖ゆめにすら其癖を見て此一冊をあらわす四方の君子氣を附て直(なを)さつしやいといふもまたァ、老婆(せわ)心の癖ならんとしかゆふ

切筆書思述



未新板

契情買猫之巻（けいせいかいねこのまき）　谷峩作

完

來申新板

白狐通（ひやこつう）

地ものと女郎の情書わけ又兩方の論を書たるおもしろ本也

鸖ヶ岡苍撰帳（もんせんてう）

辰巳の世界ニて極しんの手ことをあられしたる本也

傾城買言造鳥（いふつけとり）

勤の外に客に逢ふしんの所を書たる本也

品川楊枝

自序

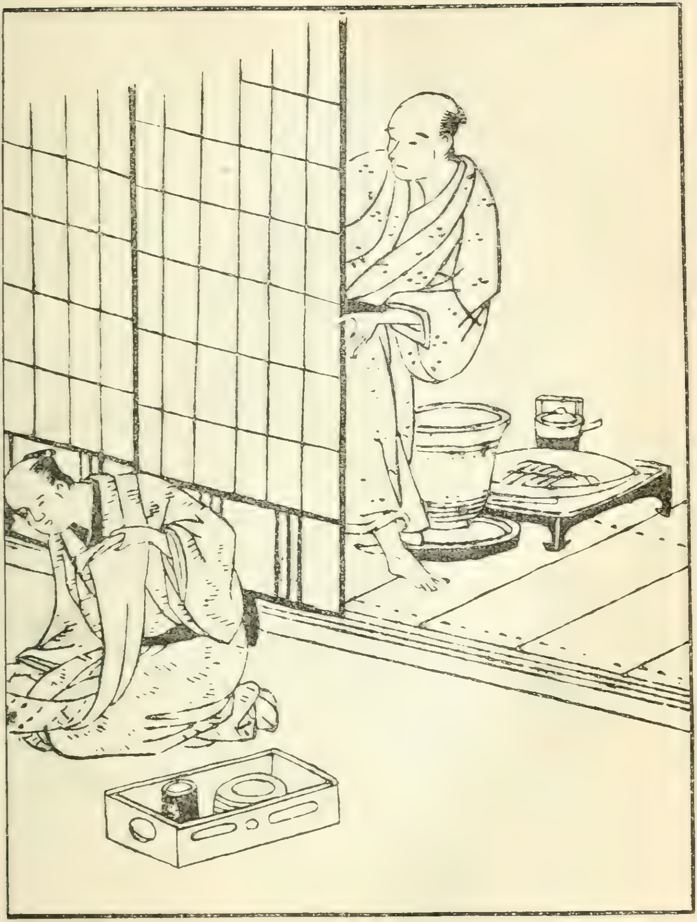
娼家は一個の天地なり内證の点氣曇る時は日〻に嶨損料屋月に附たる掛人有星をさしたるが如き客も乍南驟風をくらつて晴天が替り昨日迄來た客も今日は秋かぜと成る色男と傾の日蝕も晴て逢れぬ戀の闇てらさるゝも厭れるもあり亦雨降て居る客は跡で十方クレモ知らず稲妻の女房と定しもついに蜉蝣の契り雷の土となるまで偕老といひしも雪霜の如く山川草木三ミせんのひとついたこを引汐とハイお盃をさし潮やその大海の一滴をチヨイト蜆がらで波事しかり

天狗山人芝晋交述

時于寛政十一歳己未孟春

もくろく

三人一坐のたん　もてる床
密夫に逢ふ段　しんざうの口せつ
中の字のたん
附り　鄰座鋪
二人一坐客のたん



品川楊枝

芝晋交著

逢ふ嬉しさに別れの情有り儘にならぬハ勤の身といへど客も又しかり身自由になれバ金銀が自用ならず金があれバ主人親もらいづれまゝならぬで鏡ミ其中に有哉爰にいつの事にか有けん御江戸の方薬に住で世を送る者あり名を文朝とよぶ爰の内に居る【十次郎】居候と見へ勝手をかたづけてある夜うちのやうすかべをぬらしてハやはだとをたゝの紙ではらせうへたすきがへしてはらせ正面へとだなを付まいら所へごくハうがさしふすまへあいきらた引たうへに狂哥のすりものわきにふくろ戸棚松面かよひのちやつかゝつてある神棚ハ神道者のごとくねつミ入らず光ろ猿の毛とあらそひくわい神さまのとうゆうハ白毫かとうたがへれるくらゐざしきゐ今そうじした所へ三人しかミ火ばちによりかゝりて何かはなしをしてゐるおくれ九ツのかねコン／＼過ぎじぶん十次郎はなにかをかたつけながら【十】こんやハ甲子だから大こく様へおミきを上ヶねへければならず大根もいつしよにかつて來やふトいひながらこの喰からしにハあやまるぜトいひ／＼かた付てゐる此くひちらしハ火ばちにあたつてゐる三人のなり一人ハていしゆ文朝あとの二人ハ心やすきともだち也一人ハ勝五郎一人ハ金次郎とておとなしきむすこまだくひあまりのしつほくを火鉢にかけてあつためてゐる十次郎ハかいものに出て行二人でいろ／＼なはなしの内に【文】金様ッところへかのところからみが來てゐやすぜ【金】どこに有るトもふのろくなるやつよ【文】おもてハ羅しやの九ツ過うらハ金なしもをるのもツ位もつとも吉原がた小讀が二文がら／＼いふおとかねがあるやふに聞へる書出しや手張の中からさがしだしてやる【金】すぐにふところへ入やふとするを【勝】むりにとる金ハうち氣ものゆへいやがる【勝】ひらいて見てナン御わかれよりいとゞ思ひハますかゞミくもり

がちなるつとめのつらさすこしハふびんとおほしめしせめても〻夜に一夜ッもまれにあふよのあまの川【文】金さん色男うるさひもんだ一度買つた女郎ハ其通りだぜうかつに女郎も買へめへ（トいへ共金ハしらぬかほしてゐる）【勝】（ハむしやうにおもしろがつてよんでゐる）【金】よしねへぐハいぶんのわるひ（トいへども）【勝】（ハよんでゐる）なにかいたこがかひてあるぜナンダ昔てやる手がわしやうら山しぬしのごげんに入るゆへに【文】イ、御手だ子へ見かへ大叶のひな琴さんのだねへ【金】よこなんなといふによこしねへ（ト三八にて引はりやふつてしまふ）【勝】文朝さん此せいさ（酒の事也）ハどこから来やしたぬしのしんかにハめづらしひのう（文朝ハいつたい酒きらひとミへる）【文】その酒ハさる所でもらひやしたのさ【勝】もぢりハどうた【文】又かへおそろだねへ（トうしろを向てしたゝかにしている）【勝】（いだつてゐて）ナンダからだどうりてかふなつてゐると思つた大わらひだせ【文】勝さんそこにあるすゝを取てくんねへじま大日にハそうをうなやくだらう【勝】すゝを十二文ヅヽ依で買ツヒくい【文】そのやうなしがねへ事ハしらねへのさすミハ車で来やす（此内金次郎ハふすまを買ふてよんでゐたりしが）【金】い喜介が神明さまへ参りに来やしたワたしがいろは茶やに休んでゐやしたを見付ていろ／＼恨を云やしたどうぞ四五日中にぜひつれ申て来てくれろといひやしたツシヤ勝さんのおなにかね用があると言やしたたしか民のにかほるのともと見へやした【文】こんやいきハどうでござります【金】行氣なら内へ歸つてしたくをして来やうから待てくんな

【勝】又はづさうと思つて其手ハくハなのやき蛤四日市夜のつきゐゝだァ【金】ナニそういふ氣でハなしさ【勝】なひならすぐに行やせう文朝さんハ何を着して向ハせ給ふへ【文】五ミひしころにたつかしらさどんな形をしても傾がうかれねへかたちさ【金】行くなら早く行キねへモゥ御手をうつ時分た　トいふうち【十】かへつてくる　【十】おめへかたハどこぞへ行なさるかへ【文】はなしの會が通り町の河内やの八さんところに有とたつた今おれをよびによこしたから行キやすもしおそくハ先へとまりやすから先へねゝへサァいきやしやうだれか手ぬくひがあるぜなにもわすれたものハなしかへ

【文朝】いつたいとうらくはだなふうおにふとりのあへせに定九郎かひこ山ごんげんのきやうごくたくミがおそれるかたちのべんべらのふとりのおびをしめまさだいのげたにしろはなをゝすげさせめんちりのせいしつの袷かつハたきずにかたへかけしぼりの手ぬぐひほうかふり

【勝五郎】かミをおかミにいハせさかやきハびろうどのごとくいろしろにしこしかもはなすじがとをりてへんのぬしやのむすこと見へるかきいろのあへせにつむぎの三ところもんをすがごぬハせ下につりがねしぼりをあいへ入たひとへものゝあへせになをしてきてゐるとミへるなゝこのおびをしめ六あさぎの手ぬぐひを帶にはさミ半くつのたびをはいてゐる

【金次郎】茶ミぢんのあへせ下にいせしまのぬのこもへぎうらをつけさやの帶をしめばらをのせつたにさらしのたび九ツ半過じふんのもつともさんとめの一すじ立のはをり　【金】てうちんの火かきへるぜ【文】なむさんモゥらうそくがねへしかしモゥ灯ハいらねへ　トふところへ入ゐで犬をぶち〳〵行く折しもむだの辻へかゝる　【かご】ハイだんな参りませふ【文】どけへでもいきてへ所へ行ッたがいゝだれもとめやァしねへ

しかし行くならもうミめぐらの方がいゝぜ【かご】じやうたんをおつしやらずとのつておくんなさいまし【勝】いくらどりた子牛ロのりやせうか【金】よつぴとへ付てものる事でハねへ實ハこのしうハかごかきだハな今も内で辨が所で御手だしてかりて來てかハりばんにのらふといつたハナ【かご】ハイ〳〵それでハあなたかたのほうがかきやうが御上手と見へますハへたが生をいたすとこんな目にあひますかごをとられぬうちはやくかへりませふ夜ぶかハきミがわるふござりますトかごハすご〳〵かへる【金】かわへさふに夜しやうばいをするものをなぶる事ハねへに見さつしモゥ大木戸だ【文】月のあがる所ハ千金〳〵【勝】こゝにある車を川へはなし鱣にしてやりハどうだくどくになるぜ【文】石橋あんの前へかゝり坂口ふんしうや丹州屋一力や山しろやにいの字伊勢やが見へやすからもうとをかァねへモシおやど料理をたべなんねへかへ【金】あとを見なんしかごがたまひならんで來やすだきめうがによこもつかうのもんハどこのだへ【文】初音屋のさ【金】モシかごも仲間がござりませうねへ【文】大有りさまの在段ながやきかごいふちやうがおかしひものさやぼで錢を出さねへ客の事を「きりんがやれた」といひやす錢百でやる事をねへ「ころり」で行といひやす貳百の事を「ひやうし木」三百を「がつしやう」またひく事を「しる」といひやすおそくやる事を「柳にやる」といひやすをしろふ人かしつてゐやすか

ら今ハ子「あさぎ」にやるといひやす【勝】ぬしやァ芝居の事がくハしひから芝居のふちやうを咄しねへ【文】ちつと斗リ咄しやせふ店を持た事を「ぼんをすひた」と言やす銭を「なま」といふをしろう人かしつて居やすから今ハ「る」と云ひやす金の事を「つう」と云やすきものを「らん」帯を「ぐる」餅を「孫兵衛」日なしをかりた事を「のつ」を「じつた」といひやすかやの事を「とうぼく」いゝ娘だといふ事を「白枝」と云ひやす女郎買に行く事を「びりをつる」わるひ事を「やわ」だます事を「つがせる」うそを「とよ」ほんの事を「まぶ」その外山ゝ有ルからはなしつくされやせん一文の事を「ちぎ」文といへバ又「はやひ」文とも貳文を「はら」文三文を「かつち」文四文を「めつた」文五文を「ちやうはん」文六文を「ミつ」文七文を「おき」文八文を「あつた」文九文を「あふなひ」文十文を「はやひ」十ト云やすせんざいうりが三十貳文を「やミ二文」といへハ大道ふちやうてハ「大工はら」と云やす中／＼咄しハつきやせん仕立屋のふちやうとうせいことば「平」「おやまこ」「めへひき」「さゝ木」「お手かたて」肴やせんざいうりそくかれんぶりがれん「めのじ」「げたのは」あれせ「ちよんぼり」かすかぎりハござりやしねへトしつたぶりを思ひだし語り出し金の有小間ものやを見るやうにならべたてる【勝】おそろ穴をしつてゐるの物まへなぞハその穴へはいりたいものた

あなおそろしの香のけしきやれとうだ【勝】はなしを聞〳〵來たらモウ八ツ出だ五けんの茶やへしものおりた事を見なこの茶やハね内茶やを買ハねへけれバ出されやせん去年高輪(きよねんたかなハ)の茶やも仲間(なかま)がきまりやしたとサ【文】モウおしつけひけだからなんと十八軒をよしにして外へあがりのきハぎハどうだそれがよからうじやァねへかヱ【勝】妙〻かんしんこうめいのはかり事【金】よふござりやしやうどこぞ見たてゝあがりなせへしな【文】とこがよからう【勝】どこでもよし〳〵（是へへな川の入口で六寸五寸貳朱のまじり見世正めんに子ども三人そろひのきものをきてあんどうとにらめつくらをしてなにか小こゑではなしてゐるもしさつき本屋の七さんがねへ通りなざつたからよんだけれどしらぬふりをしていきなさつたにくらしひとひそゝはなしこゝも[illegible]につく嬉ならでうへおそなつゐのもんハ嫌つゐやとこゝへゐ人によつてハしつたかつゐやともいふしかや右三人ハ）【文】あさのかへりハいちばんはやい【勝】坂でふられても三丁目じやもてると一人しやれをいひ〳〵あがる【金】ハだんまり【若者】子供やおつれ申しや【子供】アイ、ハはしごとん〳〵〳〵【若者】おなじミでも【文】なし〳〵【若】左やうなら御出立【勝】だれでもいゝはやく出しねへ【子】お茶を御あがりなされまし【文】此子ハ雨(あめ)のふる晩(よ)に出さふな子だゼ【勝】どふりでかつぱのおならといふ茶だ此からかミを見やぼろ三包が物ほかねへしろものだゼ【文】このあんどんもてんそうのあとのをつかふそうだこんなにこハれかゝつたのを物をきへミんなしまつて置てけんくハといふと共これれた道具を持つて出てこハしたとぬかきあなまだおかしひ事がござりやす三丁めなんぞでハおつと目ぼしひひ

とへものを着てるるとそれを目あてにあげやすそうしてつとめがないといふとかねて貳百か三百くらゐのひとへものをこしらへておいてそれと着かへさせるハな（トすこしはなしにのりがくる【文朝】が女郎かいへさまでほれられる氣めな）（くたゞしつたふりいつてたのしむのなり【金】べしゞうたんまり口をきく事がきらひなるゆいたつておなしきかた）かゝるところへ【八しほ】（としハ二十二三と見へる生げんふくくん内しまのしかけかミへけふあらつたとい）（ふふうみからてゆハへてんがんほうほどながうがい壹本さし下へとうもろこしをたくひのこしてきたといふつらですハろ【おきく】としハ廿一二と見へかミハひやうごむすびしかけへまかひ八丈の七ツじぶんかほかたちいやしからす此内のおしよくとミへるもつともしよさいなき）（ふう【おくめ】としハ十六七いなかそたちとミへるかミハしまだにはなかんざしをさすか娘ふうあつてかわいらし）三人ならぶ【若】御さかづき【金】文朝さんはじめねへナ【文】順にさしねへナ【勝】そんならと八しほにさすしゆんなれバ【文】おきくにさす【金】おくめにさす女郎ハミな〳〵下へ行あとハ硯ふたのかまぼこくわゐをあらしてゐる【金】文さんしよさいもあるめへが酒肴を【文】若ひ衆今のをョ【若】ハイ〳〵【勝】なにかわるくいつておちをとらんとかんがへてゐる所へ【おきく】【八しほ】くる【きく】子供やすミをもつてきなェ、しれつたひ火だのふなせこんなにはねんすねへ【文】ゐびの生れかハりだからはねやす【きく】にくらしひのふト火ばちをとりきせるでくられしさうにしてよしにせうおいらがぶつとばちがあたらァそしてぬしの女郎衆がわきでミてゐると角をばやすだらふおそろしひ事だとてもわつちらが（トいつて火ばしではいをかいてゐる）【文】ぬしが思ふ客ならバそういふのだこいつハおかしひァハ、、、とそらわらひ此内若ひ者酒肴を持つて出る跡より膳を子供が持つてくる【勝】ひらいふた

をとつて見てなんだ長いもにかんひやうし、たけも有でんよ白魚を干ものにしておくさふだか
たくつて喰ハれハしねへ此「ぐん助の」くろひを見やおらい方の「うんだ」けんびハくひやァし
ねへ（ぐん助といふハしゆうんだといふハ　らのいゝまけんぴとは犬の事也）【勝】文朝さん酒をはじめねへな【文】おらがのまねへをしつてる
で日ざす敵ハ【勝】おれといふのかはじめやせう　ト一ツうけ　ナンド是盃をおかつきいため【おき
く】さんとやらに【きく】御おさへ申やしやう【勝】まづ／＼【きく】さやうならト壹ッほし
水入らずにおげませう【文】さやうなればいたゞきますと壹つほし【くめ】さんとやらへ【く
め】御おさへ申んせう【文】わつちやァずふきらひさ【くめ】（なんにもいハずにのこさかつきをどこ　へやらふかと思つてまごまごしている）【お
きく】此子ハ盃をどうするのだにあなたへさしねへナ（トおそハつて【勝】へさす【勝】ハうぬが女郎がこぬゆへちと　やけになつてゐる也あいにくとこんやきやく人がおち合いま
だざしきへハこずむかふ座敷のあいておいてあるやうすは　ふさがつてゐやはなしだまつてゐれどおもしろくなし）【若】チトあちらへ入ッしやいまし【三人】よからふ
ト立【きく】何かハおたいらがもつていきやすから子先へいきなんしナ【文】さやうならおさ
きへ参りやす【きく】どういへバかういふとにくらしひ口たのふ【勝】小便にいかねへかとい
へどきこな／＼耳にはいらず勝壹人小便に立て行（勝ハまへかた深ためへ　にかつてたしつてゐる）【文】どこたへ【きく】まつ
と奥よおくめさんはやく／＼いきねへさじれつていよ（おきくハへや持あと二人ハわかいとき見通し此見通しといふハ　おさしきの事也見通しといふが是よりおきくがへやにて）
酒あれは（しまる）【文】これやハさむしひいうとうで三味せんハかりられめへかいう【きく】わつちのでも

よければこざりやす（かゝる所へ八しほもやう／＼ぬけて來たやうす也）【金】八しほさんハ三日月女郎衆だ【八しほ】なぜへ【金】よひにちらりと見たはかりた【文】三日月女郎衆を見てあがるハどうだねへ【ミな／＼】わらふ【勝】ハ壹人小便に行しかわかふかくなじんだ女郎此内へ來てゐるをいつかうしらすかへらうとするらうかてふと顏と㒵折しも二階ハ文朝かいたこあふてうれしさ別のつらさあへハ別れがなけりやよひ【女】勝さんでハ【勝】お梅か【梅】マァこつちへ來なんしはなしがたんとありんすハナさつきかげ見世でちらと見たぬしたとハ思ひんしたがもし外の人さんでハわるふござりやすからだまつてゐやしたぬしハ情のねへ物だトはなしながら明部やへはいる【勝】情のねへとハ手めへの事ッたト腹立【梅】わつちか狀通の付とゝけをしてへにハ内て見てゐるわかれた時もはなしをしてへにもあいてハなしてうど去年の今じぶんでもござりやしたらうおめへを内てせいてあげねへのを若ひものにのミこませて客のある時を見合しよかいにしてあげた朝内しやうへそれかしれてすぐさまくらかへ川崎のつるやへ行てゐるうちもどうぞみでしらせたくおもへども何をいふにもへたてた中ちつとハわたしがくろうも思ひやつて見なんしと目にもつなミださすが岩木ならねば【勝】も目にもつ涙をおしかくしさふいふ心としらなんだゆへうらんだおれがあやまりコレなくな【梅】うたくりハはれんしたかへヲ、うれしひといだきつ

く〽音なく生め。おりしも〽なんきすゞりのわしや海山よへふうするうミぬしゆへに【梅】こ
れやハたれなおひたきつた【勝】八しほよ【梅】アノ子ハ廻しにかゝりきたりゆゑにも噂しができ
るといふうわさ二ツおいでよご立る【梅】今こうヾに行やしたとしゆ気ぶり【勝】ハひとりあ
き八やりくつきに心をいためてゐる二階でハ【文】勝さんハどこへ行つたらう【金】てうづに
行たといつたつけ【八しほ】見てまいりやせふと立ッて行其うち勝ハやう〳〵明へやのなんぞの
がれてこの所へくる【文】どうした又こうおかくれかと思つた【勝】今小便に行やした　ざしきのやうすま
[illegible]【きく】勝さん一ッけんじませう【勝】いたゞきませふかねへ　ト手ぬくひで手をふき〳〵おらのけいハきたかねへとかこゑ
[illegible]【金】おさかなをいたしませう【勝】おくめさんチトあげやせう【くめ】御おさ
へ【勝】そう〳〵【くめ】それならいたゞきやせうトいふ内八しほもくる文朝がいたこ何がな
しそれおさかう利會のざしきはへ〳〵としてにぎやかなりし事どもなり折しもたッいごさうし
どッ…【若】トおやすミなされまし女郎ハ下へ時ふだを持て行ふたりもねやうそんならト
文朝ハへやへ立て行金さんそつちらの床がおめへのだらふトいふ所へ【八しほ】【くめ】
ゐ…ヤそッちらがお私のだよ　ト…じぶんにハ夜もふけ皆寝〳〵もとなしづまる

貧公文朝舌娼家震段(ひんこうふんちやうしたをせうかにふるふだん)

しつたふうをしてはぢをかく事多しつゝしむべし

おきくサァおやすミなんしモウ八ッだらふはださむひばんだとしかけのまゝとこへはいる客ハ寝(ね)たふりしてゐる【きく】ねなんしたかへ【文】ナァニおめへかこれへうち【きく】ねられねへといふのかへあんまりおしがおもたひ【文】かるくしてかつぎなさひかたがはりやせうそれでもおめへハよくおもひものをもちなるよ【きく】かんにんしておくんなんしあやまりんすよ【文】かんにんのならねへのだがおめへだからかんにんしやすナンダこのかけじハ猩々(しやう〳〵)だねへせう〳〵へんぜうあまつ風だせう〳〵とまれハとうだ猩々の至りに候重畳(ちやう〳〵)と聞へるかねへトひとりでしやれてる【きく】だまつてねなんし【文】ねてもよふござりますかねへねやせふトふとんを引かぶるおきくハはをりをたゝミて下へあつけて來ながら茶をもつてくるを見つけ　その茶をすこしいたゞきたいねへ【きく】おしひものだがあげんせうこちらをおむきなんし茶がこぼれんすよ　トかほをつく〳〵見てかんかへてゐる　ぬしハどうやら見申シたやうだヨよ

くだれにかにて居なんすよ【文】今ハかういふかほがはやりやんす此ちげへ棚に有ハなんだちくしやうめは□〳〵と茶碗酒があるぜ【きく】およしなんしばからしひようョゥぬしハよくいたつらをしなさる【文】五ッ六ッの時分ハよくいたづらをするものさ【きく】どういへハかういふと云て【文】ナンダどうめへつたかうめへッたとなりのばァさん茶をめへッた【きく】しりんせん【文】しりんせんとハしりにせんをかつた事かへとしやべり立てゐるとなりざしきもむつことさい中勝ハ宵方ひとりねさハぎたくッても跡のふたりがしづまつているゆへしかたなくだまつてゐる折しもらうかを八ッ過の追おとしといふものでのそ〳〵あるひてくる勝ハ耳をすましてゐれバとなりざしきの文が所へはいる女郎ハ【とら】（としハ十八九であたまへしまだにいつてびんぎりをきりふとりのしかけにもとのうらの付たのをつとふ下に黒おなんどのひとへさとふ木きのまゝ）【とら】おきくさんあけてもよしかへ【きく】おあけなんしなんぞ用かへ【とら】ひるまたのんだみをとゞけておくんなんしたかへ【きく】アィとゞけやしたョ【文】ちつとおはいりなされまし御茶代か十二文【とら】ぬしハいゝきげんだのうわつちらハ大ふさぎさ【文】ふさぎ〳〵なにョ見ていさむ【とら】笑ふ【きく】たばこをすい付て出しこんやハおめへハだれさんだへ【とら】カノ芋客ョ（是ハさつまいもの事なるべしすべて女郎ハいやがる）【文】いもきやくとハぼうさまの事かねへ（トーらぬよー いつたい此女郎[illegible]のやくにくがおひしやへ あし[illegible]のしやくみにみだまされると見へる）【とら】それにかの客ハこずいつそきがもめ

んすよじれッてへノゥ【文】さがもめたらひのしをかけてしハをのばしねへ是をきのはしとい
ふハな日本ばしとハちかふよ【とら】おめへさんハこほうかとやらだ子へいゝ事をしつてゐるな
アらァいしやになんなれバいゝに【きく】よひからむだはかりいつてゐらァなにくひノゥ【と
ら】又しかられねへうちはやく行やせう定めてまつてゐるでござりやせふしミ〳〵つらひノゥ
〳〵（トミられもしねへかほたあつちへしかめこつちへしかめいや出て行かんがへてゐろにゐたつてしつふかな容とミへる）【文】アノ子も七ッ過のかげぼうしときてせいの高
ひ子だぜ日光（にっくはう）の天井（てんじやう）のくものすをとりにやると金になるぜおしひ事だせァノ子に家根手傳（やねてつだ）ひさ
せるとはしごハ入らねヱノ【きく】おめへさんそれでもほれたらふ【文】ほれたのほれねへの
といそがしひ板木（はんぎ）やの内を見たやうに（此しやれおちがたゞアハヽヽヽおりしも火の用心のひやうしぎさゝらのおと耳をおどろかしあんどんひかげほそく艸木もね入ル時分）【くめ】
金さんねなさんなわたしが今いつた事を【金】わたいらをそういつてくんなるハありがたいが
それハ人ちがひだよしまたほれたにしねへ百夜（もゝよ）に百夜のまくらの数いろ男ハ山ほど有中にわた
いらがやうなしがねへやろうにおめへも大がいなぶつておきねへつミになるぜ【くめ】そうい
ゝなつてハ今いつた事をうそだといゝなるのかへ（ト小こゑでかほたあかめてゐろやうす）ぬしハどこだへそれをはなし
なんしそれかしれんせんけれバみなゝ出すにもたよりをしてへにもされやせんどうぞそれをは
なしておくんなんしコゥ巾〳〵とゆりおこす【金】ハ夜着（よぎ）にもたれてそらね入ッをしてゐる

【勝】ハはなしが耳へはいつてねつかれずきせるでから紙をやぶつてゐる折からうかをしづ〳〵あるひてくるあしをとねたふりをしてゐる【八汐】（やう〳〵向ふの客をねかして）モシエ〳〵【勝】モウ何ン時だへ【八】今八ッを打やした【となりざしき】ねかしハしんせん今いつた事を【金】そらほどいつてくんなればうそでもうれしひ（此時むねへどき〳〵どういつたらよからふと心で心）そんならわつちがいふ事もきひてくんねへ【とめ】それハどんな事てもいひなんしおめへさんにはぢをかゝせるやうな事を【金】耳に口【と】うれしさふなかほをして屏風（びやうぶ）をたてあたりを見まハし床（とこ）へはいる（この内床のわけしれずどういふものたらふあてゝ見な）【勝】おきなをつてたばこをのんでゐる所へ【文】來る（かんがへて見るにおきくゐねてしまひ壹人ゐるハ淋しひからきたと見へる何ンのこんな事をいへすとゐいゝに）おらの子ハよくねる子たぜねる子の尊（みこと）といつて神にまつればイ、よくねる子だのかんざらしハとうたねゐるほうてハあかるひぜあしかのやうだあしかハはやくおひんなれハどうだ【勝】文朝さん此「ふろ」を見な（ふろハふとんの事也）やハだせぬしハお茶をといだらう（トハかの事をしたかといふ事勝がいふ事ハぬしやふてう也）【文】なァにけいしかとまつたやうになつてゐらァおさめ物に行かざァなるめへ（此けいしがとまつたとハしんだ事おさめものとハとふらひに行をいふ是もぬしやふちやう也）【八】ぬしたちハとふおんをつかひなるからねつからわかりやせんふたりではなしてゐるなんしわつちやァてうつにいつてくるから（トはしごとん〳〵）【勝】アノ通りさナントおそれやす子へ【文】とこへ行てもはなしがわからねへやつサそれハそうと金さんハ宵からさたなしだどうぞしやァし

ねへかの【勝】さつきまで聲かしたつけがもう ねたらふ【文】おこして三人できれきれとうた

【勝】それがよからう トいふを【おきく】聞付る此時分へおこさねへけれいゝがとむねハときノ\女もしんだやうにしてゐる【文】【勝】先生おきさつし トいふ所へ【きく】來て【き】なんだへ人のさしきへ來てゐてさむしくつてなりやせんはやく來なんしな ト【文朝】をつれて行れ【勝】ハ壹人ねてかの女の事をあんじてゐる所へ しゆびをミすましじぶんへよしと【梅】茶わんに酒を入かた手にいろノ\なさかなをもちそれをわきへかくして置てそつとぬけあしてきくしらぬふり 八しほさん ト小聲でいふゆへ【勝】はいんな【梅】とつくりとやうすを見て かのものをとりに行もつてくる

【勝】茶か【梅】おまへに呑せふと思つて酒をのこして置た肴をくひな八汐さんハ今ねたから あすの朝でなけりやァおきハしねへから是にハあんしハなし【勝】そらほどしつてゐるなら今ぬけ足てきて八汐さんといつたハ【梅】モシ外のさしハあるめへかとそれてあんじて見たのさ 諸事しよさいなきやうすと見へる也【勝】てめへ去年きてゐたきものハとうした【梅】あれかへあれハ七ッ屋へやりやしたそれハいゝがおめへハ外に【勝】べらぼうめ何をいふかと思つたら【梅】夫ても丸一年ほどあハねへものをうたぐらないで【勝】手めへか外にあしが有るといふを聞たぜ【梅】ぬしハくるたんびにむりばつかりいゝなんすョあれほとわけを云ひんすにそしてヵノ事ハとうしておくんなんすその事を思ひすとちつともはやくこゝをつれてにげて【勝】口に手をあて聲かたかひかへに耳 是より二人はなし聲きこへすひそノ\といふゆへわからす こゝにおもてざしきにお茶を引た女郎壹人みをもつてまな

こゝをさらいやうにしてゐる こへ地いろかてきてたひ〳〵あけて内しやうへもしれかんさしのたて引でまたあけたをおへやへい つつけたものあつて今へあげたくツてもさげたくつてもしやうのないのなり所からとて身へいやし けれ此さとへ見世がしまつても三四人つれてそゝつてあるく所なり北か ぜのさむきにむかふよりくる地廻り二人新内いたこを唄ひながらくる 【おその】エ、しれつてへそよ此さむさにまつているに トいふ所へ 【いへ】何してゐるなんす【その】鐵(てつ)さんにさつき子あつたらまいばんカノが四五人つれでそゝつてあるくといふからなげみをせふとおもつてゐやす【のへ】がうきに情(しやう)をつくすのふ【その】アノ聲がたしか幸吉さんだアノあんまいめへましひふえのねできこへねへぞヲ トいふうち唄の聲きこへず 【のへ】それよりたれぞにたのんでやんねへなやぼな子だせ【その】此間人にみをたのんでそれからしれて大キな目にあひやしたなんでもこんや中にとゞけねへければなりやせん【いへ】おめへめしでもくひなつたかへ何ぞ持つて來てあげんせふかへ【その】何もたへんせんか何にか子たべたくも何ともこざりやせんおめへさん下へ行ッてゝおくんなんし又しれんしてハわるふござりやすから【のへ】そんなら下へ行んすから風をひかねへやうにしなさんし ヨト下へおりてゆく 【その】しれッてへよまたまごがうたをうたつてきたアノ聲かたしか トー人で氣をもんでゐる幸吉とい ふハしな川ての重わらみにてとしハ廿四五きわようもよく氣だてもよく男一人つかひにならこの人のせんぞむかしあてなへたの玉の山たわしたいけとりしゆへ人となたの玉の幸吉とよぶ 【お梅】今いつた事をまちがへなさんな トいひながらせうじをそつと開てはいて行くいきなかつこ 【八しほ】くるものをもいへずだまつて床へはいる 【勝】コレ手めへもいゝかげんにしなせへなんぼおれがやうなやらうだといつておめへかたにわすごもんだ【八】なんだへだまつて

ねなんしな何もそんなにいゝなさる事ハこさりやせん【勝】いハねへでさ宵から來もしねへで今じぶん來やァがつてきのきひたばけものハ今じぶん內へかへつて夜食を喰つてゐらァ十七の年から女郎を買つて一度もふられた事のねへのだこんなやたいほねのやせた所へくるとつるがはきためへおりたやうなものだからおかんでゐろうぬらァふるのでハないまごつくのだらうゴらァこんな所へとまりにくるとあすのあさほうゐんさまにきとうをしてもらァ、そうしねへとやく病をうけらァ【八】おめへもいゝかげんにしなさいそんな大ィさうな事をいつてもおとりあげハねへ何とでもいゝてへ事をいふがいゝが世間にも客があらァしづかにいゝねへナ【勝】しつかにいわふと大キな聲でいハふがおれがすきだ（ト聲へだん〳〵高くなるゆへ若者もきゝかね文朝もおきてくる）【若】マァおしつかにおつしやりましなるほど此御子がわるふござります【勝】いゝたかァねへがノ此子がさつまいもとはんごんたんそばとすいかんをくいやァせをしたやうにあげたりさげたりするからついはらがたつハな【文】しつぽのねへ凧ではあるめへしあげたりさげたりする事もねへ下手なからくりといふきだぜ【勝】わたしもはじめて女郎ハ買めへしへな川の女郎屋の內ハどこ〳〵に何が有おもて二階にかうしのねへ內が有るまでしつてゐやさァかういつてハおかしらしいが妾のうちへれんじやくを付てしよつて行く事もしつてゐやすと品川沖へくじらがとれたよりまだ

大そうな事をいふやつさ【若】こんばんの事ハ私におあづけなされて下されまし【勝】さゝさま
おそういハつしやれバあづけてこんやハねて歸らふ【若】さやうならバおやすミあそばしまし
【文】勝さんやすミねへと行
【評】此中ハ裏ハ勝が心より出たる言かまたお侑がじよさいなきものゝはへすゝめて後のたねにしつらん哉
眞向ふでハきに客二人あたりしが今のさへぎで目を覺してまぢ/\してゐるときすぎこたぶくるやうす
【客】四十ニ四のそうかこさからおゝのはたゝたまくら元へ出して　■れてえれバきこのゝやうすしれず田舎しゆしやとミへる　是庄藏どんおきさつせへ　トおこしに行【庄】なんだ
【客】今のあいそひ事を聞やつたかあくたいをついたぞへ【庄】先生江戸ハまい日あんな事
ハある【先】きミのわるい事だといふ所へ【女】來てねやせうとつれて行【先】そんなら閨中に入るべい大分
ゑふに醉臥砂場　君笑莫　といひ/\行【女】おやすミなんしと床へはいる　としへ廿四五としまさかりこつと　もしよさいのなきふうあたまかき
やらふにはなふくろにゐをとらかす
こゝ■ハ古詩句にて而を馴句に作
冷艶全欺雪　餘香乍入衣　年光皆堪賞　紫紅粧一婦
【女】とつて見て是ハなんといふ手かミだへ【先】唐詩さ【女】からうたとハ女郎しゆの名か
へ【先】アヽニ今ぬしか床へは入る所を詩に作たのョ【女】譯をいゝなんしておきかせなんし
す【先】れいゑんとハつめたくやさしいといふ字まつたく雪を欺とハぬしのはたへの雪のや
ふなものを云た物さよかうたちまち衣に入とハきやらいかほりの閨に入る事さ年光たちまち
にたつたとしまだけどよさいがないといふ事しかうとハ紫柏紅塵とてもろこしに美人が有つた

さうサ〔女〕その美人がどうしやしたへ〔先〕その美人の粧ひだといふ事ョ〔女〕おもしろくもねへ何ぞいたこをうたつておきかせなんし（トいふ内）明六ッのかねコン／＼／＼隣雞下五更じぶんだとおきあかる〔となりざしき三人みなかへらふといふ聲がする〕階子の音はバタ／＼惚た女郎はからすを恨ミ惚ぬ女郎はヤレうれしやと思ふ〔文〕此ざうりはちがつたはへ〔勝〕ナニそれに〔金〕手ぬくひを忘れて來たと二階へ上る〔勝〕よしか〔金〕よし／＼〔文〕おそくなつたせ〔若〕おちかへ中に〔客三人〕おさらばよからすカア／＼／＼

品川やうじ大尾

叙

楠の半片石となるハ造化の中の變化たり予弟常戯著を好て白帋をもつて晒落本を作る天狗山人といへ共魔法にあらずしてやゝ雲をおこして南驛に飛行すといへ共千里飛行にいまだ至らず杉の木にあらで櫻木にちりばめチヨイと南鐐壹部の跋をかく事しかり

天狗山人の弟

喜三木菴のへ述

跋

御殿山から谷底見れハ瓜の寉屋のミせあむどん美を盡したる我朝の姉床にあそんでハ唐の伯父も鼻の下を伸し天竺の御坊も髪毛をはやさん事を願ひ親父ハ後生をすて息子ハ勘當を忘人として此里に遊ばずんバ偏に山家の猿にひとしやたらひつかく帋屑籠反故を集めて一冊としまづ三會の鼻高山人何茂様へ御目ミへと

湯屋芝住筆取

品川やうじ　滿尾

芝晋交著
風流よしハら形 小本一冊

此書ハ青楼の一たん西川岸の穴をうがつ手れん手くだのしどう面白き口合の意味ある事をしるす

近刻

同作
辰巳吟 小本一冊

此書ハ客と女郎の深川も其中町の口舌ハ手くだのやぐらすかぬ客衆ゥふる石の其ミなもとの新石の新手を書く事しかり

近刻

追ミ新板物出し候間御求御覧可被下候

寛政十一己未歳 正月吉日

序

もろこしの粋者ハ油買にも酢買にもゆかず鑿に事をかいて學文の爲に壁を穿月の光りを招きあるは螢を聚雪を積んて灯としまた我日の本の悋嗇ハ黄女買にも酒買にも行ず四ッの時につけ五ッのもの前に夜なべの書出しするも見るも爪に火灯し身を焦すこそものぐるおしけれ僕ハ其熱き事を恐れ持ふるしたる琴の爪に火をともして業のいとま〳〵愚なる筆にすがり此一帖を書ちらすもいと恥がハしけれど花さく春のながめにもやと櫻木にちりばめ身體山ぶき色と題し井出の下紐解かゝすながれの里に遊ぶ野

身体山吹色

二

等息子山の大将する子供童の小耳にも挾まば心得の種のひとつともならんか

寛政十一未の冬

都扇舎

千代見述

身体山吹色　巻之一

大伴の黒主が哥のさまハ薪を負る山人のはなの蔭にやすらふがごとしと貫之が見立しもむかし噺にいふ山へ柴刈に往た祖父なるべし又物洗ふ女のふともゝをミて粂の仙人が通をうしなふたといひ傳へしハ川へ洗濯に行し祖母の若き時なる歟何ンでもそこらあたりの流れを汲む水のみ百性にな作といふ者至つて貧にくらし其日〳〵も喰かねるほどのものなりしが女夫の中に一子をまうけ名を万吉と付て七夜もすぎけるが其子のやしなひやうもなくいかゞハせむとて父の思ふ様は大の虫を生て小の虫とやらなればいつそ此子を地の中へ成ともうづめてしまふべしといふ母親ハ親父殿の何事を言れることぞめつそうもない此子を地の中へ埋めるなどゝハいかに貧しいとてよふも〳〵鬼のやうな心がどふして出ました常〳〵わしが信心にして天よりさづかつた此子地へ埋ミてなるものかこなたの様な氣強人にそだてさしハしませぬ乞食して成ともわしがそだてますと母親の一言に親父もあやまり入ていたりしが全体貧乏人なるに母は子に手がひけて何も出來ず親父ハ持あかすゆへ尾羽打からし朝夕のけふりも猶〳〵日〳〵にとぼしくなり今ハせ

んかたなしとて母の方よりこれ親父どの先度もこなたの云ハしやる事には此子をば地へ埋ふといはしやつたがこなたもわしも此子に手がひけいとゞさへ過しかねる世体が猶〻貧しう成て今ハどふともせんかた御座らぬゆへこなたのいはしやる通り此子を畠へなりと埋めてしまひませふかどふさしやる了簡でござるぞなるほど先度も先度でいふ通りおれハ埋て仕廻ふとおもへどそなたか常〻信心者じやによつて押てとも得言ハなんだがそなたも得心なら今夜畠へゆきてうづめふとふたり連にて野道へ出少し穴をほりかけた所が不思義や土中に光るものあり手に取りて見れば黄金の鎌なり是こそ何でも結構成ものと夫婦ハよろこび鎌と一所に子をいだき我家へいそぎ戻りける是よりして世に子寳といひならハせし物ならん万作ハ其鎌を庄屋どのに見せければ庄屋此鎌をもてこれ唯事にあらず鎌の物語りありかたり聞かすべしむかし孝徳天皇の御代の事なるに鎌足といふ人ありて帝より黄金ノ鎌を給ハり此鎌にて入鹿を亡すべしと仰をうけ玉ハり中大兄皇子と謀をめぐらし逆臣を亡し天智天皇御代を治め給ふもこれ鎌の徳なりといふ事聞傳たればなんでもこれハ目出度事なりしかしながら百性の持べき物ならずと目にかけて小判三百両に賣て渡しぬ万作夫婦のもの是は夢かやうつゝかや彼梅が枝も蛭に塩無間のかねハつかひでも三百両になる黄金の鎌を堀出すといふものハ唐土の郭巨のぬけで活計な事と村

中が評判する此女夫のものハ先三百兩の金で俄に田畠を買農業に身をこらしけるに如何成旱魃年にも日やけせず雨年にも水損なくおもふ儘に取入れて十とせの春秋を送りしが大身体となりて彼女夫思ふやうハ我等此やうに身體よしとなつたるも誠に我子万吉が蔭なり此儘に過しなバ万吉にも鋤鍬をかたげさせて一生すた／＼はたらかさねばならずもうこちとらも年ハよる是から作をやめて町人になり商ひをはじめ樂／＼と暮さふとて田畑ハ人に借しゆづり夫より京の六条珠數屋町邊に家を買ひ金屋万太郎と名を改め呉服商ひをはじめけるが元土ほぜりの事なればバ商ひの道は不案内ゆへ人なれたる手代をかゝえ手廣く仕かけ店びらきの其日より賣れるほどに／＼親父の氣のへるほどに賣れければ先ぐり代呂物を仕入れ物の一年も商ひしたるうへ店卸して勘合を見るに早掛ヶ殘りが三十貫目あまり出來其上手代の引込ミか五十貫目斗り彼是一年の間に八十貫目ほども損あり親父も祖母もごつくり仰天突く杖にといふ様な顔付中／＼のりを雀に喰ハれたぐらゐの事でなし夫ゆへ手代を請人かたへ預け何が土ほぜりの事なれば無雅無盡にいふて請人の腹立るバかりにせりたてければ請人もせむかたなく所詮御主人がどのやうに仰られましても其五十貫目といふ金唯今ではさかさまにふるうたとて出る事じや御座りませぬ請人ながらわたくし迚も御存知の通りの身がらなれバ金の壹歩やなどハ工面いたして成りと出し

も致ませふ又あの者の着類何角を賣はらひまして其代をのこらずあなたへ差上ませふほどにそれで何事も御すまし下されませと段〻分て頼けるを万太郎聞入ず今更其やうな事をいはしやつて成ものかあの者の着類を賣たかとて何程の事が有ふ詮体こなた請人ではないか其請人の身をして居ながら貴様までも漸〻金の壹歩やどれ出さふ抔とそりや何事でござる請人なら請人らしうこなたの身体仕廻ふて成と此金は立さしやらねばならぬ事それがいやなら公儀へ願ひますさふ心得さしやれと手ひどくやりかけけるに祖母は取分け慈悲深くこれ〳〵親父どの何ンの其やうに云はずとこつちの内には澤山にある金じやもの請人どのゝ身体仕廻してまで取立さしやるにはおよびますまい請人殿の頼〻の通り百貫の片荷あみ笠じやとおもふてあの者の所持の衣類なに角を取上げそれて濟してやらしやれ主の金を遣ふた者はどふで一生あたまが上らぬと祖母が挨拶にて濟してやりける誠に天窓も上らぬ筈じや今其手代は主の金を遣ふた罰があたり大きな睾丸を袋に入て歩行法會立に出て物を囉ふて居るげな時に親父万太郎は貸て三十貫目あまりの掛ヶ損成りと取立ねば置ぬと賣先〳〵方〻と百足のあしほどかよひ懸合すれども一向埒もあかず何か思案をめぐらし賣先夫〳〵の商賣物を買ふて際〻に差引し元トのさやへはまらねどもどふやらこふやら片付て仕廻ひ万太郎心におもふやうは此後油斷せぬやうにせねばならず

何ンぞや金を減らさふとて此京の町へ出て商ひはせぬ何じやあらふと是からハ奉公人を一人も置ず皆我獨りして右左商ひ斗りし掛賣ハしやせぬとサアきまりかけたく何ンでも是迄の損を入れ合さねばならぬと先燒るとわるいと思ふて家を賣つて仕廻借屋かるにも表家ハ宿賃が高し又乞食物もらひが來て手の内の何ンのと物入りも多し抔と柳の馬場押小路虎石町の邊に路次の奥の土藏付の家を借り仕馴し呉服の掛賣と出かけひく息の強き事大蛇の人を呑むごとく我さへよければ人はこけよがたをれやうがかまハずこけた所で火打石義理といふ物ハかんつ程も思はす其かハり商ひにハきつう情出して暮らしける元來土ほぜりの事にてむくつけない生れ付なれは些も何へきことなれど全体世上に此類ひなる人まゝあるものなり是等我ひとり前の覺悟ハよけれど世間の人のそしりをうけつゝまる所ハ其身の損なり恐るべしつゝしむへし

身体山吹色　巻之二

昨日と過けふと暮して飛鳥川ながれも早き光陰に息子の万吉ハ段〻成人してはや十七八の藪力といふ究竟の男となり田舎生れの事なれども十ヲの年より京へ引越し何か親の愛子なれば菓子の饅頭のと甘く育て上られ親のゆるしにて謡の稽古をし其外内證の楽〻にハ風流舞杯をし三味線もすこしかぢり棚の〳〵の鼠と違ふて嬶の方から爺の錢ぬすみて息子の手へ渡しけるゆへ万吉ハ何一ッ不自由なく少し男風俗も女子の惚るといふ風俗なればいよ〳〵遊ぶ事が面白うて四ツの袖沖の石ぐらゐの小哥ぶしてうつら〳〵と夜をふかし初めハ西石垣あたりにて事済だれど段〻調子が高う成り川端祇園町の方へ流れありきよるべ定めぬ西廓がよひ川竹のふし〳〵には約束の肩のと駕かきに迄なじみが出來專ら粋の稽古に元手を入れ晝ハ商ひをかこつけ夜るは謡講のとだしを拵へ遊里狂ひをしけるが親父も謡講といへばよき事と心得肌をゆるして遣りけれども兎角稽古屋といふ物ハ根が遊び藝の事ゆへ石佛のやうな堅ひ人でも今日の渡世なれば弟子の氣に入るやうにせぬと店がはやらぬによつて唯弟子の氣を取るやうな物也別して當時は何事にも新店

の稽古屋かふるほど出來る是ハ其師匠か音曲なら音曲鳴物なら鳴もの夫〻の藝に身を抛込ミ遊びに駈り身体左り前と成つたるからの稽古屋にてこれや藝ハ身をたすけるほどの不仕合なり誠に石部金吉鉄兜といふ様に堅ふして見せねはならぬといふものハ手習學文の師匠より外なし何事にも師家ハ人を預るものなれは堅うなけねばならぬ事なれとたとへは説法の場てさへ色事が出來るといふ様な物じやによつて子を持親ハ余程心得有へき事なりしかし夫を恐れてきびしき親達もあれと其子供隠し忍びて習ふ事あり是を征するはいらぬ事なりなぜといふに親にしのひて稽古事する人ハ其習ふ藝の道を執心におもひ飯より好といふ類にて外の用をだしに遣ふて成りと其藝習ふを樂しミとす此人脇道へ心をうつす事なく又中にも石臼藝といふやつあり是ハ何にも角にも拙ハれと根からよけなして氣ばかり行過人の笑ひをうける事多し万吉も其器にしてまた年若けれと氣ハ行過貴て金遣ふのなりと能にせねばならぬといふ代呂物なりされば万吉けふハ祇園參りといふて謡屋の師匠を誘ひ出かけるが先四条河原まで來れば一ッぷく致ませふと茶ミせへ腰打かけたばこを吸ふて眺望何と先生川端も淋しい事で御ざりますナアしかし此河原といひ川端のかゝりといひ大坂にも此やうな様子のよい遊地がござりませふかいや此やうな取合のよい所は外にハあるまい左様でござりませふ全体此四条通りといふ所ハいつても賑合な所じや同じ

事で三条通を通るには風呂敷かたげて歩行ても平常の形で通つてもとんとかまはぬやうに思ひますが此御旅町からこちらはどふも常の形では通られませぬさればッサ高瀬の橋の邊は仙臺町から糞船が來るによつていつでもこゑの匂ひがするあの香が外に有つて見さしやれちつとやそつとは廻り道して成りと通らぬやうにするやうな物なれど繁花の所だけてさのミ匂ひも目立ぬてはなうて鼻立ぬとおもはれる成程〳〵其替りに美濃吉い店のうなぎの香ひて少は目なをしではなうて鼻なをしをいたしますハ、、、あれ〳〵万しう何やら井とめの二階へ艶なものが出おつたぞほんになァありや誰じやェ、ありや近江屋のお志賀じやこちらのは何ンたらいふやつじやッンあれも近江屋から出るお三井といふやつじや何ンと奇麗じやなサ憎うないものじやソレ向ふからふたり連で首妓か來るぞほんにビリじやなェ、ありや宇治屋のお里とお橋じやフッそうか樓上でみるとは各別美しう見える敵等も漸々五六年跡までは少人ものでゑらい鼻垂で有つたがちやんと△に成りおつた廓に育つとどふした物かすつパりとして垢ぬけがする賣婦といふ物は妙なものではないか左樣でわたくしは敵等が子供の時は知らぬけれど去年あたりまで少人者がいつの間にやら花に出て居るはやい物で御ざりますなソレ、、ゑらふ樣子のよい嬶が來たほんにゑらいよい嬶じやありや何所へ往たのであらふなされはあれは大かた芝居へ往て居てのぼす

によつて一寸と幕の間にすゞみに出たのであらふかい是ハよいお目利時に先生今度の戯場ハどふて御ざりますそ貴公ハまた御出ないか得まだ参じませぬそれハおきまりじや今度ハ大分面白い信御記ハきのミにもないが五大力ハ大出來じや訥子の源五兵衛に友吉の菊野ハ大きに受て居る片岡の三五兵衛も持前の藝じやによつてゑらふおもしろい敵もあそこさへして居れば能けれど近年ハ立役バかりする夫て評判が悪いしかし昔と違ひ哥舞妓も能者が少いによつて役者の出世がはやいされ共似合ぬ事をしてはどふも見て居られぬなるほど持前の藝にハ妙があるもので御ざりますなサア妙といふものハいふに云ハれぬものじやそれに近年の役者ハあの藝の間〻に桟敷を眺めることちらハあんな事とんときらいじやいやあの申共桟敷を眺るといふハなめるので御ざりませふかマアさふじやな桟敷を眺るといふのがなめるのなめるといふのが藝に身を入れぬの身を入れぬといふのがうかめるのうかめるといふのがいやミいやみといふのが見得作の見得作るによつて藝の所意が薄う思ハれ愁場でも悲しうなし説破事でも詰がきかずマア聞かしやれ昔の役者ハ佐ゝ木をすれば佐ゝ木の氣になり由良之介をすれば由良之助の氣になつてするいかにも高綱ハあのやうな物で有ふと人に思ハすので面白い今佐ゝ木や大星の氣に成ッてする役者ハ指を折にもたらず其外の役者ハ大方が形ハ佐ゝ木や由良之助でも其身の役者を見せるのじや東角今

の藝者ハ哥舞妓役者にかぎらず諸藝共に見得を作り其見得作るといふのハ當る氣が有からじや兎角おれハよいとおもふたらとんといかん芝居でも其通り大將分の役者が我思入の藝をして見せふとて看板出しても端の一座の出來がわるければはやらぬむかしからいふ通りで流行芝居ハ外題からじや其藝によつて誰が何ハよふ出來る彼が何ハ面白いといふて見に行くではあるまいか成るほどそりやさふで御ざりますけれど女性抔は役者を見に行ます是で芝居の流行事が大きな事でハ御ざりませぬかいや〳〵何程婦人がひいきしても左ほどの事がある物でいかにも河東ハ妓婦抔が重に見に行くなれど是ハうハべの最屓にて芝居が面白うても面白うなうても商ひをかけて見に行くなれば大芝居の出來る度毎に一ぱいも二ぱいも見にゆきをる賣女や藝妓ハ芝居て役者をミずとも内へ役者が遊びに來る左すればこそ近年ハ役者に色をこしらへる妓が數多とある又町の地女といふものハ役者珍らしければむちやびいきな物夫で芝居が流行なら芝居度毎に夫〳〵の役者數万の婦等が思ひ〳〵の最屓があるゆへ何でも流行さふな物じやけれどさふハないもの今でハ最屓斗りして居る人が多て見に行く人が少いこれをおもへば外題と出來とが肝心さ唯藝ハ見功者の評判に預るとその評判が出て婦や娘が親父をせぶり下女や子ものも主人へ聞へるやうに芝居ざたをする兎角見功者の評判が大事じやあるまいか夫なら亦役者の中でも誰

ハ様数をよう賣る彼ハ婦人がひいきするのと申ますが是を思へば役者を見せていやみをしをるのお當世かしこかとおもはれます　アいや／＼さふでない其様数をよう賣るといふ役者ハ前の虎育やひいた來芝ごときの六十の余り親父で居ながら男女のわかちなく贔屓に預る既に見やしやれ女ばかりかひくやうなれど古人八方や由男ハ男迄がひいきしたハサ今又奥山や市虹をみたがよい何所とらまへて婦人の惚れさうな男でないそれでも贔屓がつよい又敵等はいやみもなしたすれど眞の藝でなければ誠の大將にハなられぬ近年古人眠獅あれほど憎まれた物じやけれどするほどの藝に仇な事がないそこで敵が居る芝居ハ端の役者が落て有ても敵ひとりして幾夜となうするによつて何でも角でもはやらしをる外の役者はそれが出來ぬよし又したり共眠獅の様にハ出來ぬ中に落があるいやも親眠獅といふものハ妙不思義な男じや既に今の息子眠獅が親の通りをするによつて玉ぶんに成ッて居るハサ夫ならとて親眠獅と息子眠獅と何ンぼの違ひじやしれハせぬ安古屋がいふた通りで行方ハ雪と墨ほんの親の子だけでよう覺えてするといふ分のことしかし器用になければ出來ぬおなじ器用でも今の來芝松ハ親のした藝でさへ親の通りにせず我儘にしをるそこで中／＼急に玉に成さふにハおもはれぬ敵こそ親來芝の眞似をしをつたがよいじやないかいや先生夫に付てあの中芝居の光五郎ナアあれハ又團藏の眞似を致ますると

世間で申ますがありやどふいふもので御ざりませふぞされバサ我師匠でもないものゝ眞似をするといふ事ハ一向つまらぬそれで評判のよいのハ顔似せのはやるやうな物じや何分師匠や親に似るハ能けれど外の者の眞似をしてハ我藝の力が見えぬ是ハ最う何の藝でも同じ事と先生ハ大のはなし好にて浮世草紙をよむやうにながく〳〵と噺されけるを万吉ハ唯あど打て居る斗なり先生万吉の袖をひき万しうあの嫁ミやしやれ杏冠の紋の付いた笄をさいて居るあのやうな事をさして見て居る親や聟の氣がしりたいとそしり〳〵嫁のうハさ時に先生参じませふの参りませふこれから祇園へ参つて最う時分もよろしい二軒へ寄ッて飯でも食ませふとどふやらこふやら根のはえた尻を上げて二三十ぱいも呑んだ茶の錢漸〳〵二人で十文置咄の果と一度に北の芝居も果太皷ドンカラ〳〵

身体山吹色　巻之二

河原面を過りければいそぐ心の程もなく抔と小聲にて謡の先生と連立万吉茶店を出て祇園へ社参し夫より一軒茶屋の前をすねたふりして通りければ西藤東中の女僕どもしやれた聲して呼かける中にも藤屋の方から目早き女僕万さんおよりな一ぷくあがつてお出な申來てゞ御ざりますぞへといふをはづみに万吉ハ誰が來て居るとはしり寄ッて女をちよつぽりひんだかへいちや付ながら床へあがり先生も同じく上れば小女僕ハ煙草盆片手に茶を持て來て万さん飯あげませふか御酒上ませふかとお定まりの通注文を聞く万吉ハ高慢ぎみにてヱ、しれた事じや飯斗り喰て居られるもの歟酒から持てこい能い肴を來せ南風物やにしめハいらぬ豆腐も一鉢でよいぞいや万しう爰の名物合せ餅といふハミづを注文したい物じやよしよし序に夫もいひませふこれやこれ合せもちを姥水にして持てこいと聞いて先生腹をかゝへおかしかる万吉ハふしぎにおもひ先生何を悒落なさるされば貴公の絶句がおかしい下拙かなにを申ましたぞ今貴公がいふには合せもちを姥水にしてもてこいといふたそれがおかしいヱ、さふじやなかつたかな合せ餅ハきこへてあれ

ど姥水といふ事ハいや姥水でハないうハ水といふものさハヽアそんならさふいひ直しませよいや〳〵向ふハ最う承知さ一体貴公うハ水を御存ないか私ハ一向存ませぬ夫なら追つけ持て來るミやしやれ妙な物じやといふほどなく女少僕が銚子盃酒の肴段〻持て來て酌をすれば万吉は兎角階子酒ならぬ階子あそびにてのむに上る遊びなれば肴がおこつてなんと先生これではのめぬ舞子二人ほどよびにやろうか舞妓よりハ新地へいふてやろうコレ一寸と硯箱かしやと懐中より小菊一折取出しさら〳〵〳〵としたゝめちよいとむすんでコレあの子此結文を引込の富田屋へ持て往てくれぬか委細ハ紙上に書てある程に是を持てゆけばよいまだ此みに書落した序に幇頭の傳八がなるなら來るやうにいふてくれ早うじやぞ〳〵といひ付やれば先生も下地ハ好物なり御意ハよしゑらい〳〵一ッ打てくれヱイちよ〳〵ちよんヱイちよ〳〵ちよんハヱイハヽヽヽヽと師匠も弟子も同座になり飲をれさすハさしをれのむハと九太夫にあらぬ黒犬縁の下からぬつと出れば二人ハびつくりヲヽ熊のやうな犬めが出おつた豆腐遣ふと田樂ほれば犬ハすかさず腮でうけ此犬大ぶん賢なやつじや爰等の犬はよう愛てあるハいこりや尾ふれ〳〵わんと云へ〳〵犬も木竹にあらざればいふ事聞ひてワン〳〵〳〵先生ハちよつぼり口合の淨るりにてわんとなく犬なく肥犬めチヽチンチンチンチンと万吉が口三味線油〳〵横ゑらい撥め塩町松屋町のと互ひの手擧に興

じつゝひとつ打てくれヱイちよ／＼ちよんヱイちよ／＼ちよんヱイちよ／＼ちよんハヱイハ、、、、、万しう貴公は粋譽やうをするいや先生の譽やうはきつい穴じや／＼と浮にうかれて居る所へ祇園の石壇の下あたりをこつぽり／＼と下駄の足音して富善の中居のお爪櫻井屋のお花と京井筒のお角を連て西藤の床へ來かゝるを万吉見るより結構／＼／＼と聲うら若き鶯のほう法花經も片言まじり竹にサア雀はなはんはよチンチテシヤ抔と盡作かゝれば中居は來るより万さん今日はようとばかりおはなもお角も同じ挨拶て上座につく先生はどふじやお爪と背中叩けばお爪はほんに一向おとなしいけふはようこそと錢にならぬ客はいつでも間悪に挨拶するお留のならひいやこれお爪貴さまはゑらふ美しう成たうまいもの澤山喰ふさうな何いひじやア、すかんいへ申万さん傳八さんはなアノ井筒とやら扇九とやら何ンでもどちらへやらそれあのなれたらであのそれなんたらじやヱ、しんき万吉聞かね傳八はならぬといふのかイ、ヱならぬドれ御ざりませぬ道付そこへ行によつてようしう申てくれと言ゝで御ざりました万吉聞ひて傳八が久しいのなりじやいやも御兩所のビリ方さへ御來光なれば恐悦／＼といふ所へ傳八來り席んで出て傍につくばふ雄かなといふおもかげかれた聲して旦那大きにといふ万吉みるより遅參／＼大將は何をしていたといわれて傳八はなにおつしやりますやら大底せいて參しました事

じや御ざりませぬ實早う御ざりませふがな早かりし定高どのと市虹の聲色でまぎらかし扨先生お久しい先御きげんで御うれしいどふしや傳八と小聲になり余り万印をよい子にしてくれなと洒落かゝれば傳八ハ何おつしやりますやらそんな事ハ御ざりませぬ大の得實家〳〵といふをもしらず万吉ハこれ傳八ひとつ飲ミやおつと御盃ありがたいお流れかい申ねれたらもてこいとハ旦那どふで御ざりませふといふてハ三獻のみ込んだ抔と口合だらけて浮戯かけお花さん一寸上ませよ花さん夜前ハ芝居前で人が物いひますのに無言居てきついつん〳〵て御ざりますぞへ傳八さんなにいひじややらこちや夕邊芝居前通りもせぬものイエ、、わたしがちよいと見て置ましたヤラじやな〳〵それハさふとお角さんあなたあの一力へお出る屋敷のお客さん知つて御ざるか傳八さん又わし迄をおたてよてイ、エ知つて御ざるかといふことそんならそりや何所のお屋敷の御客じやヱ何所のとて夫ツルサのマリの夫〳〵そして其そこの誰じやいなァおまへさんだれのかれのとておたのしミ〳〵ヱ、傳八さん矢張人を嬲つてじやこちやそんな壬生の狂言のやうな事してじや有ても一向合点がゆかぬとしつて居ても脇へこかししらぬ〳〵あの傳八めが人をなぶりくさる安房よ阿房めと傳八が脊中びつしやり叩せば傳八これハ迷惑お前さんがたは白身達ばかりくつゝりと樂しんで人の脊中くらハすはあんまりじやナァ申旦那そふじや御ざ

りませぬかといへば万吉たゞ鼻で返事し際が廻りて照らされた顔つき最う面白うない余所の契
情聞かふより是から先生流しかけよ何所へ行ふぞ北がわへ往賦といふを中居が聞ィて申万さん
何いふじややら其やうな氣のわるい何じややあらふと直にお供いたしますナア傳八さんェ、なん
の案じさんでも外へ旦那がお出なら我等がお手を取つて引込り富田屋じやサア旦那参じませふ
かと先生も万吉も皆打連て足元から鳥井の際を立て行跡ハ溜せし紙屑だらけ、門番の下女はどな
たもお歸りナ又お出ナお近い内にと聲〳〵や揚弓場のお弓が見付万さんどふでさァとおよりアと
いふ万吉もどふじやと答へ八軒さしてハぼれではなし〳〵と祇園町嶋さん紺さん中乘のお福の
鼻ハ門でも万吉が鼻唄〳〵と道々大の切り通し客を櫻湯や花吉町絵手に恋のやまとはし通ニ引込
富田屋が門口ぞろ〳〵這入るやいな幇間や中居が笑顔して先ほどから待ておりましたサアお上
りなされませ中居衆お煙草盆はモウ持てごんせと皆一同にどん〳〵〳〵と梯子だん上る二
階の座敷より高い調子や藝妓等ハ枕と賞する箱引よせ三絃袴襠もあり又べい〳〵と離座もあり
先刻から一ッ旗く太皷のでん〳〵傳八は唯我ひとり面白がる客が藝者を遊ばして段々と酒に成
りけるに花車か盃万さんちよと上ますおつとゝ盃取る手に續ハ万吉うつかりごとつうは是
いどふしても遣ハ るといひ〳〵飲んでナヲちよつとアイとお花ハ飲む眞似して尻眼づかひてもし

あなた先生是ハありがたいとずつと引かけ鼻哥ぶしびんぼゆすりの片手に肴そこらあたりを喰ひ廻して飲んだ盃クルさんとさせばお角ハァィといふ返事と一所に傳八がお間と出す手に先生ハちよつぽり洒落てあちらからハァィこちらからハお間いハゝ兩方もあいといふ物と聞くより傳八是ハおもしろい烏渡わたくしがお間致まして夫からお角さんへお上なされぱお角さんの返事のァィもわたしがお間も立といふもの申シ先生心〳〵の世わたりじやよなと芙雀が嘯れどふで御ざります先生悦に入ッてゐらい〳〵サァ間してくれ左様ならお間をしてやんしてどふしたへ日暮〳〵になァとうたひ出せば藝妓等ハ我身に當る事をもしらず三筋取つて彈かけ白粉べつたり祖母甚子老婦眉毛柳の木陰で申〳〵ハ辻君さんかいなあいな〳〵わしや間じやと傳八が浮にうかせばサァ賑やかに成ッて來て茶碗や鉢を叩きたてる其音四条の道場でミせた中華の戯場の囃子方におつたに負ぬやかましさこれハ早逆くから聞ひてゐれはよい慰な物なれども其席の客ハあまり面白うもなく本照らされにてらされ万吉そろ〳〵疳症の顏色にてコリャお爪およねを呼にやれハィといふより手を叩けば下から小女僕が長い返事て上ッて來るこれおの子三升屋のお米さんなるか聞ィてきて下んせァィおよねさんがかりかへ最うそれてよいかへほんに待たんせ中あなたお久しぶりじやどなたぞいふて遣りませふいやおれや今夜ハ早ういなにやならぬ

といふを万吉氣を付け先生どふじやお付合下されッレ此間から出る新屋の本詰があるじやないかハイさよで中万さんが言ゝじや本詰さんおよび違ひなしの●で御ざります何其本詰ハ●かそして美シいか美しいの何んのとて一向世界がちがふて御ざりますと聞ィて先生夫なら呼んで見よふかと先直が出來れば小女僕に言付呼にやる程なういでくるふたりの賣女樓席へ通り尻目づかひで席に付ば万吉少し眞顔に成ッて盃ハ何所にある中居か手早にお盃ハイ爰にと手に取てちよつとお待ハン／＼と手を叩き上張つた聲で鉢水持て來ておくれと高聲て鉢水取よせ盃水にひたし一寸飲んでハイ中万さんと差出す又盃が廻／＼するされ共爰が妙な物で二人の賣女が來た斗りに少シ席がしゆむ物也所へ女小僕がヒッて來て中居に何やら呼けば中居ハうなづき又万吉が耳に口万吉小聲で最うよいに藝妓が互ひの眼くばせも鼻哥諷ふてまぎらかす中居のお爪藝妓等に最うお仕廻の挨拶すればア、と藝妓ハ三筋糸をそろ／＼仕廻ふ臺頭の駒唐土のはても付馬にハあらぬ牽頭持もさようなら旦那最うおいとま今日ハ段々ありがたふ藝妓も同じく挨拶しとふぞお近いうちつれて席をざれ／＼たつか弓やかましかりける風情なり跡ハひつそり大水の引塩どきや玉くしげ二人の賣女ハ様子して用ありげにぞ勝手へ行バ中居ハ客に鳥渡申あちらへお出なさりませぬかに万吉先生寢間へゆく爰にも少ゝ鼻哥あり屏風のうちハおもひ

身体山吹色　二二

〳〵灰吹たゝき胸算用合手の賣婦ハそれ〳〵に寢所へによつこり出る月の眞ン丸顔は蒲團着て寢たるすかたや東山これから跡ハ穴賢

身体山吹色　巻之四

有るやうに見えてないものハ金銀ないやうに見せてある物ハ借錢されども金が延ると悋うなるもの也實や苦ハ色かハる峯の松風とやらにて金屋万太郎ハ召仕ひを一人も置ず唯親子のみ暮しけれども息子万吉が錢遣ひあらければ家内の有金に油断ならずと商ひハ息子にさせて其身ハ土藏の前に物草太郎といふ身で戸前錠前の番をする夫ゆへ金屋万太郎ではなうて金の番太郎じやと世間の仇口にかゝりける又息子万吉ハ祇園参りより戌刻になれど亥刻になれども戻らねばあまりの遅さに是祖母此万吉ハ何所へ往て居おるやらさればいナァわしも余り遅ひによつてもし怪我でもしやせぬかと最前から案じて居ますいやおれハ遅ひのをあんじハせねど青樓へでもゆきをりやせんかと夫バかり案じられる又あの親父どのゝいはしやる事わいのおまへハ万吉が金遣ふ斗りの事をいふて居さしやるがわしハあれが膝元をしばらくでも離て居ると案じます祖母が何をいふやらあれが戻りが遅ひとてよもや唐土へも行ハせまいそれにそなたのやうな氣のせばい事いふて居てなるもの賦いや親父どのこなたの氣がせばい何おれが何ンで氣のせばい事を

いふたぞさりとてハ親父殿の我屎は眼にみえぬじやなァお前のやうに錢銀の事といふとやかましういはしやる万吉が少とや多と遣ふたとて若い内はゆるして置かしやれイヤあの祖母がいふ事ハ此大切な金を無駄ずかひにさしてたまるものか甘ひといふもよい加減があるいへわしや万吉が金遣ふを得しかりませぬなぜといはしやれ昔の貧しい暮しで有りしを万吉が出來てから不思義と段ゝ今の内福さすれば万吉がもつて來た福といふもの世間でも金持を腹ふくれといひますゆへ万吉がもて來た福で是が誠の万福じやと手重い口あい親父ハ聞ひて女さかしうて牛賣られぬそなたのやうな事いふとおれは身の毛がぞんぞとする何ぼ万吉が持て來た福でもそなたや悴の儘にハさしやせぬ夫なら最うお前ばかり金の番して居さしやりませ其やうな悋嗇事聞くと後生を願ふ邪魔になるァ、ァ南無阿ミだ／＼いや是祖母共南無あミだ遣ひ置てたも先もしれぬ後生願ひに小錢を費し彼方の念佛講の此方の十夜參りのと付合を殖し色ゝの義理をこしらへ朝參りするとても無料でも出來ぬ米や錢を持てゆき慈悲深い人じやと世間へおもはれ寺の住持や坊主ハそこを付込色ゝの勸化事を賴む夫も其道に遣へばよけれど大方が内證の入用に遣ひをるいハゞ出家の破戒の元手にさすやうなものじやこわやの／＼あの親父どのゝいはれる事ハわしが乞食に米の一ッまみも遣つたり神佛さま方へ參つたりするハ万吉が一生行末迄もよかれがし

とおもふての事おまへのやうに氣強い事ばかりいふて後生も願はず澤山ある金も得遣はずに後の世へ金が持てゆかれますするかいやこれお祖母そんな事いやんなおれが金を大切にするは万吉が一生も二生も難義せぬやうにじやわいのイエ／＼おまへが何程そのやうにいはしやつても施行といふものをせねば行末を守る神も佛も御ざらぬほんに夫はさふと宿坊の住持さまがお頼で本堂の再興に金の五十兩も寄進せねばなるまいと聞くより親父團栗眼になり是祖母そなたは／＼めつそうな事いふひとじや今も今でおれがいふのを聞入ずまだ旦那寺の住持にたぶらかされ大まいの金を澤山さふに寄進などしてなる物か當にもならぬ後生願ひ此後は念佛講の付合もやめておらふぞ何所の逮夜じやの彼所の法談のと隙の費るはかまはねど散錢や冥加錢が阿房臭事に入ると聞いて祖母は眼に角たておまへ其やうな事いはしやるけれどまだわしが望みがある是聞しやつたら眼が覺ふで御ざらふぞりや又何ごさァいふて聞しやイヤ是は先いひますまいイヤいふて聞かしや夫ならいひますぞや外の事でも御ざらぬ大佛の普請がはじまつたら金の千兩も上る積りで御ざるわいのと聞より親父は肝を飛し拔売のやうになり敢て言葉も出ざりける祖母は土藏の燈明しいし丸行燈へうつしかへ万吉の戻りを待かね路次の門までのぞきに出る万吉は寄場駕に乘我町の辻まで來れば最うよい爰で下してくれと駕より下りて江戸雪駄の錢の音多羅盡の

鐘と諸ともに出合がしらに万吉戻つてたもつたか母者人今戻りましたよふ無事で戻りやつた余り遅かつたゆへもし道で怪我でもしやりやせぬかとせんど〳〵案じて居たサァ這りやに万吉内へ這入た所が親父ハ宵から祖母と爭合あまつさへ大佛のふしんの手傳の事に膽を潰し彼是腹にて万吉を見るよりコリヤ万吉わりや何所へ往て居おつたアイわしや祇園さんへ參つて夫から あのそれ夫あの戻りに芝居ミて居ました何をぬかすやら芝居が夜半まである物か最う幾刻じやとおもひをる子刻じやがイヱ芝居が果ましてから余り腹がへつたによつて二軒茶屋へ往て飯を喰ました最う其二軒茶屋が氣に入らぬ腹がへつたら早う戻ツて内で喰へよし又内迄もこらへられぬなら清楚貪食か斉藤柏戸へ成と寄て一膳めしでもなぜ喰ぬ又二軒茶屋へ往た所が今じぶん迄何して居た食喰ふべかりがなにほど隙のかゝるものでよう 勘て見さつたがよい大かた茶樓へでも行おつたであろイヽヱそんな所へハ往きや致しませぬ何つきおらいで夜の更るまでかゝるものかさふいふものなら戯場じやとて切見じやあるまい二軒茶屋じやとておのれひとりじやあるまいまた其上に樓臺へ迄うせおつた全体けふの同行ハ誰じや能物を思ふても見おつたがよい一寸壹分の金じやとて仇に遣ハれる物じやないこりや壹歩の金で米が二斗余り買ハれる米が二斗あると此三人の十二三日ぶりの飯米がある夫を粥にすると廿日の余も喰ハれるほんにおのれこそし

られ我等ハ前農業をして能覺へて居る共少二斗の米でも大底の事でハ取れぬ元の百性して見なれ夏ハ脊中を日焼するもかまハず麁食麁菜を喰て夜の中から起て野へ行雨が續けば難義なり旱魃には田へ水を取る工夫に骨を折秋は風の吹を案じ漸〻と取入て米にする迄の事をおもふて見よ中〳〵うつかりした事で壹升の米でも取れる事じやないおのれのやうな者を穀つぶしといふわい田わけめが此後ハ彼方へでも行おつたら聞かぬ商にも出しやせぬ商ひしたとて錢遣ひあらふきらして何所の鼻へ足るもので商ひせふより内に居て金箱の蜘の巣でもはらひくされとかみ付られて万吉も唯ぼつ〳〵と口の中祖母は差出て又親父どのが万吉を異見さしやるハ聞えてあれど相もかハらぬ悋い事ばかり大きな聲していはしやんな最う深更て世間が靜り隣り近所の手前もある鍋に耳といふ所へ氣が付ませぬかマア能御ざるいひたい事ハあした云へしやサア万吉も早う寢や親父どのも休ましやれ寐るほど樂ハなきものをしらぬ阿房か起てはたらくとは能いふた事じやなァ南無阿ミだ〳〵火の用心〳〵

身体山吹色　巻之五

一生の謀ハ若きうちにあり一日の謀ハ朝にあり爰に末廣屋與一右ヱ門とて金屋万太郎が家主なるが路次のおもての家なり或る時夜の更る迄哥書など取出してひとりぼつ〳〵よみ居けるに風と便裏の万太郎の聲して家内争ひのよし人閑まりて聞えければ彼與一右ヱ門もかねて万太郎夫婦我意の心得違ひを氣の毒におもひ何卒金屋の親子三人に心得のよしをいひきかし度思ひけれ共何ぞのはづみもなうてハさながらいひ出す事もならじとひかえ居ける所に金屋の家内翌朝になりて三人ながら朝飯の茶粥をすゝり箸下に置と直様万吉ハ風呂敷かたげて出かけんとするを親父留てこりや悴わりや何所へ行ぞアイわしハ得意廻りに行ます何をぬかす夕邊もいふていふ通り商ひはやめて仕廻内に居て金箱の蜘の巣でもとれといふのにといふを母親聞ひてなる程夕邊のおまへが異見あれも得心しましたで御さらふ夜るハともあれ晝の中ハ商ひに成りと出ねは氣がつまる程に晝出る事ハゆるしてやらしやれいや〳〵ひるでもきのふの樣なもので祇園辺迄漸く十二三町の所を子刻に成ッて戻りをる其時になるとこなた迄が怪我でもしやせぬかと案

じるではないか何しや有ふと今日からは何所へも出す事はならぬいや最う親父との丶前しやが今日からは万吉もとんと心得て用事の濟次第早う戻るやうにさしませふどふぞ聞譯て商ひにやつて下されいやお祖母いやんな今迄も其通りに成つた事がないわいのあの親父どの丶聞譯のないわしが是程に受合て不埒な事さすまいといふのにいやさ何ほどそなたがうけ合でも万吉にも手足があるわいこちの人の妙な事いはしやる万吉じやとて人間じやもの手足がなうてなるものか手足が有ても心さへ惡所へ往かねば能じや御ざらぬか心が往く氣にならずば手足ばかりがつきはしますまいがのされぱいやいこゝろが何所へも往く氣でなうても眼や耳や鼻や口が見たり聞たり嗅だり喰たりするによつて心を唆かす兎角みるは眼の毒じやさかいに万吉を何所へも出さぬといふのが無理かなるほど此方のいはしやる通り無理はなけれど其眼の毒になる事を心に見さへせねばよいといふもの何じや有らふと万吉が心にわしが得といひ聞かしませよイヤ祖母がまだいふわい其万吉にいふて聞かすといふそなたが夕邊も何ンといふた此大切な金を澤山そふに方々の寄進じやの放生のといふのみならずあまつさへあの大きな大佛の再興あらば金の千兩も上けるなどゝ恐しい事ばかり言やる若そなたの思ふやうに施行もしたりまた万吉にも金が遣れさし度ばおれが内ではさす事ならぬほどにつゝつと出てゆきやいやこれ親父とのいつの寢覺に

もいふ事じやが此やうに金の澤山出來たのも万吉の蔭で御ざるぞや出てゆけなら出て行ませふが土藏の金ハ皆万吉のものじやさふ思ふてもらひませよあの祖母が何いふやら万吉の金ハわづかの三百兩その余の金ハミなおれがもうけたのじやいゑ／＼共三百兩の金が元手となつてそれからふえた金なれば金ハ殘らず万吉の物で御ざる氣强い事いはしやんないや／＼祖母そんな理屈聞たふない又もするとおれが氣强といふが假令おれが氣强ければこそ万吉を地へ埋ふといふたバかりて三百兩の金のつるに取付たといふ物ィエ／＼是ハわしが信心からじやいや／＼いゑ／＼いや／＼エ、やかましいそんなら元がね三百兩出してやろふさかいに二人ながら出てゆけいかにも出て行ませふほどに三百兩の金に是まで年／＼の利足そへて來さしやれお前が水臭ければこちらも水臭いヲ、利足までほしくバ遣らふ其代にそち達是までの飯代や身の廻りに遣ふた金を勘定してこつちへ引落す此出入したら三百兩ハ扨置余程釣りを來さにやなるまいけれ共そこハ親子夫婦のよしみがいに了簡してやろ程にふたりながら早う出てゆけ／＼と我慢バかりをいひちらして世間の聞えもかまハぬ親父挑灯で餅つくといふ年比なれと悋氣に任せて朝から立聲路次突拔ておもてへ聞えければ家主ハ幸と羽織引かけ雪駄のおと路次の口からちやら／＼／＼チンチテツ、テンの間で出來たり金屋の門口這入るやいな万太郎どの御夫婦

御子息何れもお縺りなうて目出たい／＼時に夕邊からも壁越に聞いて居ますれば女夫喧嘩して居さしやるが全体常々から裏と表の事なれば色々の事聞かぬでもなしおまへ方はきつい了簡違ひで御ざざるやわしもいつぞは心得の咄をしたいとおもふて居ましたれど折もあらふと一日延に延して居ましたがけふといふ今日は今朝からやかましういふて居さしやる何を其やうに爭はしやるのじやと少し堅う出かけければ万太郎夫婦いやも誠の夫婦喧嘩といふもので何と申上ますやうなわけのある事では御ざりませぬァ、いや／＼其様に隠し包ましやる事はない家主なり借主なり裏と表の事なれば内輪同前心置しやる事はいらぬ爭ひは大方息子どのゝ事であろ一疋の馬が狂へば千疋とやら兎角あらそひといふものは元獨りからおこるもの一躰平常から息子殿は親に似ぬ器量ものと見へるしかれ共また年がゆかぬによつてどふでつまらぬ事は聞えてあるおお袋もいかに愛子なればとて誠子を思はゞ其やうに甘うしては今てこそなれ万吉殿が成長に隨ひ手に合ぬやうに成りますぞや男の子に限らず娘の子抔でも世間に何ぼも方のある事又御親父の心得違ひといふは外の事でもない先假名でいはゞ悋も能加減がある始末するも程らひがある何分息子殿の遊び好は悪けれど世間の義理も法もかまはず兎角晝夜とも金の番して居さしやる夫ては金がへりもせまひがふえもしませぬ 尤在所での下作から田地の作徳をもて來るので

年中の飯米や小遣ひ錢ハ御ざらふけれど既に息子殿が金遣ハれると金のへるのが目に立ツ爰を思へば商賣といふ物ハ結構なもので金遣ふともうけ遣ひにすれば元金のへる氣遣ひハ御ざらぬもうけたら遣ふもよしもうからぬ時にハ遣ハぬがよし心得一ッでどふ成となる物じや万太郎殿爰を能聞かしやれおまへのやうに土藏にばかり金を積ンで置てハ有る所にはかたまりない所にはたまらず夫でハ世間がつまる其金を商賣に入れて廻ハさしやると金が子を産む道理なりまた遊金あらは安い利足で丈夫な所へ振込で置がよい夫も高い利足に廻さふとすると元金を船する唯欲に迷ハぬやうにして金のまハる工夫すれば万吉殿の遣ひ金抔ハ何の苦もなう涌て出る何と左樣では御ざらぬか成るほどお家主樣の仰の通り私ハ隨分さやうに存シますけれど妻や悴ハ中〱渡世気が御ざりませぬ別而祖母ハ夜前も夜前で明た口がふさがれぬやうな事を申ておりますイヱ申お家主さま手前の親父どのハわたくしや万吉を盜人のやうに思ふて居られますさふながあの万吉事ハ少子細ある子で御ざりますなるほどお袋皆までいふにハ及ぬ息子殿からの仕合といふ濫觴も聞て居ます誠に不思議な事じやによつて御親父のやうにして居ては何の事やら譯がしれぬ何ぞ一家を發したとか又ハ株でも定つたとかまだ〱不思議が行屆かぬ全く息子殿不行跡も御親父のきびしいとお袋の甘いとから發た事先御親父のきびしいのを喰物の加減で

いはゞ辛過たり苦かつたりするやうなものゝ所で口直しがほしうなる其口直しといふので放蕩が起る又おふくろの甘いのは喰ふ時には味けれど其甘い物が腹中へ入てがいをなす爰を思へば辛過ても苦過ても甘過てもならぬ物じや日に三度づゝの食事に氣を付て見さしやれ人の家内人の心持皆是同じ料理方なものじやわいの折角天から授つたる果報を持ながら今迄の樣にして居さしやつたらぶんには沈香も焚かず屁もへらずといふ物まだ屁が出やう事はしらず沈香は愚けむたい目をする斗りじや御ざらぬか時に万吉殿おまへは中々發明な出生なれ共遊事に心を儘作放埒に過て人が二町飛べば三丁も四町も飛ぶ氣に成らしやるかならず友達が二三町とぶ共一町ぐらい後れておくが能唯世間へはへりくだつて氣性を高う持て居るのが賢といふもの悪い友と付合へば朱に交て赤うなるゆへ敵はたあいなしじやと人が笑ふ能友と付合ば麻につるゝ蓬にてあの人は樂人じやと人がうらやむたとへば同じ金つかふても死ると活るとの違ひがあるやうなもの爰所を能う心得商賣を大切にして忠孝知仁勇を心に守らしやれさすれば家も脩り世の義理も付合も出來るといふものゝ忠孝はいふに及ばず兎角人間の身には知仁勇の三ツを備ねばならぬ夫にお前方は此三ツが揃はぬなぜといはしやれ御親父は知ありて仁勇なしお袋は仁ありて知勇薄し御子息は勇ありて知仁なし漸々三人一所にして一人前の知仁勇也しかし其三人〆ての知仁

勇があるだけで世間がおさまるやうなものじやそれが又三人ながら同じ様な氣で知ばかり有て仁と勇とがなくば我儘ばかり發るそれでは世間が濟ぬ又仁斗りありては身体が持てぬまた勇ばかりでは町家は物事に埒があかぬ何分此三ッを一身に備へ度事也定めておまへ方は知仁勇をかねゝばならぬといふ物は上ゝ方の衆のみと心得て居さしやらふが武士の中でも知仁勇をかねたる人は大將で御ざるはサ貴賤おしなへて人といふものは此三ッを備先町民でいふて見やうなら渡世の軍配を肝要とし召仕ひの雜兵に勇氣をつけ家内の國を治むれば其身の一城崩れず唯挊に追付貧乏なし然る時には借錢の淵を浮出金銀の山をつくるしかし其山を作るにも足場なうては作られず依て身体の大きうなるに隨ひ商の道へ元手を入て廣くしかふして後足場を堅め段〳〵と積上ねばならぬ中〳〵此やうにいふ野拙が一ッも賢さふな事はなけれどまづお前方も知つての通り親ゝの代から今に相かはらず渡世も勤め隨分世間の人へも愚痴ながら付合又我好む所の遊び事もして樂むこれといふも親ゝに足場を掛て置て貰ふた蔭といふものさりながら金銀の山は終の事では作られぬ物なり三十余丈の黄金の山や白銀の山を盧生でさへ夢に見たばかりじやげな夫におまへ方は金銀を澤山に持て居て増てれつきとしたる息子どのはありし何不足なき身をして居ながら知仁勇の三ッが三人おもひ〳〵なれば知と仁と勇とがかち合て此様にやかましう

なりますと聞いて三人夢の覺たる心地しいや最うお家ぬしさまの御異見でとんと何も角も迷ひがはれましたといへば家主悦びそんなら最前からわしがいふた事お前方の耳に留りましたか夫ではわしも悦ます何じや有ふとこれからハ何所ぞ能家を買ハしやつて急度した商賣を初めさしやれ又息子殿ハ一器量ありげな人なれば早う嫁女をむかへて遣らしやれ其時にこそ御兩親ハ嶋臺にみる尉と姥千秋万歳の千箱の玉を奉ると謡の聲に乘じつゝ今迄ありし家主ハ此家の金の魂なりと蜘の巣にかき紛れ土藏の戸ならして入にけり万太郎親子三人ハ家富榮ふ悟得て目出度春をぞ迎ける

仲則艷談

序

暖簾風に飜て。家名人を招と殘口も現になれバ。賢を賢として色に易よと唐土の親仁が忘言をいゝ。夜毎日ことに通ひ來る客ハ妓女の譯知らず。しらず知られぬ中裏の。小指も及ぬ腸を穿鑿し一切遊の十二匁三匁の釣を合して。一部の書をなす其高慢のはなは堀拔の足代よりも高く。聞た風土の癖と穴呑込山と筆を採作者ハ當春突出し流籠。譯も白齒の新狂言晋ノ謝安に勝ぬ氣てトッチリトント挽三味に氣ハ二上りの騷唄馴染の客の相の手に。出て居る妓女を一寸とこつちへ借駒の。ちよん／＼幕の樂も朝には茶ャ屋の三下りを喰食客の權八さんとなる叓鳴呼恐入相の

鐘に夜分と替り。御先眞闇とならん叓を愼こ給へと己が革羽織も顧す。寸間と出番の送かへり。予も此書の婦世玉となり蝶場の脇に居て客帳のはしに是を誌し。御連申ナ御客タヨウと爾云

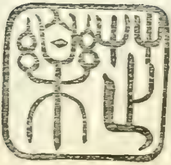
于時寛政十一のはつ春

自序

天地一大戯場とかやさん橋の華道あれハ見通の本舞臺あり大暖簾かけたる鼠木戸あれハ表に櫓あり式三番の翁蒿麥あれバ八疊敷へ三人のわり込あり手の有妓女ハ直して客を留場あり是によつて見物の艶次郎寶物と共に魂を失なし世帯の廻りしかけの違ふ時ハ親仁勘當の張元となりお冷飯をくれす勸善懲悪まのあたり金銀を陣皮のごとく抛捨るやにさかりハ石部金吉罸あたりと是をいハんや潘安人かいろ男も張孟陽が醜男も淫女の媚成も終老成〱の早かれり是こな天の作者の正木通り豈是を恨こんや身のための寢言長口述さやうに夜番のひやうし木カチ〱〱

赤松仙が
石をうちて
羊のとし
平代橋の
長き日

三多樓主人
戯家述



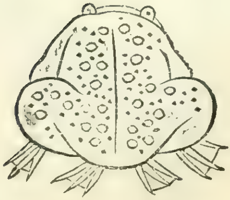
序

東の世界を日の本といへハ人皇の御宇に神功皇后洲崎にて髪を洗ハせ給ひ弓を鬢差にして弦を小野川元結にしめ矢ハ笄と成り籏ハ仕擧の腰帶となし鎧の鞘て鐵漿を出し武内宿禰に翁蕎麥をうたせ龍宮の名玉ハ華火の筒から吹上ると察し一の鳥居の高キに旭暉き二軒茶屋の俎板に庖丁光り三間堂の通し矢にトキの聲を發す罾の篝に白魚を寄五百羅漢の家根て鴻の鳥が遠見し六万坪の裏浪ニ用錢を吹七匁五分の線香で陣取をなし八幡大盡と成て一ッ廓を構へ羽織末社に三絃ちりからで責させ既に富賀川の深こへはまらんとする其阿奈を

捜し仲街艶談と略小冊に綴り小春の眠を覚し終れ紙次が帋屑籠へ入らん事を知らずミづから筆を採ッて

東風亭如柳誌

紙花を貰ふ
ひつしの春

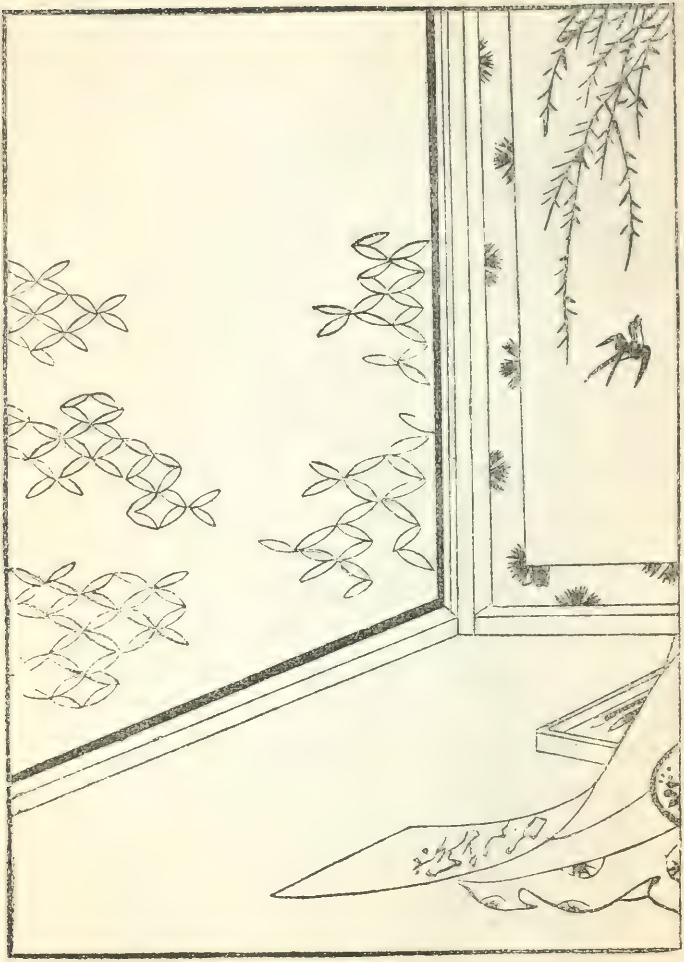


品目

一すつはりかいた狂言のひつかへし幕

一すつはりてうす悪口のひやし幕

一すつへりきまる口舌の世話幕



發語

金の鯱ヨリ辰巳に當て一ッの女肆有大磯となづく爰に來りては危きに近寄ざるときまじめ成る君子も忽鳴子の音に神を飛し八兵衛となく權七となく浮れて通ふ安房宮秦の始皇が奢もはだしで欝氣の捨場所から迚顱巻安坐も目にたゝず若ィ者の生存在船頭ハ諸侯の如く客ハ倍臣に等しく八疊敷に三人の込床屛風と〳〵の背中合に夜もすがら太平樂をいふ有實情とした口説ありかゝれて迷ひ突出されて悟る有御客だヨウお連申ナの一聲には魂先へ階子を上り聞た風恐れる潮來を唄ひ燒印の有る勘畧枕に何分誤る夜着ふとん送り舟の勇なるは西施の美女を伴ひて五

湖に竿さす范蠡が昔もかくやと思ひ熬酒の匂ひハ萬客の鼻を貫き駒下駄をもつて歸る廻しあれは上艸履を火索箱へゆひ付て提て來る船頭有宵泊つけた客の來ぬ間に盜をうる有馴染の茶屋に隱れて外の茶やへ行尻のわれる有とつちりとんた新手にはまり朝には親仁のゆづりし家と藏を棒にふり野暮にせしめられるも是皆女色の迷ひなりア、愼しむべきは此道ならんと悟りがほに云ふもの〻捨がたきハ此迷ひなり色にそやされこんななりになられたと云ふ人物は和漢あげてかぞへがたし且惡こ恐るべきの妖洞なり

仲街艶談　　戯家山人著

深泉遊子

【八幡入相】ボヲウン〳〵　折から本町邊のかゝやのむすこ治兵へ来ル濱もとのくゞりからかほばかり出すと【女】ヲヤ紙治さんサァおあがんなせへしナ【治】いゝか聞て見てくんねへ【女】ワたいらが内に出て居なせへすよ【治】そんならちよつとあひてへもんだ【女】小春さんをよんであげやせうマァあがんなせへし　トいひすて小はるにしらせにゆく小春といふハきのくにやのかゝへにてこゝでの板かしら也かねてふかき中にて死ねしなふといふほどのぼせてゐれバ文のしらせをとびたつやうに思ひざしきを明けてこゝにきたり【春】きのふ心まちをしてゐたになぜ來なはんねへ市場の富倉へでもいつたのかへなんぼをんミつにかくしてもミんなワたいれせうちのまくだよ【治】ヲキヤアガレそんなげんきでれねへれしよ會か【春】イ、エ新川の太兵へさんヨこんやしまつていろといつてよこしたから來てゐるが外のきやくならしやうもあるが太印れとかくおめへの事を何だのかたのといつてゐるからとうもこんやれつがうがわりィよ【治】そんならすぐにこんやれけへらうが手めへにきうにはなさねへけりやァならねへわけが有ョ【春】久しひものさ又ふどころが淋しひといふ事かへ【治】マァそんな物だ耳をだしな　何かはなしてトいふもんだから少ミれこがなけりやァつまらぬとか何とかいふもんだからどうぞあしたまでに

さんだんをたのミのこんひらだ地ぐちまでくめんのわりひ時ハわりひやつさ【春】おめへハと
んだいゝきぜんだの耳をだしなト 小こへにて 此ごろハよりさハりにかんを付るやうすだからてへ
〳〵しにくひかたちたがどうするものかおめへの事だものはたらひて見やせふはなしてへ事も
あるが太印の目にかゝつちやァくめんのじやまだからはやく歸ッてあすの朝きねへそれまでに
くめんをしておかふヨ【治】そんならモウおさらバだ【春】又道よりをしなはんなヨ【治】く
そでもくらへ トいひすてゝ立かへる小春ハ金のくめんをどうしてかふしてと此所いつからむごんにて太兵へが來たらすつへりかくしん手か有そふなものとふところへかほをつゝこミ錢をよまふといふミへニてゐる此むねより出たるきやうげんにハしぶ
そめのまへだれきいたふうのゑん次郎手合もたちまちふちころされてつまらぬ身のうへとなるべしア丶おそれつゝしむべき事にあらずやトとんたまじめだね 深き川のおきやくハたへずしてしかもも
との客にあらずかつきれかつなじミて久しく來る事なしといへど神無月の御さうだんにて手鍋
をさげしミつたれとなる有玉のこしにのり御しんざうとなる有しつかいうきよハ大からくりた
ちまちかハる人の身のうへ中むかしのころなるが色のミなとのはんじやうに出ふね千ぞう入船
も戀のおもかぢとりかぢのさつさおせ〳〵ときをつて來たる一ッさうのたなゝし小ふね深き川
の仲の町濱本のさんばしへつけはまもと〳〵の聲に女立出太兵衞さんおはやう有ます子小春さ
んがいつそおまちかねで有ますヨサァ御出なはいましト ふらてうちんをもち先へたちチンチ丶律
の調子にうかれはま本のくゞりをはいると娘ぶんが立出御定りのせりふ有て是よりらんちき大

されざとなりざしきのしやれにハあごのかけがねもはづしこくうむてんのお先まつくらとなる坐しきのおもむきハあまりそう〴〵しくしてかきとれぬゆへこ丶にもらすとゞどういふひやうりにか床(とこ)おさまり女つ丶茶(ちゃ)わんに茶を二ッくミちよひとつま持(もち)きたりたばこぼんのうへに置(をき)すてせりふあつてあとさしむかひ

【客太兵へ】雪の下あたりの米問屋のばんとうとしハ三十七八のやせきすにてせいたかくいろ白にてにがミばしつた人物鉄おなんどのつむぎのひとへもの花いろな丶このおびねづミのたびをはきりうもんのはおりをた丶んでまくらもとに置三ケ月なりのかへたばこ入にしかミのかなものを打白のおもたききせるにて大あぐらをかきたばこをのんでゐる

【女郎小春】年ハ廿一二くらゐうりさねかほにてすらりとしたふうぞくゑちごあひさひをきて花いろしゆすの帯を〆た所へどんな見たをしに見せても板かしらと見へいつならしにうりつめるといふしろものなりあんどうのまへ丶すハりかんざしでかミのほつれをなをしてゐる

【太】とうしたしやくでもおこつたか【春】イヱちつとくろうが有るからさ【太】そのくろうも色(いろ)事のくろうならやつハりたのしミだろうヨ【春】ナァニわたいらハ色事と土用ぼしハした事ハござへせん【太】おきにしろッリャァおれさまかいふせりふた手めへのやうな五六度(たび)もせんたくしたふるかハはをりがそんなせりふハおちがこねへなんぼ人前(めへ)のい丶事をいつても紙治といふやろうにやァてめへもかうせいのほせてしかけもから明(あき)でミんかそんりやうやのやりくりといふ事をこつちのむねハとうにせうちだい丶まんだそれにしりつ丶しけ〴〵かよふも手めへにまよつたからたかういつちやァのろひ句たが人の笑(わら)ふもかまハす雨がふらふが風がふか

ふかやき印の引きりまくらをしねへけりやァねたやうにやァおもハねへハこらほとにおもつてゐるおれをじつらしくかきころべしどうめへつたかうめへつたもミんな紙治がしをくりをするやうなもんだ何ッといちごんも有めへが【春】それへにあだに思ひなハる事ハねへわたいがくろうといふハきのふとつさんが來てかゝさんが大病だからくすり代やぞう用が入るがおれだつて天びんぼう一本でかせぐしやうはいだから金なんぞハ夢にもミた事ハねへとかくたよりに思ふハ手めへばかりだからとうぞ四五兩くめんをしてくれ出來すハ年をきりかへねバならねへといひなはつたがおめへかわたいか身のうへをいろ〳〵に思つてくんなはるお心だからどうぞおめへの所へいきてへもんだと年ッをかぞへて見たらモウらい年ッだがね今年を切りかへられてハ是までせハにしてくんなハつたおめへにぎりハかけるしといつて又おめへにハいひにくしいつた所が紙治さんの事ばかりうたくつてゐなはるから【太】それて云にくひといふのかッリャァ門ちがいだらうそんな事をきく者ハ外に有だらう【春】わたいもおめへさんのすいりやうのとをり紙治さんにハまよひやしたが親かたさんがこんだうもすへしどうの事をいひなはつて切れろといろ〳〵ゐけんをしてくんなはるし茶やのうハさもわるしわたいもかんがへれハかんかへる程つまらねへ事斗りゆへ治平さんの事ハふつつり思ひ切ッてしまつたからかならすわたい

かやうなちゑのねへものでもゑんとか何ンとか思つてかわひがつてくんなせへし【太】なるほど手めへハがうぎにきれいな事をいふかたゞそう口をたてハとういふ狂言(きやうけん)かそう味(うま)くハばかされねへそんな事ハくつとおきなそばだ【春】おめへもうたぐりふかひ事をいひなはる今のりくつをせうちさへしてくんなはれバおめへのすきになりやせふうたがひなハるハ是だらう トらでのほりものを出し 治平さんを切れるせうこにハ此ほりものをけして見せやせう トかねてやうゐのもくさをとり出しすへけさんとすれどこのきやくも二もくわねうたがいふかひおとこゆへ【太】コレ小春ほりものをけしなぞハモゥふるひしゆかうだそんなやきなをしじやァおらハのミこまねへヨ【春】ソシテどうすればいゝへ【太】おれにむしんをいひかけるなら目のまへで治平をつきたせそうしねへけりやァ今までばかのむきミにされたおれ様の此おつらがおたちなさんねへハ是がいつちちか道ぬけうらのねんばらしだサァどうだしんこでハねへがつき出して置てむしんをいへへんたうハナ、、何とだヱへとかたきやくでなければ今のうき世がいくものか 小はるハのつ引ならぬわらじやうずくめも男のためとくハんねんし目のまへで切れんとかくごをきハめて【春】ソリヤァわたいかねがひさへせうちしてくんなはればずいぶんおめへのむねのはれるやうに目のまへですつハりつき出して見せやせう【太】すこしうれしくなつて こいつハおもしろひ狂言だハへッゥさへすればおれが顔(かほ)も立つといふもんだかほさへたてゝくれりやァ十両が二十両でも出すハ【春】つまづ仕くとも出來たと思ひ そんならあさ直(なほ)しにし

てまつてゐなはい治平さんをよびにやりすつパりつき出しておめへのかほをたてやせうかわた
いかやうな手もあしもねへものでもこらほどまでにしんになつてゐるからふびんと思つてくん
なせいしわたいひとりてこんなに氣をもむにちつとハおちつかしてくれてもよさそふなもんた
何でもあしたの朝はすつハりかたを付やせうからマァ寐なはいやし 帯をとき□□□としふんも 是か有ッてハじや
またョト 太兵へか□□□□□ くう□え□へ□ぐり□□□し 帯もときま のぼせてゐなはるからいつそあしかつめたひョ【太】見れバ見るほど
まよひのたねだト小春がかほを見るそのつらのゐろき下を見れバ切ゥたこの付ちゥの下□しどけなく もゝの色白くきめこまかなるを見てハ十二匁でへなひものとじやうに成つてゐる 帯 【春】それでハ□□ ね手
がわりいからもつとこつちへよんなはい しつかりだき付て口びるをくわへると
□□□□□□□□□□□□□□ ト□□□□□□□□□□□□太兵へかからだへかつほのさしミへ うにかうるをかけしごとくなゥいつかうのろくはなげのポン只をさゝれて
ゐる此所の妙言作者しハらくあづかりなり又そのとなりざしきの屛風のうちハ【善六】きん川あたりの酒問やのば
んとうとしハ三十四五でつふりとふとゥていろくろくいつかゥな男見たをしに□せるとこう兄をくらゐなしろものにていつかうとゥゑなし めめんちどこのこひねへとのひとへものたかのはのもん所帶ハ小くらしま化いろのたひをはき化よしはりのきせるにてーふくちよいとのミ
はたひて【善】是ェ、わりやァとこのかゝへかしらねへかいゝかと思つて宵から大キなつらをしやァ
かるかコレくかいの身たと氣をよくすれハほうすもねへすりこきめたれだと思やァがる善六様た
そほんのこつたかきやつと生れるとすいとの水をのんたしやうかにやァ□いつそ一トとをりの夢
ハ見つくしてゐるそョわいらかやうなやつハ八まんさまへ男けいしゃかこま經をあけハしめへ
しわり合てきらすしるをくらやァかるくせにきいたふうをしやァかるな此善六さまなそハナ何

屋のりやうりはんれあまロてとんな物を出し何やのれから口て出しものかとうてあすこの内てれらうそくか何挺入ッて水油かいく升入ッて炭かいく俵いつて自前の子どもれ十二匁の内を茶やへいくらとられて子どもやへれあとをいくらとられ床やのそん料（りやう）が此くらゐな床でいくらするあすこの内にやァさしきがいく間（ま）あつてせつちんがどういふかつ手に付ているまで御ぞんじな通人だぞよ【百】モシヘマア しつかにしておくんなせへやしわたいがわるかァあやまりやせふあんまりでごぜへやす【善】なを大キなこゑで なんだしづかにしろもすさまじひれミかんかごの子わかれかさんじよの夜とぎをしやァしめへしうぬがたび〳〵ざしきを明ヶやァがるから金のめうがを一ㇳとをりいふのだ【百】なるほどざしきを明ヶたれわたいがわるふごせへやすかおめへそうあじに思つてくんなはるこたァごぜへせんこのごろとやをしまつたしんこかなんぞのやうにこゝの内の手めへもかつこうがわるふごぜへやすれな【善】かつこうがわりィとれたれにいふ太平楽（へいらく）だかつこうのいゝわりィときの多ひ女がくしのほんなミをするやうな事をいやァがるてめへのおやれなんだよそばうりかふかしたてさつまいもでもうるやつだらうに人がいへれいふ事だと思つてかつかうだのべつかつかうたのとすきなねごとれおきにしろ何ッだよびだしだの引だしだのと山だしが聞てあきれるれへ トやかましくまきーたごしやべるゆへ女郎はあきれかへりだんまりでゐる所へこのきやくをのせてきた舟やどや女がきておためごかしになだめるとなを大きな

こへて【善】コレ八や手めへまでかむかふつらへまハりなんで おれをへこませるのたつりと引手に五せつくの樽しやうゆでちや屋のかたをもつのか是までわれにもそれそうをうに目をかけてをくぞ夫になんだおためこかしなしよにんなやつはおつき合ハねへ ふねでかへらにやァかへられねへ所じやァなしちつともふしようのふのじもねへハへ トおこりちらして太平らくをいふゆへ内中がよつてたかつてだまかしてかへしてしまふとあとへひつそりとしてとなりざしきのわらひこへはじめて聞へる「ほどなくよも更わたれバ今までらんちきさハぎのざしきもたちまちいびきにかハりせんどうもしやう〳〵が出ばんに出たごとくとつちりよつてたをれわからぬねごとをいふころ帳場のわきのしかミ火はちにかゝつてゐるしんちうのやくわんへちん〳〵とうなりおきばんの男ひとりつくねんとしてゐる小春ハ太兵衛にむしんをひつかけて有ゆへ思ひ入かきのめしもはやはなしもときれとやかふする内夜へからりと明きやくハミんなかへつて子どもどうしのはなしこへがミゝに入て【春】目をさまし コゥ太兵衛さんおきなはい モゥ五ッだよ トゆりおこされ夕ァのつかれにてやう〳〵目をさましのびをしながら二かいをミればからりとして男がふく時分かねて朝なをしにして治平をつき出させるつもりゆへはをりをよびにやると女もおきて来りけさへまだなんにもござりやせんとひたしものとふわ〳〵とせうがをミそでやひたやつの三ツものでのミかける小はるへかたすミにて紙をかき治平をよひにやりすつかり狂言をかく【娘ぶん】小春さんゆへいつてきねへな【小】アイ太兵へさんいつてきやすおしつけかの人もきやしやうわたいがじつかうそのじやうはりだからまつてゐてくんなはい ト八文字やのゆへ行く入ちがつて紙治来りとなりざしきへ入ると小春が外心なきへせうちなれバあいたいのやりくりにてさあらぬかほにてはをりをを三めへかつたりなにかしてさわひでゐるとほどなく小はるへゆからかへりだんまりにて紙治がそばへすハり何かはしまらぬかたち【治】コゥ小春だんまりのうつむきハ九だん目の小なミのきどりかよしてくんな手めへのやうなかハがそんなまねをしてハきりおとしでふせうちだ【春】いつかうあいさつなく アヽいつそしやくがいてへ ヨト立ツ【治】ぐつとかんしやくて 是エヽなんのこつた用があるのしまつてゐるのへちまのとよびによこしやァがつてなんだしやく

かいてへのはらがへつたの錢がやすひのとゝんだやつじやァねへか【春】（へこゝがきやうげんの山といふものゆへ）そら〳〵しく紙治さんあんまりきのつよひこハいろをつかひなはんないかに錢の出ねへ口だとて太平ハおきにしなせへしト（くつとつよくいふ）【治】うつてかハつたけさのあいそつかしハ何でもしさいがなくてハかなハねへわりやァおれがやうなしミつたれにくつ付ひてゐてもしよせんはじまらねへといふかたちだからきれてしまハふといふりやうけんで今のやうに氣づよくいふハきれるといふなぞか【春】なんだへなぞだへなぞ〳〵なんだかわからねへョハたいがなんぼじやうをつくしてもおめへのほうにじやうがねへといふもんだから切レやすよ【治】手めへハ何ンだかわからねへ本よミをするなじやうがねへのかぎがねへのとひとりものが物わすれをしやァしめへしコレエ、われと切レたといつて野かげミちできせるをおとしたほどふじようハしねへわへ【春】おめへもふじやうをしねへけりやァわたいもふしようハしねへのさ何もハたいにそんなにあたんなさる事ハねへ【治】（なミだぐミ）かたミこそ今ハあたなれだたがいにとりかハした此きしやうをはだミに付てゐれハふたり一ッ所にゐる心とはなれてゐてもたゞしやくでもおこらねべいゝと手めへが事ハかたときもわすれた事ハねへハ人のゐけんもきゝ入れずおやぢやおふくろの目をしのびふかくなつたかゐんのきれめか親のかんとうゐそうろうのはかなひ身のうへでもやつぱ

りこひしくひどひ工面の心つかひあげくのはてにつき出され此治平がかほをつぶしそれてわり
やァ済ふと思ふか【春】アイサすまぬ心の中にもしばしわたいが心ハとうからすんでおりやす
【治】スリャどうてもわれハ此おれを へとなりさしきのいたこ聞へる さきはきりつめぬしへハ立たす心二ッに身
ハ萱つへくちとなミだハ女のとうくなせに男ハつらひやら【治】こへのふるへをかくしながら コレ小春とても心
のかハつたわれにハんにもいふ事ハねへかとりかハしたきしやうハこのとをりた トすん／＼に引さき小春にふつつけ
おれかきしやうをかへせ トこハひかほ【春】ゆたいも其とをり ト引さきまるめしてまふ【治】ア、けふといふけふ
人中でつらはぢかくもいつてかへらぬ不孝のばち トなミだながらたちあがり 小はるモウあハぬぞと にらミつけはしごばた
くあたりちらしてかへる【春】アノこハひかほを見な つぎの間より六兵へげいしや立出【太】それでこそおれがかほが立ッた是か
らハ日本ばれだ トはながミ人よりミ紙出しかミにひねり サァ小はる是をマアとつておけたりねへ所ハ吉田やまでいつて
よこせ【作】アイ トいつたばかりにふところの紙へちよいとはさミ先ヅしめこのうさぎとおちつき いつきなはる【太】すこしかんがへこ あすあさつてハ
かうだからしあさつてこやう【春】ほんとうかへ心まちをしてゐやすよ トいふ所へ下より舟やど来り【久】ハイ
おふねがよろしふござります

是より第二ばん目始りさやうに

小はまやのとなり冨岡といふばけ茶やにて小はるハかねて次平にあふつもりにて太兵へがかへるとぢきに兄弟ぶんにたのミおんミつにみたやつておきよひとまりをつけてゐる所へ治サ来り盃事有て床おさまる〔治〕ねころんで小こへにて　晝(ひる)の狂言(きやうげん)ハ
〔春〕すつぱりといきやした　ト床の中へはらばいに成一ツふくすい付てのむ〔次〕コウ小春おれにも一ツふくのませや〔春〕
すひつけ持てゝのませる　いゝかへ〔次〕ム、〔春〕はた〳〵たばこ入の中より太兵へをかひてもらつた金をだし　次平さんきのふのはなしのものをこ
ゝへ入てをくよ　ト紙次がかミ入の中へかねをいれる〔次〕ム、どうもそいつがなくッちやァ心がおち付(つか)ねへ〔春〕
モシたらさァあしたにもそういつてよこしねへ　トはなしている所へ小はるが兄弟ぶんのおつたこいつハもうたんのうさせて手水に立らうかたとをりながら〔蔦〕お
ひさどんくすりが來たらおせわだがのあつためて下せへ　トいひ〳〵きたる屏風のうちへ〔春〕お蔦さんちつとはな
しねへな〔蔦〕ヲャ紙次さんまじだね〔春〕お蔦さんひるまハおかたじけ　トいふ所へ〔女〕てうしをもちきたる
〔次〕一ツのまつせへ〔女〕此ころハ酒ハモウいつからでござります〔春〕一ツのミねへたて
引だれの　トつぐ〔女〕ごぜへます〳〵〔次〕かミ入より一角とり出しサアさかなとだす〔女〕ハイ是ハ　トいただく「となりざしきて手のたとチヨン〳〵
下の方でアイゝ引〔女〕こんやハ何ンだかいそがしひと出してハねへョこれハおありがたふござります
小春さんよろしふハイおやすミなはいまし　ト立てゆく〔治〕おつたさんあをつきりとせふついでく
んねへ〔春〕よしねへのミエ、もしねへで〔蔦〕てうしを持ち笑つてゐる〔治〕いゝハなついでくんねへ〔蔦〕
わざとこぼれる程つぐと「小はるじきせるにてたゝきおとす〔次〕とんだきちがひだ〔蔦〕それ見ねへ〔春〕わたいらハこのころハ大ひ
つてんでさし物もミんなやつてしまつたしぎたころされてもねへ〔蔦〕そのはづさミんな紙次

さんといふ色男がむかふつらだからはだかになつてもたのしミだろうョ【次】おつゥ合ハせるの
おめへもしよせへハねへハェ【春】モゥあしたァさハり用事でもつけて引ッこまふこれじやァ
出られねへ【次】コゥおつたさんちよつとうしろをむいて見せなおめへのかミハとんだすいた
かつこうだ【春】たれだへ【蔦】おつよさんだョ【次】コゥおつたさんお客(きやく)があくひを二三十
もして待ているたらふはやく行ねへとハいふもんのしよじおめへでなけりやァはなせねへ【蔦】
次平さんか又世事かへ久しひもんだよ小春さんあした烏江町へみハを出さふよ【春】いつしよに
狀つかひにもたせてやらふハな【蔦】モシ紙次さん此子もおめへゆへにいつそふさいでいるか
らちつと元氣の出るやうにおちつかせてやんなせへし といひながらつゝ茶わんにてくひとあたり出て行 【次】てうしをとり ァ、なん
たハかたのとおもひまハすほどしんに死たくなるいきつきにくひとあをらふ【春】よしねへお
めへもわりひ酒だよッレよりハ一家しうでもたのんてはやく內へはいるやうにしなはいナそう
すりやァわたいもつとめを引ひて壹ッになる氣たがひよつとおめへのかゝさんやとつさんがふ
せうちの時ハどうしやうとそれがいつそあんじられるよ【治】たとへ二ッおやがふせうちでも
こらほとこつた二人が中だもの死なばいつしよト 日になミだたがひにしんめりとなりうつふきものおもひの折からざしきもしづかにておもてのかたにてのべの書おきたかたる
上るり〽よくあいほれのしつくらべよひハひぞりてよなかのくせつないてしのきのかうがいもお

れてわかれのきぬ〳〵にほどけしかミをむすぶ手の袖よりおくのいれほくろ【次】世間の義理を思ひまはせバまはすほど中に何かつまらぬ事ばかり【春】もしもせかれたその時ハ是までせハになつた親方さんのぎりをかいてもにけやせふ【次】コリヤそれハたがいのむねの内うちあけられぬあたりの人目マアそんなめへつたはなしハよしてねやふ〳〵一ッ時のびれハひろひせかいた又花のさく事もあろうヨ【春】ナゼこんなにわたひをまよハせなはつた ト紙次がほうへたへ喰ひつく【次】おれがこんなにミれんになつたもミんな手めへのびハようたうゆへた ト□□り□□こむ【春】ソノひハようたうにハたれかしたへにくひのう ト□とロ□□□丙手からミ」に□□□□なるへししつくい【作者曰】ヲヤおつな心もちになつたヨ予もとなりさしきにゐたるが此妙言にたましゐをうしなひうつゝになつて筆をすてぬ

右後篇續てあらハし御らんに入たてまつり候

跋

神僊とは何そや霞を喰ひ虹を呑み飛行自在なる事を得長壽際無を云ふにあらすや今戯家の親玉が著述なす所の深泉ハ美食を喰ひ酒をのミ飛行自在ハ猪牙と駕されども岡を行者稀にして琴高鐘離權の仙術も豈金術に不及や近ころ山人辰巳中街に至り神をぶら挑灯と倶にふらつかせいたこ曲の美聲にはお先暗筋夢中と成而此妄言を作嗚呼百増の猪牙早しといへど廻し方のハイ御迎ハ是を遲しとせん通となく癡夫となく樂しむも戀くるしむ戀ならずや粋ほどけつく指の輪のはまりやすきハ此道ならむと予もきひたふうに是を後に記

我樂多庵

東邊木述

中街艶談（ちうかいえんだん）第二番目（だいにばんめ）　土喬新話（どきやうしんわ）　小本一冊

小いな半兵衛のむかしもやうをとうせいの
新手にそめなをして二ばん目にし御らんに
入可申候

寛政十一己未歳
正月吉辰

錯認君子

猫洒落誌叙

金華の猫王十里に鼠を遠ざけ。薄雲が蒙貴れ、晋子が句にいちじるし。銀子二角の。しろねこに愛てれ。ひとりまつ夜の鼻哥枕に。西行上人のいにしへをおもひ。金子百疋のどら猫に化されてれ。ふたり添寐のつれ〴〵草に。兼好法師のむかしを笑ふ。竹格子に嘯く於兎猫は。和藤内の對偶にえらまれ。桐火桶にうづくまる灰毛猫は。獣炭のかへ玉かと疑る。熱燗きらひの猫舌あれば。しけ〴〵かよふ猫あし有り。鼠とらずのよい〳〵組。盗ミぐらひの大下卑藏。あわびを椀の貝焼に。直し肴の午房尻。あ

ちらそむけた猫背中。這廂むかせる猫撫聲。狂ふ屏風の蝶つがひ。杜丹ㇾ模のからくさに。寒いと踏込むまたゝびから。涎を流す私語。そのきぬ〳〵のからす猫。首たけはまる首玉に。ちよとちりめんのまげゆれへ。結ぶゑにしも金次第。猫に小判の譬にあらで。十二時斗の猫の眼ほど。をり〳〵替る新板の。すぢれ鰻か。鹿馬介が智恵を揮た粉ナやの猫。筆の雉子毛の猫じやらしに。頼れて書序じやわいにやァと。いひたい事を猫んざい。糞しの砂のはさげもの。それが趣向の箱まくら。猫の月額の割床に。たつた一ト晩つき合て序す。

めて度春

猫謝羅子

三

自序

昔梁恵王ハ廣庭に臺をつくつて。花鳥茶屋と名づく此樓に居つゞけをうつこと。凡三百五十余日。今浅草の廣小路に。鹿茶屋孔雀茶屋。兩國の廣小路に珍物茶屋ありといへとも。竪川の横手の猫茶屋にハしかず彼れが。廣庭にこへたる鹿あれバ。是が部屋に瘦たる。柳腰あり。孔雀の尾に光る玉あれバ。鳳凰の合着に赤を好む飾衣な玉あり。鹿茶屋の小鳥ねくらにつく事あれバ。猫茶屋の子供もとやにつくことあり。珍物茶屋に足のある蛇が出れバ。めつそふに手のある。新子いづる珍物の渡り物に唐阿蘭陀の。ところかわれば品川深川の。子供も。藏かへ

して來たり猫の目玉より。變る晝夜の五ツの床に。あんがりめの肝積客もくればさんがりめの。野暮客もくると。ぐるりと廻つて。猫茶やの世界をこのほとりの俠客に尋ね洒落本一冊につゞりて。猫じやらしとハ題す

未の初春

正徳鹿馬輔述

附言

唐人の歌に。黄金乏しければ。交り厚からず。大通の懐中つめたく。容貌にして。三時遊の。苔驚しに。まハしへ南鐐を。うつとも。一片の裏ぐらひに。通といへども子供の足となる事を得や。足の近き客人にハ。落をとられ數度の馴染ハ。やぶれたる。縕袍に。寐まき濡半の。虱を。百足の床にうつすとも。豈女郎の。きらふ事あらんや秦皇十五城を質に置ても此美玉をいだくべし貧すれば緞子の夜具も着ず。長きものにハ人もまかれ。丸き物にハ猫もじやれつくと云ゝ

○泊りを急く烏猫へ　黒仕立の二人一座

一ツ眼の玉を時斗につかふ

硯ふたの柿のたね

○閨の妻乞ふ雉子猫へ　鼠返しの寐巻姿

しごきの帯を首玉につかふ

ゐり元の大手事

正徳画

子興画

猫謝羅子

鹿馬輔著

唐土の親玉がつらねに曰。若キ時ハ血氣盛也。謹こと色にありと。これを守るものハ。戯場でする五郎か。腐れ儒者の息子かぶ斗り。今の大通ハ。口に美食をくらひ。眼にハふだん正月の思ひをさせ。耳にハ豊後節の情をわすれず。鼻にハじや香の匂ひを。ひきこミ。樂にくたびれて煙草が好になり。風流に醉てさけをはしめ。うわべハ野夫とミせても心いきハはるか介六ものきやァかれといふつもり。爰に何屋の亭主か所ハ葛西の入り口に幾丸と呼れて。年頃ハ三十近くふところハ。本町の鼻かミ袋やのいへ名をたんと持。あそひハ久かたの雲井に近く。氣は百會にすミのぼり。けふハ與所ゆきの。容と見へて結城の松坂とミへるやうなやつをはでにしてきせる煙草入に白を用ひず塩のあめへのとひたへをぬくのハ今時ハはやらすと。丸じりの雪踏を。くつとはき捨てなから柳橋あたりの料理ちやゝのおく座敷へとをる いつたい此内のためにもなりことに心やすき客人

ゆへいゝもわりいもいゝやつていしゆや女ほうもありかてへのおめへさんのといふふるひせりふをいわずにをちをとるつもりゆへいく丸も壹文もそんをかけめへときれいにたちまわる【ていしゆ留 女ほう】今日ハとつゝへいらつしつたへ【いく】おらァおめへのとけへてへしてとんだ氣の毒てならなんだ といふへ幾丸が友たちに伯亭と云ふ宗匠

か揣ひのとゝこほりがあるゆへきたねへやつだと思ヽれめへとぐつとてめへが引ツかふつてたはこ人から金を二両だして 【いく】こう留(とめ)さんまァこれをとつておきねへ トいつて出す
【とめ】何さなんほ伯亭(はくてい)さんでもそれしやこまんなさりやせう。そしてちつとしこなし過るね
そふいふ人の尻(しり)をぬくふなァ一はんはねたやうで。苔(こけ)の論(ろん)におちやす。そしておめへさんから。
おもらい申ちやァ筋合(すじあひ)が違(ちが)へますョ とけへす所へ女大ふたへとんぶりとりさかなこゆひにてうしをさげきたる今淺丸か買ふけいしやか久米川からあいて出たゆへ 【女】いくさ
んおはつさんをそう申ませう子 【いく】いんにやお杉(すぎ)かいるならよんでくんねへ 【女】なぜへ
今おはつさんか。粂川(くめかは)からあきましたよ 【いく】何さお杉をいちばんなぶつてやる事かあら
ァ といふところへ女伯亭さんかおいでなせへましたとつげる處へどさり〳〵とはしごを大またに上ツてとし頃四十くらゐむかしハ大門めうつたといふふうで嶋ちりめんの上ぎすそをまくつて少しまへこゝとになつてくる是ハ神田でゆびおりの酒やではいかいに身をゆたね金のなる木へせつちんのうへごたにしているといふつらつきをしていく丸とへ兄弟のやうに心やすくしていなから女トはいかいの事ニかゝつてへいきちをあらそふ心の内ハ誠につるきのはをわたるやうに何事も金てきれるぜんせいのてんじや此伯亭じつへお杉いろにしているつらをしてはねられたをいく丸にきかれめへと法をもつてこよひへぜひお杉をくとかんと思ひの外いく丸が先へおすぎに目をかけたるやうすをけとつてあじにこゝろをつけているほとなくさいしゆ留お杉か手をひいて 【留】サァわつちがいろ
をつれて來やした とお杉を伯亭がそはへやる伯亭めりやすの文句をつくつてやつてお杉に手をつけさせておいてこんやうたわせるつもりて 【伯】おすきさんなんぞおもし
ろいめりやすを聽聞(てう)してへね 【杉】おまへさんのお作(さく)を此あいだおうたとうちてよくさらつて
おきましたからマァうたつてミやせう とさゝせんをつかせなから アノ喜介どんやおがミのごせうだからの内
へいつて箱(はこ)の上にこのくれへなほんかあるからちよつと。いつてとつてきてくんな 【女房】ヲ
ャおもしろからうのヲ聞てへの 【いく】ばかな事をいつたもんだそれを聞(きい)ていると夜(よ)があけら

ァそりやァそふとお杉さんおめへいろ男のそはじやァ氣がつまるだろふちつとこつちへきねへとおつうちや〱をいれる【すぎ】あんまりふしつけだからさといつて幾丸がそべへめいわくそふな顔てたまりんですへろこれハしつハ伯亭にだん〱くどかれてよんどころなくいろのつもりゆへいく丸になふられるのをくやしく思ふさまなり伯亭もさつきからみゝをすまして是を聞てまだわたさぬおまつりなれハのち〱ぶちこわしにもなろふとおもひ心をいためる【いく】かミさんなん時たへ【女房】まだ四ッハうちません【留】伯さん一寸お耳をと下へおりてこの頃のかんじやうをしてゐる【すぎ】ほれた身ならハ。しよこともないが。義理しや。わたしも實ハいやといく丸がまへのいゝわけをいたこをくり返しうたふ【いく】ソリヤァなんの事もねへ柿をかつてしぶひからけへそうといふよふなもんだ【すぎ】あれさとめんとうになり口でいゝわけを半分いふ【いく】おきァかれ人のいろをするのをおれがしるものか。とんだおめへも苦ろふせうだと盃をとるお杉片手てしやくをしなから小聲で【すぎ】せんど伯さんか。いゝなさるにやァ幾丸もおへねへよい〱だ辨天とやらの女郎ハ外にしんの色事のあるのもしらねへで十分てめへがほれられたつもりて。ゆくといゝなすつた【いく】こいつァ大わらひたァおれよりか伯亭が女郎が實ハ。おめへさんの一座だから出やすといつたァなこんやつれていつて。恥をかゝせて。やるべい。くそがあきれらァ【すぎ】ほんにわつちが。こんな事をいつたといゝなさんなよといく丸とけんくわをさせて手めへか伯亭かさしきへ出ぬくめんをするこれもあたりのある事ゆへいく丸かむねへぎつくりとあたる伯亭かほれられたつらでへんてんのおかめといふ女郎をかひしかあまりおもしろくもないゆへ今ハこつちからつきだしたつらて此ころハおすきかいろだといふのをいく丸もにくかつてぜひともつれて行つもりて【いく】コレおすぎさん今のいたこがほんとうなら。こん夜ぜひ伯亭をつれて行にやァならねへ事があるから。お

かめが所からきたつもりでにせみをかひてくんねへ（おすきもいく丸にまんさらでもなきゆへいなともいはすのべかゝにこよひ御けんのかつ／＼をかきおはりたるところへ）【伯】【留】（はしごをはた／＼上りからかミのそとから）【留】ふぎものミつけた【伯】幾さんいろ男といふものハまたかくべつなもんたね（となんにもやらすをしらす只おすきをうたぐつていろ／＼こゝろを引クつもりでなぞをかける）【伯】サァ幾さんおらァけへるセヘ【いく】マァまちねへかんじんのものをわすれたコレ此文をミてやらつし【伯】（とれと見て）ふてへやつだ此みでのろくなるをれてもあんめへ（とほふり出してきせるたばこ入をしまひ立そふにする）【いく】伯さん。此いく丸が使者(しゝや)にたつたをむにするか【はく】あれお杉が顔をみねへとうかおれをけへしたそうだ（とおすきがかほをミながらいへハこつちをむいていく丸が是をつねりながら）【すぎ】マァよふこざりまさァな。しかし今のおふミしやァおいでなさらざァなるめへねそれだからおとめ申スもおきのとくたね【いく】サァいこう（と伯亭か手をとつて下へおりるていしゆ女房すぎおくつて）【三人】ハイさようなら（是より伯亭ハ仰はしを渡つてかへらふとするをいく丸ハむりに止メ雨こくのほうへくる）【いく】あれだつてもかわひそうに木や石しやァあるめへし人にほれめへといふ。かたへ事もねへしやァねへか。夫ハそうと此あいだ。あのへらほう判者めが。かなちけへの句をぬきにしたとよ（トはなしながら一ツめのはしもいつかとをり友たちの宗匠をわるくいゝながらはいかひのはなしのミにてとほり過る）【伯】かの西施(せいし)のことくなる婦人(ふしん)の宅(たく)ハどこだ【いく】アノ跡のかとの門がそさ（といゝながら天戸やのくゝりをはいる伯亭もつゝひてはいるかのせいしのこときといへるハ此里の軒近きにくろかミのつやハかはらされともおつとハいつの世にかあだしのゝつゆときへおしきかほはせをむなしく月日を送り唯月ゆきはなにのミ心をなくさめしにいく丸とハうたの友なりけるがいつしか人しらす幾丸にふかく心をかけ長つさのかずかさなるといへとも幾丸ハおさけにのミ心をかよハしてへんけいのことくのあいさつなりけれハおつめハをのからつくしきにほだされておさけにミかへられん事をふかくうらみてしゞういく丸おさけが中のしやまをする）【むすこ女房

娘】ヲャおいてなさへまし伯さんおとふ〳〵しうこさりますね【むすこ】けふハどこその會くづれかへ【いく】なァに ト云ながら二かひへ上る 【娘おき】おてうしと硯ぶたをはやくだしや トいゝながらすぐにへやへ口をかけに行 【いく】芝居はどふだの【伯】なんでも出來さ【いく】白猿が口上斗りでもきついものさ【伯】是ハ論外の役者だときにおさかなもありがてへおねげへかあらァ。とうぞ。湯豆腐をしてくんねへ今まで留かところて呑ンていたから腹がくにや〳〵する ともう少よミへをはじめる 【おき】どなたもこつちへおすわり【おさけおかめ】幾さん伯さん此あいだハ と座につく 【伯】モウ二人斗り子供衆を呼でくんねへいくさんどふだ【いく】ウヽよからふ〳〵 とおしけおそでたいこにきたる 【いく】 ひらのふたをだして 是へいつへへつきねェ伯さん一拳いかふ 此間盃四五どにおよんでおもしろきさしきとなる 【伯】おらァよわへおむすとうちねへ と此時となりさしきの女郎嘉吉さんうらミだよといゝながら二かひをおりる 【いく】加吉さんじやァさしだ トうしろのひやうぶをくるり引まわす 【伯】そのはりませハなんだ親和もいやだの夫ても唐畫か とくさりちらかす あんまりひらつてへがおつてさんおしけさんおうつくしいね【二人】フヽン【娘】サァとなたもいつておいで。今晩ハ客人が多ふござりますから。伯さんハこゝへ。おやすミなさりまし トしらねへ人のとなりへ床か廻るざしき納れハしけそてへやへ歸る 【しげ】わつちやァおそろしくよつたよ【そて】せめられやうしやァなしいゝのさ【しけ】そりやァそふとさけさんのゝりくつの。此ころいくさんが。つきゑへてかゝ見やのうちへきなすつた。ときむかふのおつめさんが。いけ

んがてらにそふいつたとサ。「そて」おさけさんのいくさんに。かこわれる事も。止になつたそうだの。何がどふだかしれねヱのふ「しげ」イン、ニヤ一昨日のはんも。いくさんのとなりへ床か廻つて。ねていたらの。何かあらひ。あひさつばつかりで。さつぱり。との字なんサアなしさ　此里でとの字かあらひといふへひつゝこひきやくをいふ　それてこんやァいちかばちかといふつもりてきなすつたんだよ「そて」あのくれへ足のちけへ客人ハねへよそれたものを義理のわりい事をしちやァとんなめにあつてもしかたかねへのさ　此きりのわるひといふハいく丸にこゝろをかけしおつめが口きゝのきほひにふつこんでちやゝのむすこをおさけがいろ事につ引させすむりむたいにとりもつこいく丸にはなをあかせんとたくみしこゝろの内こそおそろしきおさけも今ハせんかたなくうわべハいろのつもりに見せかけてかりのまくらハかわさねとはつとうきなのたちしハぜひもなき事也　「しけ」おめへせんどいくさんの一チ座てミつさんといふ客にでたの「そで」そふさ。めへどしんいせやが田中やのとなりにいたじぶん。はやし町からミつみ〳〵といふ坊主衆がくるといつたからそれしやァねヱかとおもつたら。やつはり材木屋だよそのじぶんにやァ天戸やでむこふ河岸の宗匠とやらがウつちがとけへきやした　とよるときわると客のうわさはやしん〳〵とはやふけわたる八ツのかねゴヲン〳〵〳〵「いく丸ハ中ざしき伯亭ハおもてざしきなれど間かづもなく何事も手にとるやうに聞へるはへおかめがいふ事もなふるせりふゆへこれをいく丸にきかれまじとおもひからせなかあわせてねてゐしがいろ〳〵かんかへて「伯」コレおかめ。わるくしやれるねヱ。ちつとこつちをむかねへか「かめ」アレサセつかくよく寐ているものを。何をしなはるへ。おめへさんもよくかんけへて見なせへまし。成程せんどから二三度も。きなすつたけれどほんのいくさんのつき合ばかりて。よんどこ

ろなく。きなはるものを。わつちだとつて。あのこたちのめへも。ありまさァな。せんども雨(あめ)の降(ふ)る日。なんざァどこのか會(けへ)で。雨ごくまできなはつて。おめへさんの。きなはんねへのに。しまつておかれただけ。なを外聞(げへぶん)がわりいしやァねへかへ。それだからもふ。せんどぎりて。きやァしなはるめへと。おもつたら。どうしてこんやァきなはつたへ（トたこのいとをやるよふなはやいべんぜつでしめつけられる）【伯】てめへそんなら。おれをこんやァいぢめるつもりで。さつきのふミに。こんやぜひきてくれろと。いつてよこしたのだな【かめ】ナニうそばつかり。どれおミせ（とふミみをひつたくりよんでミて）こりやァたれにか（とへいつて見たれどもしやいく丸かたました事かとおもひ）あい上ケました（と伯亭がまくらのそばへ文をなげだし）まあそういつて。おどしたのさ。しんじつこれから足をちかくきて。おくんなへへ【伯】くるのさ〱とても。おめへたちのやうな。手のある女郎しゆに。惚(ほれ)られてへの。なんのといふもつてへねへこたァ。思ハねへのサ【かめ】そりヤァうれしいねヱ（といつてほそひこへになつて又ねむる【いく丸伯亭がざしきのやうすをきゝながらたまりんてふさいでゐる）【さけ】幾さんこれほど。さつきからわけをいふのに。きゝわけのねへおめへはんじやァ。なかつたが。なぜこのやうに。こゝろつよくなつた事だのゥ（トなきこへになる）【いく】是このあまァふてへへらほうしやァねへけへ。コレ何もかもおれがむね一ッで。りやうけんして。今までやァ。うぬにかゝれたも。ミんな。おれがこゝろからたと。あきらめリヤァすむことだと。ものをいふのも。けがらハし

いから。だんまりで。ねてゐるまくらもとで。きゝわけがねへの。こゝろづゑへの。よハひのと。伊五が。よし松をだますよふに。そふ手かるく。泣ねいりにする幾丸だと思ふか。われがどれほどかくしてもナ。茶やのむすこといろ事だといふこたァ。とふから耳へへへつているわへ。そふいふ心たァ。しらねへて。今までうか〳〵来たのが。十万坪しやァねへが。ほんに。うめやミがねへわへ（トそはにありあふまへしまくらをとつて二ツミつたゝかれてもたゝせんかたなく夜着のたもとにくいつひて聲ふるへしてなきゐたる）【いく】コレへ女郎のうそなき。そらぎしやうそんな手でいく。のろ助だと思ふか（トふとんのそとへおさけをつき出しよき引かつきねるとそのまゝおさけへいく丸がかミ人のさすがをとつて小ゆびにおしあてすでにきらんとする）【いく】（おきなおつてきゝうでをとり）これ此あまァ。すぶてへしうちをしやァがるナ。まだ此うへに。此いく丸にあめへうきなを。たてさせるつもりたな。コレいまどきそんなやほなこたァ。はやらねへわへ。ゆびをきるのうてをきるのと。かたきうちのまちけへじやァあんめへし。こふいやァどふかおれが。のろくなつて。とめるやうだが。これよくものをつもつてもミろ。此茶や町しやァちつたァ人にもつらァ。ミしられたおれが。二才子供のするやうに。こゝの女郎にゆひヲきらせたの。ほりものをさせたのと。あだなうきなァたてられちやァ。人なけへかほが出せねへハイ。（トつよミをいへと少シ心あおれる）【さけ】おめへさんのはらァたちなはるナァ。ミんなむりたァ。おもハねへけれど。わたしも又。うちわけていわれねへぎりかあるけれと。もふこうなつちやァ。

いはねへけりやァおめへさんかいつまでもうたくんなはるからマァ一とをりきいておくんなせへ。そのわけゑへハツリヤヾなるほど。人の口だから。いろがあるのなんのと。やうすをしらねへもなァ。いはふけれど。これにやァだん〳〵わけのある事おめへさんにいわねへけりや。ならねへといふハこゝのことさおめへさんもしつていなはる。おつめさんと勘さんとね〔此勘といふへ勘太郎とて此邊に名たかきとたりものなり〕だん〳〵の義理づくて。喜之さんと〔此喜のといふへ茶やのむすこ也〕いろことになつてくれろと。のつ引ならねへわけゑへさ、此間勘さんがいふにやァ、幾丸さんとおめへのわけも。しらねへおいらでもねへ。それをしりつゝたのむのだ。もしおめへがいやといやァ。幾丸さんと手きれを。させるほうもあるのなんのとむつかしいことをいふから。まづしやうちのかほで。あいさつハしたが。いつそ此ことをおめへさんに。打あけていはふかとおもつたが。もしひよつとおめへさんのかんしやくにあたつて。若たんきな事ても。出來ちやァとあんまりおもひすごして。かくしてゐたゆへ。おめへさんにはらァたゝせたり。わつちもいろ〳〵とくらうしたり。とうにうちあけて。いつたらよかつたらうに。いまいふ通り。氣短かなおめへさんゆへ。今までかゝして。ほんにくやしひ事をした。こふうちあけていふからもしかんにんしておくんなせへ〔とだん〳〵のやうすをなにだと共にいふ〕

さてハおつめが悪心にて。おのれがしかけし。色事の出來ぬゆへ。おさけとおれか手ぎれをさせんと。はかりしことゝ、おもひあたつて。幾丸も大キに心おれる。おりしも先程より。いろ〳〵と氣をもミしゆへ。おさけが持病のしやく。ぐつとさし込ミゥンとそり返る。いく丸もはつと驚き。いだきおこし。胸先へ手をさし込ンで。かいほうするに。なをも差込ミくるしむてい。折ふしあたりに。水もなきゆへ。幾丸ハ手をさし延。まくらもとのてうし引寄せ。ひや酒をくつと一トロくちうつし。わか身にひしと抱そへて。かいほうするに。少し心つきしや。めをひらき見れハ。幾丸ゆへ。おさけはうれしく。すぐにいだきつく。幾丸も今さらに。はなせ〳〵の。聲と共に　おさけハ屏風引廻す。□□□□□□□□□□□□（是より跡ハ只みす紙のおとのみし）□。寂ゝ寥ゝたるねやのさま。漢の武帝楚の襄王が閨も。かくやあらんと。作者も筆をとゝめて。よだれを流すのミ

かくて伯亭へさいぜんより。ねもやらすあまりたいくつさにそつとおき上り。火はちへすぎばしをおりくべてさけのかんをしながら。ほつたてえゝで。いく丸がねやのやうすを。うかがひゐろに。いく丸がねやもひつそと。しつまりける。

△かくするうちはや。常住にきけぶ雞の聲〳〵。やゝしのゝめちかく。伯亭へよもすからつまらぬめにあひ。あくびまじくら。さかつきを。とりあげ。すゞりぶたのくひのこしのしゝたけを。つまんでくひながら。【伯】トキニあすハ八丁堀の定命。あさつてハ三省が万句トこいつもいかざァなるめへ。廿六日ハァノ會ト。これもト云ながら手帳を出しくりかへしながら二三ばいのむ【伯】モウ夜があけるかしらん　トのつつ。そつゝ。するうちはヤ。からすのつけワたり。あたりの客も羽づくろひするてい。のき下をねぼれ聲の。しん内下駄の

昔かがらりく【伯】だへぶあかるくなつたと戸を少しあけて見て【伯】コイツァもう我霜中(わがそうちう)の衣(ころも)を射(い)るといふ。時
分になつた。とおひをしめなをしはたりたきて小へんに行すぐにいく丸が所へきてせうじの外で【伯】幾さん〳〵。もふおらァけへるゼへ。コリヤ
ァどうだねつから無人嶋(むにんしま)といふもんだ。コレいくさん〳〵おらァけへるゼへ。おめへは定(さだめ)て居(い)
るこつたらう。【いく】ウ、ンたれだ伯さんか【伯】サアけへるゼへ。どうするのだナ【いく】
マァはいんねへナ。まだはゑへじやァねへか【伯】いく丸かさしきへはいりコイツァくれェゼへトあかりをかきたて残(ざん)
燈無焰影幢々(とうゑんなふしてかけとうとう)だトいゝながらいく丸かまくらもとへくる【いく】マァすわつて一ふくのミねへ【さけ】伯さんそうし
たもんでも。ごせへすめへ。マァ一ふくおあかりなせへしト一ふくつけて出しさけへてうづにゆく【いく】伯さん夕ァ
れごうせへに。おむつましかつたらふ【伯】いめへましいとんだめに。あわしやァがつた。し
かし手のある女たぜ。あれでよばふといふのだ。とまだまけおしみをいふ幾さんおめへこそ夕ァれ韓雲孟龍(かんうんもうりやう)
のちぎりだらふ【いく】なァにおれかほうから。つき出してやりやした。よこつつらァおもい
れ。いやといふほど。くらァしてやりやつたァな【伯】ならふなら。くつても見たへが。つき
出すれおわるからうせへ。おれかおきてゝ聞(き)やァしめへし。いゝかげんのうそをつかつし。トいろのある事が。しれていく丸もうまらぬていとミて。なぶり心でいふ。いく丸へくつと平気で。これも伯蔵を。なぶりこゝろで【いく】ときに伯さん。いふべのねやの。むつごと
をじつにきゝてへのトいゝながらおきあがりミづくろひして【いく】伯さん一ヘへのんで。いこうじやァねへか【伯】ゑ

れもよかろう【いく】そこのてうしを【伯】ヲットォ承知おれがおしやくをしよう【いく】足下のそでがまつくろだぜ【伯】ほんにどうしたかと（いつたはかゝはしをくべて酒のかんをした。てうしのすミがつきしを。それともいはれず。おきてゝきいた事をしられたかと少しせき面）【いく】伯さん一へへのミねへ【伯】インナおらァのむめへ。夕ァ雨こくて呑て。又こゝでのんだから【いく】ハテぐでんになつても。朝のさけハ。さめらァナなんでもさしたトキニ伯さん夕ァハだへぶ。おかめがおめへにあたつたの。しかしそこが。やつはりおめへが。いろ男といふものだからサ（トおもいれくわれろ。伯亭もなむさん。夕ァ「この折から。伯亭があいかたのおかめ。眼をさましこからのしうちを。きかれしかと少しせく。れへ。伯亭も見へぬゆへおき上り小べんにゆく。おさけも同じく小べん所に一であひ。二人一所に来りセうじのかけに。このことをきゝゐたりしが。あまり伯亭がうぬをいふゆへ。舌を出す。明かたのともしひきへのこりてセうじにうつる。伯亭これを見て。）【伯】おさけさん誰に出す舌だト（いきすきてセうじをあけろおもひの外てめへの女郎ゆへてあちふさたなり）【いく】（きのとくゆへ立こ雨戸をあけ）「ア、だへぶさむさに。ミがいつてきたわへ【さけ】おかめさんとんださむいねェ【伯】モウ人の鼻から。けぶのでるやうな。さむさだ。幾さんこうもあらうか。つく息に。秋の名残も。しられけりだ。【いく】ナニヨウいわつしやるサァござりませう（ト立あかり）これしやァつぢうちか。でんつゝのミや神楽で。へへろうといふ見へだぜ【伯】それで。おもひ出した。せんどの。ちやはんハ。とうなつた【いく】此中ありやした。あんまりきうになつたから。公の所へそふいつて。やらなんだ。それについて大笑な。はなしがありさ。【伯】その咄ハャァ道てきゝやせう。とんだおそくなつたサァあいびね

へ【いく】マァまちねへ。たびをへていこふ（トたびをはきおびをしめながら）けさァだへぶさむひ。アレこねへむこふに。霧(きり)のかゝつたけしきやァ。へちやァねへ蛤(はまくり)のつゆといふもんたぜ。（トいふところへものほじの下をむきこうりかとほりかゝり）【伯】【いく】（二人がかほをミて）ばか〳〵〳〵（エヘ引）

猫謝羅子終

跋

化物の棟梁一ッ目の傍三股を西南にこる所に猫股屋鋪あり未爪を隱さぬ新造猫より化そうな年魔猫までこなちよつかいを出して客をひきかゝんと欲す御勤れ眼玉の替る二六時中拾二匁に定めあれど西行法師が猫の白銀二片を投て女三宮れ猫を繋絲の釣をとれど客れ三毛猫三匁の釣をとらず上氣の猫れ緋縮緬で頭を結び物前の客れ眞綿で首を〆られる地色とねこの泣聲聞バ女房をつめてにやん房といひ夫婦を延してぶら〳〵と約速すたま〳〵のら客來りて茶屋のつとめを引こんとすこれ是を舊鼠かへつて猫を食といふにぞ我弟鹿馬輔かの猫茶屋の意味を書付て一冊子となし鼠半切のはしにかひつける草稿を猫の毛の

閑するに紛ひにあらぬ本八丈きなる哉妙なる哉嗚呼猫狐ならず必鄰有軒をならべて五六軒三とせ馴染し猫の妻もし戀しくば三弦の音だにこぬ此樓上におゐて能猫を養ふ人猫その恩をわすれて反て養ふ人をくらふ四方の俠客猫を愛するともよく是を顧て猫に家屋敷をひかるゝ事なかれと予猫のひたひ程なるあばら屋に日なたぼこりしながら牛房ちりのしりゐに序ス

千差萬別識

富松月

青樓●の世界闇明の月

自序

一日予案るに此さとにやみなし四時月よといへる語ありあるひは一寸さきをやみととなへいつれや誠ならめつたえきくふるとてらさるのさかひに到らすんはしるへからすそのしるものは何ものそ生水江戸ッ産のはへぬきなるへし夫か傳を書してもてそのまゝこそかの月と題すのこ

かんた

觀二大通人入二大門一日

あつ丸撰

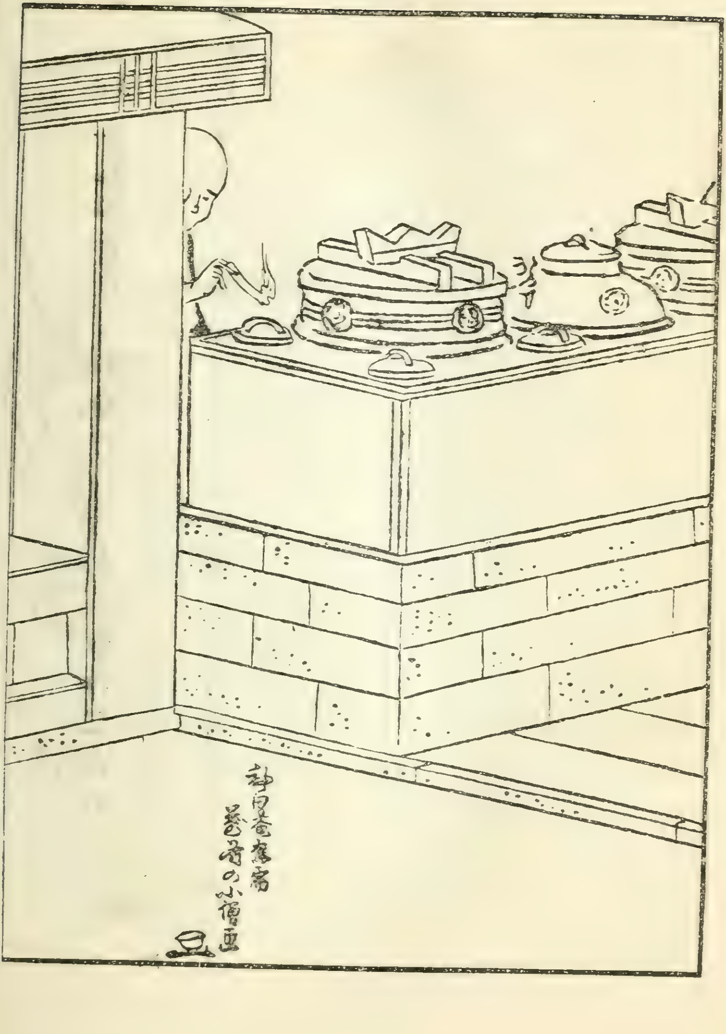
附言

夫東都の中央に水道の水を食し人の日希くハ夷狹曲を避て東都節の雅言をうなるべしと宜なるかな十寸見が一曲にまだ青陽のくれさむくかりぎの袂とうたふけるかひくれよりひんがしハ雨戸もはやくあくる日のれんじへさし入ころ茶屋か迎ひにおき出て朝酒のはらにしミゆとうふの齒こたへなくはまればふかき谷川の水のながれの身の上とハからぬ客のむねのうちハ何れそれともしれかねてすまぬこゝろのうちにもしはしすむハゆかりの江戸名物そのむらさきを染あげぬいまだしらじの最中の月ハ雪とともにましろにしてたちまちに百疋の花と化す四季をゆる

さぬ雪月花爰に江戸町のうなぎ屋のかは所と書しはやまと言の葉に似ておかし貸夜具のあんどうハ田町の帳屋の筆勢と見ゆ三てうの入かごごとくにならべハ茶屋になべふたの名をとなふ大盡巾の町をすぐに歩行素見すゝ町をよこにまがる見番の三味せん箱ハ色の紋かさなりてさながら不二の裾野の幕かとうたがハれ中坐のおゐらんのりやうし箱のはし帋にしるせしいろ〱の表徳ハあたかもけいこ所のぬり札のごとくすがきの三味線番いとくり出せバくもあしのてうちん二丁目をよぎり身あがりのひま行く駒下駄つながるゝゐつゞけの客うれしふざんすの一言に万両を抛ちかなしふおすの半句にはらわたをたつ二階

のはしごとともにのぼりつめれバ嚢中おのづからむなしく下り坂となる臺屋の龜に甲なくやぼてんに手なし足なくして千里をはしる罾駕田町によどミ舟ハ堀のさんはしへつなぐ蛟龍も土中にすめバむなしく蚯蚓と時を同ふしびなんかへつて妓夫臺のかげにひそミ不おとこもてゝ三ツふとんの中央に坐しおひげのちりを十寸見が一曲にはらふ中の町のさくらハひらけざれどもおく坐しきハ帋花をちらしまハし次の間にうづくまる禿せがむ大神樂源次が曲まりかごをぬけれバ見物の人びやくまたをくゞる奥つきてふし首をたれてふさぎ彼をまちこれを送るそもけいせいハあどけなきをよしとし客ハいやミなきをはらと

すたいこもちれむだ口をだいとし茶やれじんあいをもつ
てすよしといひはらと云だいと言じんといふも是よしれ
ら大じんあそびやこの夜をも月夜にするものならし



夜世界總目錄

○大廓中之間戲談附座鋪之騷劇 ▲酉ノ刻暮六ツ時
○局廓宵多語 ▲戌ノ刻夜五ツ時
○數有間勤傾契 ▲亥ノ刻夜四ツ時
○雛妓之眞言 ▲子ノ刻夜九ツ時
○牽頭藝者戲話 ▲丑ノ刻夜八ツ時
○半格子空言 ▲寅ノ刻明七ツ時
○衣々之袖引 ▲卯ノ刻明六ツ時

下略

青樓夜世界闇明月

神田あつ丸作

【宿烏】だんまり羽音バサ〳〵〳〵【昏鐘】コヲン〳〵〳〵ギク〳〵〳〵〳〵ほどなく

夫古句曰へやミの夜もよし原はかり月夜哉トハ此里をほめし秀逸にして正月の惣花にハあらねどくれてうれしき夜見世のはな客待合の辻うらやこよひくるハの大盡舞臺まひ明て見なさいな

> 爰ニ昔万治之頃吉原京町壹丁目ニ
> 三浦屋四郎左衛門言ッ有ニ妓女家一

夫が二階の夕けしきひる鄽ひけててん〳〵にばた〳〵あがるはしごの音かまびしく帋きぬたにことならずかたへの衣桁にかけし青海浪の縫うきたちてれんじの手ぬぐひ眞帆片帆と見となり坐しきハ居つゞけのいかりをおろしやぼてんのかぢをとるおいらん夜ふねをこぐしんざう出舟の客人あれば入ふねの臺のもいありいやな風にも身をまかすけいせいハ新ざう出しのなだをのかれんがため也らうかにたゝむてうちんハミなとへ入津の帆をさげるにことならず千寄子様の

り合ふねのきしによるべの夜の世界はしごの下に居るしんざうみをもつてはきのや〳〵じれつてへぞョゥト二階へあがる中の間にハ十三四の女の子ゐろりのまへにかしこまつて居る

へ評ニ曰是ハけふ賣られて來た子年一ッぱい十五兩くらゐとふめるかつかう親ハもつともずつと大のがたにて船橋へせんざいを賣に出て歸りにハからかごの片荷にせんかうが一把ぬまたの葉たばこが五十目ばかり古嶋庄内あたりの廿四五〆するやす茶が一斤かた荷ハかへり道のくさを苅て入こやしにする積内ハ西南の方へいがんでかべのくづれをまこもでふさぎ雨のもりハわらをかさね内のまへの井戸ハ酒たるの底をぬひてかハにしてわきのところにちいさな竹ずか小高くしてそのうへに紋の付たはげ切ッたわんやぜんがならべて有おふくろハ紺のゆもじ一ッで土間へむしろを引豆をこひてゐる近所のおぢとか何とかいふやつが村から出るさつまいもや西瓜ふねの上ハのりをして江戸ハあかるひつらにし此子をうるにも相談相手となりそのくせ此子が中三にでもなると共ときハほり江町かすだ町の間やでおふくろのそへ手紙をかいてもらつて金のむしんにくるたちなり

そのわきに三十七八の男これハこいの年ン明女郎を内せうよりせわにして片付た女のていしゆらしひやつ【狸平】モシ旦那けふほりのうちへめへりまして道で妙な事を見ました【亭主】なんだ咄してきかせなせへ【狸】しかたはなしにておきゝなせへアノなるこの先の

田圃道で百姓らしき男ミのかさを着て鍬をかつひでぶちかへつておりましたらほどなく近所から大ぜい出てさわぐ所へちゑのあるやつもふんべつらしひ醫師がひとりミな／＼をとりしづめおれがしかたが有とくわい中よりひへを二三合とり出しその人のほとりへまひて何やらくすりをとり出してふりかけるときめうな事さ見る内青ミとひえがはへるだん／＼とそのひえがそだつにしたがつてかのミのを着たる男まん中へすつ／＼と立ッてひえまきわよふござりますかといひましたどうでござります【ミな／＼】ハヽヽヽ ホヽヽ【亭】おきやァがれまじめな事かとおもつたうちがいゝ【引込かぶろ】ヲヤにくらしひたましなんしたの トしたゝか狸手をつねる【狸】あいた／＼あいたロへもちッとしづかにつねりッこ【引込かぶろ】口がへらねへぞヨゥ

この時六ツ半のとけいがちやんとなる是より二かいさしきの世界なりおもてさしき、待宵がさしきにてはんしん袖のかとふたりにてきやく人のところからきたる文の中に絵のかひてあるのを見てわらつてゐる

【袖のか】なんとかひておりんすへ【待宵】ヲヤ／＼ちよつとお見なんしこの雨に中の町からかへつたら小ひんがはげて氣のおもくなるせんぎたときヲヤ馬鹿らしひちよつところふじいし紋四郎さんのかほを【袖】ホンニ日のところが似てゐんすよそしてこんやお出なんすかへ【待】アイはきのとまつ岡さんをやつておくんなんしわたくしわまいりすめへ【袖】そうなんし【待】コレさくのやァ【禿】アイヽヽヽホ【待】コレちよつと耳を出しやアノ／＼ ト耳に口をよせはなしまさんにのかの事をおたのミ申イすといつてきやア

（作者評して曰こいつハ命といふきやくのつれの女郎のところへ文をたのむ尤せかれた客と見へる）【禿】アイあのねたしかはましまさんハ客人か御出なんした【待】そんならのちにそういつてくりや【ふり新】ぬしも又宗さんにちミちをあけなんすなぜあんねへにほれ安ひの【待】そうさばからしひのふ（トいふところへ下より客人大ぜいたいこもちひきつれどや〳〵と來る）【待】はきのやせうじをたてや（ふりしんせうじのあなからのぞひて）【ふりしん】ヲヤ仙牛（せんきう）さんておざりィすよそして利八さんや誰（たれ）かゞ大ぜい來いしたよ【ばんしん】滿月（まんげつ）さんハさつきのきやく人ハはつ名代かの（トはなすこちらにへらうかにふりしんその山うれしさふにかけてきて茶やの男に）【その山】コレアノ人正さんハなぜ來なんせん（ちいさなこゑにて）ばんに仙牛さんをおくつていきんすからおもてをあけておひてくだせへ【茶や男】アイ〳〵いつそのぼせて目がわるくなりやすよ【その山】しつたかよゥ（トせなかをたゝひて洲て行）

（評ニ曰こいつハ茶やのむすことてきておいらんの客人をおくつてかへりがけによらふといふやつとミへたり）

（扨十六夜（いざよい）がざしきへ客人仙牛舟やど酒長其外たいこもち女げいしや大せいにて大さハきなり）

【女げいしやさの】おいらんおめへさんの髮（かミ）ハけふハたれにおゆハせなされましたへおやすさんかへ【十六夜】イ、エ扇やへもゆきなんすおまつさんさ【女げいしやれん】いつそきれいでござりますよ【新造】平吉さん〳〵いたこ新内を聞（き）かせなんしな【仙牛】コリヤァよからふ〳〵【平吉】うるさくせめるぜへ【さゝこ】ワかまつやをまよハせたしんないだ【平】コレよく人の事をいふぜへ女房に岡本（をかもと）へ壹分しうぎをやらせやうとおもつてばかなつらだ（トロとはなをつまむくせあり）【十六】いとゆふさ

ん三味せんをもつて来なんし【平】ひと口やらかさふかとテン／＼／＼とてうしを合せ 新内 〽竹のはしらやかやの屋ねひきわりめしや姿(なり)めしやあわめしひえめしァ、けふはどうもかたられねえ聲(こへ)がヒイともいわねへあやまつた／＼ この内舟宿酒長しんそうとくろつてとりはづしてついうでをいためる 【こなし／＼】どうした／＼【仙牛】あぶねへよくさすつてやらつせへ【傳】らせうもん河岸(かし)ならうでをぬくも尤だが【ばん新】はからしひかあいさうに それより三味せんひきたて大さへきのてい今まて小冊あまたあれハこゝにりやくすさゝきもしまひえなく／＼さやうなら御きけんよふと床おさまる 【げいしや大せい】サァ／＼旦那の御ひまが出た今ッから大橋といふ所を川岸(かし)へはりにいきわどうだらふ【舟やと】それもよからふかしかしてつほうの新見世のともへ屋といふてんもめつらしく氣がかわつてよからう【さこ】おもしろひ／＼いつれへなり共おれに付てかうまいれェ、 トとろ／＼出かれる

局鄽宵多語(つぼねみせよひのくぜつ)

【ろし番伊七】サァ／＼路次の口にたつて居めへぜェ【地まへり源】ひとへおひにこちよいとつまたとりいきなさびのあるこゑにて 〽たとへからすがなけバとて天道さま出ぬうちャァかへしやせぬゥ【女郎】コウ／＼源さんあがんねへよ【源】めん／＼をしてくれるならあがらう【女郎】いゝむしだのうよんべもひなかたさんのとけへとまつておひて人をうつむけにした【源】てめへうつむけになると茶うすだァおいてもくん

なよ【女郎】まハりなんしョウ【源】〽うたの上手ハ金杉(すぎ)かん田ァ（トうたひながらおもてへ出てふうりんそゞたくふ）【源】ヲイねぎをたんといれて下せヱコイツハがうてきにあつひ（フウ〱とふきながらくつてしまひそれぜにとらつせへトそばやの荷のむかふへ）ひいふうミいよういつむうなゝやァこのとう十一（トかぞへる内にそばのこぼれたのたいぬかくひ源かあしたなめる）【源】（ひつくりして）いめへましひちくしやうだ錢のかんぢやうわすれさしやァがつた十一だつけのよし〱十貳十三十四十五十六それよしか（トまた〱うたひながらろじへはいる）【先の女郎】コウいゝかげんにひやかしてあがんねえ【源】そんならあがるべへ【女郎】コレおめへのくるたんびに（ト小ゆびを出して）これがあたまのものを氣を付てならねへよこんやハおめへ壹本おごんねへなそして貳百ァおれにくんねへろし番(はん)にやるからそしてあとの貳百でかばやきをかひねへ【源】べらぼうめおらァひつをかひてゐらァこれ見やかゆくつてならねへとからだ中をかく【女郎】そんならかうしなんし百が酒を買にやつて五十がミかんと五十がたまごを買にやらふじやァねへか【源】ウ、どうともしろ（ト四文錢一本ほうりたす）【女郎】コウ長次どんやこれで百が酒と五十がたまごと五十がミかんをかつてきて下せへこつちらのあきんどやのハわりひよ先のあきんどやのが大きくてやすひからいゝよ（アイと長次ハ出て行となりの仕切のふすまた明て）【源】コウ花浦さんお神酒(みき)をあけねへか【女郎】よしなんしきやくがあらァこれ〱だ（トかミきぬたゝ打まねたする）【源】そいつハめんくがよからう（となりの花浦が客出かける）【花】どけヱおめへゆきなさる【となりのきやく】ちつとひやかして來やう【は

な】ゆくなら是ヲしめて行ッてきな（ト手まへのしごきをとひてわたすもしほかへ引こまれてもこちらのきやくといふしるしなり）（へとなり源が所へ酒たまごをもつてくる）【女郎】よしく〳〵これハおせわよコウ源さんアノ次郎さんハねつから義理(ぎり)をしらねへよこんぢやうもあさ雨(あめ)がふつてがいぶんがわるひのなんのといふから下駄(げた)とからかさを立引をしてやつたに夕アもしらねへかほをしてゐらアな【源】なんのあいらがいゝかとおもひやアかつてほんのこつたがまだしゆぎやうかたらねへあたまはかりとび口をミるようにしやアかつていけもしねへあいつがあたまをかつひでくわし見世へいけべいゝコレうでへされるないたひハへ【女郎】どうしなんした【源】（くつとはだをぬひで）コレけふほりたてだ見てくりやいせひがいゝぜへ傘屋の吉かかひたァがうせいだろう（トせなかのほりものを出して見せる）【女郎】ほんにとんだよくほつたのふサァ酒おめへのミやァしめへの（トやたらに茶わんへついでぐひ〳〵のむ）【源】コレあんまりのむなへ【女郎】いゝハな【源】よかァねへまた小間もの見せても出さふと思つて【女郎】（少しむつとして）おれが口でおれがのむからうつちやつておきねへよ【源】なんだおれが口だくちハ手めへのだらふが酒はこつちのぜにだ【女郎】あんまりせに〳〵とけないつきなんな【源】此はつつけめェ、かと思やァがつて（トかんしやくをおこしまくらをとつてたゝく）【女郎】（すこしなきごゑにて）アレ〳〵長次どんこのやろうを引すり出してくださへたて引をしてあばりやァつけあがらァ【源】たて引もすさまじいもゝひきか聞てあきれらァ（ト両方へわかれ立出て行く）あとはしばしはないづれくぜつのはて

はけんくハのやうになるもこゝのならひか

數有間勤傾契

○廻し坐しき新造買の客としハ廿五六色男でハなけれともそこ爰のしんそうになしミありもとよりたいこ持すきにてそのやうにあそひにしミもせぬがとかく新そうのほれるきやくいつたいいやミとミへがきらひにてほう〴〵のおいらんにも心やすくかへゆがられたゝむだ口をきひてあるくがすきなふうなり

○あいかた舞づるハまだ十五六のふりしんおいらんもちにてこの春からやつと客へ出ろ尤見世へ出ぬまへよ此客にほれてゐてたいこもち衆をたのミよんでもらひこのきやくに出てよりほうばいにまいにちなふられたりはたからおだてられたり今へいのちをかけてほれぬいてゐれどもしんの事なれバさのミたて引もなくたゞ心のおくをうちあけてせかい中の神佛をあへものにしてぐわんをかけたりしほだちになかひ日をくらすトいふやつされともいつたいかはつめいにてかほたちうつくしくすなをなれへしゞうへ坐しきをも持かねまじきおひたちにてすへたのもし〳〵

客へいつものとほりさへぎくたびれて床へ大のじなりにねころんでうち中のしんそうたちかふろ大ぜいあつめてまたむだをいつてゐるいつたい子ぼんのうにてくるたび二かい中のかふろにミやげをやろゆへ入かへりたちかへりきて付てゐるゆへなまなかさしきもちをかつたより用へたゝる也

【禿】モシヘこんだねおいでなんす時子きれを子もつてきておくんなんしよ【風町】なんにする【禿】人形にきせんすハ【ふりしん　さへきの】はきのハよくねだり事をいふよおめへらんにそういふぞよはからしひおいらんの客人になぜねたらねへ【禿　はきの】よしかおゐらんのきやく人ハミんなうそばつかりつかつしやるよ【風町】そりやァおいらんがうそをおしへさしつたらう【はき】ヲヤ

あんな事をいはつしやるよいつ付んすよ 折からうかをとをるおいらんせうじをあけかほを出して 【沖舟】ヨヤ風町さんおにぎやかだネおうら出しひおたのしミざんす 【風】コレハおいらんかちつとおはいんなせへきやく人かへ 【沖舟】いゝへちつとおあそびに御出なんししかし舞つるさんにしかられやせうこはひ事た 【風】ナニとんだことをほんに今いきやせうなぎをとりにやりだ 【沖】ほんにかへうれしひねへまァいつてまいりイせう トやりてへやへ行なにかはなしてゐる 【ふりしんきたさの】およしなんしへいきなんすなまた舞つるさんをなかせなんせうとおもつて 【風】なぜ 【きたさの】なぜとおいゝなんしたつてかあいさうにあのやうにほれてゐるなんしては大ていほかのざしきへやり申すはくろうざんすのさそかァぬしもわりイ事もなんすめへけれどさきからいはれなんしたらひよつとその氣におなりなんすめへものでもおざんせん トこのしんぞうへまいつると中よくかねてたのまれてゐるゆへばんじこのきやく外に色事でもせうかと氣を付る 【風】おれがそうしたとつて今沖舟さんをかはれやァしめへしそれきりにしてゐたらかまひはあるめへ 【さへきの】ヨヤマァあんな事をおいゝなんすよ 【きたさの】それたからやり申んせん トよつてたかつてこそくつたりつねつたりする 【風】モウそんならいかねへからかんにんしねへあやまつた／＼ トいふ所へあいかた舞つるはづかしさうにわらひながらざしきへは入 【風】コウ何をしてゐたおもしろひ事でもできたか 【舞つる】アレはからしひなんざんす ト實ハはやくとこへきたけれど又なふられるをいやがりてなり 【風】サァミんながこゝでまんまにしねへ今うなぎがくるから手めへせんどもつて來たひろしまはどうした

【舞】アイおいらんのひばちへ湯をわかしておきいしたきくのやごしやうだもつてきてくりやきたさのさん茶をほうじなんし【きた】アイほうじておさりいすよそのほんの上に ほどなくきくのやくハんを持てくる【舞】その火はちへかけて火をよくおこしや トいふ所へ悉つほどやくしよ方ふりしん「ありや里かわるかゝへふミをかきもたせてよこす【風】ナンダあけて見ねへでも大かたしまつてくれろだらうと ひろげて見て なんだ〳〵ごしやうてさんすが十ばかりかひてあらァ清六にそういつてあがつてきなそのかわりにこんやわだいてねるとそういや

【かふろつほミ】ヲヤ〳〵舞つるさんがはらを御立なんせう トあどけなくへほどなくしんぞうありや里うれしかり一かいへはたいひながら行〳〵とあがりいけそう〳〵しくせうじたあけ大いきたきつていきなりにすへる【風】この子はびつくりさせた【ありや里】マアきたさのさんきいておくんなんしよ

ヲヤわつちとした事が風町さんおありがたふおさりますよ【舞】なんだこの子わうかれきつてゐるよ【風】ぢいろでもきたか【ありや】ごしやうておさりいすマアきたさのさんゝをおだしなんし トこそ〳〵はなす【きた】そしてどうしてやりなんした【あり】又ミゝへくちを かうしいしたよ【きた】そしておめヱらんにきかれたらどうなんす【あり】それでもどうも【きた】ホンニはからしひ子だよ 評ニ曰こいつド若をぶちころして色男の方へやつたと見へるしんのはかなき事あハれむべし【舞】モウいゝかげんにやめなんしよ【あり】ナニもうしいせんのさ このところへ茶やの男うなぎこぢ実る大せいとりまきあしたくふまいつるへくろぬりのはし箱よりぎんの先かけのはしふちの丸のついたのを出して【舞】サアはしをあげんせう【あり】風町さんまひつるさんのこしらへたてのはしでおざりいすよ【きた】だまつてたべ

なんしやかましひ（トかれこれあらかためしもしまひに成）【風】（のこりのうなぎ十くし斗りひらのふたへのせて）これはぎのこれを沖ふねさんの所へもつていきや【禿】アイ【風】まアふたをしてやらふ（ト小きくのかゝ一枚たしふたにする）【しんぞう ふたり】もうひけでざんせうちつとおやすミなんし（トかれこれ人もちりてとこの内にさしむかいになろおりから九ツのとけい）

（舞つるハまだとしがゆかねべ思ひきつてものもいひかね此ごろ二かいのしんさうのうちに風町色事ができたりとさとつていれどもむしいひ出してはらたたてられてこぬ目にハなき〳〵うまらぬ事いふもうしいハぬもつらくむさしあふたふんばつてやつと）

【舞】おめへさんハこんやァノ子が居ねへでおさへなんすめへね【風】ナニだれがゥ、、、さきからひとりでぢれるがだれにかしやくられたな【舞】しやくられもいたしいせんがわたくしハたとへ見ても心におさめてなんにもいふまひと思つておりィすけれど人の目にかゝればほう〳〵の口がやかましくつてあんまりわたくしがべらぼうらしひといハれるがくやしふおさりィす（トしほ〳〵として少しなミだぐむ）【風】よしや人がなんといハふがまゝおれがせうちしてしゞう手まへのところへ來さへすりやァよからふ【舞】そうでもおぜへしやうけれどャレたばこばこへぬしの紋をつけたのきものへつけたのと今まで人にもなぶられる程のろく思ハれてひよつといまさらあの子の所へ御出もなんすめへけれとそんな事になつたらとふさひでゐる【風】手めへハ又おれがきものをよこさねへといふあてこすりにいふのか【舞】ぬしのやうにいかにいぢめいゝとつて人のとばじちをとりなんしてあんまりでおざりィすそれがおしひのほしひのといふのでハおざりィせ

んそんな事をおいゝなんしてワたくしをつきだしなんす氣ならワたくしハかくごをきハめてゐんすよ（トけしきをかへていふ）【風】そんならおれがわるかァかんにんしなそしてどうしたかいゝ【舞】ソリヤァワたくしがもうしんす事でおざんすどうすれバこつちの心がわかりィせふ（折からとなりざしきにてめりやすきせうたうたふ）へおもふ事かなハねハこそ浮世とはよくあきらめたむりな事（このうたにきゝとれふたりうつとりとしてゐるところへせうじをさらりとあけ沖ふねがしんぞう沖まち來る）【風】びつくりしてだれだ【沖まち】アィワたくしさ風町さんにおいらんがさきほどハお有かたふおざんすとれをおあんなんしッサ【風】なんだ（トあけて見れバ袖の梅）おきやァがれまだ醉ハしねへ【沖町】それをはんじなんしとさ（折からうかより新造さへきのかけてきたり）【さハきの】おきさまよりさん／＼【おき】なんざんすへ【さハ】おめェによろしくと【おき】だれがへ【さハ】くじらが【おき】しつたかすかねへぞよゥ【風】（しはらくかんがへて）ゥ、、袖の梅をうたへといふ事か【さハ】いつかおぢうさんが客人にもらつたとつて本をもつて來なんしたのかへソレ本の繪にしやミ子さんがおどつて居んしたつけ【風】あれハ神田の客人が丁子屋の二階でこしらへて藤次が手を付たそのとき一ッ所にこしらへた四ッ手ぶしハ俄にも出たつけ【沖】アノよつでかごを女げいしや衆がかつひで徳藏さんか三味せんでおどりィしたのかへ【さハ】サァその袖の梅をうたつておきかせなんしゥ、うたつてきかせやう（トさみせんをとりよせてうしをあへせて）哥へおもひおもふてナァンナアワしやきたものをナァ引ふり出すく＼そ

での梅まだ醉がさめぬかへ引へぬしに見しよとてナアンナアンワしやきたものをナアヨふり出す／＼八もんじまだ／＼はやうざんすかへ引（トうたふところへへやもち濟しま來たる）【はま・しま】いつそいきな聲だね【風】またころしもん句をいふよ【舞】ちつとおはいんなんし客人かへ【はま】イ、ヱはや歸りにかへりんした【舞】（すい付ご出す）【はま】アイちつとあそびんせう【風】おめへの宗さんはくるか【はま】アイ十四日に來ィしてきのふ二丁目へいきなんしたからいつそくやしくつてむねがはりさけいすよ【風】うそさんれ【はま】久しく御出なんせん【風】おめへもよふいろ／＼くつて見たがるの【はま】ごしやうさんすョ【舞】ぬしも久ほう／＼くつてあるかつしやるからよそのはなしをおきゝなんし【さへ・おき】サアわきの咄（はな）しもちつとおきかせなんし【風】そんならおれがたいこもちのくせをはなさふか【さへ】サアおいゝなんし／＼【風】せれしねへとつくりへあしでもふんごミなさんな【さへ】ヲヤばからしいよ【風】まづこゝへくる平氣知（へいきち）がはなをつまんで口をにぎりこぶしでふさぎながら首をふるがくせ【舞】ヲヤほんにのふ【風】松象（ざう）がざしきへくると右の手でひざをひとつとんとたゝひて少しそつてきてといひやす【舞】そうざんす【おき】そして藤平さんへ【風】藤平かゑふと片〻の手をたゝミへついてうつむひてとうだヱといふね藤氣智がサアおもしろひねといふ【はま】稲蝶さんへ【風】ありやァといつたわけだから

ととかくわけといふ事をたんといひやすらん字がしらふのなまゑひ佐美小かちよこ〳〵走藤字がおがされら傳氣知がよこ目でゥ、なんのかのといふが山さ【はま】ばからしひ【風】二てうつゞミが目をねふつてうつおふくとお中がわらふときはなの上へしハをよせる【はま】ぬしッとんた事まで氣をつけさつしやるョ【おき】ヲャぬしのはなしにうかれておいらんの返事もいハすに遊びすぎいした【ミな〳〵】わたしらもめェりんせうサァちつとおやすミなんし（トゞやうぶりたて）

ミな〳〵らうかへ出る折からはや七ツのかねきこへる一ツすいのゆめをむすべへやがて茶やのお迎ひなるべし

半格子空言

七ッ時【女郎】もしへなんぼかしッはたの女郎だつてそんねへにふミちらかしなんしてもいゝのかへ【客】手めへもむりな事をいふぜへおらもしやうばいづくだァきやく人のつき合ならどこへても行かねへでどうするもんだ内にやァひけを打ッても娘がねゝへでまつてゐるのをかうなかして是でいハれちやァうきゝらねへ

となりざしきへいきすぎのかうまん客女郎もいゝかげんに合せてつとめてゐるせかい

【里秀】コゥ手めへおれがうらつけをしまハせたかあいつをなくされちやァうらミだそして此

中譫らくがふらてうちんをわすれておいたらうありやァおれがのだどうもかすとかへさねへ法にしてうたせるぜへ【女郎】ナゼぬしァ久しくきなんせん【里】かふさむくちやァけへしきそとへ出られねへこたつと首ッ引だホンニ長兵衛にももうやるじぶんがきた　トいゝながらかこ入ち出すゆへ若ひものに南一もやるかとおもひの外むやくな出し自ばこてつんでいる　【女】なんのくすりだへ【里】しらずともの事さ【女】ゆうべれなぜ引ヶじふんに来なんしたつけ【里】ゥ、、ゆうべれ中の町で梅もとのはくかゝてふぜつ楼へぜひつき合といつて引とめられてゐるところへ京ばしの傳こうが来て玉樓へゐゝべといふとけへ角町の榮娥が人をよこしたからいつたらたわへもねへ銘六の号をかつたが正じんか見てくれろと目利をいゝつけるし角の春日野が中の町でちよつとおめにかゝりてへといふからいつたらとんだもいすきも有るもんだがくもんがしてへから素讀の先生を引付ておくんなんしおまへさんなら心やすくてなをいゝといふしもう〳〵此里へ来ちやァからだが十ゥ斗ッもほしひやうだ是じやァ命もつゞくめへ　トれいのしほやたならべたてれバ女郎も此からまんにあきれかほをしけ〳〵と見て　【女郎】ソリヤァほんにぬしァこれからよしわらへ見世をおだしなんし思ひつきた商賣がおすから【里】なにを【女郎】まづかた見世をしほ屋にしてかた見世でこそをおうんなんしたらさぞはやりんせう【里】コゥてめへでへぶあぢにはぐらかすな　トいへバ女郎ハ袖を口におほふてわきを向ひてふきだしてゐる

衣々の袖引

○客連雨ハ廿七八いしやうつけ今迄の小冊にくわしけれバ略す尤江戸町さるおいらんになじミありしが去年の秋より此女郎といふ事になり今ハ表向にて來るいつたい色の氣とりなり

○女郎待宵十七八去春より突出しいたつてきりやう人からもよく尤手も有りて此客をはじめ、色しかけにてよびしが外のふかき色客せかれ今ハ來らざれバはじめのうそもミな誠とやらにてなじミかさなるにつきまんざらでもねへやうに見せるしかしはじめの色客まんと金のあるやつにて今に中の町へちらつくゆへ此客にいまだ心のどんぞこハ打あけず

折からとなりさしきにてわかれさけのさへぎに絡きぬといふめりやすをたれともしれずいきな聲にて　＼そのうつし繪にうつり紙のもしやとぐちにやきふでのさきおつてきてまいり氣もしんぞ命もおしまづき　相かたまつ宵此めり安をきゝふつとその客人を思ひだしふさく【連雨】コゥどうぞしたか【待宵】よぎにもたれかゝりきせるをもちゐたりしがふつと氣がつき　どうもしんせん　トつんとして見せてきさらかす【連】ナゼ　ふさぐ【待】宵にやァ中の町でおたのしミだね　ト目でぶちころす【連】よく手めへもうたかひふかひ事ばかりいゝたがるせェ氣でもちがつたさうだ　＼客へよひに中の町てあそひすきた故うたがつてふさぐと思ひきのとくさふニおもふ【待】氣もちがひんすめェものでもおざんせん今になつて外になんぞ出來いしてハわたくしがぐわいぶんがわるふおざんす【連】おれが事にきづかひハねへが手めェの方にきまりのわりいのかそつちのぐわいぶんよりこつちのいちぶんかたつめェとあんじられる【待】ばからしふおざんすよだまつておいでなんしやかましひ

口だのう〔連〕このくちのふさぎてがねへから〔待〕ふさひで上んせう トロへロをよせう□□□□□□□このときちうと云しへ何のおとやらさくしやらしらち〔連〕でへぶ□し□た□があれたな〔待〕いつそのぼせんすよ〔連〕だれに〔待〕わらひながら おめへさんにさ〔連〕おかたじけそりやァそつちハだますがしやうばいこつちハだまされるがあそびだからいゝけれど〔待〕よしなんしへなんぼしやうばいでおざんしてもしやうとくうそがきらひでおざんすよぬしこそワたくしをおだましなんしてまだどこにかミれんをのこしていさつしやるよ〔連〕ミれんののこしくらにハそつちでもまけハしめへ引ッこミからのなじミといふもんだから〔待〕ナニとうにおいでなんせんものふばからしひよ〔連〕二かいがとまつたから生あハれぬといふやうなふじゆうなたちでも有めへ〔待〕そしてどうすれハぬしのむねがすミひすへ〔連〕どうもしねへでもいゝがあんまりなんのかのといぢめるから〔待〕いぢめるとおきゝなんしちやァわるふおざんしやうワたくしの所へばかりおいでなんしでハおざんせんがぬしのやうにまい日〳〵つき合とやらで御いでなんしてはもしうちで御あんじなんしておかミさんでもおもちなんすやうな事ができなんしたらどうしんせうとしミ〴〵それがくろうになりいす トうたゝ寝で ふさいで見せる 〽客も此いちこんは らわたへしまろ 〔連〕モゥ夜があけるさうだいつまでいつてもはてしハねへまたばんに来やうハサ〔待〕そんな事をいひなんしてもつき合をかこつけに ト折からおもてを朝 かへりの新内ぶし 〽あさのか

へりはまだはやひもういつふくと

だきしめて

□□□□□

下略

青樓夜世界 大尾

跋

花のもとに春を契り月のまへに一夜を限る友までも情あるゝ忘れかたし爰に友人あつまるのぬし傾城の眞實をつぶさに述る小冊を綴る予閲するに後世恐るべし其情をさくる事秦の方鏡なんぞ及ぶべけんや生水江戸産の氣性をあらはし上ミ豊三の尊きより下鉄炮の俠通までひとたび閲けば通の意氣たる事をしりぬべしと予もこしをおす荷擔人としてちつくり其意をしりへに結ふ

總[illegible]

旭[illegible]行述

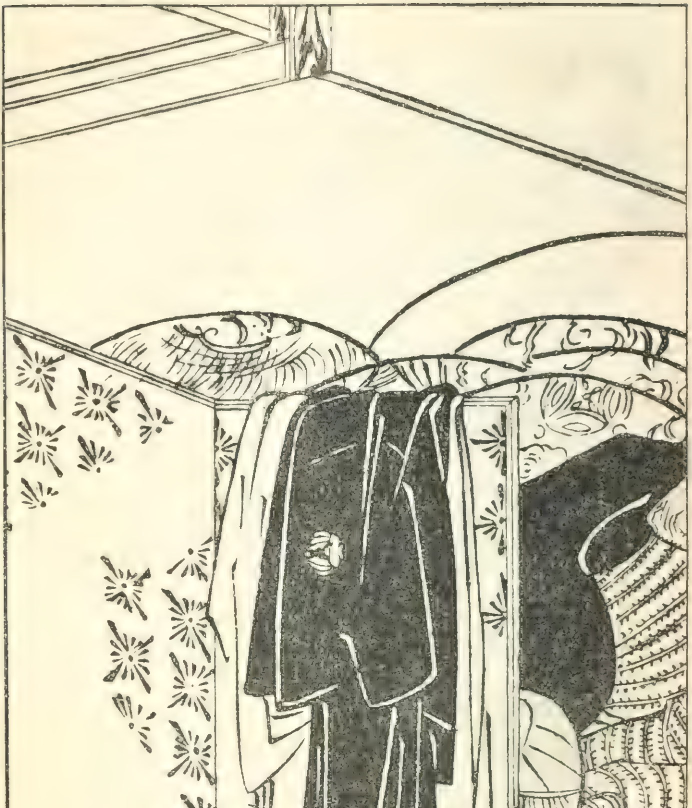
契情買虎之巻

序

洛歸街降れても燕市街しや最照とは白雨にあひし杏花にひとしく濡てほころふ色廓の無道と雖又道あり不義といへとも復有義一寸先は厭れぬ闇の空音の鶏に函谷關はゆるすとも月落鳥啼てこそ情郎の隔となれは雞にだも關る心ならん故に言告鳥とは題す物ならし

申の
はつ春

梅暮里谷峨述



目錄

〇上の巻　雛妓をあけて
おいらんを契る

〇中の巻　奸計をもつて
ふかき中を裂

〇下の巻　赤心をあかして
身を謬

終

梅暮里谷峨著

契情買言告鳥

上の巻

色廓の色い世界の其中にせ話になるのを客といゝせ話にするのを色夫といふつとめの外のたのしミハたのしミならぬくるしミのくるしむ中のたのしミこそこれをつとめいうさはらしともいふやうん太鼓名妓がとりはやし賑ふ座敷もそこ〳〵にかた付んとすればおとこいそぎとなぶらるゝもうれしさながら顔あかめさすかに客もその座をはづすも又色氣のふかきぞかしとれ〳〵とてもへだてなければとわけて心やすき座敷持【梅かへ】清さんよくしらぬ顔をして通んなんすねヘアおつとおはなしなんしな【清】客人があつたしやァねへか【梅】おいりいした【清】そんなら一ッぷくのんでいかざァなるめへアイ〳〵いゝかゝつかいつた〳〵【藝者】それてもおいらんへおわたし申させんでハしかられます【梅】わたしがいゝようにとりなしてあけいしやう【清】新八もいつでもいゝさへ【幇間新八】まふよふ御座りますおまへかたハもふはきたさへ【清】ハテいゝといふに【新八】さよふならサア おめへがたもいつしよにめへりやしやう【大勢】そんなら

旦那ごきげんよふとく〔清〕源七さんハいつきなさつた〔梅〕おとゝい來て今朝かへりいしたそれから寐よふとおもひしたら屋敷の客が來てもちつとさきまでおりいした〔清〕どふりでおめへのお顔の色かわるい〔梅〕またあん事を源七さんハ何きいしてもよく寐たがつてなりいせんどふもわたくしがおもふよふでハざんせんそれだからおめへさんも御幸さんかあのよふに氣をもみなんすものをちつとうハきをおやめなんし〔清〕そんなひれつな男しやァねへ〔番新うき舟〕清さんそのよふにきれいな口をおきゝなんすなさの字の事をしつておりいすにへ〔梅〕それごろうじいし〔清〕あんまり評判かつよくつて何もねへうちがおかしいじやァねへか〔梅〕御幸さんかてつせうを見つけると茶やののれんをはづしてやるといゝなんした〔清〕そしておれをつきだすとかそれミなせへそふいふおそろしい女だ〔梅〕たれしもほれてる身でハ可愛さあまつて憎さが百倍でざんすハ〔清〕ばかのろいがあきられるまてハそんなゑよふなことでハつきだされねへ〔梅〕その口をとふしておあげなんし男といふものハあきやすいくせにだれてもそのよふな口利口なうそをついておりいすよ〔清〕どふてもおめへがたのうそがうつゝたらうのふ浮舟さん〔浮〕いゝむしだつけね私なそハうそハきついきらいざんす〔清〕そんならみんなに誠をいふのか〔浮〕アイサいなや客人ハおもいれわるくしてやりいすこれもまことうらご

んすハ【梅】マア清さんおきゝなんしなてめへハあんなことをいつて〳〵にハとふもほかのきやくへのあたりがわるいから氣をつけろといつていけんをいゝす【清】あんまりてめへがつてだの【浮】そうしやァざんせんがわたくしとものの身とハちがいゝすハな【梅】此子ハうそてさんすハな源さんのことや何かまでいつそかげになりひなたになり實をつくしておくんなんすから大キにものかしよふさんすによ【清】こゝの内のせ話をする女郎衆ハだれても若ものハひとりもねへがおらがのばかりたあの子にもいろことをあてかいてへものだそふしたらおもひやりがあらふ【梅】それたからおめへさんばかりがたよりでさんす【坊主禿はつね】おいらんのおすせへす梅かえさんに清さんにいゝかげんにおひだしておくんなんしとさ【梅】あいさ御幸さんに清さんにうわきをせぬよふにいけんをいつておりいすから今にあげもふしいすちつとしんぼうなんしといや【初音】アイ（といきそうにすると）【梅】是さおほへたかいつてこや【初ね】清さんのうわきをせぬよふにいけんをいつておりいすから跡をいハす【梅】それこや今にあげもふしいすしんぼうなんしと【初音】アイト（そう〳〵ふく）【梅】それ御らうじいしだれしもすこしのうちもはなれるがいやで【清】これほどちかけれハいゝじやァねへか【梅】あのくらいなものだもふ何ももふしいせん【清】物使三度におよハぬうちかいろふいふ【浮】てへ〳〵まつてお出なんしやう【清】あしたよ

【皆〻】おたのしミなんし 清八そう〱床に入 【清】人をよびつけて寐ているもいゝこいつハゆふべけんを見せつけられたなそんならおらもねよふとうしろむきニなる【ミゆき】あんまりまつてもきなんせんからねむくもなりいすのさ【清】それたから勝手にねやなおれもねるハ【ミゆき】そうハなりいせん梅かえさんもてん〲の身におほへかねへかなんそのよふにいゝかげんにかへしたかいゝ【清】ふりむきながら ばかをいへ人にうらみがあるものかあの子も一座のはしなりてめへともわけてこゝろやすくするじやァねへかあの子か気をとふしてかいれ〲といつたとてそんならかいろふともまさかいわれねへちつとハはなさねへでとふするものだ【御幸】はなすもほとがありいすハな【清】そんならおれがわるく御ざ候あいたまつぴらごめん下されへく候めて度かしく おきあがり両手をつきあたまをさげてちやかしたいふ【御幸】ニツコリわらいだから そんならかんにんしにくい所でさんすがかんにんしいしやう【清】かんにんするもこれがつよい【揚巻】ひやうぶのそとから ミゆきさん【ミゆき】揚まきさんか【揚】いつてもよふさんすかへ【清】サァはいつて一ッぷくのミな【揚】ごめんなんしと 半分顔を出して【御幸】さつきの事かへ【揚】おめへさんハうらみなものだねどふしておくんなんす【ミゆき】マァきいておくんなんしそこら中をあるいてよふ〱むかいをうけていまかへりいしたハな【清】そこら中を糞しがわるくつておひ出されやしたそれで内のしゆびははなはだわるしさ【揚】

心からだからよふさんす【ミゆき】こつちばかりのろくなつたとおもつてミくびつてなりいせん私がいゝ手本てさんすぜへ【揚】それがたのしミでざんしやうハ【ミゆき】今吉左右をもふしいしやう【清】モウゆくのか【揚】又いつてめへりいしやうねへト行【清】阿蘭陀の女郎かいにいつたよふた何をいふかねつからわからねへ【ミゆき】こふでざんサアな揚卷さんがいつそ助さんニほれてとりもつてくれろといゝすが出來いしやうかねへ【清】人の心ハおれにもしれねへがあんなうつくしい女郎衆をしやうちしねへものかあれハ大馬鹿ものた【御幸】そんならおめへさんてもかへ【清】手めへといふものがなけりやァ承知しねへでどふするものた【御幸】助さんも若紫さんとハ一トとふりならぬわけじやァありいせんかへ【清】なんだか此ころハ氣まづい事があるとつていかねへよ【ミゆき】そりやァ耳よりでざんすがきれなんしたといふてもざんせんかへ【清】インニヤおれかおもふにやァ番新がいかねへやつたから此客をよふとどふて始終ハ身のためにならぬとおもつてか狂言をかくと見へた何をいふにも若紫かまたとしがいかぬから心にまかせぬよふすだ【ミゆき】そふきけバかハいそうてざんすねへわたくしどものとこの宿木さんとハどふてざんす【清】あんな事てハねへもちつときついのた【ミゆき】どこにもありいすものたねへそふいふところならしやうちなんしやうねへ【清】マァたれにそよ

ひにやりやな【ミゆき】下座敷に助さんかいなんすからちよつとはなしかさんすからとふぞきておくんなんしといつてくんな【まぼろし】アイト下ざしきへゆきそのとふりをいふ【助】清さんが何か用があるとか【清】用事のおもむきよのぎにあらすだが極内用たからマアこゝへ來な【助】なんだ氣ミのわるいおいらんこめんよと這入【御幸】めへりいすのでざんすがおめへさんにもさむしかろうとそんじいしてよびニあけいしたマアこゝへおあがんなんしな【助】こゝかいゝがとふも氣かゝりだはやくきゝてへ【清】手めへよくしつてるよふ□いやナ【ミゆき】ほかの事てもさんせんがおめへさんにむしんがざへすハ【助】命をくれろといふのか【御幸】イヽャヨばからしい【助】そのほかの事なら兄弟分につなかるおめへのいふことだものをなんてもきかねへてとふするものた【ミゆき】人にいわせておいてあとてかれこれハなりいせんにへ【助】そのきめたてがつてんかいかぬかおれも男のはしくれたハな【ミゆき】そんならもふしいしやうおめへさんにほれきつてるものかざんす【助】おれにほれるものならどふでろくなものてハあるまい【清】あつちのよりハうつくしいせへ【ミゆき】ぜひとりもつてくれろとたのまれへしたからとふぞせうちしてやつておくんなんし【助】ァヽおめへかたといふものハたのもしいものだはなしのつきる中しやァあるめへに人をよびつけてうれしからせてなくさむのか【ミゆき】そんな事てハさんせん【清】はやく名をいつてきかせやな【御幸】そんならもふし

いしやうがきつとせうちだね【助】やミと人ばかりきめるやつさ【ミゆき】おめへさんか京町のわけがなけりやァ何もこふきめだてハしいせんけれといハせておいて跡でいゝわけがましい事をいゝなんしてハその子にもはぢをかゝせわたくしもすみいせんがそふいゝなんすからまもや私かこまらせなんすめへからもふしいすァノ子揚巻さんざんす【清】なんとあんまりわるくハあるめへ【助】マァそりやァほんか死んだ（アトとぼけて見せる）【御幸】それ見なんしちやどころてハざんせんハな【助】ちやじやァねへ揚巻さんなら十年ばかりめへからせうちしている【御幸】實のある子でさんすからその覺悟（かくご）でいなんしよ【助】そりやァこつちの畠（はたけ）にはへるくさだおもしろい〱【清】京町のほうのわけも知きつてほれたからいゝじやァねへかそして京町のほうハどふした【助】おめへもしつてるとふり番新かあのとふりなり若紫がまだこぞうといふものたからいつこふなものたよそのうへニあいつも氣かおかしくなつたハな何か逢（あう）ともつともひとくいゝわけをいふがマァはやい事かあることふいつちやァおかしいかわたしがいつたばんかいくたりきやくがあつてもかたきし身うごかしもしねへやつが此ごろハはんぶんよりむこふにながくいやすこれほどわかつたことハねへながどうをふつてはぢをかこうよりハとなんてもきれよふとおもふがこれといふてつせうもねへからいろ〱となんだいをいふけれどなんのかのとまさかは

なさねへそれだから此ころハかいしきつら出しをしやせぬ【御幸】そりやァ揚巻さんのためにハもつけ調法でざんす【清】京町で見付られたら側のわるい内だからむつかしかろふよまあ〳〵きれるまてハかくれるよふニしてあがんなせへこふしておれが茶やからくれハしのふにハものかしよいおめへの茶屋てハなんのかのと大事をとるだろふ又はれてあかられるよふになれハそれハおれがとふとも茶屋の方ハするマア當分これが利かただ【助】そうしやしやうとさきの氣もしらすにのり氣になるてもねへが先いわひに一ッのみやしやう【御幸】つめとうざんしやう　トつぐ一口のんで置　一寸とかんをさせいせう【助】氣ハ心だからもふのミやすめへ大キにおせわのおじやまのおやすミよいゝ夢てもミなからまつておりやしやう　トドざしきへゆく　【御幸】寐ちやァなりいせんによ今に直ニやりいすにへ【清】早蕨さんハいゝか【ミゆき】それたからあの子の新造衆を出しやした【清】そんなら袋の鼠にしておいたのだの【御幸】うれしがらせてきいしやうねへ【清】きやくハあるか【ミゆき】初會でざんすそうさ【清】ヤレかわいや南無妙法蓮陀佛【御幸】きつい後生ねがいてざんすね【清】おれも覺かあるがおよそ女郎衆のこねへばんと冨をあてに金をかりたほとつまらぬものハねへ【御幸】いつてくるうちまたとこへも御出なんすなへ【清】今時分しれたことさ【御幸】　揚まきをつれ立行　助さん寐なんしたかへ【助】とふしてねられるものかなが

くこじかくまつていたれな御幸さんかおめへなら起さァなるめへ【御幸】よふざんすれな【助】どふもおめへの名れいゝにくいよふだ【御幸】アイサ　わたくしの名か幸といゝしたゆへ旦那さんかすぐにおんの字をくれて御幸とつけなんしたこれ揚卷さんなんのこつたなこゝへお出なんしサアノ\やくそくの人をたしかにお渡しもふしいすにへ　トおしやる揚まきはつかしそふに庄のうへに上る　媒れよいの柱てさんす【助】御幸さん紐をといてもにげだしれしめへかの【御幸】ヲヤ猫じやァあるめへし【助】一もつのねこハ爪をかくすといふからゑんのねへても是かられかつてしだいにかきなせへ【御幸】助さんもふかへサイおたのしみなんしトゆく【兩人】もふゆくのかへ　トまさか手もちぶさたなから　【揚】むりなことをもふしいしていつそおきのどくでさんす【助】おらあ夢しやァねへかととふもがつてんがゆかぬ【揚】夢ならおめへさんも京町へたいしなんしてもよふさんせうけれとわたくしもおもひきらるゝたけハと今迄ハあきらめてもおりいしたかはづかしい事もうちすてゝ御幸さんをおたのみもふしいしたをせ事のいゝおめへさんとハいゝなからよくきゝとゞけておくんなんしたねしかしひよんなものに見こまれなんしてめいわくでさんしやうねへ【助】なるほとおめへのいふとふりひよんなものに見こまれたよこれかもつとうつくしくねへとかまたハ心いきがかいねへとかとこかわるいといふ事ならおもひきりも出來よふが息のかよふうちハとふで思ひきり

ハできねへならやぼらしく今日からしよくごのミをするよふだか仇惚のなくさみてとりくんてハ見たかおもひの外手かねへや何やかやてよくつき出スもあるやつたがそれじやァおれが身がたちかたない【揚】そりやァわたくしかいふことでさんすまたなれ〳〵しいとさけすミなんしやうがおめへさんせへきておくんなんすりやァとのよふな事がありいせうとも又すへ〳〵内所てやかましくいゝしやうともまあごろうじいしこふいふつとめをしいしても女の口からはつかしい事ハもふされいす物かへ【助】そふいふ氣ならいゝわ□□□□□□こつちへよりや【揚】□□□□□よつてもよふさんすかへ□□□□【助】やかましいひざへだきあけ□□□□□□□顔を見合やゝあつて互に　嘘をつくと爰をつきとふすぜへトのどたつくまねをして見せる【揚】

傾城道成寺うた

〽せいもんくつされたましハせぬに引にひかれぬ心かあれハそれハねてからそのいゝわけをせうぞいのその時ハとふともなりいす折からいつれの座敷にやら

○中の巻

どれとても客の噂のその中にも若紫が座敷にハうへをしたへとよりこぞり助六かうわさとり〳〵【新造とこなつ】ァ野分さんおきゝなんし十五日のひも助さんがいきなんしたそふさなんぼ男がよ

てもあれじやァあいそのつきたものでざんすねへ【番新のわけ】早蕨さんをあげて揚卷さんとあひなんすといつてもおいらんハまたのろふさんすハなそれたからみくびつてそのよふなふミつけたしかたをしいすおめへかたハきなんしたときゝなんしたらつけてぜひつれて來(き)ておくんなんし茶屋もぬしの茶やからハいきなんせんそふだの【しんぞうかゞり火】アイサア ほかの茶屋でざんすとさそして朝(あさ)や晩(ばん)やよるハめつたにはいんなんせんあふかたハ日のさかり＝きなんす ト柳屋せきや がいゝした【のわけ】そふいふふてへ助さんた物を日中(ひるま)なら猶よふさんす【かゞり火】たしかにけふハきなんす時へだからもちつとしてからつけていゝしやうねへ【のわけ】そんならそふしておくんなんしと ふい 町へ若葉きたる 【若】ヲヤ／＼賑やかな事たの【のわけ】助さんがあんまりでざんすから此子たちにたのんでつけにやりいす【若】ぬしもちつとゆきちがいの事かあつてはらをたちなんしてそれてたしかにきなんせん【のわけ】おめへさんハそれだからはがゆふさんすせんどももふしいすとふり揚卷さんと大いろことでさんすつさ【若】そふでもありいしやうかぜんてへ助さんハそんな氣の人じやァざんせんがそれといふもあのいせ久(きう)さんとわけてもあるよふにたれかいゝしたから氣まづくおもひそんな氣にもなりなんしたろふそれだからもふ一度おめにかゝりよはぬまでもいさゐをはなしもふしとうさんすハ【のわけ】はからしいぬしはかりいゝ男ぢやァあるめへ

し今さらどふされなんすものでざへすそしてほんとうにうたくりなんしてもい久さんのまねが助さんに出來いすものかへあんなものはかみをきつてつき出してしまふがさつぱりとしてよふざんすあんまりふミつけたしかたでざんはなわたくしがついていてそのよふ〻されなんしたといつちやァ仲の町て私がいゝわらいものにされいす

若紫もいゝたいこともあれともせわになる身のことなれは何事もなミだとともにひかへ痞に時をうつせしが折わるくも禿かしらセ〻新造たちわれも〱と出るよりはやく助六を引連來り廊下のかたされかしく

【助】しづかにしやなぐわいぶんのわるい此よふ〻されるおぼへはねへサアノ〱どこまでもゆく

【巻柱】よふざんすだまつてお出なんし　トおくざしきへ入レられる　【のわけ】サア これをきせかへておくんなんし【助】ばからしいこんな赤ふり袖か着らるゝものか【かゞり火】そんなむだをおいゝなんすなサアノ〱きかへなんし　トよりたかりきせかへる　【のわけ】それ見なんしいつそよくにあいなんしたマアゆるりとおあそびなんし

奥座敷へたゞひとりうちすてられまてどくらせどたれあつておとづるゝものもなくたま〱とふるをよびかけれはしりいせんよといふのミかゝろふしまもなく月夜に釜をほり出スとは

大キなそうゐの事ニて野分をはじめ手ニつく新造どのさしきへかよりこぞり【竹川】野わけさんふりそでをきせかへたのを見いしたらふだん心やすいせへかいつそかわいそうになりいした【のわけ】おめへなんぞハ今からそのよふな氣のよハひことをいつて髪をきる時ハやくにたつめへ【かゞり火】はやくきるがよふざんす【のわけ】此子もまだはよふさんすもちつとうつちやつておきなんし【若】いかにしても髪をきることハよしてあげておくんなんしな【のわけ】かんじんのおめへさんがそれじやァすミいしねへわたくしともにまかせなんしな【若】わけのあることざんすから【のわけ】おめへさんハどのよふな事をいわれてだまされなんしたかはらもたちなんせんかへあきれけへりいすそんなミれんな事をいゝなんせすともい久さんかまつてお出なんしやうはやくお出なんしト

わかこゝろのまゝにはからいにくさなからも二三もくもおく事なればぜひなくとのあんじすかたにておくさしきへゆく跡ハてん/\に髪剃はさみとゐものをもちおくさしきへおしよせ【のわけ】助さんいつそいきでざんす揚巻さんが見なんしたら猶ほれなんすてざんしやう【助】おめへかたハあれほど心やすくしたものだからわるいことがあるなら此よふにしねへでいつてくれたがいゝ【のわけ】そんないゝわけをする口ハもちいせんおめへさんのむねにおきゝなん

し【助】むねニきいても心ニきいてもしらねへといふからそんなら若衆を一寸よんでくんなせへ【巻柱】若しゆハおりいせん【助】そんならだれでもいゝ茶やをよひにやつてくんな【巻柱】おめへさんよひにやんなんし【助】おれがいわれるくらいならたのミやァしねへ【かり火】おめへさんにつかわれるものハたれもざんせん【助】そんな事をいわずにそんなら若衆をよんでくんな【横笛】若衆さんハきやく人でおめへさんのよふな人にからかつてる間ハさんせんとさ【助】後生だからとふぞ一寸よんでくんな【のわけ】よび出したとてどふしてきなんすものかへたとへきなんしてもわたくしがなりいせん【助】何をいつてもとりあげぬかこんなめにあつたことハねへばからしいなんのことハねへあミ笠をかぶつて舳先へ出て居よふといふなりた【よこふへ】よくおめへさんハぐど／＼いゝなんすねかくごのうへでざんしやうハな【のわけ】そんなことをいゝなんせずとも道成寺でもおどんなんしそふしたら猶ほれてがざんせん【かり火】アイサねへあんまりいゝからわたくしもほれとうざんすかぬしがぬしにほれていなんすからほれ所がざんせんどこにほれたらよかろふとまよいゝすいつそはなてもほれいしやう【のわけ】此子ハとんだことをいふものだあのはなにハ一番ニほれてる女郎衆がありいす【かり火】わたくしもほれ所がねへからほれよふとおもいしたがすけべへな女郎衆でざんすねへそんならはなの先のほくろニで

もほれよふ【いわけ】此子も人の事ハわらいなからすけべへな子だのふとかくはなのきんじよにほれたがるよ【小火】どふもしかたハざんせんハな【明石】いろ男といふものハすて所ハざんせんいふどふらで額のぬき際がはげいしたが大かたかあいがつてなめたいでざんしやうあれからだん／＼うへの方をなめなんすかへ【のわけ】蜒のよふな女郎衆てさんすねへもふいゝかけんにして髪にかヽりいしやうおめへさんもあかるいうちがかつてでさんしやう　トたな／＼たちかゝり【助】どふでもかみさるいおゐのくらいなぐさんだらよかろふそりやァあんまりだ【のわけ】みれんな事をいゝなんすな猪食たむくいでさんす

今ハ助六もきらるゝ事とこゝろ細くなるたけハのがれん人情なれハいろ／＼にもがき手を出せハ

【いわけ】じれッたきんす手を出したなんすなきつてもしりいせん　トおとしおもふまゝにかミなきれて【明石】よくおとなしくきらせなんしたきものでもきかへはやく行て見せなんし【助】いぢつて見せな くちなかれす　アハ　なさけなくもきつたいきのふいこかたけふのてきかわりやすきハ人こゝろだ

此一句にてかわいそふ＝おもふにやたいていハさらはらとはつしけれとも番新野分が手につくしんぞう一兩人のこり

【よこふへ】そんな事をいゝなんしてたれもなんともおもいゝせんよサアくもふおかへりなんし【助】とふぞ日のくれるまでおいてもらいてへ【のわけ】そふれなりいせんわたくしともも見せまへだから用がざんすそしてそんなことをするとおいらんがこゞとをいゝなんす【助】手ぬくひをおめへかたのおかげておとしたからどのよふなのでもせめてかしてくんな【のわけ】よけいれありいせん【紅梅】そんならわたくしのでもかしてあけもふしいしやうかね【のわけ】はからしいよしなんし【紅梅】それでもあんまり【のわけ】はてたとへあつてもぬしにかす手ぬくひれさんせん江戸町へいつておかりなんし【助】此時節(じせつ)とこのうちてもつらかろふか三浦とやらはんほとやら手めへのよふなこんじやうのわるいものか此ひろいくるわに二人ハねへぞよ三浦とへのわけかはい名也だいのこしやくなしんぞう也【のわけ】手めへもいゝひかれものゝ小うたとやらさ【助】おれかおもひではかりも見ろよくれねへぞよなミたくみこいゝなからドへおりる【のわけ】色(いろ)おとこのかへりたよよく見なんし

何かわからすしてとび出して見るもあり又心やすくせし女郎ハきのどくニおもひてかたきしかほも出さず根かあきもあかれもせぬ中を野分かはかりてさきたることなれハ若紫も名殘を惜しミ人目なくハとひ出したくもおもへともわけてこよひの客いせ久とてむつかしやなれハよそ事のよふニ我座敷よりすき見せしニその見すほらしきすかたニおもハすなミだをこほせ

しかれ

〔い久〕手めへゝなぜなく〔若〕ばからしい何なくものかへ此ころハとかくふさいでなみだが出てなりいせん一ッのみいしやうかね〔い久〕それがよかろふなんだかけふハさわがしい日だたれぞかみてもきられるよふすだ〔若〕そふでさんす〔い久〕そりやァむごいことをしたまあどんなふざりだか髪をきられるとハよく〳〵わるいこだと見へたその女郎もまんざらでもなかつたろうにあんまりきのつよいことだ〔若〕ァィサそれにハわけがありいす女郎衆もいつそほれきつていなんしたからきやく人もそのよふにいやでもねへかしてあしをちかく來なんしたがその女郎衆を世話にする女郎衆がとかくその客人をじやまになんしてそのきやく人の來る晩といふと外にあしをちかく來る客人のことをどふかわけでもあるよふにわざときけがしにこそ〳〵はなしをしなんしたり新ぞうしゆ＝いゝつけてハこふしてあいたがる人かあるのなんのとないもしれへことをいつてよび出させその客人の氣のわるくなるよふに〳〵とはからいなんすからその女郎衆も又だましか久しいものさわたくしハよび出されるおほへハさんせんとはらをたつていゝなんせハほんのことできんすとたび〳〵よひにきいすゆへうそとハしりつゝうつとふしうおもひなんして御出なんすとやつぱりうそだけれともなんぼ氣がいゝといつてもその女郎衆

もむしがさんすからまさかだましともいわれずきよふがおそいからまちどふしかつてその人ハどつらへかいつてくるとたつた今いつたといゝまきらかしてもその女郎衆もはらをたち久(はき)しいものだあの客人がきなんす晩といふとなんのかのといつて人をだましなんすはからしいたれそいゝつけてかありいしやうとせわをする女郎しゆにあてつけておいゝなんすけれどまさかにぎんこもしにくゝおもひなんして又ハあんまり手間をとつてハ猶その客人がなんとかおもひなんしやうとそう／＼ニいつていゝわけをいゝなんすけれとふだんのことゆへおつうかんをつけなんすもむりでもざんせん【い久】何もそのよふなこめんどふなきやうげんをかゝずにその子のためにならぬきやくならよびなさんなとしらで、いふほうかよささふなものだ【若】サアそこでざんすその客がなんでも人なミにハなんすゆへよぶなともいわれずそしてぜんでへいがいわるい女郎衆だからその子のよばふといふきやくハだとたとへためになる客人でもじやまをするがきついすきてざんす【い久】きやうげんでかみをきられてハうまらねへものた【若】そふしたあいそつかしで手をきらせねハ又ひよつと内證(ないしやう)であいひきでもしよふかとうたくつてしたことでざんす【い久】むねハわるいがそこにいたつてハよつほどふるたぬきだの【若】それだからきまづくおもひなんしてしぜんとあしもとをくなるすれハ外へもおもしろいことが出来(でき)そふな

のでざんすとその女郎衆ハすこしもにくゝハおもひなんせんがせめてそのまちがつた心をつうじたいとひとりで氣をもみなんす【い久】それまでにとふかなりそふなものだの【若】たとへどのよふにおもひなんしてもまだとしはもゆかず出ても間（ま）もざんせん＝よつて人の世話になる身なれハ何ことも心にまかせなんせんからいとゞくちおしくおもひなんす【い久】それでそのよふにはらたちなさるだか【若】だれがへばからしい【い久】なんぼかくしてもしぜんとしれる五音（いん）の調子（ちやうし）【若】ハテこふいふゆきちがいできれるよふになつたならマアどのよふでざんしやうやら人のをとハおもいゝせんよく耳（みゝ）をあけておきゝなんし（トミゝをひつはる）【い久】ア、いたいとんだところへとはしりがきたよしてもおくれ【若】あざでもつけハたれぞやかましくいふ人がありいすかへ【い久】ばかァいへ【　】サアきゝいしやう（トむなづくしをとる）【い久】いゝよさ

【作者曰】これよりのろくなりはじまりさよふ＝御らん

○下の巻

二世までもかわらしものとむつこともかハるも人のなかごとゆへ引さかれたる盟紙朱（ちかいしそあけ）をうばハて奪（うばへれ）しゆかりのいろのむらさきをむすびかへたる揚卷と解（とけ）てむすハる緣（えん）の綱（つな）【茶や】さよふ

ならおやすみなされまし【助】けふハ何かにつけて大キにおせ話かみさんにもよくいつてくんな【茶や】明朝ハ何(なん)とき時分(ぢぶん)お迎(むかい)をあけましやうねあしたハうさんなものね【助】マア　いつものとふりさ【茶や】人里とをき所なれハ此子をおもいれとぼしておやんなさりましとんだすきさ【さへらび】新助さんいつそすかねへよおすまさんをそふしてあけなんしな【茶や】氣のおほひ子といつちやァねへあんなにやきもちをやきまさァな（トじりをたゝきそふにする）【さわらび】（大きなこへニて）あゝれよしなんしおすまさんにいつゝけへすにへ【茶や】その口へゆをのミなと（ちやわんを出す）【さへらひ】しりいせんよ【茶や】ヱイ明日むすめ氣をつけよふそ（トちよつとからかいゆく）【さわらひ】大ごへにてあれさァ（あとはこゝへにて）ひつゝこい爺(ぢゞ)いだはやくかへりなんし（ト火入レを見て）たれかよく入レてくれたそふだ助さんさみしうざんしやうがちつとまつてお出なんし間を見合(あい)ておいらんをよこしもふしいしやうこんやもおりがわるうざんすしかも二人(ふたり)きやく八がありいす（トいゝながらゆくしらせニそう／＼きて）【揚】助さんもふ／＼あいたくつてなりいしなんだが座敷てハ人が氣をつけいすとしんぼうしていゝした【助】又こんやもふたりあるそふだの【揚】いくたりでもいこ(行)ふじやァなしよふざんすマァおめへさんハひよんなことでさんしたのふ【助】これ見やこんなに根からきりやァがつた【揚】ほんにねへそれてもよくゆひいしたからしれへせんハ【助】イヤもふ日頃(ごろ)一ッわんのものをくひやい心やすくしたもの

もミんなむこふづらになつてィャはなすもぐわいぶんがわるい【揚】ホンニさぞせつのふざんしたろうそれといふもわたくしがむりぼれをしいしたゆへおめへさんニもせつない思もさせいすかんにんなんし【助】そりやァいつてかへらぬことだこふくるくらいでハかくごのうへだか今までハともかくもこれから手めへがたねをとるゆふがほを見るよふニいつまでもちうふらりんな心でハすまねへどふともしつかりときめてもらハねハならぬ【揚】そりやァ少しもうたぐつておくんなんすなわたくしかよふなものでもわたくしゆへにこふいふことになりいしたものでざんすものをおめへさんのかほのよごれるよふなことをしてすミいすものかへこれからハはれてよびもふしいすそふおもつておくんなんし【助】そふした所かいつたんハたつよふなものゝ短さかりで又わかれるよふにならハとさきのことがおもわれるよふだ【揚】又その時ハどふかしよふもさんしやうハなおめへさんゆへならどのよふなうきめもいといゝせん【助】そのこゝろさしハうれしいがひよんなことにより行すへハふたりの身のつまること【揚】それもぜんぜのやくそくかいつもの國てむすんたゑんかとわたくしハうれしうざんす【助】どふやら今から後篇をかゝれるよふな心もちだ【揚】毒をたべらハ【助】皿までたとへ死ぬとも【揚】ふたり一所に助六さん【助】揚巻【揚巻】かならず見すてゝおくんなんすなへ

跋

チヤン奴人の不買の歎息聞は吐唾而踟知無へア、ラかんてんのゆかぬ老子曰知足之足常足とはいゝた此廓を見さる前の教言成歟素見の賢として青樓を歸らんとすれハ落日と倶に靈香薫じ琴鼓の音樂或は唱盡新詞して五街より西施毛嬙の三舎をも避るの浮妓如涌を見てハア、欲〳〵の舫を解おもふまゝに流るならたとへ金言ありといふとも綱のめに水のぬけるに異らん至是嘲とも道にたつて譏者少く其深意を知されはなり嗚呼愼へきは色欲の迷いじやナア

やはく書

梅暮里谷峨著

傾城買二筋道

後篇　同廓之癖

三篇　同霄之程

傾城買猫之巻

白狐通

いろ男ぶりめハちやほやされ後にハ突出され

ぶ男ぶりめハあかれ後まん[illegible]解るやつら[illegible]

時つるこまでそのひろふくらう

実をつくしの[illegible]をききわるなる

これもたゞひとりのひいきぶ[illegible]れ

あふされも[illegible]じ[illegible]るなる

女郎のうそをさへうしなわれる

まぬけをくるる本なり

地ごとの女郎の情をききわけるの

論をするおりしるき本之

契情買言告鳥

つゞめの外にさくしよ書文
おもしろき本なり

来酉新版

後篇言告鳥

悶しるまでいろ〱恋のひめつい
姉てる和まひ意そろおもしろきおさなき

傾城買甲子夜話

甲子の夜ばなしまつとはすゞしきに
て二夕つ人のあいさつのおかしさをかきし

傾城夢之汗

落まゝるてないしよはるる
さらふおもしろき本なり

鶴岡花撰帳

己巳の恋人の身をうきてる
おもしろき本なり

追々出來仕候間御求讀可被下候

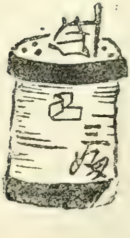
宵の程

二筋道三篇霄の程序

二筋道も三ッ合て六筋となりこれ三弦の連彈にひとしく絆る原の戀中解るのも戀縺るゝも戀延るも切るも習ひなれハ本調子の手琴に二上りと登れハ三下りとおろさるゝ階子六段からのたんとりハたとへ古近江の名作といふとも心も亂れの淫蕩さに合せものも離〳〵と稚調の鬧熱なる音色もついにハ砧の寂寥柏子まて皆谷峩子の手附にして流行文句ハ眼前にッレ手にとつて見給へと息勢張て草紙亭顏へ宥ひ殘しの妄言書を爰に序す

作者

梅暮里谷峨



總目録

第壹

此段ハ行にゆかれぬ己か身の迷ひの闇のあやなきもまさかに義理にからめられうかぬこゝろもうくふりハ二ミちかけし貞節にをもひきつてもそれぞとハ云兼る

其頃藏の除　貧居の白雪

第貳

此段ハ泣になかれぬ戀うたの契りし事も口まめに噂咄しもうさはらし氣を引たつもくがゐだけ二タ道かけるしん實にふり拂ふてもかへろとハ成兼る

其頃長の相　青樓の白雨

第參

此段ハ引にひかれぬ三味線の糸より細きやつれほとしたふ御方へ遠ざかり思わぬ人の横れんぼふたみちかくる恩愛のさんハきれてもミのいとハ切兼る

其頃收の去　井里の初嵐

第四

此段ハいふにいはれぬ親と子の間もうき世にへだてられけうゆるされしかんどうも年賀のをりを幸とふたミちかけるよろこひに下戸上戸でも醉ぬとハ見兼る

其頃生の病　市中の春雨

四

二筋道三篇霄の程

梅暮里谷峨著

○第壹　冬のだん

新古今集に契りをくことこそ更になかりしか兼ておもひしわかれならねばと心おとろかれこれ程に思ひしことも日に〳〵うときゝは世の中の常なれとも是とてもまた上べの戀にや文里は一ト重にわかれしより月ふれどもわすれがたくあしたにおきてもくるゝをしらず凩せはしき夕ぐれの軒端をならす風の音さへいと物うく病にからまれあんじる妻のやるせなくゆきとゞきたる看病の雪につけ雨につけおもひ過しはたがゐの泪先だつことはの邪魔ながら

【文里】これ〳〵お時ャアそのやうに深切にしてくれるほど余所〳〵しく禮どころではなけれとも思ひ廻せバまわすほど我身の罪のおそろしくたつた一人の心から多くの人のうきくろふ親たちもさぞ憎ひやつとおぼしめそふその罰で今此ざまそれといふのもァノ一ト重月〳〵に難面

はしめのうち態とかよふも男の意地がついした事より深ふなり引ぬ引れぬ心の迷ひ剰へおれが事より病ひづき一日うれしきめもさせず此よふなわかれも今更なんともおもわぬとそのうちのこなたの憂艱難まする心と愛相もつきずひとかたならぬ深切にしなれもせぬ手鍋業それもみんなおれゆへとおもへハをめ〳〵と面目ない此生面をあわせうよりいつそ病がもとゝなり死で仕廻べこなたや子供等またうかむせもあらふかと只それのミを願ふにぞイケとしをして馬鹿よおろかとわらわいで手前勝手の事なから何事も皆前世からのやくそくての此悪縁ともおもひなをしてかんにんしてくれろ

トそゝろ涙にくれけれバおときも泪の片言ながら

【妻お時】ナゼそのよふないまハしい事おつしやります夫のためゆへうきかんなんハ女房の役それがなんの珍らしかろふそりや又おまへの隔の心一ト重さんとの深ひ中ロ〳〵告たる人さへも憎ふおもふハ初の内もへたつりんきもおししつむるもお前が大切さひよつと無分別でもあらうかと恨つ泣つあんじるハいかな夜毎もかわらねバぐわんぜもない錬でさへふしんに思ふかして前や後へすがり付のぞきこむのもいじらしさにおもひなをして口先で笑にまぎらし寐せうたをなミだに聲のうるむのをしらせぬむねのせつなさに翌日逢たら此つらさ何から先へいゝださ

んと思ふ恨もまさかにもお顔を見てハみすぼらしくむかしにかわるおすかたと思へは悋氣もどこへやらいつかわ嬉しうてあさゆふもひとつにくらすこともやとそれをたのしミ二人の子を守育てるも女の手ひとつ苦勞ハおなじ一ト重さん一日安堵のおもひもせず生死しれぬとわかるゝかなしミいつしよに居て倶〳〵におまへを大事にするならバなんぼかうれしかろうにほんにむかしの御身ならバしやふもよふもあろふにとふだん心にたへねどもわれとひとしき人なければかたりきかするたよりもなく心で愚痴をくり出すはかり此やうにおもふておりますにわたしが前をかね繕ひうぬか心もうくふりにへだてらるゝがわしやかなしい日に〳〵痩おとろへの塞も増る病根ハァノ一ト重さんのわかれよりとそりやいわずともしれてあれど世にある時さへせぬりんきのなんぼ女子の愼しミでも今までこらへハいたされませぬがどのやうな憂數〳〵もせめてはなすうち斗も氣のはるゝのハ誰もかわりハ有まいになぜかう〳〵とうちあかし氣をはらすのも苦勞をもいつしよにして下さりませぬ

ト實あらわれてなげくにぞ

【文里】何から何迄のこるかたなきその心底今更貞實なこなたを見かへ死だか生たかしれもせぬ隔たる田舍の一ト重が事なにしに思ふて煩ふものかかならずあじに氣まづくおもつてくれめ

いよ【妻】氣惡くおもふくらゐなら初から此うきハ見やしませぬがわたしが慾目かしらねども何ひとつぬけめなく仲間中にもたてられて智惠才覺までほどこしたそのおまへも今そのやうな御身になりては愚痴に心のむすぼれるハさら〳〵むりとハおもわいでよふさつしておりますがおとしよられた御兩人さまに能耳をきかせさへするがまだしもの御孝行と女子だてらに出過るも氣にあたらば堪忍してうき〳〵として下さりまし

文里ハ言句のいゝわけも涙にものをいわせぬのミふつと目さめて鉄吉ハふたりの顔をのぞきこむのをさとられじと

【文】鉄やよくおきたのト いゝまきらす 【鉄】ナセそのやうにとゝさんかゝさん泣しやる坊かわるくハかんにんしてこれからハおとなしくする程にモゥないてくださるな

ト子どもなからも何事かとあんじる心になだめる文里ふうふもこらへてもこらへかねたる泣かほにて

【文】何鉄のわるい事ハミじんもないわるいといふハたゞひとりミんなおれが心からぐわんぜもない坊主にまであんじさせるハよく〳〵なはしにも棒にもかゝらぬその親にナセそのやうな孝行の子やこなたいよふな貞實ものがめぐり來るとハやつはりおれをハましめと思へバ〳〵我

ながらわが身のうへに愛相つきコレいきなよ〳〵

　トせがまるゝ程猶なミだ夫のこゝろおもひやる文里も妻の顔見ながら

【文】アノ坊をかわいがつたおばさんハ田舎へいつて死だか生たか便りがないがどうであの大病てハ全快トハおもわれぬ今頃ハ土の下へはいつたであろふヨ【鋏】ナゼ【文】きい〳〵がわるいくつて死んてしまつたろうよ【鋏】アノ死とハ【文】死とハノせつないくるしいもので坊にももふあわれぬノサ【鋏】おとつさんにもか【文】ヲ、このとゝにも猶のこと【鋏】それじやァいやじや〳〵〳〵 トなきいだす 【文】おばさんがきいたら嘸うれしがろふがどうもしかたがないだまりや〳〵【鋏】とゝさんとかゝさんとァノおはつとァノおばはんとふだんいつしよにいたひものを【妻】ホンニわきまへなき心にもいつしよに居てくらしたいとハヨゥいやた世がよでひとつところにいらるゝなら しばし有て モゥ〳〵なきやんなおばさんの病氣もはやく能なるとまたとゝさんの御かんどうもゆりそうするとまたどうともなるコレ〳〵袖をだいなしにぬらしたサァきせかへましよ【鋏】アノいひべゝをきるのか

　トいふ顔つく〳〵見つめる母うかむなミだをのミこみて

【妻】世につれるとハいひながら木綿布子のあらい張なんのこれがよひ着物ごなんぼはしこひ

生れでもさもしく暮せば心までさもしくなるが不便ぞやモフ〳〵そのよふな外聞のわるい事いやんなと〻さんの御勘當さへゆりればこんなべ〻は見せもせぬ今すこしのうちとしんぼうしや【銕】そふすればよいべゞかきらる〻か【妻】きらる〻とも〳〵【銕】モフいくつねるとよいべ〻きてまたおばさんもとまりにきなさる【妻】モフいくつねたらあわる〻よふになることやらそのよふにたのしんでまつ甲斐もなふなるならば【銕】そのやうに泣からうそか【妻】なんのうそではないのふ十ヲ十ほどねると何もかもよくなる【銕】そうしたらと〻さんもとこへもですに内においでよ【文】ヲ、いるとも〳〵こなたや銕がことばのはし〳〵あて〻いふとはおもわねど自然とこの身にひし〳〵と釘をうたる〻よりまだつらい言ふてかゑらぬこれまでのあやまりあらたむるのは古人のおしへ今よりまよひの雲はれて白日をみるごとくなる我こ〻ろモフ〳〵一ト重かことはふつ〻りと口へもだすまゐおそろしや〳〵

トロではいへどこ〻ろては問音信のその人さへもしや一ト重か便りかとあんじる胸のおどろかれ妻のお時は猶更に心づかひの病ふの仇といろ〳〵にこ〻ろなくさめてもはかどらぬのは氣やみの癖としりながら

【妻】モシヘわたしが一ツの願があるがきいて下さりますかへ【文】一ト重が事かあれが事な

らモフほんに思ひきつている【妻】そのひとへさんのことなれどおもひきつてもろふてハどふもわたしが氣がすまぬあの子とても田舍へ行てよりよいとかわるいとかどこからぞチットハ便もありそふなものとどふもあんしらるゝ定めて病人のお前ゆへ面倒でもあろふなれど床にばかりついてるでもなく只氣むづかしいぶら／＼病なればー寸なりと廊へいてよふすをきいてあんどさせて下さりまし【文】何をいふかと思へバたつた今おもひきつたといふ口の下からばか／＼しいそして便のないほうがまだしもましであろふよ【妻】それだからことをわけてわたしがお願ひ【文】それだといつて【妻】またこれほどのねがいハきいてもよさそうなものでごさります【文】まだおそくもない事さ何からなにまでぬけめのなきこなた一ト重ハほんにあやかりものあだにおもふとばちがあたる【妻】これといふもお前が大切【文】それほとまてにこの馬鹿をしとふといふもミな悪縁【妻】煩ひ合ふほど惚もあくゐん【文】モフいふてくりやんな【鋏】かゝさん寒い【文】イヤまた雪が降て來たそふだ佛壇のあかりをつけやれ【妻】ハイ

火をうちつける音　カチ／＼／＼／＼

○第貳 夏のだん

序開者

先夏冬の床の初夢に

春午の新板

後篇ハ去未のとし

三篇ハ此申のとし

其戀中ハ 紀伊國や文里

三浦や一ト重

異見のみハ

歳毎榮

古る事も我智恵顔や筆初め

二筋道三篇霄の程

七情ハ人に備たるたつとき物なれど心を情に奪れてハひよんな處へ義理だても迷ふ互ひの仇ごゝろより出來ものにて終にハ身をほろぼす事眼前御身達のうへにあたり候よふ歟と覺へ善惡の二すじ道ハ右と左のさかひすへて善淋しく惡賑ひ候かたゆへ落入やすき人こゝろに候まゝ此處よく／＼御勘辨あるべきため善の意のあやうきを書たる

世の中の義理も恥辱もわきまへのある程胸のくるしさに妻のすゝめを幸に病ふの足の道はかも心はちかき格子先それと見るより口／＼に呼たて顔を見合せは過し事のミおもひやり日に持なミだ夕だちのしばしはれ間もなかりしがヤ、あつて

【花の香】文里さんよふおいでなんしたねマア何からお咄しもうしいセうかおめにかける人もありいすが今仲の丁へまいりしたマアおあがんなんし【文里】おれもあがりてへか茶やいまへも氣のどくなりまた内所へたいしてもあがりにくひ【花のか】ナニ内所でも文里さんがやうすきゝにひよつと御いでなんしてもたゞおかへしもうしてハわるいから内所の客にでもしてあげもうして酒でもあげてくれろといゝつけておきなんしたゆへよふおすからおあがりなんしな【文】そんならあがつてもよかろふかの【見世の女郎】サア／＼おあがんなんし【文】ミんなもはやくあがんな【女郎大勢】のちほどへ

トたがいのすてことばともろともに暖簾おしあけ二かいへあがり元より噂のやむ間なき文里がことなればわれがちにかけつけミても痩おとろへたるそのすがたにたゞなミだぐむ斗りにてたま〳〵はなすもめん〳〵にかなしき事をひろいだしあわれにたへやるに盡せぬ事と若いもの〻斗ひ坐しきをもはやかた付んとなミたへたてる機轉もい【若者】まつあちらへおいてなされましとその間に手はやく床をとり屏風かた手に引出せはたゝミをするをと

サラ〳〵〳〵

並

床のたん

【花い香】文里さんマアよくこられなんしたねほんに一日でもおめへさんとおいらんいうわさをして此數日はおつせんはなマアそれはそふとおめへさんもおいらんにおわかれなんしてよりとかく氣むづかしくおわづらひなんすときゝいしたが今程ハどふでおすへ【文里】見るとおりにやせおとろへた【花】サアイへいつそかほなぞハおやせなんした【文】イヤもふそれにつけてもいろ〳〵つらゐはなしのミ【花】アイサそうでおつせうともわたしもはなしが山のよふにつ

もつてをります【文】マア一ト重にあゝゆふわかれをしてより日頃のおもひに百ばいましがいぶんのわるい事なれど男らしくもない此よふにぶら〳〵わづらるうちとのものにくろうをさせたりねへておめへがたにまであんじさせるをわきめからミたらばがなたわけとハおろかな事人間とハおもわれめへそれにおめへもかわいがつてくれた銕めもおれが此よふにぶら〳〵するをはしこひやつゆゑ一ト重が事て煩ふとおもふやらかわひがつたおばさんハどふした〳〵と氣をなぐさめるやらあんじるやらそのいわるゝ度〳〵にほんに子どもにまでくらうをさせるとおもへバまたそれが苦になつてどの道病氣ハはかどらぬはづたよまたおときも此よふなものを夫とおもふかしてたゞ大事〳〵とされるほどいきてるこゝろハねへハナ　しバしあつて　いつその事死んだとしれたならば坊主になつて廻國せうともおもうそうすれバ二人の子どもやおときハ親父にはうへ引とつてせわをするだらふそれでハあれもすこしハ苦もうすくなるそれに付てもたよりがきゝてへよ【花】おめへさんがたの中でハ中〳〵かりそめの事でおすつせんからむりとハさら〳〵おもひゝせんかならず〳〵とりつめなんしてあじな氣にでもなりなんしてわらわれものになりなんすなへ

ト来しかたの事ともおもひ廻セバいとしあわれをもよふすをりから今宵の新造八重梅先よ

り爰へ來りしが障子のそとにいさるをきゝふり袖かほへおしあてゝしのびなきするそのこ
へのもれきこへてや

【花】そこにゐるのハ八重梅さんでハねへか【八重梅】アイ【花】サア〱おはいりなんしな【八重】アイ〱【花】この子ハばからしいなかすともサア〱おはいりなんしな　ト手をとり引いるゝ　おめへのふだん戀しがつた文里さんだからおもいれにおはなしなんしな【八重】それだからさつきから爰まできてをりいしたがうれしいやらかなしいやらではいりかねておりいした【文】この子ハ見なれぬかいつきたの【花】此子の事につけていろ〱かなしいはなしのある事でおすまあおもざしをごろふじいしナ【文】どうか一ト重に似ているよふだの【花】アイサおいらんの妹でおすハ

ト　きく〱と文里もとびたつおもひながら

【文】マアどふゆふわけかかつてんかいかぬ尤一ト重か田舎へいつた事ハきいたか親兄弟ハ死たへたといつたけかさ【花】アイサおはなしもふすも淚のたねおいらんの病氣のうちも旦那さんもおかみさんも殊更たよりすくないものたからかわいそうたとしんミにかいほうしておあけなんしたゐんとゆふものハふしきなものでおす內所へ道具すきな田舎の人かこゝろやすくお

いてなんしたかある時いゝなんすにハわしか村から與一といふものかおとよといふ子をこのうちへうつたはつたといゝなんしたら旦那さんかそれハ一ト重といつてわたしか所の一チはんものたかこのころハ大病でこまりやすといゝなんしたらそりやあかわいそうなことだぜんてへあのお豊はうハおらかほうのものしやあこざりやせんあの子もしるめへか上總道中の曾我野在のものたか親しらすにわしともか村へもらわれてきたのさそれハ〳〵兩親かかわいかつてほんの子のよふにそだてあけた所がたしかあの子の七ッの時なさけなくも同じとしに親たちハ死たへそれからあの子ハ與一といふ伯父の手にかゝると直におめへのほうへよこしたそうだ親たちの死だ事もお豊はうがうられた事も隔る國の事なれはほん親さとの方しやあしりますまいといゝなんすをきゝなんしてからそりや何によりな事をきいたとよろこひなんして親里へやつたらひよつとまたいり豆に花の咲事もあるめへ物てもねへとておめへさんにあわせなんしてよりそう〳〵せんきしてとゝさんを呼よせ長ひ年季の事ながらむつかしいあの病ひをきけハ實の親子たそうたから【文】マァどふいふわけてきたのた【花】噺もふすも涙のたねおいらんの病氣のうちを旦那さんなりおかミさんかれこれしんミになんしてモフどふてよくハあるめへいなかへやつたらまたひよつといり豆に花のさく事もあるめへものてもねへとておめへさんにあわせさん

してよりとゝさんを呼よせ長ひ年季の事なからむつかしいあのやまひゆへ引とつていかつせへよくなれハそつちの仕合おれとてもとも〳〵よろこふたとへ死んでもこゝろよく往生させてやらつせへとわたしておあげなんしたからうれしがつてないてばかりめうがの程がおそろしいとて此子をかわりにつれてきなんしたけれど旦那さんハそふした事でハ決してねへといろ〳〵にいゝなんしたをどうぞねがふときゝとゞけずむりにおいていきなんしたゆへしかたなしに名代の坐しきへばかりだしなんすハ【文】きけバきく程かさなるあわれそしてこつちへくるじぶんハあねさんハどふだつた【花】ツノよふになきなんせずともいさるに文里さんに咄しなんしな【八重】アイ〳〵【文】そのよふにいゝかねるハあねさんハ死んだといふのか【八重】イ、へ【文】そしていゝか【八重】イ、へ【文】やつぱり死んだをおれにかくすのかナア花の香さん【花】いゝへそうでハおつせんよ【文】そんならなかづとはやく言つてきかせてあんどさせやな【八重】アイ〳〵旦那さんのおなさけで在所へかへりなんしてもよいおいしやとてもなくたゞおたのミ申しいすハ神ほとけばかりといろ〳〵に手をつくしなんしてもなんのきどくのあらバこそ日にましおもるそのうちにもほんにかたときおめへさんの事をいゝなんせん事ハなく自由になる事ならハ今ハあねさんばかりてハおすせん親たちまでもおめへさんをしたい泣てばかり

をりいすどふぞいつて逢てあげておくんなんしたとへ死になんしても二親の心やすめとおもつてもおかミさんのめへもありどふぞいゝ了簡ハおすせんかへ【文】なんのいゝ了簡處かわるい了簡さへ了簡の文字にハましわれはてた今の身のうへそしていなかにハいゝいしやでもあるか【八重】ィ、へ江戸までハ一里あまりもありいすから人手ハなししかたなしにいなかのいしやさんにかけいすからてへ〳〵こゝろぼそひ事でハおつせんそしてあねさんにほれいしたかしていやな目つきをして脉を見いすからいつそにくうおす【文】病人にほれてもしかたが有めへがそしていくつくらいた【八重】三十七八色のしろいいやミらしゐ醫者でおす【文】ァ、なんにしてもこまつたものだ【花】それでもこのよふに久しく病の峠をこへたからよくなりなんす事もおすせうともおもいゝす【文】あゝした病氣は床につくとむづかしいにそのうへこつちにいたじぶんから人の見さかひもないよふになつたものをどふしてよくなるものかとハあきらめてもミれんな心からハひよつといなかへいつて氣がかわつたらいゝといふたよりもあらふかと日〳〵にそれを待あかしてもなしもつぶてもなきゆへに來にくゐのも顔をおしぬぐいきて見れバおもひよらぬ一ト重かしん實の妹にまためぐりあいてやうすをきくべヱよく〳〵

トあとのいふさしてなミだがわ渡りかねたるこゝろねハくミつゝまれつなきくどゝあま

りのなげきに八重梅は日もはれ歯をもくひしばりこゝろもミだれていく瀬のおもひ氣も
なかるれば花の香のとめかねながら

【花】八重梅さんモウなきなんすなかねておいらんのはなしにはおめへもつよひしやくがあるとてふだんあんじておいてなんしたにそのよふにないてからひよつとしやくでもおこつてはわるうおすせめておめへ斗も丈夫にして二親がたにあんどさせてあげなんしな【文】これ〳〵モッ泣てくりやんな花のかさんのいふとほりしやくがおこつてはわるいサアだまりや〳〵トせなかをさする

【八重】アイ〳〵ほんにあねさんを花の香さんが眞實にせわをしなんすをしよちうふミの音信にうれしがつてよこしなんしたまた文里さんとのふかい中はたれいふともなく村でもひよふばん文里さんなり花の香さんどういふおかたといつぞはおめにかゝりたい〳〵とのねんがとゞけは此よふなかなしい事でおめにかゝりいせうとはおもいゝせなんだほんにぶしつけながらおめへさんや花の香さんはあわぬまへから兄さんとも姉さんともおもつておりいすゆへ西も東もしれぬ此廓へくるもおめへさんがたをちからにしてきて見れば此よふにしんせつにいつておくんなんすから嬉しいやらかなしいやら涙がでいすものを【文】そうおもつてくれるかへうれしいぜアノ一ト重がいふにも二親にはあわしたゆへ妹にあわしてへそれは〳〵りかうな實のあるも

のと咄しであつたがきゝしにまさるかわいゝ心をれもこれからほんの妹とおもふからそうおもつていやとハいふものゝ今こうゆうざまて兄弟とハ心ばかりておもふのミてはかない身にハなりはてた【八重】ほんかへ嬉しうおすあねさんがきゝなんしたらさぞよろこびなんセうとおもへば【花】コレまたなきなんすかほんに兄弟とハいひながらよく似ていなんすから此子を見るにつけてもおいらんの事をおもひだされて悲しうおすァ、いつかの晩でおすしたァノよふに煩いつきなんしてからおいらんのいゝなんすにハはづかしい事ながらくわしいわけをしりなんせん人ゝまでかよくいけんをいつてくんなんすを随分あだにハきゝいセんまたお時さんとてもにくうハおもひなんすはづなれど今までですこしもうらミらしい事もなく度／＼ふミや人づてにもたのむ／＼との事斗ほんにわたしがこゝろもたれもおなじ事故さぞあんじなんせうと無理に進て一日二日おかへしもうしいすとおときさんも少ハこゝろやすめとも／＼嬉しくハおもひなからまたあんまり中が能過てひよつと私が事をばわすれもなんセうかときたそれがあんじられほんにあさましいこゝろぞとわきまへてミても戀しさのわすれかねたる此やまひこれほと私がおもふても男といふものハきさんじなうら山しいもの私がおもふ十部一もおもひなんせんそのせうこハみの通路もやめにしてこつちへもきなんせんかしてたれも逢たの咄しもないがわた

しれどうぞ一寸なりとおめにかゝりはなしたい事もありこうへだゝりて顔かたちせめてハこへか足音でもきく事ならぬ今の身のうへむすぶおせハゝ神さんにお頼申ハもふしてもかく中さいてのりんきまでお頼申ハせぬものと私を相手にいろ〳〵なきつくどきついゝなんすをばからしいまたあわれぬかなんぞのやうに氣をはつきりとひきたてなんしとしかつてミれど心根をおもひまわせばおいらんより側て見る目のせつなさにッィ泣あかさぬ夜とてもかぞへるよふでおすハナ【文】おれとてもそのとをりなんでもねへ事が氣になつて腹をたつたりたゝせたりはじめのうちハ手ことぞとつくるこゝろもいつしかにまことのぐちになりはてゝまんざらためになる客とハあかし合たる上なれバとゞハ互ひの身のためとよつくせうちでよばすれとちよつとしたいき張からつきださせるハいく度か客のつく間もないにしたがひ次第につもるふたりが中むぎどうに引さかれふミさへ通路のならぬを一ト重ハ委しらなんだか【花】アノよふにきびしくおわき【ヤリテ】どんがもうしいしたがお前さんもおしんなんす通なる丈ハミんなが通路をしてあげ申いしたけれどモゥ〳〵やかましく吟味だて其事もなにもすいぶんおいらんもせうちでおすがついした事にもぬしの名をいふのもしばしのうさはらし此上ハおいらんもよくなりんしておめへさんもはれて逢れなんすやうにとその時は塩たちャラ酒だちやら坐敷や部屋また

新造衆や禿までミなてん〳〵の身の上をおたのミ申神さんにぐわんをかけいしたがそのやうな事をせぬものといつてハ出たおわきどんばかりておすハナ【八重】ホンニくがゐといふものハつらいおそろしいものとたれもくるハへこぬうちハおじをそれていゝすけれどたれ〳〵とてもそのやうにしん實に我身のやうにしなんすハ文里さんハくわほうものァノ姊さんハしやわせもの愛敬が有あまりくわほふやけてのうき煩ひホンニ浮世といふものハナゼ意地のわるい物でおすか人さんがたのそれ〳〵に深きちぎりの中さかすとおもひあふたるその中をおもひの儘に結せたらどこもかしこも丸ふゆきいせうにほんになまなか神佛のおもひおもハぬわかちなくむすひばなしがにくうおす【文】そのやうな事聞につけおれが身にとりてハテヱ〳〵嬉しい事でハないしかし人といふものハたのしミ有バ悲しミのあるハ覺悟のうへながらてまへかつてな愚痴も出れどまた是からハ能事の有ふもしれぬといわゐなをすをしほにしてそれもモフ泣ぬからおめへがたもモフ泣てくれめへよ【花】わたしもなく顔をおめにかけいしてハいとゞおめへさんの氣のむすぼれるたねになるすればおいらんにたいしてハふ實とおもひすによつて隨分氣を引たてゝあげ申いせうとおもつても此子とふたりしのひ泣にばつかり泣ていゝすからおめへさんにおめにかゝりいしたらなにも思ふ事をおもいれいつてなかうとたのしんでおりいした此子もお

いらんの妹とハいひながらよくものがわかりいすからなを悲しうおす【文】そういへばおれもをなじ事だがいつまで言てもはてしがねへまたおときや子ともがあんじるからモウ〱思ひ切てかいらうよ【八重】文里さんその處ハ能聞わけておりいすがまたといつてもさだめて出にくふおつせうから今宵斗ハおとまりなんして夜とゝもに姉さんの噂咄に氣をはらさせておくんなんしな

泣はらしたる八重梅がその顔しけ〲ミて

【文】アヽモウ何もいふまいと思ふけれどアレ〱あの形格向ものごしまで一ト重がとめるに生寫し過ぎりしことながら今宵ハ内へかえらねばわるいとおもふその時ハむりとしりつゝ腹たてさせツレを手にして歸ふと氣づよくふり切かけ出せハ【花】おいらんのいゝなんすにハそれほどおかへりなんしたくハ尋常におかへし申いせうがわけも言ハずに腹をたちむりのありたけいゝついりあいそつかさせきれよふとハツリヤおめへさんにもにやいなんせん淺はかなさむしい心でおすとふるい嫌に成つていゝなんせバ【文】こゝろの内でハこまれどもうちがわるひもはしめのうち今更その樣ナはたらきのねへ言譯もまさかにしにくゝコレその樣にいゝたい事を言ちらし口へつぎあてがひをするなよとつよミを言ト【花】わるい事が有ならバ誤るまいとハい

ゝせんに誤せるが男の高下こういゝしてハいかゞでおすがわるい事といつてハおめへさんに惚たより外の事ハありいせんと腹をたつていひなんせバ【文】ソリャァをれに惚たを後悔するか【花】後悔もしいすのさなんの惚ずにいゝしたらおめへさんもお時さんもくろふが有めへとおもへば【文】そんなら是からハ心を改たと言事か【花】改めても濟いすかへ【文】ウヽがよふなうわ氣なこゝろでハころさるゝ事も氣がつかず人のいけんでも有めへし【花】人のいけんて思ひ切るゝならからつきし惚ハしいせんと泣ながらいゝなんせバ【文】こいつが口ごうしやな事をいふと埒もないいさかひにミか入てかんじんのかへる方角も忘れ【花】私ども迄がとりさへるャラなにかしてむりに床へおさめましても【文】何か其夜ハとけかねてたゞまじ〳〵と短夜も長きおもひにあかしかねよふ〳〵わかれにちかよれバ互にをれてもこう〳〵といふ間もなく別となり【花】おめへさんのおかゑりなんした其跡は寒てミたりじれなんしたりしてまだ氣になるか長〳〵とみをかきそう〳〵中宿へ出ているくらいでおすセうョ【文】しかもその時此みが爰にあるこんなわかれをするならバあのよふにせはもやかせめへものをせめてこれでもよむならバたしかに死んだる一ト重か身にハ經文よりもよい功徳

トくり出すふミのこま〴〵と

おもひ過しよりハまさりにつもることの葉も互のふしにへたゝりもはや言告鳥の聲にはしめてをとろかれしやうに覺へひたすらの侘に和られし心とこゝろならねは筆とる間遲しと硯に迎ひながらもあまり深ふおもひしゆへにこそはしたなき事のミにて御氣にさからひ候へどもこれしきのまよひハ御しかりもあるまじくと此事にハくろふもうすく去ながら暑のをりからいつしよりも遲きかへらせにいとゞ御身にはげしくあたらん事をとはかなきわか身よりやるせなくあんじられ何事もいかふ大事を取候心からハ過しちかいにまがひなふなんでの事までも御きゝすミのうへなれハよもや御忘ハ有まじく候とかく御身ならでハ任するかたハ此日本に外にあらす

トよミくだすのもみなかばいつかハ更て丑滿の二階もしんと物すごき一ト重か姿見の前に文里ハふしんに氣もつかず只逢事の嬉しさに

【文】ヤヽ一ト重かどふしていつの間に【一ト重】おめへさんに逢たさに【文】ソリヤそれとてもをなじ事今もいまとて三人しててめへの事で泪をしぼりすこしハうさをはらさんと取ひろげたる手めへのみふミ【一ト重】それがあんまり嬉しさにとも〳〵憂をかたらんとそれでこゝまできいしたに花の香さんなり八重梅なりコレしらぬふりする事ハおすせんハナ【花】ヲヤおいら

ん【ヤヘ梅】姉さんか

トふたりハそれとさとりしゆへアツト聲立なぐにぞ

【一ト重】テモこの子たちハぎやう山な花の香さんにハ何から禮をいをふャラいつにかはらず文里さんをよくしてあげておくんなんすまたわたし斗かいもとまてせわにしておくんなんすモウなんにももうしいせん嬉しうおすにへお梅もほんにわたしゆへにいかゐくろうをしてくれるのしかしいつにかわらぬ旦那さんのおじひにて床のくげんハないとの事せめておめへハ御恩をかへしておくんなんしこのうへ部やか坐敷でも持やうになつたならべきゝをよんでも氣隨をわたしがまねをせず意地はり事や義理づくもまだそれ〳〵の付とゞけもきれはなれがわるいとワらわれて人の上にもたゝれいせんによたとへセわをする人がおすしてもわたしとおもつて花の香さんをハ如在にせずよくしたつてきゝなんしどのやうなむづかしいわけやいでもよくさはきなんすとて仲の丁でもほめへすによとかく恩をしらぬとわたしが手本でおす此上共に花のかさん妹と思て氣をつけてやつておくんなんしおたのミもうしいすにへホンニばからしいほどなつかしいは文里さんわたしハこのよふにおもいゝすがまたおまへさんハナンゾおもしろい事ができハせぬかとあんじれハ猶逢たさの心の儘に泣てなと氣を晴さんと思へとも枕ならふる親たち

いきかたものをとそれさへもまくらにかくす憂涙少しハ不便とさつしておくんなんし【文】そのこゝろざしハ嬉しいがそんなゑよふな事でハ子へはづかしい事たか手前に別てから此やうに【一ト重】イッソ痩なんしたがッンナラ わたくしゆへ煩ておくんなんしたかへ【文】内外のものにも言紛してハいれど逢てへ〳〵がつもり〳〵て此病【ひとへ】をもひはおなじをし鳥の背と水とにはなれてさへ隔たる心でおすものを假初ながら一ト年もコウ別れておりいすにあひとうなくてなんとせう縦令形ハ隔たるとも心と心ハ少しの間もせめてはなれず夢になと見るうちばかりのたのしミもゆめとしりせハさめさじと思ふ心のはかなさをおめへがたもすいりやうしておくんなんし【文】そして病氣はいゝかの【一ト重】アノばからしいこのやまいたとへ神佛さんの御利生でもなか〳〵よくなろうとハ思ひゝせんわたしが事ハともかくもおめへさんこそ少しもはやくよくなつておくんなんしホンニ自由になることならわたしが命もひとつにしていつまでも御壽命をたもたせ今のくろふを忘させもふしたいとおもつてもそれさへもまゝならずといろ〳〵心もミだれはて此まよひをしておりいす【文】たゞさへかなしき此時節ナゼそのやうにあわれな事いふてくれるおもひなしのセへかどうやら手めへハ【一ト重】おめへさんが[illegible]しさに迷ごゝしてはづかしいこの姿をおめにかけいすかならずあいそをつかしておくんな

んすな言度事ハ中〳〵につきせぬ事としりながらわけてミじかき夏の夜のアレモウ鷄がなきいすゆへ

あかぬ名残のぜひもなく見返り〳〵行かとおもへバいつかハけふりときへ失る文里ハ今更心付たとへ別るゝすじとてもせめて影さへとまるなら寫す鏡にたくさめむかへせ〳〵とよばわるを何事やらんとやりてのおよしかけつけミれバ三人ハゆめの中にてなきさけぶを氣を付られてかほと顔ホツトノ息に時うつす

【文】正しく一ト重かいまこゝに【花】わたしもキツトおいらんの【八重】ものいひかわすあねさんハ【文】死んだといふしらせで有たか【花】そんなら迷つて【八重】出なんしたか【やりて】アノはからしいそれハミんなのまよひのゆめ夢ハさかゆめよいたよりを【花】聞か【八重】きかぬか【文】善悪ともにくろふのたへぬミんなの身のうへ【やりて】ハテ苦勞のないといふものが生有ものにありませうか

薄ぐらき雨雲郭公のはつ音

てつへんかけたかホトヽヽ、、、、、

○第三 秋のだん

さらでだに秋はものうき夕ぐれのわけてさびしきかた田舎露の命も漸〻と一ト重も今ハ親里に心もいとゞ病ふの床おもひやらんかたもなく虫ならで誰にとハれんひとり寐の四方ハあらしなきゝしにも薄尾花の風の波こゝもとへこそたゞくるゝおもひハ俤ず別れし人の事のミに枕うきたつ涙の雨いゝかたもなくとも〳〵に母ハ涙にくれながら

【母】コレ〳〵一ト重またかいの〳〵少し側に居ぬと何を考てか其様に泣が大方又彼の人の事であろふはじめのうちの事ならバ随分いけんもする叱もするがナンノ〳〵そのやうにおもひつめての其病ひよく〳〵深い縁がやと思ふ故おぬしが氣も察してどのやうなおかたかとミたさも見たしイッソ側に居て看病してもらへゞ肥立もはやかろうと今となりてハこのはゝも逢ふてたがひの挨拶を聟よ姑といふならバナンボカ嬉しかろうにしかしとかく其思ふまゝにゆかぬがやつはり浮世コリヤわしとも計てハない世間一統有習ひそれをきな〳〵朝夕も憂はこつちの身斗とたゞさへうすき食物もなミだ隔てゝはかどらぬを側でミる眼のせつなさもまたすいれうしやアノ遁徹な親父どのさへよく〳〵なおぬしが不便かしていちはながけて神佛おしことといふてけ

なす身がたのミもせぬに暗から雨風いとわずはだし参の神だのミ」そのお陰やら其様にこゝろも慥かになりやつたまた妹のお梅とてもおぬしかかわりに廓のつとめをしながらもどうかこうかとたより音信あるにつけないにつけやすきこゝろハ有まいにモシモ死んだとたよりせハ朝も晩も泣あかしあげくのはてハおぬしがやうに煩ふならこの親たちハなんとせう爰のところをくミわけてひとつハ心の持様でよく

　ト氣を引たつれど一ト重ハ猶も涙にふし

【一ト重】モウ〳〵何も言ておくんなんすな聞ハきく程不孝の罪勿體ない事ながら長ひ年季の其うちにしらぬ事とてお二人へすこしのみつぎもしもせいでおやこと名のりあわすれバ心柄とて此病妹迄にくろうをかけさむしい勤をさせたゆへに恩までわすれた思へハ〳〵わたし程業人ハおつせんホンニにくいと此骸切さいなむともなさらいでまた此上の御不便ハ却て此身の罸となりいす【母】余所外の眞直な親ならしらずなんのばちかあたらふそへ産落た其儘て親かひいゝのふ遠國へ親知すにやるうへに一度のたつねもせぬといゝ便のないハ無事ゆへとまたもすまする邪見な親今となつての親顔て好た男ハもたせまいといわれぬ義理ナレド爰をよう聞てたも文里さまの今の身のうへ往古にかわるとぼしいくらしト人〳〵の噂たゝへ病氣でござらつし

やらすともア、ゆふ温和に育たお人しも〳〵の業ハできまいし厄介多の事なれぞ定て賃麻ちん仕事多き肌着もお内儀の皆手ひとつでする中に人雇ひして度〳〵のみの便宜の其時ハ病氣はドウカ少しッ、もよいことやさためて田舍の事ゆへに不自由て有ふによつて遠慮なく何なりといつておこせとまたそのうへに身をきるよふナ錢金をミつく心のしんせつハおぬしの病氣がよくならバぬしの病氣もなをろふとすれバ文里さまが大切ゆへとわきまへミれバたとへ縁が有とてもドウモひとつにおいてハ恩を仇さもしひつとめをさせたゆへ恩さへしらぬちくせうと世の人〳〵に呼するのが恥しさにこれまでの縁とあきらめて文里さんの事ハさつぱりと思ひ切てたもとまた逆くもない事を今改て言のにハ命がわりまた外に得心して貰ハにやならぬ事が有【一ト重】お時さんの事ならバずいぶん心の内でハわきまへていゝすけれど痛飲づらの事ハモウ〳〵言ておくんなんスナ【母】ナンノ此母もいゝたい事はないがいわねばならぬセつハづめおぬしをぜひ〳〵貰ハねバならぬとたび〳〵手をかへ品をかへていふてゞ有たがまだおそくもないことゝ一寸のばしに言拔ても昨日ハもはや直ざるそくコレおふくろアノよふな正氣なく十が十一迄もない命をアノ廣い江戸てさへ持餘したる難病だん〳〵先よいかたに成たハコリヤ誰が陰じやをれがたんせいゆへじやヅヤそれに娘子の事を度〳〵言入てもぬらりくらりと今にあいさつ

がないよくつもつて見さつしやい此上四十貼のまれても藥代のとれぬハミす〳〵しりながらこれほど好ナ酒をたつてりやうじに身をいるゝも一ト重どのを貰ふと思ふあてが有ればこそコゥうか〳〵藥を進ぜるまたをれが活した娘なれハおれが命も同じことと彼是ハ無ひ筈じやそれともきゝとゞけがなけりやしかたがない是までの藥代ズット負て二十兩今請取ふそれハ出來まいがトにくさもにくき惡口共思へどもまたよく〳〵考てミれハ神佛の御陰もあろふが一ッハ痛飲さまのりやうじで助た共命又二ッにハ江戸とハ違ひ何事不自由な片田舎ァノ御醫者を止てこれぞといふ心當もなくそれゆへずいぶんきげんをとり此樣な事ハ親のいふよりよく成てから御あいたひがよいといへバ先くゞりの痛飲づらのいふにハその時に成り娘がふせうちとの挨拶かと釘をさゝれしかたなさになんの左樣ナ申分ハ致しませぬおまへの御かけて助かつた娘の命たとへ娘がいやと申ても親の威光でゼひ上ませう先早く全快させて下さりましと言たらあとでかれ是が有てハ惡ひからむすめごへもいゝきかせ得心の返答を聞てから藥も遣ましよトいこじわるくいふを明日ハ親父も江戸から戻りますゆへ何れ明日迄に御返事を致ませうトいふたらバきつと待ますするとのつぴきならぬ無理往生どふぞいやで有ふが親たちを思ひお時ゐにめんじて痛いんさまのかたへ引とられて全快して下されや

ト義理と浮世ト恩愛に迷ふ心地も親の闇一ト重ハなんと返答もたゞ泣沈む斗りにて暫く有て
泪をふりきり

【一重】かゝさんへハさし合なれど文里さんとの其中ハうわきて惚たわけでもなく互の實のつもつてハ義理も人目もまだな事恥かく事さへ主故なら嬉しい程に迷いゝして勤の中の操だて主に此身を任せてより外の客へハかたきしもひとつ寐もせで枕元あきるあかりかきたてゝなが／＼と書みのぐち夜の深更るのもいとはずにこつちの事にとりかまけッイ腹たゝせ客人をかへしたあともつねなれバ氣の毒ともおもひゝせん床淋しさの獨寐もせめて夢にとたのしミのいつかハおなかへぬしの種恥かしいとハ世の中のミないふこゝろなにがさてホンニ産だらかづさやのあげ卷さんの昔にならひ仲丁をもだきかゝへ茶や／＼からも口／＼に子をあやしたりなぶられたら嬉しかろうとたのしんだかひもなふッイ五月の流産にやミから闇へまよふ子は容づくりも明の子ホンニそだつてくれるならお二人さんにも初孫と見せちらかしてじまんして悦バせたら嬉しかろたとへ此上別るゝともその子をぬしに成かわり守育てゝくらすなら別れ力も有ふのにひよんなおかたのお藥で生いでもよひわたしが生き今ハ我身に持餘くろうを懸るごう人なれどゆめうつゝにもをどけにもいやと思ふてミたならハすこしハとりへもありいセうにナゼ私ハ

此様ナ氣でおすか【母】モウ二言めにハそのやうに泣て斗くどくハ何もいゝません大事の命にかゝわる事故まづ一ッ旦ハ痛飲どのに身を任せさへすれバ義理もたち孝も立といふものまたそれからハおぬしか心一ッでどうともなることサアついあいといや〳〵コレ此様にことをわけて言ても返事せぬハ此母を田舎ものとあなどつて何言ふてもきかぬのかそれじやしかたがナイかたく言付をかれし親父どのへもいゝわけなしいつそまたいきてうきめを見やうより此母から先へ死さへすれバことハすむ

トおどしすかしつわりくどく

【一重】かんにんなんしモウ〳〵ふつゝりと思ひきりいしたによつて其様ナ勿体ないことを言ておくんなんスナ【母】ソンナラきゝわけてくれるのか【ひとへ】それ程迄に人〳〵に私を能思ハせうとのお心ハ有がたいやら嬉しいやら冥加の程かおそろしい私が心たつた一ッて丸ふ行事ならバいゝなんす通りに成いすからくれ〳〵たんきをしておくんなんすナへ【母】そなたさへせうちしてくれゝバなんの短氣ハせぬけれど無理無躰な事言てひよつと迫てくれるナラ【一重】よろこびなんす間ものふ實もとめかねて葉櫻の【母】ひとへといふ名は氣がゝりの花にも人にもたへぬハ嵐【一重】ちるこの身よりそのお歎を見る様で【母】かなしい別れをするならバ老

木の父御に朽たる此母【一ト重】蕾のいもと花の香さん【母】今埋木の彼のお人も【一ト重】秋のすがたにあらわして【母】生たつ心も有まいと

トかくのしうたんにはや後夜をしらする遠寺の鐘玉川の流れ響きこゝらのかたにて轡虫の音

クワチ〳〵〳〵〳〵

○第四　春の段

花咲春の長閑さのわきてにぎわふこの家の内年賀祝ふてめでたさにけふゆるされし文里が勘當妻も子供も親達も憂も開る梅櫻

【親父】是迄の不孝ハ言て返らぬ事をれもはや八十八トいわるゝ年になれどたゞ心がゝりハそのほうたちや孫等が事賀の祝ひをさいわゐに心底も改つたる事なれバ勘當をゆるしてくれと親類中の侘言わけて谷我子のきつい世話故きゝとゞけて勘當ハ免したなれど此上ハまへ〳〵の通り親へも孝を盡しセうばい向も油斷なくをれもまたけふよりハ元のいんきよに成て樂をセにやナラヌ【文里】若輩かなんぞのやうにお年よられたお二人さへ是迄の不幸今更申上べくもな

く勿体なく御年賀につき御勘當御赦免下され有がたう存上マス〔母〕勘當免して禮をいゝますハ娘女のことあの様ナ不埒モノニあいそもつきす貧苦もいとわずよく其様にふたりの孫を守育て下され忝なふござるトふだん噂して歡んでいますぞへマア〳〵鉄もおはつも愛らしひ事わいノサア〳〵こゝへつれてきや〳〵〔お時〕おぢゞさまやおばゝさまだぞや〔母〕コレ〳〵鉄もおはつもおとなしいのかまた少しはにかんだと見へるワヘ〔お時〕イヱ今にとけるとさわひでなりませぬ〔母〕とかくげんきながよいとも〳〵〔お時〕御勘當おゆるし下されましてまた間もなふお願申ますもあまりあまへた事ながら〔母〕改た何の事じやこなたの願ひなら是迄の禮ごゝろに聞ましよフゥ親父どの〔親父〕はやふいふてミや〔お時〕わたくしともの病氣もまだとかく思うやうでもこさりませぬがおいしや衆もきの持様で直になをるトいふてゞごさりますがその病氣をなをして下さるよい薬がござります〔母〕それハどういふ妙薬〔お時〕外でもこざりませぬお聞及ばれもござりませうアノ一ト重どのこれも病氣ゆへ田舎へいつてりやうじなれどもとのをこりハ互に別てよりの病氣ゆへこの上ニト重どのをお側に置バアノ子の病氣もよくなれバ主の御病氣も平愈しわたくしもとも〴〵こゝろよく成るハ必定こゝの處をおきゝわけ下されてどうぞこのねがゐを叶へて下さりまし〔親父〕何なりときく氣じやがその事斗ハできにくい

第一ハ諸親るいまたしんぼうしてくれたそなたへ對【お時】その思食ハ有がたふこざりますがそれでハ一人ならず二人三人の命にかゝわる事【文里】コレ何を言かと思つたら埒もない御勘當が免れバ此上の歡びが有ふか【お時】それハそうでも有うなれどそれでハどうもあんじらるゝ【文】はてばかをいへ今迄の文里と思ふか【お時】それでもわたしが氣がすまぬ【文】イヤそうしてハおれがすまぬ【お時】いやわたしが【文里】イヤをれが

ト互に義理の問答さい中谷蛾ハ一ト重を引つれ來り

【谷蛾】イヤ御兩親へハこの女ハ初てなれど兼てお聞およばれの契情一ト重いさゐハ二筋道初篇後篇に委けれバ何ももふさんがとりつまんだる處が道ならぬ事なれど兩親の氣やミそれをあんじてお時どのゝこれもきやミ彼是捌だてをしてハ一も二もなけれどたゞ可愛相なるハお時どの斗ハ誠の道これにめんじて利屈なしにきゝとゞけてわしが娘分にしてしんぜたい側てつかいして遣て下されいそうすればミなの衆の病氣も本腹自と家も榮る道理又二人や三人餘慶の人が有バとて何もむづかしくもない此しんだいしかし今迄たいてひ分限も定まつて有ふによつて下女のかハりにでもすれバ濟そふなモノ尤親類中にハ皆承知【親父】ニモそれでハ【谷蛾】何も不足ハわしに下さい【親父】シテ此女ハくるハからつれて來て下されたのかすれバ價が

【谷我】ソレハ少も御苦勞には懸ませぬことに此女當時ハ身儘なれどさしつけがましくひつぱらつてまいつたのにハだん〳〵むづかしいわけもあれど雨降て地堅るの道理にて打こハしてことをはからハねバおまへもせうちもして下さるまいし田舍のかゝり合のほうも手が切ぬきゝとゝけてさへ下さらハ何もわしか胸に有から丸う治めて見せませう【親父】こゝろにくゝハござれともおセわにめんじていつれとも【谷我】先ハ承知でャレ嬉しや

トロも引ぬ間に田舍いしや痛飲ハ一ト重をとられし腹たちに耳くぢりを引さげて谷峨にむかい

【つういん】藥代にとつた大事の女ようひつぱらつてうせをつたナそれがいゝかこれがいゝか

ト切かける身を捨て引ぱつせバまた振上る腕首とらへ

【谷】コリヤなんとするこしやくなづくにう得心もない女を藥代にむり無體に引とるハ色と見せかけ全快せバ二度の勤をさせうとハチツト氣がきゝ過る一服八文か十文のふる藥種にハ多けれどまぐれ當も禮ハ禮サア請取レ【つういん】コリヤお金二十兩【谷】ナント不足ハ有まいが【つういん】ム、子へ【谷】丸うおさまるめでたさにハヤ奥へ行年の賀や【文】かんどう宥し歡びに【お時】一ツ過して氣をはらし一ト重さんもサアいつしよに【一ト重】お二人さんハま

づお先へ【親父】姫女【母】一ト重もかへてお花女も【文】何から何まで谷峨子の【谷我】そのあいさつでハ痛入る【つういん】殘念ハアノ一ト重【谷】なにやうを

トとつて頭轉動

【谷】おいしやが歸れバ女衒とナルヨイ〳〵

ト手拍子にてはやせバ痛飲ハ起ながらアイ、、、、、、奥ハはや小うたひその賑ひ上下の音

どん〳〵〳〵〳〵

大尾

牙字泉

昇平樂序

漁歌樵唱咸昇平を謠ひ關の戸さゝで千里の末まで納れる代は人の口などに戸は立られぬ筈粤古きためしは孔子の親仁どんれ春秋に人を毀譽し初給ひ今泰平の時に當つて愈人の口まで戸ざゝぬ御代如何ぞ憂ふる事あらんや乃若骨箱のがたつく手相もあらば筆づくの出入にも及ばん勞ながら机の端詰まで出てもられふと白舟の某が云て居るといふて下あれ

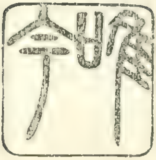
庚申のとし

跡の月晦日

昇平樂叙

二柱の御神あなにへやと神勅ありしよりあなといふこと久しき世のためしとぞなれりけり人の代となりて業平の朝臣れあなめ／＼と詠こあなやといへどゝ書殘し給ふより歌よむ人はあなかまとつらね宗祇はあなたうとゝ申されぬ穴穂浮穴の宮／＼も穴村穴生の藁屋もあながち求めし名にあらざりき夫世に處する穴や偉哉針の穴は天を覗蟻の穴れ堤を崩す眼瞟は穴の明まで見とれ蛤貝は穴の明までお念佛申す也豈穴をいわざらんや乃我等が親仁分の白舟先生あなほぜり穴を見だす癖ありてあなた此方のあなをしるし冊紙に号くるに野鉄炮の昇平樂といふ名の謙

遜辞譲なるによりて若もあなづりかづらの足にまとれど
腕に覺の有明櫻のさく比尻押の喜兵衛が爾云なんどゝ
けつかる



四海波しづかなるとはおろかの事波を俵にして古川の河岸へ塩船に積登し巖となりて苔のむす石切は西横堀にて往來の足に切火打かけて清む云も管なる難波の繁昌ごもく場から銀の生る木がはゆればこそ木津難波を銀を殖し高津新地に常舞臺が建て鼓太鼓の音を添乳にする豚兒もあり夕ァの按摩殿ハ今朝の四枚肩と變じ昨日の胡蘿蔔賣ハ貳厘五毛のあゆミより今日ハ十千貫目の角屋敷の主となるも惣躰北のならひ也卍が辻に地藏尊ハましまさねど千里が竹に藪醫ハ澤山なり有馬横町に湯屋ハ無くても狸横町に八疊敷の裏かしやもおかし稲荷うらも三十日限の借屋なれば藥師裏も印形ハ二口にとれりみづうらに瞽者の住はむべなれど呉服町にもみうらのなきハさすが也狐小路に白虎湯の看板ハ音の間違ひ浮世小路に壹分五厘むしろのなきハ繁昌ゆへなり尼出といえる化物もあれば白あん仕立の似せもの出來たり柳茶ひわ茶がはやり止めバ出し茶がめつたにはやり出せしより宇治に間近き淀屋小路に北の家かげの土藏の壁合に三味線卿ハ犬の糞をつらぬひて生へ駒寄のがり竹は眼瞟の犬うつ鞭に折られたり向ひの娘が醤油買に行くとくりハうどんやのだし入レとなりの枴振どんの鱗窓は現銀見世のかし傘を當たりこなたの格子ハ奇麗にして鉢植まんりやうは十千金を心で祝し人並に買掛りはすれど土用干とてはした事なく濡手で粟田の尾股が燒し唐急火燒に程赤城形のふり出し文房うるハしく餝立宗匠偶然として

彈琴復長嘯といふ身で欠の涙を拭ていらるゝ處へ頼ませう【宗匠】どなた【綾栗】ハイ綾栗でございます【宗】サア御通りなされ【綾】此間ハ御不沙汰いたしました無據風塵の客と上京いたしました【宗】それハ御美敷嵐山ハよふございましやう【綾】サアよい折に參りまして十分の處でございましたが十三參詣と雨とでまア一行でございました（と云ところへ頼ましやう）【綾】どふれ【有錢】有錢でござり升【宗】これはよふ御出被成ましたサア御上り被成ませ【綾】有錢公ずつと御通り被成ませ【有】マア御つめ被下ませと（互挨拶一順すむ）扨綾栗子此間ハ書林を御世話でございました【綾】なんぞ珍らしいものを持參致しましたかな【有】絳帖と淳化の宜敷を見ました杏花天と平山冷燕と申ます小說物を持て參じましたアノ玉淵と申仁もませでございますなァ【綾】手跡も達者にございます【宗】其平山冷燕といふは小說の七才子と稱するものじや上のたなハ玉嬌梨と申ものぢや【有】左樣でございますが玉嬌梨ハ細字でよみにくうございます【綾】宗匠アノ冷燕と玉嬌梨は合作じやげにございますなァ【宗】玉嬌梨ハ王元美が作と申ますおそらく小說中の奇文でございます【綾】私も前廉讀ましたが見かけてから下に得置ず終夜よみました【宗】十七回めから間違ひ出し後が一向妙じや王元美ならずハ迚あの位の妙文は書けぬテ【綾】艷史は御覽被成ましたか【宗】隨史遺文と一緒に見ました【有】綾栗子宗匠方を忠臣藏の見立

た一口附が出ました御らふじたか【綾】阿波坐の莖大が所で見ました【宗】どふいふ事書きましたナ（此宗匠の事もわろふ云ふてあろ故有錢もち〳〵云かねろ）【綾】トいふて先に合点せにやと申ますに瀧殿足のまめやと御座りました【有】なんと其許幇間被成ぬ歟と申に天水庵とござりました【綾】扨此頃點者の角力番附が出ました【有】天滿の雷後とやらが出したと說でござります【綾】紙鳶ハ板本へ賴みに往たとの噂また長卜吉水なども出したなどゝいろ〳〵噂がござります【宗】ハ、ア、俳諧も將に盡なんじや【綾】此頃出た洒落句集といふものに番附の事をわるふ書のめしましたツシテはめ句のことをわるふ云ました【宗】そのやふなこと書者のくせに自分はめ句するものじやテ【綾】長卜と云人はやかましい宗匠しや【宗】サア一向騷動じやが議論高きものは態にうとしじや【有】幸竹と繪入とが世間で三幅對のやかましやじやと申升【綾】扨宗匠ハなぜに流行を被成ませんと万歩とやらが申て居るげにござります【宗】ハ、、、今世間で箱の外じやの流行のと水仕立の吸物の樣な句ハアレハ南風くらふた連歌やさしのわいた和歌の上の句めいたものじや俳諧は俗談平話じや昔ハ向上の一路に俳魂を遊ばしめての俗談平話じや今ハ腸を世情に迷妄して古雅の媚びをべ言葉に盡したもので古人もこれを艶詞と笑われた貞德老人も季吟師も皆其時の流行に遊ばれた故古調とふるされしが貞室不易に安んじて居られた故正風の紀原じや

の句者じやのと云ハれたれど必竟一時の流行と不易の場と一歩千里のたがひと申物でござる貞徳翁や季吟師ハ俳中の聖じや貞室なんぞ上に立ん事容易からんや然ども貞室は其比流行にもれて短ふ笑ハれて後ミ千歳ながふ譽らるゝのじや【有】然らバ流行ハ不好事でこざりますかな【宗】イヤ〳〵流行ハ不易の用じや今の流行といふハ根が東華が筆鋒に駈立られ東華が流行に醉された餘臭が他流までうつつた其證據ハ美濃のぬめりと笑たがそこらだらけがぬめりになつて來たまた貞徳翁や立圃季吟子などを皆が輕んずるよふになつたハ東華が己一門戸をはらんと古今抄に花咲翁を寇仇のごとく書のめした故ミな後人が是とした貞室をわるふいハなんだハ吉野ゝ花ハ貞室に見ふるされと芭蕉翁の口号によりて遠慮したそれゆへなんじや貞室が吉野ゝ吟ハ譯なしにミなが合点ゆかぬなりに譽ているのじや其貞徳翁を寇仇の樣にさミした東華の古今抄に大廻しのことを一向埒もない事書おつた【綾】譯がないとはどふ譯がござりません【宗】大廻といふは坌躰宗祇の勅答と肖柏の勅答と二流に分れて譯の有事東花ハ一向知らなんだこれは重而御傳受いたそふ高で談林も一時の流行椎本水間惣本寺などもみな一時の流行じや半時庵で思ふてごろふじ而も其人ミは皆人傑にして俳中の龍どもじやそれさへ不流行になつて時に合ハぬ爰に涯有命を以限なき世に殘る句を吐て今暫くの流行に譽られ永く不易に笑れ給ふな【綾】

今短ふ笑ハれて後ミ永ふほめられいとはどふやら落しもせぬ空だのもしの掛戻しする樣なものでござります共また不易の場に居ても句が下手なら後世も笑ハれ今も笑ハれる損な不易でござり升【宗】芭蕉翁も句の出來不出來ハ其時の仕合と不仕合によると申された夫風雅の道じや雅は正也と爾雅にもござる正しからば自門他流の分ちもござらねば流行ハ不易の用といふ處を御修行被成い【有】然らバ今の流行も不流行になりますか【宗】夏殷の禮による損益する處を知るときハ百世も知るべしとの仰た【有】宗匠ハとかく聖語を被仰ますが學文せねば俳諧は出來ませんかな【宗】さやふでもなけれど宗匠ハ宗匠の俳諧又士農工商ミなそれ〳〵の俳諧でござればツウ狹ひものでない併ながら俳諧ハ俗談平話を糺さんが爲也と云傳たれば何を規矩に糺されます學ばずしてハいけん道じや全躰文墨の風雅じやもの此間も聞ますれは平仄とハ灯折を嫌ひ韻字ハ五月の季二四不同は石不動の横通で釋教下三連ハ手打でござれば十一月の部と思ハれますと申されたれば連中も相應な挨拶で天と天竺ハわかりましたが菽麥がちつと分り兼ますといわれましたとサ【綾】時ニ宗匠ハ流行ハさつぱり御きらひかな【宗】先進於禮樂野人その野人に從ハんと夫子ハ被仰た不易の野人が却君子でござる然し又吉野の花は幾度も雲と雪とに見立龍田の紅葉をいつでも錦に詠めて手爾葉をもつて心を新らしうせよとは誰も知つた事なが

らそれは上手の手妻といふ物じや　（などゝいふてゐる所へ勝手ゟ手づくねの盃臺に友次の一ツ盃三ばい酢のらつきよ四八のいたゞざしよめなのはり／＼などいけぬ不性盆に見円仕入の春曉の栗田やきとくり）
【宗】サア　ひとつ御上り被成【二人】（まづとしへらく宴有て香物ばかりの巻すしに香物に取たむぐらの吸物椀にすましあさり貝）【有】ヤこれハ御馳走被仰
付ます　（トふたとり）御珍らしい御吸物でござります【綾】左野の呂州子からもらひました　（いづれも少しよいがまはる）
【有】去年南で旅鴈といふ人に出合ましたが噺しに申されましたハ瓢卜子の方へ月次に参りま
したが會席へ宗匠の妾が出て來てりん氣げんくわ内のてかけが逃るやら外の妾が丼鉢を宗匠に
あてるやらけしからぬ大騒動でござりましたが旅鴈が挨拶して濟したと申されました【宗】全
躰不覺悟ジヤ貳人まで痩馬に荷が過るから一妻怒れば二妻怒るじや【綾】はんくわいに習ふて
月の門破とは略花が瀧殿破門の句じやげにござります【宗】先日も魯若に逢ましたら薬師坊と
やらいふ宗匠が魯若が處へ往て弟子になれといふて勸ましたれば魯若が申ますには弟子になつ
て物を敎いでも弟子にして敎ゆる故足下の世話にはならぬと申たとサ【有】京へ往ました羅印
ハおもしろい氣性な人でござります【綾】承知／＼眞の風狂【宗】しかしあんまり放蕩で譯が
ない【有】先日重國子が長卜子と南の淵宗へゆかれましたが長卜子が遲咲伏見之助となり綱渡
りの曲エフイ勤めたものじやとの噂でござります【綾】血虚が亡命の迹盆の月居らぬ尻の流れ
かなとはり紙をしたハ阿波の鳴戸が作じやつたげにござります【有】血虚は死去せられました

今短ふ笑ハれて後〻永ふほめられいとはどふやら落しもせぬ空だのもしの掛戻しする樣なものでござります共また不易の場に居ても句が下手なら後世も笑ハれ今も笑ハれる損な不易でござり升【宗】芭蕉翁も句の出來不出來ハ其時の仕合と不仕合によると申された夫風雅の道じや雅は正也と爾雅にもござる正しからば自門他流の分ちもござらねば流行ハ不易の用といふ處を御修行被成い【有】然らバ今の流行も不流行になりますか【宗】夏殷の禮による損益する處を知るときハ百世も知るべしとの仰た【有】宗匠ハとかく聖語を被仰ますが學文せねば俳諧は出來ませんかな【宗】さやふでもなけれど宗匠ハ宗匠の俳諧又士農工商ミなそれ〴〵の俳諧でござればッゥ狹ひものでない併ながら俳諧ハ俗談平話を糺さんが爲也と云傳たれば何を規矩に糺されます學ばずしてハいけん道じや全躰文墨の風雅じやもの此間も聞ますれは平仄とハ灯折を嫌ひ韻字ハ五月の季二四不同は石不動の横通で釋教下三連ハ手打でござれば十一月の部と思ハれますと申されたれば連中も相應な挨拶で天と天竺ハわかりましたが菽麥がちつと分り兼ますといわれましたとサ【綾】時ニ宗匠ハ流行ハさつぱり御きらひかな【宗】先進於禮樂野人その野人に從ハんと夫子ハ被仰た不易の野人が却君子でござる然し又吉野の花は幾度も雲と雪とに見立龍田の紅葉をいつでも錦に詠めて手爾葉をもつて心を新らしうせよとは誰も知つた事なが

らそれは上手の手妻といふ物じや　などゝいふてゐる所へ膝手ゝ手づくねの盃臺に友次の一ツ盃三ばい酢のらつきよ四八のいためざしよめなのはり〳〵などいけぬ不性盆に見円仕入の春曉の粟田やきとくり【宗】サア　ひとつ御上り被成【二人】まづとしへらく宴有て香物ばかりの卷すしに鉢物に取たむぐらの吸物椀にすましあさり貝【有】ヤこれハ御馳走被仰付ます　トふたとり　御珍らしい御吸物でござります【綾】左野の呂州子からもらひました　いづれも少しよいがまへる

【有】去年南で旅鴈といふ人に出合ましたが咄しに申されましたハ瓢卜子の方へ月次に參りましたが會席へ宗匠の妾が出て來てりん氣げんくわ內のてかけが逃るやら外の妾が丼鉢を宗匠にあてるやらけしからぬ大騷動でござりましたが旅鴈が挨拶して濟したと申されました【宗】全躰不覺悟ジヤ貳人まで瘦馬に荷が過るから一妻怒れば二妻怒るじや【綾】はんくわいに習ふて月の門破とは略花が瀧殿破門の句じやげにござります【宗】先日も魯若に逢ましたら藥師坊とやらいふ宗匠が魯若が處へ往て弟子になれといふて勸ましたれば魯若が申ますには弟子になつて物を敎いでも弟子にして敎ゆる故足下の世話にはならぬと申たとサ【有】京へ往ました羅印ハおもしろい氣性な人でござります【綾】承知〳〵眞の風狂【宗】しかしあんまり放蕩で譯がない【有】先日重國子が長卜子と南の淵宗へゆかれましたが長卜子が遲咲伏見之助となり綱渡りの曲エフイ勤めたものじやとの噂でござります【綾】血瘧が亡命の迹盆の月居らぬ尻の流れかなとはり紙をしたハ阿波の鳴戸が作じやつたげにござります【有】血瘧は死去せられました

かな【宗】イヤ欠落を亡命と云ます【有】渭流が瀧壺へ往かれまして似たりの紅葉とは一向わる口でござりました【宗】サヨサまたアノ親仁も骨董局も久しいものじや【綾】徳若集の序は餘り若輩な【有】はるなれや替句中よき印桃左裡といふ句を聞ましたが替句とハなんでござります（といふとき知れた事ながら宗匠言かねる）【綾】俳諧師ほどよふわる口云ものハない【有】茶人よりましであろ【宗】茶人より俳人の方が罪がない【古】古徳でござります【宗】おそふ來なァ最ふ暮るであろかの【有】古徳間頼まうか【古】私ハ不調法にござります【有】ふるとくらづきよハいけるか【古】ハイ〱好物でござりますが能う欠落しそふナ【綾】こちらの丼鉢ハ瓢簞引の海老ざこしやが新しい【古】しかしこふ申しやいかゞでござりますがくしや〱とあらこもに裸で寐る様な御肴でござります【有】エヽつべこべとふる徳も江帥なものじや【綾】舊冬馬のすり物貴様虫づよふくばり歩行たか【古】イエ〱私じやござりません【宗】其芝居の馬の摺物とはどれから出ました【綾】去ル小供衆連中から出ました巽藤子一件喰のめしのすり物でござりました【宗】それハよからぬ事の【綾】追加の句もみへました【宗】ハヽヽヽ昔ハ批言の書を家〱に著述致と直に返答再返答など出しました事ハ夥敷事でござつた享保已前の書籍目錄ごろうじ蔭辨慶で無ひよふに書を顯ハして毀譽した事はござれど摺物でくふ様な未煉な事は無ひ圖さ【綾】それ

もなんぞ遺恨でも有らばでござりますが其中についに出合ぬ人が句を出して毀て居ます【有】其すり物僕は見ませなんだ【綾】六人を六人が歌仙の表六句でくひました【有】其時分寒天庵が獨吟万句の拔萃の繪馬を上られましたなァ【綾】サア　社中大勢つれていなりへ納に往じなの道で逢ましたが寒天庵が鬼が嶽といふ皃で往きましたがつよそふな皃じや【宗】つよいはづじや姫路革の紋がらといふ德用向な白じや又一晝夜十二時に一萬三千五百息の呼吸に食としくはゞ引て万句もつよひ【有】万力坊も沙汰がござりませんな【綾】全躰鄙人で浪花の水に合ぬのさ【有】夢中庵ハどふじや屋白ひと云句を聞た事が無ひチトよりが戻ましたのかナ【綾】天窓から掛らぬ縷が戻らふ筈もなし　と十方旦那のふる德聞かねていにかける　【古】モウ御暇申ませう【有】これ古德雅友子の處で咄會の席ハどこじや聞てもらはふ【古】畏まりました【綾】ふる德非雅市のさらへ講に貴樣京鹿子彈たな一向のエラミづかきじやと云說じや【古】よふおだて被成ます　さいぬる【有】順評の奉燈に切字の無い句もありまた切字の貳ッも三ッもある句が見へます【綾】切字が三ッ有てそれハ仕合じやナァ申宗匠もしも切ぢで無ふて穴痔が三ッ有つたらきつふむつかしうて療治がなるまい【有】それに付て脫肛子ハ古ひ句をかまハず取るといふ能い仕似でござりますなァ【宗】獵は鳥が敎て破滅句がはやる柳下ハ不恭と孟子の被仰た場でぬめたと云ものじや其

氣ならば社中の外点せぬがよい【綾】へ、ァ社中の外ハ出入を止じやナヘ、、、【有】方江丸ハ八句に餘つて達者な手跡じや【綾】手ばかりしやない足もなにも達者た【有】破逸もやつはり旅芝居働て居られますなァ【綾】近年出た銀持の福人角力の對に俳諧師の貧乏人角力ハおかしひ事をしたが其八枚とやら入られ腕さすつて居るも拙ひひくい氣じや【宗】俳人は惣躰まづ世事が上手なか我慢なか足と筆とがまめでなければうれぬテ【綾】扨今ハ素人がけつかのことむつかしいと世間で申します【宗】それは錢づくの大名藝で御坐へは出せぬ素人淨留理の格で勝手づくな箱ハよけれど黒人の様に勤てはいけぬものじやテ【綾】宗匠方もちんこ芝居のやふになりましたなァ【宗】ソレモ俳諧の素人芝居がはづむにつれてじや【有】扨琵琶ほどゆすりなものハござりますまいな【綾】けれどこいつむつかしいやつて由慶がゆすつた連琴と譯が違ふて別世界じや俗おどしの天上とは俳諧ほど間口の廣いものハござりますまい【宗】そのはづ〳〵御傘をよんでごらうじどびやかしの大玉は花咲翁じや大分の山師さそれゆへ自然はいかゐのゆすりハ明心居士の餘臭じや【有】柳塘漠〻たる春宵宗匠も御出浮被成ませんか【宗】サレハ卽点が二三巻がござりますが【綾】朱提三笺それ捨めやと云場を今宵は茶に被成ませ【宗】それもそふかと何んでも呑込む宗匠の大原や蝶も出て舞ふ朧月

昇平樂終

青樓集郭話

序

晦日にも出る竹村の月あれハ鶏卵の四角もあの硯蓋に眼前たり豈契情に眞なしといはんや陳文漢の武帝さんも雨となり雲となる況や簑となり笠となりて間夫の爲にハ年季をかそふる指さへも打切無的發に金の草鞋を踏せて翼なふしてとび足なふして乘虚田間徒も悟れハ迷へハ皆可もなし不可もなし嗚呼理屈て分らぬ浮世じやナアされハ此郷に入て郷に隨ふ豪傑な傲興を題して眞廓誌といふもたわれたる新手を歎息して聞得未見の口を鋭一助にもとて盃暗な我に序を乞ふ惟その傾城に啌あれハこそ誠の見證れ此小冊にくわしと筆の足の馳るにまかせおこかまし

くいふ事しかり

女子登富嶽之年

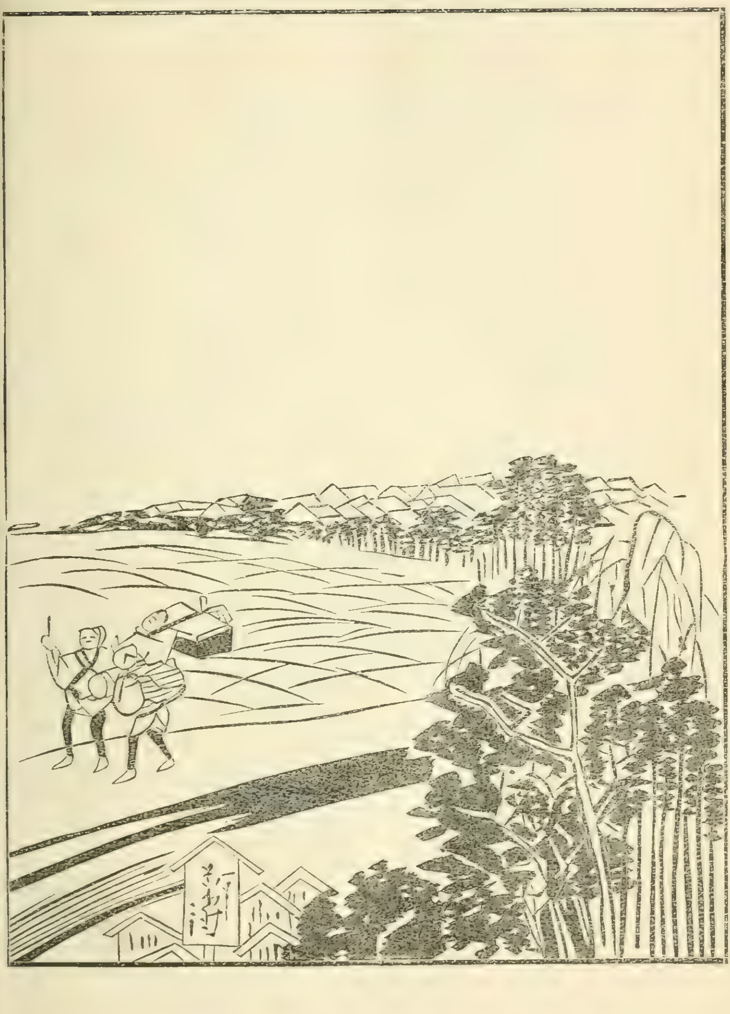
初春

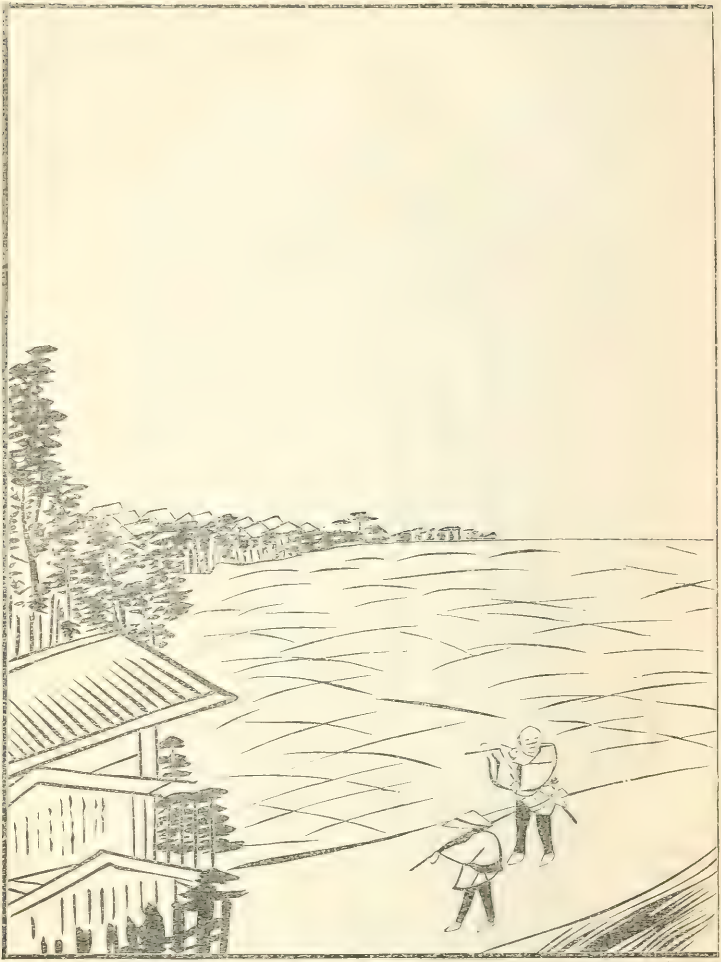
やすし

口録

○第一回　まじりミせのせかいをいふ

○第二回　西河岸のせかいをしるす





青樓眞廓誌

孝不孝二ッ並る塗枕とハ宜哉身を親の爲に賣て苦界に入此國の戯女 唐の妓釋迦も衒賣女色と說給ひしもおなし遊君のことなるべし迷ハ 即 財寶はなんのその終にハ身をせはめるのうれいを受實に男女の婬樂ハ臭骸を抱くと古人の金言賢を賢として色に易よと親分の遺言倂まとひやすふして悟かたきハ此道ならんこゝに一箇の遊子あり名を青木庵とよぶ一日例の戯作にあくびをのミこミなから【木庵】退屈だにおすまどん煎茶でもさつせへ【すま】アイとうミかけた苧をそばへ置勝手へ立行（かいろ行へ女たちと見へ年頃廿四五うしろ奴にひつゝめ本田二三日跡にぬいたひたい黒八のついの羽織にすがぬい紋模〻にしまかんとうのへりとりのおくむくの下着さらさのじゆはん襟口にて茶のちらしぼりのきせる古わたりさらさのひつかけの多葉粉入ばら緒のうらつけにてさも大そうにバツタ〳〵ト木あんの門口から）【如琴】木庵今夜はぜひ〳〵つき合ッせへ時におすまさん一ト晩かりて行てもよしかのしかし女房もちりを連て行ハ無理だが【すま】又如琴さんの世事にやアこまる大切なもんだがおかし申ましやう（トいふゝさすお女郎あがりなれバかほにも出さすとぜんへ茶を入ながら）マアお茶が出來ましたからお上りなさりませんか【木庵】いつそのことに茶づりはどふた【如琴】今ミなりでうなきでくつたりのんたりこんやハすけんばかりでとまろふとハうそだぜへ（ト女房のまへをかねている）【木】セシごふて

きにせつこんでマアー一ふくのミなせへ　ト多ばこほんをつき出スとてはいふきをこぼす（すま）久しいもんだのふ　【如】大さわぎ／＼とそふに立　そふしをしている所へ又三十くらいの男ざかり衣しやうハ好なしあるべか〻りなり　【不通】先生ハ在宿かのいきなそうりがある　ト云ながらあかりトキ　如琴子今足下の所へ居たらモウ出たといつたから大かたこ〻らだろふとおもつて來た【如】ソレハ御太義／＼コウ此間土橋のおたミがおめへに言傳をしたぜへ何かたんとうらみがあるといつたッけへ【不つう】あいつも娘ぶんでハよつぽどとをつたものよ【如】サア／＼石町の七ッがなるぜへいつまで咄てもはてしハねへことだいきや〻まあいりとしようしやァねへか【木】そんならぜひ／＼わたしをつれて行氣かそんなら先へかへりやすによ　トいやがる木あんを二人して引つれ柳はし二てふねをこしらへさせ　【木】アレ見さつせへもふしゆびの柳だたこは吸うちに柳が松になりとハでかしたぜへ【如】モシ此松としゐの木といふ二をした咄を聞たか【不】インニヤ聞てへ【如】そんなら咄やしやう此松と向の椎の木と忍／＼総にハふかくなつて袖にかくすも三月か四月となつて植木中間へ浮名か立どふで生てハゐられぬはへいつそころして下さんせと椎の木がひざニよりか〻りなげくから椎の木もとほうにくれコレお松手めへさへかくごすれバたがいに心中しよふと出かけた時に椎の木かいふにハひよつと心中しぞこなつてさらされた上で木挽の手にか〻るも口惜しいことだとハとふだへ【木】おもしろくもなんともねへモウわらつてもよしかへ【不】むかふ嶋もさひしいよふ

だのふ　トなにか咄をする内丹ハほりへつく【舟頭】アイあたりますおあぶのふ御さりやす　【三人】おせわ〳〵　ト是より土手へかゝるむこふより　俠者二人リ【久】松坂の排けい嶋ねゝぐゝでとぢたとこらにわりたのせいのたかいひより下駄さらしの手ぬくひをかたかへにゝまついぶんごぶし　初に見そめしはつとらのびしやもんさんの御仲人　トかたりなから行あとより　【力藏】久やヲイまちやな一所にいくべへ【久】コウ手めへゆんべハ見へなんだナ三日月長家の女が用があるといつたぜへ【力】あのふんばりめへいめへましいあまよてめへおつそろつく工面かいゝナ【久】くそがあきれらァゆんべも元手を四貫たてなげにあつた　アト二人はなし〳〵行土手の茶みせに下谷金杉ものと見へ　【丁通】おきぼうけふもいゝ天氣だのふヲヤこつちの家名ハ　トいふより　【おき】ハイいろはと申シます【丁】フウいろは茶屋といつてハ芝の神明に名の高ィ茶見せがあるがよくむかい丁やふきや町でしたつけへ【おき】わたしとものハ上方のいろは茶やのさそれハそふとコウおめへかたハ毎晩おたのしかへいゝ氣だのふ【丁】こんな下直なしやれハなしさもふ一ッくんねへ【おき】丁通さん久しいもんだ何をくつてきたのだ【丁】何をとハ知レた事ョ向嶋でおごつて【おき】きたならよかろふといふ事かへ【丁】うさァねへコウ安公ぬしやァそんなに堅く土用干の具足といふ身でいすとちつとうかねへかナ【おき】もしへあんまりおめへさんばかりおかたいねへ【安】わつちらハ丁通がよふニ口がきけやせん【おき】ぬしの名ハなぜ丁通といゝなさいますねへ【安】町の事ならャァあたまで細見をそらておぼへてどこのうらにハいくつこふ

かゞあるといふまで【丁】それを知ちやァ【おき】とんだこゝろとりだねへ トしばらくわたりせりふにてむだないつていろうち大門の方より侍二人出入の町人おはむきと見へて若や目組合四人つれにて出てくる【侍】ハヽアかゝるけしきを打捨て屋敷へかへるとハ殘念ナ【町人】いかさまもそつと御遊ひなさるとよろしう御座りますに【若侍】イヤハヤかよふな節は町家に住たいものじや【侍】時にお手まへハモウ御出ニ及ハぬ【町人】せめて堀迄お送り申ませう【若侍】ハテ丁寧も時によります【若者】いつ頃又御出なさりますやら御聞申て來てくれろとお二人のおいらんがくれ〲もおつしやりました【侍二人】悦喜の色ミへて さもうれしそふなかほニてにこにこわらいながらモウ來ぬノヽ彼等が心底がすめぬ トとんだことをいゝ出く【若】おかしさをこらへイヤモウきついもんで御座ります花魁などはしんのことゝ見へます【侍】イヤ平岩氏などハ手まへ共より年若だけかあいがられるはづじやてなんと平岩氏番の日ハ御時斗のまへであくびをして居るがけふなぞハ又きつう日短に覺るでは御ざらわぬか【町人】いつれつとめと申ものはさよふなもので御さります【侍】イヤ貴様なそハお浦山しい又これからおたのしミであらふ【町人】イヘこれもたま〲なら私なぞハ皆さまを御つれ申ますゆへ夫になれてまいりましてハとんとおもしろくもなき里でと若ものハやミとへイ〱とへんじばかりして居たりしがやがて先へかけぬけ【若】モウ舟は出ている かゝ子へ【娘宿】さつきから出て居ます【若】舫をとく町人ハミよしをおさへおあぶのふ御ざりま

す左樣なら御きけんよふ【若】平どん御くろう【町】氣をつけてたのんます（トこしもとゝめ三人ニて土手のかたへ行）

【町】あの屋敷が一番なんざたこれから呑なをそふとぞんぶんニわるくいふ（跡よりハ木あんふつう如琴三人つれにてきやくも扇のかきねからとゆふ日をよけながら）衣紋をなをすやら思ひ〳〵に見へをしてすでに大門にいらんとす實に此世界を月本國なりと譬し人も理にや中の町の夜の色にハ金ハ戀の淵に投し玉は酒の泉に捨ることなん鬱氣の噴場路柳墻花の植溜にしてしかも今日ハさくらのはつ日とてこともおろかや左右の茶やニハ傾情禿袖をつらねコロン〳〵の音さハやかに纎々素手繁絃ハ土手の蛙の音をとめ打かけの紫ハ毛せんの朱を奪ふ通も不通もおしなへてこゝにぞ春のけしきなりけり艶歌玉琴の音聲にハうかれ人の魂を動し素見の日和下駄ハむつごとの寐耳に響く肩輿のかけ聲もおのづとこへを春雨のぬれぬさきこそつゆもいとへぬれてあふ夜の色男あれハふられてかへる客もありいづれくんじゆのその中に彼三人は中の町いつゝが見せに立よる【女房】ヲヤおそろいなすつて木さんお久しぶりで御さります此間ハ深川へ御かよひと承りました又あちらでもおもしろい事がさぞ出來ましたろうねへ【木】かゝァがやかましくてとんと出られやせん【如】主人ハ江戸か【女】只今江戸町へ御客をおくり申てまいりました【不】初日からでへぶにぎやかだのふ【女】イヽエサ見物ばかりでこまりますコレサだれぞ二丁目へおしらせもふさねへか【如】ヤアたれぞよひに

やらねへか【女】ハイかしこまりました（ト何か下女にいひつけてやる此間盃出るほどなくなじみあいかた直江いの原いちのく若もの）さしそひ來る跡より【ていしゆ】コレ〳〵今日ハ存かけないお出ありかたふ御座ります【不】何かいそかしそふだのふ【ていしゆ】さいミいそかしくも御座りませんが（トいふうち）【牽頭（たいこ）】連治幸藏あそ吉呑治來る【てい主】サア〳〵はやく來なせへヲヤ呑治さんゆふへハねむかつたらうごふてきにおめへハまわされたそふでぐでん〳〵をいつたぜへ【のミ】今日ハいつそづゝうかしてかみをゆふ事もくるしいからおまきさんにたはねてもらいましたよ（此おまきといふハかみゆひなり）【幸】何かあだタチこいつハ御しんかものゝ仙人だ是よりおもひ〳〵地口をこじつけたりおもひ付をいつたり盃のまわり〳〵て【あそ】ナント又おいらんのおざしきでのミ治としやしやう【のミ】（ばちてたゝくまねをする）【そな〳〵】そふさ〳〵とたつ【女】ハイさよふならハのちほとわたくしもまいりましやう【連】モシそこに扇ハなしかね【女】おめへこしいハなんだ　コレハおそれ入ます【女】さよふならとなたも御きけんよふ【三人】のちにきつと來なせへよ【女】かしこまりまあした（トたいこ持をよび）連治さんおいらんへもよろしく（トいふゝその内の新造にあたりまへ）三人は牽頭（たいこ）もちうちつれ立ほとなく唱家（しやうか）に入る（かくてさしきのけしきことしげゝれハこゝにはぶく）木あんがざしきハあい方【いちのく】（ねこ板のほいろにて茶をほふじているしんぞうもありながらじしんにするハ此女郎ト戸と見へちやにやかましくよくあろやつ也）【木】下着のまゝにてふとんの上ニ大あぐらをかき新造禿を相手にして口をたゝきいるそのそばにふりしん

【さよ舟】こくり〳〵といねむつている【木】コウ〳〵さよ舟さん〳〵（トおこされてめをこすり〳〵）【さよ】なんでおつすへ【木】もふ堀へついたぜへ【さよ】なんだとへ【木】のりてもねへのにおめへひとりこぎ出すからよ【さよ】それだつても夕ァまんじりともしいせんものを【木】カノ何か中むらやからくる色男か【さよ】かんにんしておやんなんしあんな梅ぼしかづつうかするといふじゞむせへぢいさんでおすものを【木】それてもまんざらでもあるめへ【さよ】何とてもいゝなんし（トすこしつんとする）【いちの〳〵】木さんはよつていなんすよ【木】今ハさめやしたどふしたわけだかおまんまニたちけへりたくなつた【此さゝ】おちやずんなんしな【木】とハいふものゝ又酒ニ（トあたりを見廻す）モシへ　それその棚に包であるのハなんだへ【この】これかへこりやァ梅治かきしやごておつすハはからしい【木】おきやァかれ【いち】ぬしやァとんだげびそうたねへ（トはなしている所へ）部屋もち【糸たき】木さんよくお出なんしたね【木】是ハおいらん先こくからお噂計り申て【糸】又おつうあハせなんすさぞわるくいつたことだろうねへ【木】わるごふかいるほと【いと】こふなるものかねへ（トきせるてた、くまねをする）【木】あやまつた〳〵大いてへ【さよ】またぶちもしねへうちからいたくハいつ迄もいなんし【木】何かしやれしやつしやる【さよ】ヱ、すかねへおふじやれなんすなよもふ（ト足てた、みをふんで立て行）跡よりふりしん【川はし】しつたかおいてもくりやよふ（引トろうかをかけてくる）

「いち」たれだそうぐ〵しい「ばんしん」川はしさんなんたよ引「川」あのね駿河やの人とか
らかつてつかわしいしたのさ「ばんしん」力(りき)さんかへ「川」アイサおや木さんいつのまによく
御出なんしたネ「木」おめへ今おれを見つけたのか「川」それだつてもかけてきいしたからし
りいせんものを（ト手まへもわらふ）「糸」わたくしはもふおいとま申しいしやう木さんおさらばよふしへお
やすみなんし「木」マァいゝわなはなしねへ「糸」又いつてまいりいしやうさためて明日は御と
うりうで御さりいしやう「木」此あめではいさあなりやすめへ「いと」ヲャいゝ川ておつすも
いを△（おりふし向ざしきにて「ふつう」何かせつこんだよふすにて）「不」てめへといふものはわからねへもんだせへせんどからきれ
るいきれねへのとゝんだためしもんだ又おわりやの客をよぶつもりか「なを江」どふもぬしや
アきゝわけがわるうおつすあれは茶やへの義理(ぎり)があるから切レにくうおつすとわけはたびく
きゝなんしたろう「不」よせへおいてくれろおらがく〵といふ侍しやァあるめへしてめへたち
いちよく〵らにかゝつてなるものかせんぞよりおやおやおふくろにたゝれへ茶やのぎりだの大
屋いけつだのとミそやのあんどんといふものでむこふめへからわるくからませるぜへたんぼの
人玉ァ見るよふにしなりぐなりぬかしてもおれも男のいきぢだァ「なを」マァしづかにおつせ
へしな「不」しづかにしめへいやだばかなつらな今までこけになつていりやァいゝかとおもつ

てうなァかごかきやおでんうりをひねつてひのミ（火見）ばんのむすめだそふでたけへつらをするなそつちがいやならこつちもよすべへ【なを】ソリヤアおありがとふおざりいすぬしがそふせへいつておくんなんすりやァわつちもおもふ男をはれてよびいすよくいつておくんなんしたそれせへ聞ぐもふ何にも用ハおつせん【不】此あまァとんだとりのまちだコレ二日の禮日から人のいやかる大晦日迄此さとへはいりうそとまことのしよわけ手くだァきなかもすかねへ不通さんだァ此くるハがおれがうちで内へ寐のハとまりがけにいくとおもつているのだへんてこめへトけつきりひんまくり足でまくらをけ出ス【なを】よしてもおくんなんし大事の色男の定紋がついていゝさァ【不】けりやァなんだ中見世のたはこばこかねんきやろふのめしわんといふ金ばくの紋所かそれほとわりやァありかてへか【なを】あきれかへりひとりでしやべんなんしト出て行はや八ッのひやうし木カチ〳〵△かゝるせかいにひきかへこなたのしんのしんじつはなしじよきんがあいかた【いの原】人に斗リ口をきかせて寐たふりをしなんすなわつちだといつてかたのねへことをいふもんでもおつせん【如】また手めへそんなぐちをいふよたれにかしやくられたなおれだつてもひろく附合をすりやァ外の内へもいくめへもんでもねへ【いの】それミなんしそのつきあい〳〵といつて今さらすてられちやァたちいせん【如】すてるのうつちやるのと待人のよふししやァあるめへし手めへとおれがわけハいわずとしれているだろうどふ

して外に口うつりかしてたまるものか【いの】それといふもおめへさんハうわきものだからおもひすぐしをするも女のあさはかからあんじめへもんでもおつせん【如】なんぞといつてむりに口說(くぜつ)をして手めへのほうからあきが來たのか【いの】そりやァどの口で　トつめろまねをして　そんなあまくわな心ならこんなに氣ハもみいせん【如】これよくきけよおれだとつて今になつて手めへニきれちやァともだちのまへもすまねへハ　トたはこぼんを引よせる　【いの】そふいふぬしの心なら手をはなしておきもしいしやうがどふもあそこの二かいハ氣がかりな事がおざりいす　トいふハ如きんをよびたがる女郎ありとミへたり　【如】枕を引よせ　もふいかねへといつちやァどんなこつでもいかねへいつたがわるくバあやまつた　トのろく□□□□二人ともわらいなから　【いの】なんの人にはらをたゝせたり氣をもませたりせずともな事をほんにうわきな心ハきり替へておくんなんしおがみいすから【如】しれた事よ【いの】あれさマァおきなんしよヱ、もふにくらしいいう【作者曰】いま〳〵しいおれもこんなめにあつて見てへ　かねは上野か淺くさか木あん不通つれ立はをりのふりを折〳〵いい原がつぎの間にはいりなから【雨人】サア〳〵いつてもよしかへつかもなくおそくなつたぜへ【木】もしおいらん人めもあるものだに【いの】これ見なんしこふしていゝさァ　トひやうぶをあける折から　【茶や男】ハイおむかいで御座ります【不つう】そつちのうちハいつでもかけねをいわねへとおそくなるせへ【若】おめへさんのほうでかへ【木】コウ火がコウ一ッくんねへ

第二回

人生再莫少年春千金を費し此里の深意を知らんとうかれ〳〵て身をあやまつこと目前にためしおほしといへともなどか心を動せさらん蓋はまつて買ずのぼせて通さるこそ通の通たらんその傾情もおなし事にて惚たとなればどんな醜男にてもかあいくゐやだなとおもへは無性に嘩もいやなるもの也傾情は金次第とは嗚呼是夷狄の言ならんたとへ臥龍鳳雛か妙算ありとも此道におこたりなは其極意をさくる事かたし

〽うはきさんすとわしやつきまとい此よはかりかみらいまでとは實に男をしたふ一心ならすやときわ木かざしきには廿二三とおほしき客外につれもなきよふす折あしくおち合たる客人ありと見へて相生やか重詰もむなしく夜もすから捨おかるゝおりも折から引ケのひやうし木カチ〳〵床のうちには常磐木あんとんへかんざしにて何かむだがきをしなから【常】もしへ〳〵おきなんしな〳〵【客】フゥ〳〵【常】よくねなんすねへわつちはさつきからまんぢりともしいせんにぬしやァおかへりなんしてもねられねへからだゝといゝなんすからもふおこしいしやうとおもつて見ても又かへんなんしてねむいときは今までわたくしがしんほうしていたのがむだになりいすから　へと

もやつはりねている もしへ トひどふに引おこし そしてまあ内のしゆびはとふでありますへ【客】ためいきをつきなからとてもこんどハおさまらねへ此ものまへハ首(くび)だろう【常】わつちゆへ＝そのよふにくろふしておくんなんすとおもへハかなしいやらくやしいやらむねがいつぱいになりいす【客】又くだらぬ事をいつて積(しやく)でもおこすのかとふするもんだつばぎわ＝なつてからのしあんよコレ又なくのか【常】なんぼなくめへとおもつてもすへしじうのことをおもひやりいすとしん＝かなしくばかりなりいす此間たよりやへ出したみハとゝきいしたかへこれからハこつちへきなんすとてもものゝいらねへよふにしなんしまゝになるならハおめへさんのだんなさんにわつちかいつてこふ／＼だとわけをはなしておきかせ申とふおさりいす トぐちになりきり【客】おもへはつれへ身の上だと二人りとも＝ひたいと／＼をおつゝけやいしんめりとふさいでいる折しも【ことゝいと】もしへおやすミなんしたかへ トいふこへに二人はおどろきサア もしへ【こと】常盤木さんハ寐なんしたかへ【常】ヲヤ琴いとさんまだおやすミなんせんかへ【こと】アイサもしへ外でもおつせんがねマアよくおきゝなんしよわたくしがとしはもゆかぬ身でこふ申いすハ出すぎたよふさんすけれどきのふもときわぎさんがおめへさんの噺をしてふさいでいなんすからわたくしかいふにハおめへもたんとねんきでもあるしやァなしわづか壹年か半としの事をまちかねすとものことでおつしやうとそれにハ

いろ〳〵と及ずながらいけんかましいことを申いしたならはねきゝわけたといゝなんしたがまだむねが晴なんせんかへもしあのおくさしきのがあくだまでおすからしれた時はせかれて見なんしわたくしだつてもおめへさんをたよりにこふしている身ちつとはきゝわけてとりあげておくんなんしとしんじつの言葉に【常】もふかんにんしておくんなんしそんならそのしあんにあきらめていゝしやうとたはこをすい付出す【こと】のみながら此間のよふなりやうけんをかならす出しておくんなんすなへそんならもふおやすみなんし（トうれしそふに出行）【常】とてもつまらぬ身の上わつちもかくごをきわめていゝすからこふしてはと耳に口【客】何も今となつてはあとへひく氣は五分でもねへ【常】そんならその今のほかのことはそふして見ておくんなんし又跡ではとふともしいすとやくそくして人こゝちはさらになしと見へて【常】何ッにもいわずかの男のひさゞよりかゝり前髪を頰へおつゝける【客】これさつめてへはへ（トむちうちときうつゝはやきぬ〳〵となりて）何かの心あてあれは客ははやかへりのつもりにてつきせぬわかれにときは木かめはなきされはしごを下ル【若】めをこすり〳〵おはき物は（トさがしなほす）はくよりも【クヾリ戸】カラ〳〵〳〵せつたの音チヤラ〳〵〳〵

【評曰】此客は久しい馴染といふにもあらずいまた一ねんならざれともいつたいにかみばしる男ふりよく傾せいももとよりうわきものにてほれやすき方なれは大かただん〳〵うわきのたゝ

ニて外ニきやく人もすくなくたちきれぬゆへにげるといふしあんも出たらうなんでも客ハ店も
のと見へれハ逃おほせてそれから先が見たいこんなこふいふりやうけんになるやつさト云ょ

跋

泣て嬉しき涙にはまくら帋さへ濡帋に心の駒の放れこま與五郎が氣ちがひじみしも吾妻か顔にまよひのたね廓日記のぬき書は半格子と西樓の二ッ蝶〳〵菜の葉に止る事を知れと火の見やくらの高見より見物しなから水道尻のしりへにしるす

大通要經

自序

荘周曰書は古人の糟粕のみ。我嘗いふ妓穿書ハ契情の糟粕也。雖然其粕を知るを通といふ。不知ものを不通といふ。つうとふつうの中央をもて半通と可謂歟。つうも不通も落ればをなし谷川や。隅田川の水に沐浴せし姝娼も。玉川の水に漱飯盛も。其源ハ皆戀と手管となり。夫青樓に大門あり。此里に大木戸あり。中街に駻る駒下踏あればバ新宿に走る馬奴あり。中庭の菊は穠にして籬といゝ。絹紅の茵うづ高くして古衣蒲團と稱す。客人羽織を殺して衣〳〵の別有り。女郎衆又の逢瀬を約して一昨日きぬ〳〵といふ。傾城に實なければ客も亦錢なし。宜かな

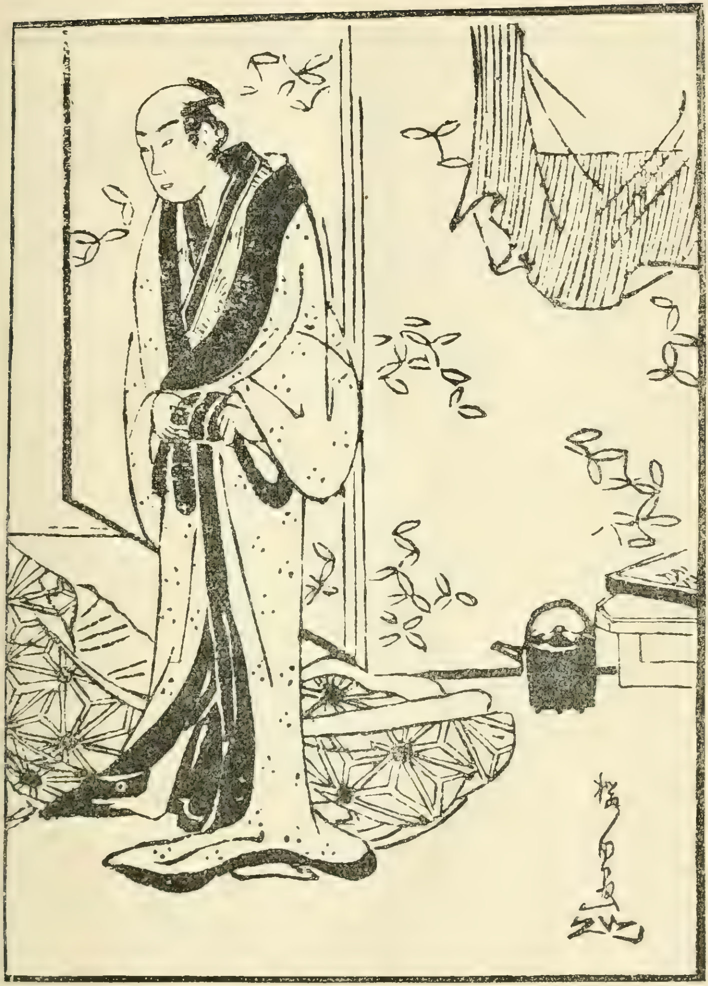
阿彌陀も錢程光る。此里へ過る人ハ南鐐一片で光らつしやりましやうといふことしかり

大通契語

○

鈴々成 著

魯襃曰。錢多者處レ先。少者居レ後。錢之所レ祐宜かな。犢鼻ひとつで市に器を洗ふ司馬相如も卓王孫が爲に富貴を得。布子一つで寒中しのぐ折助も浪錢いつぽんの光りには是ぞ一夜の花にぞありける賢哉金が敵の世の中とは。定九郎が確言なり。鏡山の淨瑠璃に晋子其角が句を引て口切やなんじを呼も金の事爰をもつて。見れハ契情も金に非して何ぞや今時の通を見るに身に植田ゆうきの意氣なるヲ好。口には青樓の豪言を吐金銀を陋として春欝雪股を愁殺に手管を以てせんとする徒多し二重どんすの紙入も。いつしか借金乞の爲に腹を解すこそ空しけれ昔男初かふむりしてならの里にいにける時の流言唄に四ッ谷しんじくまぐその中に菖蒲咲とハ氣が知れぬ今ハ夫にハことかわり古を以て新宿の邊に白酒の看板にハあらねども山川と書し暖簾の文字ハふとけれど細き業ハ古道具見世 是ハ此里の穿にて道具やと見せて引手茶や。此わけハお屋敷ものやゑんりよのある客の入やすきため也。又壱ツには晦日などにかけお集ゐむゐホトから道具屋となり門を通るの詫ことしろべし △表の方一人ハお屋敷また一人ハ町人と見へて【町人】日。那爰で御座り



魂 コヽ
膽 タレノ
曲 キヨリ

やす　ト頭にかむりし黒ちりめんの頭巾をゑりにまき宗十郎格子のめんちりのはをりには千嶋と見せたつむぎの小袖花色八丈の小はゞの帯にひめじの紅葉革の前提ものしろのかんざしをちよびと前にさし私こそといわぬばかりの見ゑにて門口からこへをかけ

【町】此間はおせ話に奈良の都【茶屋女房】きついおじぐりだねへ　地口　是も前方は女郎のあがりと見へて言葉がらおり〱まじり。相びろうどのふとりの小袖にくろはんゑり幅廣にかけ少しぬきゑもんにしてわく火ばちにかゝり有ひろ嶋やくわんからさゆをくんで一ぷくたゝのまへに出し　△さむらい客の方を見て【女房】よくいらせられました【侍】

昨今は強い寒氣でないか　此さむらいもよほど大家の家中と見へ年は三十位なれども未女郎といつちやア國もとから出がけにかるい澤でかつた斗りと見へし風俗とびいろちりめんの小そで綿をしげなく入下着はぐんないがすりこんちりめんのじゆばんに黒びろうとのはんゑりくろちりのわた入羽織にぼた餅程の紋をつけぬき出しいてらにぎんだしてぬり立の髮ふるい扇子を無理にならし多はこ入やきせるをひねくりながらよう〱と【侍】コレ女中何時であろう【女房】ハイまだ晝まへで御座ります【町】きよふは此方を連れ申たから晝買といふ所も珍らしい點だときにはなしに氣をとられてはすれた　トこくらじまのどんぶりから銀のかんざしをいだして【町】此間お頼のものを打直してきやしたよ　トとをす紙をとつてたもとへいれながら【町】是も後に御用に達のさと　いやみにしやれる【女房】是はほんにおせわゐで御座りましたねへドレいつそよく出來ましたョこれで思ひ出した此中外から流たといつて遣しましたおまはんがきさしつたら見ておもらいもふそふと思つていた　トさらさ紙ではつた袋棚からべつこうのくしを取出し【女】見てくんなはいまし　櫛を取て中庭のまへですかして見て少したもとでなでながら【町】コイツア、いゝこふだがおしむらくは今少しふがきれるといゝぶんはねへしかし三ふんぐらへのもなあ鏡さ　此かゞことといふ言葉は小間物屋の通言でちがへないといふ所へいふ事なり　○　この中かの客だんまりでいしが【侍】これ吉公さいぜんから餘ほどの時刻なんと遲くはなるまいか

【女房】ほんにこつちらに斗り氣をとられ時にコウトどちらへお出被遊ます此中のところはど

うしたろうねへ【町】どこでもいゝのさ【女】あなたもお初だからお馴染の方がよかろふコゥ左助松屋へお連れもうしや【茶や男】さあ〳〵コゥ御出なされマシャウどん〳〵がたりと草履を直し雪踏の音ガラ〳〵【茶男】モシエお靏さんのおうら御壹人ハお初會で御座ります【若者】一寸と手をつくとへ行て これハよふいらつしやりました 是ゟ茶や男先に立両人階子を登る二階座敷の付あたりこれ靏里の部屋侍客上座になをり町ハひざをくづして大あぐら銀のきせるに山東の一[illegible]も古しとか いつても革と見せた竹屋の多葉粉入からたてのすぎりをいぶしている 【茶ヤ男】時にあなた様ハお見立に致しませうかね【侍】何れとも【茶】お見立に被成ませ女郎衆も見立られたのハいつそ嬉しがらつしやります トいふハ此客一躰お國者ゆへ跡で彼是のなき用心也こいつ餘程如才なき男ト見へたり 程なく廻し。了髻お定りの硯ふた吸物酒一度に持來る【町】一盃やらかそう【茶】おしやくをトつぐ【町】一口二口のんで見て少し顔をしかめ これリャアあやまるいつもの口を取りに遣りな 舌うちをしながら盃をしたに置く【茶】はい トいゝしはかり一躰此客の風ハいつもの口だの。○印だの。とよくいゝたがるものなれども是大の半過なりこれらの言葉ハ一年も二年もなじミてからいふ事なり夫ゆへに茶や男ろくに分りかねければ【町】指を二ほん出し是半んヨト言【茶】畏りました ト立そうにするを呼もどし【町】序にの鳴りものを呼さ 此はなしの内かの町人あいかた女郎靏里来る色白く目もときれいに少し顔なり着物ハ飛いろちりめんの小袖よほどきた山とミへ裏がへして袖口ばかり切立のまだ仕付もとらぬまゝ高慢そうに宵ながして△廊下にて少し腰をふる見へありてつむりにさしたる切交のかんざしバタリト落る【靏】いつそよく落る笄だヨどうしやうのふよく〳〵縁がねへとミへるのふ トいゝながら障子をあけこすました顔で【靏】喜助どんか御苦勞ダヨもしよくお出なんしタヨ【町】餘りよくも參りやせん【靏】きつい相そうづかしだねへ【茶】お靏さんお聞なさへ夕部幸さんと源さんがきさつしつてね【靏】フンゥ幸

さんがきさつしつたかへ【茶】ところが笑しい事ャ此間の扇屋の理屈がすまぬからいつぞ白た事ャ夫から幸さんが無理に酒をのんで大變に騒がしつて直に歸らしつタッケ【靏】ほんにかへいつぞ氣さんじだよ 此氣さんじといふ言葉五明樓なぞで今時よくいふ言葉なり見様見似ねに此里にてもよくいふなり 【茶】士のほうを見て ときにあなた様ハ鳥渡御見立被成ませ【侍】そんなら ト立いでんとすれバ 【町】まちな【侍】何ぞ用事でもござるかの【町】いゝのを見て御出ナ美しいととりけつこにするによ ト舌を出す 【侍】なんのこつた トいゝすて出ゆく 【靏】きせるでたゝくまねをして きついしやうハるで情がねへのう【町】ナンダ情なしだ錠に手があつてミや鍛冶屋の化物だ【靏】しやれなんすなョ夫ハそうと主にやァ恨があるよ【町】何の怨が【靏】ぬしやァ此中直に翌日くると。いゝなんしたでハねへかゑ。夫からハコウト。 知れてへいれどへぞと指を折りてかぞへ きやうで十日に成るにョ【町】コゥ床の花を見や其時のがまだいかつて有るハな【靏】ヲホヽヽおかしいのふ夫から三度生かへやしたハナ【町】ほんに花といへば甲州屋の隱居ハよく生のふ此間づん切と萍蓬草を見やした づん切川骨いづれも花のゆるしなり とんだミやうさ時にお前花ハどうだ好なら少しやつて見なせい一向野夫でもねへもんだ ト咄しの中廊下にこせきばらい 【侍】あいつハ氣點の有りそふな女めだ【茶】あなたの御目がね明サ／＼ 此お國者見立の仕打いろ／＼おも白くおかしき事もあれど小冊の多き故に略す 【町】お目に宿りし奥さんが【茶】奇妙に質朴なお子をお見立サ【侍】身共見る事においてハいこう功者で有るてや【茶】付もなき所でそら笑をし エヘン

ミヘン　といふ内上に揚りし女郎来る新造にてまだ年ハいかぬけれど至而口功者にて何事にてもいゝたがるゆへ二階にてのにくまれ者 此風の女郎よく有もの也手があるといふ逆でもなく兎角出すぎたがるやつなり。いろ白く鼻筋つんとしてほつそりとした姿なり。髪ハ奴しまだに出の根巻着物ハ花色ちりめんに上州八丈のかいどりもたのはんゑり。ぐつと高くとまり仲客を見下す事也もだ葉やの衆之助が折助に揚りしごとくなり【茶】お盃を　盃臺をさむらいの方へ向る△一躰盃事といふものは里習れたる者でさへ少し□れるもの也まして此風の客においてをや　△侍盃を取りて少しふろゑる口へ有りて漸ゝ盃事済ば人の女郎きかへにいでいくに障子の外がた／＼とすれバ【茶】竹町が参りました【町】コッチへ呼ナ　女郎着竹町松は来る【竹】藤さんお久しぶりで御座りますねへ【町】還にしな此間しがらきの前で彌十と二人で噺ていたつけ知らぬ振りをしなすつたノフ【竹】ほんにかへ存ませなんだ　ト節の内から三味せんを出し袖でふちを少しなでお定りの文句引しまふその三味せんの手早き事仲丁へ走る猪牙舟のごとし【侍】感心して聞いしが　いやもうとんだ面白き事で有てや今引被成たのが當時流行常盤津ヶ字太夫流とヤラノ儀太夫で御座るかの【松】はい左様さ　トいつた斗り【町】待兼た一ぱいやりなせい【松】まづ是ハ上ヶましやう【町】でも【竹】無理におさへて三人をめりやすがほしいといふところで御座りますね松さんへ耳をおかし【松】なんだへ　こゞへにてこつちらのあさぎハさしづめ喜太八といふもんだね【松】嘘言ハねへ【町】おめへ達ハ何かむしやうに囁が己等が事を悪くいふのかすてられもしめへ　トくだをふりながらそこらに有る盃をひろい獨のゐる所へ　△前狂言に終にハ太鞁の生霊にばけようといふしやくんだ顔の新造銚子をもち来り　ひつだらけな手をだしてしやくをする【茶】旦那左様ならあがりますよ【町】もふ一ッ重ね【松】おまへはんもきつい廻り氣で有りますねへ【茶】時に盃がいつそ纏の若草。チン。摘。といふ所が具右衛門だろうせ【茶】先刻からたべすごしましたまあ／＼お上け申ましやう　是より跡

〔幇〕今と云ふ〔町〕あの〔幇〕何と旦那はあの方の〔町〕いとの

て御川ゐおしいとおもけつこにするにと〔幇〕それのこつて〔幇〕

やうハるや〔町〕

ほんやすなゐ火の〔町〕〔幇〕ねしやゐ此中盗

へんしたやらぬへい

花どりや〔幇〕あかしいの

た〔町〕ほんに花といへば中洲宴の贔屓のよく牛のふ此間つん切

とんだとやうき時にお前さんはどうだ訳ならおしやつて見なせ

〔幇〕あいつの気質の有ゐそふだ女めに〔米〕あなた

〔町〕今日に宿ゐし用心ゐ〔米〕旦那に聞け

る事においてかいこう功者で有るてや〔米〕付きな事で エヘン

新造にてまだ年へいかぬけれど至而口功者にて何事にてもいゝたがるゆへ二階にてのにくまれ者
[illegible]るといふ達でもなく兎角出すぎたがるやつなり[illegible]

[illegible]【茶】[illegible]

[illegible]【茶】竹町が[illegible]ました【町】[illegible]

者でさへ少し[illegible]
して此風の客においてた[illegible]

[illegible]手ナ 女藝者市司 松吉来る【竹】[illegible]久しぶりで御座りますねへ【町】[illegible]

[illegible]新ていたつけ知らぬ振りをしたすつたノッ【竹】[illegible]

ふちお少しなでおでんのと句引 [illegible]丁へ[illegible]のこと【侍】[illegible]いやもう[illegible]面白き事[illegible]

[illegible]常盤津ッ宇太夫流とヤラノ儀太夫で御座るかの【松】はい左様さ[illegible]【町】

待兼た一ぱいやりなせい【松】まづ是れ上ヶましやう【町】でも【竹】[illegible]

めりやすがほしいといふところで御座りますね松さんへ耳をおかし【松】[illegible]

さしづめ喜太八といふもんだね【松】嘘言ハねへ【町】おめへ達ハ何かむしやうに囁く[illegible]

【松】おまへはんもきつい[illegible]

トくざやふりながらここらに有[illegible]

ん[illegible]の[illegible]造[illegible]【茶】旦那左様ならあげますよ【町】もふ一ッ重ね

[illegible]

（は何の風情もなく入くるおもしろからぬ故にこゝを略しぬ）【藝者二人】左よふなら（ト三味せん箱をかた付る）【茶】ちとお休被成ませ【藝】どなた様も御きげんよふ（トいふより早く出ていく或人曰未タ床もおさまらぬに藝者の歸るといふ事ハ吉原なとにハなきほう法也こゝにかぎらずたか場所にハよくする事也此等の趣を以爽國といふ事を知るべし）【茶】あなた方ハこちらの御座しき【町】そんならおいで今に御座敷へいくよ【士】必まつて居るよ【茶】お迎ひハ【町】暮〳〵にきナ【茶】はい【廻し方】床を取る【禿】そこらをかたつける【町】たばこを呑てじろり〳〵と詠ている【町】來がけに勝手のほうがいつそ騒敷かつたがなんだ【禿】アレハね料理ばんの權吉と伊助が旦那さんとおかミさんにしかられたのさ【町】どんな惡さをしたの【禿】夫ハ知りません（トいふハ此頃ハとかく料理ばんがおかしな手妻をやつてくさつた魚をつかつたり抔してもうけたがるゆへ夫をしかる事なり）【町】（屏風に書てある非烟一つ張が書た唐詩せんをよむ）ナンダフン名–花傾–國兩 相 歡。常得ニ下 君 王 帶レ 笑 看上とさ。そうゆふ顏のしろものでもねへ（此ころ平がなづきの唐詩選五七言を少し斗り覺たと見へて知たるふりによんでいる）△（折へ逢方の女郎來ル）【霧里】ちつとお休なんし（ト着物をたゝミ屏風へかけ床ゑ入しが）【霧】いつそあかるくつてわるいよ大ふくや戸をたてや【禿】（まとの戸をたてる）【町】此子の名ハ大黑だとぼんさんに圍やうとゆふ名だのふ【禿】いろ〳〵な事をいハつしやるよ【町】をつゝけ女郎衆になるだろうの色をするならしれねへよふにしや【禿】知りません（トうしろをむく。と。見た所が火入に火がなきゆへに）【禿】ヲヤ火が消たと（それをしほに立出そうにしたるが跡をふりかへり見て）【禿】客人今のを覺ておいてよ【霧】あの子のようにぞんぜいな者ナアねへ【町】どうした事か今日ハいつそ寒（トいゝながら夜具をかぶる）【霧】（目をじろ〳〵としながら無言にて此内こふいおふあゝいふと心の内て）

見て【鶴】先きも申たがなぜせんどぢきにくるといつてよくだましなんしたねへ【町】此間ハいそがしくてどうもならねへよ【鶴】どこそにいろでも出來たのかへ【町】そんな事ハさつぱりなしさまあ聞ておくれなきのふ抔ハ數寄や川岸の歌垣さんの內の會だから哥を讀で持ていつたら京橋の傳さんが來ていて摺物の相談をしていたから少し斗り註を附て夫から尾張町の龜やへ誂へ物が有て行大和田の前を通つたら二階で手をたゝくから見たらバ歌川豐國さ弟子どもを引連て呑んでいやした鰻鱺で酒ハ恐れるといつたら付合て一盃のめといふから無據上りやしたそういつても豐國にァ今でのかきてだのふ春好が病氣からァ浮世繪の親さ夫からその內でむほんをおこす手ゑへが有りャサ先木挽町から舟をうかべて深川の世界サ仲町ゑいかふといつたら嚢中が秋風だとぬかしたから古石のいがわやへ上り仲町と違て何かじゞむな事よ一躰深川でハ夜具のわるいにァ恐れるのふ廻し床ヂァあんめいし引切りの枕でもあるめへそれから氣なをしに吉原ゑ廻り仕掛として今廓中の全盛粧さんといふ君を揚やした本所邊のしぢうさんとやらいふ人を少しなげいれの花とやらサどうした事か私ちらにャァ儘になる上夫ハそうと江戸町でおしづを見かけたがあれハこゝの生れだか名妓だのふ禍がくハどふしたへァレモ※三松靏屋といふもんで顏ばつかり美しく仕打がねへのう時に先日彌八玉やへいつたらバ此間甲州屋のかつや誰やか

ゞ大勢でいつたトサ其時羽織のざん次がごうせい洒落てふられたとさおかしひのふ時に國田屋のおときハ常盤トいつたのだのふおやまといふ子ハ松本で富山といつたのだこつちラモ馬鹿にならねへ折節青樓からくるよきやうも全躰つれがあつて品川ゑ促積りさあの土地も今ではやるが新松だよ狂哥連ハよくいくうちだが増木ハ少しさびヤシタあの内でハどういふ氣といふ事が点サ松坂でハどういふ譯だといふよ一躰南門ハ暑時分涼にァいゝ場所だ冬なんぞハかぢけているよ併久しく旅もしねへから珍ら敷かろふとおもつたが今朝糀町の万長が内に用があつたから寄たらバ寄がはじまつていやしたつけ弦榮や組喜が出やす組喜ハ全躰此里の藝者であつたのう何が國持大名の巻元結めらがはつていたよそこで連の侍に逢た所が新宿へいかねへかと無理に引づりさ時に來がけにの新道の尾張やの手前で坂町の定さんに逢やしたどこへいくと尋たら例の手妻だといゝやした定さんの万歳ハいつそいゝよ又明日ハ焉馬さんや慈悲成さんと兩國ゑ噺の會にいきやすよこういふこつたものをいそがしくて成りやせん　ト不問語りを獨でいふも所謂半通の意味可成　【鶴】ぬしやァいつそ剛いお方だね【町】化物ジャァあるまへしなぜだ【鶴】なぜといゝなさるけれどもおいらんだの全盛だのと廓へ斗リ入込んでいさつしやる客衆のこつたものふわたしらがよふな賤いものハ物躰なくつて一ッ所に寝られんセん　ト笑らしくいゝかけれバ　【町】まだ口がへらず　何さ吉原ハ吉原さこゝ

ハこゝといふもんだからその氣できやすよ【霜】此文句に憤りこ そうハいゝなんすけれども吉原とこゝとハ水がちがいやんすからぬしが水當りでもなすつてハ氣の毒だからさなんぼ飯盛でも女郎といふ名がござんすから主の氣儘にハいやでございすハナ トやつてすて【町】ハ是へとおもつても後悔先にたゝづの理りなりいくら下手からでゝもさういかづ一躰此里にてハ是にかぎらず取直してハ得心せざる女郎の習なり此里へいく人必こゝろゑ可付事なり此内霜里ハ無言にておりを見合出かけんとこゝろがけるところへこそよきしほと立出ることこそ宋けれ。是より廊下にてかいどりをつまにあげかけるごとく向の部やゑとこゝろざす【霜】龜さん聞ておくれな【禿】お霜さん鳥渡お出なさいまし トいふ 此鳥菊といふハ此内で餘ほど古き女郎也若きよふなれども引眉と目もとのくぼんだのにて年まといふ事知れるなり植田の小袖に縮緬のらせん絞のひらぐけおしめ寄らないと見へてじやうるり本を讀ながらねころんでいる也【龜】霜さん客人かへ【霜】だよふさせんど山川からきた小間物やよ【龜】フゥン色の黒い目尻のさがつた男かへ【霜】さうよ先からね艶次郎ばつかりいふからねこういつてやりき 此所さま〴〵あくたいまじりのせりふ有り【龜】お前へアノ人を色にもつと年中着の打直と元結にァ錢がいらねへによ【霜】そんなものかへモシへなんでおいしいものハなしかへ 龜きくたつてあがへ向から視ふたの噂りしてうし取りいだす 霜さん水を上げよふ 酒を水といふもかくす言葉也尤その家〳〵で酒の異名違ふ也。霜里茶わんでぐつと一盃引かけてさらにある豆腐をはさみながら【霜】龜さん此豆腐にァいつでもだまされるのふ トいふハかまぼこどうふの事也はなぜんまいと此とうふハ付目也【龜】なぜ今日ハ髪をいゝなんせんゐすの心待かへ【霜】そうだやァねへが頭痛がするからさいやいつそ酔たよ龜さん御馳走で【龜】もふ一ッあがれな【霜】いんへもうたべんすめへ是から又座敷へちつと顔出しさ ト立出廊下にて茶屋の女に逢こすり【霜】內へいつたらの喜介に早く迎ひにきなといつてくんねへよ【茶女】

あい〳〵と謚折から此隣座敷ハ先の侍の女郎の部や何かちと事が縺て【士】先刻からいくらものをいつても挨拶も御座ねへがこれ御身ハ聾でハねへか【花】聾でも瘖でもござんセんがね先きから譯を申ヶからちつとハ了簡して見なんし主がいやだのなんのといふのでハ御座りいセんぎやうづいでいやすから堪忍しておくれと巾のさそれとも町人衆かなんぞならかまいもいたしいせんけれど主のこつたから穢に成てどふいふことがあるめへもんでもござんセん其時ハ氣の毒だからサ今度きなんす時ハどうとも主の儘になると巾にあんまり聞譯のねへお方ゥよそうそふいふ風でもあるめへとおもつたに（トたしなまされ是はしたり南鐐一片式にやられたよふなゝのせめて口でもとおもひほうをこする）【花】アレサいつそうるせへによ（トうしろをむいて）なぜそんなに濕かすかねへのふ【士】馬鹿な女子だ畢竟申て見ればいたどもの事自分なぞ罷越のも遊山チヤテナ夫におもしろく遊ばセれせへで蛙のごとくするのハ如何いたした趣意だかねからすゝめぬハへ（ト云ところへかの【町】來り多葉粉入にきせるを手にもち添て屏風の外にて少し考てゐて）【町】いつてもよしかへ（トいふこへを聞つけ【花】ハよきさいハひなりとおもひ）【花】隨分よふすからおはいりなセへし【町】なにかおむつましい事のふ

〽戀つれていつか浮名の多つ田川もこじとともに散りて身のァ、色男ハうるセへもんだのふ

【花】アレいつそすかねへよふ（トヨこの内士ハものゝいわづ此のうちにてきよふハばかな事をしたそしてちと遲くなつたからかれが所へ何ぞ土産を買ていてよく賴まんと又こんだから出るがむづかしいマアこれも百よの茶屋が百おそくなつたからかごにのつたとこいつが四百よと勸めたゞて見れべてつきり壹分のうちが二百ハ殘らぬといふやつと獨り胸算用にうつかりと）【町】ときにわたしやァいゝがお前さん

ハ御門のあんばへしきが【士】夫ハぐつと呑こミやまのほとゝぎす（ト正徳時代のしやれをいふ）【花】（やれうれしややう〳〵今昼ろそふだと心の中によろこびいしが）なぜもふけいりなますのかへ【町】主の旦那の御影でおれまで遅くなつた（トいゝよふな事へいへども實へさにあらず己がきやふあしくされた故又もやあらのでぬ中にはやくゆかんとおもふ。所へ）【茶男】どなた様モどふで御座ります今夜ハすぐにいながしれ【士】どふして今でさへ餘程おそく成り申た【茶】藤さん先刻おたのミのかご三てう直に表に附て御座りやす【町】ヲツトお世話サアそんならと（これより両人支度をとゝのへ）出てゆく○歩む廊下もまゝならでおもゑはきやふの鬱憤をいつかはらさん二ツのこゝろ思ハずミせへ【駕】サア召しまし【町】いそゐでやろふぞ【かご】がつてん【若者】こつちの旦那御腰物【士】ヲツト（つかざし）【茶】おちかいうちに御機げんよふ【駕】棒組やろうぞそりや〳〵〳〵トウ〳〵。とゆくかごにでん〳〵〳〵と囃したつ覗からくり女郎屋の近所に荷ヲおろし【覗口上】最初取立御覧ニいれまするが野夫とはんかの床座敷だいが替りますればツウウリヤ間夫と女郎のしんの手に御座ります是ハ夜分の躰なればゞ火をとぼして御目にかけます【作者曰】せんの御客ハおかわり〳〵

○梅の花かうばしき夜の朧月にたゝすミみかきが原の露わけ出ん有明の空といゝける通法師の艶言も實に尤理ぞかし人目を忍ぶ優艶内の目忍ぶ娼妓も皆戀の花にして色このむとやいわんされども古きふミにも善遊者ハ溺るゝの習にて風流男却而身を亡すなどいふ子曰な事ハ止に

して

日々に新なる里の繁昌二階て引たつ三味せんの音チリ〳〵〳〵入來る客仁ガラ〳〵田舍へ歸る馬の鈴チャラ〳〵【馬奴】此はつつけメきり〳〵歩きやあがらねへかいま〳〵しいト馬の背中を二ツ三ツくらハし○ねぼけた聲で竹にさァ雀ハナァ、しなよくとまるヱへ留てとまらぬヱ、引此畜ハどんナくたばりだ。きり〳〵しやァがれ權やきやふハいつもよりちつとばァ遲なり申た先に立し馬奴竹で拵た厂頸で烟草を呑ながら【權六】何サをそかァねへくんたァいつでも内へ早くいきたがラァか〻ァが顏でも見ながら豆煮でもしやぶるべいとおもつてか今おてんとふさまが引込ヤッタ馬少し立とまると【權六】小聲ばり〳〵〳〵〳〵トいふ向より堀之内のかへりと見へ中間に定橋の飴を持セ風呂敷包をかたに負セて〇中に立し六十斗の侍【久兵衛】是三助手前がなりを見ろいつこじだらく風呂敷包をこいつたくられるナト後へ廻り風呂しき包の中結をかたくしめ【三助】此頃下總からでた斗りの鼻たらしの小やろう芝居の前で袖をひかれよふといふたちなりたまけたこへでアヽイ〳〵トごせう大事に風呂敷包をセおひ△先に立し旦那兩人いづれも毀引相ごうどの野羽をりに緋縮緬の小袖で四角にはしよりはんてんと見せ笋のふか笠セつたのかねをチヤラ〳〵いわセ【三十郎】喜内さん此方がこ〻で洒落時分ハ十年にもなるだろう【喜内】左様〳〵まだ燕羽おりのねへ時分さコウトこちらが橋本だの本陣の泊り札を見ると道中がおもハれてさく〳〵とするよト咄の内地廻りと見へて【三吉】伊三や氣をつけて歩きやナいつそ眞暗た【伊三】吉やとうにおらァくそをふんづけた百五十の下駄ァば〻にしたこ馬屎の中とハよくいつたぜばか〳〵獅子に牡丹しやァねへか【吉】ふしやれをす

るなコウト向からくるハ末吉の男じやァねへか【伊】さふさ〳〵上りつかねへ奴帋鳶を見るよふに額と足斗氣がきいているぜへ【吉】そして見やこゝの土地ちやァふら挑灯で客を送るから客にのねつからくらへかねへ品川ぢやァ箱だによコウ聞てくれゐこんだう追分へいっての大事よ角兵衛獅子を二ッにせへたよふなつらの新造を賣たから雲雨さづに歸つた馬鹿〳〵しい トはな す向ふの女郎や二階にて女聲をかりやす へわるくいふたりほめたりハ是ぞ浮氣な客衆かや傾城に實があつていつか扨。我が身にしむる秋風も月の光りかぬしの顔　おもふといふも假りの宿思ハねばこそおもひいださぬ ト引しまい三味線を納【藝者】左様ならば左風さん此頃に御機嫌よふ【茶】お休なされませ【色男】皆御苦勞

ト　此左風といふハ此の節ほどよきところのむすこ也しが女郎の爲にかく空しき姿となりし也年ハ廿四五にていろハ少しくろけれ共中東が半兵衛といふやうにていやもなきいゝ男は惑りこ相ごろうどの合羽をぬぎ床の中にてぱつちをとく【梅歌】こゝへおよこしなんし トぱつちをたゝむ△此梅哥といへるハ其むかしハ北の方にて何やの誰といゝしさる〇の女郎なりしが少し譯合あり一〇此里へ來りし也。彼男に有りし時分より此客と色事にてたがひにあだしの〻露とつとこにきへて未來でそおふのなんのかのといふ中となりにけり一〇さしやうなよくたおやかにして宗理らこが爲に筆をたちかの京橋がたくさもこれが爲に筆をなけ可く情業衛て容粧、風雪隅田川の水にそゝし人柄なりまだ里の風を好といたじかのこうに袖と襟とへ金入のはぎし額むく一際月立言葉がら 色男の顔をたてて【梅】ぬしやァなぜ其樣にだまつて斗りいなんすへ顔の色からどこもかもいつそやつれなんしたよ【色】膸るどころでハねへ死か生るかのおれが身のうへ是といふも 女郎の顔をつくづく見て 手前で斗り氣をもむも白痴なはなしよ【梅】男といふものハなぜ其よふに疑ぐりがふかいへねへ 手を煙へいれ爲の下たくすぐり一掃におかす【色】くすぐつて馬鹿をするな【梅】いつそ塞でいなんすから驗氣をつけもふ

しんしやうと思ッテサ時にこんぢうあけ申たみで腹をたてなんすだろうがね是にハ少しね譯のごぜへす事だから必お心におとめなんすなへ【色】必おこゝろに止なんすなも可笑かろふコゥ手前といふものもおかしな仕打をするもんだぜへ此節おれがこういふしミたれたなりになり手傳てやる事もならぬを知りつゝ金の無心文を見た其時ハ人にこそ語らねと逆鱗と悔敷とで好な酒せへ呑めなんだ此間でハ色男をこしらへておれを突出す手と見へた是迄だまされた禮にきた世の諺にいふごとく虎よりおそろしいもんだ肌をゆるすハこちらの誤り狸めがもうこれ切たトせきこめへ【梅】そう腹をたてなんすも御尤でごぜへすけれど色男だのなんのとてそんな事がちり程もあつていゝものかへあれハねこうでおざんすハな【色】又いゝハけかよしにしろ國から出た唐人をあやなす手でハいかぬぞよ【梅】ばか〱しひねへお前はんもどふかしさしつたそうだあちらにいんした時分から外ならぬ主が事畢竟巾て見ればくらがへをいたしたもぬしの事からでハおつせんかへそれにまァどふいふ氣でそんなに腹をたてなんすのだへ【色】そんなら譯を咄て聞しや【梅】はなし申からよおく聞なんし【色】きゝなんしだのをつすだのと手前まだ廓の言葉が其儘だよ【梅】アレじれつてへ酒落でハおつせんによト男のかたをつめるまあ聞ておくんなんし是にも段ゞ譯のある事さ此間こゝのおかミさんがわつちを勝手へ呼で何か用があるとおい

ゝなんすからいきいしたらねこういつておつせへすはな此子にハ用がある程に皆あつちゐゆきなと傍輩衆を外へやりしミ〴〵とねハたしへ異見是梅さんやこなたハ外の女郎衆と違てもとハといへバ所柄夫ゆへに客人も氣だてがいゝの人柄だのとて此内で今迄晝でせへ一日も客人をとらぬ事もなし其上旦那さんやハたしにも何かに心もつけてくれるこなたのこつたから口にこそいわね旦那もハしも何ぞの序にハこなたの咄よく勤てくれるとおもつたが此間ハどの客もどのきやくもミんな手切てそなたの事を悪くいふとの茶や衆が噂是といふのも畢竟ハ色男とやらが有るとさ。ありもしめへけれどもの人の口といふものハ少しの事もよくいふものといつて打すて置バ又外の女郎衆の制とうもならづよしや色が有るにもしろ勤さへ大切にすればなんぼ女子商賣する身でも情も随分有ものさもふ二三年でねんも明るからそれまでの役だつとおもつてどふぞ客衆のきなんすよふに頼ますよといゝなんしたから義理にからまれ無據日頃心やすくしんす傍輩衆をたのんでね侘言をして貰とて心におもわぬ切口ャ金の無心を書たみおかミさんへ見せ申てね此通ッ思ひきりんすから堪忍しておくんなんしと申てつかハしたらおかミさんがきつい悦直に茶や衆を頼でぬしの所へ届申たと傍輩衆の咄しを聞た其時ハいつそむねが一ぱいになりんしたよ夫から一日二日勤てミた所が主の事斗り苦勞になり毎日〳〵積のをこらぬ日とてハ

ごぜへせんよどふして見ても了簡ゞせづハなりんすめへ（トいわれて色男ぐつとふさぎ目に泪をもち無言でいれば梅弥も少ふさぎしが）それハそ
うともしへきやふハまあどこへいきなんしたのだへ【色】きよふハ堀の内へ願掛があつて百度
参りにいつたのさ【梅】ほんに願といへばおかミさんの御病氣ハどふでござんす少しもおこゝ
ろよふござりいすかへ（トいわれこむねにぎつくりとこたへ）【色】されバよ今日ハ堀の内へいつたのものかゝあが病氣の
事ニ付（つく〳〵かんかへミて）己もさつぱり情といふ事を知らぬ者だ日ゞ重るかゝあが病氣此頃ハ食もさつぱ
り飯湯でばかり命をつなぎ今も知れぬ體故母の愁傷目もあてられづ醫者も禱祈も手を盡してセ
つない時の神とやら堀の内へ來る其歸りに遊でもあるまへす誰が聞ても狂人といふだろふ是と
いふのも（女郎の顔を詠め見て）ァ、どこの女子のお影だヤラいつそ死だがましだろふ考れバかんがへる程不
孝なものだ去年親仁が死ぎわに枕もとへ呼被成。これ伜よおれが命も此度ハ終る程に隨分〳〵
跡で一人りの母を大切に商賣に氣をつけて見世の繁昌するよふにしや兎角心がゝるハまだ手前
も若ィから必〳〵女郎なぞに戯て身を果しくれるなよ是が死後の氣がゝりといつて程なく死
しやつた其時の一言が今にこの胸に殘り夫にまあどふだろふ手前もしつている通り赤坂の屋敷
もとふに賣今でハ其日〳〵の暮をしそれのミならづ女房の大病どふしたらよかろふの【梅】そ
れといふもハつちが惡玉から主もそふいふ身にしんしたよ【色】ァ、命があつていろと戀。つ

いでくりや一盃(はい)のもふ【梅】さゝれおよし トぐつと男のかたへ手をいれて□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□吻と吮とこやうも少し氣ざして 〔明六ッの鐘ゴヲン〳〵る表通【馬

奴曰】ちくセうめ

大通契語 畢

大通契語凡例

○山東氏の小冊世に行るゝこと尙。傷客に益ある頗大也。然ども其書北國の妓談に膾炙して。いまだ此驛のことにおよばす。是西驛妓談ある所以なり

○此編は四十八手繁ゝ千話總籬等の例に依て文屬するものは。此妹妓及少妓の言辭誤なきが爲なり。覽るもの。複出すとすること莫れ。其大較をとり。能考検すへし。

此矛が杜撰を恐るゝ所謂なり

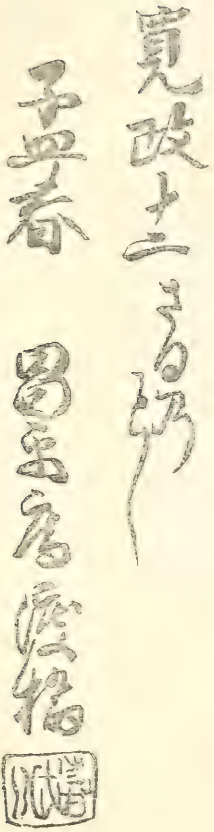
寛政庚申孟春　　笹浦鈴成誌

通俗子

通俗子

序

代物作かざれども艶有は所謂傾刻なり郭の内の妾ハ切る事あれども身の内の妻ハ離る事なしされハ聖人も賢をして色にかへよとのたまへども可悲是をなじるに野暮を以てす通俗全くして而して後に孝子也と三人分別をふるつて文珠の智恵の輪をくゞつて大門を出る事又善からづ哉と云云



○花扇おふいに粧を飾て
中の町に酒宴を開く

○通俗子五明楼に登
つて遊をふるう

○血酒をのんで鬼神を祭
りて兄弟の約を定む

花扇おふひに粧を飾て
中の街に酒宴をひらく

夫つら〳〵浮世をおもん見るに敷しまの長うたの道おこなわれ和らく春の初紋日朝日かゝやくまつかざりをおしひらひて立いづる壹人の全盛身の尺三尺五寸面ては雪のごとくくちびるまつ朱のごとく色髪左右に下り頭に數の銀簪をいだゝき身に羅綾の衣服をかさね手を一人の若ひものが肩にかけ松むしのごときこハ音にておもはゆげにいつていはくヲャこの子ハはからしいじやうだんをしめひョといふおの〳〵のびあがつてこれを見るに高名四方にとゝろく江戸町の職女扇宇其名ハ花せんなり其艶容あたかも天女のごとく誰あつて彼にちかづ者なき所にはるか大門のかたより壹人の大盡駕を飛てふのごとくおしきらせやがて立いづる者あり衆人ふりかへつてこれを見るに身のたけ五尺八寸面うづ黒くひたひ三ヶ月のかたちに似たり身にかんとふじまのおなしなる衣服をうちかさね花色小もんの龍もんの袷羽織に平うちの紐諸事今よふの異氣仕立靑髭くわがたのこときがほそ身作りの一トこしをきめてちか〳〵と來るこれいづれの永遊ぞと見るに江都の通士遊名宴得なり正面の衆人うら山しげにしろ〳〵と見るに右手につまを引

あげゆう〳〵と一ッ家の靑れんにいるとひとしく男女いそがわしく戸くわひいでゝ旦那いらつしやりませとうやもふ風情金銀錢たる花の衙なびかぬ君も中の町花扇も滿めんに美せふして宴得をもてなす日元の色情實や千乘の國おもたなごゝろにかたむくべき有さま衆見いづれも肉まんぢうのよどくやよだれをのんで眼じりをしべたゝくかのかく異風ちよん〳〵としていつていわく老乱いかんして來れる事の早き我今日本岡をよきる折から壹人の遊子東陽山の茶店にあつて我よぎるを見てゆびざす我もまた其よふほうを見しりたるゆへつく〳〵とあんずるに豈しらんやいつそや靑龍亭にて八十斤の酒を衆人を相手に呑つくせし神田のふねいこうなりいつしか了嬖が言を聞に五明ろうへ通來すといづれの姉女郎をして彼があひかたとするおいらんつまひらかにかたり給へと言この時一チ座のげい妓おの〳〵めとめを見合さらに一言の吐ものなき所に花せんもほとんとむねをつんざくおもひ言ほぐすへき言葉なきまゝ面容桃花の色をあらわしていわくぬしやそれを聞なんして何にしなんすばからしうおすよと作笑す宴得元より水回早の遊客なれハ不佞花扇をしとふの意趣を覺りおいらんいかんして包み給ふや我聞遊君ハ啌啨をさひまつして万客にいましむとまた一ッ指をきつて其血汐を千まいの起請の血印となすといへりこれいわゆる俗言なりきよじつの否つまびらかにさとし給へと語言いかりするどなれハさしも

はんくわの青簾せひちんとしてしらけわたり手足をにぎり終詰いかゞと見へたるがさすか高名の五明君裲襠をぬきすて兩眼に白露のなミだをうかめて宴得が胸前を兩手にもちそへモシエそれやァあんまりでおざんせう里の諸譯もしりなんせんぬしでもおつせんはらの立ッ事がおすならどのよふにもなりいせふしつとめの身でおすからぬしのあきなんしたうへハなんぼわつちが（ト跡たい、そふにしたれともあたりに人めあれハ口の内で）ほれたがいんぐわだとあきらめもしいせふけれどわつちがそふいふさもしひこゝろでなひといふせふこをぬしに見せ申てその上てうつくしうと（すへハことはのくちこもりいうにいわれぬ内證のよへのねさめの床のうちそのむつごとのかためにハひよくれんりのちかひのことのは）永遊の宴得も凡ならざるくわせんが婦體人ぼくをはしするひこん羅れふをひたすの風情に怒氣ようやくくじけ面しよくれんぜうをあらわすを見てしう妃はじめてあんどの色をあらわすこゝにおひてげい妓壹人口をひらきモシはゞかりなからと小盃をゑんとくにすゝむゑんとく充まんにすはいをかたむけ悦喜ひらくる折からかたハらにしこうする妓女艶人町妃とよへるかひせいをはつすそのうたにいわく（イタコ）〽かねでかわれるつとめの身さへいやな男ハふりつける（又曰）〽かわひ男にそわれるならハ二度のつとめもいとやせぬ（又曰）〽つらひ工めんもぬしゆへにこそいやな御客にほれた顏此唱哥にゑんとくほとんどかんにたへけるが酒ゑんたけなハにおよひけれハす蜚をたづさへ五明ろうへおもむきける

通俗子五明樓へ登つて

遊をふるう

射乎揖讓して登りくだりてのむ其あらそひハ君子也爰に江都北方にあたりて三千の遊女をみてし青ろう數百軒いらかをならぶ号けて吉原街といふ風流美をならへたる其中とりわけ五明ろう上の婦人花せん君がせいけんたるかんばせになづんて東都に名高き通俗の兩士たがひに遊をふるうて來るその人〻にハ神田の不佞今之人ハ遊名宴得と呼ふねい元來うとくにしてばんじこゝろのまゝなれども生得今よふをこのまづこゝろれんちよくにして君子の氣せうありふとりじしにしておもてうす赤く黑ひんひざをすぐゐたゐんとくも同しくこゝろ正しく事に生れながらの美男にてよの人むかし男とあだ名する通士なれともかのかわひ男ハなぜひんなやらといへる文句いま爰に合してないせふまつしく中〻五明くんにちかよる身分にあらねどもおもひたくトし花せんくんが持出しの下ヶぜん遊ひけふしもふねが仕廻なれどもゆかれぬとのふみの文くこれ幸ィのやりくりと宴得をまねきしもみな花せんがこゝろづかひにてゐんとくにハしらせざりしかゐんとくハとくよりしりぬこれいかなるゆへぞといふにくわせんが番頭女郎ゐんとく

をくどくかべぞせうに禿をしこみ兩子へみゝ打せしよりけふこのおふさワぎにはなりぬさる程に妄得ハ五明ろうの奥二階くわせんくんか床まへに開運の牛にハあらで五ッぶとんのうへにれんりのゐだとからみつき引まハしたるひやうぶのそともかのばんとう女郎そのむつごとのうら出しさねいりし風ぜひにきゝいるともしらづほゝゑミていふそのちわ言にいはくモシエなぜさつきにハあのよふなむりな事をいゝなんしたコレこの口で〳〵おいらんいつわりを止よ我先時いかりをとゞめしハ君がこゝろをハかる而已君とし月我ために心を勞すその誠あらハれたゝ打解て僞言をなす事なかれ君みさをのたゞしく萬客に身をけがさづしてたとへ其名青ろうに高く諸女の職冠たりともいずくんぞよく我爲に寶をつひやす豈其操を正しくして此事ならん元よりなさけをうつてつとめとする身我なんぞかならづしもこれをいからんたゝつゝんでもつて余客に誠情をつくすを知る故にたゝ其つみをせむるのみうたがひを以てハ言を出さすまさに此一ッ翰を見よと逆つきの牛王に血をそゝきたるをいたす此時くわせん滿身にあせをながしおもて朱のごとくなつてどふしてそれがぬしの手にいりんしたと其紀さんとするを番新これを聞事のあらわるゝを見て廊下へ出るかゝる所にふねいハゐんとくへ送れる起請をつかみ烈風のことく五明ろうへ登る若子これを見ておふひにおとろきあハたゝしくろう下を來りモシおいらんちよつ

とゝいふこへいまだおわらざるにはやふねいハ花せんが部やに入いかれるこゝゐいかづちのごとくせんびうごく事なかれなんじ我をあざむく事法に過たりされどもその天ざい速に來り其不實をしめすの一書を我得たりとかの起せうをずん〳〵に引さき我今數の金銀をもつて汝がこたひを守ずいの分どうにかけ古の高雄かれいにならひ三ッ又にあらぬうちまたのさげ切となさんと其ゆうふく中ミあたりがたしゐんとくこれを見て遊ぜんとして大ひにわらひ邊鄙のさるにひとしき疋夫大町の大盡の座しきに來りふれいをなす宴の莚しきつみ既に大門の外におひはろふて可也されども其罪をくひ心をあらため我を旦那とあがむるならハ白銀一片をなんじにおくる是をもつて四六の床に一チ夜を明せというふねひ忿然としてひん家の小子ロあるゆへにかゝる大げんを吐我今汝が舌をうごかさじと手をうつて若者をよび名高きげい妃數十はいをよびまた諸方へ人をはしらせ向嶋のせん鯉江戸前のうなぎ其外江都にあらゆる美菓挂肴をあつめ家ないにこがねの花をふらせ十三ぼんの高調子に數のけい妓がてふかのぎんせいにやたいも崩るゝべかり大はいを以てくみかわす酒ハ疊にながれて川となり肴ハつんで岡をなす前だひみもんの有さま也此時町妃ふねいをいろ〳〵なだめまつしハらくハしつまりける

血酒をのんで鬼神を祭り兄弟の約を定む

扨も藝妓町妃ハ妓を守るの女にて兩子が心中花せんがこゝろを鏡のごとくさつし說かくをして通俗の兩子をさとして曰凡遊女の常とする所ハ諸客のこゝろを和らぐる也共和らぐるハ色也その色ハ元虛なりそれいかんというにかの我身世にふるの古哥のごとし日夜にかわる仇枕客毎に實をもつてせハ唯身を世にふるなりこゝを以てあきらかにさつしたまへという兩子元より姓直なるハミなれハ此言葉にはつ明し今尊妓のおしへにあらづんハ殆ど靑ろうに笑ひを請ん此めいごんを聞て胸中淸月のいづるかごとしとおふひに愛別のりくを忘れふねい妄得にいつて曰小子斗らずも凡情にくらみ花扇くんがゑんなるにまよひひよくの中をさかんとす今町妃くんがおしへにあらすんハお名をせんざいに殘さんねがハくハつみをゆるうして永くゑんおうの契りを結びたまへという妄得身を正しうしていわく足下いかなれハこの言をいだす我元より身いやしうしてしかも貧也いかんぞよく五明ろうに來らんとたがひに花せん君をおし讓てやますず町妃兩人の相ゆづるを見て兩子にむかひモシ御二タ人さんのおあらそひなさひますハはゞかりながらむ

だのよふにございますいづれにもおいらんにくじをさせましてあたつたおかたが年明の約速をなさひましと伏たる花せんがそばによりモシおいらん〳〵と町妃が詞に花せん始て面を上三人を見る其かんばせ忽ぜんとして金色とへんじたへなるこわ音に善哉(よいかな)三人が心の直なる事我れこれ南天竺釋氏の徒文珠にて汝らが守護のぼさつ也かならずうか〳〵として色よくにまよはざるよう我かふかしぎの知恵を震下(ふるい)してあとうるあいだぎねんをはらし此境界をのがれ三人とも兄弟の約をかためよ我三人がかげみをはなれず行すへ永く守るへしと紫雲に座して消ぜんと西をさして去給へは三人はたゞあきれハテありかたやと其儘に有あふ洗鯉の血を以て盃にそゝぎ入不佞を兄宴得を次兄としわれは末女と町妃がさゝきむねの盟もさつはりとはやしのゝめの鳥の音に曲輪を出て猿のとしの初春に開らく運の卦(けい)を敬(うやまつてもふす)白

大槻正二
大槻尹一
高木好次
山本鍊藏
渡邊幸
秋元千重子
吉田折子

校

昭和五年十二月十五日印刷
昭和五年十二月二十日發行

洒落本大系第八卷

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次
編纂者　山本練藏
編纂者　渡邊幸

東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
發行者　林平次郎

東京市牛込區辨天町一五七番地
印刷者　本間十三郎

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京一二三七一
六合館

印刷所　清揚社

京傳筆

やまさくらかすみの間より
ほのかにも見てし人こそ
こひしかりけれ

貫之

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1779